81
06

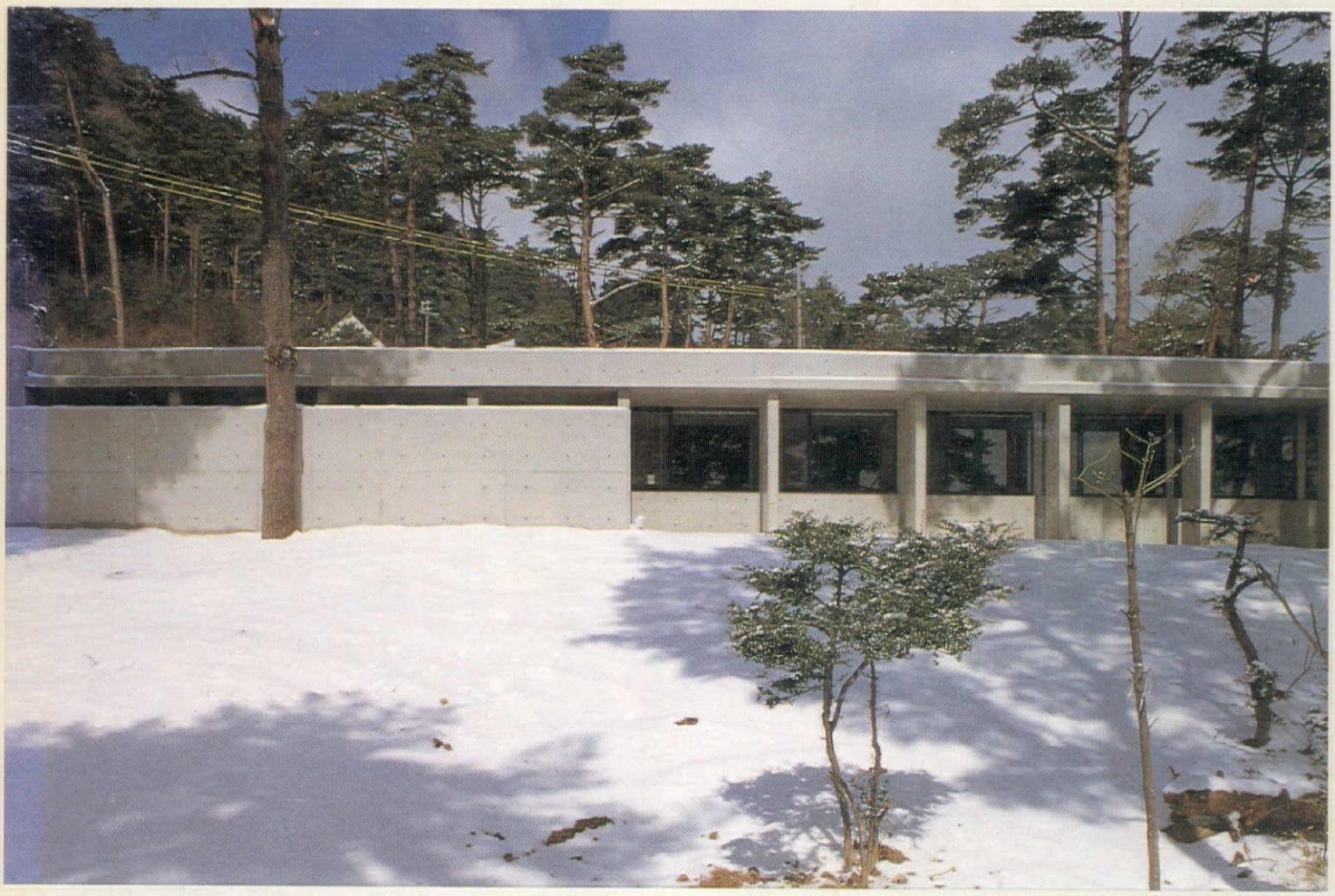
スペースデザイン
都市・建築・芸術の総合誌
第201号
昭和56年6月1日発行
毎月1回1日発行
昭和40年2月5日
第3種郵便物認可
昭和55年12月2日国鉄首都
特別扱承認雑誌第5347号

Tadao Ando

SD Space Design

特集＝安藤忠雄

住吉の長屋を始めとし，最新作小篠邸に至るまで，安藤忠雄の全貌を示す作品23題．



対談＝西沢文隆＋槇文彦

論文＝二川幸夫
竹山聖
安藤忠雄

作品＝双生観，住吉の長屋，領壁の家，ガラスブロックの家，
STEP，福邸，松本邸，小篠邸，他
スケッチ，ドローイング，図面，作品年表

PARIS
堂本尚郎＋田原桂一

海外建築情報
語りの建築＝f(歴史，場所)
岡田新一 編

国内建築ノート
レイジング・ブル《安藤忠雄》
グルッポ・スペッキオ編

Nicolo 82.03.23.



ふくろうの静物 200×200, 1953

galerie taménaga
ビュッフェ展

——孤独の時代—— 《EPOQUE GRISE》

展覧会会期

大阪展　6月22日(月)——7月4日(土)AM10:30－PM7:00　日曜休廊

東京展　7月13日(月)——7月25日(土)AM10:00—PM7:00　日曜休廊

日仏画壇の接点となる“ためながグループ”

ギャルリー　ためなが

営業時間 10:00a.m.～7:00p.m.

東京　東京都中央区銀座7－5－4　TEL：03-573-5368
TELEX：2522973

大阪　大阪市東区道修町4－7　TEL：06-202-3434

パリ　18 Av, MATIGNON, 75008 PARIS, FRANCE
TEL：266-61・94
TELEX：290766

tac 東邦アート株式会社

営業時間 9:30a.m.～6:30p.m.

東京　東京都中央区銀座8－9－13　TEL：03-573-5377

大阪　大阪市東区道修町4－7　TEL：06-202-0852

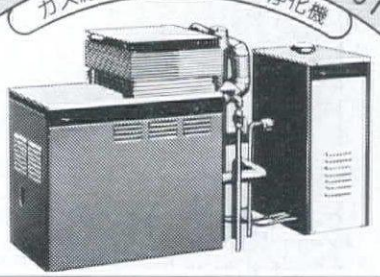
パリでのお買上げの作品はご帰国後日本で円払いの便宜もございます。

TOTO この4文字から広がる快適なくらし

「お風呂に贅沢」は素敵。



ユプロバブシステムRX1001
ガス給湯機(風呂釜付)＋浄化機

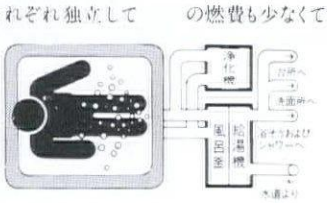


●難しい湯加減が自動化でお気に召すまま　●終い風呂でも一番風呂と同じ清潔なお湯　●ご家庭で贅沢な温泉気分が居ながらに…。

「定温」　「浄化」　「気泡」

ユプロバブシステムRX1001は、ガス給湯機(風呂釜付)と気泡装置付浄化機を組み合わせ「定温」「浄化」「気泡」などの大きな特長をそなえています。瞬間式に貯湯式をプラスして、理想の給湯・入浴ライフを実現しました。給湯機と風呂釜がそれぞれ独立して燃焼する2缶2水路方式ですから、同時に使用しても能力がおちることがなく、合わせて15号相当の本格的セントラル給湯システムです。

また、精度の高いIC回路を組み込んだ電子自動制御装置を採用、点火はもちろん湯温も自動的に調節します。循環ろ過機能で浄化された浴槽水は、いつも清潔で、数日間の連続使用が可能ですから、沸きあがりの燃費も少なくてすみます。しかも、屋外設置型のため酸欠の不安も解消、耐久性、安全性も十分考慮されています。気泡発生装置から吹き出される気泡は、肌をやさしくマッサージし、快適な入浴が楽しめます。



●ユプロ バブシステムRX1001 ……¥298,000
〈ガス湯沸機(風呂釜付)＋浄化機〉
(メーンコントローラ・浴室内コントローラ付)

●ユプロ バブシステムRX601 ……¥198,800
〈屋外設置形風呂釜＋浄化機〉
(浴室内コントローラ・パイロットリモコン付)

※工事費は含まれていません。

ユプロ TOTO ガスユプロ

お得な

メリットいっぱい増改築の工費まで TOTOリビングローン

お得なTOTOリビングローンが登場しました。TOTOの製品がお求めやすくなったことはもちろん、増改築の工事費までご利用いただけるローンシステムです。皆様の快適な住生活のお手伝いをするTOTOリビングローン、ぜひ、ご利用ください。

◎ご用意いただくものはお客さまの信用だけ
◎手続は簡単◎ご予算にあわせてご利用方法をお選びください。

- ローンご利用金額　5～300万円
- ご返済回数　3～60回(5年)
- 毎月均等返済またはボーナス併用返済
- 月々のご返済は5,000円以上としてください。
- ご返済は公共料金と同じ自動引落しです。

●ご使用例

工事費総額		400,000円
ローンご利用金額		400,000円
分割返済回数		36回
手数料総額		112,000円
(実質年率)		16.75%
ご返済総額		512,000円
毎月のご返済金額	第1回目	10,000円
	第2回目以降	9,200円
ボーナス月加算金額		30,000円
(ボーナス月ご返済)		39,200円

詳しくはカタログでどうぞ　〒802 北九州市小倉北区中島2丁目1-1 東陶機器㈱広告宣伝部T.O.S.係　☎093-951-2293

強さと美しさを追求する
新しい高級意匠鋼板



住友ハイビニー
住友ベラシェール
住友エスフロン

カラフルで強く、加工性豊かな意匠鋼板は、建築の屋根材や内外壁材として、いま幅広く活躍しています。それに伴って、ニーズはますます多様化、高級化。より丈夫で長持ちするもの、より美しくセンスのすぐれたものが、一層強く求められる傾向にあります。

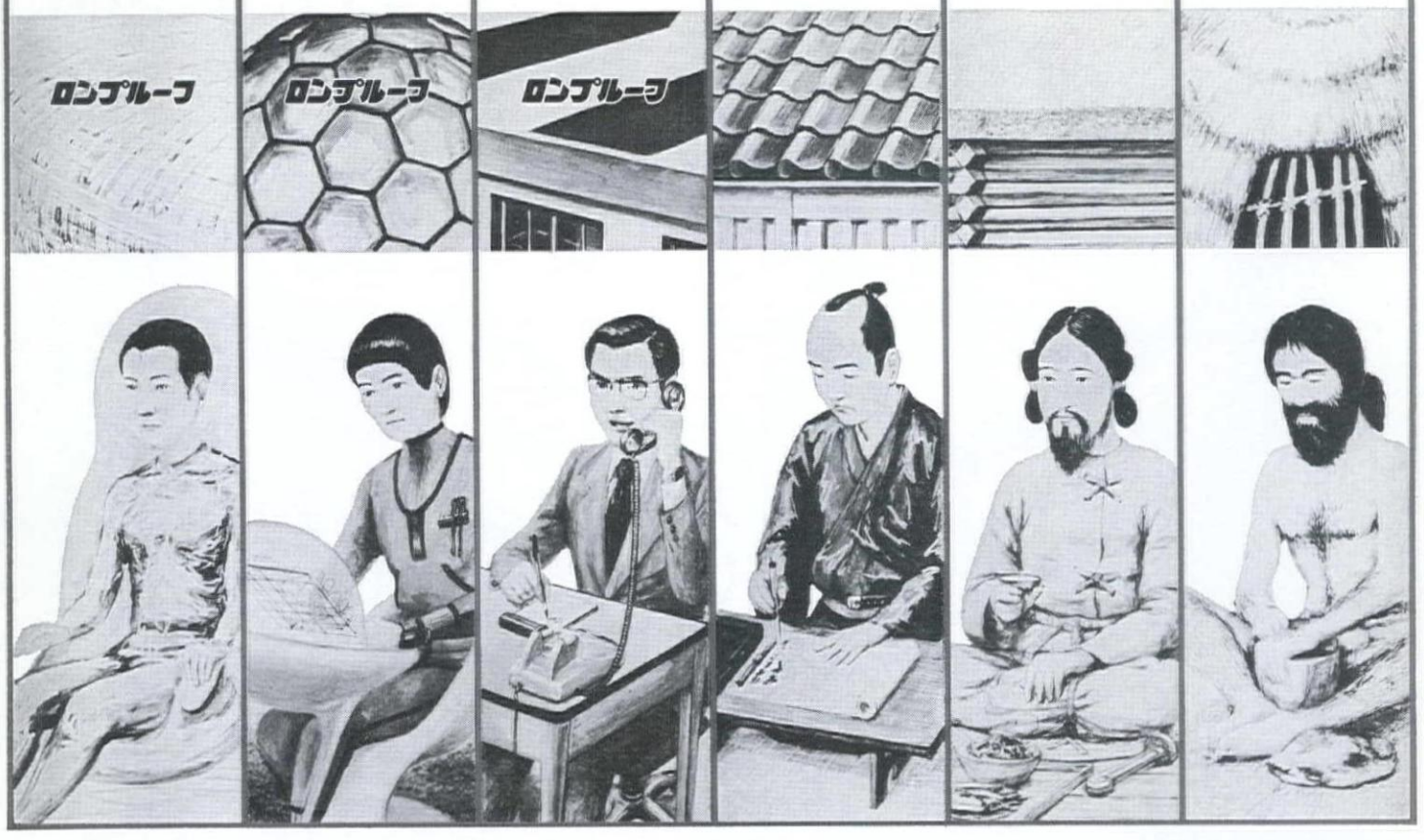
住友エスフロン、ハイビニー、ベラシエールは、こういった新しいニーズにお応えする最高級意匠鋼板。
あざやかな色彩に、ソフトな感触をもりこんだ住友ハイビニー。鋼板のイメージを超えたといわれる、デザイン性豊かな住友ベラシェール。フッ素のはたらきにより、全く新しい超耐久性を身につけた住友エスフロン。
いずれも高度な美と、抜群の耐食性、耐候性を兼ね備えた、最先端を行く意匠鋼板。
住友の誇る最新技術と、最新設備が生んだ自信作です。

新しい時代の、屋根材などの新しい内外装材として、いま大いに注目をあびているこれらの製品で、より豊かな住環境をご演出ください。

住友金属
住友金属工業株式会社
大阪 大阪市東区北浜5-15(新住友ビル)〒541 ☎(220) 5111
東京 東京都千代田区丸の内1-3-2(新住友ビル)〒100 ☎(282) 6111
営業所 九州・広島・岡山・高松・名古屋・富山・静岡・新潟・北関東・東北・札幌・海外

広告についてのお問合せの際は≪SD を見て≫と御明記願います

現代が生んだ未来への遺産



時代には、その時代の生んだ技術があります。軀体の上から防水シートを被せる。こんな合理的な防水方法は過去にはありませんでした。それは良質な塩ビシートを量産できるようになってはじめて可能になりました。時代と共に変わる軀体に直接張り付けて防水する。ロンプルーフは現代の生んだ未来への遺産といえます。

露出シート防水材
ロンプルーフ®は

●優れた耐候性
ロンプルーフは塩化ビニル樹脂を主材とするシート防水材なので、耐候光性、耐薬品性、耐寒性、電気絶縁性に優れています。特にオゾンによる劣化性はなく、輻射熱、紫外線による材質の劣化も非常に少ない露出防水材です。

●耐キレツ性
ロンプルーフは均一な厚さ、およびその優れた伸びと引張強さに加えて、キレツ荷重に対する緩衝効果をもたした積層構造のため、下地の変動によるキレツに充分耐えることができます。

●防火性能
ロンプルーフはJIS A1312に規定される屋根用2級加熱試験に合格しています。（建材試験センター試験成績第6372号）

●屋根の軽量化
ロンプルーフ防水は他の防水工法と比較して、屋根荷重の軽量化が計れます。特にALC板の場合、均しモルタルおよび保護モルタルを打つ必要が無くなります。また他の破損防水の補修工事の場合、あまり屋根荷重を増すことなく防水ができます。

●カラフルな屋根
ロンプルーフの主材である塩化ビニルは着色が自由です。特に耐光性、退色性を考慮して5色を屋上防水用として選定してあります。

●屋上の利用
ロンプルーフは耐摩耗性に優れ、物理的強度も強いので下地の堅固な場合、歩行可能な露出シート防水材です。病院、工場、一般ビルの屋上、ベランダなどで使われています。

●補修工事が容易
ロンプルーフは物理的原因などによりキズを付けられても、防水層が露出しているので、直ちに発見でき、簡単に補修ができます。またエポキシ系の接着剤で全面接着しているのでキズは拡大しません。

●仕様と副資材
ロンプルーフの防水仕様は、建築の構造および下地などの周題点をとらえて、より充実しました。また防水のポイントとなる雨仕舞を完全にするためにロンプルーフ防水専用副資材（アングル、ドレイン、シーリング材、接着剤など）を備えています。

●信頼できる施工体制
ロンプルーフ防水は防水工事の重要性を考慮し、事業協同組合を結成して、各地に信頼できる厳選された組合参加の施工店を配置して施工技術の向上とアフターサービスに努めています。

●経済性
ロンプルーフ防水は軽量化、工期短縮、管理の簡素化などの利点があります。

＊詳しい資料は下記宛ご請求ください。

住みやすい空間づくりが私たちの仕事です
ロンシール
東京営業所＝東京都千代田区神田松永町13川口ビル☎(03)253-4941㈹／支店＝大阪☎(06)252-4421㈹／出張所＝札幌☎(011)531-2602・仙台☎(0222)27-2553・青森☎(0177)77-1155
新潟☎(0252)43-3791・横浜☎(045)662-7370・金沢☎(0762)44-5871・名古屋☎(052)935-7063・岡山☎(086926)-4321・広島☎(0822)49-3600・高松☎(0878)22-4177・福岡☎(092)472-5857

技術の日立

HITACHI



長待ちのない群管理エレベーター

長待ちのない、経済性にすぐれた効率のよいエレベーター……このテーマにあくことなくチャレンジしつづける日立が、今、自信をもっておすすめする最高級群管理〈CIP-3800システム〉。新しいオフィス、ホテルの機能をグンとアップします。このシステムは、『新たに発生した呼び』と『すでに登録されている別の階の呼び』への影響も含めて、待ち時間の最短化を図ります。その結果、短い待ち時間でご利用いただけるばかりでなく、イライラの原因となる長待ちもなくなります。また、ビルオーナーの方々からのご要望を受けて省電力運転サービスを標準装備しました。これは、あらかじめサービス水準を設定することにより、その時々の交通量に応じて、サービス水準を変えることなく、エレベーターの運転台数を抑制し、知らず知らずのうちに省電力が可能です。今、注目をあびているサイリスタ・レオナード方式と組合わせて設置されることにより、大幅な省電力が図れます。言うまでもなく、日立独自の開発と長年の経験を生かした即時予約方式、制御用マイクロコンピュータによる群管理機能のアップなどソフト、ハード両面にわたる幅広いサービスを数多く備えています。

日立エレベーター

全自動群管理 CIP-3800システム

株式會社 日立製作所 お問い合わせは 機電事業本部・エレベータ技術本部／機電営業本部 〒100東京都千代田区大手町2丁目6番2号(日本ビル) 電話 東京(270)2111
〈大代〉 支店／大阪(203)5781・名古屋(251)3111・福岡(741)5831・札幌(261)3131・仙台(23)0121・富山(33)8511・広島(21)6191・高松(31)2111



石の心と樹々の精に，

新たなる生命を語らう，自然の造形

岩城造園株式会社

取締役社長　岩城亘太郎

東京都世田谷区深沢8丁目9番12号 TEL(703)1311



東光電気工事株式会社

取締役会長　杉　山　　慎　　取締役社長　松　本　福　男

東京都千代田区西神田１―４―５　〒101　電話292―2111 大代表

広告についてのお問合せの際は≪SD を見て≫と御明記願います

National

エネルギーの効率利用と設備工事の合理化には、ビル空調も個別方式をおすすめします

ナショナルのビル個別空調システム

イニシアルコスト13%減※ ランニングコスト22%減※ ともに有利な個別方式

省エネルギー関係法令の公布に見るまでもなく、建築物にとっての省エネ対策——特に空調エネルギーの効率化は、ビル建築計画にとって重要テーマです。

住宅と異なり、ビル空調に個別方式が主流となりえなかったのは、設備費と機能の対比（コスト・パーフォーマンス）や、工事・メインテナンスに問題があったようです。

これらの問題を解決したのがナショナル・ビル個別空調機——大幅なコストダウンを可能にした省エネタイプの個別空調システムです。

※弊社計算による

多機能で、しかも簡単な操作 工事の合理化と省スペースにも

冷房・暖房・換気・除塵・外気冷房・熱回収など、ビルの空調に必要なほとんどの機能をコンパクトにまとめていますが、負荷に応じた冷暖切替を自動化していますので、操作はまったく簡単で特殊な技術を必要としません。また個別方式ですから、冷凍機・ボイラーなどの大型機器や、複雑なダクト工事が省略できますので、工事の省力化、ビル本体の省スペース化にも役立ちます。

あらゆる面で有利なナショナル・ビル個別空調システムを、皆様の設備計画・設計に、ぜひご採用ください。



エアーバランサー

室内の汚れた空気の強制排気が可能な、全電気ヒートポンプ方式。

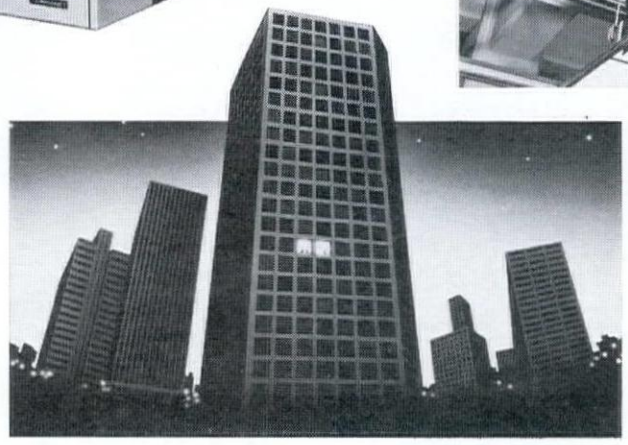
- 大口径シロッコファンにより高静圧を得ています。外風の影響を受けず安定運転が可能。
- 低入力、低騒音を可能にしたインジェクションタイプのロータリーコンプレッサ。
- 高圧圧力調整弁の採用で、高い外気温度での暖房運転が可能。
- 半導体ヒータを補助として採用、暖房の立上り特性がよく、吹出温度を自動的に一定化。
- 2段サーモスタットによる節電運転。
- 白を基調としたシンプルデザイン。



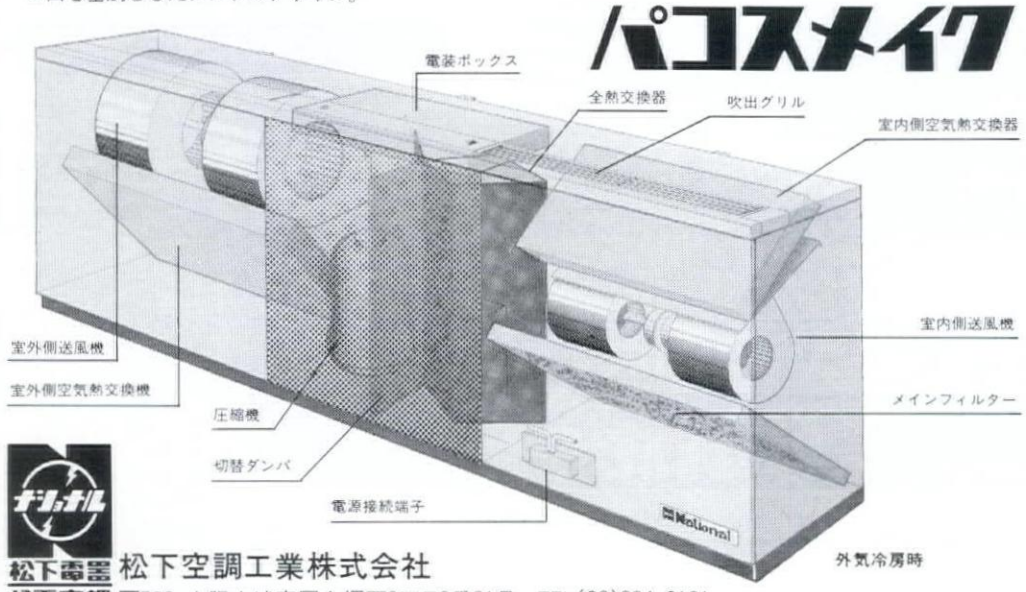
ヒートバランサー

天井裏の空気を熱源とする、天井埋込型空冷ヒートポンプ方式。

- 内部で発生するドレン水を、冷房時は冷媒凝縮熱、暖房時はヒーターを利用して気化処理するドレン処理装置を内蔵。
- 低入力、低騒音を可能にしたインジェクションタイプのロータリーコンプレッサ。
- 2段サーモスタットによる冷房・暖房切替の自動化。
- 照明器具との結合を考えたコンパクトな設計。



パコスメイク



外気冷房時

熱交換により排気熱を回収、エネルギーを有効に利用する全電気ヒートポンプ方式。建築モジュールに合わせた施工により、内・外観ともにシンプルに納まるスルー・ザ・ウォールタイプ。

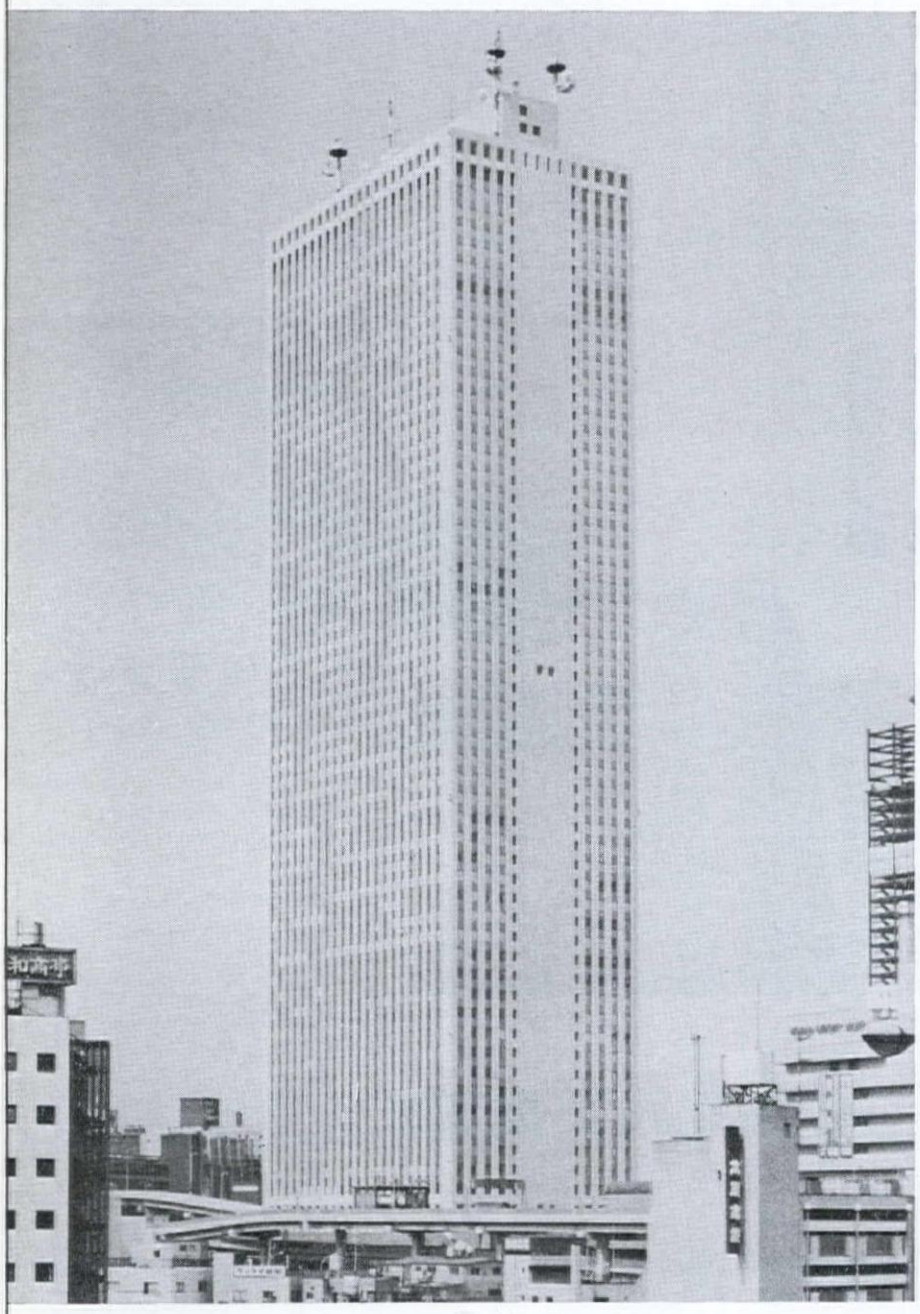
- 全熱交換器による冷・暖房の排気熱を回収。
- 低入力、低騒音を可能にしたインジェクションタイプのロータリーコンプレッサ。
- 高圧圧力調整弁の採用で、高い外気温度での暖房運転が可能。
- 3段サーモスタットによる冷房・暖房切替の自動化。
- 高性能カートリッジ形フィルター内蔵による高い空気清浄力。
- 白を基調としたシンプルデザイン。

ナショナル
松下電器
松下空調
松下空調工業株式会社
〒536 大阪市城東区今福西6丁目2番61号 TEL(06)934-2131

Buticsは、省エネルギー、省力化等を目的とした、ビル設備の「一括管理」システムです。

ビューティックス

たしかな技術で世界をむすぶ
NEC



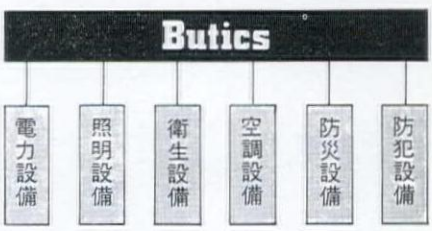
NEC日本電気のビル総合情報管理システムButics（Building Total Information and Control System）は、ビル設備を1ヵ所で総合的に管理するための中央監視装置です。従来の中央監視盤と異なり、大幅なIC化をはかり、小型化・高信頼性を実現。あらゆる規模のビルの空調設備をはじめ、電力・衛生、防災、防犯などの諸設備を安全・確実に監視制御するシステムです。また、必要に応じてコンピュータを付加すれば、計算機制御を行うことができます。ビル管理運用の効率化にお役立てください。



東京・池袋のサンシャインシティー

Buticsには、その構成と規模により8タイプがあります。

Butics-P3, P7	小規模ビル 広域群管理
Butics-5N, 10N, 20N	小～中規模ビル の集中管理
Butics-30, 50, 70	大規模ビル～地域 の集中管理



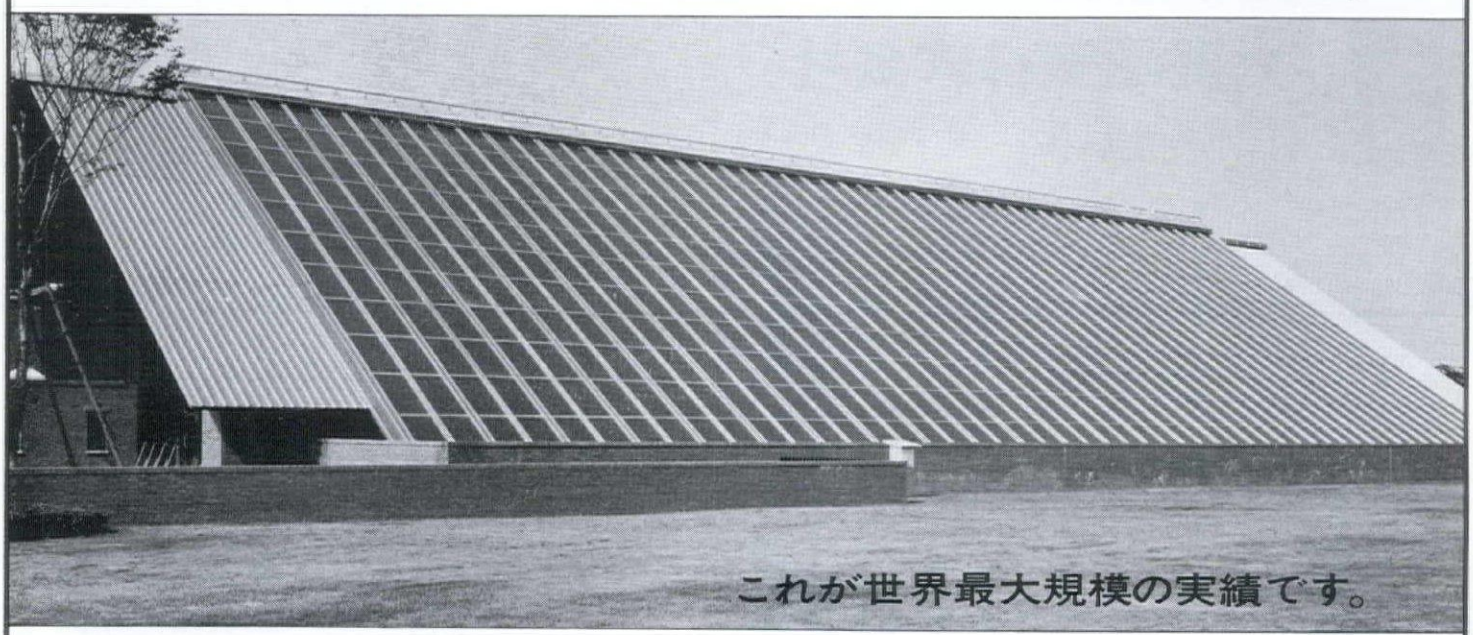
NECビル中央監視制御装置
Butics

日本電気株式会社

お問合せは：通信制御システム事業部販売推進部
東京都港区芝五丁目33-7（徳栄ビル）〒108 TEL(03)453-5511(大代表)

古河電工

太陽を盗んだ屋根



これが世界最大規模の実績です。

筑波学園都市・洞峰公園体育館では、世界最大規模のソーラーシステムが活躍中です。中でも、温水プール棟には561枚の古河ソーラーコレクターが採用され、給湯、暖房、冷房、温水プール床暖房にと、力を発揮しています。さて、古河ソーラーコレクターは、選択吸収面に、ブラッククロムを使用していますが、これは、選択吸収面の素材として、酸化銅、着色ステンレス、ブラックニッケルなどにくらべ、最も特性が良く、安定性がすぐれており、世界的に定評があるものです。このブラッククロム処理を日本で初めて工業的におこなった古河ソーラーコレクターの選択吸収面は、熱、温度、ヒートサイクル、紫外線に対してきわめて安定しており、200℃でも、特性や外観が変わることはありません。理想的選択吸収面にかなり近い特性を誇るブラッククロム選択吸収面を持つ古河ソーラーコレクターは、また、高集熱効率、高フィン効率、すぐれた耐久性、軽量、美しい外観、そして容易で確実な施工、という特長をあげることができます。新しい時代のエネルギーを生み出す古河ソーラーコレクター、そして古河ソーラーシステムにご注目ください。

THANKS THE SUN

古河ソーラーシステム

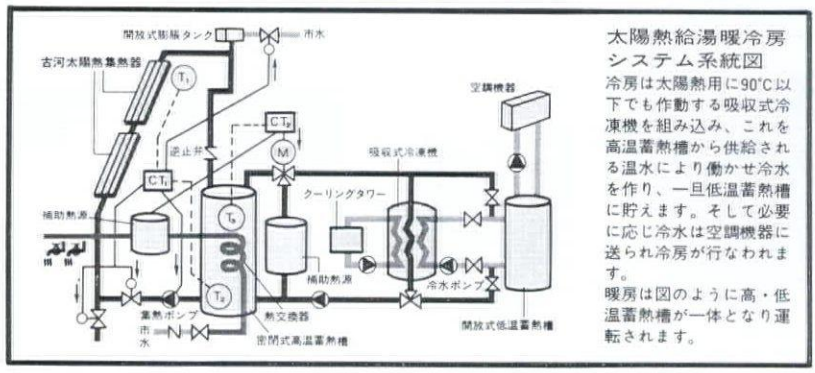
古河電気工業株式会社

本社　〒100 東京都千代田区丸の内2-6-1ソーラーシステム部☎(03)286-3482 ソーラー営業部☎(03)286-3183 大阪☎(06)344-1161名古屋☎(052)931-8871福岡☎(092)712-0841 広島☎(0822)46-8521 仙台☎(0222)25-4221 札幌☎(011)251-7161高松/富山/浜松/静岡/豊田/長崎/宇部/沖縄

技術の詳細については、ハガキにこの資料請求券をお貼りになった上、本社までお送りください。

資料請求券

SD



太陽熱給湯暖冷房システム系統図

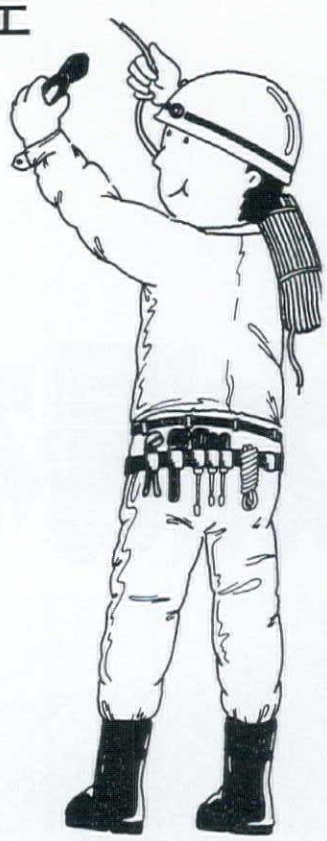
冷房は太陽熱用に90℃以下でも作動する吸収式冷凍機を組み込み、これを高温蓄熱槽から供給される温水により働かせ冷水を作り、一旦低温蓄熱槽に貯えます。そして必要に応じ冷水は空調機器に送られ冷房が行なわれます。

暖房は図のように高・低温蓄熱槽が一体となり運転されます。

ROKKO

電気設備工事　設計／施工

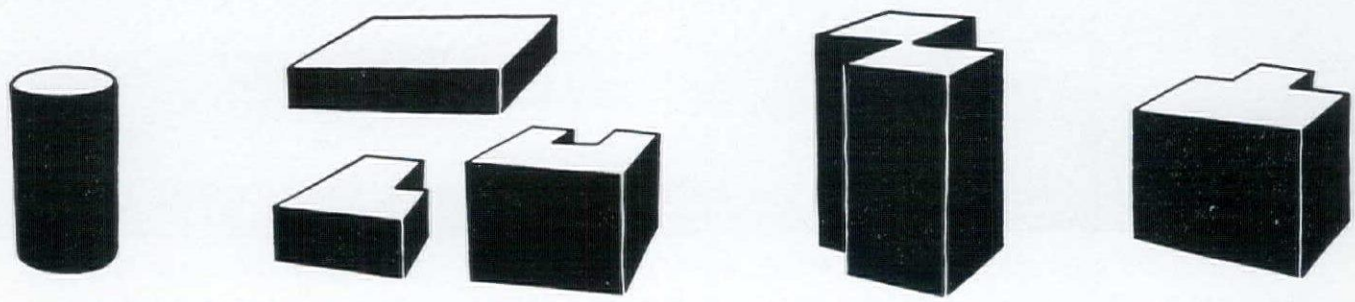
“ろっこう”は
「信頼」にお応えして
「満足」をお届けします。



六興電気株式会社

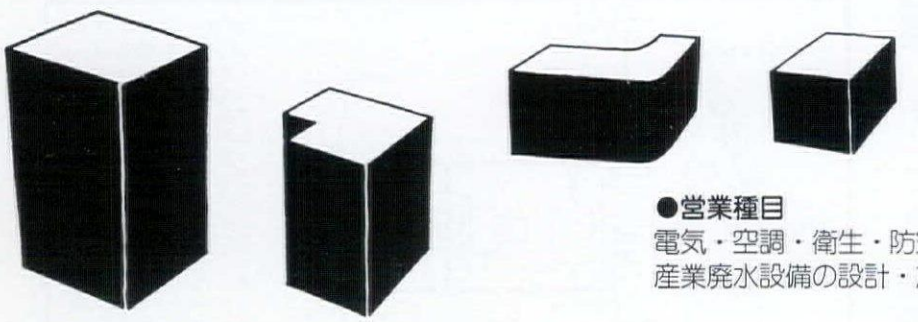
取締役社長　長江健太郎

東京都港区芝5－26－30
TEL (03) 452—5311大代表



まる〜いビルに、四角いビルに、細長いビルに、広い工場にも……私たちの総合設備が生きています。

見えないところで活躍している電気暖房。でも、私たちの活躍が気づかれないことこそ私たちの理想——
それは、あなたのビル・オフィスの生活が快適な証拠なのですから。



●営業種目
電気・空調・衛生・防災・
産業廃水設備の設計・施工

——光と空気と水を生かす——
電気暖房
大阪電気暖房株式会社
本店：大阪市西区江戸堀1丁目10番17号
TEL (06) 441-8231
本社：東京都中央区銀座2丁目2番17号
TEL (03) 535-5251

支社大阪・東京・名古屋 支店札幌・仙台・金沢・広島・福岡
営業所釧路・新潟・天理・岡山・高松・熊本 出張所帯広・秋田・盛岡・北関東・千葉・横浜・静岡・富山・福井・豊田・京都・神戸・鹿児島・那覇 駐在員事務所シンガポール



幻想空間　これからロマンが生れる。

Bel Bien

RENOPLAS

「ベルビアン」は、ハマウッドでおなじみのシーアイ化成が西独レノリット社から導入した最新技術と新鋭設備で生産された、高精度のフィルムに、独自の表面意匠を施し裏面に感圧接着性加工をした化粧フィルムです。

●用途
建築内装・家具・事務機器・ショーケース
エレベーター・ドア・家電製品の仕上げ等

●建設省防火認定番号
不　燃　第1051号(防火性能)不　燃
化粧(不　燃)第2103号(防火性能)準不燃
化粧(準不燃)第2104号(防火性能)準不燃

●規格　巾1,220㎜　長さ50m

シーアイ化成

本　　社　〒104 東京都中央区京橋1丁目18番1号(八重洲片貝ビル)　(03)566-4311
東京支店(03)566—4321　名古屋支店(052)582—4071　仙台支店(0222)21—1488
大阪支店(06)341—5131　福岡支店(092)271—7211　札幌支店(011)281—5611

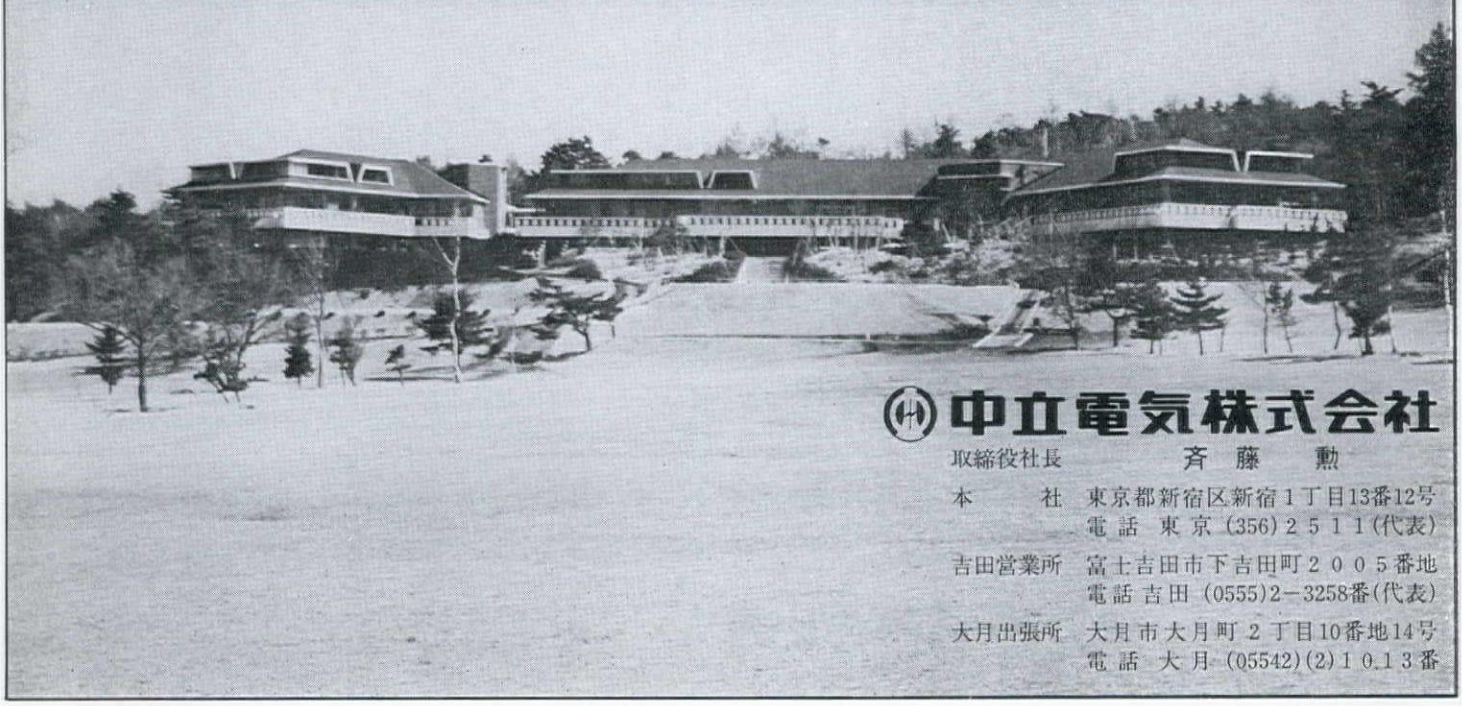
技術と真心で
明るい社会を築く

電気設備工事の設計施工
冷暖房・空調・給排水衛生設備工事の設計施工
電気機器の製作・販売・据付・保守

中国電気工事株式会社

取締役社長　中野重美　本店　広島市上天満町1番15号
TEL(0822)91－7411　TELEX 652－488

豊かな人間生活と
明かるい光の創造に

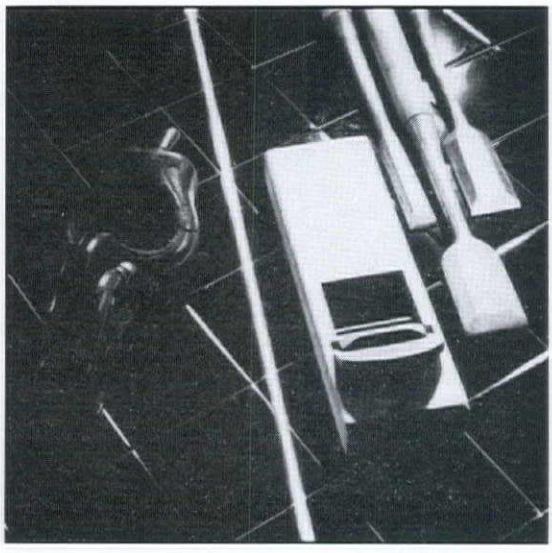


中立電気株式会社

取締役社長　斉藤　勲
本　社　東京都新宿区新宿1丁目13番12号
電話　東京(356)2511(代表)
吉田営業所　富士吉田市下吉田町2005番地
電話　吉田(0555)2－3258番(代表)
大月出張所　大月市大月町2丁目10番地14号
電話　大月(05542)(2)1013番

心の住まいをめざして

住宅建築一途に四半世紀余。……
この長い年月を住まい造りと取り組んでまいりました。
私たちは“出逢い„ということをそしてそこから始まる“おつきあい„をとても大切にしています。
心の通い合う，心の安らぎの得られる豊かな住



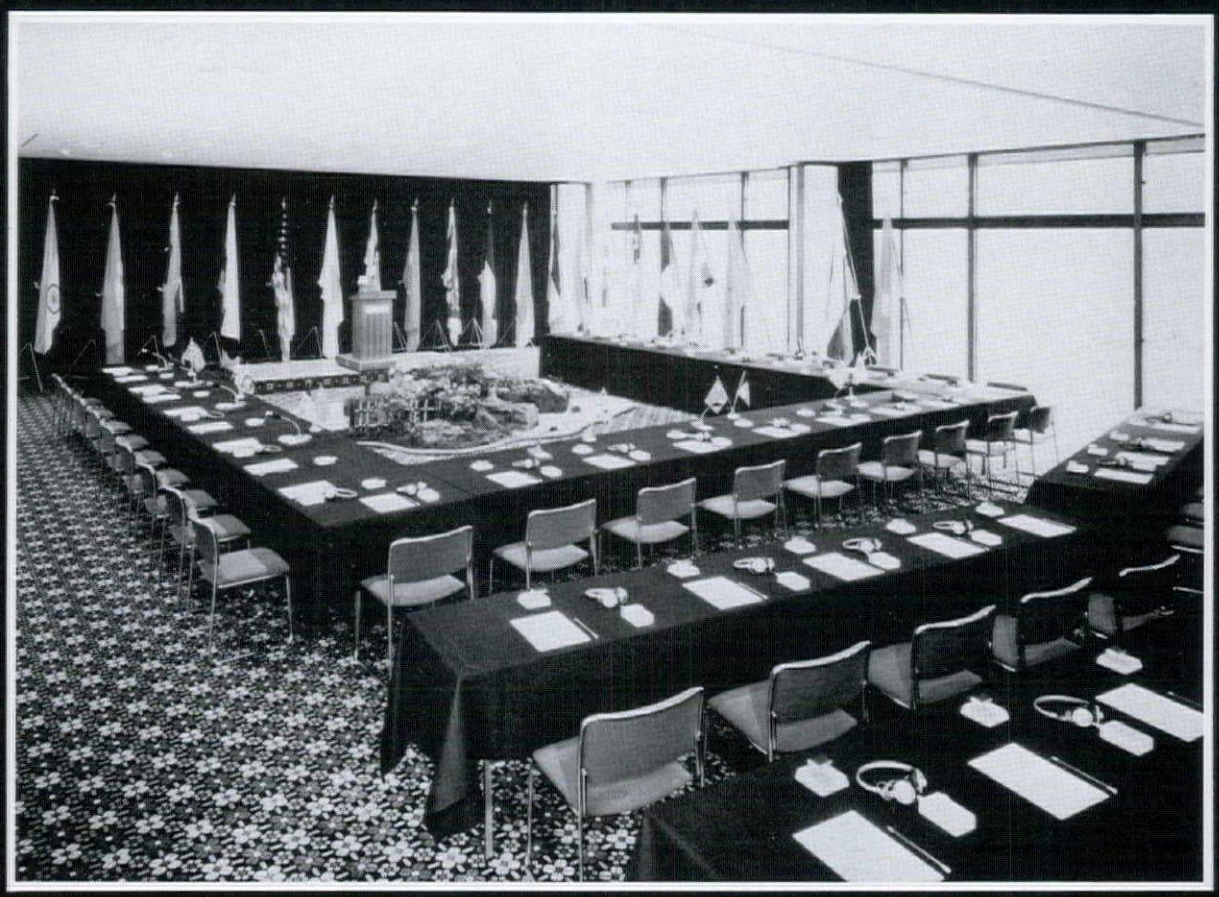
まい造り。
これは，建築主と私たちの心が通じ合って，はじめてできる住まいと，確信いたしております。
住宅建築の本質を“心の住まい＝心のふるさとづくり„と考え，これからも一軒一軒，情熱こめた手造りで，私どもの使命を全うしてまいります。

大工建設株式会社

代表取締役　西宮章泰

〒657 神戸市灘区大内通6丁目1－2
TEL 078・801－5745（代表）

HOTEL KAJIMA NO MORI



軽井沢

Seminar
&
—Golf・Tennis—

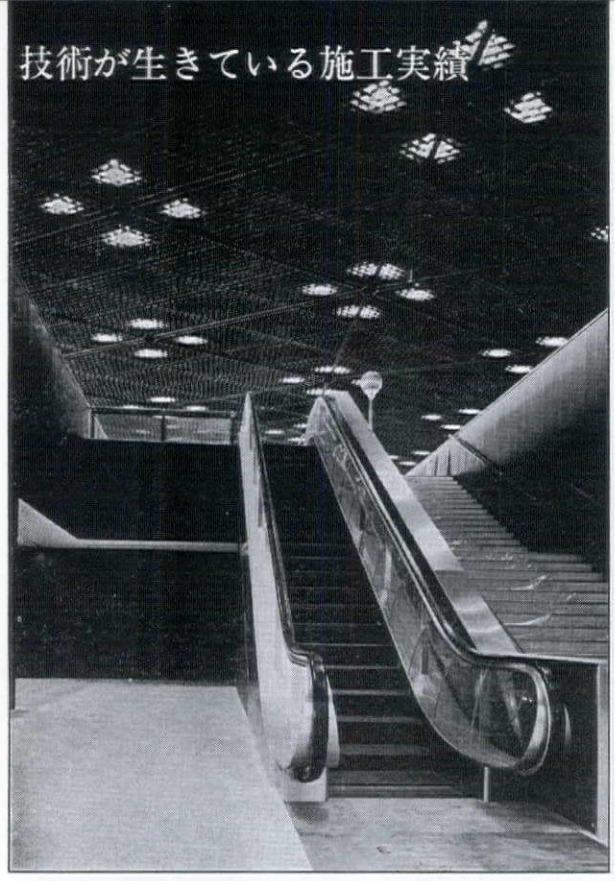
鹿島ノ森ホール

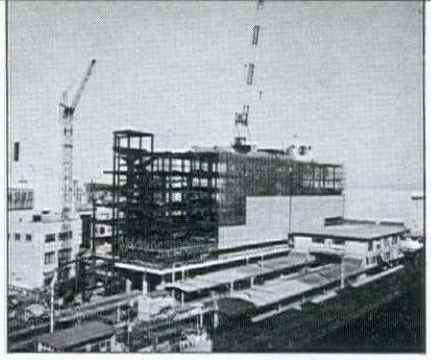
■セミナー：108人、16㎜映画映写装置、2ヶ国語同時通訳
■結婚式：教会・神式、ご披露宴
■展示会場　■パーティー会場

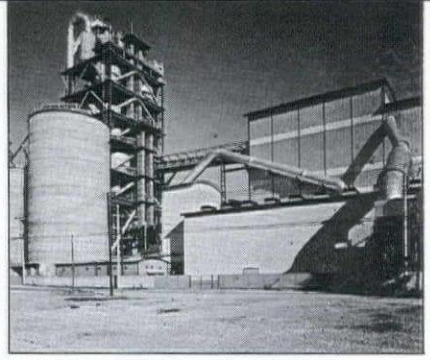
《鹿島建設グループ》

株式会社　ホテル 鹿島ノ森
ホテル　オークラ チェーン

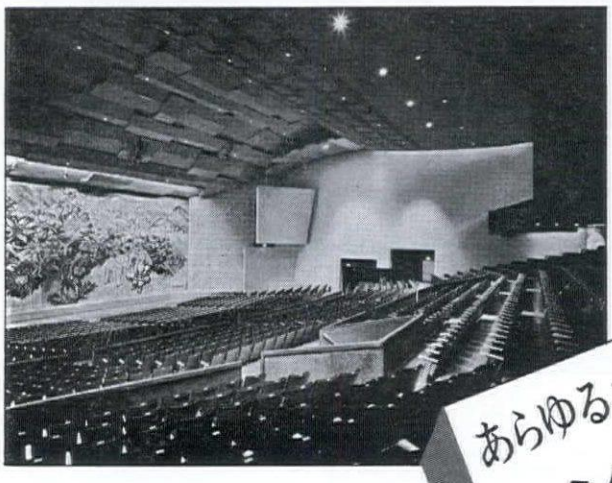
●ご予約・お問い合せ：**ホテル鹿島ノ森予約係**　長野県北佐久郡軽井沢町離山　〒389-01　☎02674-2-3535㈹ TELEX 3328676











あらゆるニーズにお応えできる建設の

総合商社

●建設資材

鉄鋼及び加工製品・仮設材・セメント・生コン・コンクリート二次製品・防水養生剤・内外装材 etc.

●建設工事

鋼管杭・H形鋼・シートパイル・PCパイル各種打込工事・現場造成杭工事・ウエルポイント薬液注入工事・内外装仕上工事・サッシ・シャッター工事・パーティション工事・耐火被覆工事・断熱吸音工事・ALC材工事 etc.

●建設機械

運搬機械・クレーンその他・基礎工事用機械
せん孔機械及びトンネル掘進機・締固め機械
骨材生産機械・コンクリート機械・空気圧縮機・送風機・ポンプ・原動機・各種施工機械・完成部品及び特殊機械器具 etc.

●設備機器・工事

空調設備機器・衛生設備機器・電気設備機器
防災設備工事・厨房設備工事・昇降設備工事
駐車設備工事 etc.

●インテリア

家具・応接セット・スチール棚・保管庫・移動書庫・ロッカー・施設用品 etc.

●輸入業務

マグネット磁石応用機器及び振動機器（米国エリーズ社提携）スリップ　トルクコンベヤ及びスインガー（米国シャトルワース社提携）天然氷晶石・ニュージランドカゼイン etc.

●一級建築士事務所

計画・基本設計・実施設計・工事管理・構造物のチェックと対策 etc.

大興物産株式会社

会長　渥美健夫　社長　石川 誠

本　社	〒160 東京都新宿区西新宿2-1-1 新宿三井ビル 35F	☎(03)348-1351(大代)	
名古屋	〒460 名古屋市中区新栄町2－14	☎(052)962－5741㈹	
大　阪	〒540 大阪市東区谷町5－27	上野ビル	☎(06)762－5661㈹
札　幌	〒060 札幌市中央区北3条西3丁目	三井ビル	☎(011)231－6841～2
仙　台	〒980 仙台市三日町1－27	鹿島建設㈱内	☎(0222)61－4141～3
北　陸	〒950 新潟市万代1－3－4	鹿島建設㈱内	☎(0252)47－2286～7
横　浜	〒231 横浜市中区弁天通り3－42	第3須賀ビル	☎(045)212－3925
広　島	〒730 広島市中町6－13	鹿島建設㈱内	☎(0822)49－9221
高　松	〒760 高松市瓦町2－7	冠野ビル	☎(0878)34－7070
福　岡	〒812 福岡市博多区博多駅前3-12-10	鹿島建設㈱内	☎(092)441－2624～5



石油高騰のハンディ、太陽熱でいっきょに克服

GMG八王子ゴルフ場（東京都）

毎日たくさんのお湯を使うクラブハウスで真価を発揮します。

通産省認可の「ソーラーシステム普及促進融資制度」をゴルフ場で初めて適用された、GMG八王子ゴルフ場。昨年12月から、ソーラーシステムの運転をはじめています。バスルームやシャワーの給湯用としてお湯がふんだんに使われるため、ピーク時には一日800ℓもの燃料（A重油）を消費。ところがソーラーシステムを導入してからは、半分の400ℓくらいでまかなえるようになりました。こうして、石油値上りによる経費増の問題も、お客さまに負担をおかけすることなく解決しています。

（ブルーパネル〈太陽集熱器〉150枚、蓄熱槽20㎥）

矢崎のソーラーシステムは太陽依存率70%以上。

この性能が、太陽熱の利用普及時代をつくりつつあります。

昭和49年7月に実験ソーラーハウスを完成。世界初の太陽熱冷房の実験に成功して以来、矢崎はすでに1,000物件以上のソーラー施設へ機器を納入してきました。さらに、実用実験を重ね一連の実績をふまえて、実用性を確固としたものに高めています。いま、その性能は「太陽熱依存率70%以上」。晴れの日なら100%太陽熱だけで冷房がおこなえ、冬には暖房もできる。冷暖房、給湯に必要な年間燃料の70%以上が太陽熱でまかなえる。他の追随をゆるさないこの実用性能が、太陽エネルギーの本格的な利用時代をつくりつつあります。

矢崎総業株式会社

本　社　〒108 東京都港区三田1-4-28三田国際ビル17F ☎(03)455-8811

資料請求券
SD・5・25

スペースデザイン

SD

第201号
昭和56年6月号
特別定価=2,800円
年間直接購読料=15,000円（送料込み）

編集長：
長谷川愛子
副編集長：
伊藤公文
編集スタッフ：
森徹
吉田雅彦
相川幸二
浜地三千世
デザインエディター：
羽原肇郎

発行者：
河相全次郎

発行所：
鹿島出版会
〒107
東京都港区赤坂六丁目5番13号
電話（03）582-2251（代）
振替 東京 6-180883 番

印刷：製本
凸版印刷株式会社
〒174
東京都板橋区志村1-11-1
電話（03）967-1111（代）

取次店：
東販・日販・大阪屋・栗田出版販売・誠光堂
鈴木書店・西村書店・中央社

■特集＝安藤忠雄 5–178

詩＋ドローイング〈中之島第三の道〉 安藤忠雄 8–11

時代の透き間から 二川幸夫 146

対談＝素材に対する強い執着から生まれた爽やかな形態の抽象性 西沢文隆＋横文彦 151–158

厳格なる形式の内に宿るやさしきたおやかなものたちの世界 竹山聖 159–165

作品リスト 166–175

活動年譜 176–177

ドローイング＝
小篠邸 5
石原邸，小篠邸，番匠邸，堀内邸，帝塚山の家，大楠邸，STEP 44–50
六甲ビュー・コート，石原邸，福邸 147–150

作品＝
小篠邸 12–29
松本邸 30–39
福邸 40–43
第1回びわ湖現代彫刻展，PORTPIA'81 "Fashion Live Theater", STEP 51–55
松谷邸，上田邸 56–62
大西邸，片山ハウス 63–71
ガラスブロックウォール（堀内邸） 72–77
大楠邸 78–83
ガラスブロックの家（石原邸） 84–93
帝塚山の家（真鍋邸），領壁の家（松本邸） 94–109
帝塚山タワープラザ 110–113
番匠邸，貫入（平林邸） 114–123
住吉の長屋（東邸） 124–131
双生観（山口邸） 132–137
岡本 Housing・Art Gallery Complex Projects 138–141
富島邸 142–145

Serial Photo Essay——PARIS 6 パリの魅力 堂本尚郎＋田原桂一 179–182

書評 186–192

海外建築情報 語りの建築＝f（歴史・場所） 岡田新一編 193–204

国内建築ノート レイジング・ブル《安藤忠雄》 グルッポ・スペッキオ編 205–216

表紙＝小篠邸
設計＝安藤忠雄，撮影＝安藤忠雄

Space Design:

SD

A Monthly Journal of
Art and Architecture
No. 201
June 1981

Chief Editor:
Aiko Hasegawa
Editor:
Kobun Ito
Associate Editors:
Toru Mori
Masahiko Yoshida
Kouji Aikawa
Michiyo Hamaji
Design Editor:
Shukuro Habara

Publisher:
Zenjiro Kawai

Published by
Kajima Institute Publishing, Co. Ltd. ©
5–13 Akasaka 6-chome, Minato-ku,
Tokyo, 107 Japan
Telephone: (03) 582–2251
Printed in Japan

★
This copy: $15.00

Subscription price
$80.00 a year
$150.00 two years
(including shipping)
Order form: pp. 217–218

■SPECIAL FEATURE 5–178

Tadao Ando

Poem and Drawing, *by Tadao Ando* 8–11

From a Crack in Time, *by Yukio Futagawa* 146

Dialogue, *by Fumitaka Nishizawa+Fumihiko Maki* 151–158

The World of the Gentlehearted Nestled in Austerity, *by Kiyoshi Takeyama* 159–165

Chronological Diagram of Works 166–175

Annals of Creative Activity 176–177

Drawings=
Koshino Residence 5
Ishihara Residence 44–50
Koshino Residence, Bansho Residence
Horiuchi Residence, Tezukayama House
Okus Residence, STEP
Rokko View Court, Ishihara Residence, Fuku Residence 147–150

Works=
Koshino Residence 12–29
Matsumoto Residence 30–39
Fuku Residence 40–43
The Exhibition of Contemporary Sculpture, Biwako 51
PORTPIA '81 "Fashion Live Theater" 52–53
STEP 54–55
Matsutani Residence 56–59
Ueda Residence 60–62
Onishi Residence 63–67
Katayama House 68–71
"Glass Block Wall" Horiuchi Residence 72–77
Okusu Residence 78–83
"Glass Block House" Ishihara Residence 84–93
"Tezukayama House" Manabe Residence 94–101
"Wall House" Matsumoto Residence 102–109
Tezukayama Tower Plaza 110–113
Bansho Residence 114–118
"Interpenetration" Hirabayashi Residence 119–123
"Row House Sumiyoshi" Azuma Residence 124–131
"Twin House" Yamaguchi Residence 132–137
Okamoto Housing 138–139
Art Gallery Complex Projects 140–141
Tomishima Residence 142–145

●SERIAL PHOTO ESSAY—PARIS [6] 179–182

Charm of Paris, *by Hisao Domoto and Keiichi Tahara*

●BOOK REVIEW 186–192

●EMINENT WORKS ABROAD 193–204

Comunicate Architecture=*f*(History • Place)—compiled from foreign architectural magazines, *by Shin'ichi Okada*

●DOMESTIC ARCHITECTURAL NOTES 205–216

Raging Bull "Tadao Ando", *by Gruppo Specchio*

Cover=Koshino Residence by Tadao Ando, Photo by Tadao Ando

■SPECIAL FEATURE 5–178

Tadao Ando

1941 Born in Osaka
1980 Award of Architectural Institute of Japan

From a Crack in Time **146**
by Yukio Futagawa

There have been few periods in modern architectural history so devoid of ideals as this one. This is partly accounted for by the successive deaths of masters such as Wright, Le Corbusier, Mies, Aalto and Kahn in the '60s and '70s. It would not be an exaggeration to say that the present state of affairs is also the result of the weak foundation on which architectural education has hitherto been based.

It was under these conditions that Tadao Ando made his meteoric rise to a prominent place in the Japanese architectural firmament with his Azuma Residence. The Sky House of Kiyonori Kikutake is among the best Japanese houses built after World War II. Although the Azuma Residence is the polar opposite in many ways of the Sky House, it too occupies an extremely important place in the development of modern architecture. This work was presented as a modern day version of the traditional rowhouse (*nagaya*) commonly found in the older sections of Osaka; it is based on the scale of traditional tradesmen's houses (*machiya*) and is characterized by a skillful choice of material—exposed concrete—and perfectly worked out spaces. In his consistent use of concrete for all his works since the Azuma House, we can glimpse the determined seeker after truth who wants to pursue some path to the bitter end.

Ando is today going his own way. From what I have heard, he has not received a formal architectural education and calls no architect his master. This may in fact be the source of the strength of his architecture. Today when many architects are losing their identity in large organizations, we can only marvel at Ando's self-reliance and his tenacity in the pursuit of his architectural vision.

It will be interesting to see where Ando's investigation into the aesthetics of concrete—a challenge many gifted architects including Le Corbusier accepted—will take him.

The Summary of a Discussion **151–158**
Touch of Raw Freshness and Abstract Sense
Stemming from Deep Affection for Architectural Material

(This is a summary of the discussion between Fumihiko Maki and Fumitaka Nishizawa which took place on March 18, 1981.)

****Fumitaka Nishizawa***: architect; president, Sakakura and Associates. A representative architect of the Kansai area, he has a deep knowledge of residential design and gardens in Japan and abroad.

****Fumihiko Maki***: professor, University of Tokyo; principal, Maki and Associates; FAIA.
Representative work: Iwasaki Art Museum, Hillside Terrace Apartment Complex, etc. (see SD 7906)

Nishizawa
Ando appears to be most interested in making spaces associated with movement such as stairs and corridors forceful and coherent as well as in creating axes, level changes and spatial depth. He is rather skillful in the layout of rooms, and he is at his most characteristic in his treatment of the circulation between rooms. As for the rooms themselves, Ando seems content to provide containers for his clients to use as they wish, and he does not appear to be much interested in designing everything inside.

In Ando's works, both the exterior and interior finishes are exposed concrete, and there is no insulation provided. This has some troubling consequences including condensation in a humid climate like Japan's. He has, however, such a love for concrete as a material and there is such beauty in what he produces that one is almost willing to overlook problems such as condensation.

Those who design conceptual architecture are unconcerned about details and only seek to create spaces in an intellectualized manner. They work simply through geometry and the results are spaces without substance. In sharp contrast to these architects, Ando brings to matters of detailing the same purposeful consideration he gives to forms.

Maki
What impresses me most about Ando's houses is the idea of "threshold". This is an extremely important issue for urban dwellings. It is understandable that most architects should want to design assertive buildings in the confusion that characterizes cityscapes today. A building would lose its identity if it were made too responsive to the surrounding environment. On the other hand, if it were completely alien then it would do violence to its context. Ando developed the idea of "threshold" with his use of forms such as the frame, and I think this is valuable because it permits a building to clearly assert its own identity without being violently disruptive to the cityscape. His skillful handling of the traditional Japanese concept of *ma* within the porous matrix which his framework creates is particularly noteworthy. Ando uses, in addition to these frames, solid masses that seemingly discourage approach, and the plan is arranged in ways which help to further clarify the idea of "threshold" these forms imply.

Details I think come closest to being the physical, substantial aspect of architecture; from this point it is interesting that in Ando's works the buildings themselves give the impression of being details. In other words, it is as if the details had been enlarged to the scale of two-story houses; the rigor required of detailing informs every part of his building.

Ando is single-minded to the point of being maniacal in his approach to the framework, but he does not seem to be as obsessed with the formalism now in fashion as say the neorationalists in his treatment of openings. He seems to be quite attentive in his designs to the way the openings will look from the inside of his buildings.

There are many architects who use concrete simply as a means of containing space, but Ando's work suggests that he has thought deeply and purposefully about concrete as a material. There have been other architects such as Kenzo Tange who have been engrossed in the study of concrete, but Ando's approach seems to be more contemporary. This may be due to the priority he gives to the quality of abstraction in his forms over structure.

Drawing on his many years of reflection on the creation of complex spaces within simple exterior shells, Ando is fashioning spaces rich in variety.

The World of the Gentlehearted Nestled in Austerity **159–165**
by Kiyoshi Takeyama

There is a consistent theme in the architecture of Tadao Ando, and that

theme is an investigation into the relationship of a material object to a material object, of a material object to a human being or of a human being to another human being. Through the process of architectural design, Tadao Ando has continually proposed ways in which these relationships or encounters can take place. The Ando-esque quality therefore that always characterizes his buildings cannot simply be explained away as personal idiosyncrasies. The theme can be found in the total composition, the detailing of the parts, the ways in which a building will relate to the surrounding environment, his procedure of work and his personal conduct. Conversely, his buildings, the work of making those buildings and the way he leads his life constitute the answers to his investigation.

I believe that the idea of "oppositions" is key to an understanding of the relationships Ando wants to establish.

It is by no means accidental that his buildings always involve two elements facing each other. This reflects his continuing interest in an investigation, based *a priori* on the idea of "oppositions", into the relationship of a material object to a material object, of a material object to a human being or of a human being to another human being. In this sense, the Azuma Residence is prototypical of Ando's architecture.

According to psychiatrists, the self cannot exist or continue to exist unless it constantly tests itself against others. Ando values his self: thus he takes particular care in his relationships to others. This is true both of himself and of his architecture. Relationships between human beings, between a human being and a material object and between material objects: in all these the existence of the other is fundamental to the confirmation of the self. So careful is Ando about his relationship to others that both he and his buildings suggest something of autism. This, however, does not mean that he rules out all communication with others. One would have to be blind not to see that behind the closed expression of the architecture there lies a genuine desire to communicate. It is precisely because he does have a strong desire to communicate that he must be mindful of maintaining a closed expression.

When the urban environment for his building is brutal and anarchic, then his architecture withdraws into a shell. This is indeed an age of brutality characterized by the clamor of the city, an invasion of privacy, cars, commotion, confusion and disorder.

He does not turn his back on these brutal urban conditions but instead confronts them directly without flinching; his readiness to break out of his shell is a willingness to wait for as long as it is necessary for some *other* who will confront the self.

Ando's buildings are almost invariably of concrete. Concrete, it goes without saying, is a material of great substantiality. When, however, concrete is refined through great effort as if it were a piece of craftwork into a thing expressive of a strong will, space begins to lose its constraints. The substantiality of the concrete that was so pronounced at first somehow disappears, and what remains are the transparent forms alone. The concrete walls and columns have been transformed into different densities of distributed light, into whispers as of the wind and into a transparency as of water. They join in a symphony that continues to echo through space, long after the instruments of music have themselves disappeared.

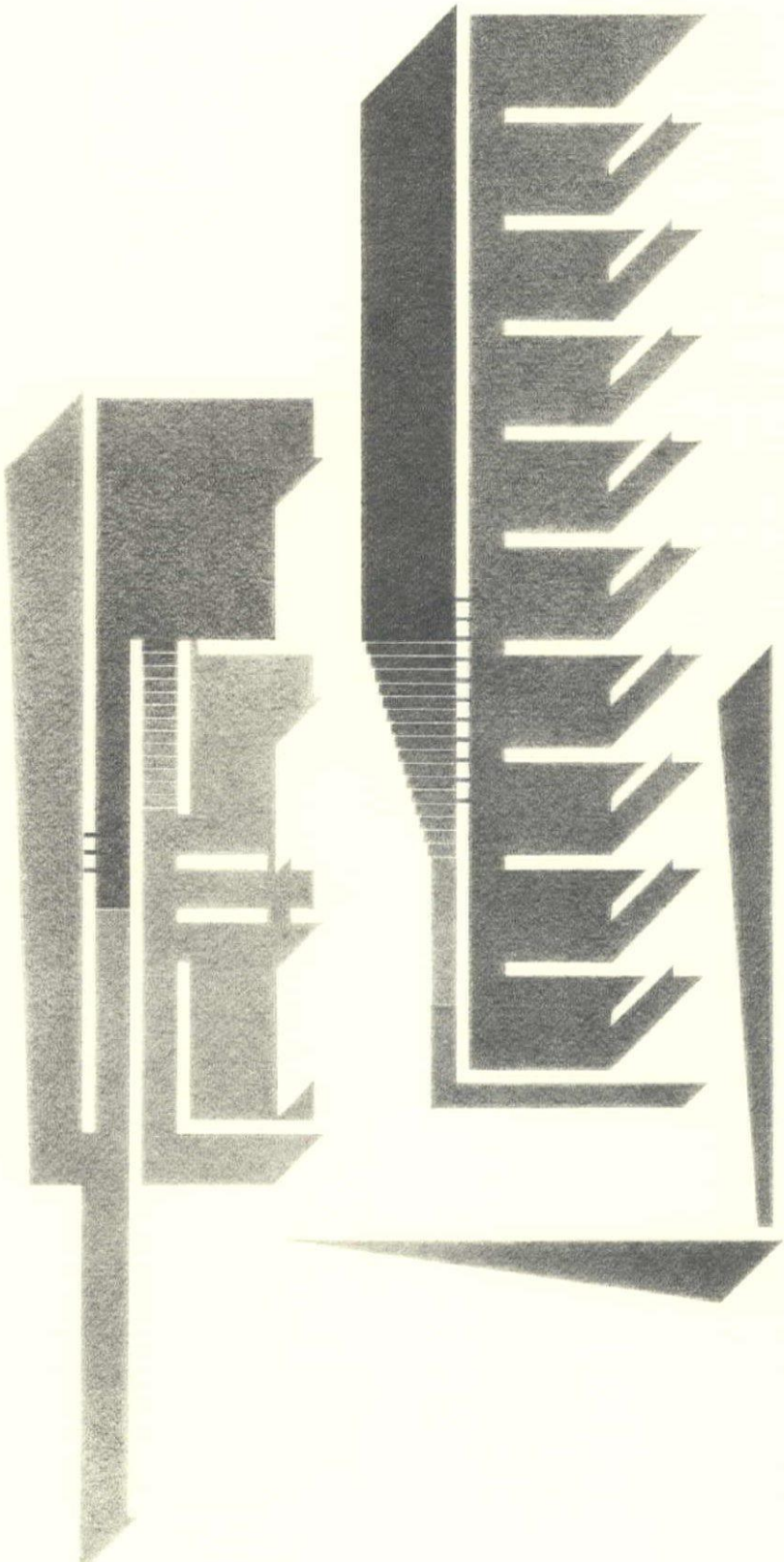
What makes this experience possible are *forms produced by a transparent will*—what one might call transparent forms. To be transparent, forms must be immediately legible in the material objects. Ando calls these transparent forms his concepts. This is why he states that the concept must inform even the smallest detail.

By rigorously applying the concept down to the smallest detail of meticulously chosen materials, Ando allows forms to ultimately emerge. For Tadao Ando, architecture and space are transparent forms produced by a transparent will.

English Translation=Hiroshi Watanabe

安藤忠雄

Tadao Ando



Koshino Residence 1981 : SD 8106

Ando
81.06

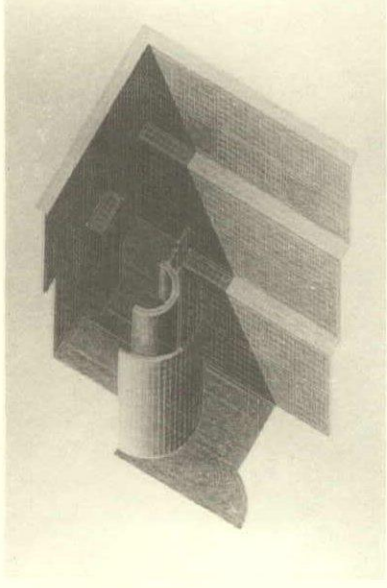
SD 現代建築家ポスター

《安藤忠雄》

安藤忠雄特集号出版を記念して，当誌では，
安藤忠雄氏の精緻で独特な
鉛筆によるドローイングの筆跡を
忠実に復原したポスターを製作し，
販売いたします．

ポスター仕様＝

●ドローイング（ガラスブロックの家）
●限定1,000部、サイン入り
●オフセット，３色刷
●ゴールデン・アロー紙使用
●Ａ２版（594×420ミリ）
●頒布価格　1,800円



販売場所＝

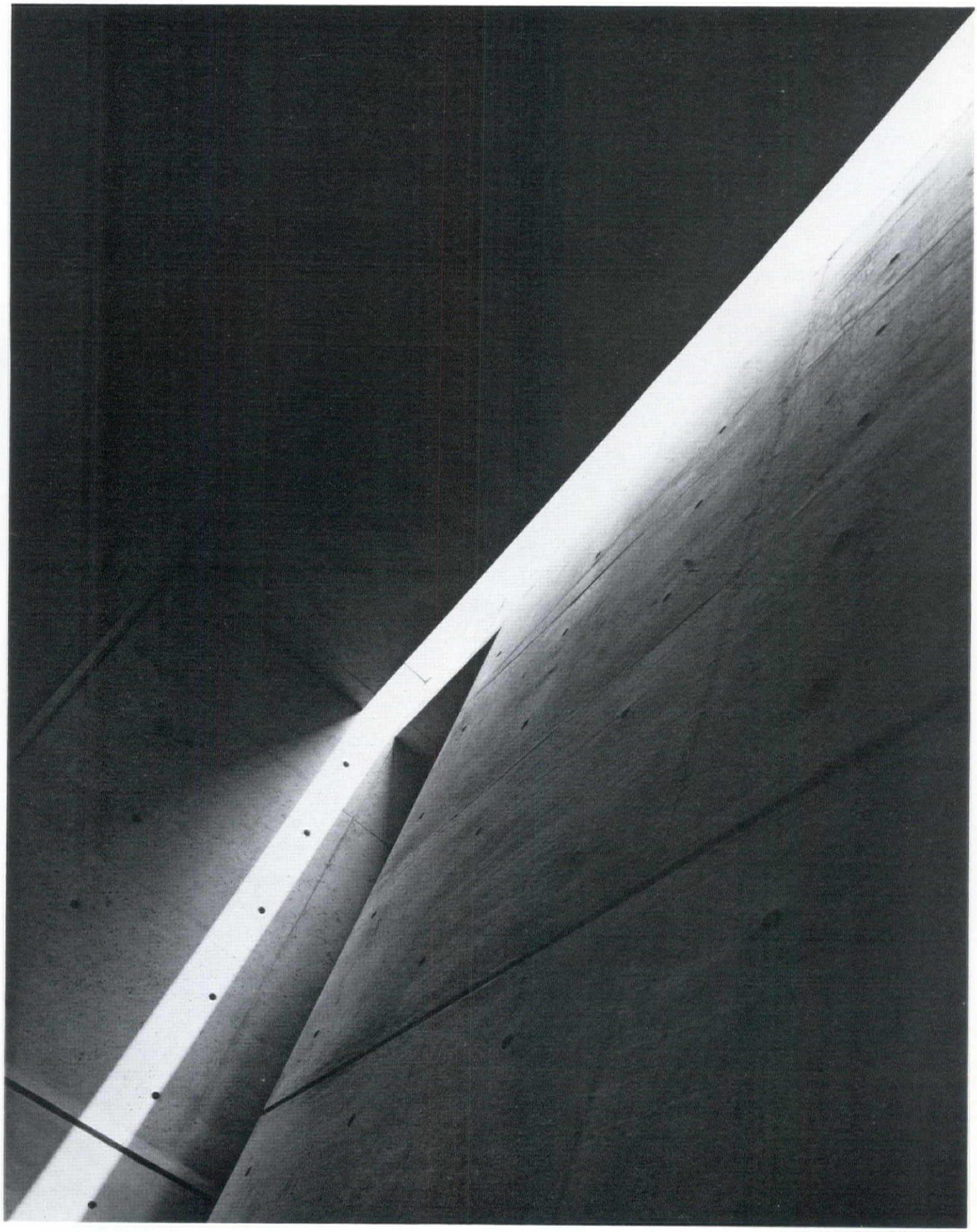
東京：

●八重洲ブックセンター　03-281-1811
●新宿紀伊國屋書店　03-354-0131
●池袋西武ブックセンター　03-981-0111
●神田三省堂本店　03-233-3312

神戸：

●ギャラリー・ド・ラペ（ローズガーデン1階）
　078-222-1518

SD では，今後も，
アート・コレクションとして楽しめる
現代建築家による限定版ポスター・シリーズを
企画しておりますので御期待下さい．



1

壁の意志

・

素材の潜在志向

平面志向のたくらみ
自閉のとりで
風景の異化作用
内在する意味のベクトル達
並列の中の個の自立
存在と意識の等立
封じ込められる意味的都市の小宇宙

2

均質多重風景

・

柱と壁の相互修辞

列柱の兵士
壁の専制君主
他者の再現
無のスペクトル
浮遊の異化
修辞と残像
沈黙の問い

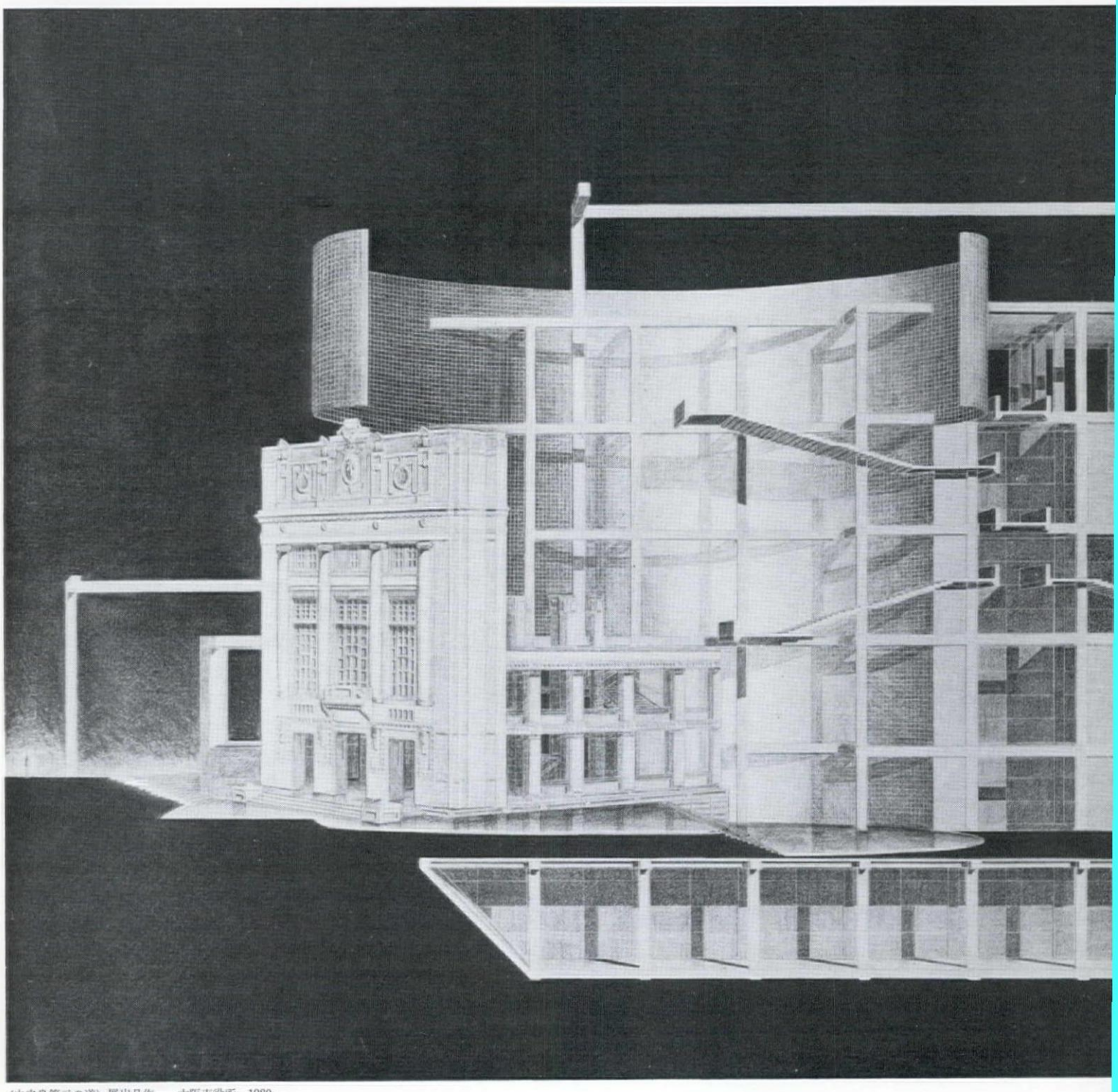
3

光と風

・

影と無響

場の微積分
存在の二重性
時空間の切断
子音的世界
瞬間的因果律
影の彫塑
光と沈黙の交差



〈中之島第三の道〉展出品作——大阪市役所，1980

4

敷地の余白

・

磁場の造形

物質としての場
陰画としての空
敷地の言語学
場の地理学
同形異相の共振
虚空
水平思考と垂直的事件

5

意味論的構成

・

個別意志の刻印

シンメトリーの意志
機能主義の陥穽
異質物質の交差点
剛体質点系
反転対峙
同形の拘束
異相の影

6

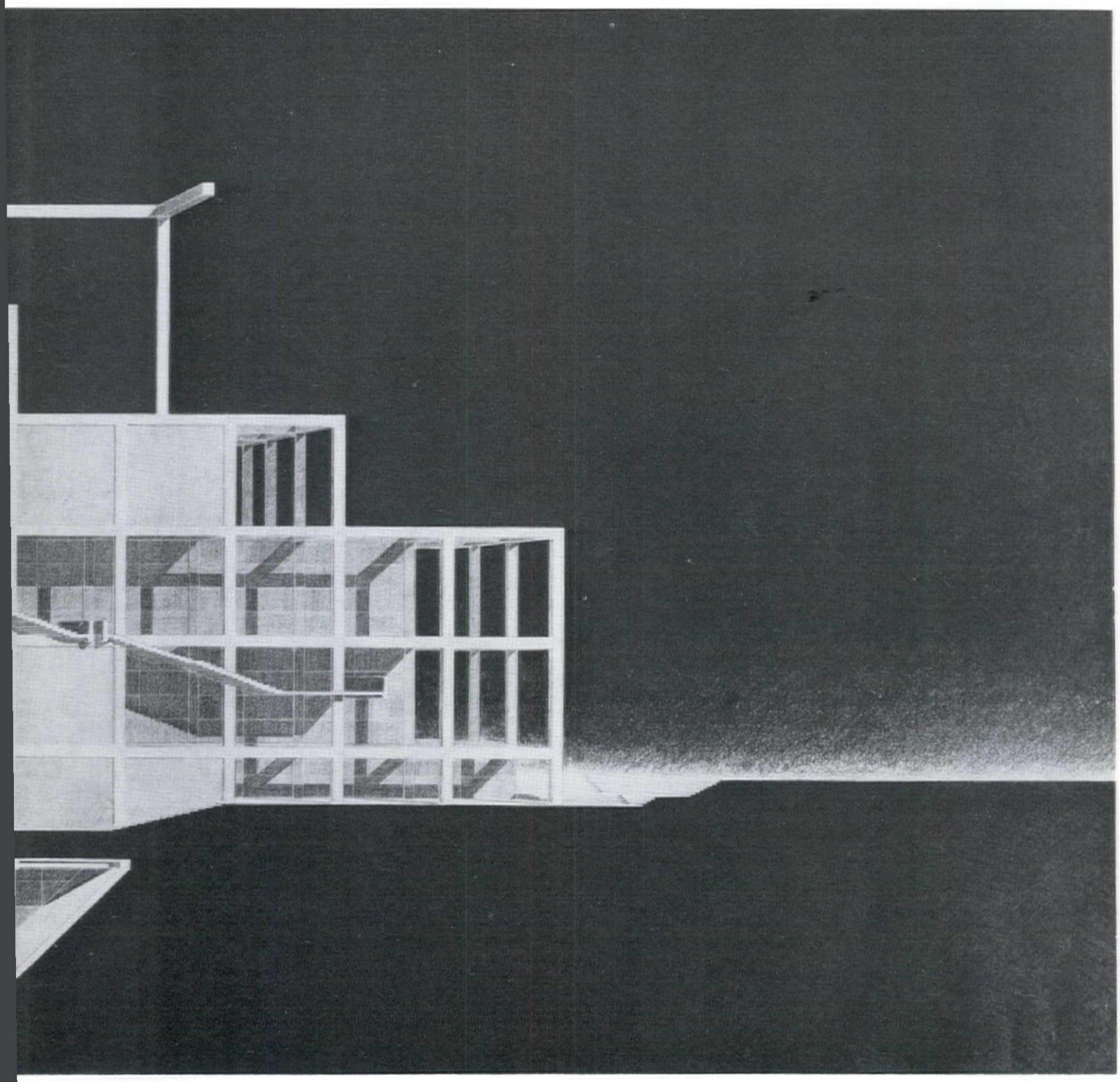
都市性の内包

・

相互自立・相互浸透

風景の分節
断絶の異風景
非連続の連続
自然の断章
影に同化する光
記憶の乱反射
ひとつの場

●安藤忠雄



1

The Will of Wall

•

The Potential Intent of Material

conspiracy of planarity plane
fort of autism
catabolism of landscape
vectors of immanent meaning
uniqueness of one among many
equilibrium between existence and consciousness
sealed-in microcosm on semantic city

2

The Multifold Landscape in Homogeneity

•

The Rhetorical Interplay of Pillars and Wall

army of pillars
despot of wall
re-emergence of others
spectrum of nothingness
floating catabolism
rhetoric and afterimage
interrogation of silence

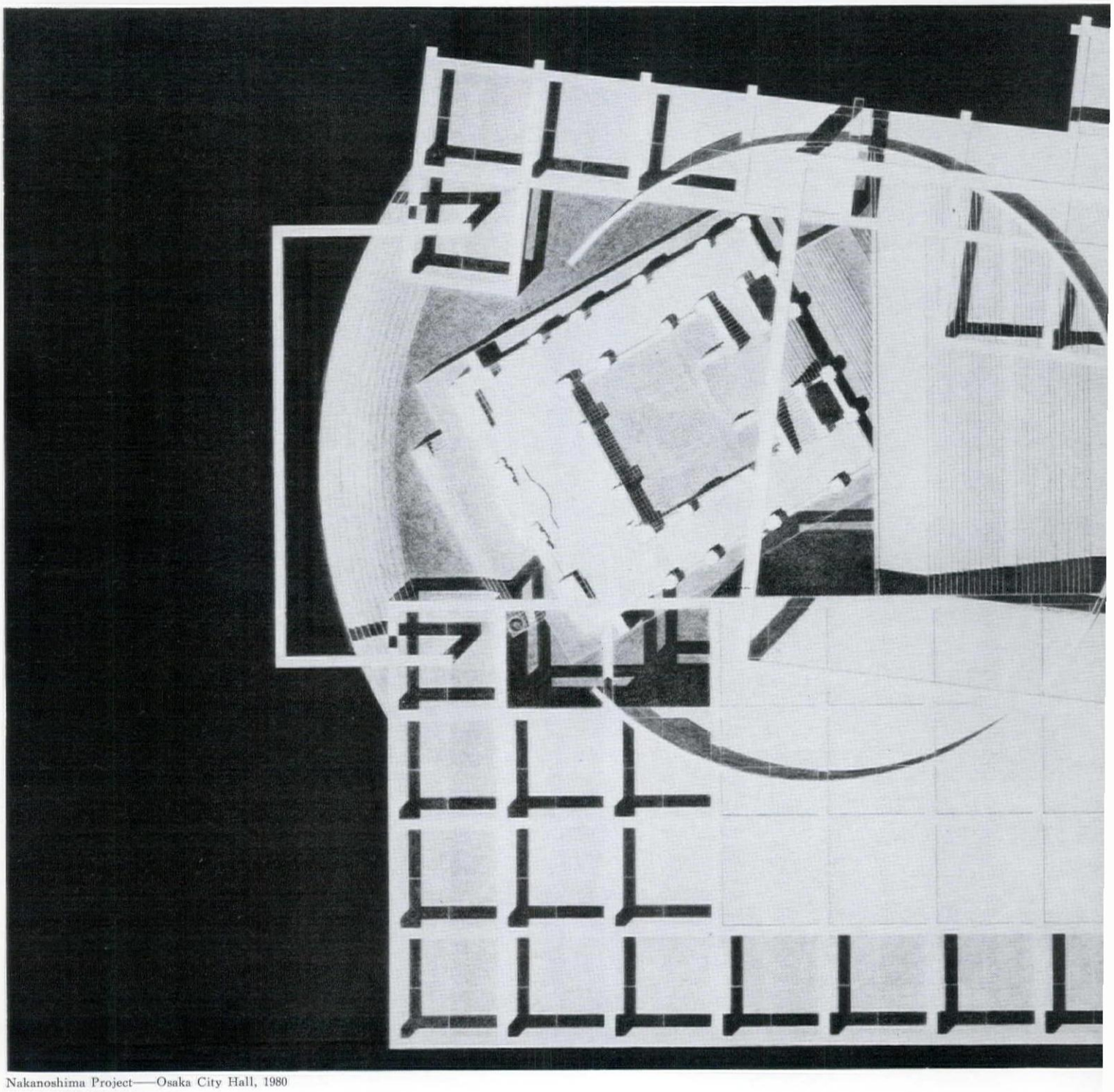
3

Light and Wind

•

The Shade and The Echo of Nothingness

differentiation and integration of field
dual nature of existence
disconnected time-space
consonantal world
instantaneous cause and effect
sculpture of shade
intersection of light and silence



Nakanoshima Project——Osaka City Hall, 1980

4

The Margin of Site

・

The Morphology of Magnetic Field

field as matter
sky as negative
linguistics of site
geography of field
isomorphic resonance
empty space
lateral thinking and vertical accidents

5

The Semantic Composition

・

The Imprinting of Individual Will

will of symmetry
trap of functionalism
intersection of heterogeneous materials
rigid body-mass system
inversion of confrontation
restriction of uniformity
shades of topology

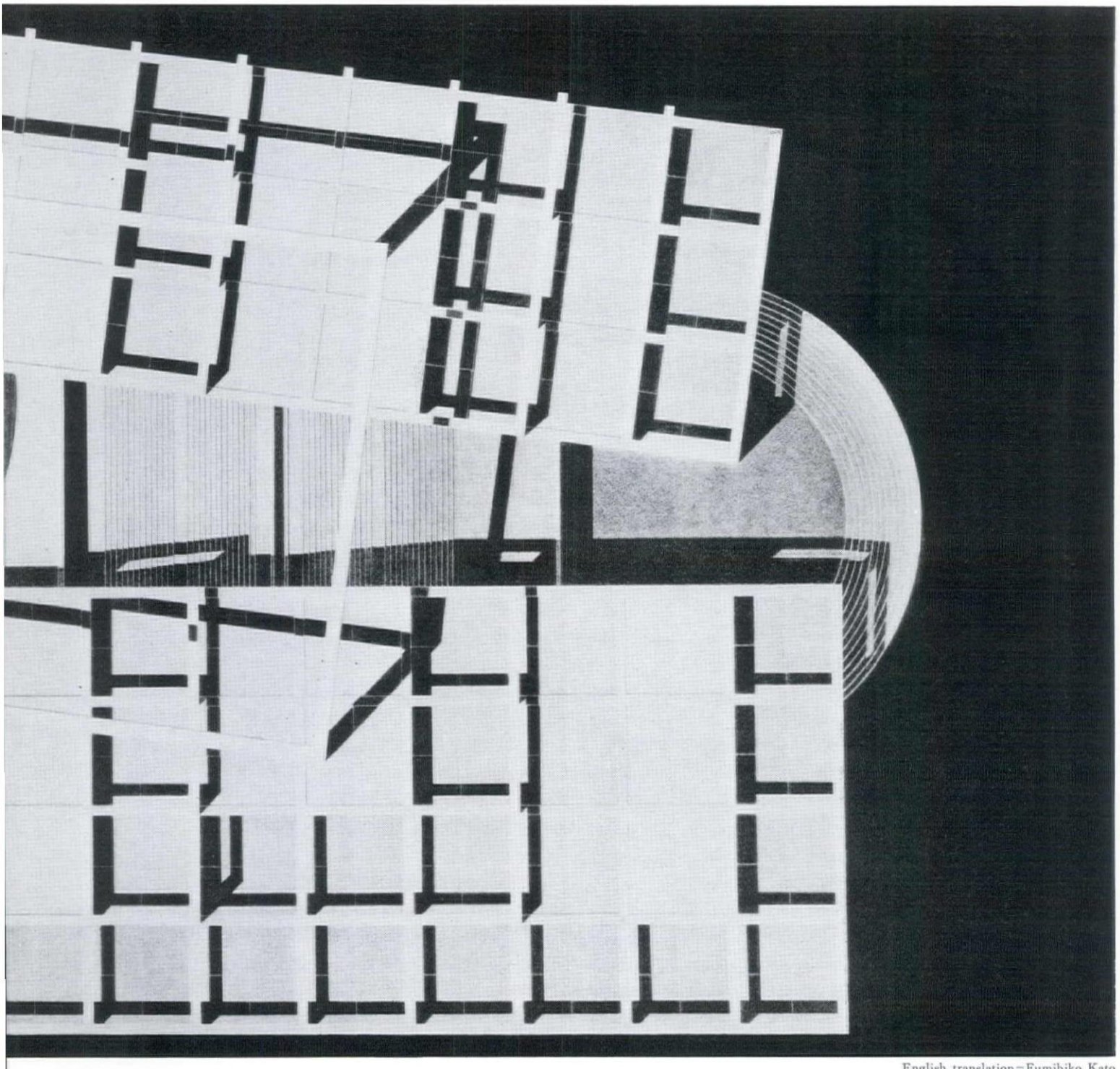
6

The Connotation of Urbanity

・

The Independence and Inter-Permeation

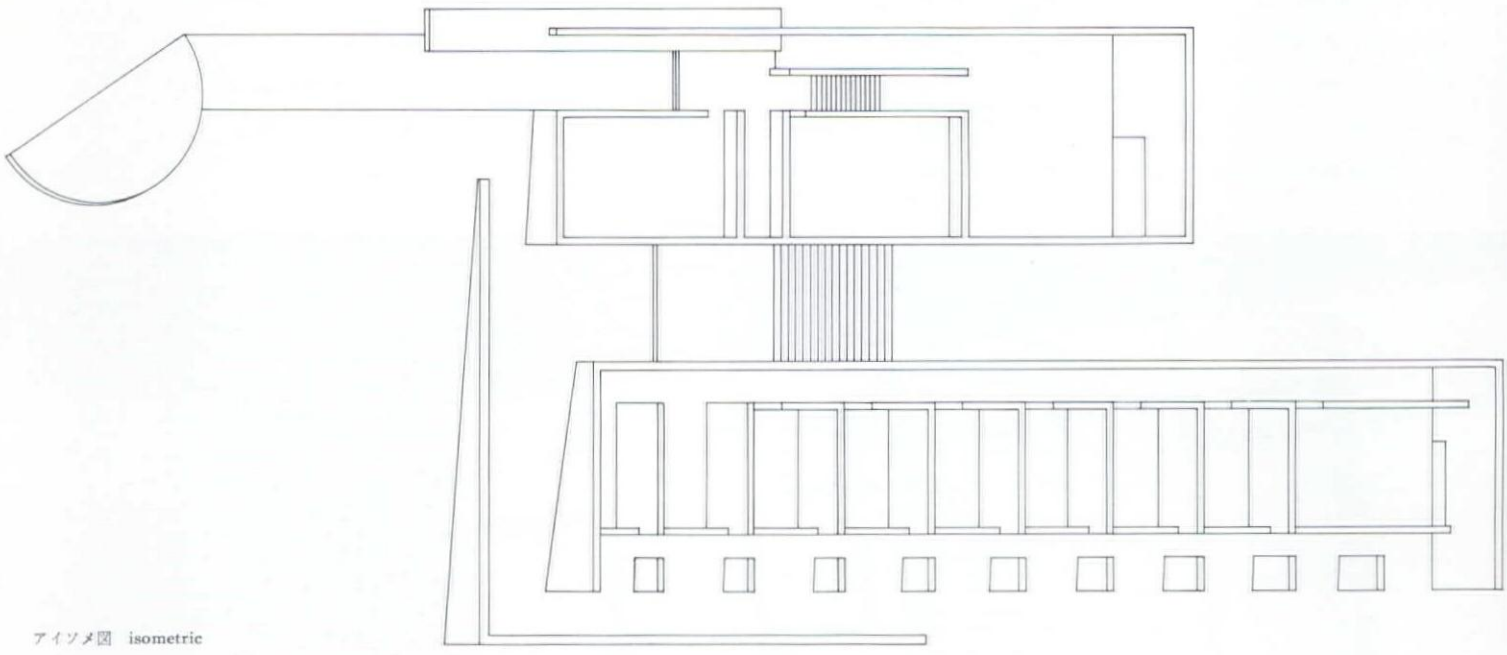
articulation of landscape
another world after severance
continuity in discontinuity
literary fragments of nature
light assimilating to shade
diffusion of memory
nowhere……? *Tadao Ando*



English translation=Fumihiko Kato

小篠邸 芦屋市奥池・兵庫

Koshino Residence 1981



アイソメ図 isometric

《総論》

ひとつの建築をつくる.

イメージが，現実の形態を伴って，私の眼の前に立ち現われてくる. そのプロセスと，完成されたかたちは，さまざまな問題意識を私に残す.

建築をつくるということは，その多様な意識を探り求める過程で，蓄積されていく記憶を，体内化された論理にまで昇華し，自己を取り巻く諸問題を建築的に解決して行くことだと考える.

以下に続く，富島邸から現在に至るまでのおのおのの作品は，その場における特殊解であり，私のつくる建築の一断面である. と同時に，多岐にわたる問題意識に対しての一般解でもあって，常に，建築に対する私の思考の全容を，内包している. 短い説明文は，体系づけられたものでも，分析されたものでもない. その折々に考えていたことを，記述したものである. 自分では，身を切り刻むようにして，ひとつひとつつくって来たつもりであるので，どうも知識がついて来ない. 以下の記述も，舌たらずの，読み辛いものになっているかと思うが，それを写真と合わせ，読者の力によって読み取って頂きたい.

小篠邸

無機的なコンクリートの箱がふたつ，緑深い山の斜面に，半ば埋設されて在る.

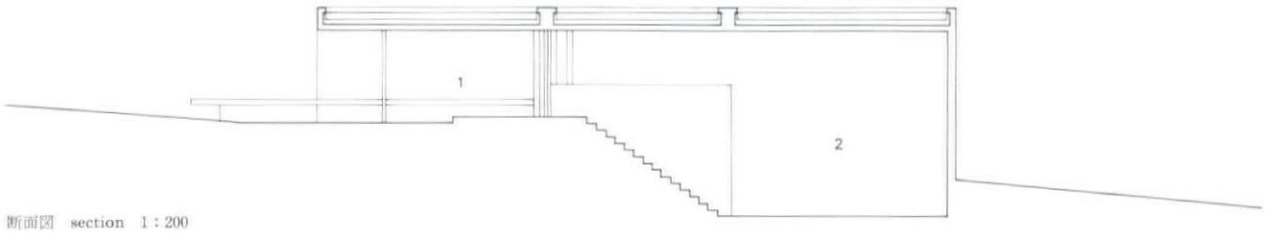
建物は，地中の廊下で連結され，互いに平行に配置された，容積の異なるふたつの棟と，中庭より成り立っている.

1棟は，2層分の高さの吹抜けをもつ居間と，下階にキッチン・食堂，上階に主寝室が配置された2階建てである. 他棟は，壁を隔てて連続する6個の子供室と和室，それに，浴室・ロビーとで構成されている.

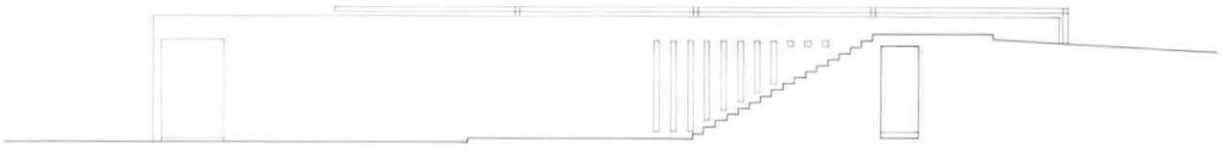
2棟の狭間に生み出された段状の中庭は，コンクリートコテ押えで仕上げられ，自然の土地に置かれた1枚の布のように，敷地に内在する形態上の志向性を表象している. ここは，戸外の居間であり，広い階段は，樹の合間よりもれる自然の光を受け，反射し，この住居で繰り広げられる生活の舞台となる. 自然の中から環境を切り取り，人為的につくりあげられた，自立する外部空間でもある. このあたりの気候条件は，冬の厳しい寒さに対する防禦性を，建物自身が備えることを要求した.

どの部屋も，山の斜面に沿いつつ南面している. 連続する室の北側には，これを包み込むように，廊下が配されている. この二重壁の狭間のスペースは，外部の冷気を遮蔽する. 建物が地中に半階分埋設されているのも，同じ意図によるものである.

無機的なコンクリートの壁と，そこに作用する光は，私の建築に対するイメージの，原点である. 規則正しく取り付けられた，コンクリート仮枠パネルとセパレーターの痕跡. 等質に仕上げられた表面と鋭いエッジ. しかし，コルビュジエ後期の作品に見られるような，素材を強調した，なまなましい彫塑的空間は好みとしない. 寧ろ，力強さを背後に秘めた，ひそやかな，無機的な素材として，コンクリートを語らせたい. そして，それがつくり出す，この冷ややかで静かな空間に，光を引き込むことによって，素材の意



断面図　section　1：200
1　入口　entrance
2　居間　living room



断面図　section

各作品の平面図，断面図，アイソメ図は，原則としてＳ＝1/200 の same scale とし，作品相互のボリューム・イメージの比較を容易にした．

志を超えた，柔らかさと透明感のある空間へと解き放ちたい．

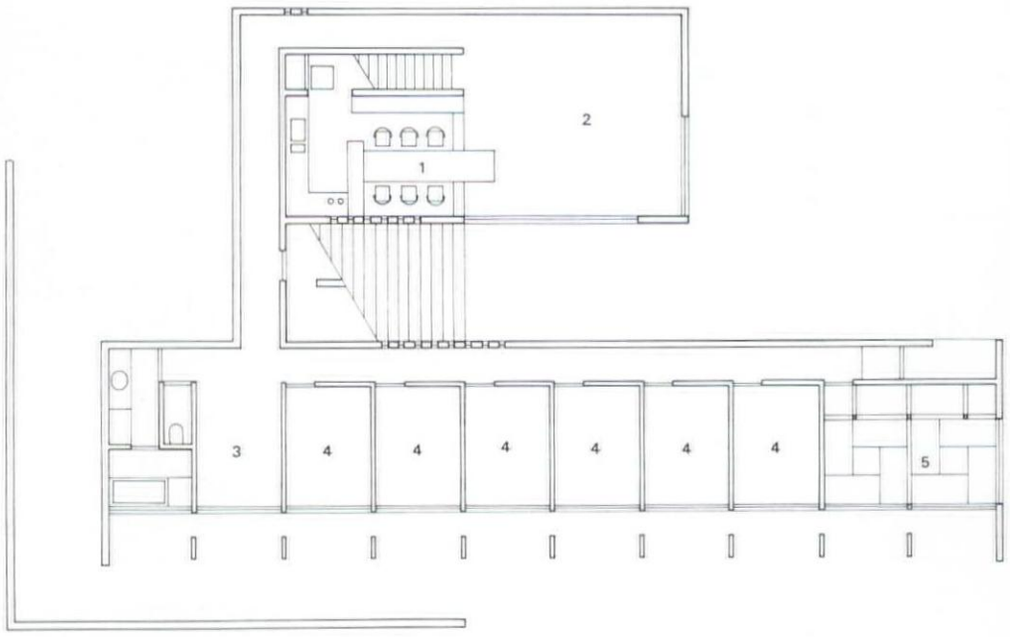
光は，空間と形態を取り結ぶ．　光は，時間の経過に伴い，表情を変える．　木やコンクリートのような実体のあるものばかりでなく，光や風のように優れて感性に依存するものもまた，建築の重要な素材であると私は考えている．

小篠邸では，二重壁の狭間の廊下は，建物の内部にあって，暗がりの中に光と陰との多様な出会いを生み出す原点となっている．　規則正しく穿たれスリットは，この細長いスペースに光を送り込む唯一の装置である．流れ込む光は留まり，時の推移に伴い，空間を異化している．

1 個の住宅という限定されたスペースの中で人がそれぞれ自立して住まうためには，互いのプライバシーを侵さないことが原則である．　そのためには，個人の所有する空間領域が限定されていると同時に，その空間が生活機能を支え得ることもまた，重要である．

この住宅では，北側の棟を主としてパブリック・スペース，南側の棟をプライベート・スペースとして分離する一方，各個室には生活の骨格としての家具が，据えられた．　これらはすべて単純な造形方法に拠っている．　かつてアメリカで見たシェーカー教徒のつくった家具に，影響を受けているのかも知れない．　そこでは，素材の適切な使用と形態の単純性の中に，機能が結晶していた．　シンメトリーを基本とした比例の良い形態は技術的合理性に裏付けられたもので，一切の無駄が省かれている．　質素で控え目な雰囲気は，空間を慎ましやかに秩序づけている．　極度に追求された生活と形態の単純さは，現代の多様な日常風景の中にあって今なおみずみずしい．　宗教を軸とした生活の様式をそのまま受け入れることは困難であるにしても，単純な形態がもたらす力強い生活の意志には圧倒された．　そして，「美は用に宿る」というシェーカーの論理は，時間を超えて不滅であるように思えた．〈住吉の長屋〉以来，単純な構成の中に，複雑なスペースをもつ建築を追求して来た．　それはさらに，幾何学的構成が生み出す建築の等質な輪郭形態を超えて現われる，空間の固有性の追求とも言える．　そして同時に，建築の全体からその細部に至るまで，すべて最少限の要素を通して最大限の固有性を表現する試みでもある．

その固有性の表現の支柱として，ディテールがある．形態が単純であればあるほど，裏側に潜むディテールについては，その単純性を貫徹するために慎重にならざるを得ない．　ディテールは，建築全体の中にあってつくり手の創造への意志が表現される重要な部分であると私は考えている．　天井と壁，開口部と壁，壁と床などの部分と部分の関係についての問題が，デザインのプロセスでどんどん出て来る．　私は，長い間手仕事的にものをつくって来たためにそこから抜けられず，ひとつのものを構成する部分とその全体のかたちを切り離して考えることができない．　部分の収束が全体であり，全体は部分の連鎖である．　私にとってディテールは，それ故に，建築を物理的に構成する要素であると同時に建築全体のイメージの着地点でもある．



1 階平面図 first floor plan 1 : 200

Preface

To create a building :

An image, accompanying a realistic form stands out in my mind. The process and the perfected form leave me with the realization of various problems.

The act of building is to solve problems architecturally while sublimating the accumulated memories into a conceivable theory during the concious search of mind.

The works to follow, from the Tomishima Residence to the present, are a cross section of my architectural career, and each work represents a particular solution at that time. The works are also general solutions to the various problems that I have encountered through the years, and they all reflect the aspects of my conception toward architecture. The short explanations are not methodical nor analytical. Instead, they try to describe what had been in my mind at each moment of creation.

I have been desparate in completeing each job, and it is hard for me to be intellectual. The following texts are not eloquent, and therefore, may be difficult to understand. But with the assistance of the photographs, it is my hope for the readers to comprehend my intentions.

Koshino Residence

Two inorganic concrete boxes exist, half burried, on a deep green slope.

The building is composed of a courtyard flanked by two volumetrically different units which are placed parallel to each other with an underground connection.

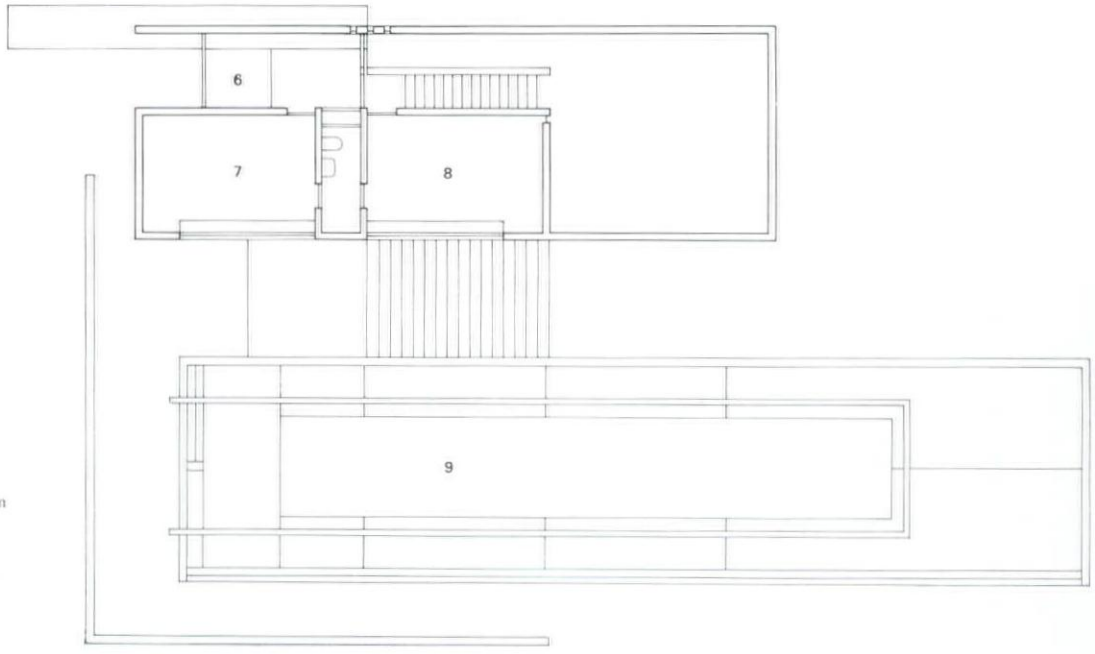
One volume contains two levels : the lower level accomodates the double height living room, the kitchen, and the dining room ; and the upper level, the master bedroom. The other volume houses six rooms for children and tatami rooms all being placed in a row, a lobby, and a bathroom.

The smoothly finished stepping courtyard generated in between the two volumes connotes a coverlet placed over the sloping contour of the site. In other words, the stepping of the courtyard is the symbolic representation of the intrinsic nature of the site. The courtyard is an outdoor living room, and the wide stairs receive and reflect the natural light trikling through the trees and serve as a stage on which the living unfolds. It is an exterior space, artificially created by isolating a part of nature.

The weather conditions in this area required the building to be equipped with a defense mechanism toward severe coldness.

Each and every room faces south, conforming to the natural slope of the hill. On the north side of the row of rooms, a corridor envelops the chambers. This narrow space, sandwiched between two walls, shut out the cold air from the outside. For the same reason the building has been burried half a level below ground.

The inorganic concrete walls and the light which acts upon them are the source of my architectural inspirations. The regularly placed concrete formworks and the traces of the ties, the smoothly finished surfaces and the sharp edges——however, my preference is not on the bold and plastic space with material emphasis, seen in the later works of Le Corbusier. I would rather treat concrete as a serene, inorganic material with a strong potential hidden within. And by inviting



1 食堂 dining room
2 居間 living room
3 ロビー lobby
4 個室 children's room
5 和室 tatami room
6 入口 entrance
7 書斎 study room
8 寝室 bedroom
9 屋上 roof terrace

2 階平面図 second floor plan

light into the cool and peaceful space, I want to evolve a sober and transparent space which exceeds beyond the will of the material.

Light is a mediator between space and form. Light changes expressions with time. I believe that the architectural materials do not end with wood or concrete that have tangible forms, but go beyond to include light and wind which appeal to our senses.

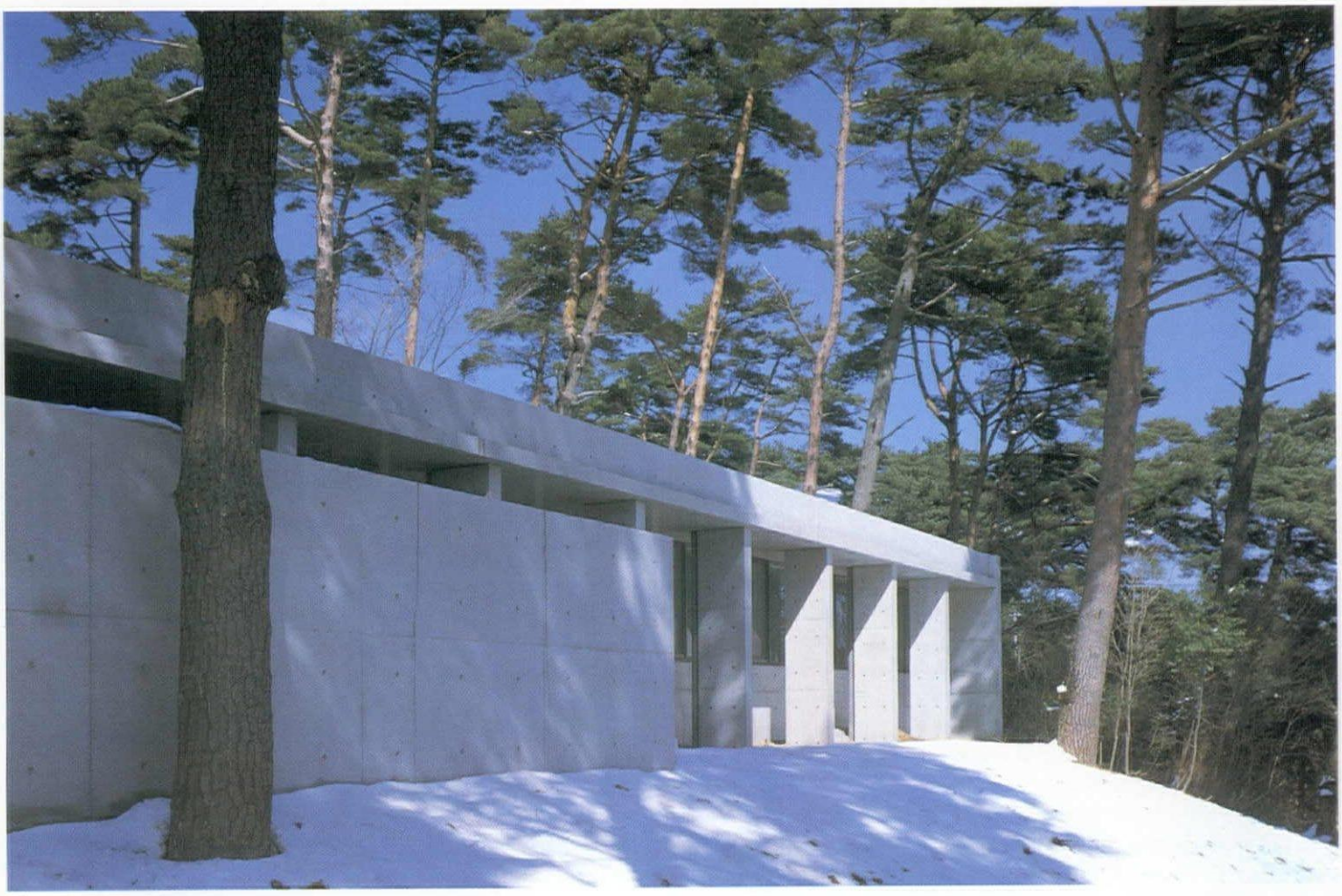
In Koshino Residence, the narrow corridor between the two walls exists within the building, and acts as the generator for the various encounters of light and shadows in the dim space. The regularly opened slits are the sole means for delivering light into this long and narrow space. The streaks of light are absorbed to transform the space with the change in time.

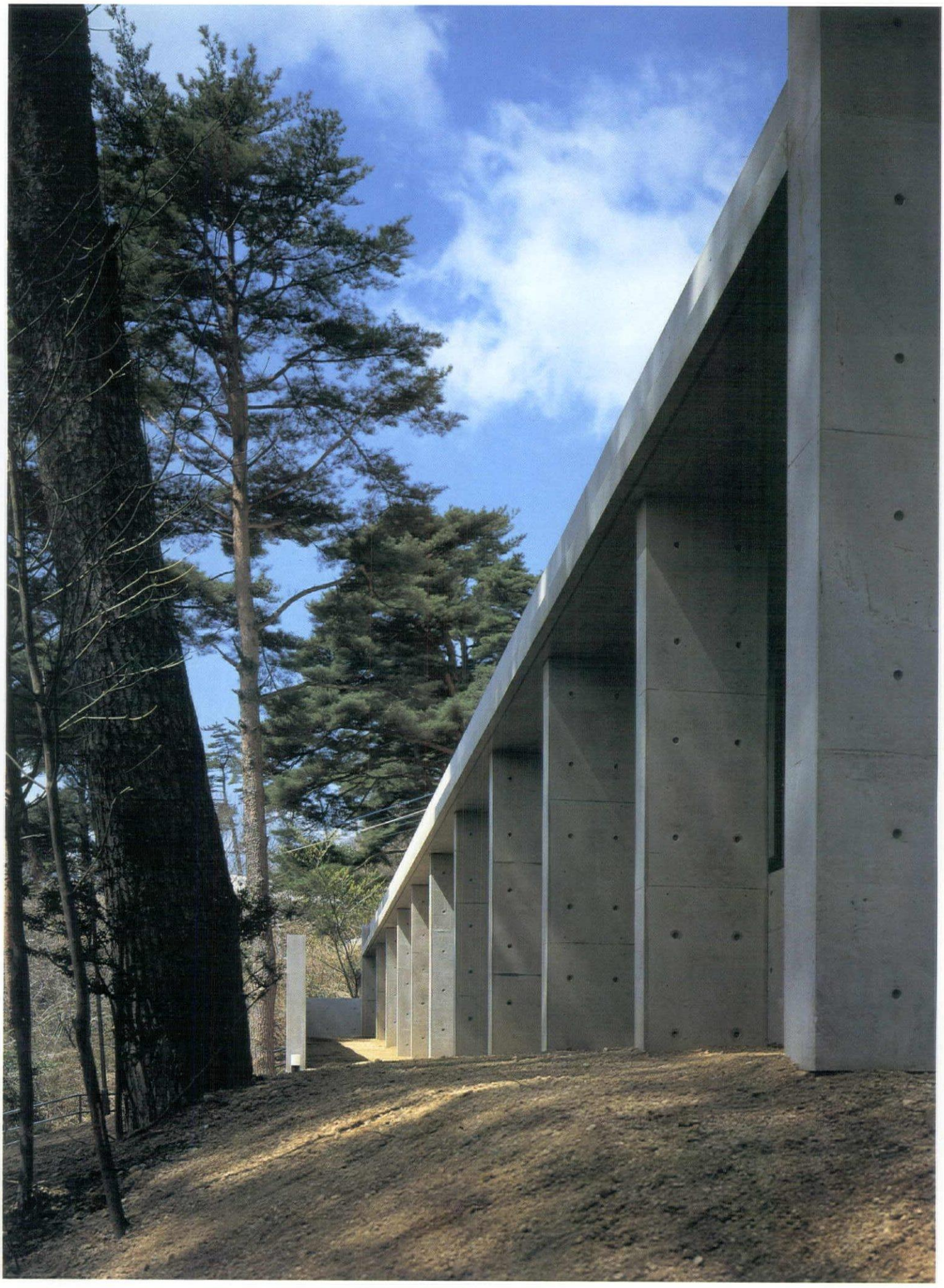
In order for a person to live independently in a confined space called dwelling, the fundamental principle is not to infringe upon the individual's privacy. To that end, the territoriality of an individual must be clearly defined, but at the same time, it is important that each space has also fulfilled its living function.

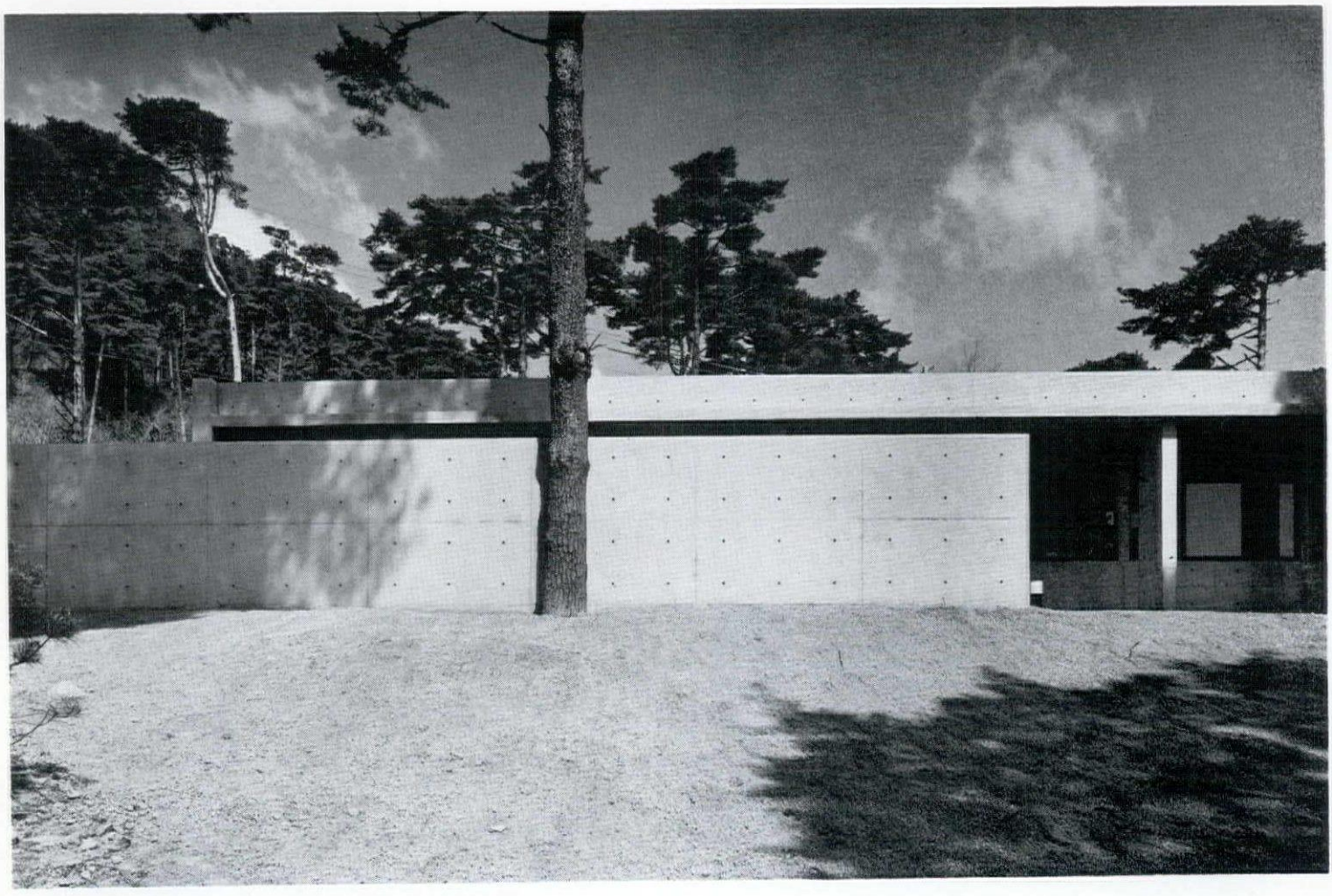
In this residence, the public space has been placed in the north volume, separated from the private spaces in the south. Moreover, furniture has been set in each room to shape the living. They are all made by simple production method. It may have been influenced by the Shaker furniture which I saw long ago in the United States. There, the functions had been crystallized in the pertinent use of materials and the simplicity of forms. The beautiful proportion based on symmetry has been supported by the technical practicality, with every excess completely eliminated. The simple and humble atmosphere provides a virtuous order to space. The simplicity in life and form pursued to their limits are fresh when seen against the diversified daily scenes of today. Though it is hard for me to accept the life-style centered around religion, I was overwhelmed by the strong will for living brought about by the simple forms. And quoting from the Shaker's theory, "Beauty rests on utility" would remain immortal.

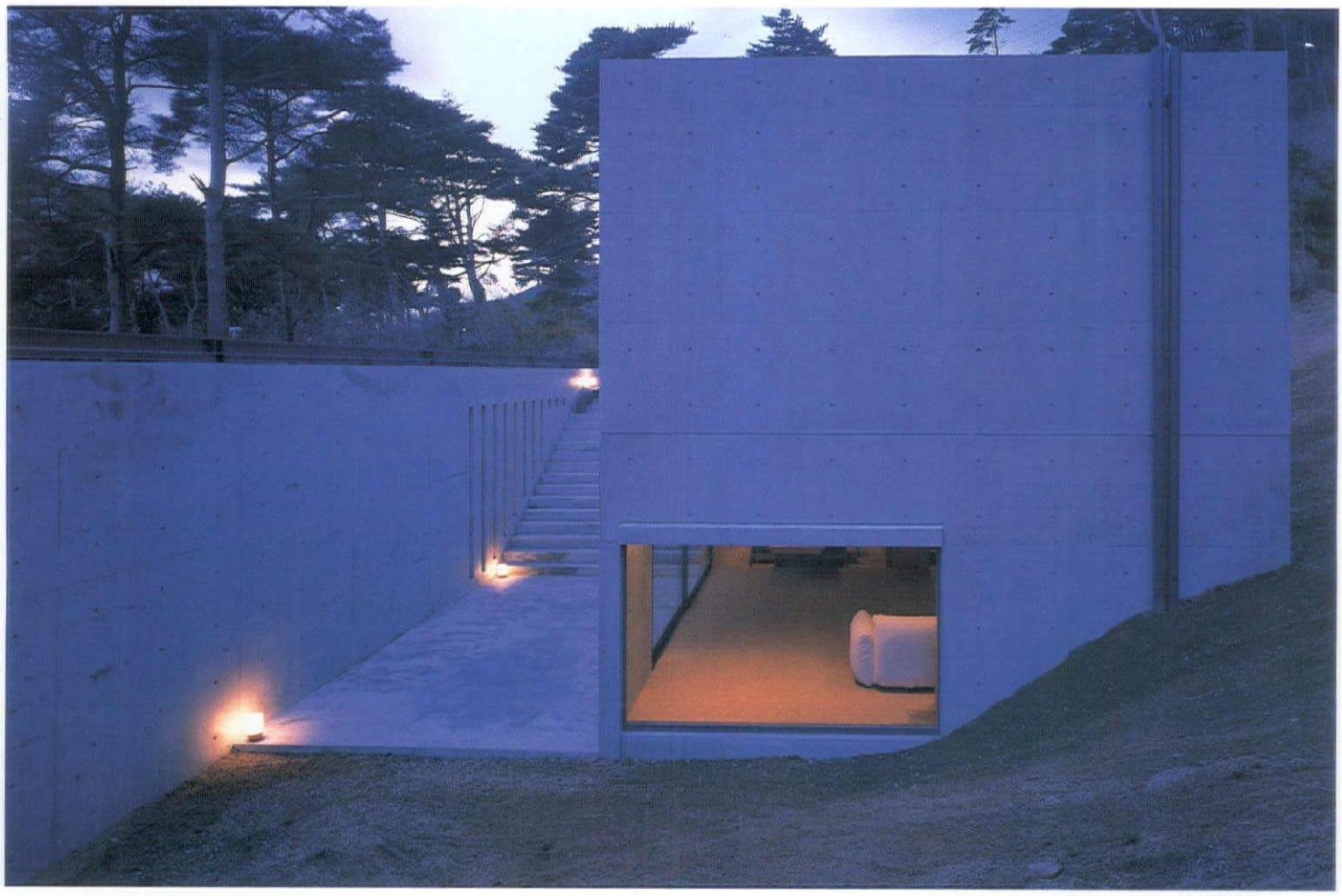
Ever since the "Row House Sumiyoshi," I have explored the rich space hidden behind simple compositions. In other words, it is the exploration of spatial identity manifested beyond the geometric forms of architectural composition. It is an attempt to express the most amount of characteristics through the least amount of means in the overall composition, as well as in the individual parts.

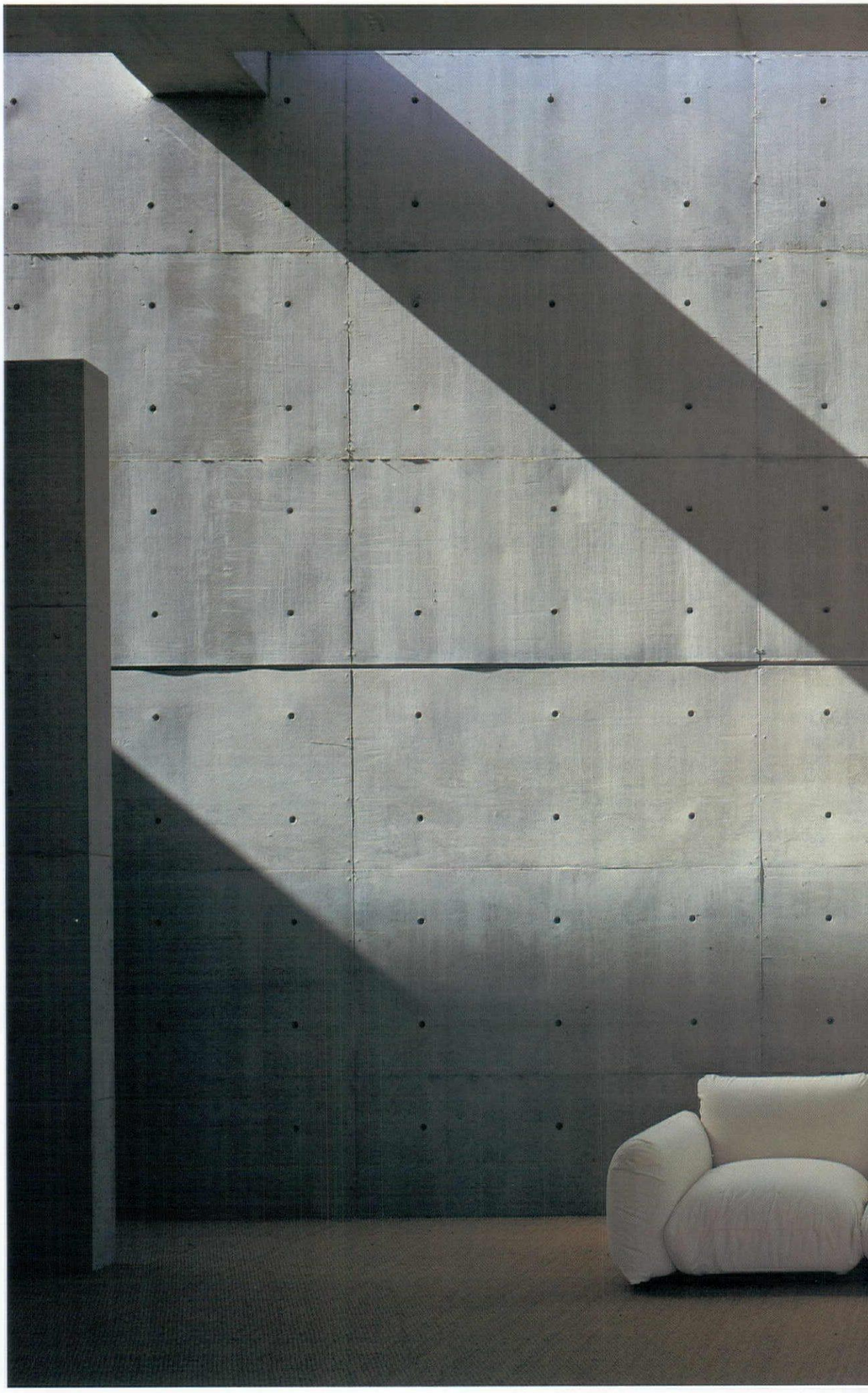
Detail exists as the most important element in expressing the identity. Simpler the form, the hidden detail must be handled with particular care, in order to insist upon its simplicity. In my opinion, the detail holds a prominent part in architecture in that it manifests the creative intention of the author. The problems of the relationship between the ceiling to walls, the openings to walls, and walls to the floor are endless in the design process. I have not been able to grow out of my long training in manual art; and therefore, I can not detach a compositional part from its whole. The assembly of parts achieves a whole, and the whole consists of a chain of parts. Thus, to me, the detail is an element which achieves the physical composition of architecture, but at the same time, it is a generator of an image of architecture.

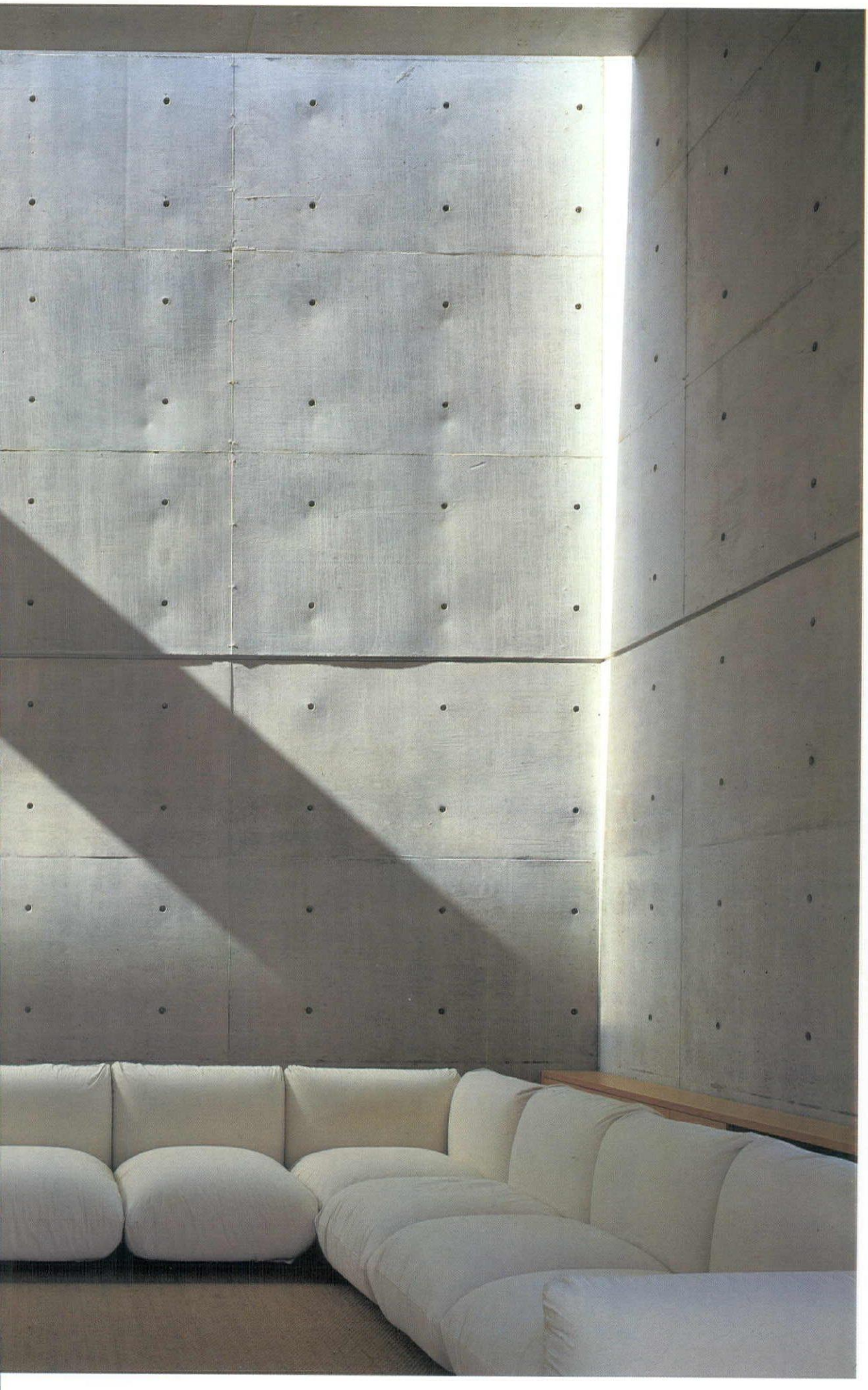




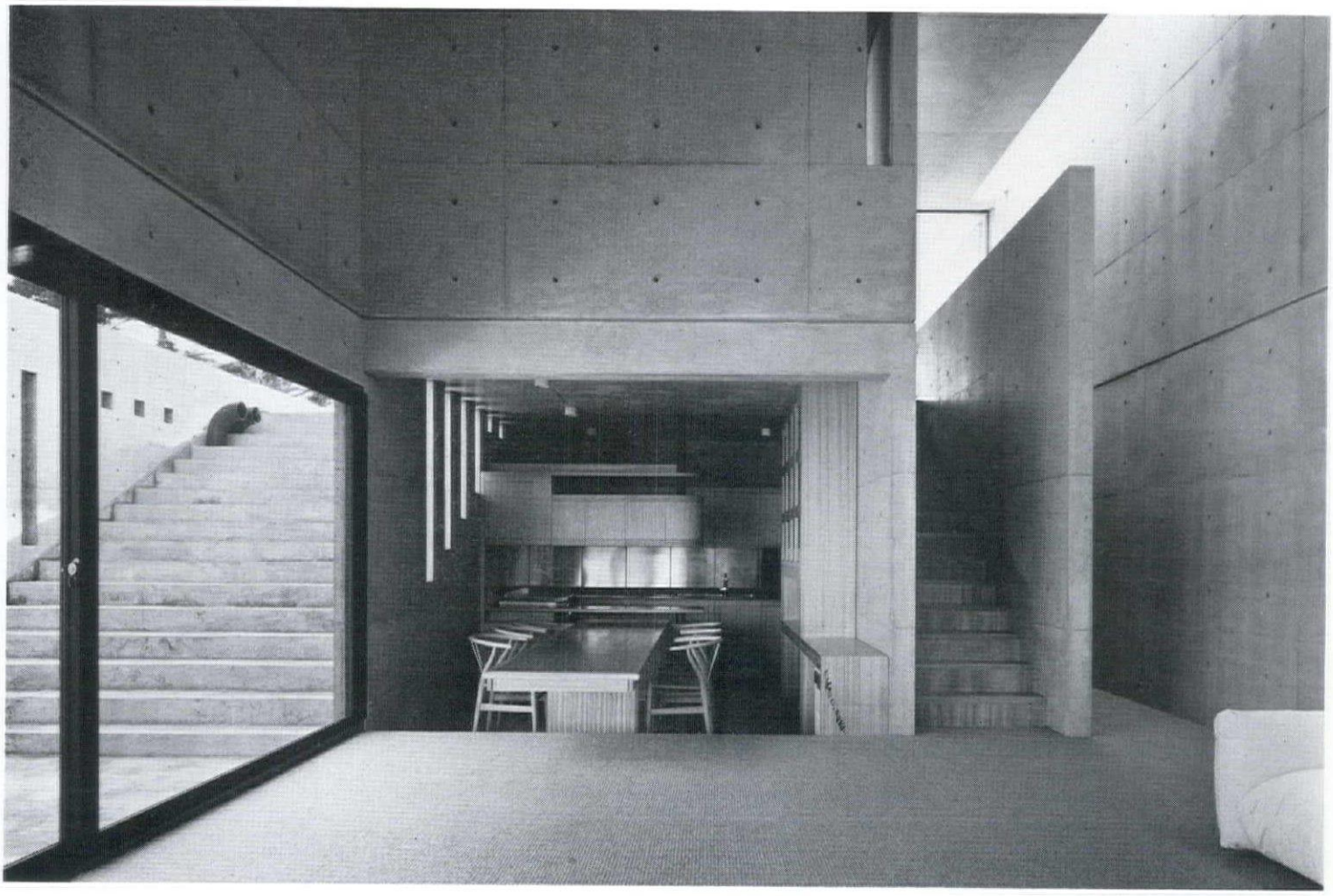






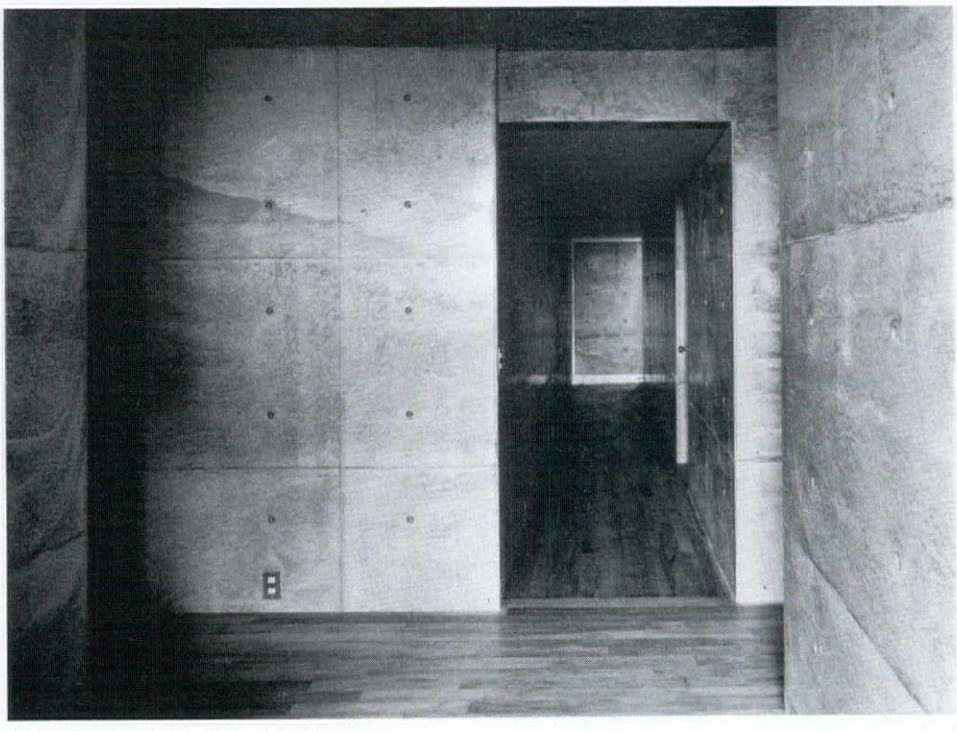


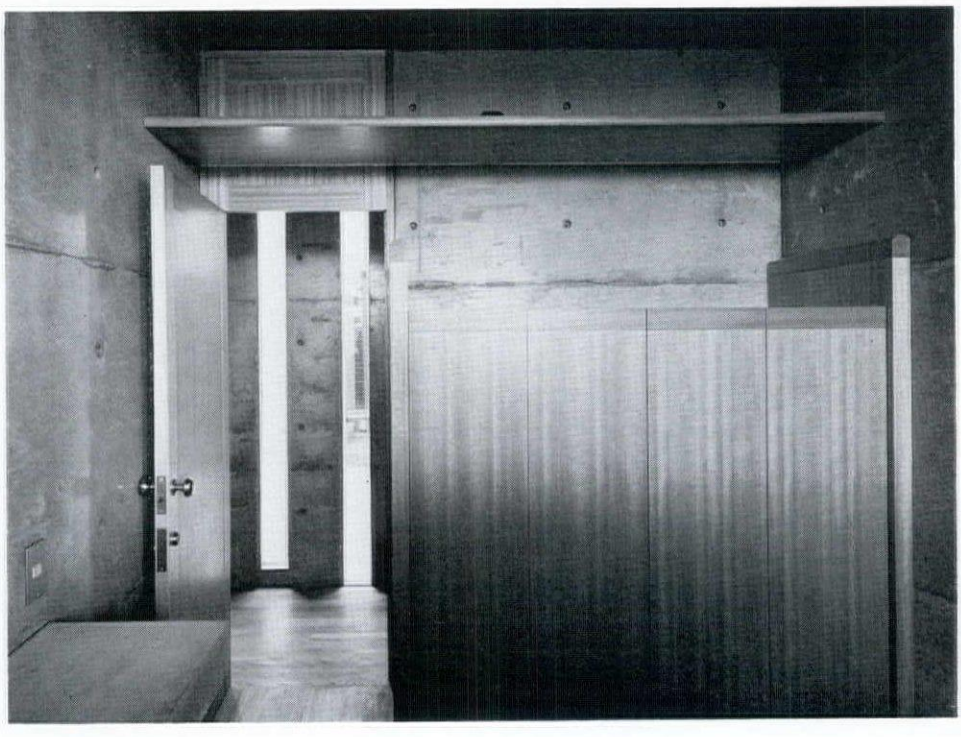


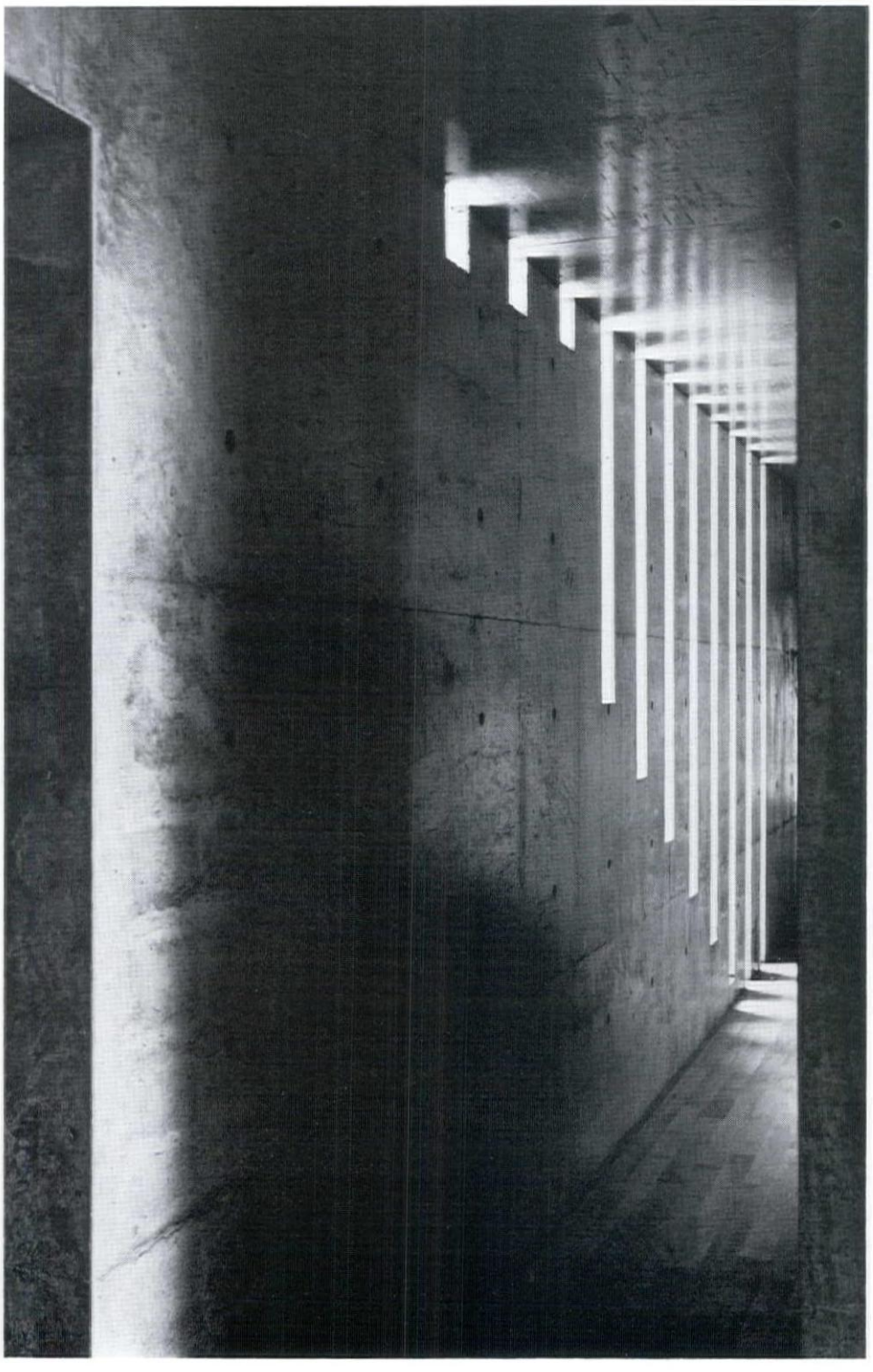


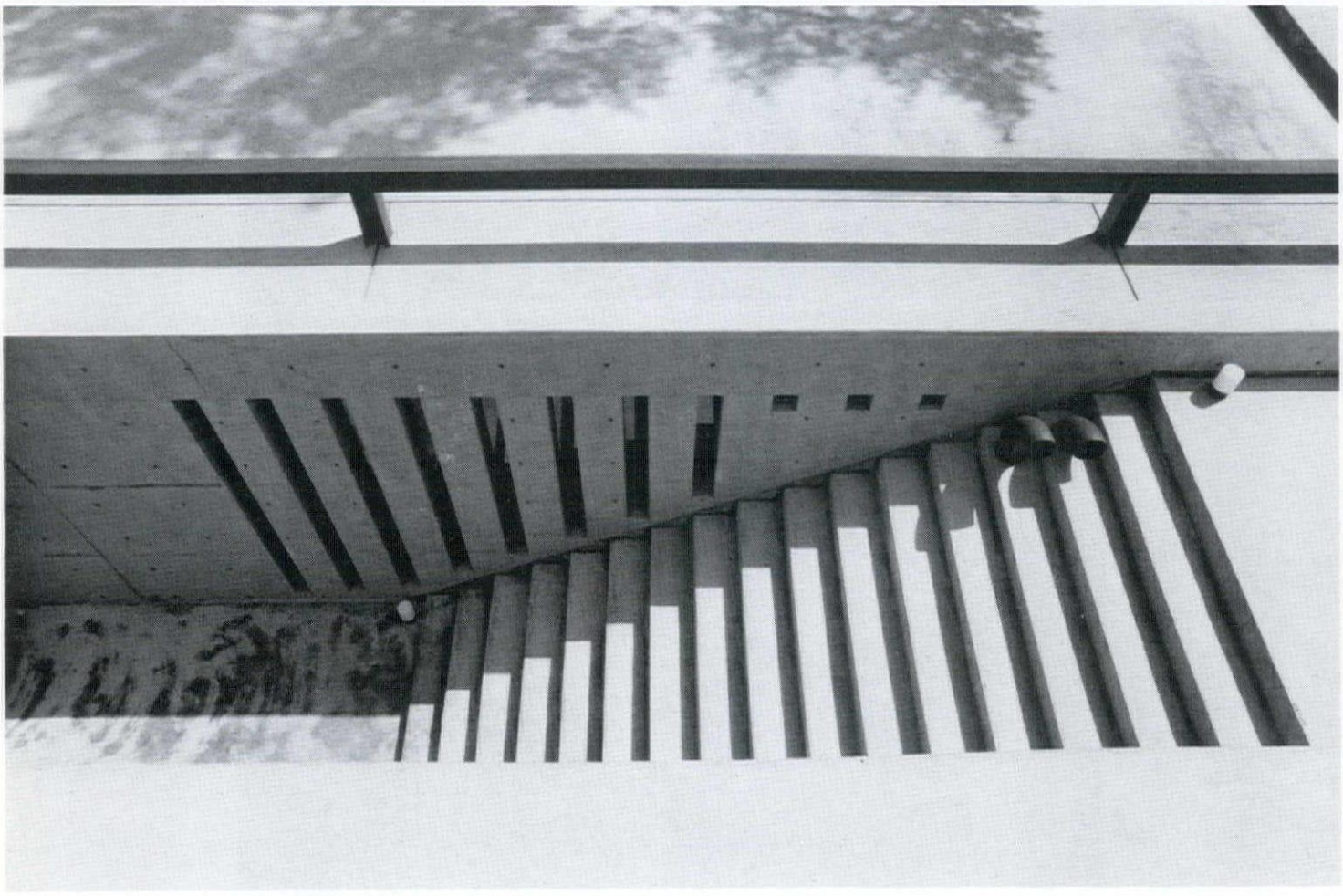


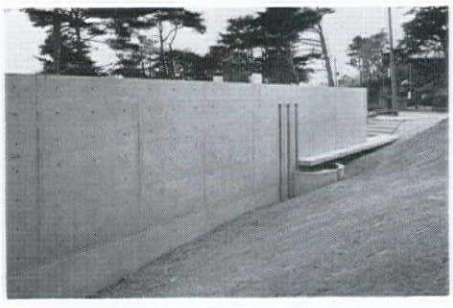


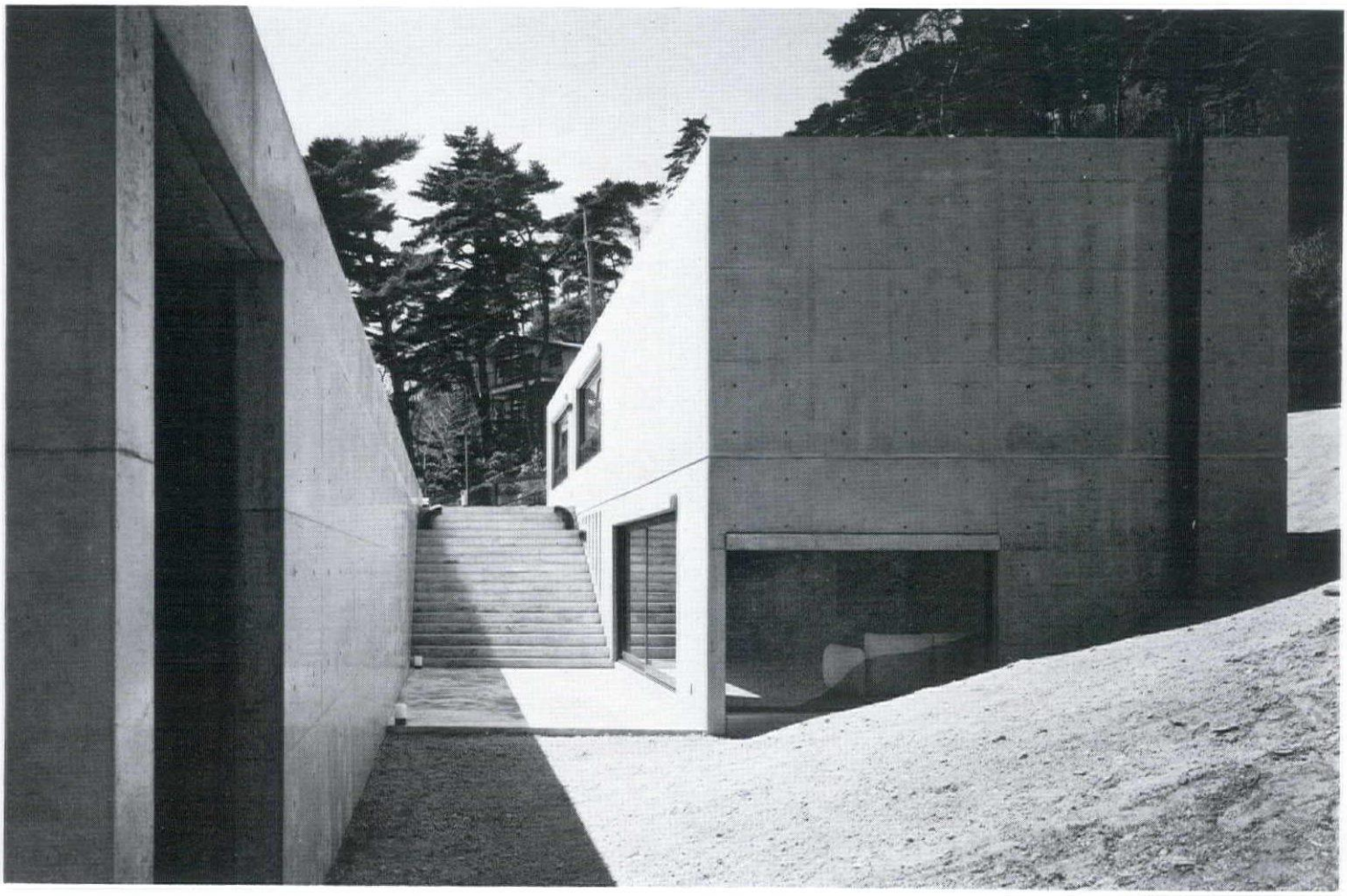


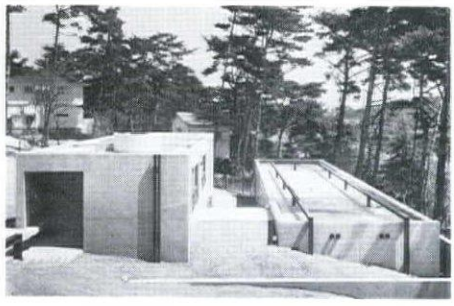












松本邸 和歌山市・和歌山

Matsumoto Residence 1980

日本の現代住宅としては，敷地・建物共に極めて大規模なものである．　松本邸は市街地に，福邸は，農地の目立つ郊外に立地する．　同一都市に位置し，とりとめのない風景の中で，建築が自立した固有の風景を獲得することをめざしてつくられた．　両者に共通して用いられたガラスブロックは，石原邸以降，壁の材料として用いられている．　ここでは，対峙する2面がガラスブロックで構成された，二方から光の来る，柔らかなスペースをつくることを試みた．　このスペースでは，光は，トップライトから射し込む時に現わす強い象徴性を失い，ガラスブロックの特性上，方向性も失っている．　そして，空間の総てを包み込みつつ，優しい表情を漂わせている．　朧(おぼろ)げな陰影は，形態のもつ彫塑性を失わせ，立体感・重量感・存在感を消失させる．　人と人，人とモノ，モノとモノが，明瞭な輪郭をもった関係から，輪郭の無い意味論的関係へと移行している．

松本邸は，ふたつのブロックより構成される．　それぞれは，5,2m×5,2m を基本単位とするコンクリート打ち放しのフレームで構成される．　7,8m×7,1m を単位とする2連のフレームが，これを連結している．　連結するフレームには，ガラスブロックの壁が挿入され，コンクリートのフレームの輪郭が示す強い形態を，全体構成の中で，曖昧にしている．　ここは，2層分のホールとして，接客スペースに使用されている．　空中に架け渡された細長いデッキは，体現する強い象徴性によって，流動する光の中にあるこのスペースに非日常性をもたらした．　そして，このホールを原点として，建物は，機能的にも心象的にも，内部風景を分解していく．

福邸は，同形の2棟より成り立っている．　それぞれの棟は 4,2m×4,2m を基本単位とし，2層にわたる田の字形の正方形のフレームで構成される．

2枚のガラスブロックの壁は，これらを連結し，コンクリート打ち放しの壁が，敷地を取り巻き，規定している．

ガラスブロックの壁は，中庭を受けとめる平面と，コンクリートのフレームを包み込む，外周の曲面である．　このふたつの壁の狭間に生まれたホールは，軸対照に配置されたふたつの階段と，その中央に孤立する円柱によって，この住宅に固有の風景を生み出している．

中庭は，松本邸では，傾斜をつけられたグリーンとして，敷地の形状をかたどっている．　福邸では，人工地盤の上につくられ，下部をパーキングスペースとしている．　そして自然の仮象として，建築の幾何学的構成をより強調している．　共に，周囲の環境の中で，自立した外部風景を形づくりつつ建築と関わっている．

As contemporary Japanese residences, the sites and the buildings are rather large in scale.

Matsumoto Residence is located in a city center, and Fuku Residence in a suburb where agricultural fields could be spotted. Existing in the same city, and being surrounded by incoherent scenery, it was hoped for the architecture to acquire an independent and unique setting of its own. The glass blocks used as a common element in both designs has been applied as a wall material since the Ishihara Residence. In the two residences presented here, I tried to create effeminate space by means of diffused light being admitted through the two glass block walls placed face to face. In these space, the light loses its strong symbolism which is characteristic of the direct light entering from a skylight ; but also loses directionality, due to a nature of the glass blocks. Instead, the light enwraps each space in its entirety, and suggests a warm impression. Dim shadows deprive the forms of their plasticity and do away with solidity, massiveness, and existence. And the relationship between a person to a person, a person to a thing, a thing to a thing transforms from a formal one to that which is more sentient.

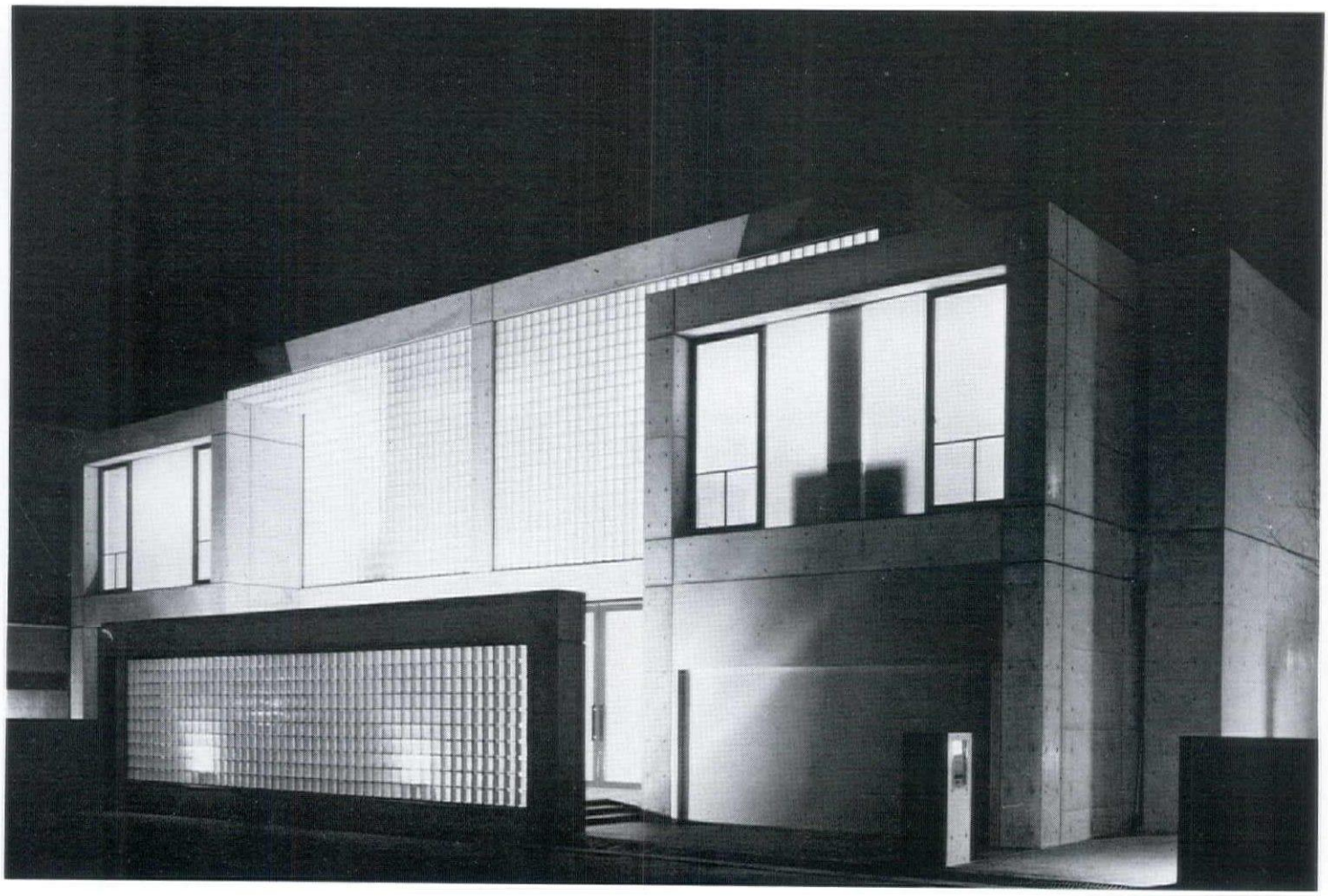
The Matsumoto Residence consists of two separate volumes. Each volume is composed of rigid frames of exposed concrete, having 5.2 meter square grid as the module. The volumes are linked by two sets of frames of 7.8 meter square. The glass block walls are fitted into the linking frames, and by doing so, the strong outline of the concrete frames in the entire composition is obscured. Being a double height hall, the space is utilized as a reception area. The slender bridge which lies in the hall, with its strong symbolism, brings about a novelty to the dynamic and radient space. And from this hall, the interior settings of the building are sorted out both functionally and figuratively.

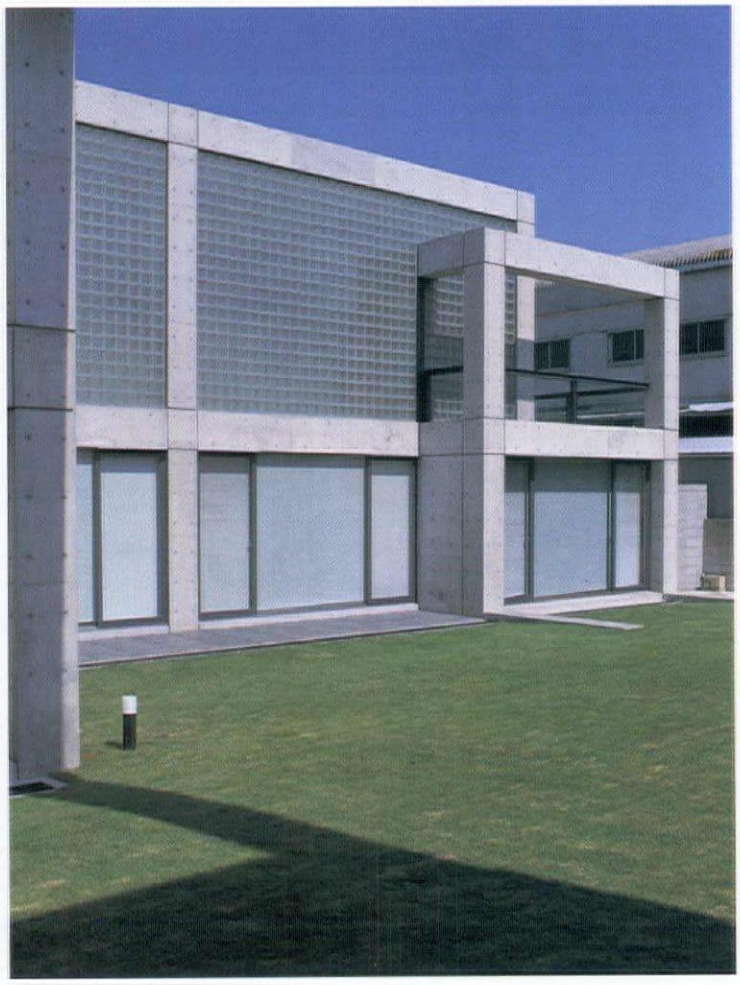
The Fuku Residence consists of two volumes of an identical form. Each volume has a 4.2 meter grid as its basic unit. Four of these square units are arranged to make a larger square, and two of these large squares are placed one on top of another to define a volume.

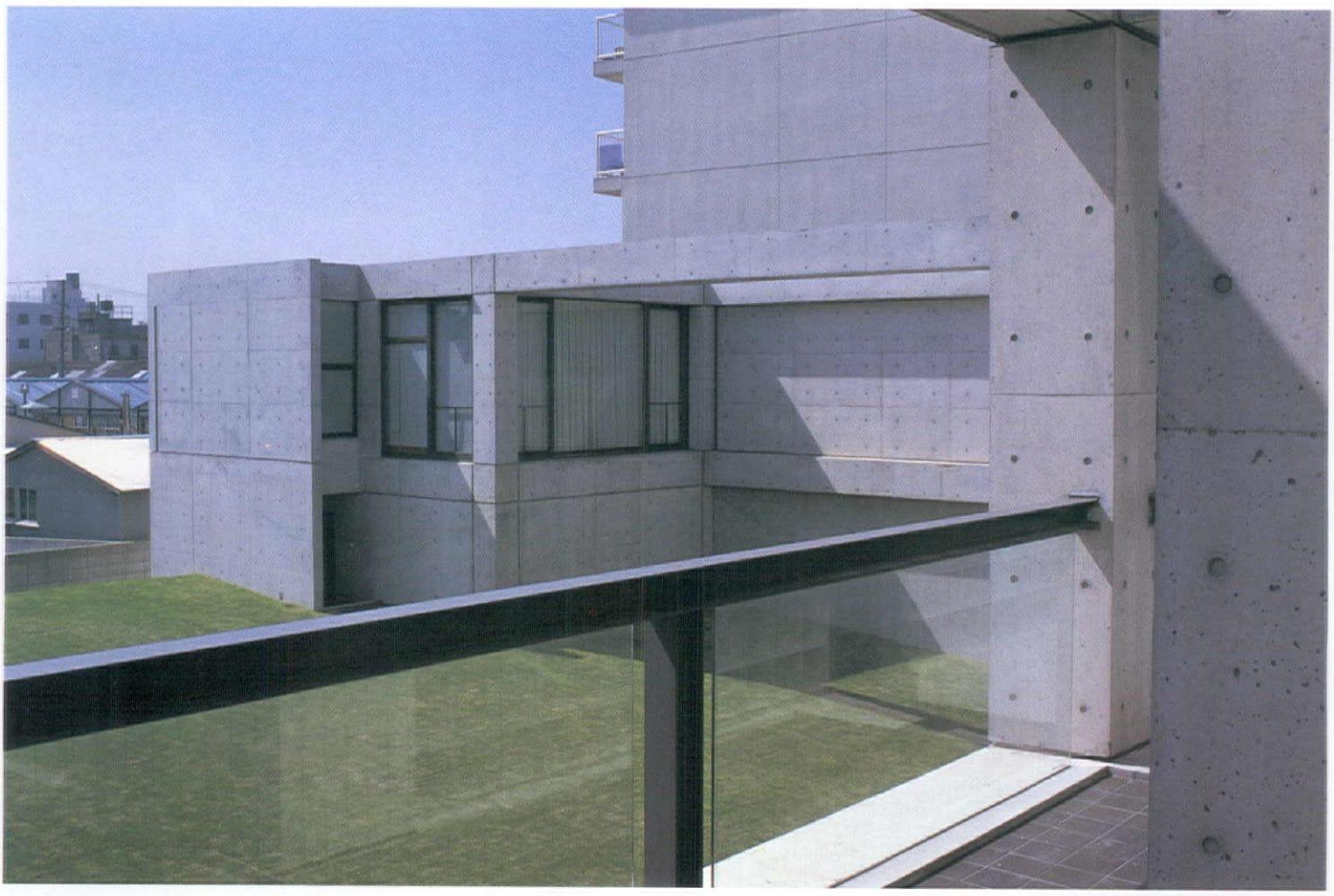
The two glass block walls link the two volumes, and a bare concrete wall encloses and bounds the site.

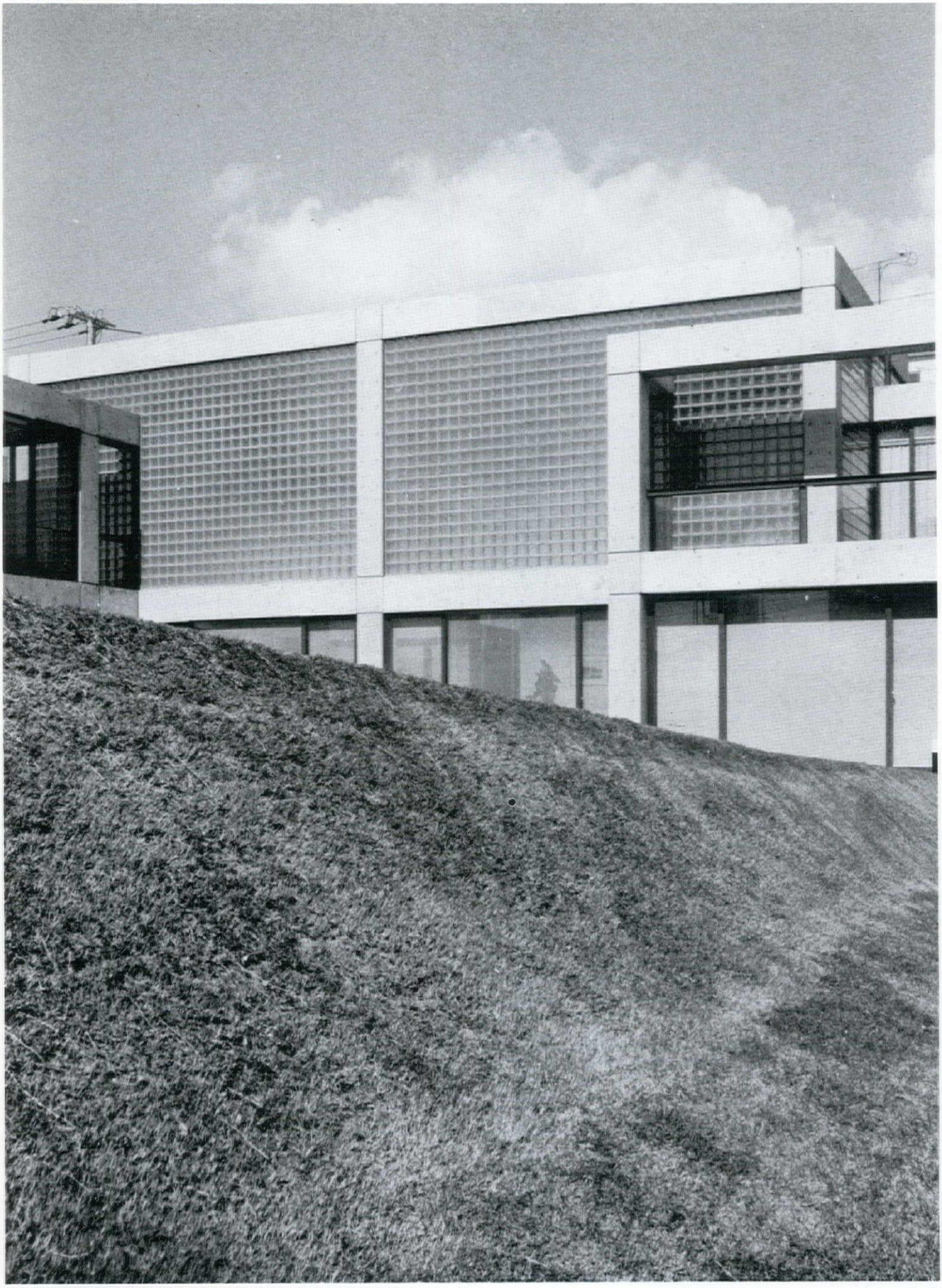
One glass block wall is a flat plane which bears the courtyard garden, while the other is a curved plane that embraces the concrete frames. The two staircases placed in axial symmetry, and an independent cylindrical column placed in the center generate a unique setting for this house.

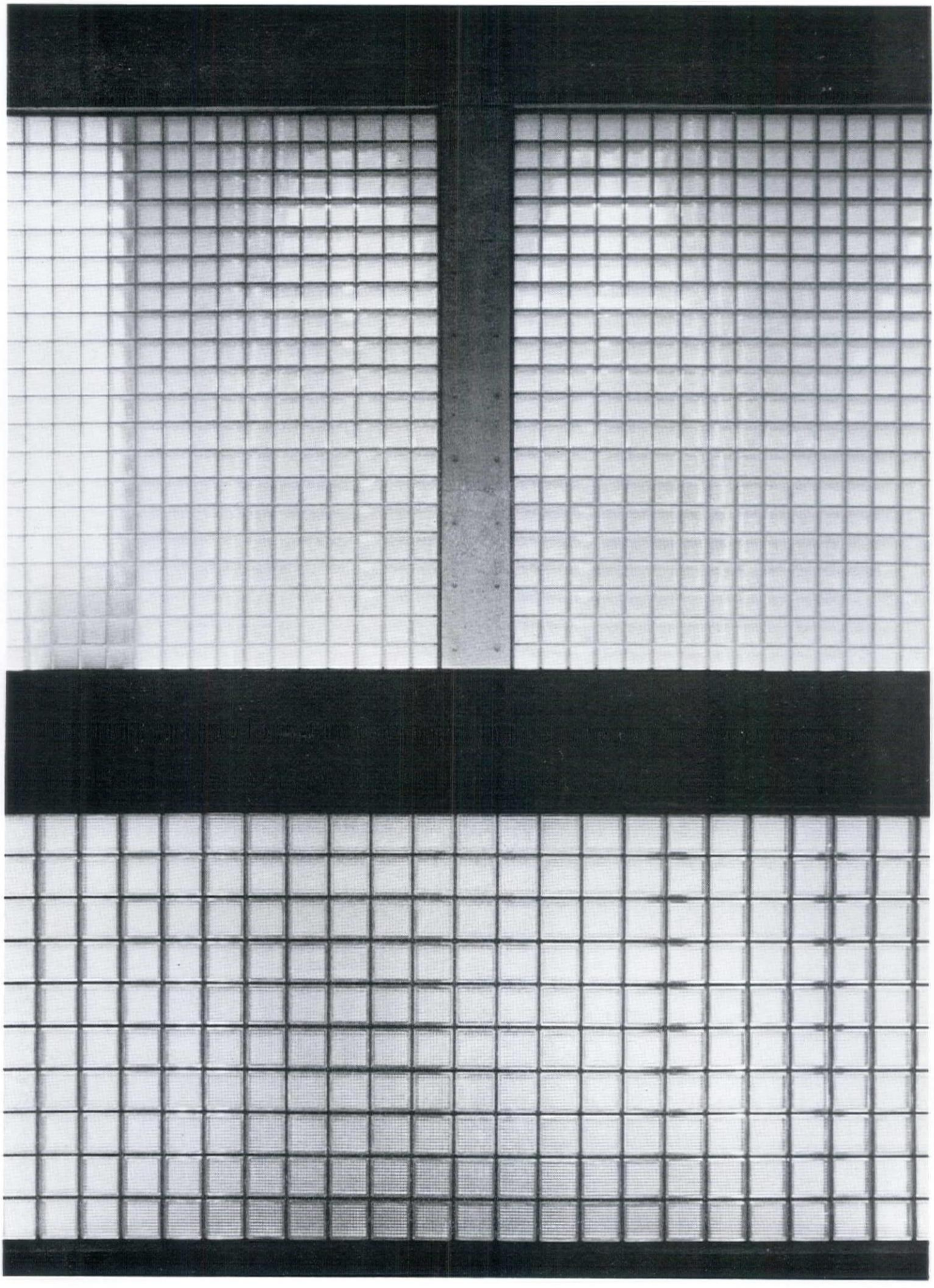
As a sloping green, the courtyard of Matsumoto Residence follow the existing contour of the site. In Fuku Residence the courtyard garden is created on an artificial fill, making use of the underside for parking. While being a symbolic expression of nature, the couryard enhances the geometry of the entire architectural composition. In both residences, the courtyard gardens regard architecture by establishing independent settings in the surrounding environment.



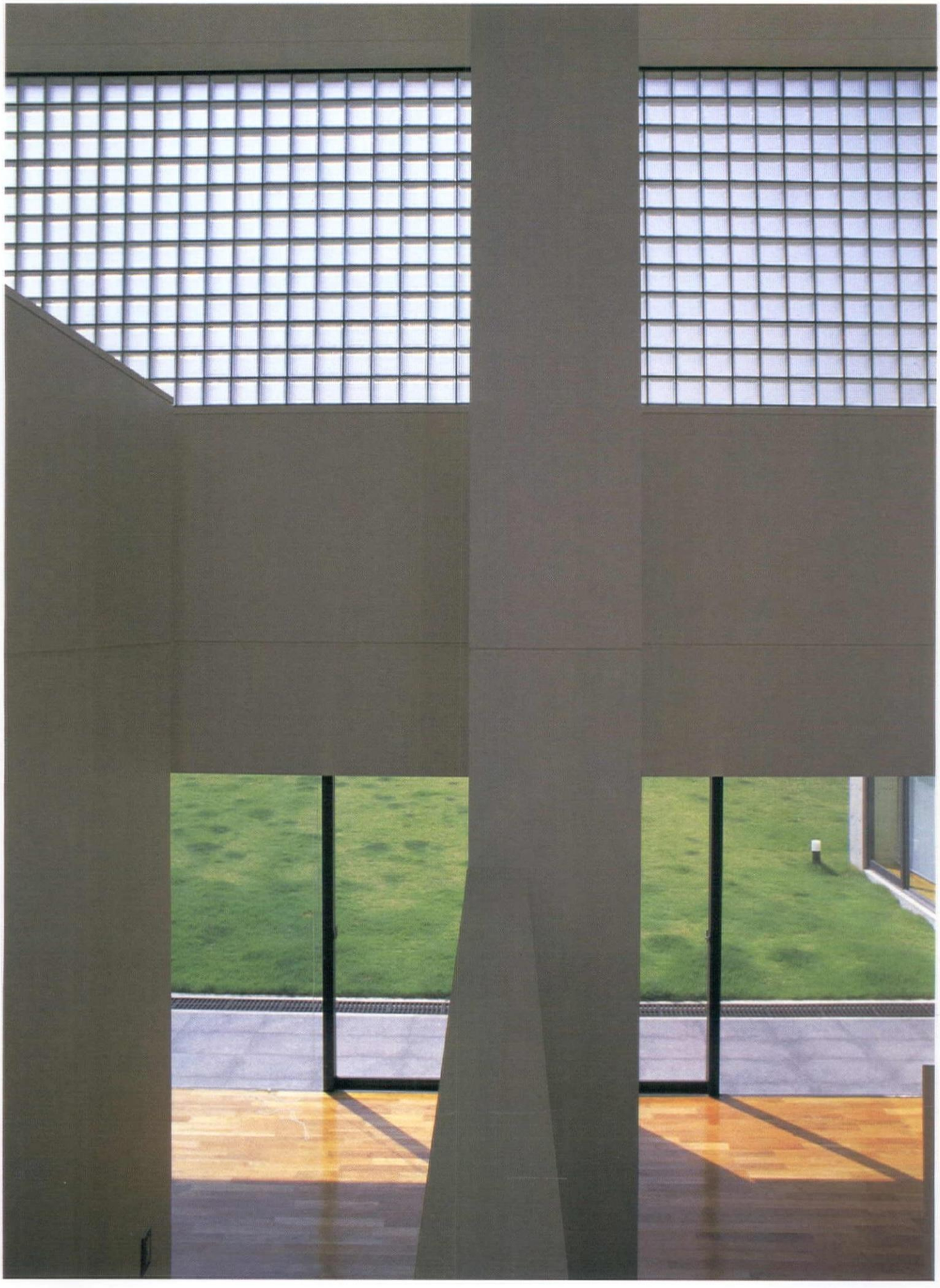


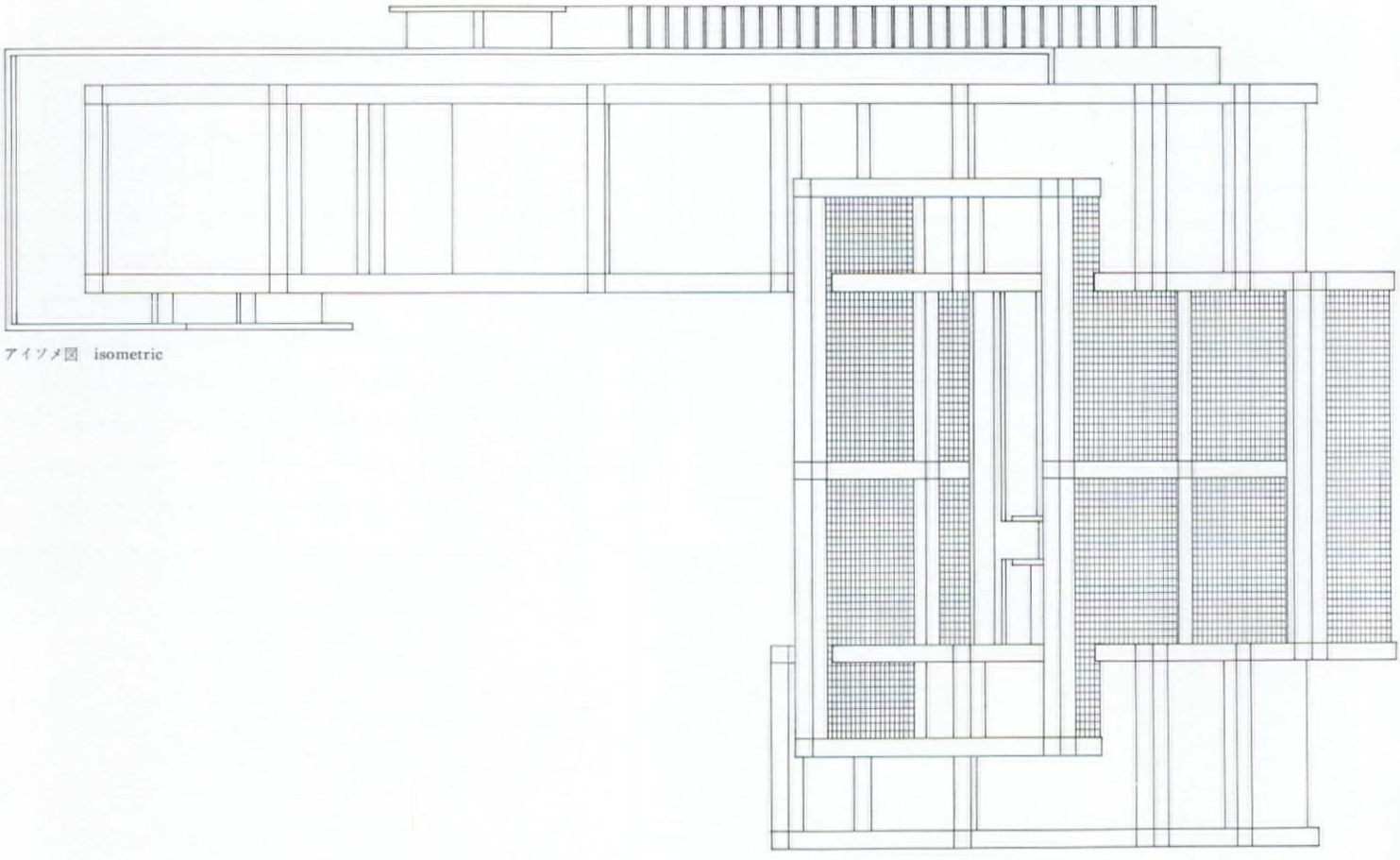




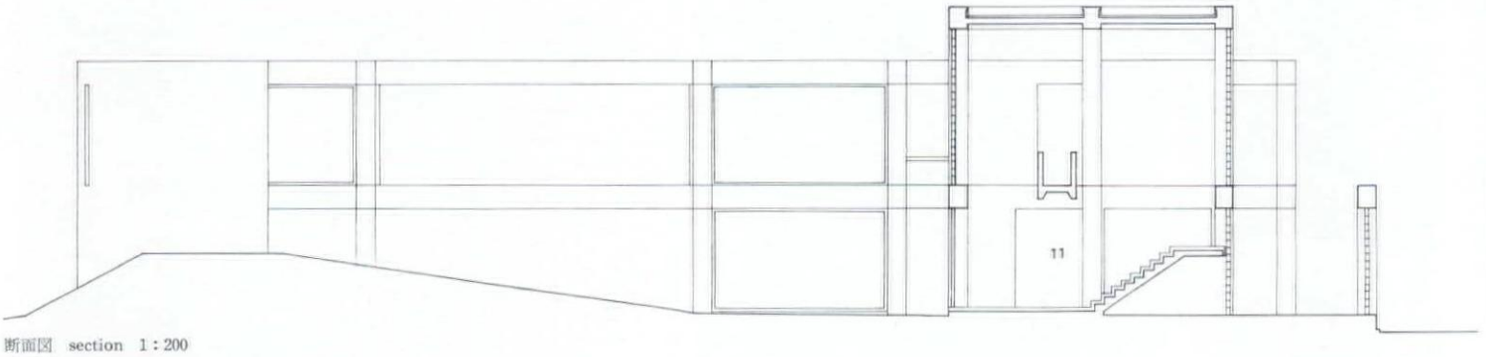






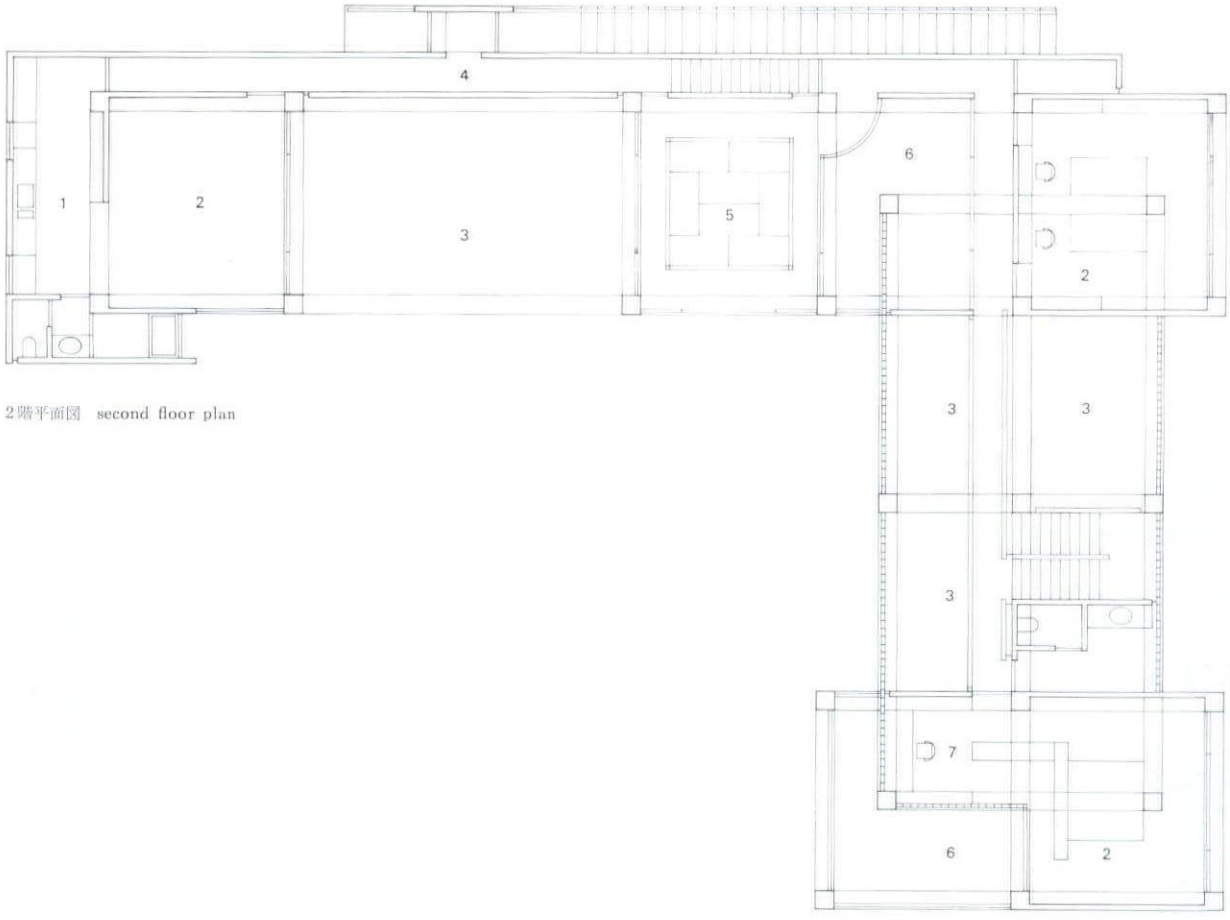


アイソメ図　isometric

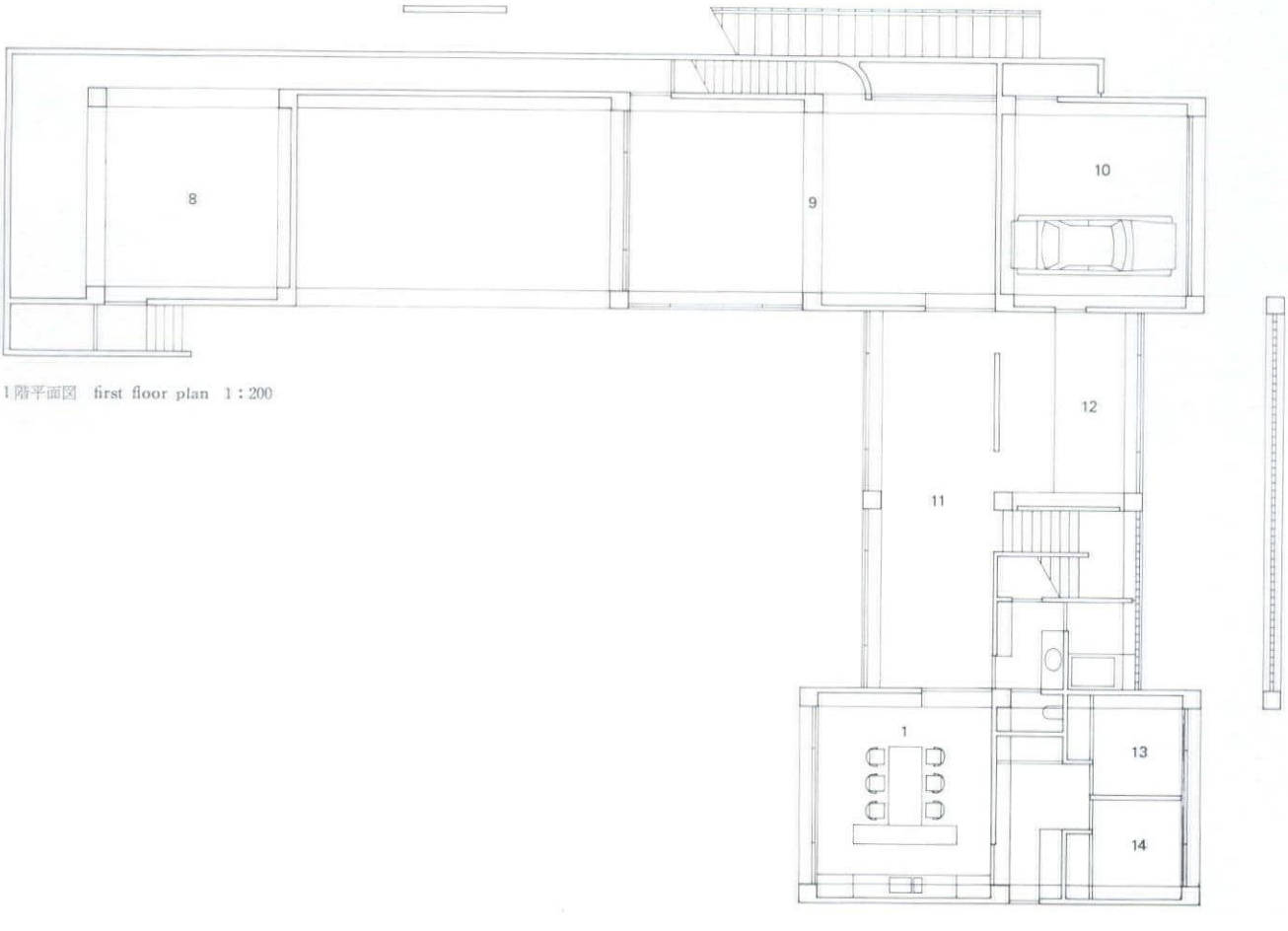


断面図　section　1：200

1　食堂　dining room
2　寝室　bedroom
3　吹抜　void space
4　勝手口　service entrance
5　和室　tatami room
6　テラス　terrace
7　書斎　study room
8　納戸　closet
9　居間　living room
10　車庫　garage
11　ホール　hall
12　入口　entrance
13　予備室　spare room
14　家事室　utility



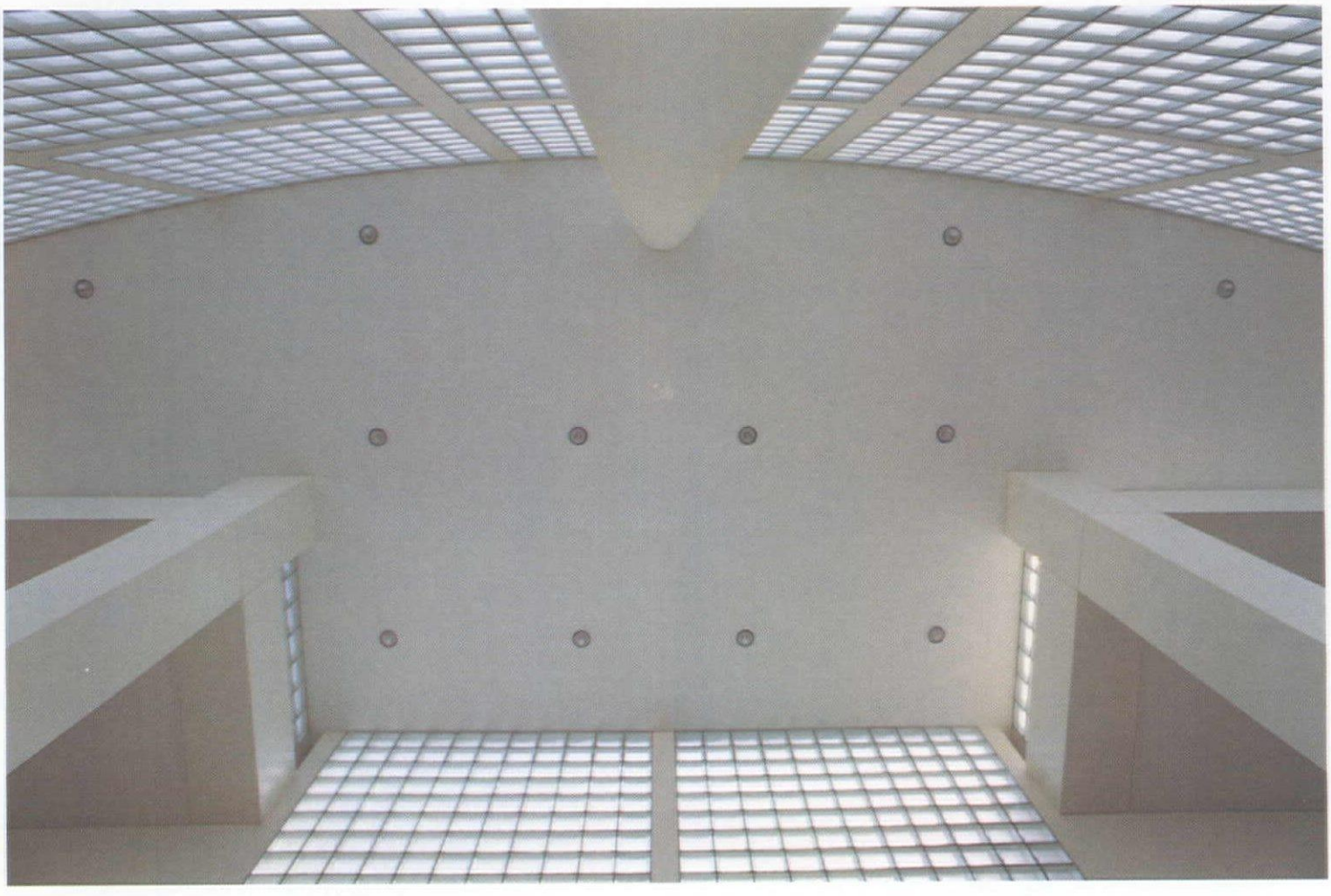
2階平面図　second floor plan



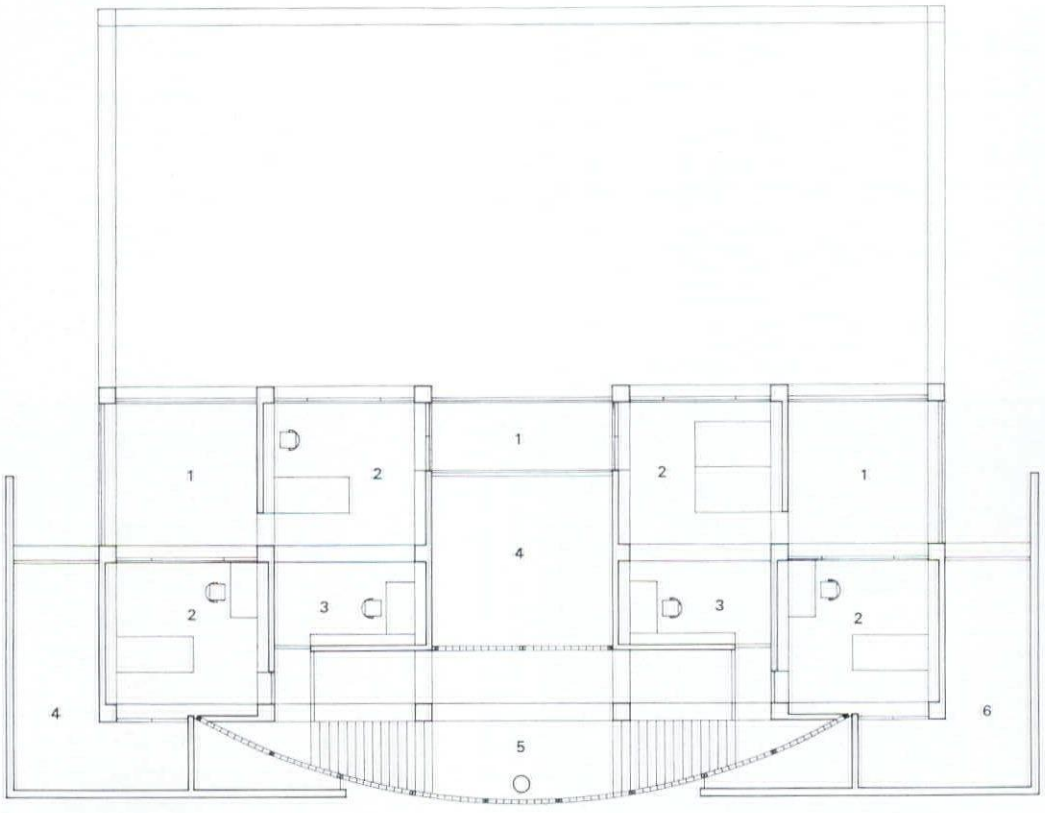
1階平面図　first floor plan　1：200

福邸 和歌山市・和歌山

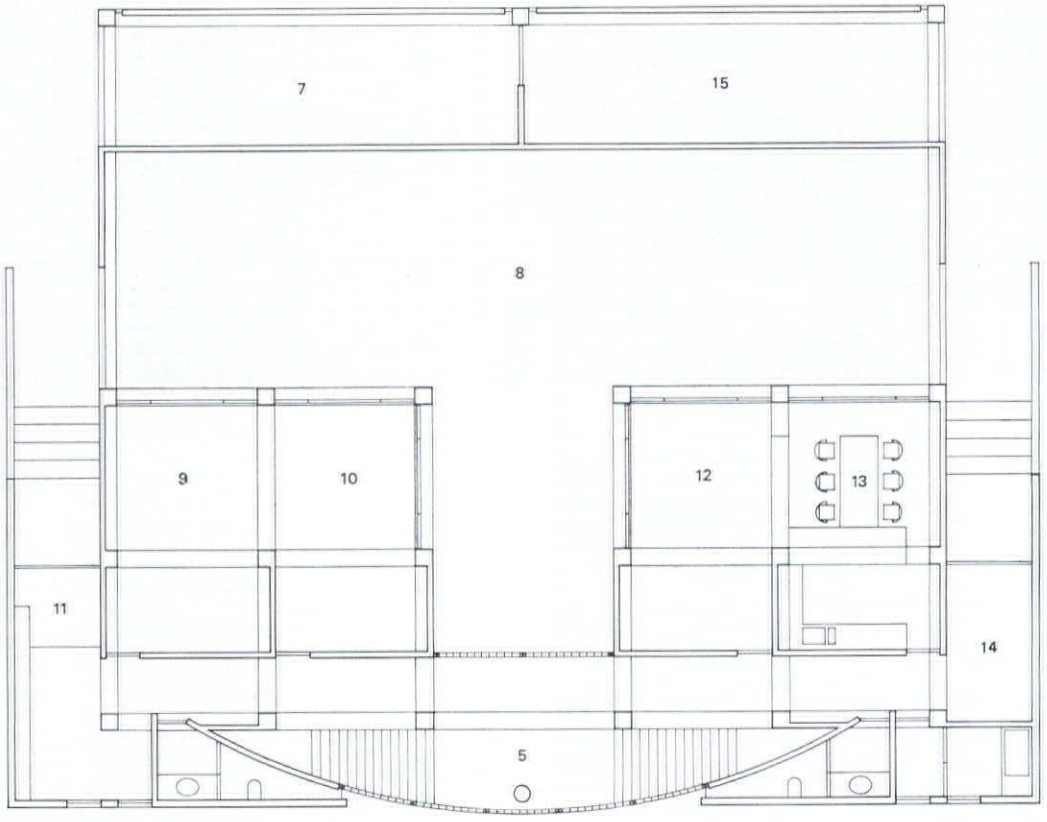
Fuku Residence 1980



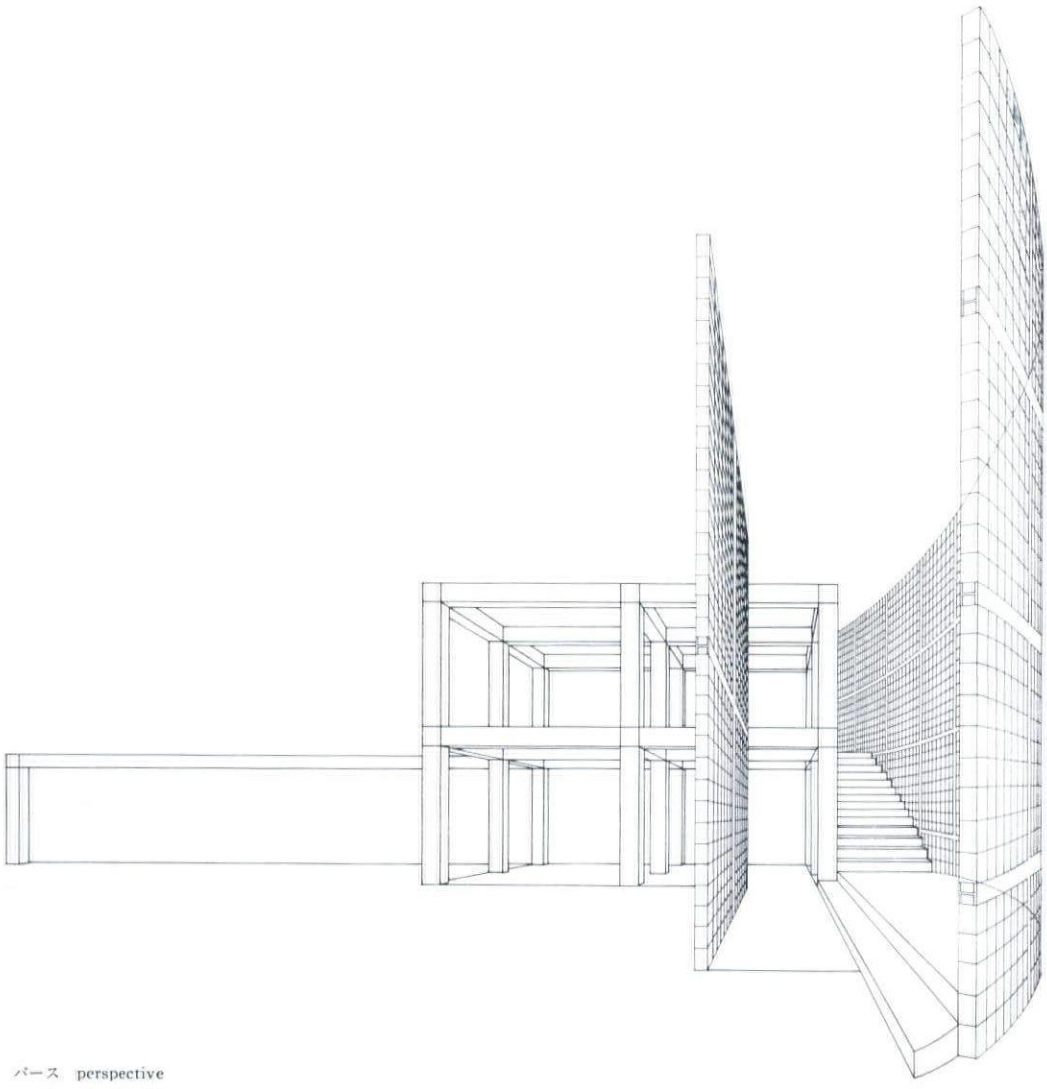




2階平面図　second floor plan

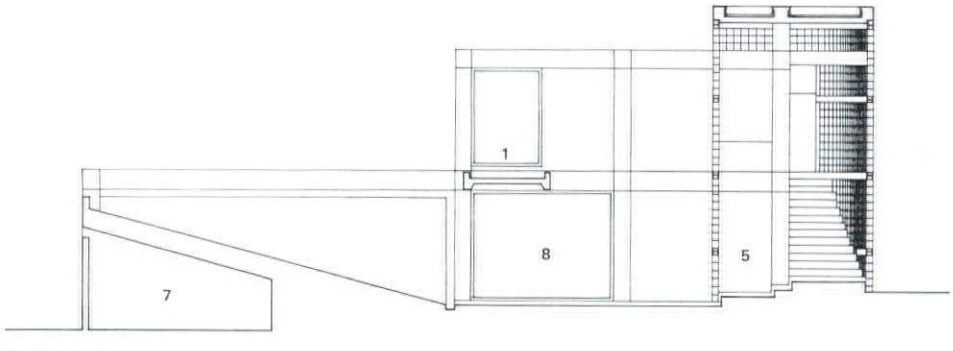


1階平面図　first floor plan　1：200



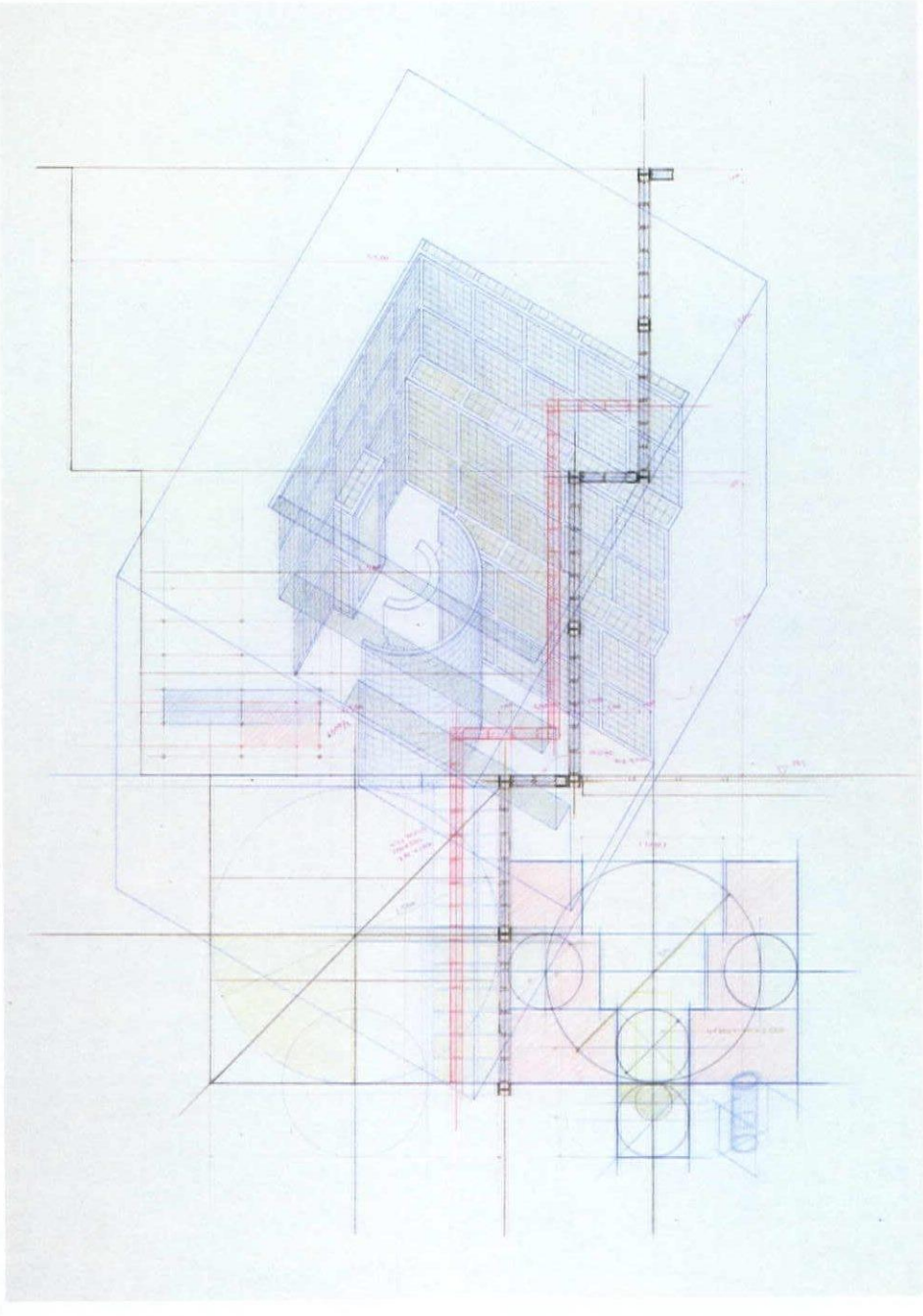
パース　perspective

1　テラス　terrace
2　寝室　bedroom
3　書斎　study
4　吹抜　void
5　ホール　hall
6　納戸　closet
7　車庫　garage
8　中庭　court
9　和室　tatami room
10　応接室　guest room
11　入口　entrance
12　居間　living room
13　食堂　dining room
14　家事室　utility
15　倉庫　storage

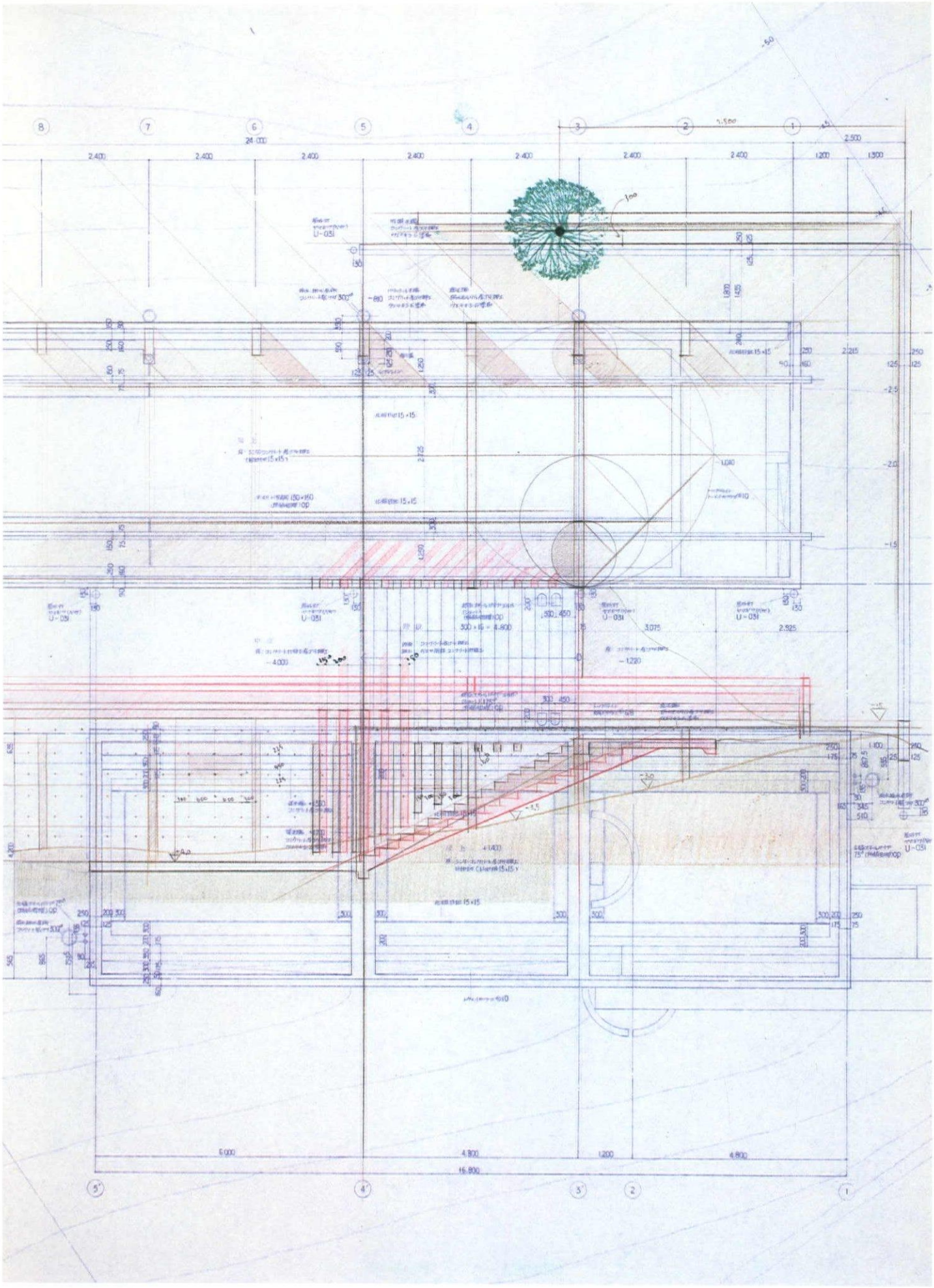


断面図　section

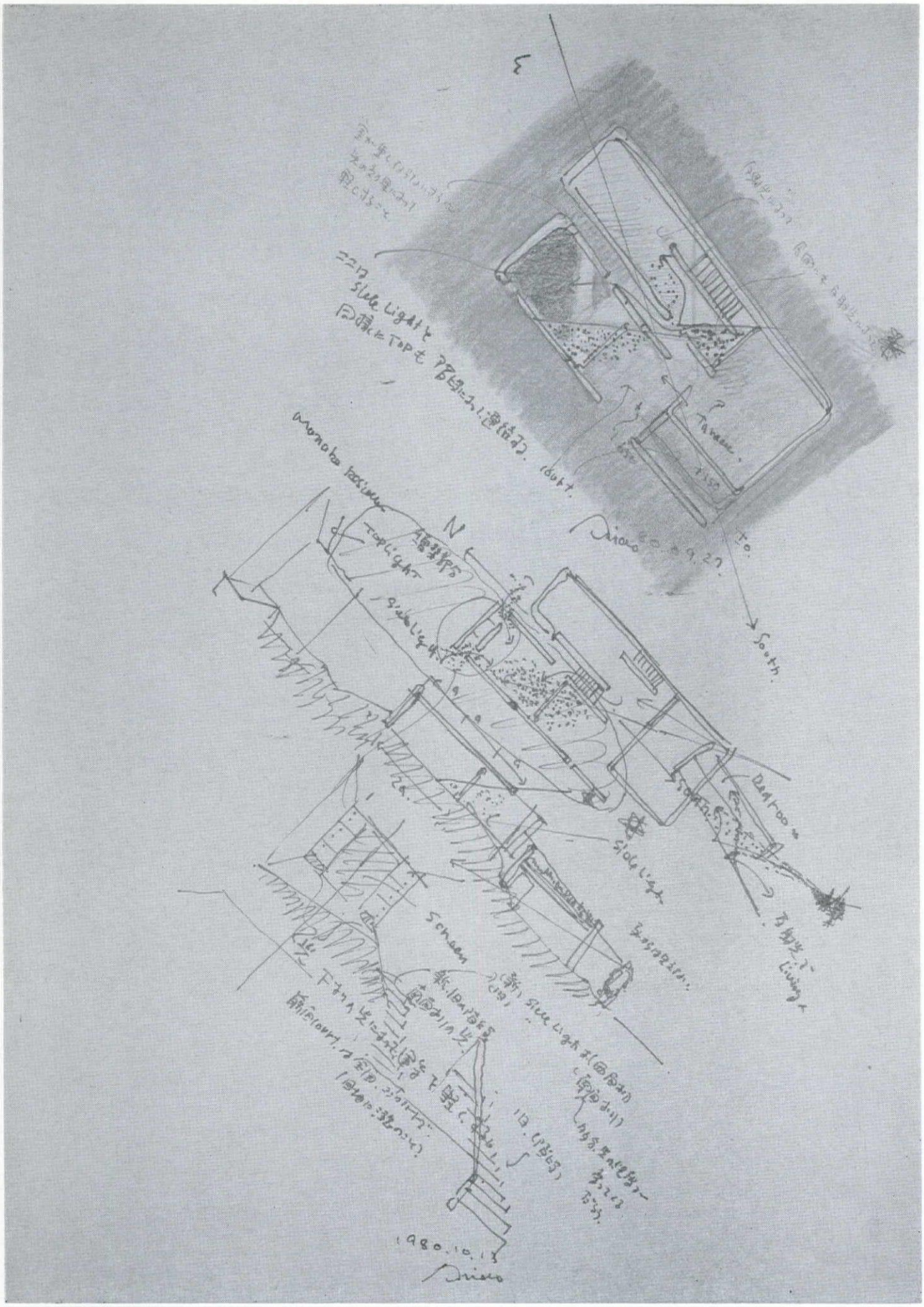
ドローイング
Drawing



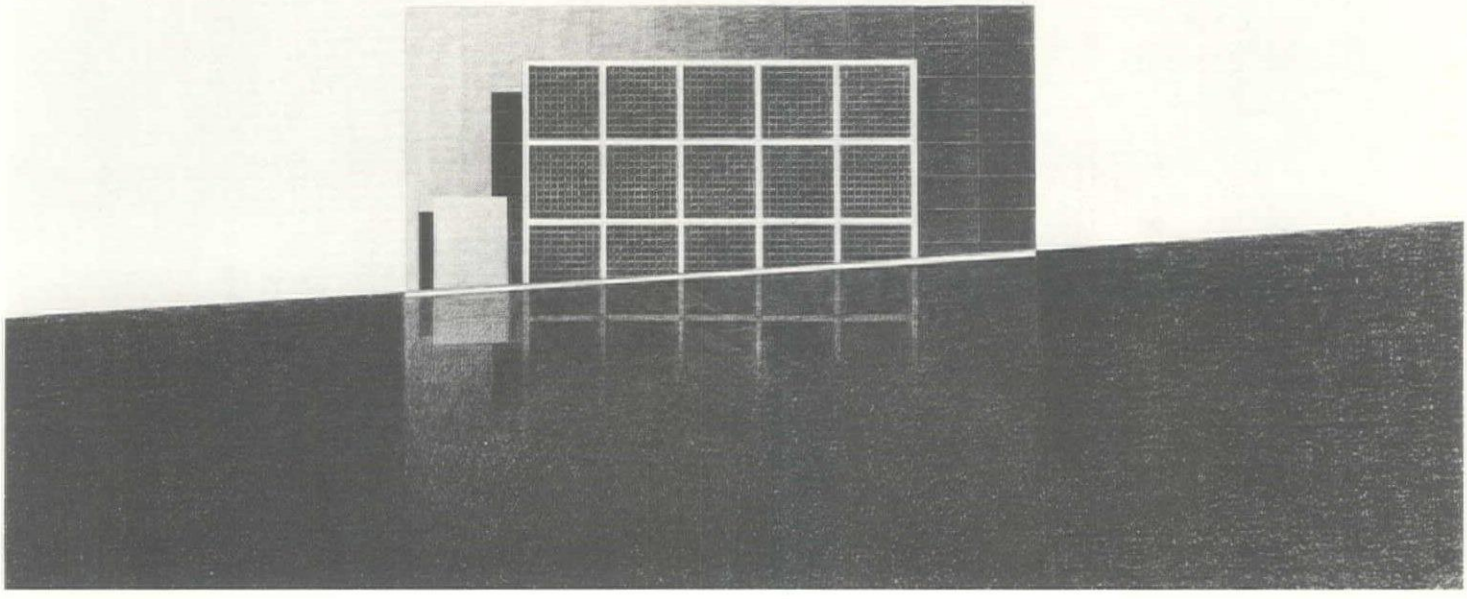
ガラスブロックの家（石原邸）"Glass Block House" Ishihara Residence 1978



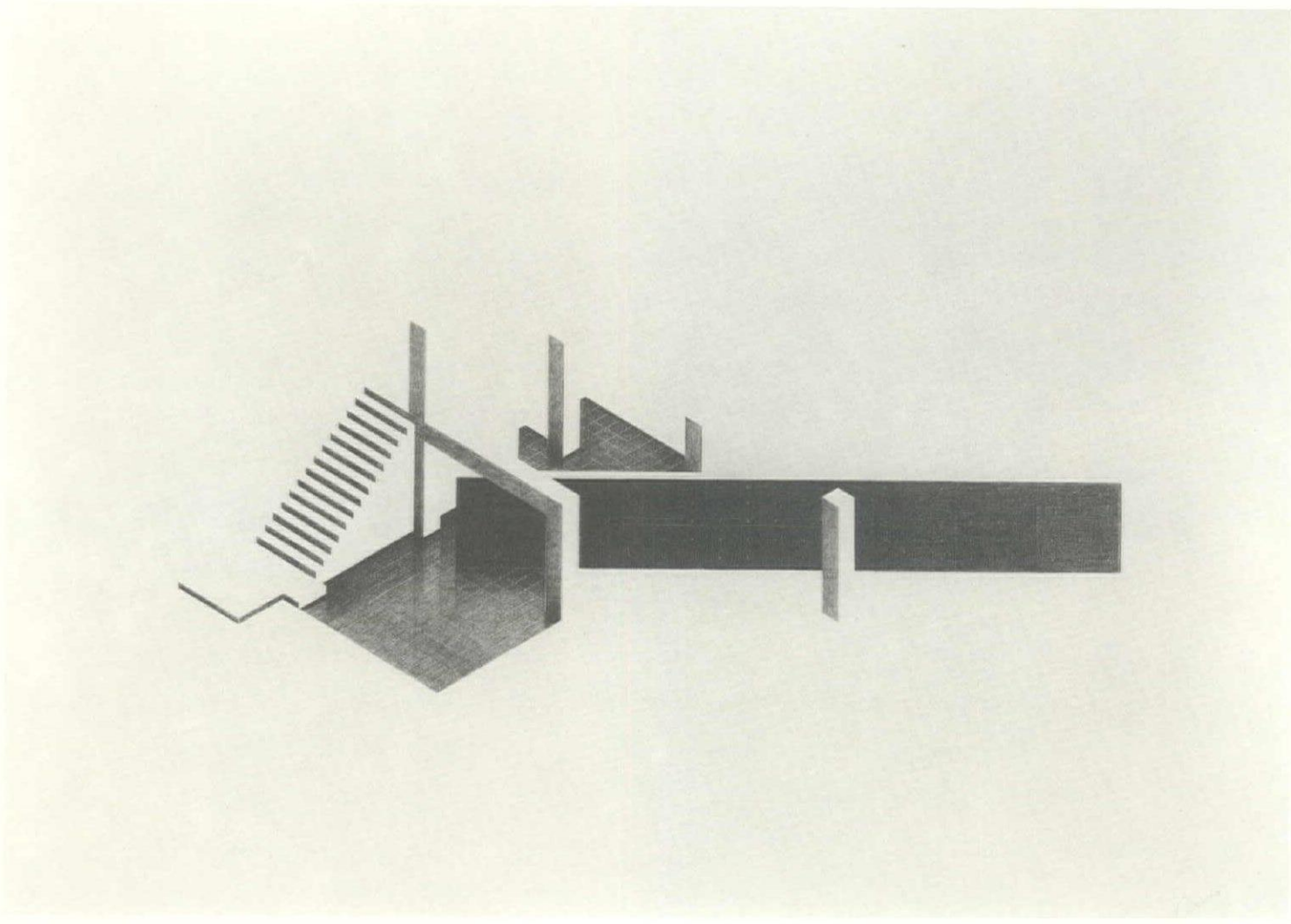
小篠邸，Koshino Residence 1981



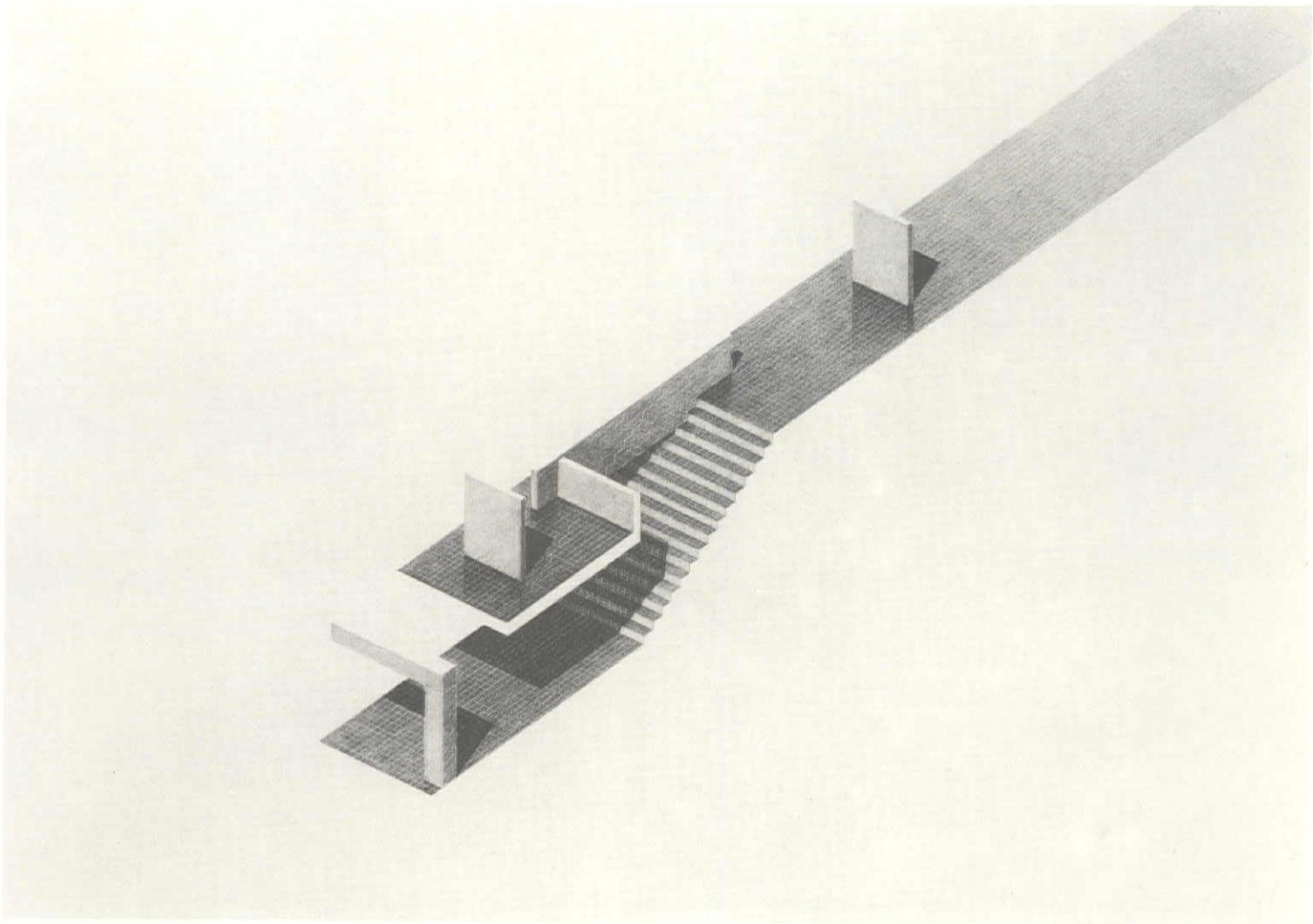
番匠邸　Bansho Residence　1981



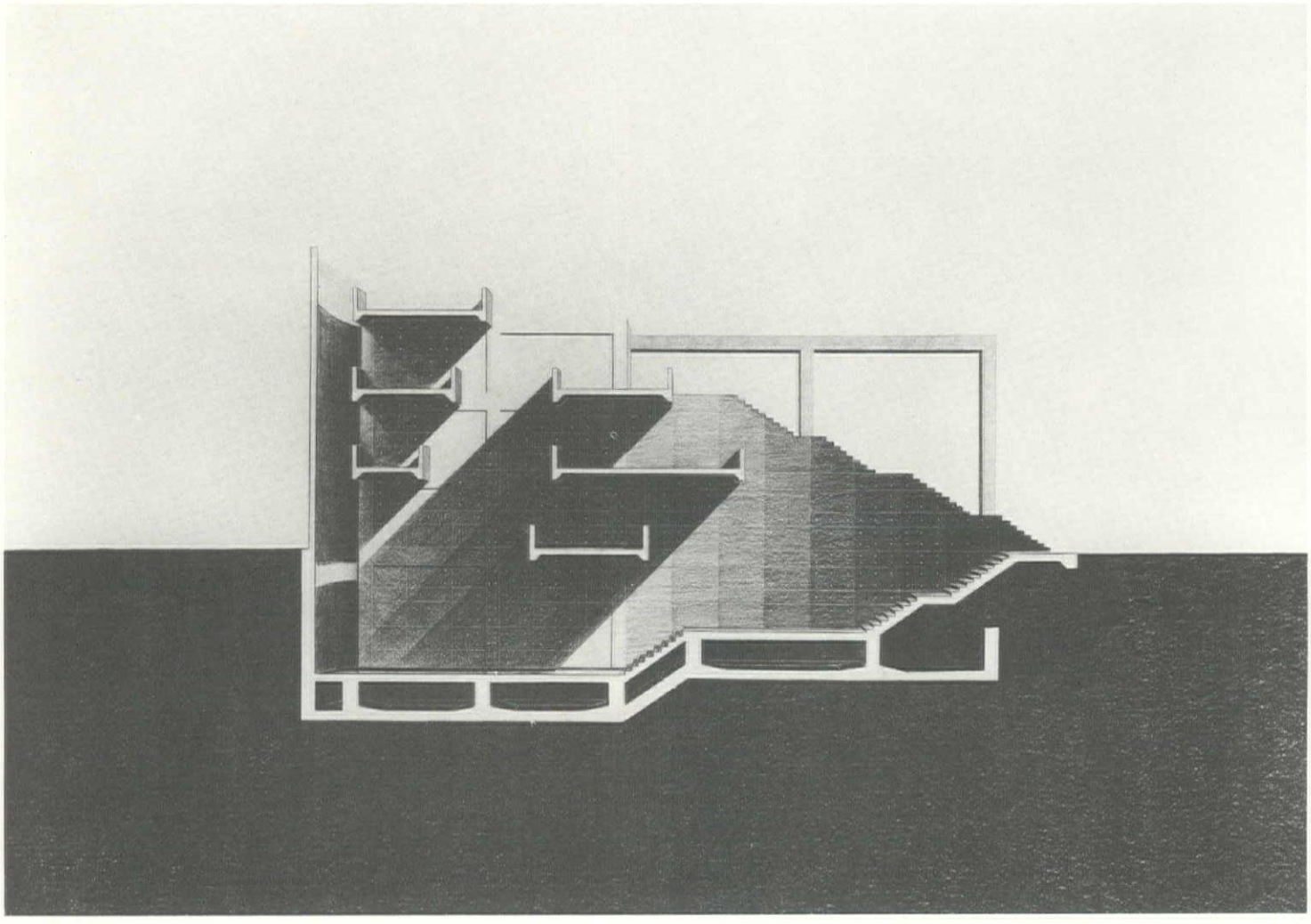
ガラスブロックウォール（堀内邸）"Glass Block Wall" Horiuchi Residence 1979



帝塚山の家（真鍋邸）"Tezukayama House" Manabe Residence 1977



大楠邸　Okusu Residence 1978



STEP 1980

第1回 びわ湖現代彫刻展 守山市・滋賀

The Exhibition of Contemporary Sculpture, Biwako 1981

第１回びわ湖現代彫刻展は，1981年３月25日より５月５日まで，琵琶湖畔で開催された，野外彫刻展である．　彫刻展の会場は，琵琶湖畔に唯一残された，遠浅の砂浜であり，対岸には，比良連峰が展開する．

会場の構成は，展示される美術作品と，琵琶湖の自然との対比を整理し，スケール感を鮮明化することを主眼としている．

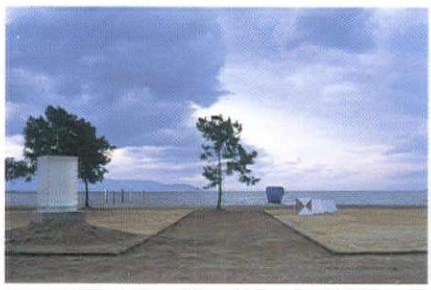
会場は，均等に配置された，１辺25m・厚さ5cmの５枚の正方形によって構成されている．　この５枚の正方形は，山土を固めてつくられたものであり，不整形な敷地との出会いの中で，ひとつは湖に貫入し，ひとつは土手に消滅する．　そして，その失われた形態の痕跡は，強く張られた麻のロープによって，しるされている．

情緒性を排したニュートラルな図形は，自然と彫刻作品とのぶつかり会いの緩衝地帯である．　個々の彫刻作品が，より強く，自然に働きかける基点とならないかと考えた．

The First Exhibition of Contemporary Sculpture was held by Biwako (Lake Biwa) between March 25th and May 5th of 1981. The exhibition took place on the only remaining shoal of Biwako that commands a view of the Hira Mountain Range on the opposite shore. The objective of the exhibition hall was to provide a setting for reorganizing the relationship between art and nature, and at the same time, clarifying the sense of scale.

The setting consisted of five squares of fifty centimeter thick, with the sides measuring twenty-five meters. These five squares were made by compacting mountain soil. While being placed on the shore, one square dove into the lake, and an another disappeared into the cliff. And the traces of these lost forms were indicated by stretched ropes.

The neutral shape that has done away with strong characteristics intervenes between sculpture pieces and nature. I wondered if this could inspire the art works to act upon nature in an even stronger way.



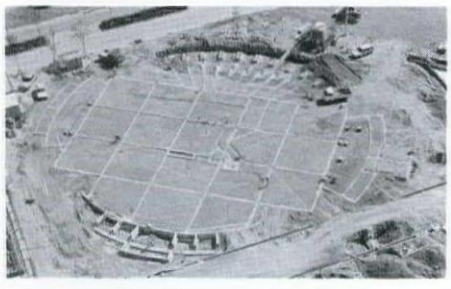


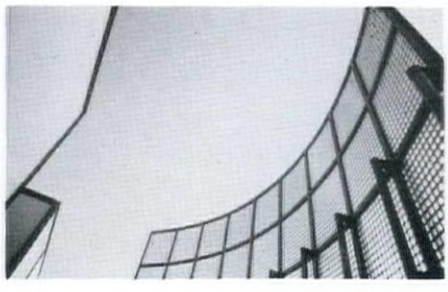
PORTPIA'81 "Fashion Live Theater" 神戸ポートアイランド・兵庫

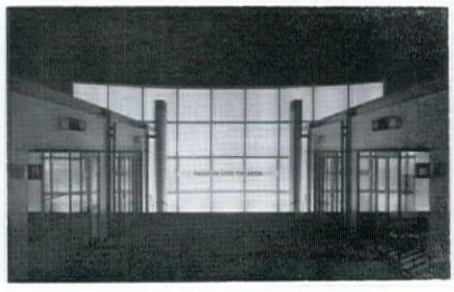
PORTPIA'81 "Fashion Live Theater" 1981

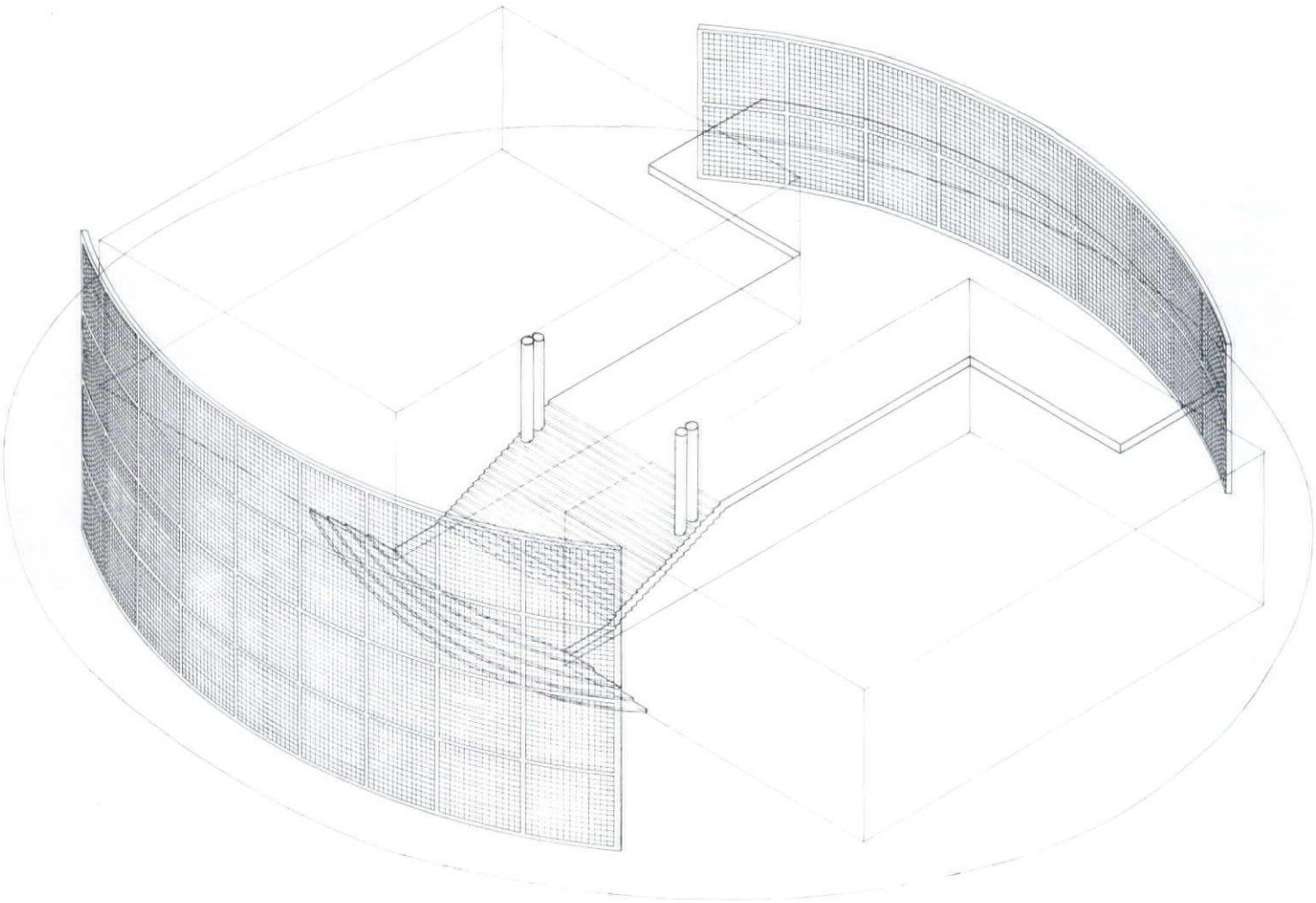
《PORTPIA '81》は，1981年３月より９月にかけて神戸ポートアイランドで開かれる博覧会である．
〈Fashion Live Theater〉は，会場に並ぶ幾つかのパヴィリオンのひとつとしてつくられた．
建物は，同一円周上にある２枚のガラスブロックの壁と同一形態のふたつの箱，平行に置かれた箱のあいだに設けられたテラス状の広場より構成されている．
今まで私が設計した建物のほとんどは，ふたつのブロックに分離されて構成されている．　数年前，建築評論家の長谷川堯氏より，「何故あなたの建物は常にふたつに分離しているのか．　これは，あなたの生理に関係あるのですか．」と問われたことがある．
私は双生児である．　ひとつがふたつであり，ふたつがひとつである．　この私自身の生理的な問題と建築の形態との間にどのような関係があるのか私にはわからない．　しかし同形異相の形態であっても，それがひとつの方向を向いているようなものをつくりたいという思いは，常にあるようだ．　個人のもつ生理的な問題がどの程度にまで創造性と関わるのか定かではないが，それらはやはり，ある種の相関関係にあるのではないかと思う．
自立するガラスブロックの壁は，12ｍの高さを持ち，テラス状の広場に続く階段の連続としてさらに，グランドレベルの広場を形成する基点となっている．　他方のガラスブロック壁は，高さ6mであり，２階の階段は，8mの幅をもつ．　踏面と蹴上げは詳細な配慮を施されて，イタリアのスペイン広場のように，階段の斜面全体がひとつの舞台となって，この博覧会場に活気を与えることが期待されている．
ヨーロッパの街では，街路の結節点に，広場が教会や寺院の前庭として構成されている．　日本では，神社や寺院の庭が，街路のアルコーブとして機能している．それらは，都市の中の自立した外部空間であり，建築の余白として成立するものではない．
〈Fashion Live Theater〉では，現代服飾デザインの源流を遠く探ることをテーマとして，インドネシアのバリ島・ボリビア・インド・ネパールで現在着用されている民族衣装の展示を中心として行なう．　色とりどりの催し物の行なわれるこのパヴィリオンを核として，さまざまな興味を持った人々が，ガラスブロックを透過する光の中で三々五々集わないかと考えた．
鉄骨のフレームに支えられた建物は，光の多様な変容を軸として，この敷地全体の界隈化を目指して展開する．　広場は，階段・テラスとレベルを違えつつ一体となり，自立した外部の多目的ホールとしてひとつの場を創造している．
この建物は仮設であって，６ケ月の寿命である．　私としては，どうもこの種の仕事は好としない．　建築家の思いとして，できれば永久に建ち尽くして欲しいと願うのは，私だけではないだろう．

"Portpia 81" is an exposition held between March and September of 1981, on Port Island in Kobe. "Fashion Live Theater" is one of the exhibition pavilions.
The building consists of two curved glass block walls which lie on the same circumference, two boxes of identical shape, and a terraced plaza flanked by the two boxes standing parallel to each other.
Almost all of the buildings which I have designed consist of two separate parts. A few years back, I was questioned by an architecture critic Mr. Takashi Hasegawa: "Why are your buildings always disjoined? Does it have anything to do with your physiology?"
I am one of twin brothers. One signifies two and two signifies one. I do not know if there are any relationship between my own physiology and my architectural forms. But when I encounter identical forms of different nature, there is always a desire on my part to strive toward their wholeness. I do not know to what extent the physiology of an individual affects his creativity. But I think there is indeed some mutual relationship.
A free standing glass block wall of 12 meters defines the ground level plaza which extends from the stepping terrace. The other glass block wall measures 6 meters, and it draws an arc at the edge of the second floor plaza. The stepping plaza is 8 meters wide with detailed considerations given to the treds and risers. The terraced slope acts as a stage in bringing action to the exhibition hall, alluding to the Piazza de Spagna in Italy. In European cities, plazas exist at street nodes, as forecourts to churches or temples. In Japan, the gardens for shrines and temples function as street alcoves. They are autonomous exterior space within a city, and are not residual space resulted from architecture.
At "Fashion Live Theater," the theme is to explore the origin of the contemporary fashion design. Its exhibitions are centered around the folk costumes presently worn in Bali of Indonesia, Bolivia, India, and Nepal.
With the colorful entertainments held at this pavilion, it was my hope to invite people with various interests, in twos and threes, into the space rendered by the filtering light from the glass blocks. This building, supported by the steel frames, and evolved by the various play of light, develops the circumambience of the overall site. The plaza, though alternating between steps and terraces, acts as one entity, and independently serves as an exterior multipurpose hall.
This is a temporary architecture with a life cycle of only six months. This type of work does not suit my taste. I must not be the only architect who wishes for his buildings to withstand time.





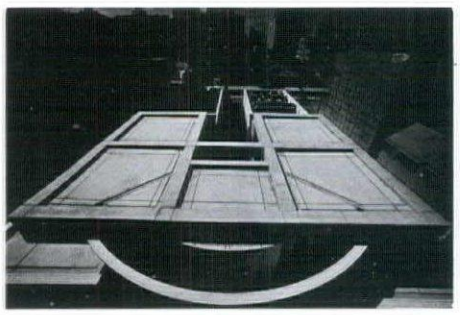


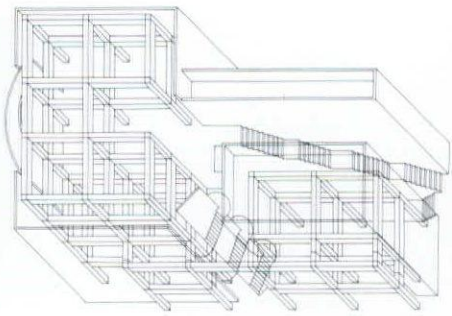


アイソメ図　isometric

STEP 高松市・高知

Step 1980





ここに集録されている過去10年にわたる仕事のほとんどは，個人住宅であり，他は複合商業施設である．それらは，時間のかかるわりには，地道で反応の少ない仕事である．　しかし，人と絶えず直接に触れ合うという意味において，建築の原点ではないかと私には思われる．　これからも，この種の仕事を中心として，建築の設計をやって行きたいと考えている．

〈STEP〉は，日本の都市中心部にある，アーケードの架けられた一般的な商店街を背景としている．　この複合商業施設は，施設としての一般解と，高松市丸亀町にあるという特殊解の二面性において，捉えられた．もし条件が許すならば，ルーフガーデンをもつ住宅を建物の上部にのせて，すまいの機能も複合したいと思っていた．　しかし，経済上の問題のために，それは不可能であった．

ここでは，商業施設を取り巻く現在の状況に対して，4つの提案がなされている．

まず第1に，商店街に断面を挿入すること．　舗装されて通路と化した道をはさんで線状に延びる商店街は，その構成が極めて平面的である．　各店舗は，道と同じレベルでつながるフロアへと客を迎え入れる．　商品は，常に同一角度の視線によって眺められている．これは，人と人との関係についても同様である．　このような，水平方向にしか空間の流れをもたない商店街に，垂直方向の動きをもつスペースを挿入したいと考えた．

第2は，街と立体的に関わることである．　商店街に隙間なくたち並ぶ建築は，アーケードで覆われてしまった通路に対して，そのファサードしか見せない．街路空間に建物の容積で関わること，歩行する人々に立体として建築が関わることができないと考えた．

第3は，空からの光を商店街に引き込むことである．そして，都市生活に失われつつある自然の感覚を，再び取り戻すことである．　それは，ヨーロッパの一都市で見た，アーケードの続くその向こう側に陽光に満ちあふれた明るい広場を見出したときのあの感動的な風景を，イメージしていた．

第4は，〈歩行〉を，人が自ら選び取ることである．一般的な商業施設においては，エレベーターやエスカレーターが人をその意志とは無関係に上部へと導く．ここでは，自らの足で移動することにより獲得される〈場〉の自由な選択権を人の手に戻したいと考えた．

これらは，単なる商業施設に関する提案というよりも，人が街の中で思い思いにとどまることのできる場をどのようにして獲得し得るかということについてのスタディであった．

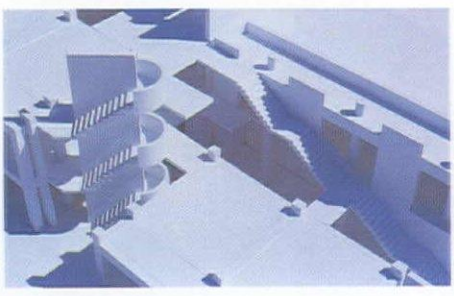
〈STEP〉は，道路より半階下がりの1階をもつ，地上4階建てである．　商店街に直交する道として空に向かって一直線に登る階段を軸に，内部風景を展開している．　建物は，5mを基本単位として構成される等質のフレーム，異なる形態をした3つの階段，敷地を取り巻く壁より成り立っている．　フレームはコンクリート打ち放し仕上げ，壁には炉器質タイルが貼られ，床は粗面に仕上げられた黒御影石が敷きつめられている．　敷地を切り取る壁は，この建築の骨格であるフレームをより明確に機能させている．　3つの階段は，幾何学的構成から生まれるこの建築の静的な緊張関係を打ち破っている．

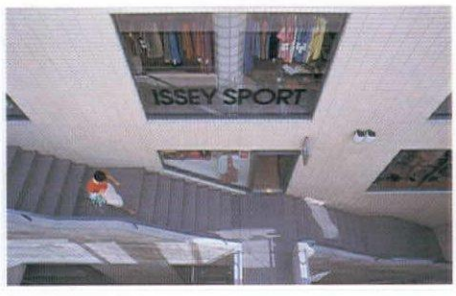
一直線に登る階段は，計画の当初，アーケード下の通路で起こるさまざまなイベントの観客席として，また，階段を舞台としたファッションショーを行なうところと，多様な使い方が考えられていた．　ひとつの建築の階段がもたらす活気が街路へ溢れ出て行く，そのようなイメージを抱き続けていた．

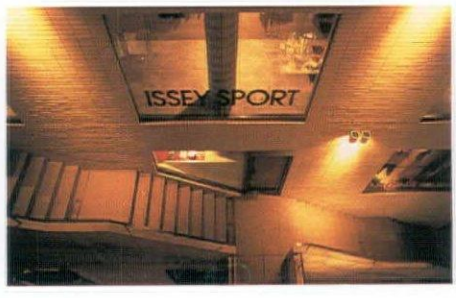
広場の背後に置かれた階段は，街の中の露地となる．自立し，角度の振られた階段は，この建物へのゲートの役割を果している．　街と建築の接点に位置し，それぞれの空間領域を明確に分節しながらもダイナミックに連結させている．

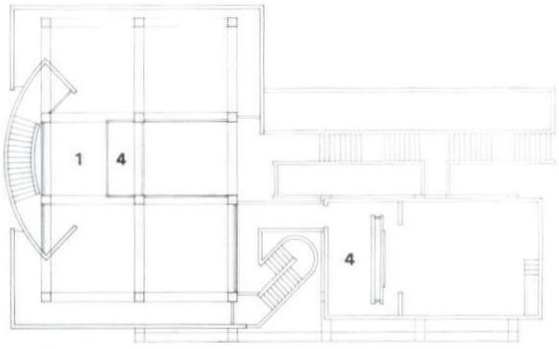
〈STEP〉では，人の集まり方や動き方が建築の重要な〈部分〉として捉えられたため，素材の選択が重要視された．　特に，歩行による4階までの人の導入を可能にするのは，階段の蹴上げと踏面のバランス以上に〈足触り〉とも言える確かな歩行感覚である．　表面を粗に仕上げられた黒御影石は，この感覚を，歩く人々に与えている．

街の中に建築をつくるという行為には，困難がつきまとう．　概念化された形態を挿入しようとするときには現実の状況とのずれが大きく，特に大変である．しかし苦難の果てにそれが完成すると，またもうひとつ建築をつくりたいという情熱に私は駆りたてられる．









4階平面図 fourth floor plan

Most of the works that are compiled here are residences, and the rest are mix use buildings. Considering the amount of time that they require, the residences are not as rewarding. But from the standpoint of having contact with people, I believe that it is the base for any architecture. I want to continue this type of jobs in my future architectural activity.

The setting for "Step" is a typical commercial arcade in the center of a Japanese city. This mix use building deals with two issues—first, with a general commercial complex, and secondly with the local color of Maruyama-cho in Takamatsu city.

If possible, I wanted to place residences with roof gardens on the top level to combine the living functions as well. But due to economic reasons, this idea fell through.

Four solutions were presented against the status quo of the commercial complex.

First of all, to design in section. The commercial complex that extends linearly along a road is planer in its composition. Each shop invites people into the level which is flush with the road. The products are always seen from a constant angle. The same is true with the relationship between people. To a commercial complex which renders spatial movement only in the horizontal direction, I wanted to introduce a space which has a vertical translation.

Secondly, I wanted to come in contact with the city volumetrically. The architecture which overtakes the commercial district only shows its facades toward the arcade. I wondered if my building could relate to the urban space volumetrically, and with passersby through its mass.

The third solution was to draw in the light from the sky. And to re-establish the sense of nature which has now been forgotten in the city life. I had imagined an European city square, full of light, which lies hidden at the end of a long continuous arcade.

The fourth was to present the people with a choice of "strolling." In typical commercial establishments, elevators and escalators lead people forward and upward, irrespective of their preference. By moving with one's own feet, I wanted to return into the hands of the people, the choice of conquiring their own "field."

These were meant to be studies directed toward achieving an individual "field" for people in a city, rather than ideas for a commercial establishment.

"Step" contains four stories, with its first floor sunken half a level below grade. Its interior scenes unfold along the axis which is a direct staircase starting from the arcade, disappearing into the sky.

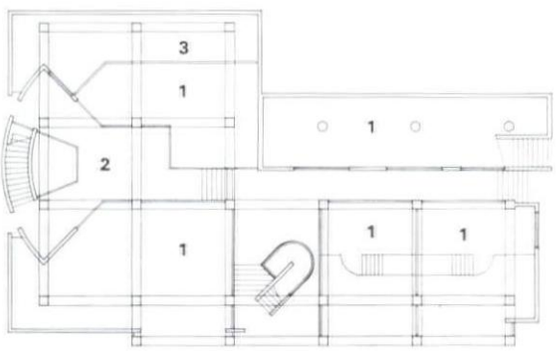
The building consists of rigid frames, with a basic unit of 5 meters, three staircases, dissimilar in forms, and walls enclosing the site. The frames are of exposed concrete, the walls covered with clinker tiles, and the floor is rough finished black granite. The enclosure walls which isolate the site clarify the skeletal function of the frames. The three staircases deny the silence and tension born from the geometric composition of the architecture.

At first, the straight staircase was to serve as the seating for the audience viewing various events performed under the arcade. The staircase as a stage for fashion show was one of many other uses being considered. An excitement brought about by one architectural element, escaping out to be shared by the street, was the image which I held in mind.

The staircase placed behind the plaza alludes an alley. A skewed and isolated staircase acts as a gate for the building. Being situated at the junction of the city and the architecture, while separates the spatial boundaries, the staircase dynamically linking the two.

In "Step," the human assemblage and movement became the important factors of design; and therefore, much care was provided in choosing the materials. Especially, in order to elevate the people to the fourth level on foot, a "pedal contact" which is a stepping sensation could be considered more prominent than the balance between the treds and the risers. The rough finished black granite renders this type of sensation for the browser.

The act of building in a city accompanies problems. When trying to introduce a conceptualized form, its disparity with the status quo is a particularly difficult issue. But when that is overcome after a long struggle, I am again driven with the passion for creating another architecture.



1階平面図 first floor plan 1 : 400

1 店舗 shop
2 広場 plaza
3 機械室 machine room
4 テラス terrace

松谷邸 京都市伏見区桃山・京都

Matsutani Residence 1979

この松谷邸と次の上田邸のオーナーは，音楽と美術の教育者である．　建築は，絶対的に定められた最少予算の範囲内で最良解を求めるものであった．

何故このような小さな建物ばかりを選んでつくってきたのだろうと考えることがある．　私は，大きなプロジェクトチームをつくり専門分野を集めて，その一部門として建築をつくるよりも，自分自身の仕事場の中で閉鎖的に完結する，手の届く範囲の仕事をする方が好きだ．　小さな規模の仕事がどうしても多くなるのは，そんなところに原因があるのかも知れない．

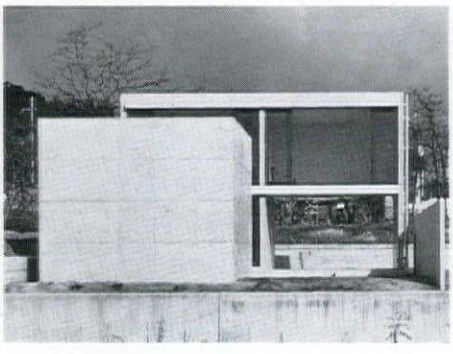
床・壁・天井という建築を構成する基本要素の６面総てが，コンクリート打ち放し仕上げの単一素材で構成されている．　これは，空間の純化のために意図的に選択されたものである．　等質の材料による構成にあっては，床面積に対する高さの関係によって定義される容積，および，開口部の全容積に対する面積比率と位置だけが，建築の基本成立要因である．　等質な構成による純化された空間が，ここに作用する光・風といった自然の因子によって，どこまで遠くイメージを飛翔させることができるかが，テーマであった．　いい換えれば，物質の存在様態を極限にまで追いつめることにより，逆説的に建築空間を昇華することを意図していたのである．　そして，純化された空間に投入される他の要素によって，冷ややかな素材のテクスチュアーを，柔らかな〈物質の感性〉とも呼ぶべきものに転化できないかと考えていた．

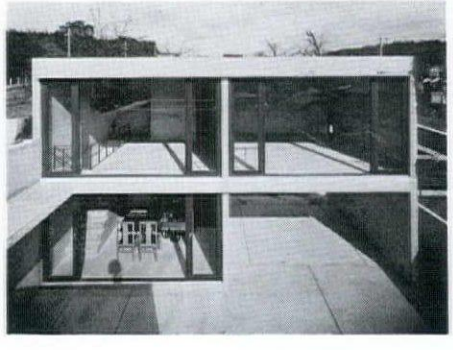
限定された予算の故に，このふたつの住宅には，私にとって建築の〈部分〉ともいうべき家具が，つくられていない．　いわば未完の家である．　そして今なおそのひとつひとつが設計され，備えられ続けている．

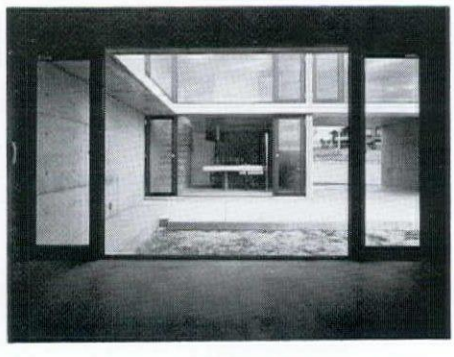
このように何年もの歳月をかけてもなお完結しない建築は，常に意識の一隅を刺激し，私を苛立たせる．

松谷邸は中庭をはさんで対峙する２棟より成り立っている．　それぞれは4.2ｍ×4.2ｍの正方形を基本グリッドとして構成されている．　コンクリートの〈土間〉は，キッチン・食堂から外部へと拡がり，中庭を常緑の芝生と二分している．

上田邸は，間口5.5m，奥行4.4m，天井高3.8mの軸対称に配置された隣り合うふたつのスペースより成り立っている．　建物はさらに，敷地を庭と２等分する形で配置されている．　光と風が，１階に設けられた南面する開口部と中２階にある北側の高窓の間を異なる作用を伴って流れていく．　将来は，南西に子供室が２室設けられ，緑をはさんで対峙する．　そのときこの住宅は完結する．







The owners of Matsutani Residence and Ueda Residence are a music teacher and an art teacher. The challenge was to find the best solution within the absolutely limited finance.

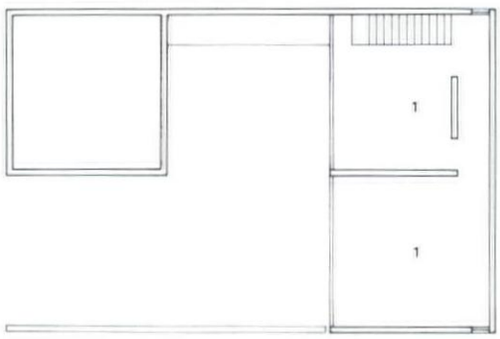
I sometimes wonder why I have undertaken so many commissions. I do not prefer to form a big project team with the assemblage of experts, and to take part in creating architecture only through the team. I would rather stay with the jobs within my capability. That may be the reason for numerous small jobs.

Floors, walls, ceiling—all of the six sides that compose the basic elements of architecture are composed of exposed concrete alone. This was purposely selected to achieve spatial purification. When one material is used throughout the design, the important factors are narrowed down to the volume that is defined by the relationship between the floor area and the height, and the percentage as well as the placement of apertures in relation to the overall volume. In a pure space brought about by uniform composition, the objective is to elevate the image with the help of the natural elements such as light and wind. In other words, I wanted to deductively sublimate the architectural space by pushing the material existence to their limits. And by the introduction of other elements into the pure space, I have attempted to transform a cold material texture into that which could be called a "material sensitivity."

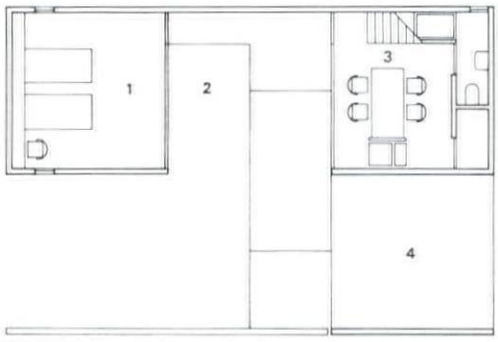
Due to limited expenses, I was not able to create furniture which I regard as "part" of my architecture. In short, these buildings are still incomplete. The furniture are still designed and produced. Such architecture frustrates me, for it is yet not complete, in spite of the length of time being spent on the project.

tThe Matsutani Residence is composed of wo volumes which flank the courtyard. Each volume consists of 4.2 meter square grid as the module. The concrete "patio" extends from the kitchen to the dining room, and further, to the outside. It divides the courtyard into the green grass area and the paved area.

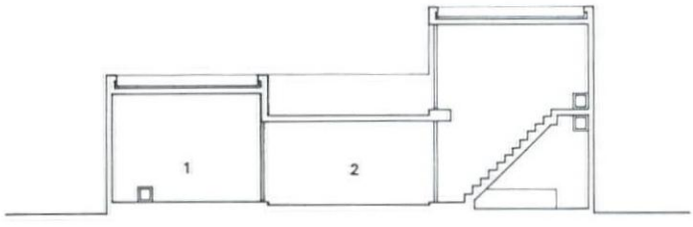
The Ueda Residence is composed of two volumes, both of which are 5.5 meters in width, 4.4 meters in depth, and 3.8 meters in height. Further, the building is placed in such a way which bisects the site. Light and wind filter through the south faced opening on the first floor, and the north faced clearstory on the mezzanine level. In the future, two rooms for children will be added on the south side. They will face each other flanking the green. Thereafter, the house will be called "complete."



2階平面図　second floor plan

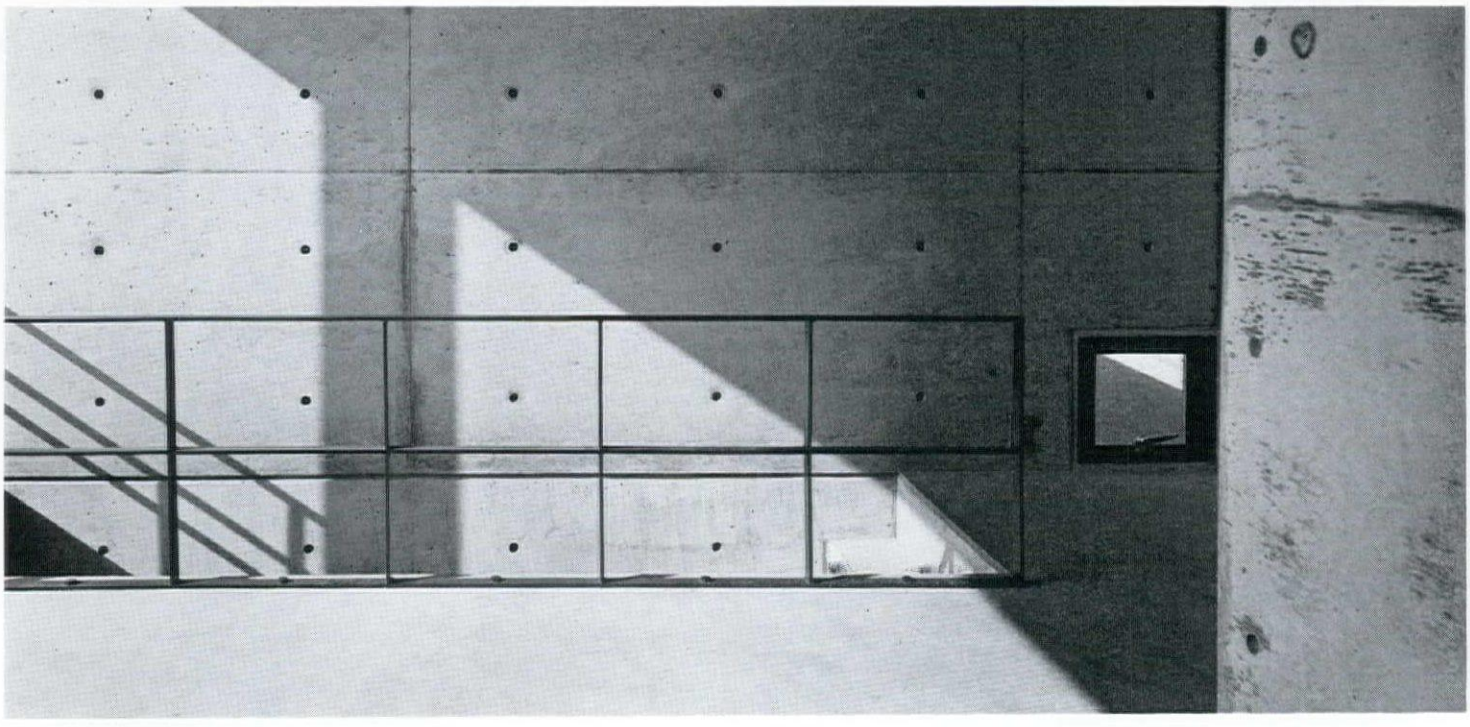


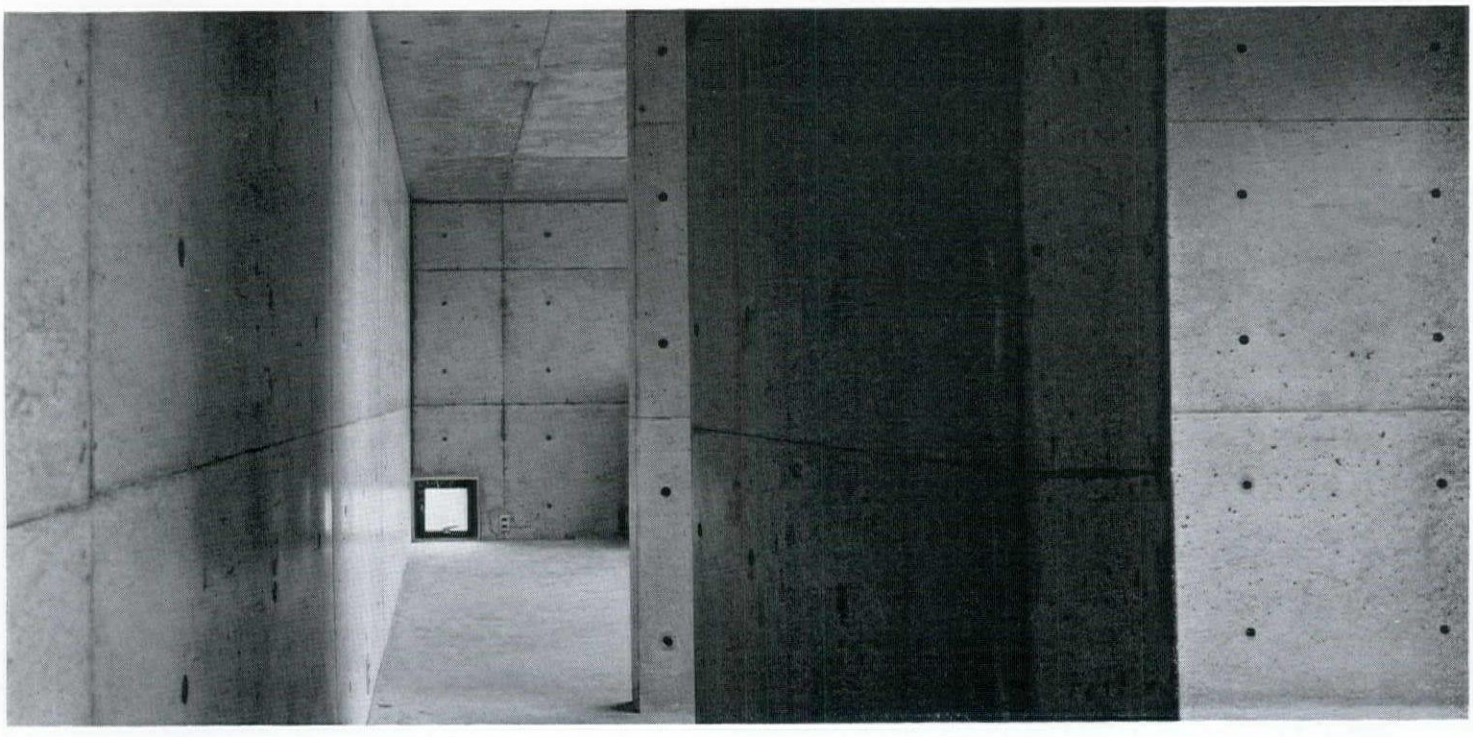
1階平面図　first floor plan　1：200



断面図　section

1　寝室　bedroom
2　中庭　court
3　食堂　dining room
4　アトリエ　atelier

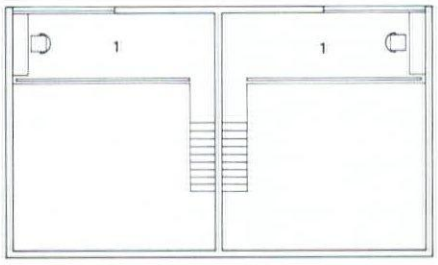




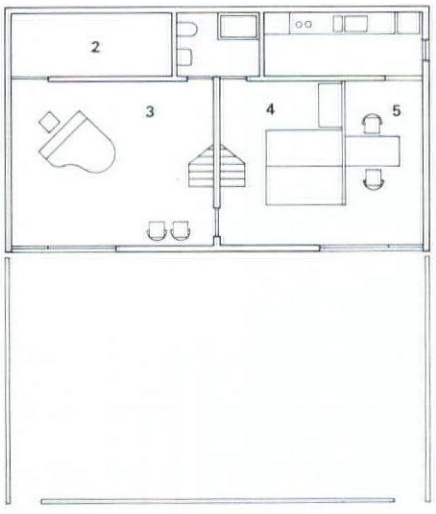


上田邸 総社市泉・岡山

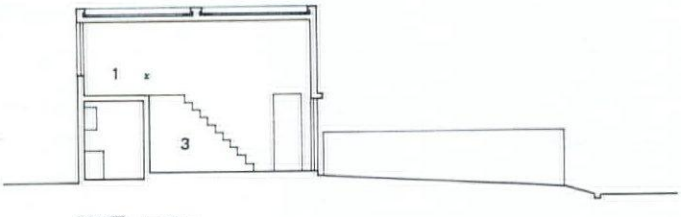
Ueda Residence 1979



2階平面図 second floor plan

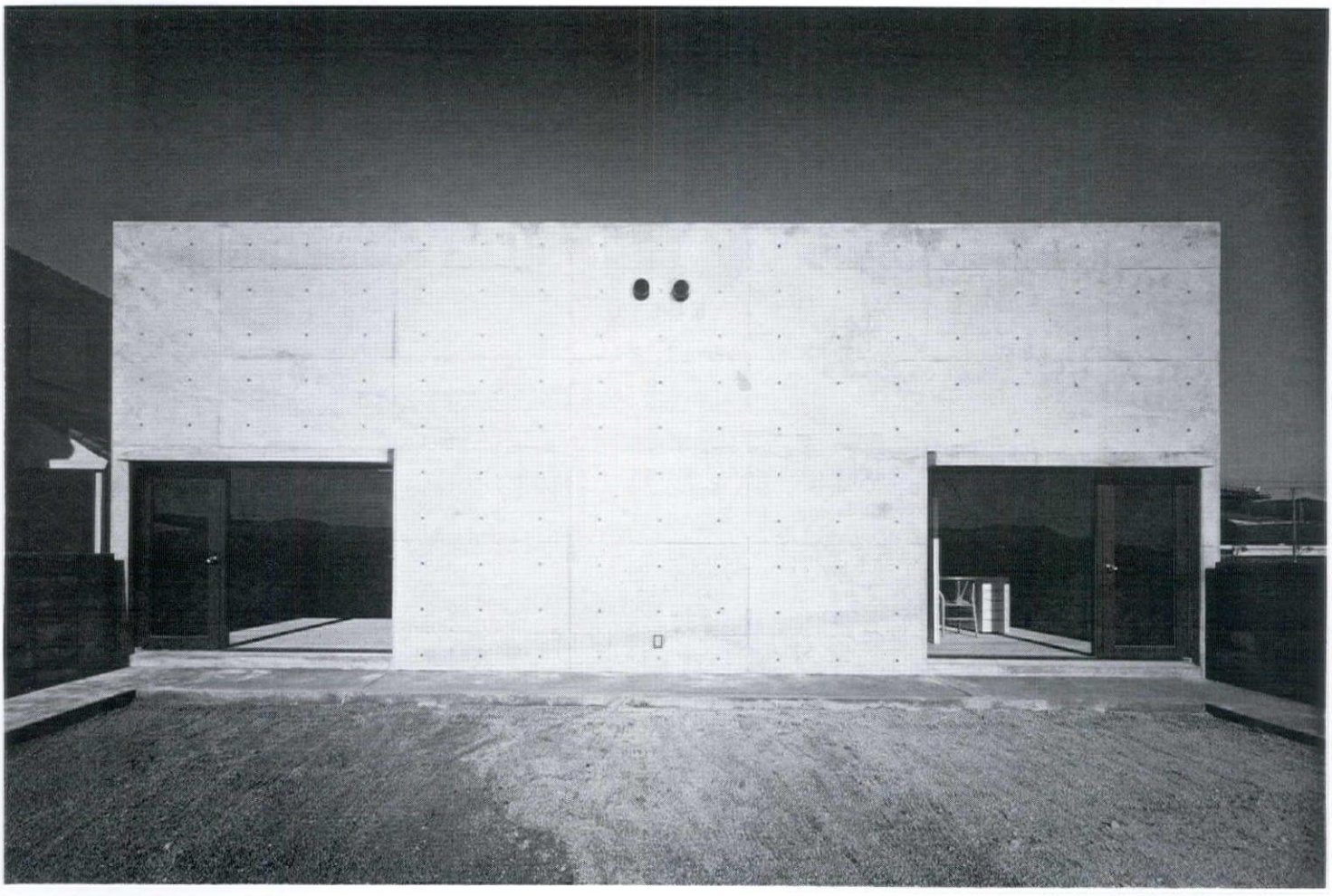


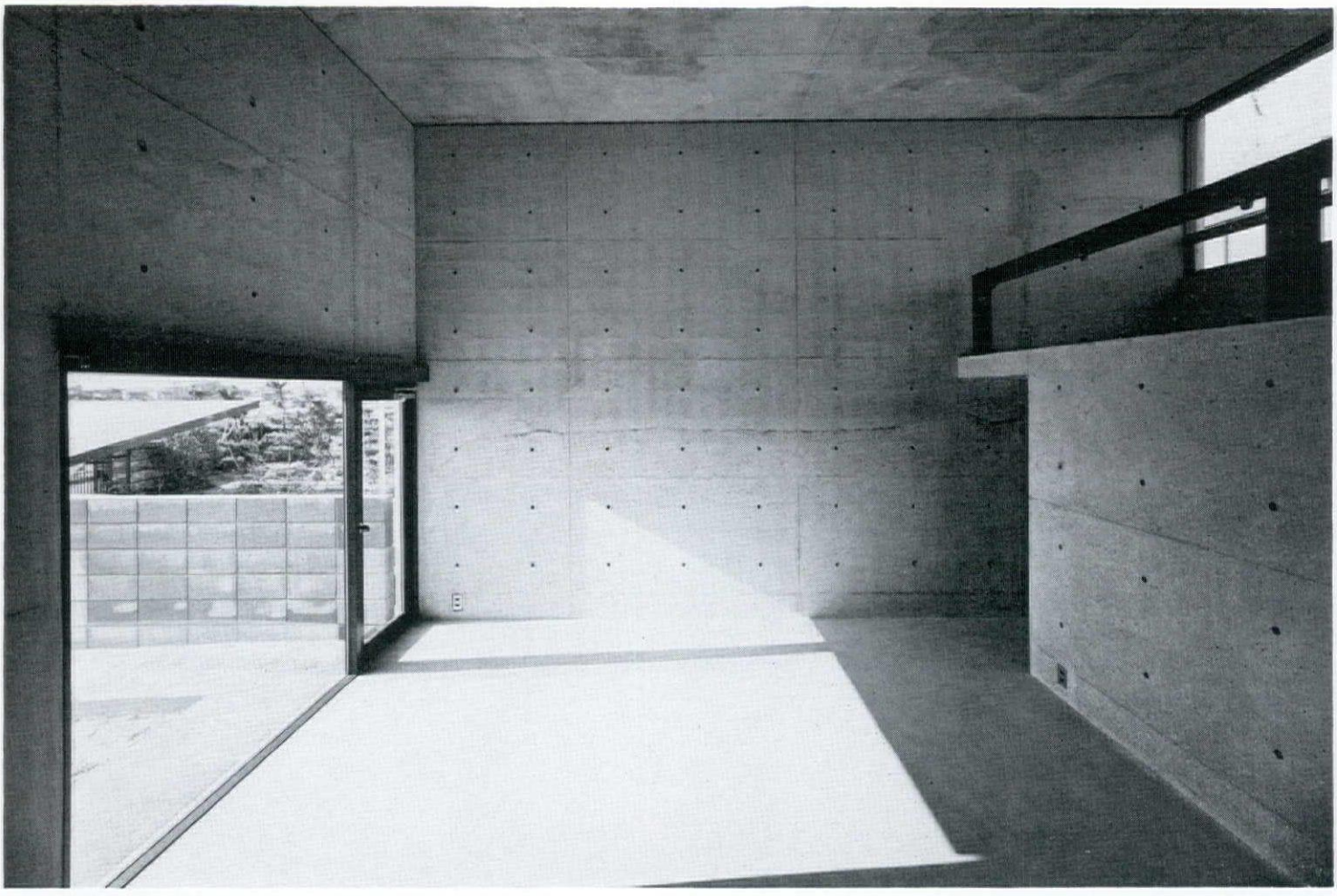
1階平面図 first floor plan 1:200

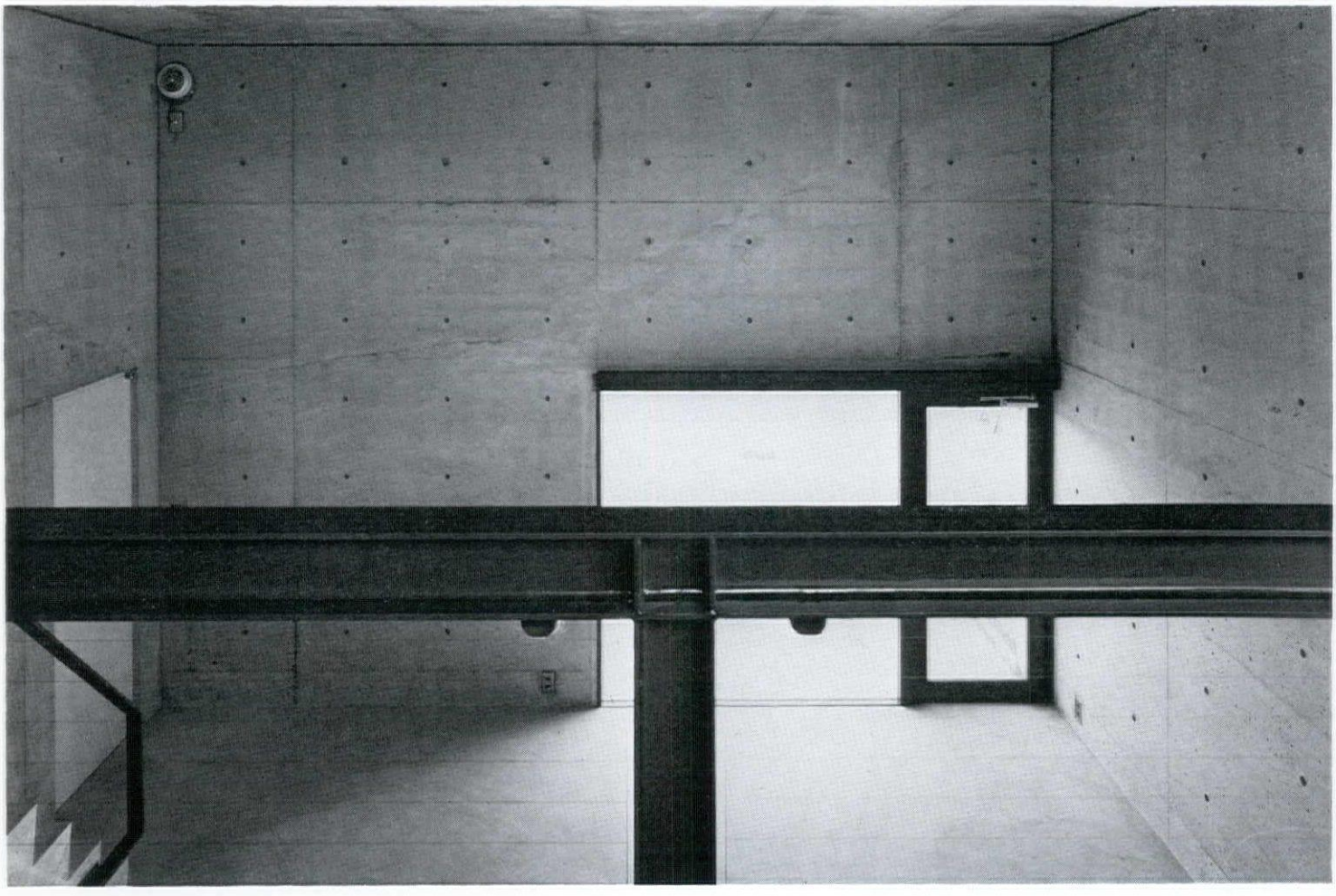


断面図 section

1 書斎 study room
2 納戸 closet
3 居間 living room
4 寝室 bedroom
5 食堂 dining room







大西邸 大阪市住吉区帝塚山・大阪

Onishi Residence 1979

幅員５ｍの道路に面する広さ約50坪の敷地に，この住宅は建てられた．　敷地は少し狭いようであるが，現在の日本の住宅としては，一般的な規模である．　建築に関する日本の法律は，その敷地規模に関係なく等しく規制してくる．　そのために，小さな敷地はより厳しく規制されることになる．

〈大西邸〉では，法的規制の「壁面後退線指定」によって敷地のまわりに一律に生み出される余白をどう捉えるかをテーマとして，敷地について再度考える機会を得た．

建物は，コンクリート打ち放しのフレームと，斜めの断面を持つ緑の庭より成り立っている．　フレームは，４つのグリッドが３層にわたって構成されたものであり，居間やテラスなどの生活空間をそれぞれのグリッドのうちに規定している．　庭は，グランドレベルより半階沈んだフレームの基部を起点として，道に向かって緩やかに立ちあがっている．

敷地の道路に面する部分，「壁面後退線指定」によって生じた空地は，庇が施されてパーキング・スペースを形成している．　ここはまた，近所に住む子どもたちの遊び場としても活用され，街の中に多様な情景を生み出している．

「隣地後退線指定」によって生まれたスペースは，２階に設けられた玄関への緩やかなアプローチとして積極的に構成されて，建築との一体化がはかられている．

建築は都市を構成する最大の要素である．　敷地は，建築とともにあって自立した関係を，都市との間にもっている．　敷地は通常，２次元の平面としてのみ捉えがちであるが，私は，建築と都市を結ぶ積極的な役割を持つものとして，これを捉え直してみたい．

敷地を直接規定する物理的条件（敷地の形状・法的制限）ばかりでなく，敷地が背景にもつ方向性（街の構造・志向性・気候条件）も読み取る．　そして，〈場〉に関する固有の個性をもつものへと再構築するのである．

さらに，法的規制により生まれるものも含めて，空地は単なる隙間としてではなく，敷地全体の中に建築を成立させる空間として立体的に捉える．　このとき，敷地と建築の間に生まれる余白は，自立した構造を持ち，生き生きと建築に関わりつつ，意味ある空間を形成するのではないだろうか．

This residence was built on a lot of approximately 165m^2 (50 tsubo), facing a five meter road. The site seems rather small, but it is an average size for a contemporary Japanese urban residence. The Japanese law concerning architecture is strictly enforced regardless of the size of the site. For this reason, smaller site becomes more restrictive.

Onishi Residence gave me an opportunity to reconsider the site in terms of the residual space resulted from the legal restriction called the "exterior wall setback."

The building consists of exposed concrete frames and a sloping green. The frames are composed of three levels of stacked grid which, in turn, is made up of four rectangles. The sloping garden starts from the bottommost grid sunken half a level below grade, and it rises gradually toward the street.

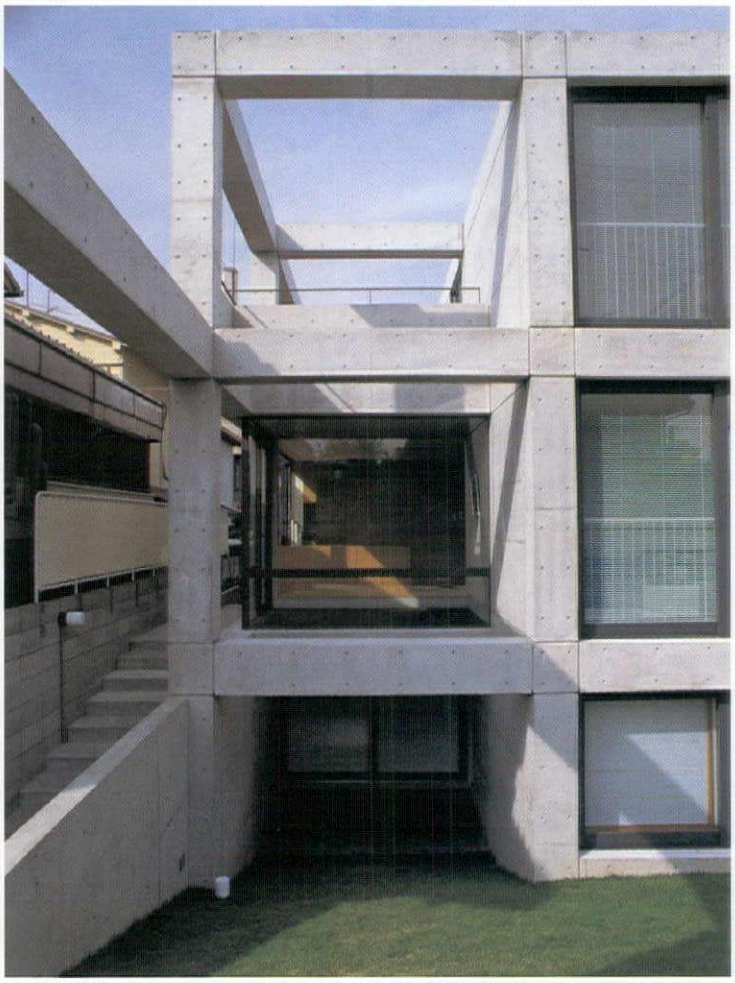
The frontage which resulted from the "exterior wall setback" has an overhang to serve as a parking space. This space is also utilized as children's play area and it produces multi faceted pictures in the city scape.

The space generated as the result of the "setback from adjacent property lines" is actively utilized in the design by constituting a gradual approach to the entrance placed at the second level.

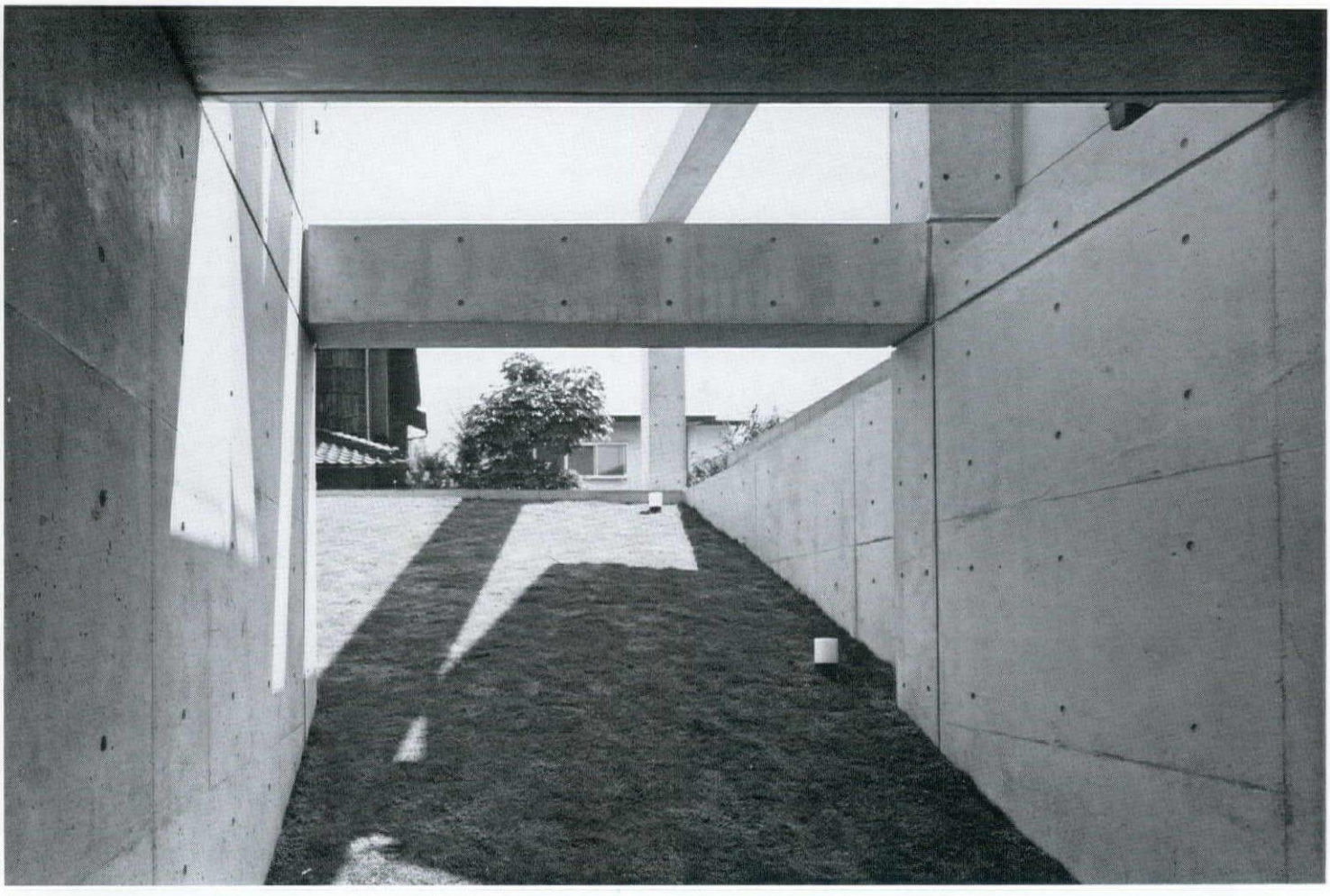
Architecture is the most important element in organizing a city. Site exists with architecture while it relates to the city. The site is usually two-dimentional, but I like to consider it as an active agent that brings the architecture together with the city.

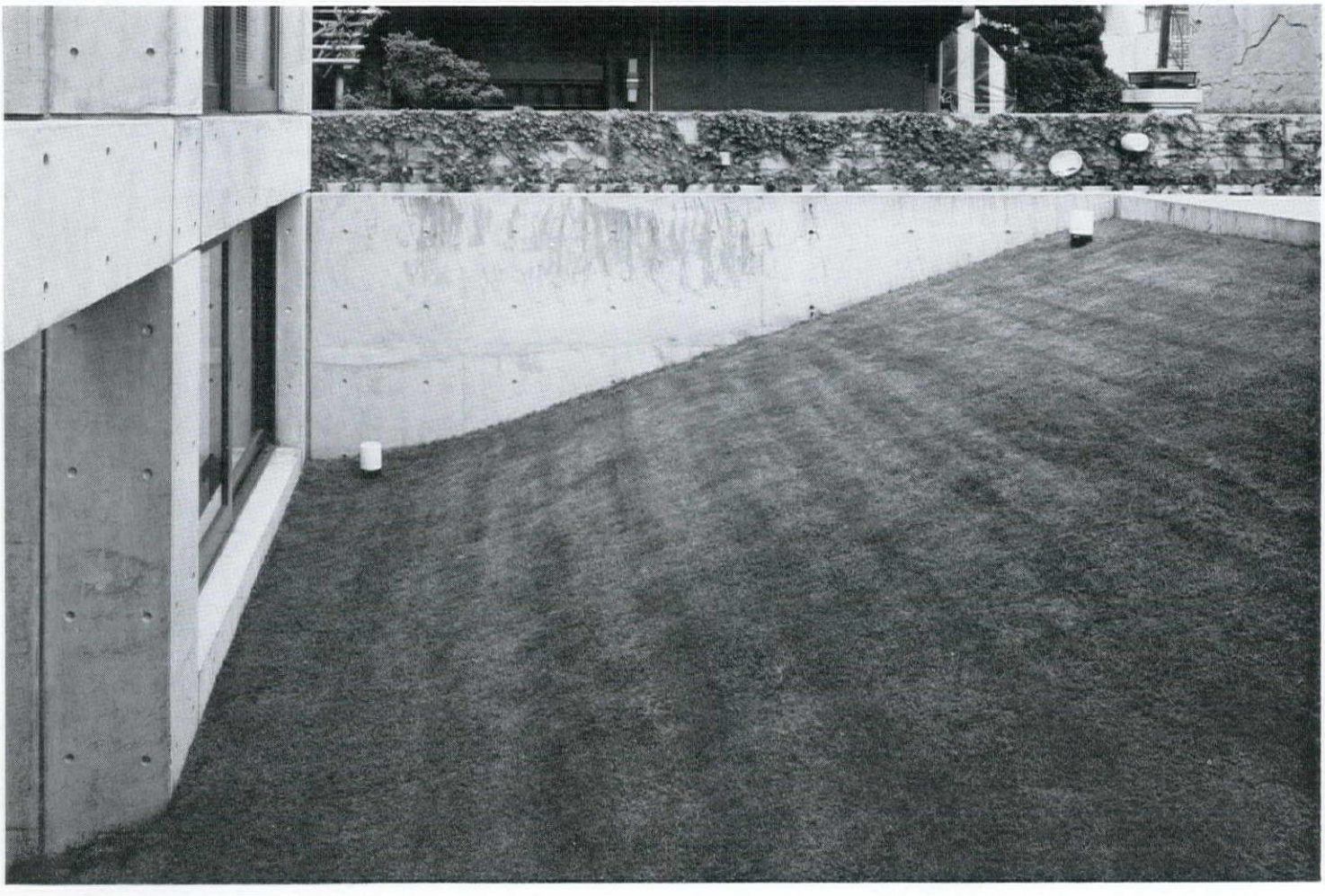
I want to interpret not only the physical aspects (site contour, legal restrictions) which directly bind the site, but also the proclivity of the site (composition of the city, intention, and weather). Thus, recreating the site into something which carries novelty in its "field."

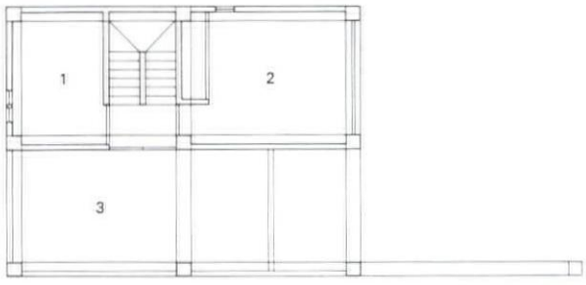
Moreover, the unbuilt areas, including the ones resulted from legal restrictions should be regarded, not as residual space, but as a space which positively contributes toward architecture. In this case, the left over space between the property lines and the building operates independently by producing a meaningful space which actively relates to architecture.



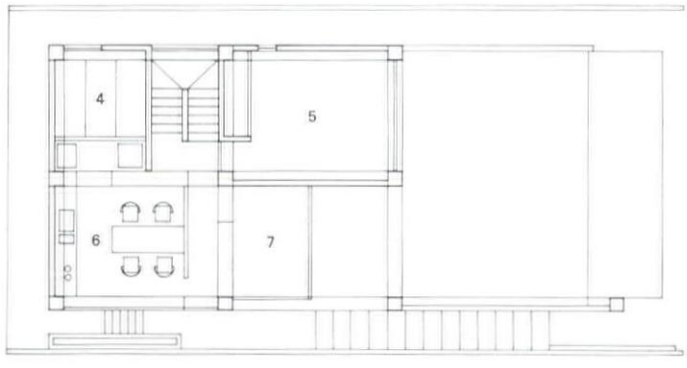




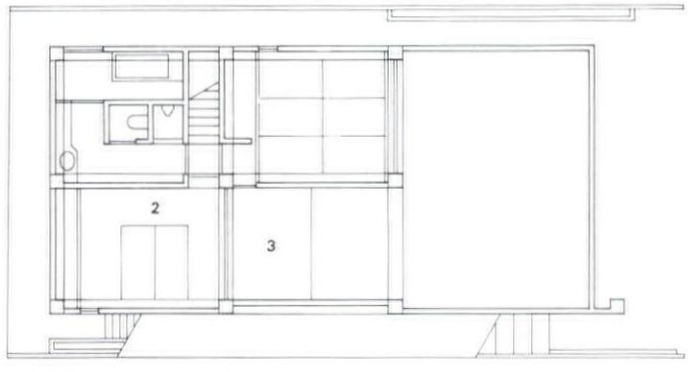




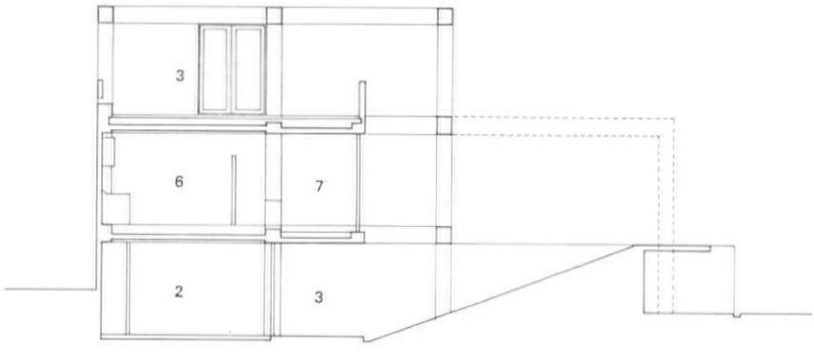
3階平面図　third floor plan



2階平面図　second floor plan



1階平面図　first floor plan　1：200



断面図　section

1　予備室　spare room
2　寝室　bedroom
3　テラス　terrace
4　家事室　utility
5　居間　living room
6　食堂　dining room
7　入口　entrance

片山ハウス 西宮市平松町・兵庫

Katayama House 1979

交通量の多い国道に面する商店街の一角にある．日本のどこの街にも見られる平均的な風景である．

この建物は，10数戸で構成される1棟の古い市場の入口部分に位置し，他と切り離されて建てられた．

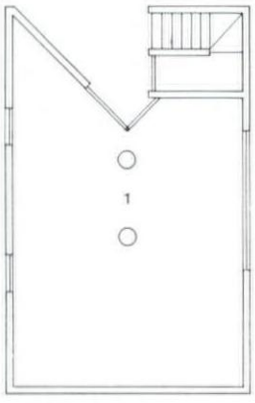
商店街のランドマーク的性格を視覚的に形成し，街の変容の起点となることをめざしている．

建物は，四周を囲い込むコンクリートの厚い壁を構造体としている．そして，そのマッシヴな量塊の4階レベルに，ベイヴされた中庭を持つ住まいが設けられている．建物の1階は店舗，2階・3階は事務所である．4階の中庭は，壁に切り込まれた開口部から流れ込む風と，上部に広がる空との応答を通じて〈住吉の長屋〉の光庭を空中に設けたような効果をもっている．

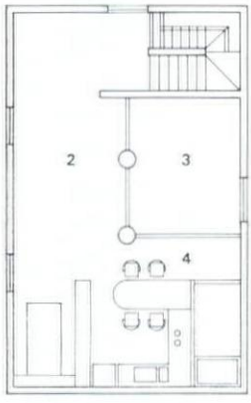
それは壁で囲まれた外部空間であり，屋根のない部屋である．雨の日の問題はあるが，天空の自然現象が，生活をしている人の足下にまで関わって来ることが重要である．それによって，閉ざれた住空間が外の世界と再び結びつけられる．中庭は，住戸の中にあって，内部化された外部空間として住戸全体に中心性を与えるとともに，生活空間の焦点としても，その機能を果たしているようだ．

今の都市の状況を考える時，日本建築が古くから所有していたような自然と一体となった性格をもつ住居の成立を期待することは，難しい．西洋的な町屋のスタイルである，中庭を中心として主室を配する，いわゆるコートハウスの形式は，現代のような密集度の高い都市の中の10坪前後の敷地に住まうには，とるべき最適な方法のひとつなのではないだろうかと思われる．

1 店舗 shop
2 居間 living room
3 中庭 court
4 食堂 dining room



1階平面図 first floor plan 1：200



4階平面図 fourth floor plan

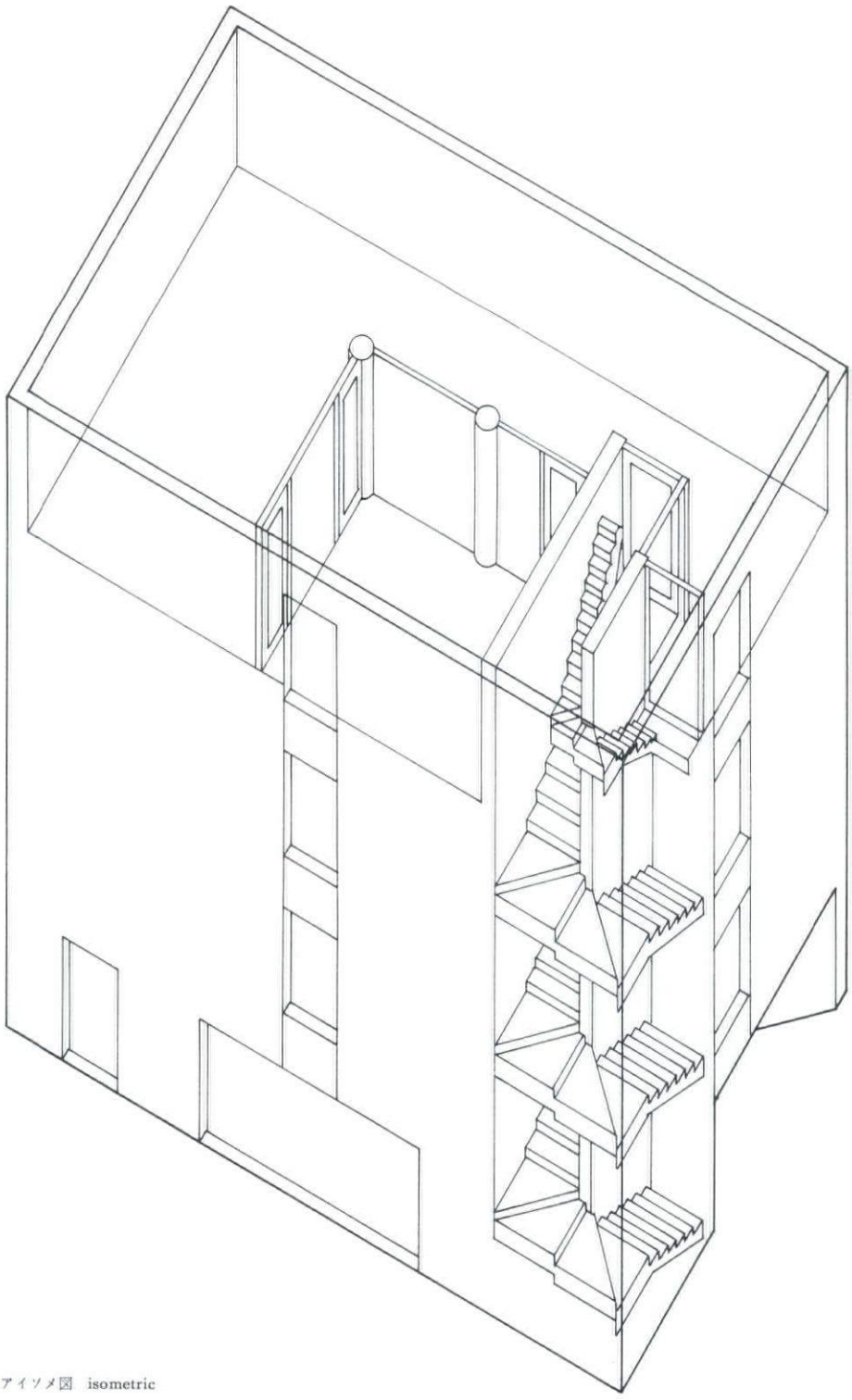
Situated on a federal road, it takes up a corner of a busy commercial district. It is a typical scene in any Japanese city.

This building occupies the entrance portion of an old marketplace composed of about ten shops. It was built independently of the surrounding structures. Visually, it acts as a landmark for the market, but it also attempts to become a point of departure for the future development of the district.

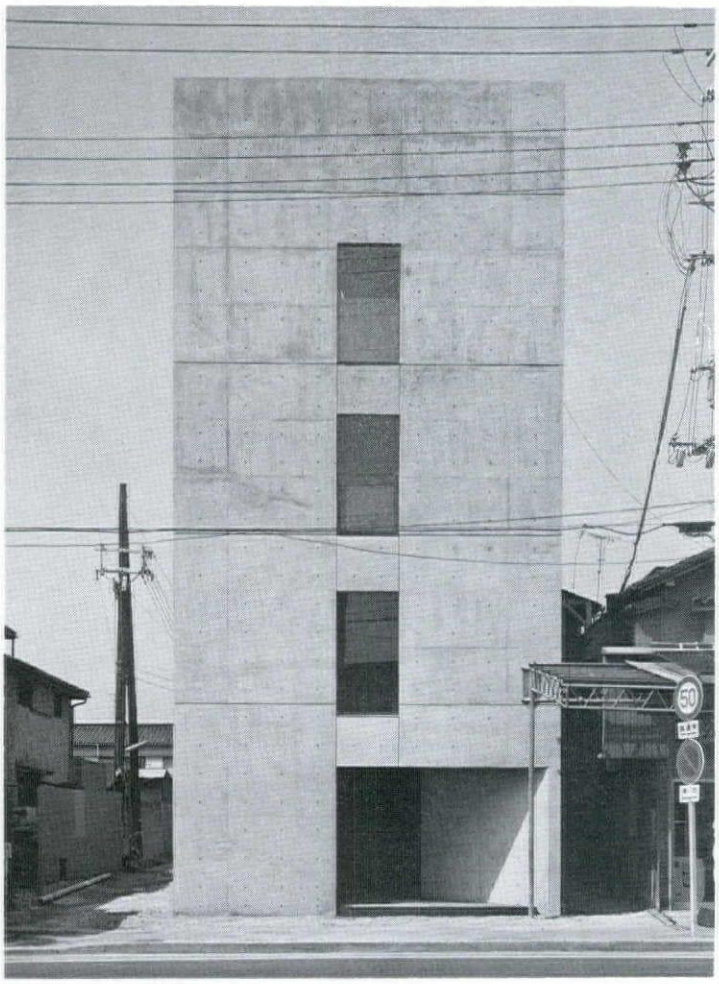
Four thick enclosing concrete walls compose its structure. On the fourth level of this massive container, there is a residence with an open court. There are shops on the ground level, and offices occupy the second and the third levels. The courtyard on the fourth level encourages a dialogue between the infiltrating wind and the expansive sky. It has an effect similar to the ccurtyard of the "Row House Sumiyoshi."

The courtyard is an exterior space surrounded by walls, but it is also a roofless room. In spite of the problems with the rain, it is important for the people to interact with the natural phenomena. With this, the enclosed habitable space is once again related to the outside world. Existing inside the house, the courtyard is an exterior space treated as part of the interior. At the same time, it acts as the focus for the living space.

When one thinks of the present situations in cities, it is difficult to expect a traditional Japanese architecture which exists with nature. As a result, a Western urban house type with major rooms facing the central courtyard, seems to be the most appropriate solution to live in a congested city, on a piece of land of about 33m² (10 tsubo).



アイソメ図 isometric


50



ガラスブロックウォール（堀内邸）大阪市住吉区帝塚山・大阪

"Glass Block Wall" Horiuchi Residence 1979

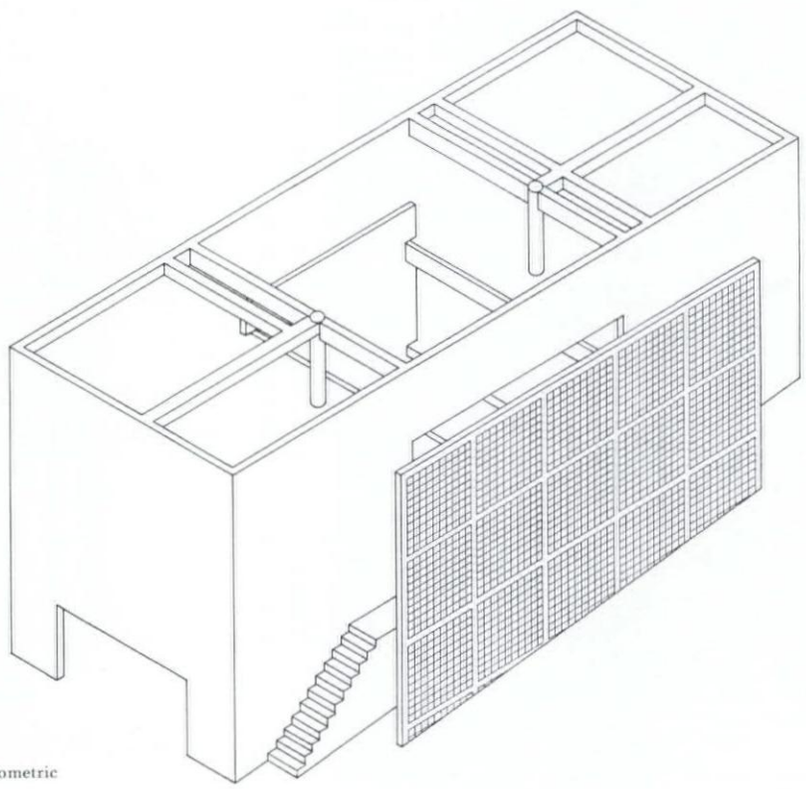
建物は，生活の場を囲い込む，コンクリート打ち放しの外壁と，自立するガラスブロックの壁より成立する．建物の各機能は，中庭を媒介として，南北に分離して配置されている．

自立するガラスブロックの壁は，住戸内風景獲得の基点であるこの中庭を受けとめ，街と住居の領域を分節している．

ガラスブロックを透過する光は，時間の経過の中で，これら相互の領域を明確にしつつ，建築と都市との関わりを暗示している．　ガラスブロックを透過する朝の光は，東方より中庭に射し込み，ここを住戸内風景の基点とする．　一方，夕暮れ時には，ガラスブロックを透過した西日が，道路を照らし出す．　ここでは，ガラスブロックの壁は，住居と都市を結びつける，建築の〈不透明な壁〉でもある．

堀内邸は〈住吉の長屋〉同様，環境を切り取り，生活を囲い込んだ，自立する建築である．　しかし，この住まいでは，中庭が，透光性のあるガラスブロックの壁により囲い込まれている．　ガラスブロックの持つ二重性――透過性と遮断性――は，物理的な壁としての存在と，外部風景と住戸内風景の変換装置の二重の機能を果たしている．

都市に住むことと，建築のもつ都市性について考えながら，住戸を取り巻く外部の環境と閉鎖系であっても，光によって連続を保てないかと考えていた．



アイソメ図　isometric

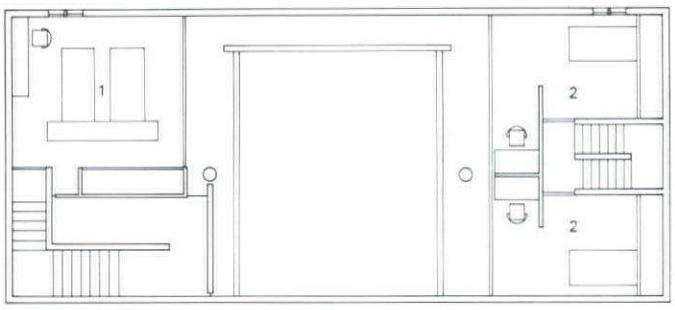
The building consists of a bare concrete wall enclosure and an independent glass block wall.

Each function of the building is separated north versus south, flanking the central courtyard.

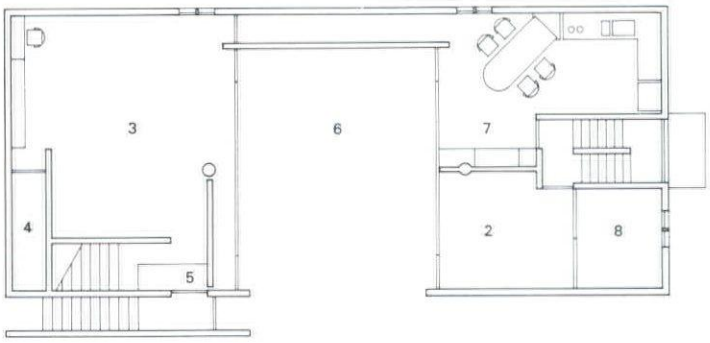
The independent glass block wall completes the courtyard which is the key to the interior scene, and bounds the private territory from the public.

The light which penetrates through the glass block wall clarifies each territory with change in time, and suggests the interaction between the architecture and the city. The morning light entering through the glass blocks sheds light upon the courtyard from the eastward direction to become the center of the interior scene. On the other hand, at dusk, the west light which filters through the glass blocks lights up the street. Here, the glass block wall is a "translucent wall" which corresponds between the residence and the city. In Horiuchi Residence, as in the "Row House Sumiyoshi," The walls carve out a part of the environment to isolate the life within. But here, the courtyard is enclosed by the glass block wall, a light admitting material. The double characteristics of the glass blocks—the transparency and the screening—achieve double functions: the wall as a physical entity and the wall as the liaison between the interior and the exterior.

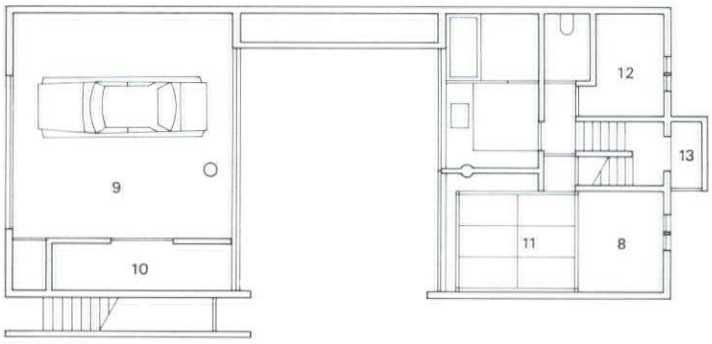
While thinking about living in a city and an urban character entailed by architecture, I wondered if I could achieve a continuity with the environment by modulating light, however introverted it may be.



3階平面図　third floor plan

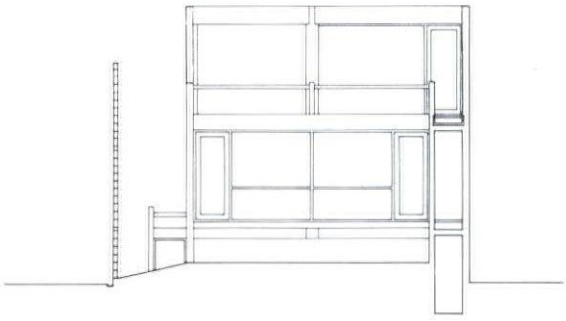


2階平面図　second floor plan

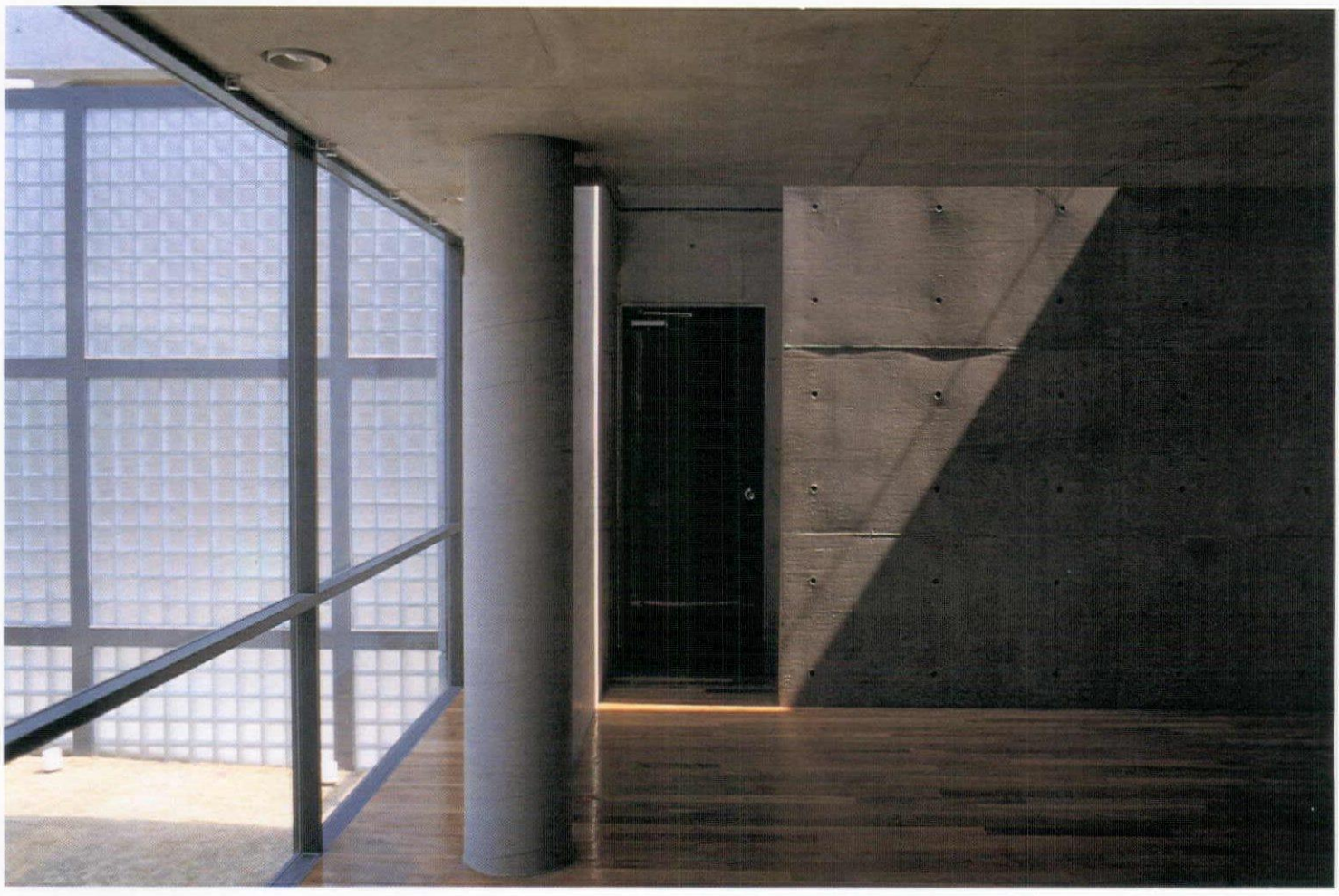


1階平面図　first floor plan　1：200

1　寝室　bedroom
2　個室　children's room
3　居間　living room
4　収納　closet
5　玄関　entrance
6　中庭　court
7　食堂　dining room
8　納戸　closet
9　車庫　garage
10　倉庫　storage
11　和室　tatami room
12　家事室　utility
13　勝手口　service entrance

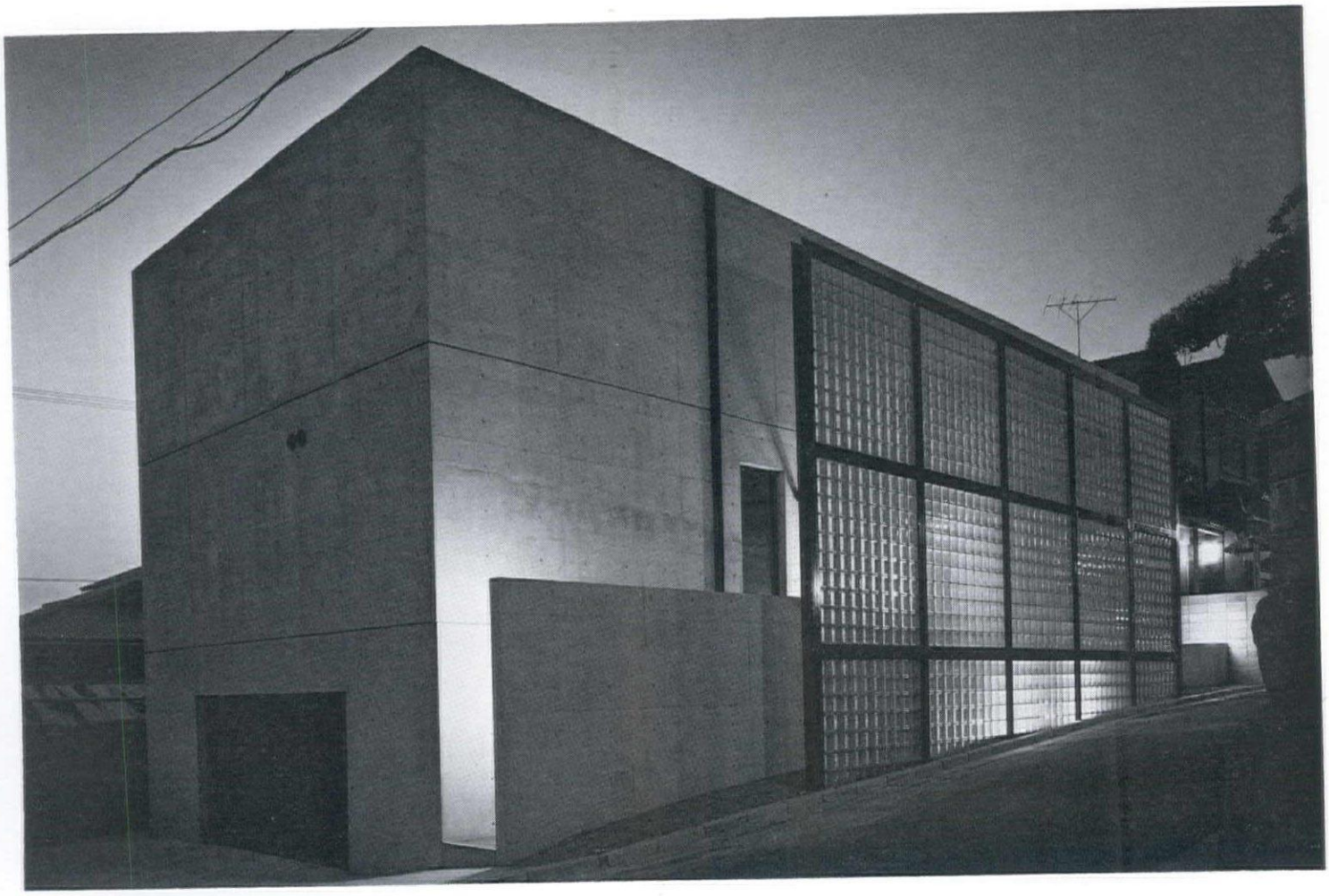


断面図　section









大楠邸 世田谷・東京

Okusu Residence 1978

敷地は動くことなく，また，永久に変わることはない．建築は，敷地の形状によってまず，形態が外側から規制される．　その範囲で，建築家は思い思いのイメージを描く．　建築設計行為の始点とも言える〈敷地を読み取る技術〉は，それ故に大切に考えたい．　大楠邸の敷地は，大規模な邸宅の切り売りによってできたＬ字形の不整形である．　導入部わずか数メートルの幅で，街路に接している．　敷地の示す形態上の志向性を組み込みつつ，自立した建築を形づくることが，設計のテーマであった．

周辺は，首都圏には珍しく，生い茂る木々に囲まれている．　古くからの高級住宅街である．　この住宅は，ファッションメーカーのオーナーと女優のために建てられた．

夫婦の職業柄接客の機会が多く，建物の構成は一般の住宅とは異なり，接客のためのスペースが全体の半分近くを占めている．　建物は，敷地の形状に従い，ふたつの細長いコンクリートの箱がＬ字形に交差するように配置されている．　このふたつのブロックは，街路に近い方を接客のためのスペース，奥の方を家族の住居スペースとして，機能的にも分節されている．

接客スペースとプライベートスペースの分離と融合は，この住宅内に幾つかの特徴ある階段や吹抜けを生み出した．　導入部の狭さという制約ある敷地形状が，単純な建築構成の内部に変化に富んだ空間をつくり出す起点となっている．

街路からの建物へのアプローチに独立して建てられた２連のコンクリートのフレームは，建物の奥行を暗示しつつ客を迎え入れる装置である．　エントランスアプローチの暗がりに続くゆるやかな階段は，上部の吹抜けから自然の光を受け，反射しつつ，訪れる人を２階の玄関ホールへと導いている．

連続する回廊の歩行感覚にも似て，光により演出され，前方に拡がる内部風景が，人を建物の奥へ奥へと誘導する．

エントランスアプローチにはじまる白いタイルの敷きつめられた床は，その幅と高さを違えつつ人を誘い込み，やがてその素材を替えて，住み手にくつろぎの感覚をもたらしている．

A site does not move and does not change. Architecture, due to land forms, receive restrictions from the outside. Within the confinement, architects depict images as their creativities allow. I want to seriously consider "site interpretation method" which is the starting point of architectural design.

The site for the Okusu Residence was an L-shaped awkward piece of land which resulted from a separately sold portion of a large estate. The house adjoins the road, with its frontage being only a few meters. My design theme was to create an independent architecture while respecting the intention manifested by the site.

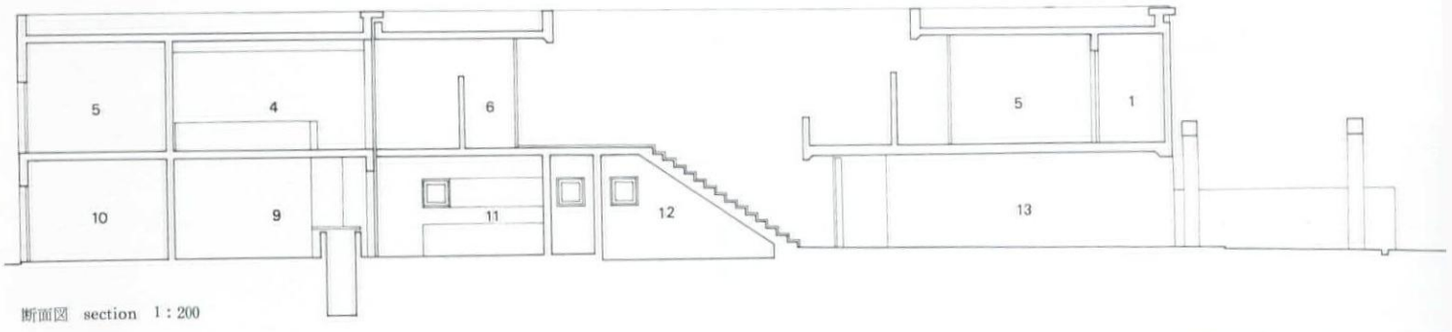
The neighborhood is rich in greenery, unusual for suburbia of the capital. It has long been an upper-class residential district. This house was built for an owner of a fashion design company and an actress. Due to the nature of the couple's jobs, there are a lot of guests. And therefore, the building composition is different from a conventional house, and the ceremonial space for guests occupies almost half of the entire house.

The building, following the contour of the land, is L-shaped in plan where two slender concrete boxes are placed perpendicular to each other. These two blocks are functionally separated, the one closer to the road as the guest space, and the one in the rear as a space for family living.

The integration and separation of the private space provided this residence with a several unique characteristics, such as the ceremonial stairs and the open wells. The narrow approach of the restrictive site was the inspiration in introducing a variety of events within a simple composition. The two sets of concrete frames which stand independently of the main volume suggest the depth of the building, while acting as a gate in leading the guests inside. The gradual stairs following the dimly lit entrance receive and reflect the natural light from the opening above, and invites the guests into the hall.

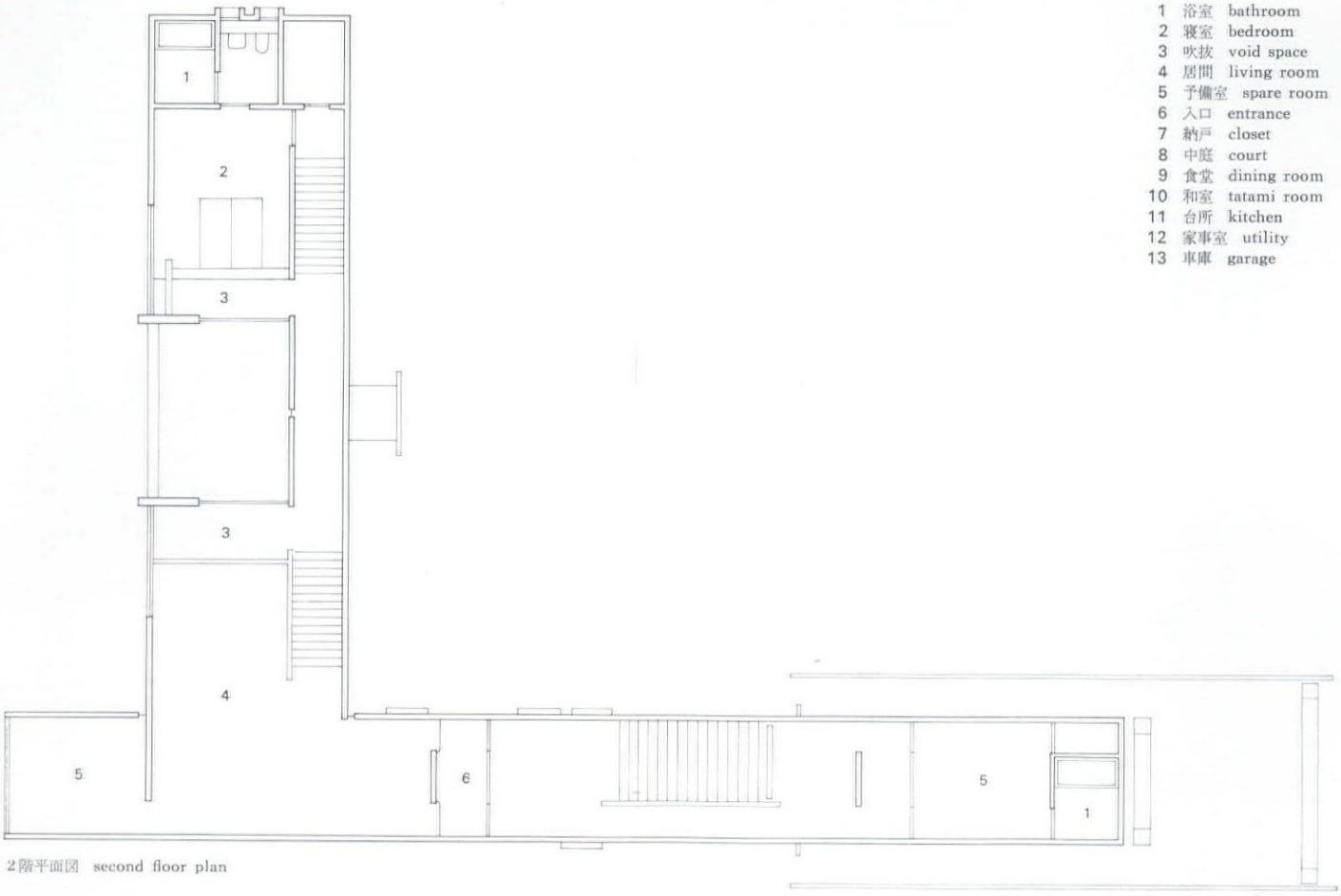
Reminiscent of a walk through a processional corridor, the entrance approach is performed by light, and the expanding interior scene pulls a person deeper and deeper into the house.

The white tile floor which extends from the entrance invites the people while changing its width and height. Eventually, by transforming the material, the relaxing atmosphere is brought about for the owners.

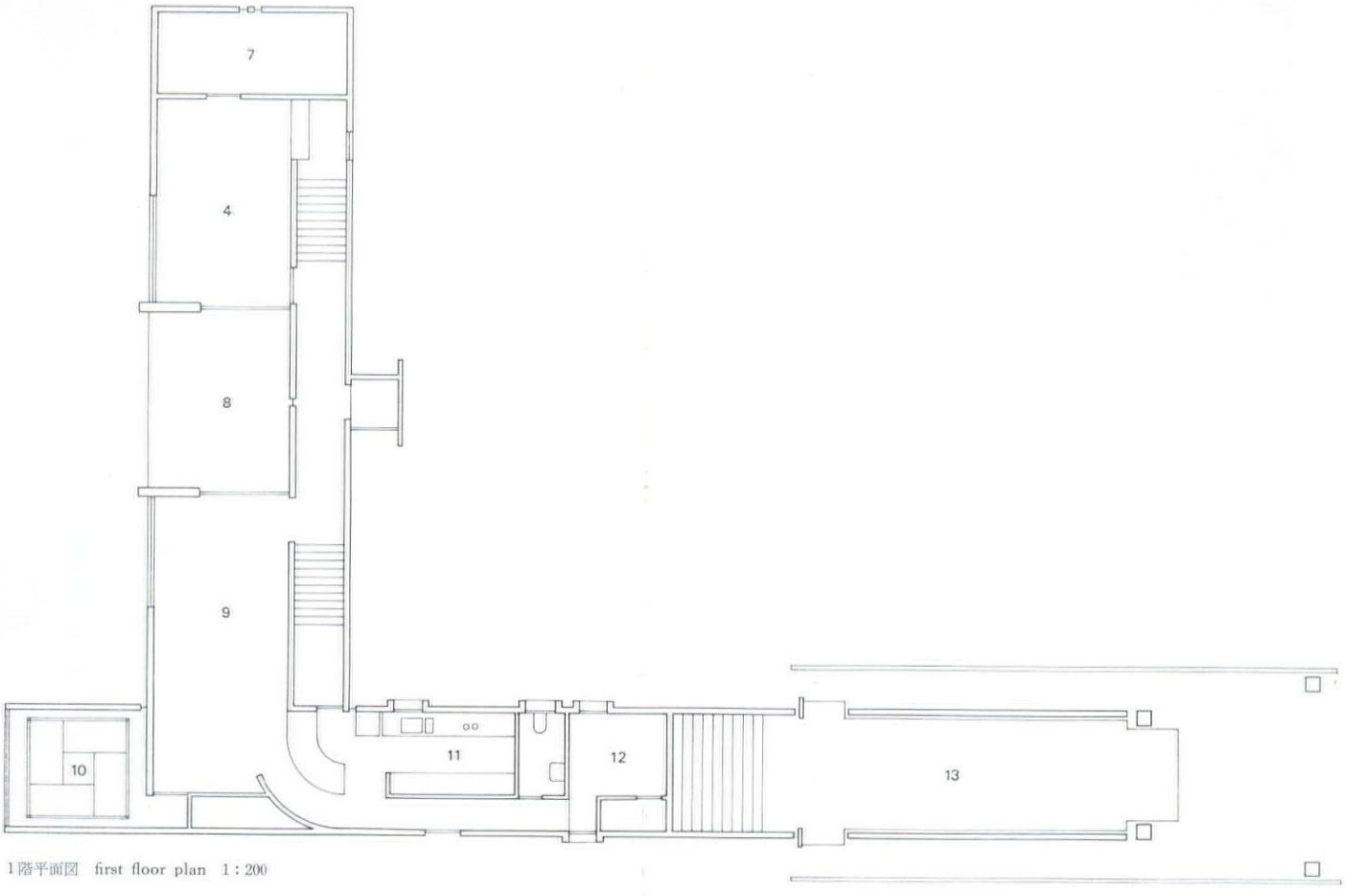


断面図 section 1：200

1 浴室 bathroom
2 寝室 bedroom
3 吹抜 void space
4 居間 living room
5 予備室 spare room
6 入口 entrance
7 納戸 closet
8 中庭 court
9 食堂 dining room
10 和室 tatami room
11 台所 kitchen
12 家事室 utility
13 車庫 garage



2階平面図 second floor plan

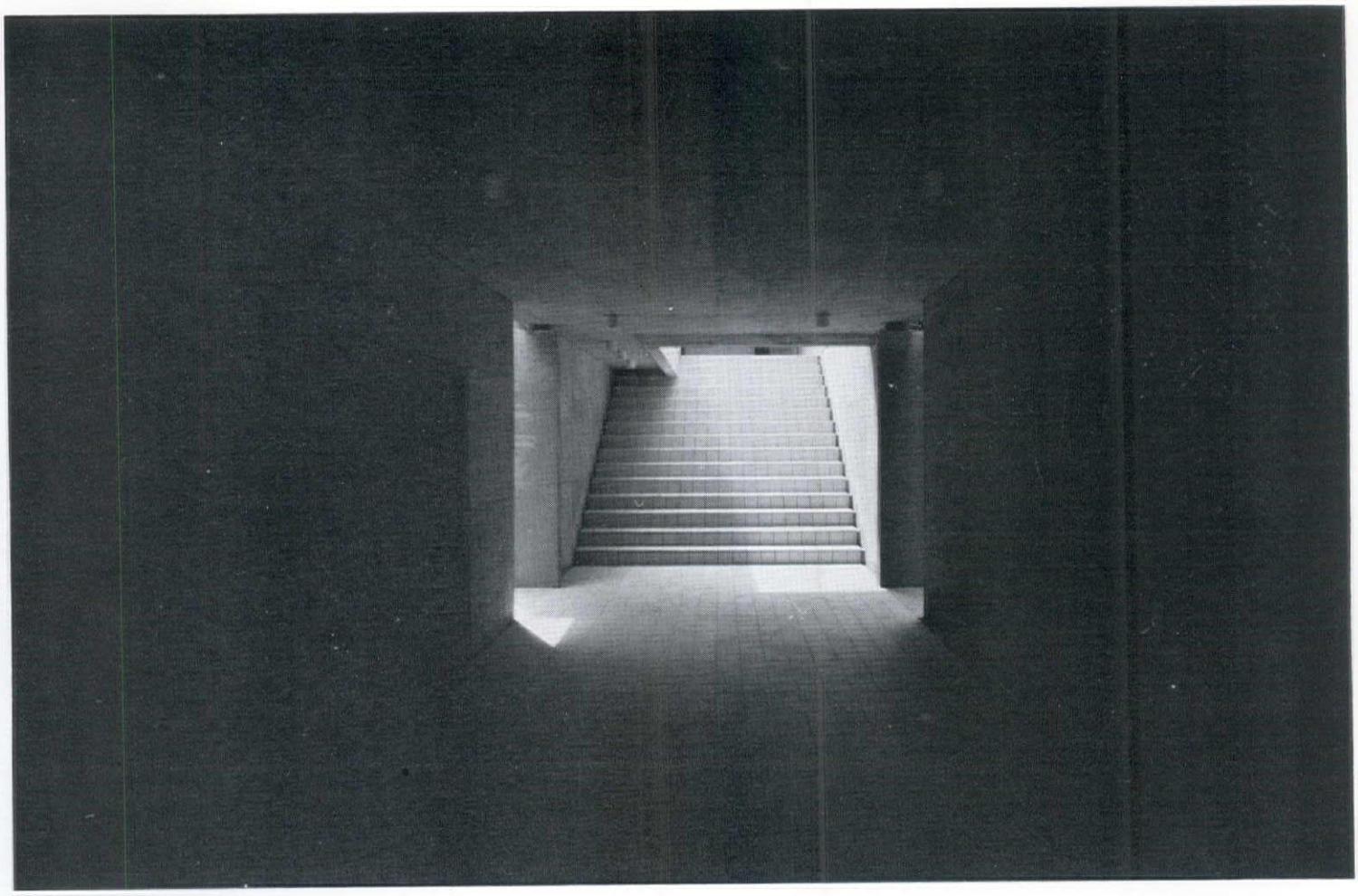


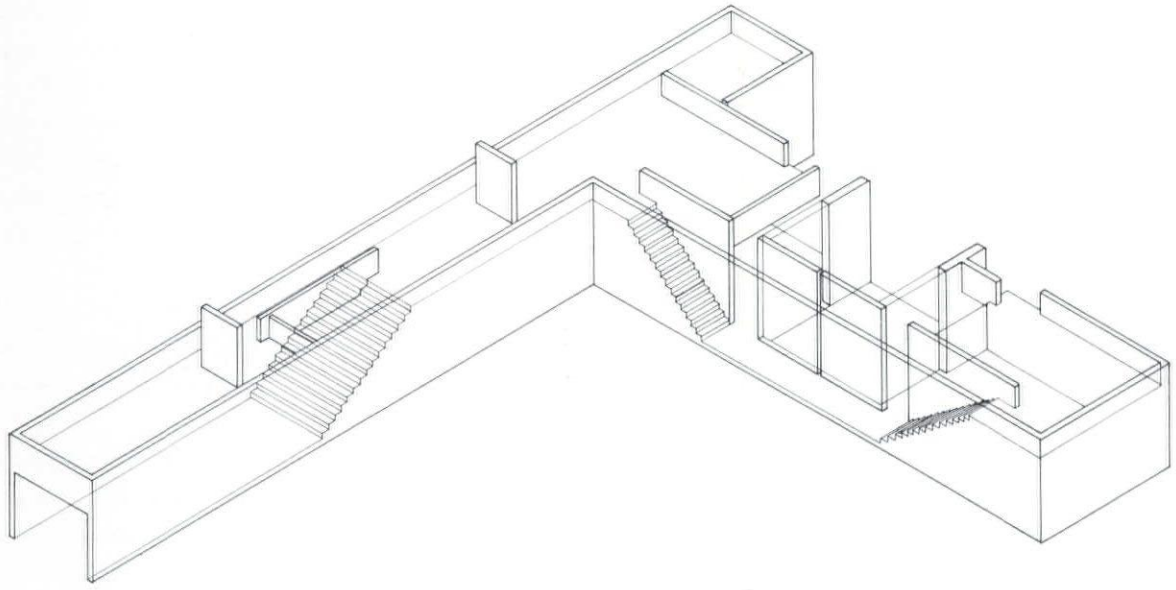
1階平面図 first floor plan 1 : 200







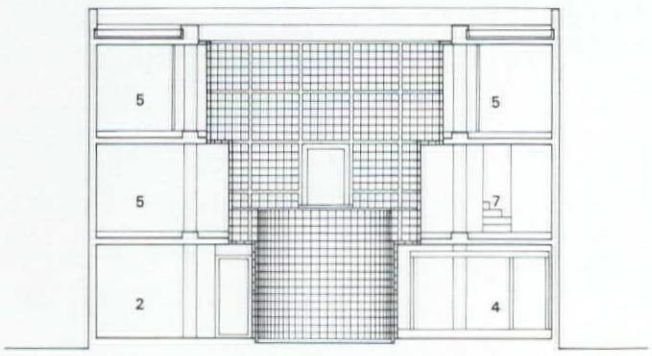




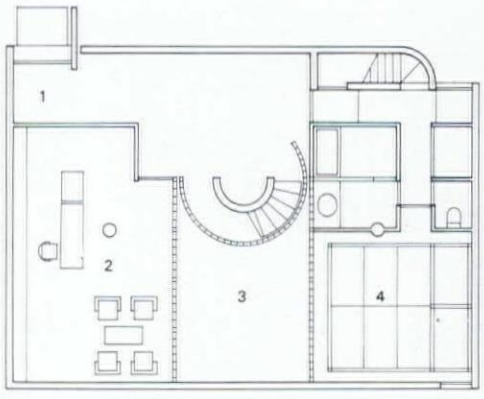
アイソメ図　isometric

ガラスブロックの家（石原邸）大阪市生野区勝山・大阪

"Glass Block House" Ishihara Residence 1978



断面図 section



1階平面図 first floor plan 1：200

領域の設定という問題は，個人の住宅を設計する際には特に重要である．

壁によって閉ざされ，囲われているが，吹き抜けを中心として流動する内部空間への興味は，さらに，プライバシーを重視し独立性を附加された個室によって構成される建築へと移行して来た．

石原邸では，壁の材料として，ガラスブロックを使用し，住戸に必要な光量と個室のプライバシーを，狭小な敷地の中に確保している．

周辺は建物用途の混在している地域で，中小の工場や商店が建ちならび，その間隙に住宅がひっそりと建っている．

両親と子供夫婦の2世代住居と，経営する家具会社の応接スペースが求められた．

これら3つの機能を，プライバシーを保ちつつ複合することが求められ，それはガラスブロックの使用によって可能となった．

コンクリートの厚い壁が環境を切断し，中庭を核とした生活空間を構成している． 建物は3階建てである．南側を両親，北側を子供夫婦のスペースとする平面構成と，パブリックな諸室を低層部に，プライバシーの高い諸室を高層部に配置するという断面上の構成によって，機能空間の領域設定が明確になされている．

ガラスブロックの壁は中庭に面してたてられ，コンクリートの壁が規定するこの住居空間を，さらに等容積の外部空間と内部空間に分割している． この素材のもつ光の透過性と視覚的遮断性は，各室に柔らかな光と高いプライバシーを，同時に与えている． 上層部に行くに従ってセットバックするガラスブロックの壁の断面構成は，中庭を通してこの住戸に吹き込む自然の明暗・陰影のリズムと，物理上，機能上の要求を段階的に対応させている．

室内に拡散された自然の光は，冷たく無機的なコンクリートの存在を忘れさせる． 日本の建築のもっている，障子を通した薄明かりと静けさが，この近代建築の生み出した材料によって，再びつくり得たのではないかと考えている．

私がこの時期までに設計した住宅の中では，家具は，強く射し込む直射日光を浴びて，その明確な輪郭を表わしつつ建築の一部を構成していた． しかしここでは，形態の厳密さを超えて，むしろ優しさを漂わせている． 柔らかな光の中で，自然の素材によってつくられた家具は，人への親しみの感情を増しているようだ．

家具は，住まいで営まれる個人の生活の表出であり，建築を設計する際に人間的なスケールの手掛りとなるところである． 人は，住宅の中にあって，家具に手を触れながら，物質の存在を認識していく． 近頃の材料の質の低下や，職人の技術の低下は，満足のいく家具をつくり難い状況に追い込んでいる． 材料や技術を自由奔放に語らせることなく，それらを創る者の側の範疇に収め，めざす空間のコンセプトを建築とともに語り得る家具をつくりたい．

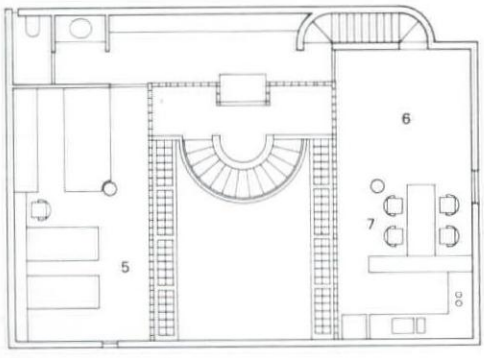
無機的なコンクリートの箱と，有機的な自然の素材．素材のテクスチュアは，その表面のかもし出す雰囲気を超えて人に語りかけ，触覚の記憶となって人の心深くにとどまる． 可能ならば，建築の空間構成に終わることなく家具までもつくりたいと常に考えている．しかし，経済上の理由が先行して，生活を支える外殻をまずつくることになる． いきおい，建築は裸形の表現にとどまり，生活の匂いの部分がつくられず，建築は未完のまま一旦完了してしまうことが多い．

Defining territoriality becomes an important issue, particularly in designing a personal residence.

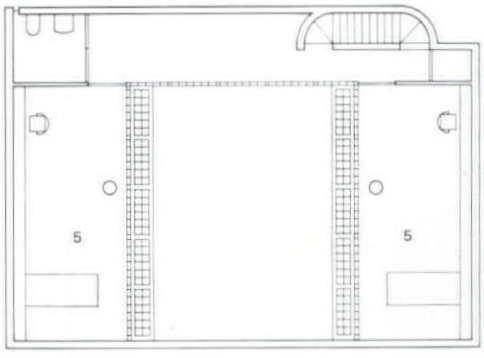
My interest toward a dynamic interior space around an open shaft has developed into a composition based on individual rooms with emphasis on privacy and independence.

In Ishihara Residence, the glass blocks are used as a wall material to accomplish natural lighting, while protecting privacy in a minimal piece of land.

1 入口 entrance
2 事務室 office
3 中庭 court
4 和室 tatami room
5 寝室 bedroom
6 居間 living room
7 食堂 dining room



2階平面図 second floor plan



3階平面図 third floor plan

The surrounding environment is congested with buildings, with small factories, and shops. Amongst them, quietly stands the house.

A two-generation home for a young couple and their parents, with a reception area for their furniture shop were the programmatic requirements. The three separate functions had to be combined, yet each had to maintain its privacy. The task became possible by the use of the glass blocks.

The thick concrete walls cut off the environment and generate a living space centered around the courtyard. The building is of three stories. The functional spaces are clearly distinguished in plan by providing the south side to the parents and the north side to the young couple. The demarcation is further accomplished in section by placing the public space in the lower level and highly private space in the upper levels.

The glass block walls facing the courtyard divide the territory, delineated by the concrete enclosure, into two equal volumes of the interior and the exterior. The luminary transparency and the visual screening of the glass blocks simultaneously provide filtering light and high privacy to each room. In section, the glass block walls set back with height. It corresponds the hierarchy of light, dark, shades, and shadows with the physical and functional requirements.

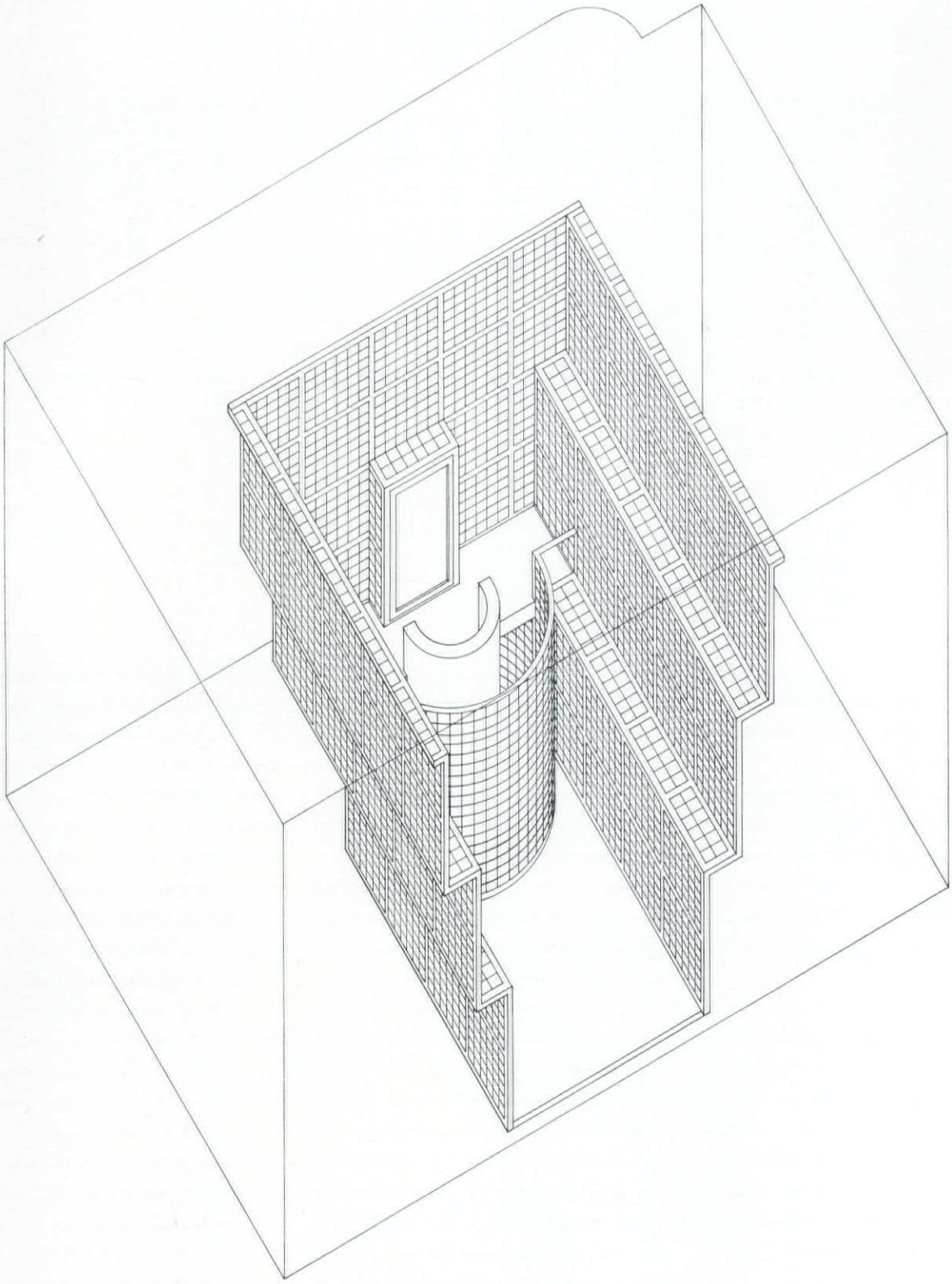
The natural light admitted inside denies the cold and inorganic existence of concrete. The faint light and silence sensed through the shoji screen, particular to the Japanese architecture, must have been recreated by the glass blocks, a modern architectural material.

In houses which I have designed so far, the furniture which receives direct light and expresses clear sillouette acts as an element of architectural design. But in this house, the furniture goes beyond its meticulous form to express its gentleness. In the soft filtering light, the furniture produced from natural materials intensify the emotional intimacy of the people.

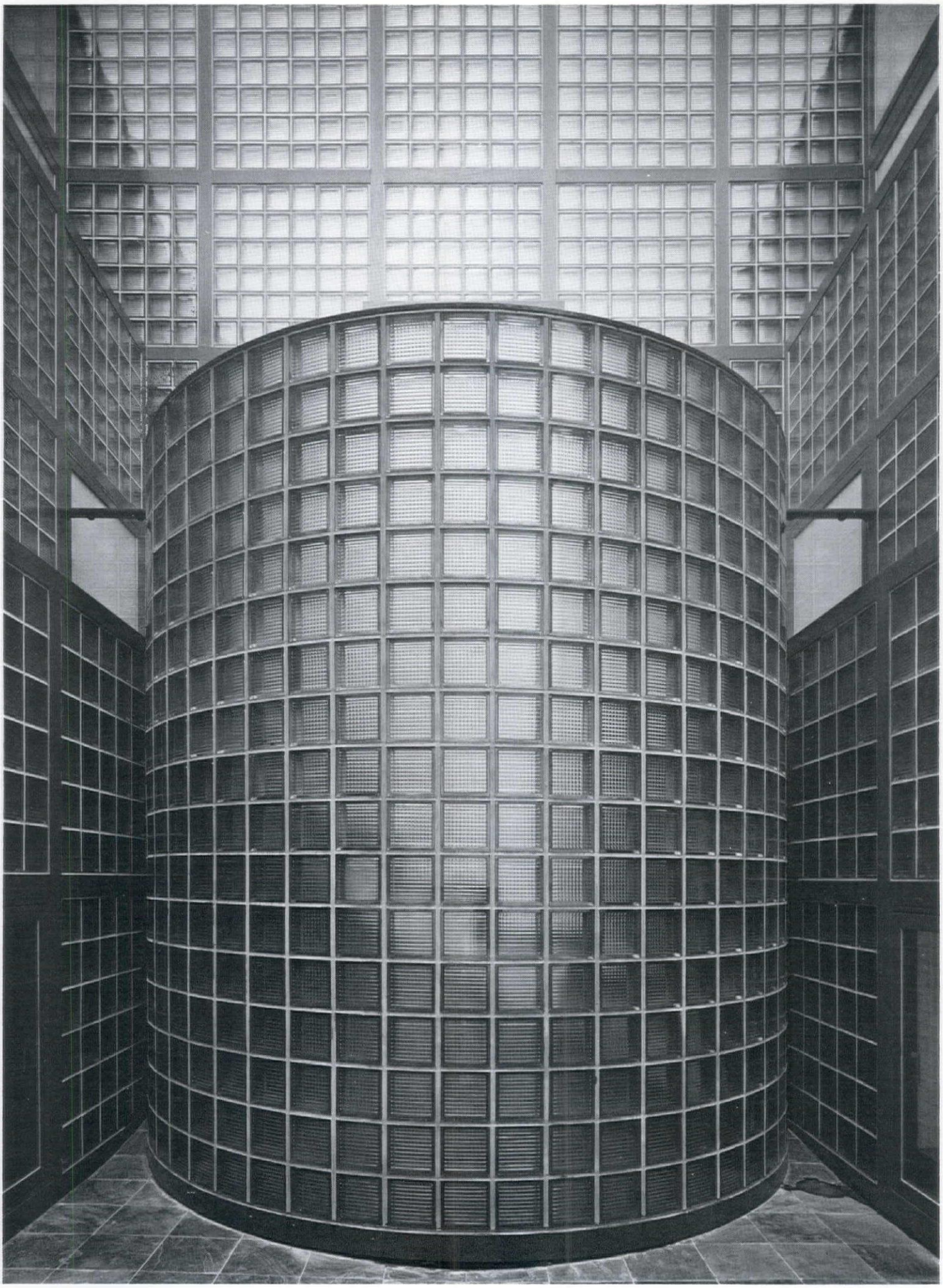
Furniture depicts the life of an individual for which it serves. At the same time, it provides design clues by presenting human scale. A person residing in a house recognizes the physical entity by touching the furniture. The deterioration in material quality and the decline in craftsmanship in the recent years make it difficult to obtain furniture of excellence. I want to create the furniture which manifests the descipline of the designer rather than the one which exhibits the materials or the technique. Moreover, I expect the furniture to communicate the spatial concept along with architecture.

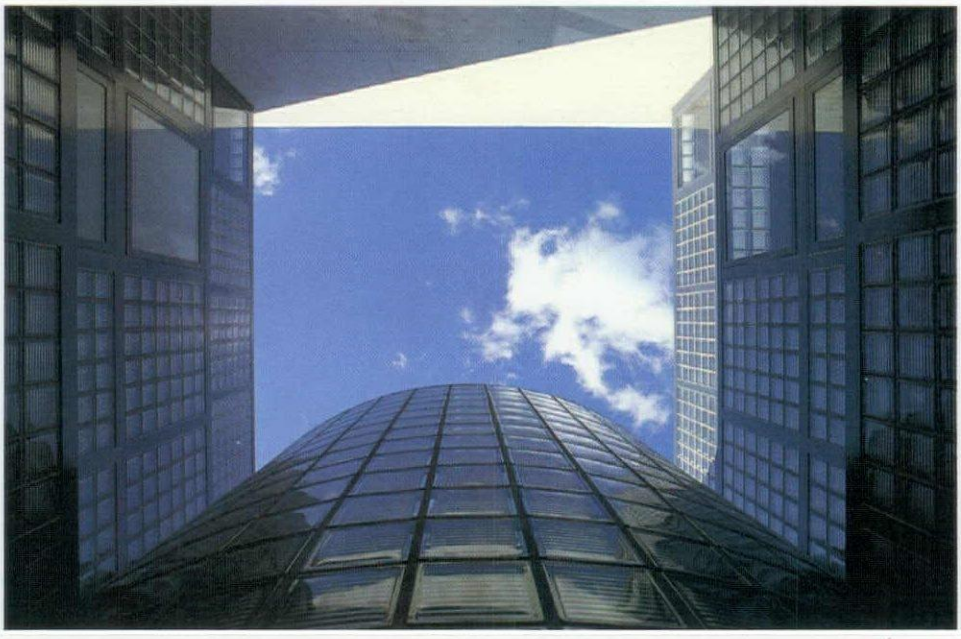
An inorganic concrete box contrasted with an organic material—the material textures speak for themselves beyond what could be sensed through vision, and engrave a strong image in the viewer's minds.

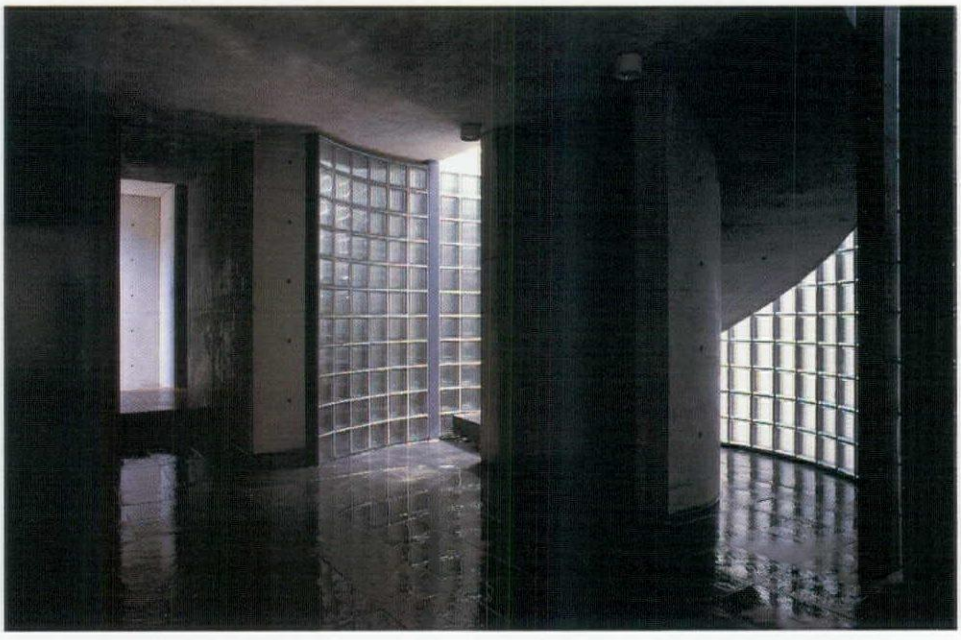
If possible, I do not want to simply end with the spatial composition of architecture. It is my constant hope to design the furniture as well. But the priority is always on the finance, and I must start with the skeleton, which supports the daily living. The architecture often remains bare in its expression, with a disregard for the flavor of life; and it temporarily ends with an incomplete form.

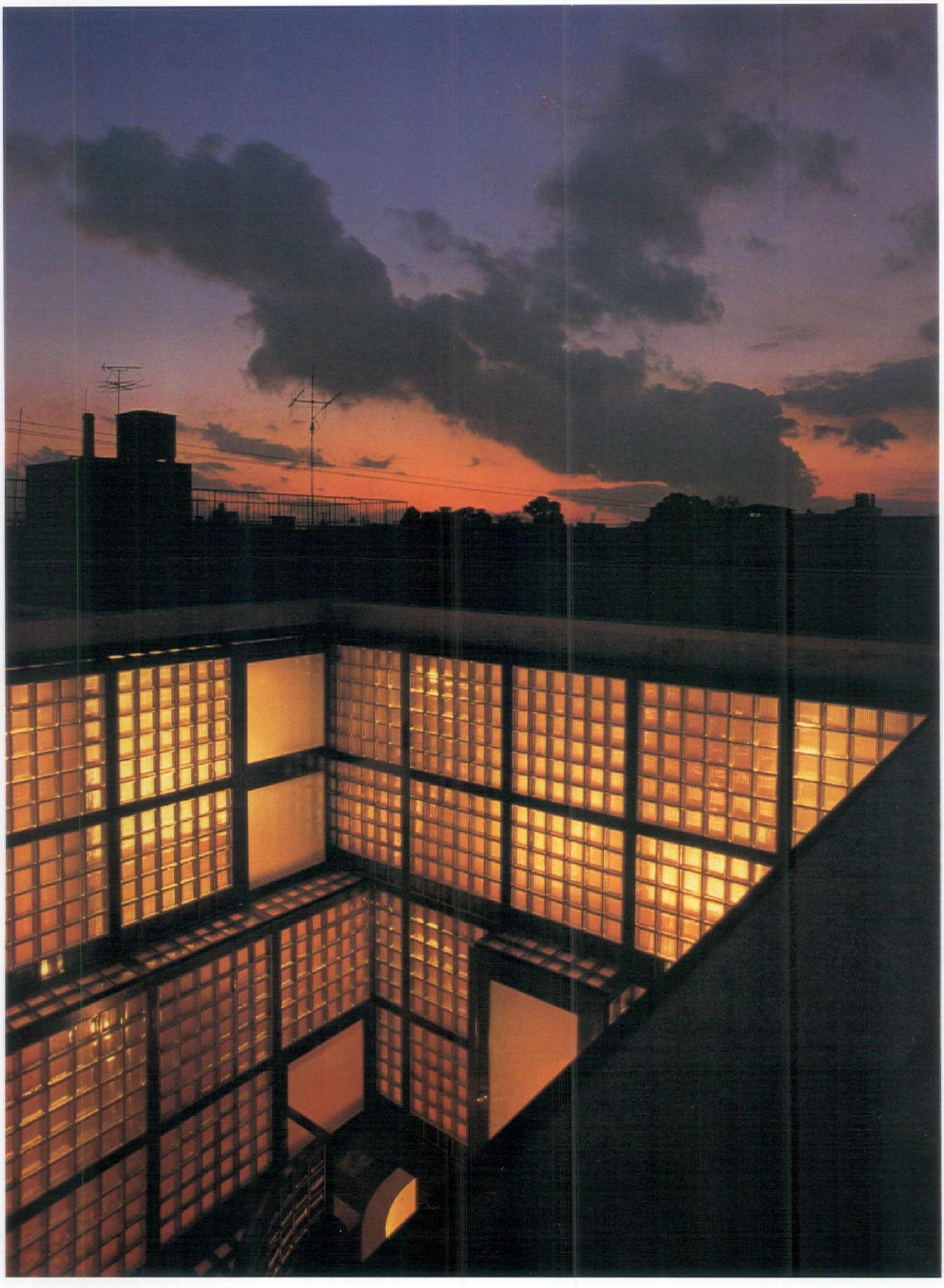


アイソメ図 isometric 1：100

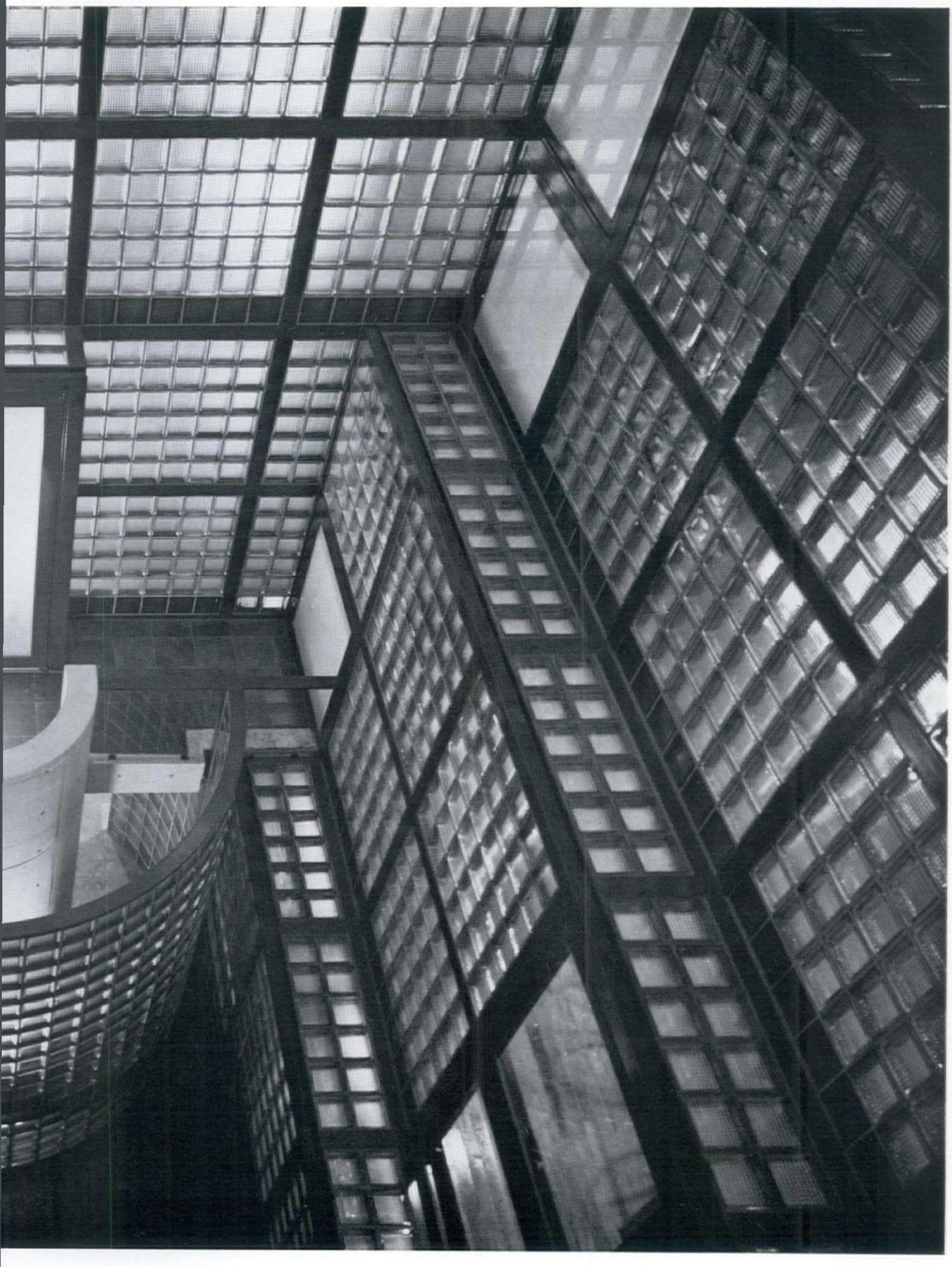


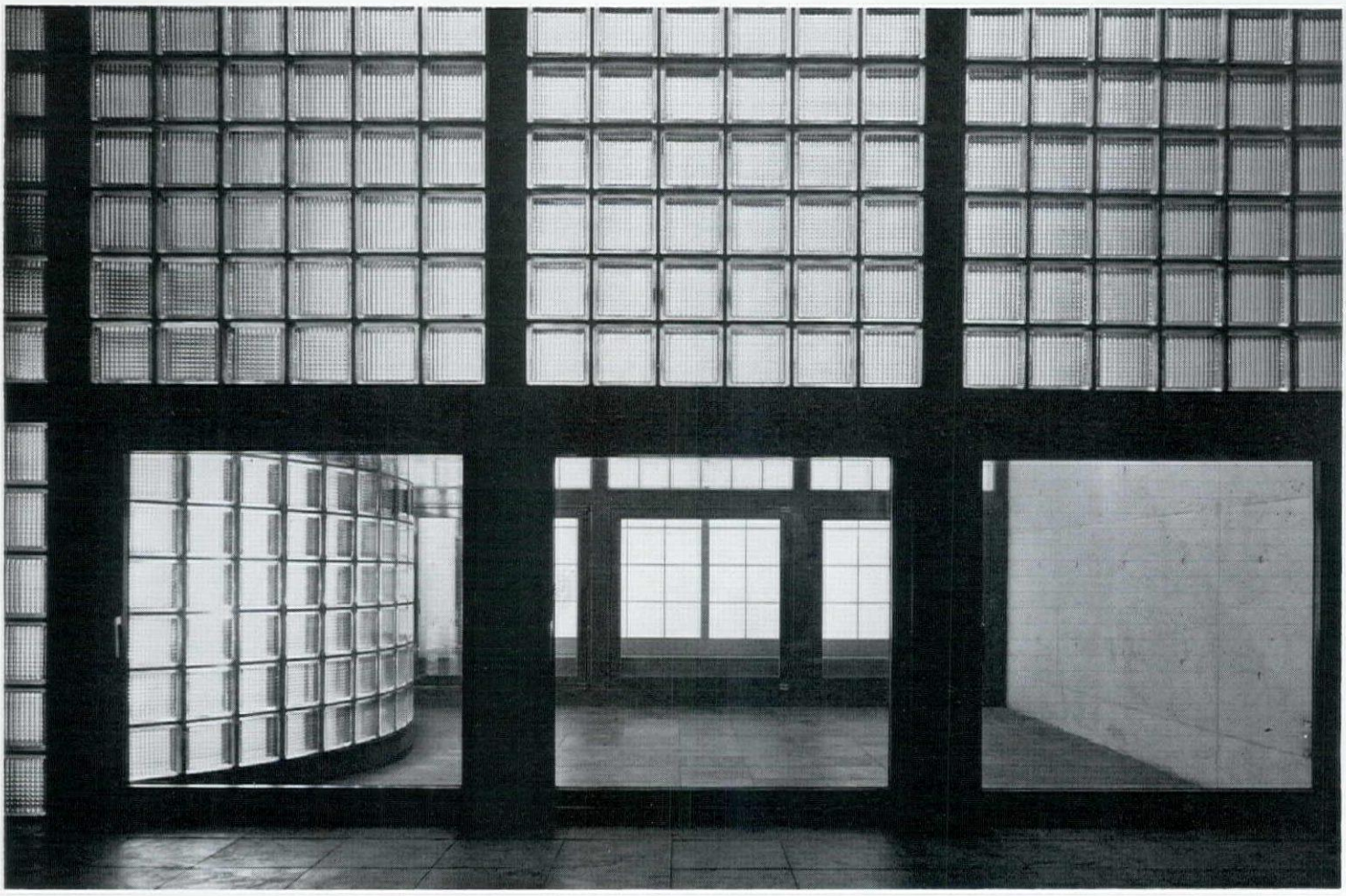


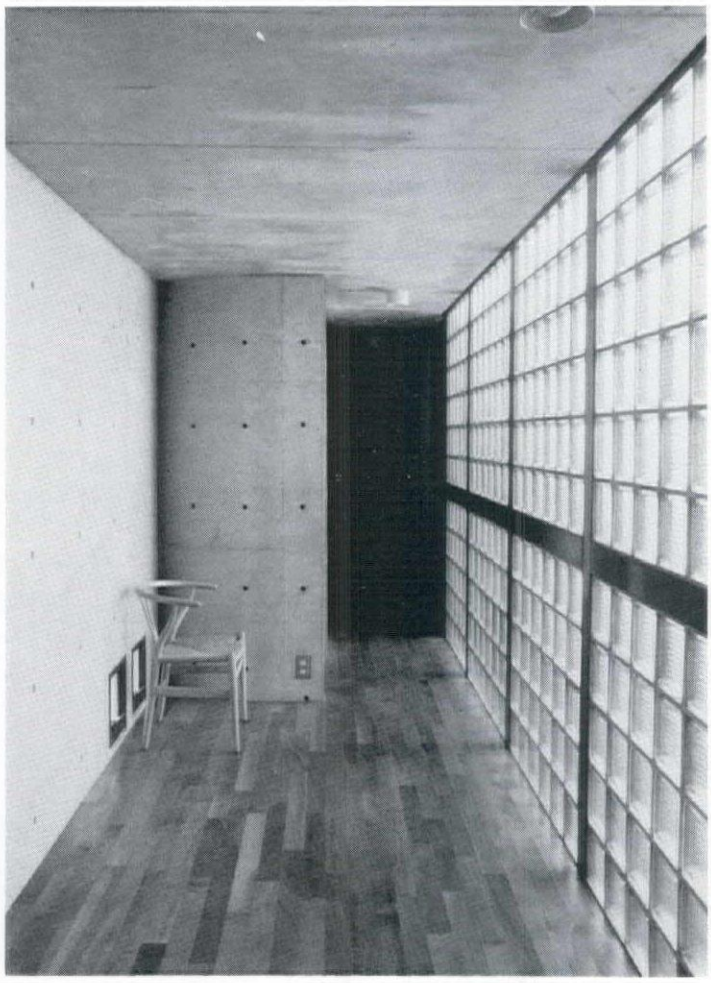












帝塚山の家（真鍋邸）大阪市阿倍野区北畠・大阪

"Tezukayama House" Manabe Residence 1977

附近には，徒歩7～8分の距離に，帝塚山タワープラザ・堀内邸・大西邸・住吉の長屋と，私の仕事の幾つかが集まっている．

建物は，傾斜する敷地に挿入された均等な構成のフレームと，敷地をとりかこむ壁，45度に振られた自立する壁より成り立っている．　敷地をとりまく壁は，敷地のもつ平面上のずれを吸収し，フレームは断面上のずれに対応する．　その対応の過程で，フレームは，生活機能の分離，プライバシーの獲得を果し，自然との触れ合いの場としての斜面の中庭を生み出した．

分離されたブロックの北側は，1階を玄関・居間・食堂・浴室，2階を客室・子供室とし，南側に主寝室を配して機能構成が行なわれている．

このような機能空間の分節は，内部にあっては，外部より流れ込む光や風によって住み手に空間に対する意識を与える．

北面する壁のスリットよりキッチンに射し込むわずかな光，トップライトから反射しつつ廊下に落ちる淡い光．　これらはいずれも壁とフレームの狭間からの光であるが，この住宅の建築構成を明確にする一方で内部空間を活性化し，食事・語らい・歩行といった生活の「部分」をそれぞれの空間に分節している．

45度に振られた自立する壁は，フレームのつくる等質な空間に切り込み，光の分節を伴いつつ，機能の分節を行なっている．　この壁がもたらした暗い食堂は，明るい部屋で構成されているこの住宅の引力となって，落ち着いたスペースをつくり出している．

フレームと壁，シンメトリー，均等分割と，私の建築にあらわれてくる形態言語は構成的である．　しかし，構成的に建築をつくることは目的としていない．　先行するのは常に部分であり，部分のイメージの再編成を通して構成的な全体があらわれてくる．　真鍋邸の自立する1枚の壁は，単純な構成をさらにつき崩すものとして，空間上の存在理由を成立させている．

Several of my works are gathered in the neighborhood, within seven to eight minute walk from each other. They are Tezukayama Tower Plaza, Horiuchi Residence, Onishi Residence, and the Row House Sumiyoshi.

The building is composed of a uniform framework inbedded in a sloping site, walls enclosing the site, and an independent wall slid in at a 45 degree-angle. The enclosing walls adjust for the site irregularities in plan, and the frames cope with them in section. While adjusting to the site, the frames attained the separation of the different living functions, and the acquisition of privacy. At the same time, a sloping courtyard was generated to provide a place which comes in contact with nature.

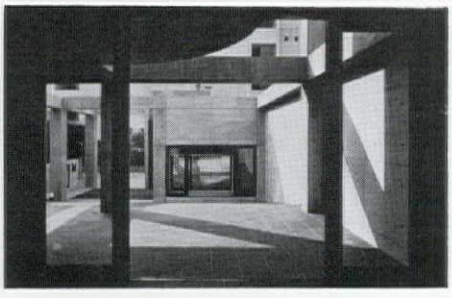
The northern block of the two separate volumes contains the entrance, the living room, the kitchen, and the bathroom on the first floor; the guest room, and the children's bedrooms on the second floor. The programmatic requirements are fulfilled by allocating the master bedroom in the southern block.

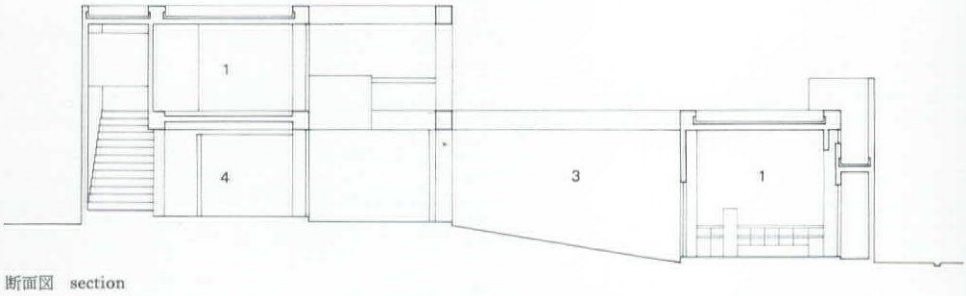
In this house the spatial definition is accomplished by the different sensations of infiltrating light and wind from the outside which one feels against the different functions lying inside. A speck of light flitering into the kitchen from a slit opening on the north wall, and the light from the skylight, becoming tender after being reflected against the opening, falling on to the corridor—these are both light entering from the narrow openings created between a wall and a frame. On the one hand, this type of light contributes in clarifying the architectural composition of the house, but on the other, vitalizes the interior space, and spatially allots the "elements" of living such as eating, conversing, and walking.

The independent wall standing at a 45 degree-angle pierce through an uniform space generated by the frames and while modulating light, it defines functions. The dark dining room which resulted from this oblique wall acts as a gravity in eliciting a comforting space in the house filled with light.

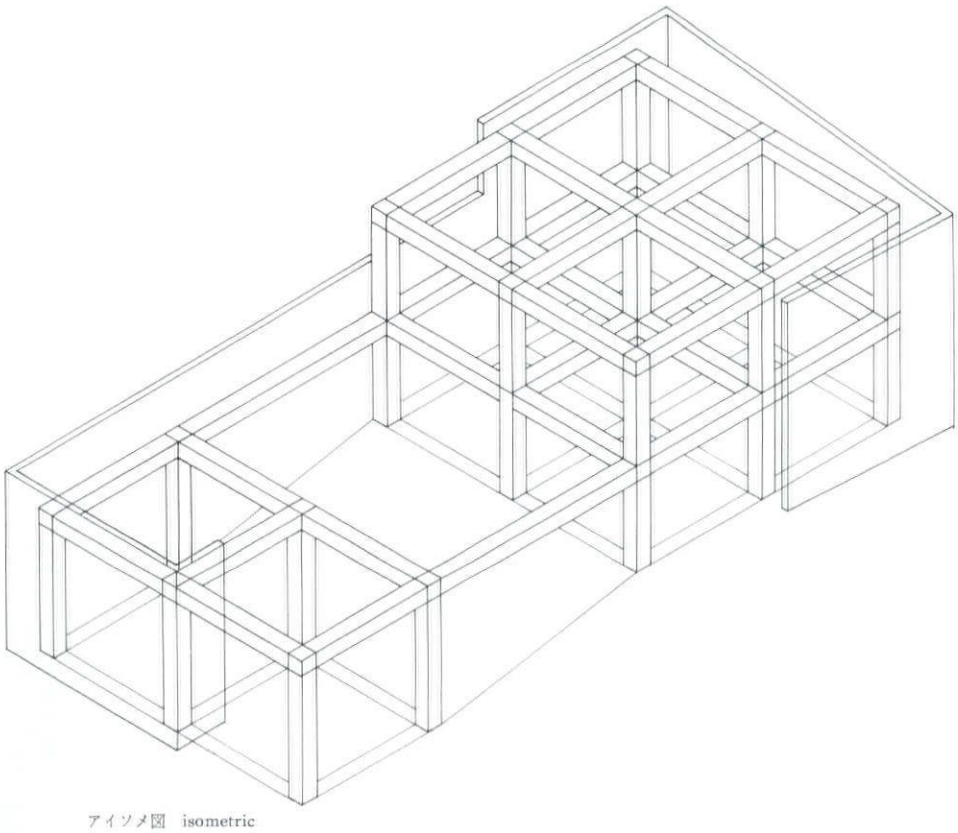
Frames, walls, symmetry, binary division—the formal language which appears in my architecture sounds systematic. But it is not my intention to systematically formulate architecture. The priority is always on the parts, and through the reconstruction of the images of these parts, appears the composite whole.

The only independent wall standing in Manabe Residence achieves its intent by moderating the otherwise regular composition that results from the framework.

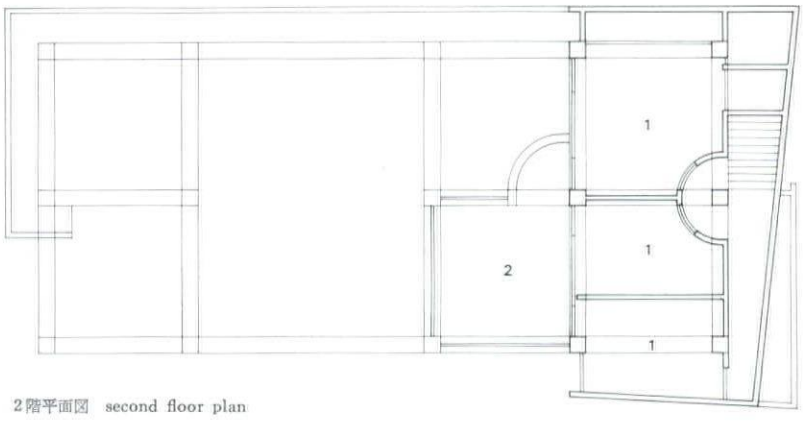




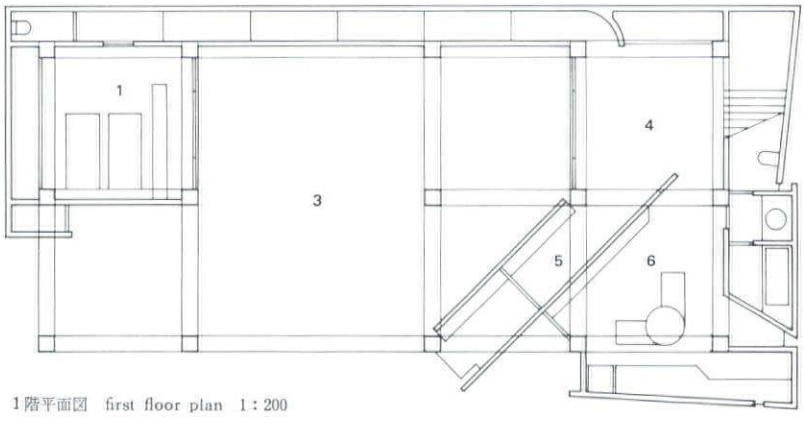
断面図　section



アイソメ図　isometric

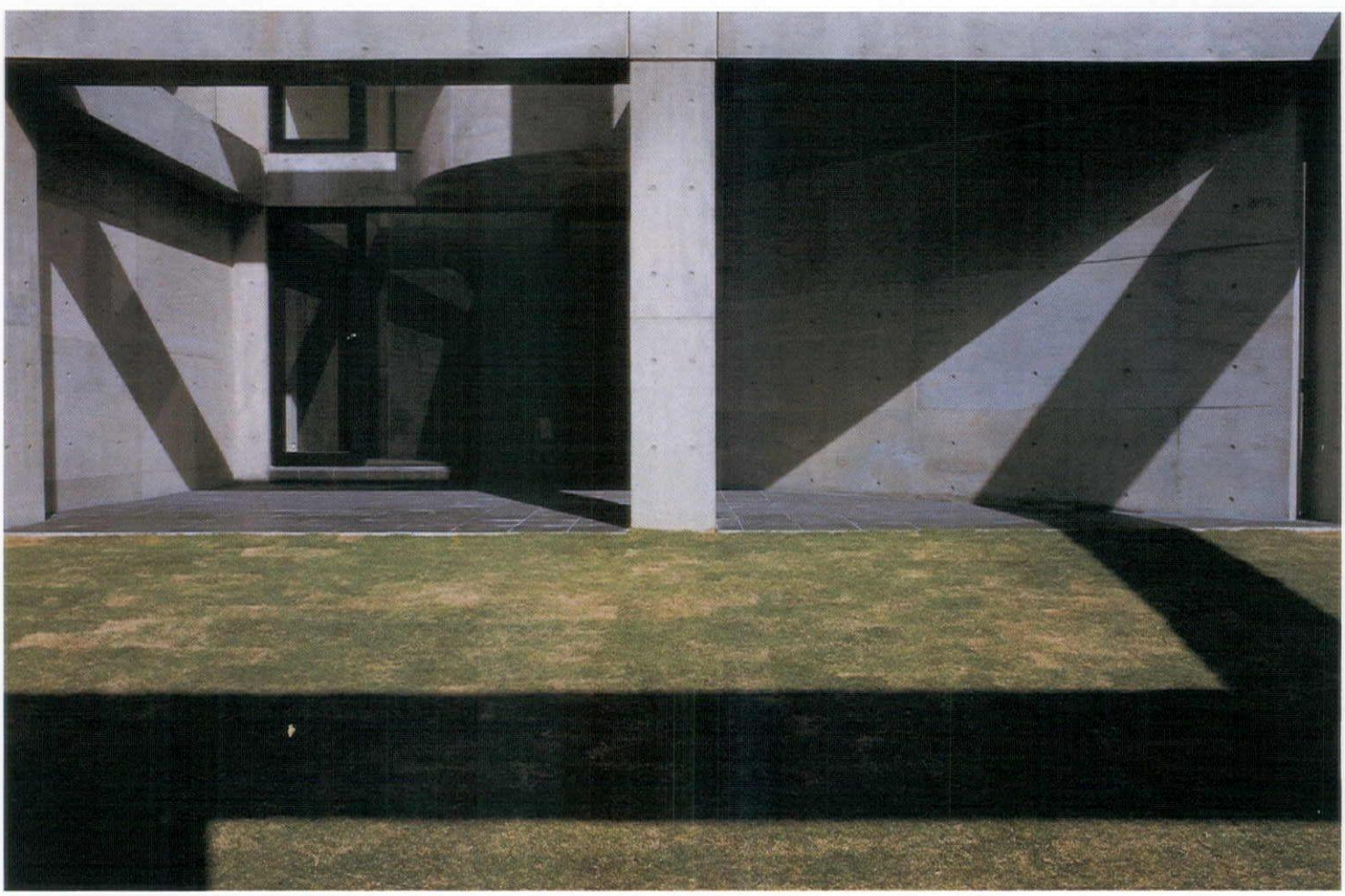


2階平面図　second floor plan

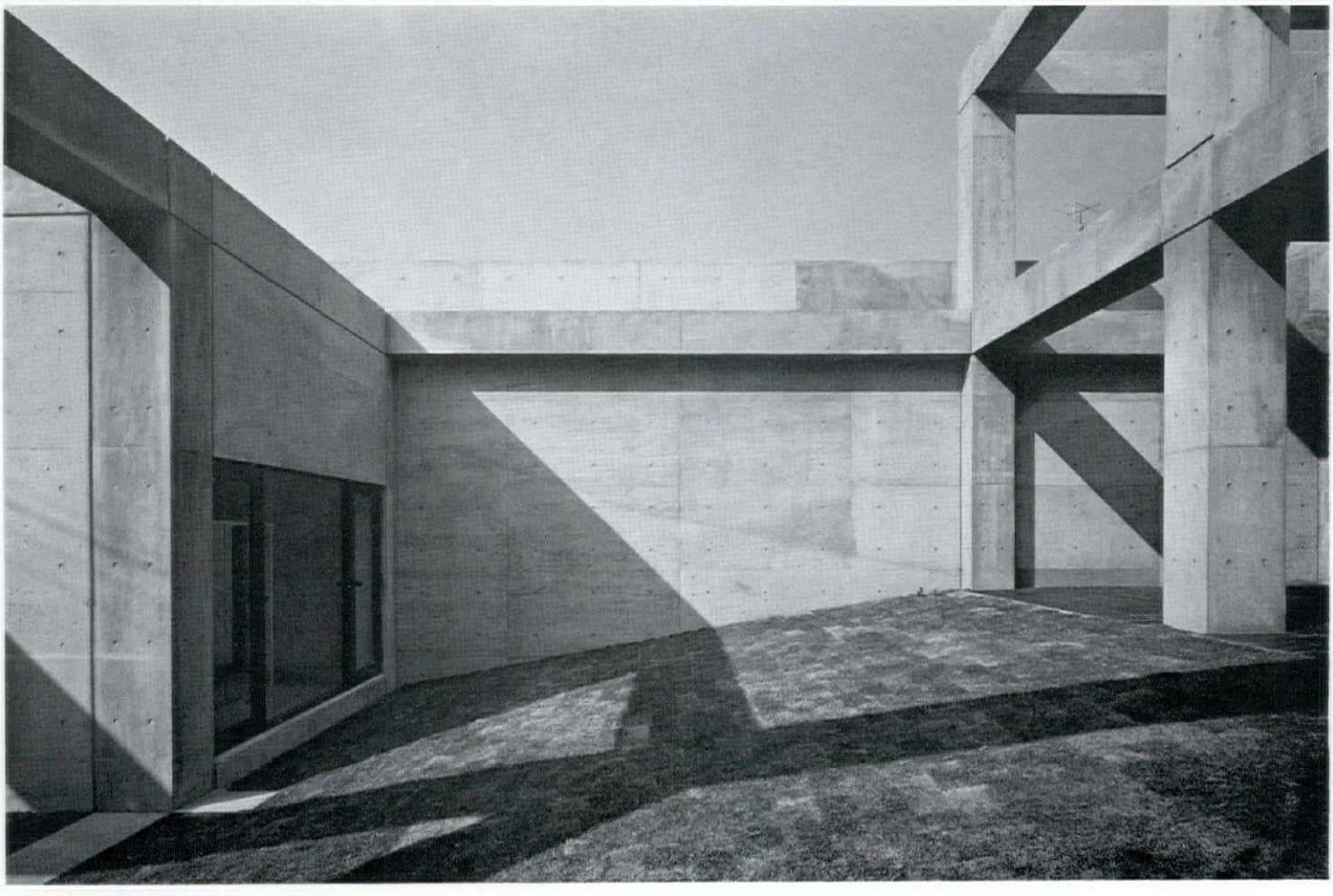


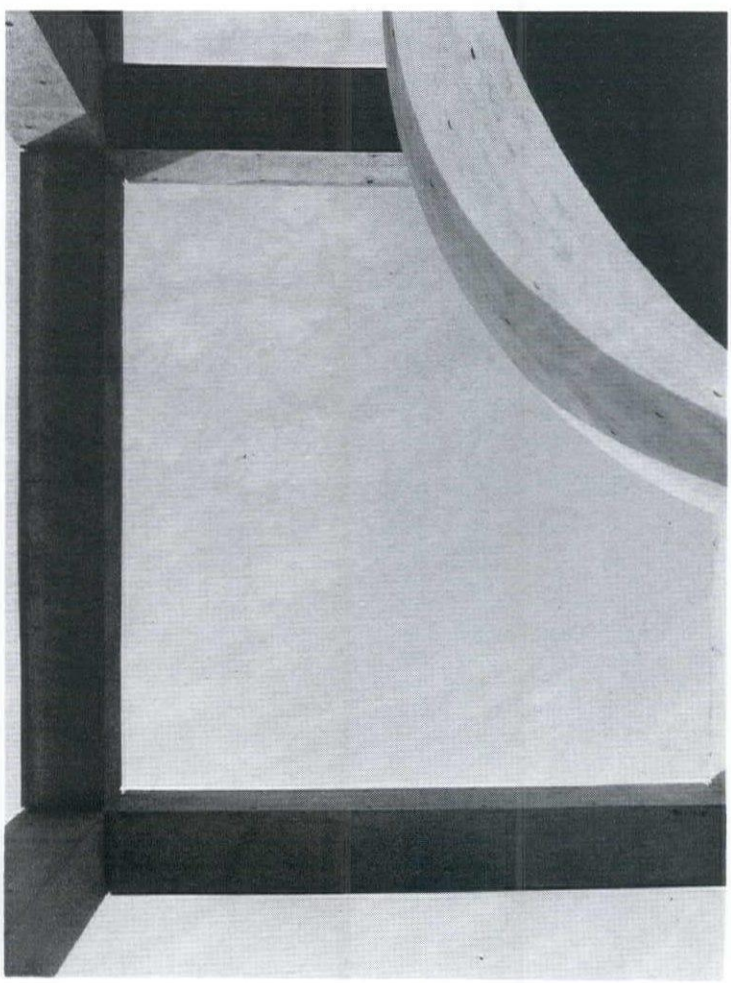
1階平面図　first floor plan　1：200

1　寝室　bedroom
2　テラス　terrace
3　中庭　court
4　居間　living room
5　入口　entrance
6　食堂　dining room

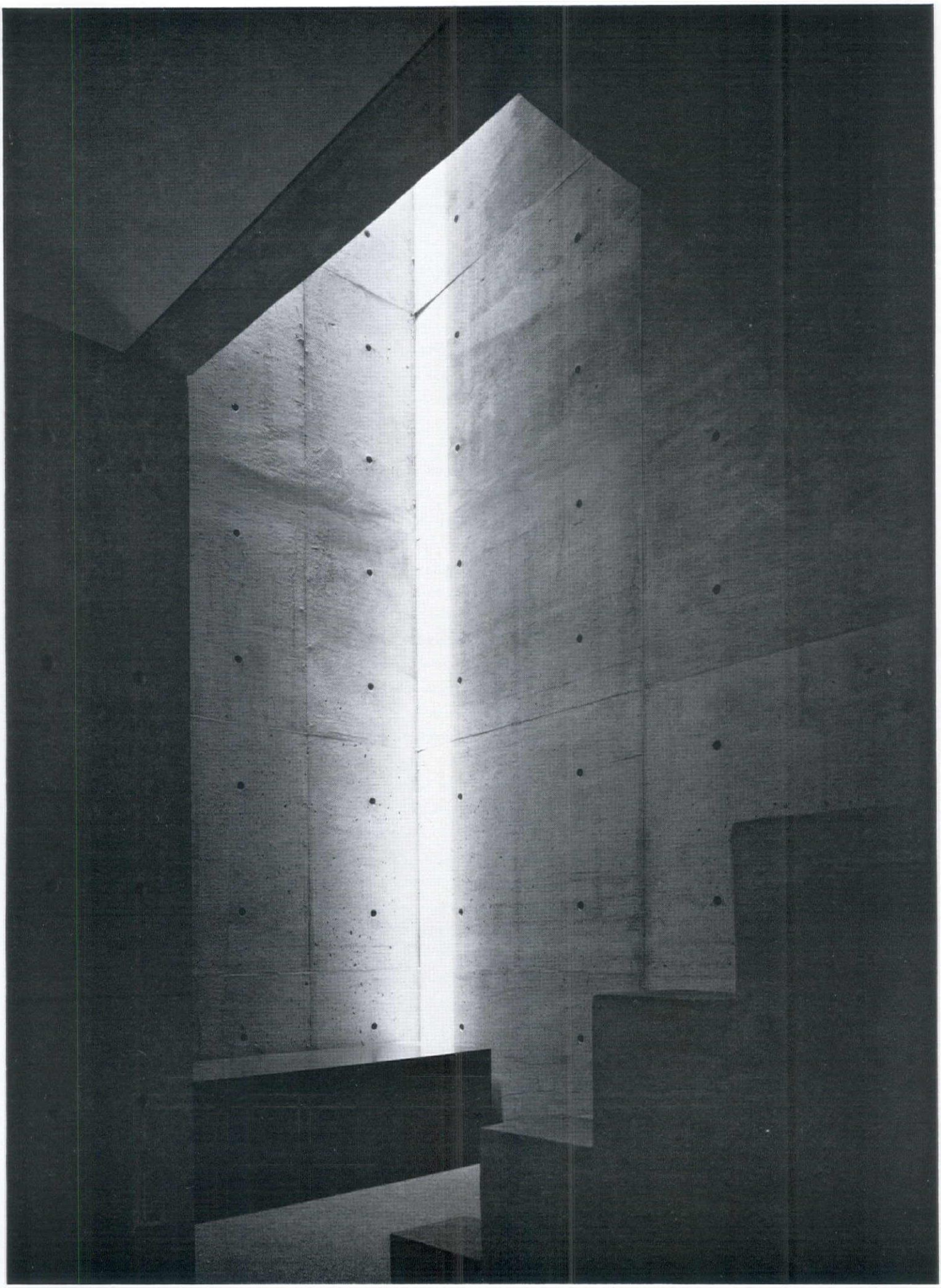










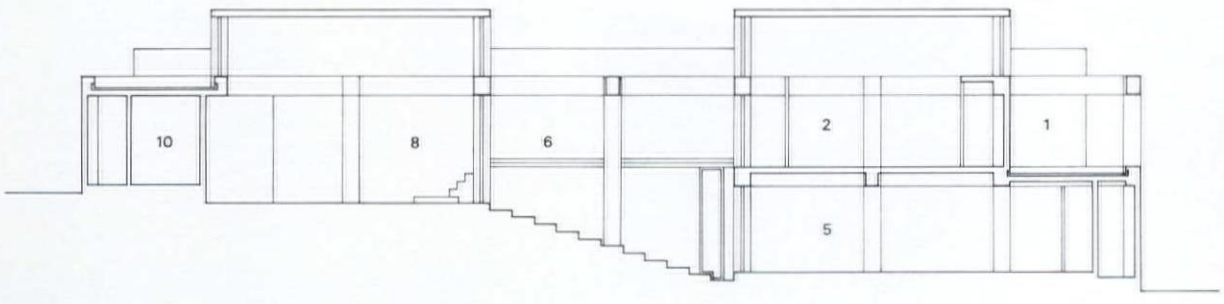


領壁の家（松本邸） 芦屋市奥池・兵庫

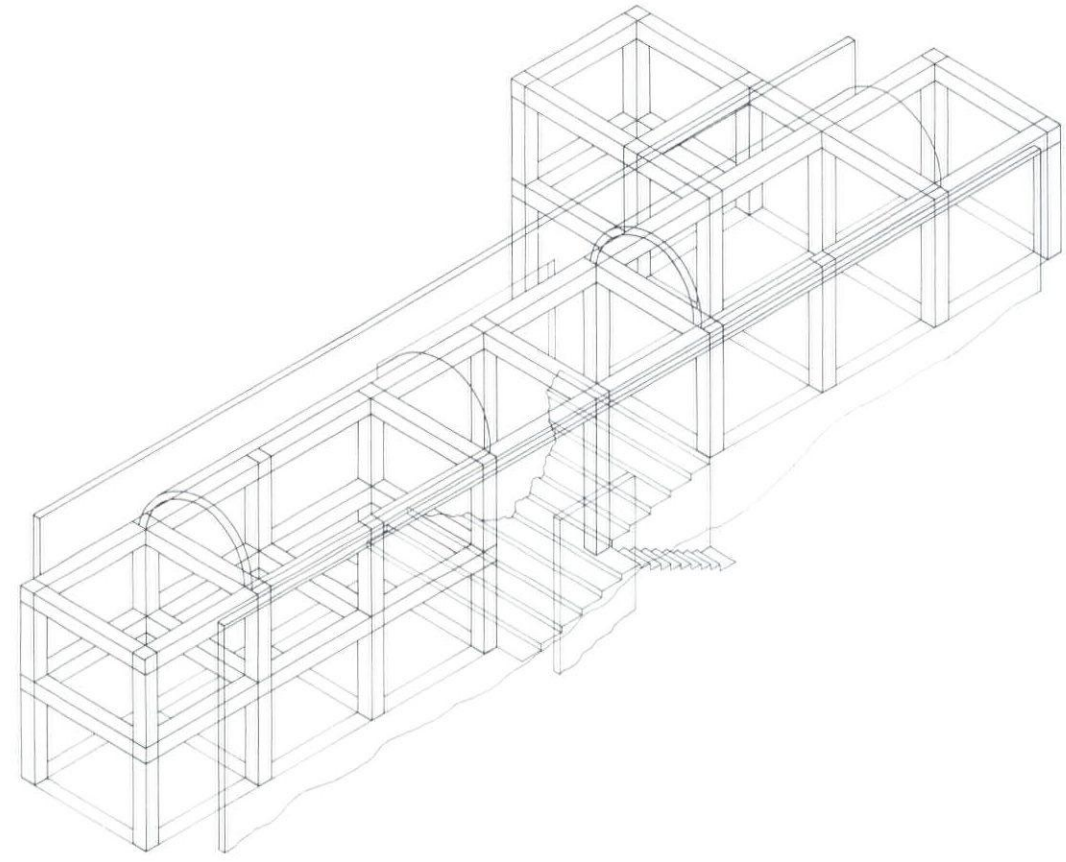
"Wall House" Matsumoto Residence 1977

木々に囲まれた傾斜地に，幾何学的なフレームと１枚の壁が，挿入されている．
松本邸は，風景の中に屹立するこの１枚の壁が，明確な領域設定を行なうことにより成立した．
私のつくる〈壁〉は，柱・梁を用いて構成する日本建築における壁とは異なり，壁によって空間を規定していく，西洋の建築がもつ壁に近いものである． コンクリートを素材とし，都市や自然に対峙している．
それは，富島邸では外界に対する防禦の壁であったものが，やがて自立する壁として建築を構成するに至ったものである．
２枚の壁を相対して立てる． 壁はふたつの異なる世界をつくり出す． 一方は，内部空間を形づくり，住み手の観念や情念を反映させつつ，そこで営まれる個の生活を支える． 他方は外部空間を生み出し，自己のもつ幾何学的な形態を通して個を主張しつつ，存在への力強い意志をもった内部空間が背後にあることを暗示する．
過密な日本の都市に建築をつくる行為は，茫洋としてとりとめのない砂漠に建築をつくる行為と同じである．周囲は均一に無定形であり，つかみどころがない．
このような状況の中で人工的に空間を獲得するには，壁を手だてとして幾何学的に空間を切り取って行く方法が有効であると，私には思われる． 内部と外部が拮抗する場に，意志を持って〈壁〉を立てる． その時，つくり手と住み手の意識の中で，内部と外部の明確な領域設定がなされる． それは，内・外ふたつの相互空間の交流を意識下に生み出す．
私のつくる壁は，人間と環境を結びつける壁であって，断絶の壁ではない． それは，どろどろとした生活を内包する壁であって，モニュメンタルな壁ではないのである．
壁が自立して個の領域を設定する． フレームは，空間を規定しつつ，諸機能を内包する． 連続するフレームの中央部に設けられた段状の中庭は，自然に侵触されつつ敷地を表象している． 分離して架けられたヴォールトは，外部に対してふたつのブロックをさし示し，ここから射し込む光によって，自立する壁とフレームの関係をより明確にしている． 松本邸では，連続するフレームは，列柱となって壁に影を落とし，その構成的な形態からリズムをもった内部空間へと住まう者の意識を転化している．

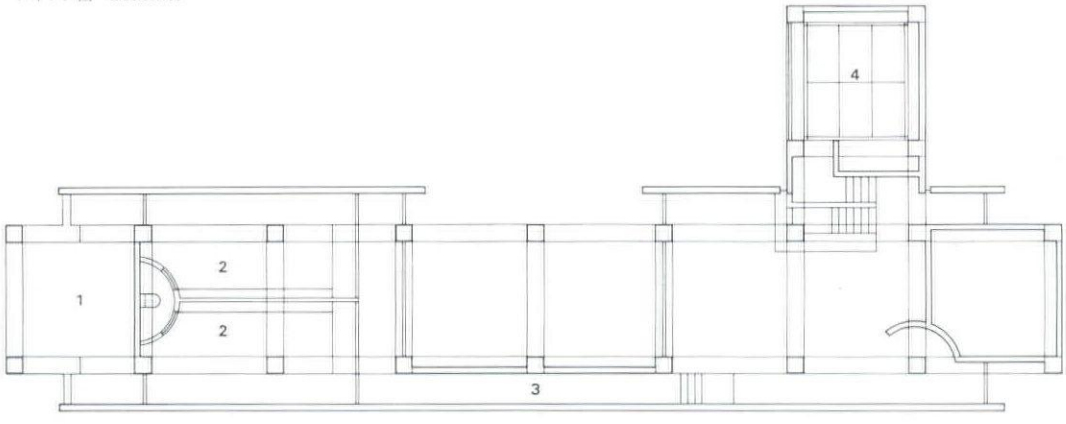
A geometric frame and a wall are inserted into a wooded hillside.
Matsumoto Residence was devised by demarking a territory in the landscape by the use of delineating walls.
The "walls" in my design are not like the walls of Japanese architecture which resulted from a post and lintel system. It is much similar to the walls of Western architecture which acts as a space definer. Built out of concrete, the walls confront the city, as well as nature. The walls used as a protective device in the Tomishima Residence have now developed into the independent walls which take part in the architectural composition.
The two walls are built parallel to each other. The walls create two dissimilar worlds. On the one hand, they create the interior space which projects the owners thoughts and feelings while supporting the life of an individual. On the other hand, the walls generate the exterior space which becomes the background in hinting a potent space lying inside, bounded by a geometric form.
Trying to create architecture in densely populated Japanese cities is like createing architecture in an uncontrolable dessert. The surroundings are amorphous and there are no clues. In order to conquire a man-made space in such an environment, an effective method is to geometrically carve out a space by means of delineating walls. In a field where the interior collides with the exterior, I build the "wall" with confidence. At that instant, the interior and the exterior boundaries are conciously defined in the minds of the creator and the dweller. Subconciously, the interior／exterior spatial relationship is established.
The walls which I create are the walls that relate the people to their environment, and not the walls of separation. In other words, they are the walls which enwrap the artless living, and not the walls standing as a monument.
The walls stand by themselves and define a territory. The frames regulate the space while containing separate functions. The stepping courtyard set in the middle of the continuous frames is eroded by nature when representing the natural slope. The two independent vaults suggest the two separate volumes contained within. The light admitted by the vaults clarify the relationship between the isolated walls and the frames.
In Matsumoto Residence, the continuous frames become continuous columns and project shadows against the walls. The residents recognize the spatial rhythm which had been transformed from a compositional form.



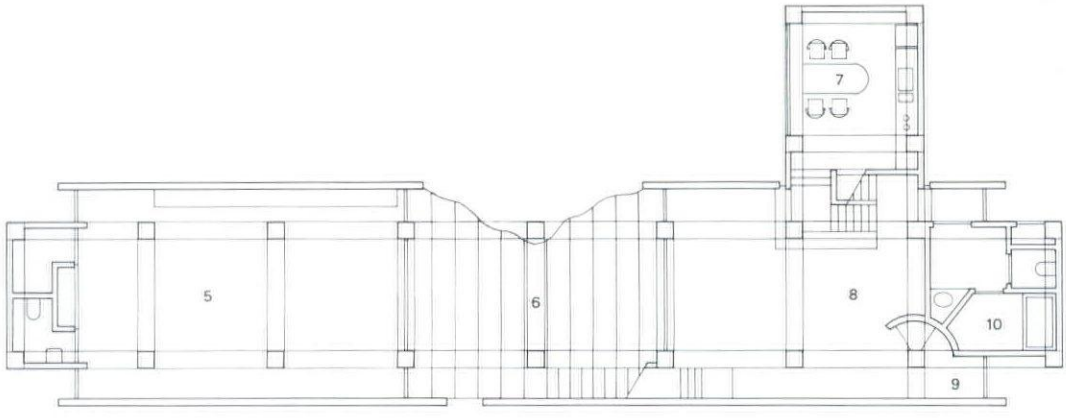
断面図 section



アイソメ図　isometric

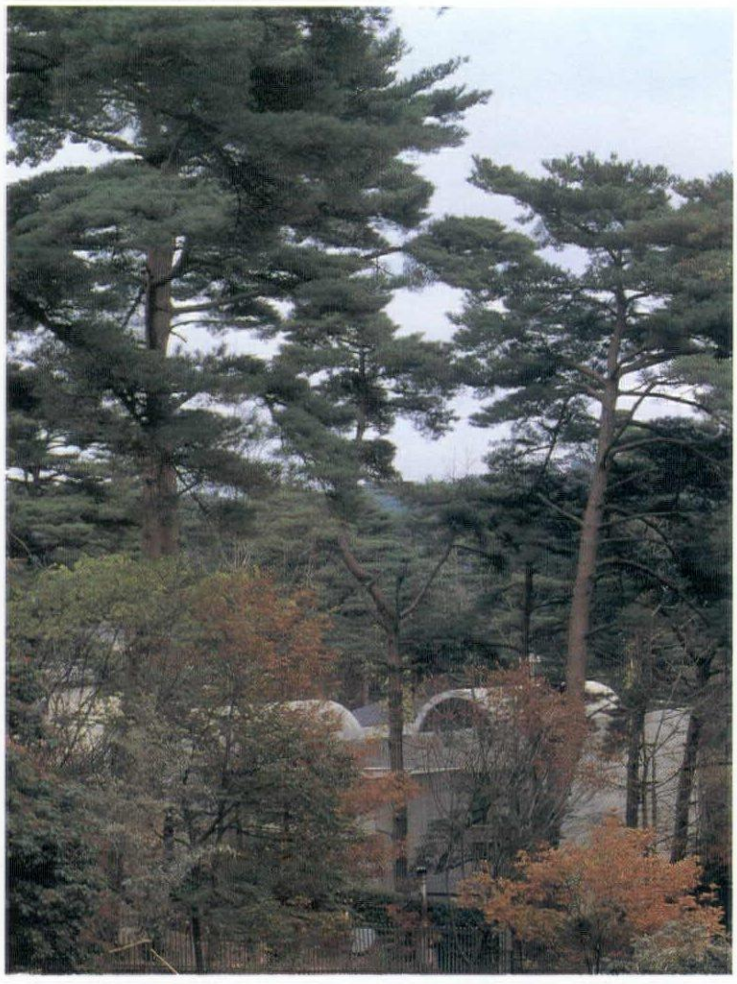


2階平面図　second floor plan

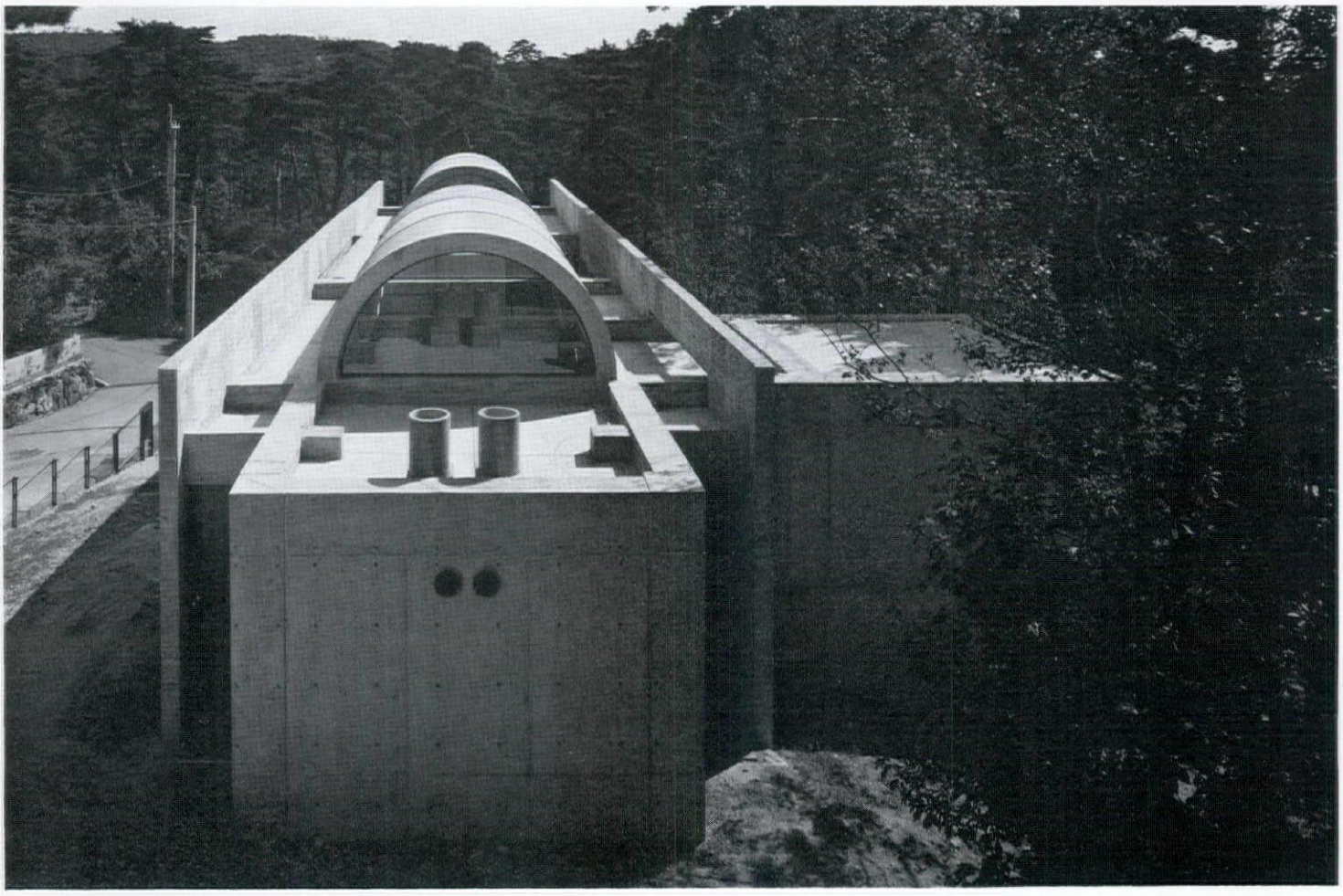


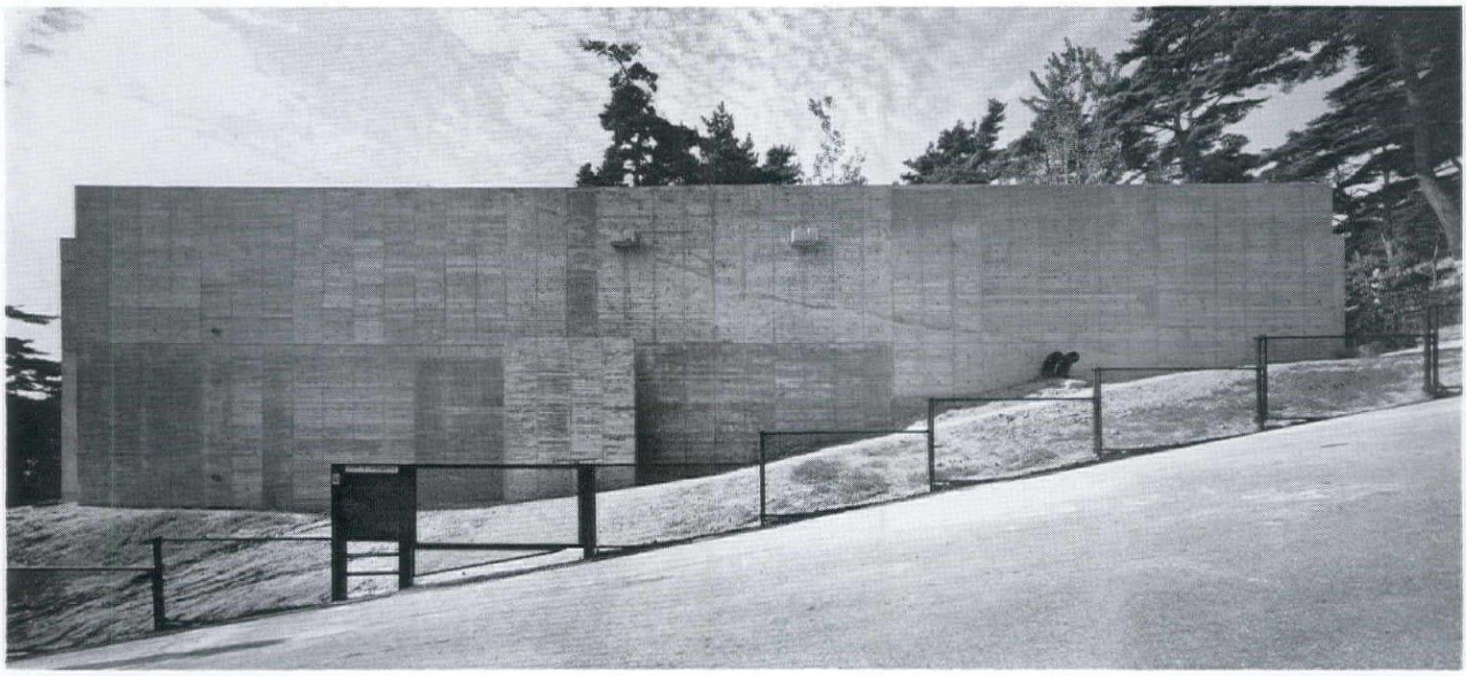
1階平面図　first floor plan　1：200

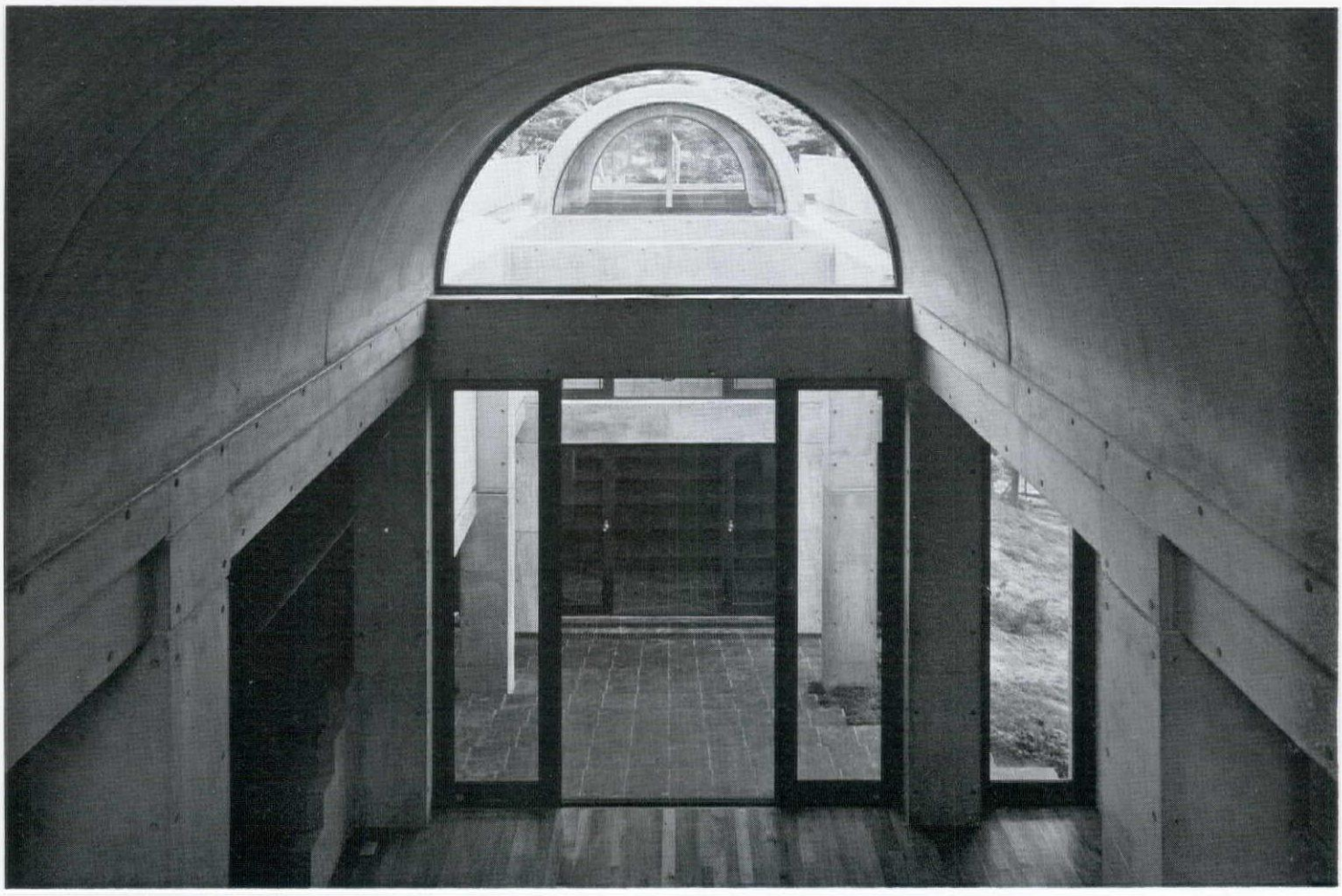
1　テラス　terrace
2　寝室　bedroom
3　廊下　corridor
4　和室　tatami room
5　アトリエ　atelier
6　中庭　court
7　食堂　dining room
8　居間　living room
9　入口　entrance
10　浴室　bathroom

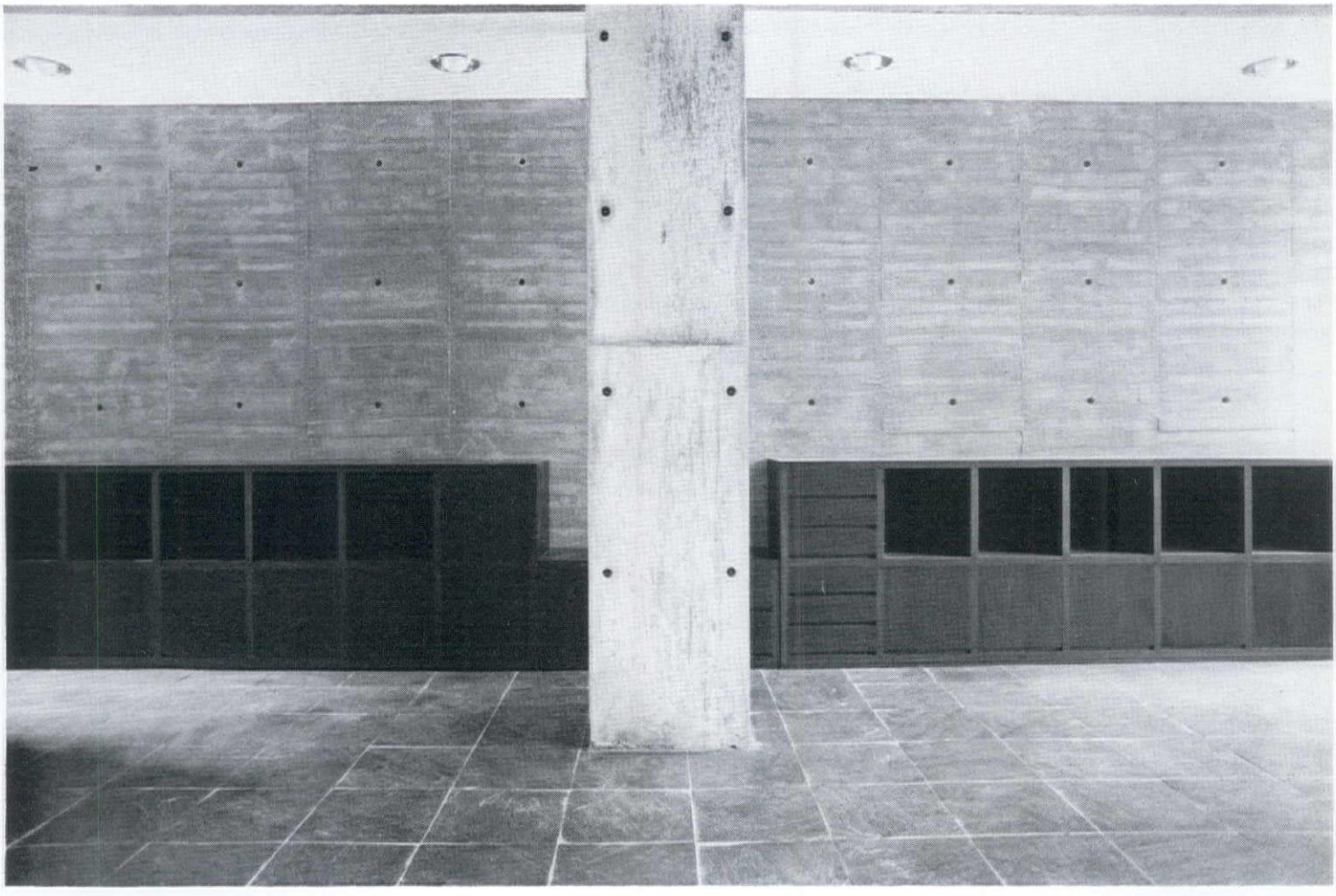












帝塚山タワープラザ 大阪市住吉区帝塚山・大阪

Tezukayama Tower Plaza 1976

建物は，規則正しく配置された同形・同容積の４本の塔と，それを結ぶデッキより成り立っている．　地階・１階を商業スペース，２・３階をメゾネット型の住居とし，商住の機能を複合している．　４本の塔は独立し，各住居に高いプライバシーを与えると共に，道路より半階下がりの地階と１階で繋がれて，道の拡がりとしての広場を形成している．

純粋幾何形態は，完結度の高いものである．　それが組み合わされて「ずれ」が生じた時，形態の完結性は崩壊し，ひとつの流動する場が生まれる．　都市にあって，「街の中の淀み」として機能するこの「場」は，次の３つのプロセスによって獲得される．

第１は，ものが無作為に配置されて行くとき，その間隙に無定形に生じる「場」であり，第２は，規則正しい配置のシステムが崩れることによって生じる「場」である．　そして第３は，規則的に配置れたスペースが，さらに連結されてひとつの構成体をつくるとき，その連結軸のシステムがつくり出す「場」である．

帝塚山タワープラザでは，独立する４本の塔を連結するデッキが，塔の配置軸よりずれて構成されることにより，塔の構成が生み出す静的な空間に，ダイナミックな変化を与えている．　そしてさらに，この建築が面する街路の延長として，またアルコーブとしての広場に，活気をもたらしている．

一方，このようなコンクリートの幾何学的形態は，従来の日本の建築様態から見れば，異質のものであり，近頃流行の景観論からすると，好ましくないものかも知れない．　しかし，私は景観問題については次のように考えている．

近代以降の建築は，それ以前の構築技術や素材とは異なるものによって成立しており，各々の素材や技術は，それに適した形態を有している．　周辺の建築形態に似せて屋根に瓦をのせたり，壁の色を合わせたりするのが景観問題についての解決策であるとは思えない．京都や高山のように，建築が，ひとつの完成された形態をもって，長い歴史の後に集積されている所は別として，極めて混乱した雑多な建築の環境においては，街全体のリズムという観点から，ひとつの方法として「容積」の問題を取りあげても良いのではないかと思う．　容積とは地面から上に出ている建築の容積である．　周辺街区の都市の中での機能，将来への方向性を読み取りながら，新しく創る建築の容積を，その周辺の建築の容積からかけ離れたものにしない．　建築容積が揃っていれば，街区のリズムは，とりわけ崩れない．　大規模な敷地の場合には，さらに建築の容積を敷地内で分割する．　街区全体の容積のリズムを考えて建築を，ひいては街をつくれないだろうかというのが，私の景観に対する思考の基盤である．

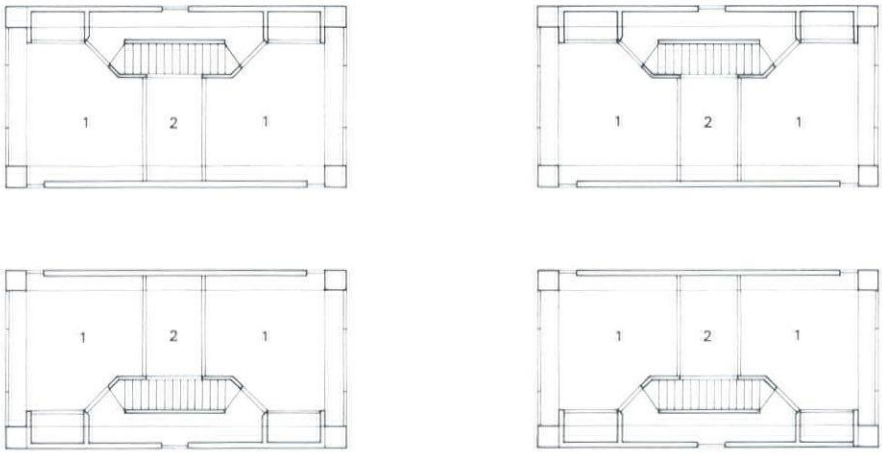
曖昧で，情緒的な街の中に，確固たる意志に満ちた幾何学的構造を打ち込んだ．　公共性の高い外部空間をつくるとともに，幾何学的構成と日常生活のぶつかり合いから生まれる，生き生きとした風景を展開できないかと考えた．

The building consists of four towers of identical shape and volume, and decks bridging these towers. It is a double functional building. The first floor is for commercial use and the second and the third levels are set aside for maisonette units. The four towers are independent of each other; and therefore, privacy is well maintained. But, on the other hand, they are connected at the half-basement level, as well as the first level where the public plaza exists as an extention of the road.

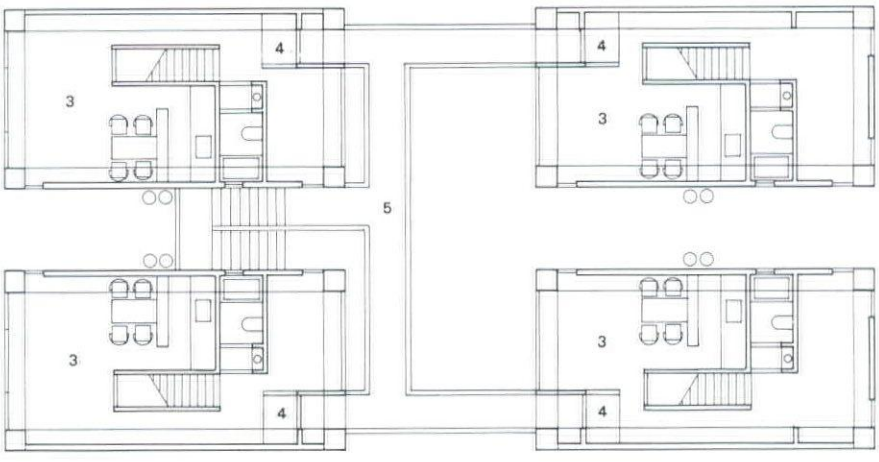
A pure geometry is complete in itself. When two or more of these pure shapes are combined in an irregular manner to produce a "shift," the perfection is destroyed. But instead, a dynamic "field" is generated. This "field" which functions as an "inertia in a city" results from the following three process. The first is an amorphous "field" generated in between objects which are aggregated at random. The second is a "field" came about as a consequence of a deformed system which had once been regularly arranged. And the third is a "field" created by the irregular placement of connectors when an already regular arrangement attempts to become a composite. In Tezukayama Tower Plaza, the bridges connecting the four independent towers are off axes with the towers, and they provide a dynamic variation to an otherwise static composition. Moreover, the bridges serve as an active space by being an extension from the road as well as being a cove-like plaza.

On the other hand, in traditional Japanese architecture, the geometrical forms made by concrete seem inconsistent, and may not be desirable from the standpoint of "historical contextualism" recently being advocated in Japan. But I hold the following view toward the "historical contextualism". Modern architecture is composed of elements that are different from the previous construction methods and materials. And each material and technique carries a form that is appropriate to its nature. It is questionable to use shingles to match the wall colors just for the sake of contextualism. Kyoto or Takayama are out of question, since the architecture, in its perfected form, has long been accumulated over the history. But in a congested and heterogeneous architectural environment, I believe that "volume" could be regarded as an important theme when considering the overall rhythm of a city. By "volume," I mean the architectural volume above ground. It is my task to control the size of the new building volume in relation to the surroundings by understanding the serving functions of the building in the neighborhood as well as the future development of the area. When the volume is comparable, the rhythm is not disturbed. In case of a large scale project, the architectural volume is divided within the site. It is my point of view toward "historical contextualism" to keep the volumetric rhythm of the neighborhood in mind when creating architecture, but with a hope to ultimately create the entire city this way.

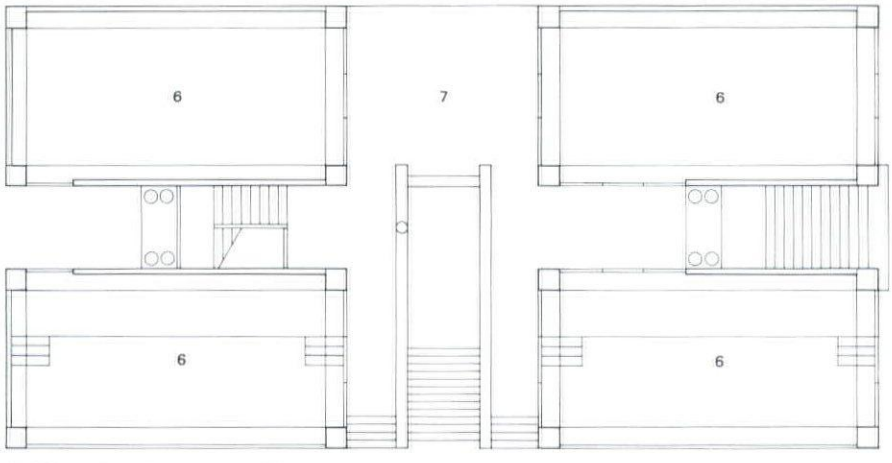
I have imposed a geometric structure in an undefined and impressionable city district. I wondered if it is possible to unfold a lively scene from the encounter between the geometric composition and the daily living.



3階平面図　third floor plan

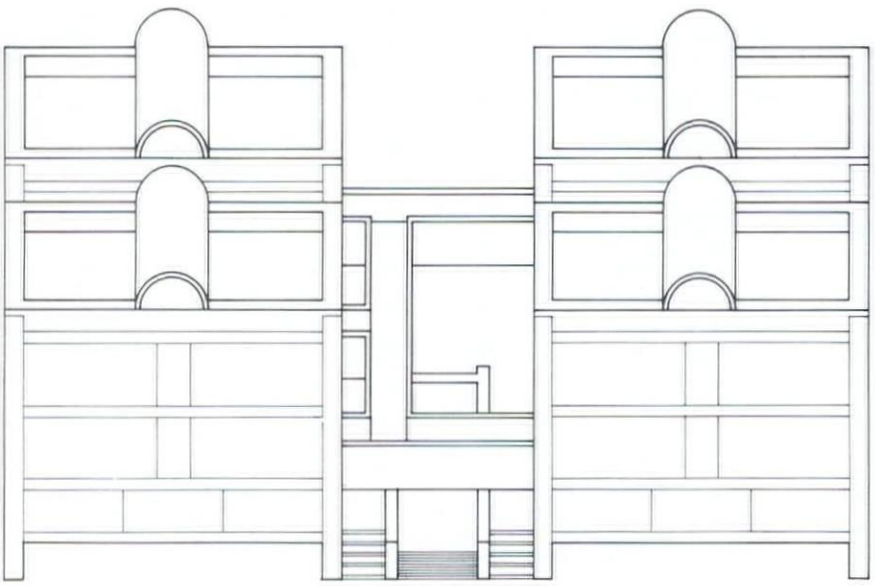


2階平面図　second floor plan

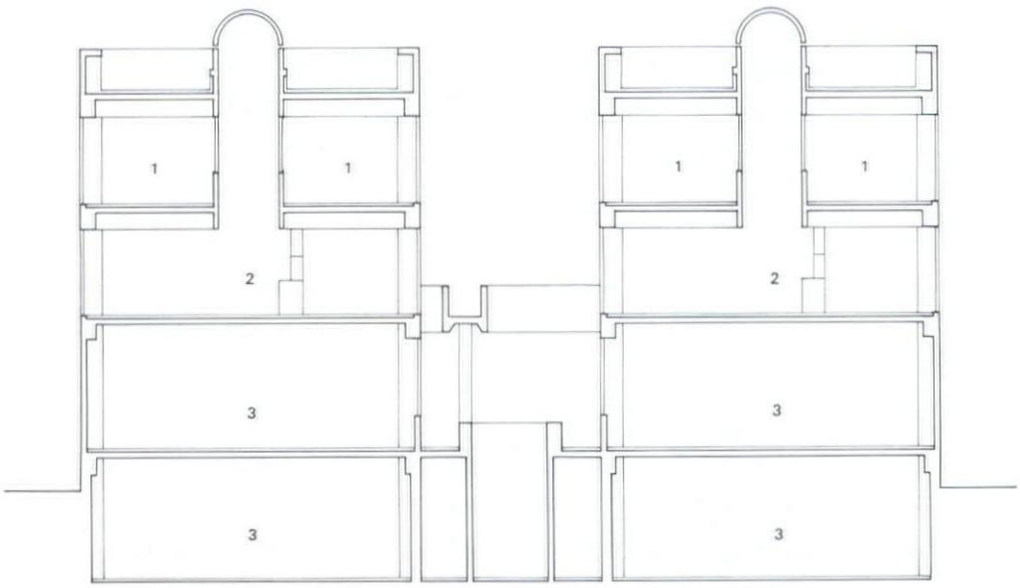


1階平面図　first floor plan　1：200

1　寝室　bedroom
2　吹抜　voidspace
3　居間　living room
4　入口　entrance
5　デッキ　deck
6　店舗　shop
7　広場　plaza

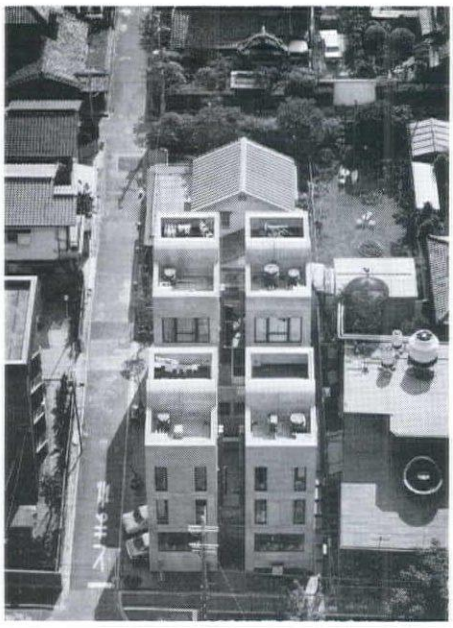


アイソメ図　isometric



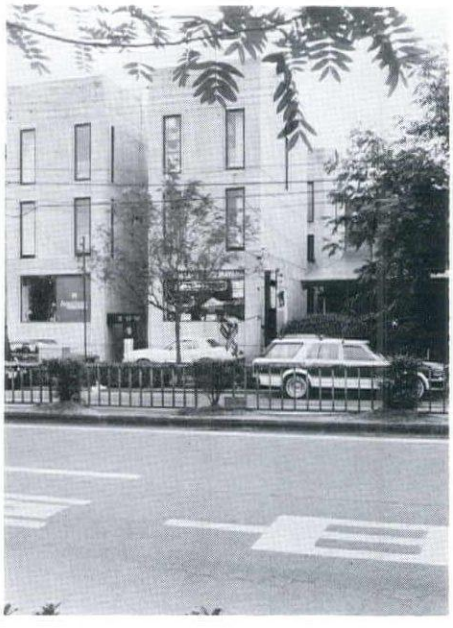
断面図　section　1：200

1　寝室　bedroom
2　居間　living room
3　店舗　shop



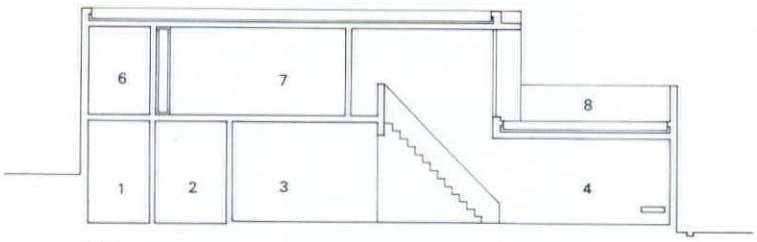






番匠邸 西加茂郡三好町・愛知

Bansho Residence 1976, 1981



断面図 section

つくるということは，つまるところ，創る個人を超え得ないものだと私は思う．　如何に客観を頼りとして創作方法を模索してみても，瞬時に行なう決定は，創るものの好みや，遠い記憶に由来していることが多い．京の町屋の路地に射し込む光．　農家の土間に高窓から忍び寄る光．　それは，一点から射し込む光であり，その明るさは，透明感を伴う静けさで空間を象徴化する．　フランク・ロイド・ライト設計のジョンソン・ワックスビルを訪れた時，暗く閉ざされた階段室を経て，突然，ガラスのパイプで構成されたヴォールト状の廊下に投げ出された．　そこは一面，光の海であった．　日本の建築や近代建築を見て歩く過程で，私は，このようにさまざまな表情をもつ光に出会った．

私の生まれ育った家は，東西からしか光の入らない細長い住まいで，真中の部屋は，2階につづく階段から落ちてくる光以外には明かりのない，薄暗い住まいであった．　裏庭に面した狭い縁側に，屋根と塀の隙間を通して淡い光が射し込み，そこを落ちついたスペースにしていたのを覚えている．　ものを創る人間にとって，その育った環境はかなり影響を及ぼすようだ．住まいは，光に対する私の感受性を育み，さまざまな体験は，その感覚を蓄積した．

私は，この番匠邸で，光を生活空間の象徴として扱った．　そして，私が原風景としてもつ記憶の中の光を，視覚化したいと願った．

建築は，コンクリート打ち放しの壁で構成される立方体に，直方体が貫入している．　立方体は，内部を居間，上部をルーフガーデンとして，この住宅のパブリックスペースを形成している．　直方体は，1階をダイニング・キッチンとユーティリティ・浴室，2階を寝室・クロークとして構成されている．

自然と一体となった建築をつくろうとする一般的な構成方法は，都市化によってもたらされた現代の状況を省みず，南面をともかく大きく開放する．　しかしここでは，街路に面する居間の南側は，高いプライバシーと落ちついた空間を獲得するために，壁で閉ざされた．

ふたつの異質な形態の結合部に設けられたハイサイドライトは，この住宅の中で唯一の，南面する開口部である．　暖炉の火に人々が集まるように，ここでは光に家族があつまって来る．　光がもたらす空間の求心性を，生活の拠り所としたい．　一ケ所より流れ込む光が，直射光や反射光となって，未分化の空間に質を違えつつ流れ込む．　光によって，空間の機能分節ができないかと考えた．

居間に流れ込む反射光は，光量が少なく，その照らし出す空間は暗い．　しかし，反射しつつ奥にまで届く光の質は，この空間に落ちつきを与えてくれた．

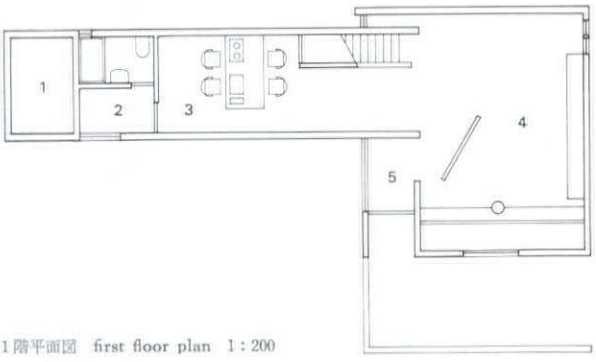
建物が完成してから4年の後に，居間の北側にアトリエが増築された．　直方体に平行に配置され，深い庇を施されつつ南面している．　コンクリートコテ押え仕上げの床が，アトリエの内部より外部のテラスにまで続いている．　深い庇は，テラスの反射光しか内部のスペースに投入しない．　ここでは，北側に設けられた2本の細長いスリットが，南面を覆う明るい光がつくり出す空間の方向性を崩し，柔らげている．

私の建築は，常に完結した形態を伴うものである．従って増築の際には，一旦完結してしまった形態に他の完結する形態をどのように結びつけるかが，最も重要である．　従って，形態の連続性よりは，空間のスケールやリズムを大切に考えたい．番匠邸では，空間の連結部とも言えるアトリエ前のテラスと渡り廊下に，細心の注意が払われた．　仄暗い居間からアトリエへと続く空間の流れは，あふれる光で一旦切断されている．　そして性質の異なるふたつのスペースは，分節されつつ融合され，さらにひとつの完結した建築を構成して，自立した風景を形成している．

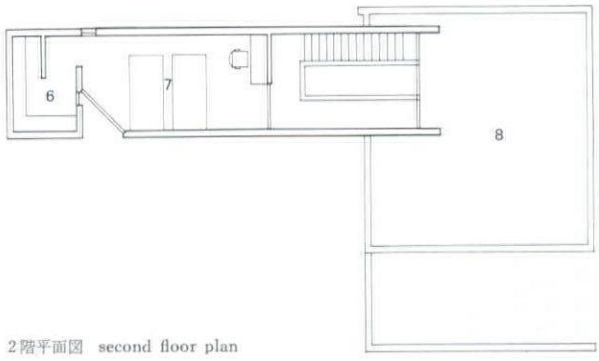
I believe that the act of creating cannot exceed the creator himself. However, more objective the creator tries to be, and grope for creative methodology, the instantaneous decisions are often derived deep from the memories or from the creator's tastes.

The light which filters into the local house of Kyoto— the light which enters from a clear-story, sneaking by an earthen floor of a farmhouse—such are the light, admitted from an aperture, whose brightness symbolizes a silent and transparent space. At Johnson Wax Building by Frank Lloyd

1 納戸 closet
2 家事室 utility
3 食堂 dining room
4 居間 living room
5 入口 entrance
6 クローク cloak room
7 寝室 bedroom
8 テラス terrace



1階平面図 first floor plan 1 : 200



2階平面図 second floor plan

Wright, after having been taken through a dark stairwell, I was thrown into a vaulted corridor composed of glass pipes. The sea of light unveiled in front of me. While visiting Japanese architecture as well as Western architecture, I have encountered light which have various expressions. The house in which I grew up was long and narrow, with light entering only from the eastward and westward directions. And the central room received light only from the stairwell. I recall the tender light entering through a slit opening between the roof and a wall. The light had the power of transforming the backyard deck into a relaxing space. For a designer, the environment in which he grew up seems to have quite an influence on his works. My house fostered my susceptibility toward light, and provided me with various experiences whose sensations I have accumulated.

In Bansho Residence, I tried to handle light as a symbolic representation of the living space. And I wanted to execute the initial image of light which had been kept in my mind.

The building consists of a rectangular prism colliding into a cube made of exposed concrete. The cube contains the public space, such as the living room and a roof garden. The rectangular prism contains the dining, the kitchen with utilities, and the bathroom on the first floor; the bedroom and a closet room on the second floor.

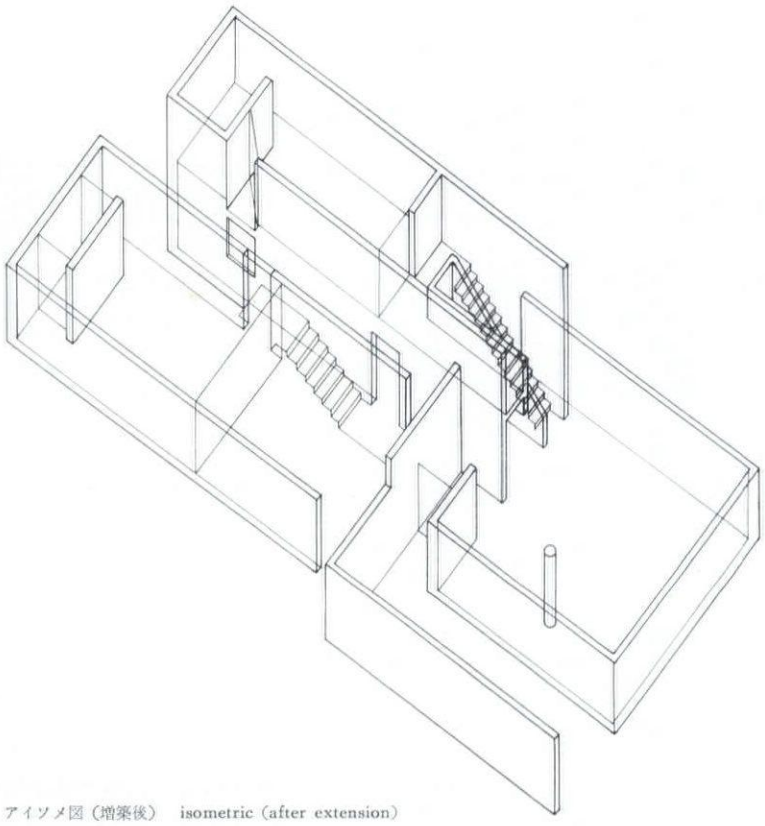
One of the most common design solution for creating architecture married with nature is to provide a maximum opening facing south. This solution disregards the status quo brought about by the urbanization. In my design, the living room which adjoins the street shuts itself from south in order to win privacy.

The clearstory opened at the juncture of the two dissimilar forms is the only southward opening. In this house, the family gathers around the light just as the people gather around a fireplace. I want to place the grounds for living on the spatial centripetality directed by light. Light entering from an opening becomes direct as well as reflected light. And it filters into the undifferentiated space to furnish it with quality. I wondered if I could differentiate spatial functions with the use of light.

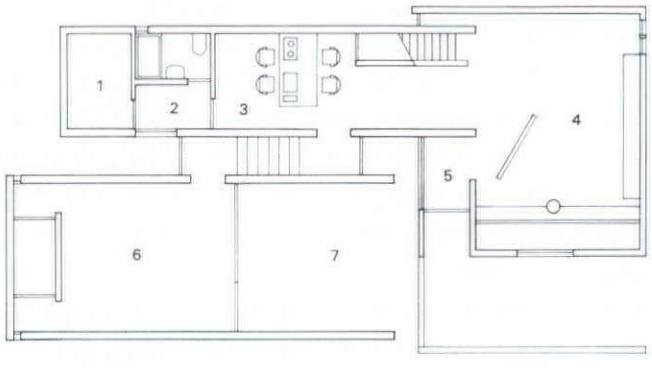
The reflected light which flows into the living room is menial, and the space in which it affects remains dim. But the light which reaches deep into the house provides this space with comfort.

Four years after the completion of the buidling, a studio was added onto the north of the living room. Being set parallel to the rectangular prism, it faces south carrying deep eaves. The smoothly finished concrete floor extends from the inside of the studio to the outdoor terrace. The only light admitted inside by the deep eaves is the light which has been reflected off of the terrace. In the studio, the two slits opened to north deny the spatial directionality produced by the abundant light pouring in from the south.

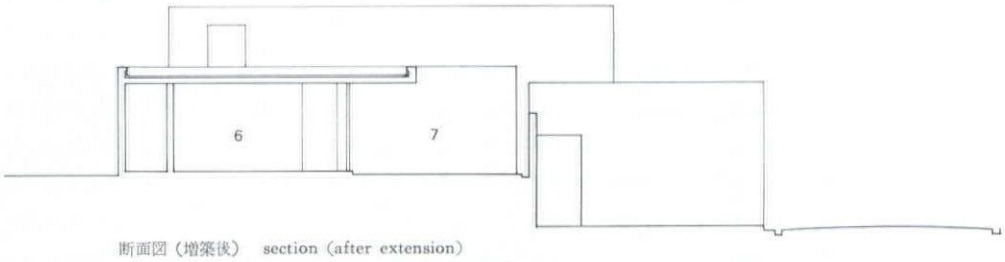
My architecture always completes its form. In case of addition, the most important issue becomes the way in which a complete form is joined to an already perfected form. Therefore, I want to respect the spatial rhythm or scale rather than the continuity of forms. In Bansho Residence, my greatest concern were the joints which occurred at the terrace in front of the studio, and at the bridge. The spatial flow from the dimlylit living room to the studio is interrupted by an overflow of light. The two dissimilar space are differentiated, yet being fused, and further create a complete entity to be set in the landscape.



アイソメ図（増築後）　isometric (after extension)

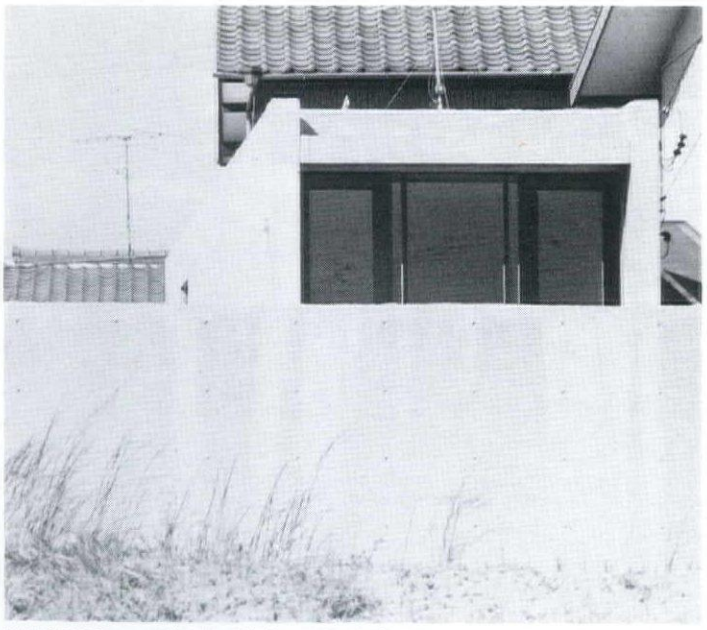


1階平面図（増築後）　first floor plan (after extension)

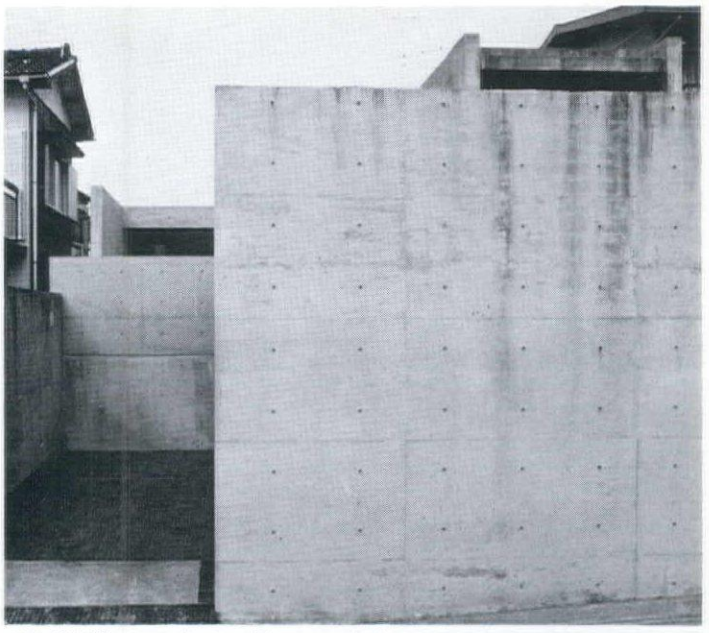


断面図（増築後）　section (after extension)

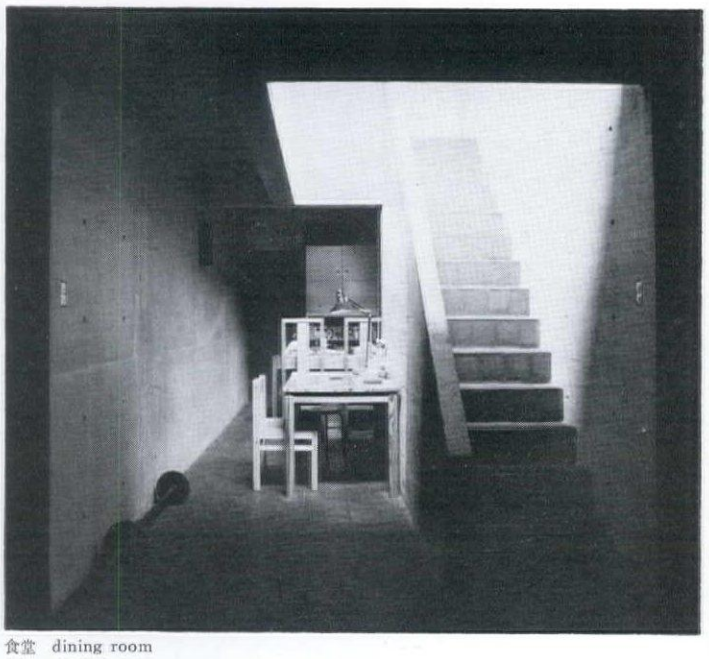
1　納戸　closet
2　家事室　utility
3　食堂　dining room
4　居間　living room
5　入口　entrance
6　アトリエ　atelier
7　中庭　court



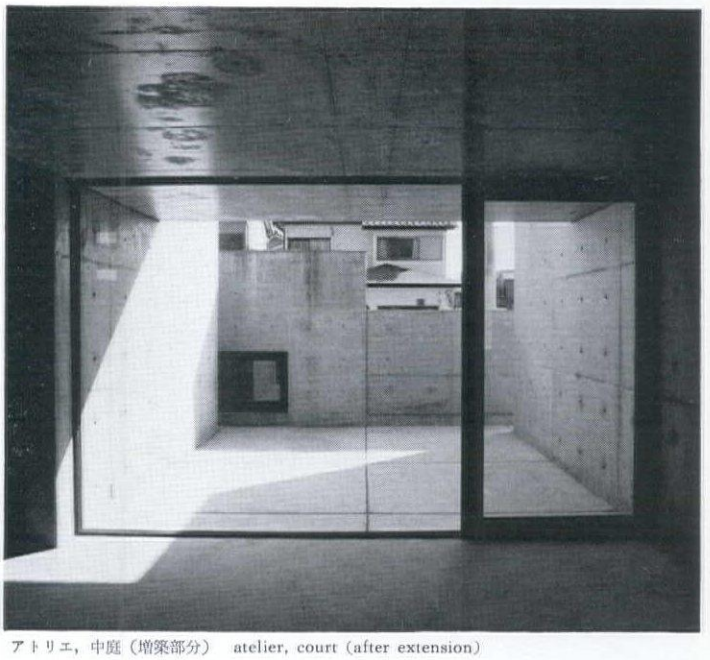
外観（増築前） outside view (before extension)



外観（増築後） outside view (after extension)



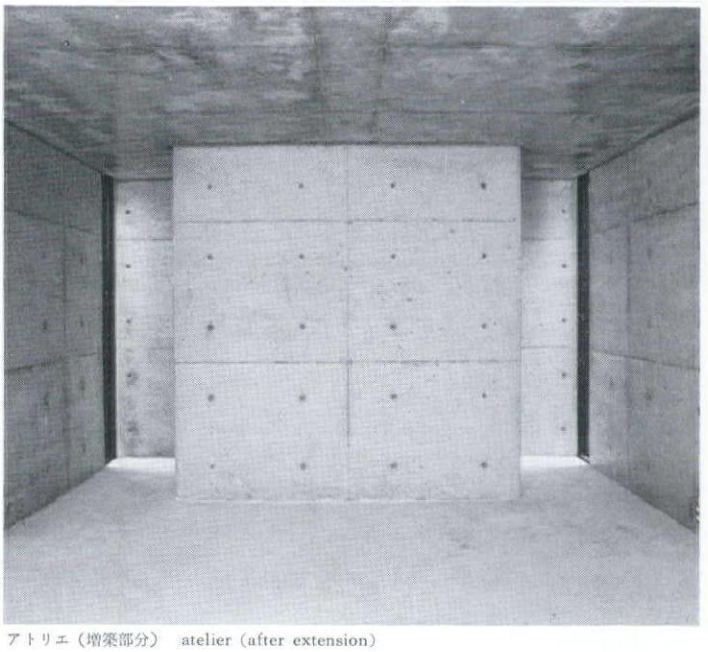
食堂 dining room



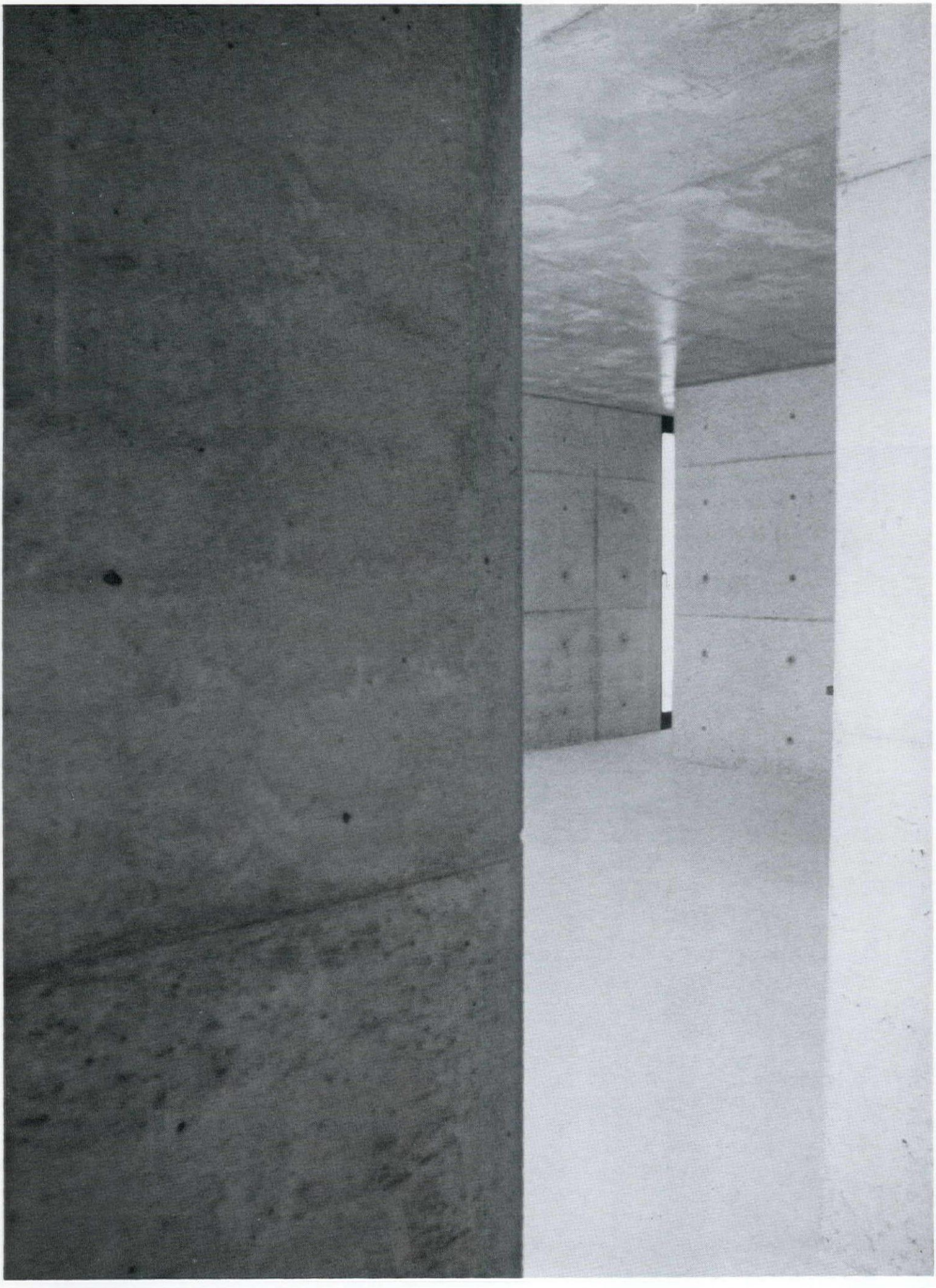
アトリエ，中庭（増築部分） atelier, court (after extension)



居間 living room

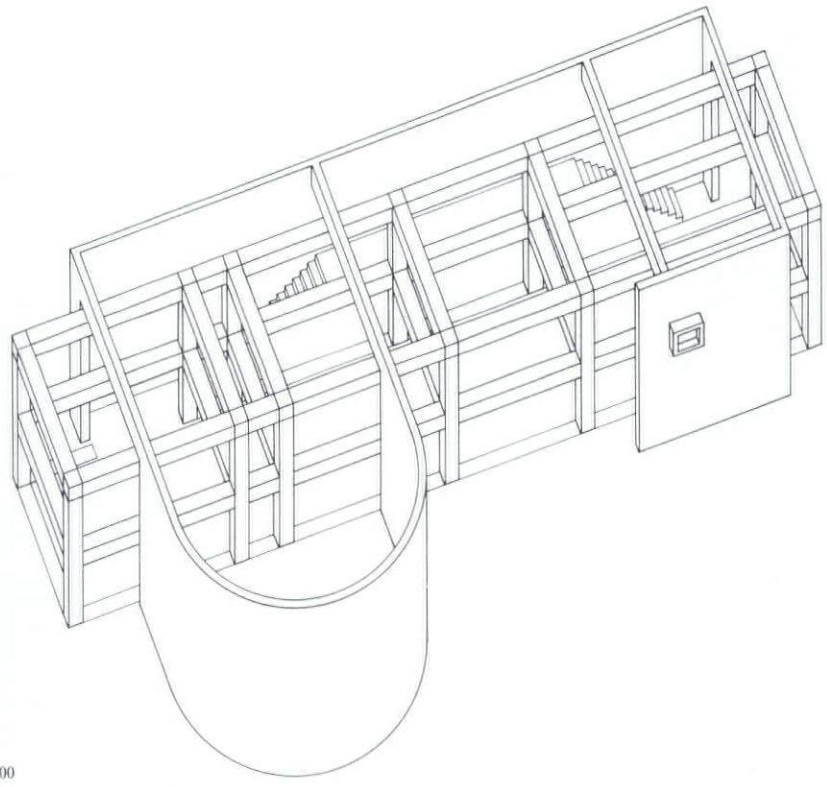


アトリエ（増築部分） atelier (after extension)



貫入（平林邸）吹田市山田・大阪

"Interpenetration" Hirabayashi Residence 1976



アイソメ図 isometric 1：200

厚い壁と，均等に分割されるフレームの相互貫入により，建築は構成されている． 壁は敷地の一辺に沿いつつ完結した幾何形態をめざし，フレームは自立する． この2種類の構造は，極めて単純かつ直接的に表現されている． 2層分の吹き抜けのある円筒形のホールは，壁とフレームの結合部に設けられたスリットから流れ込むわずかな光によって活性化されている． 南側の自立する壁は，客室と子供室を内包するフレームに，その空間の完結性を与え，敷地に沿う壁は，フレームとの狭間に廊下や階段としてのサービス機能を果している．

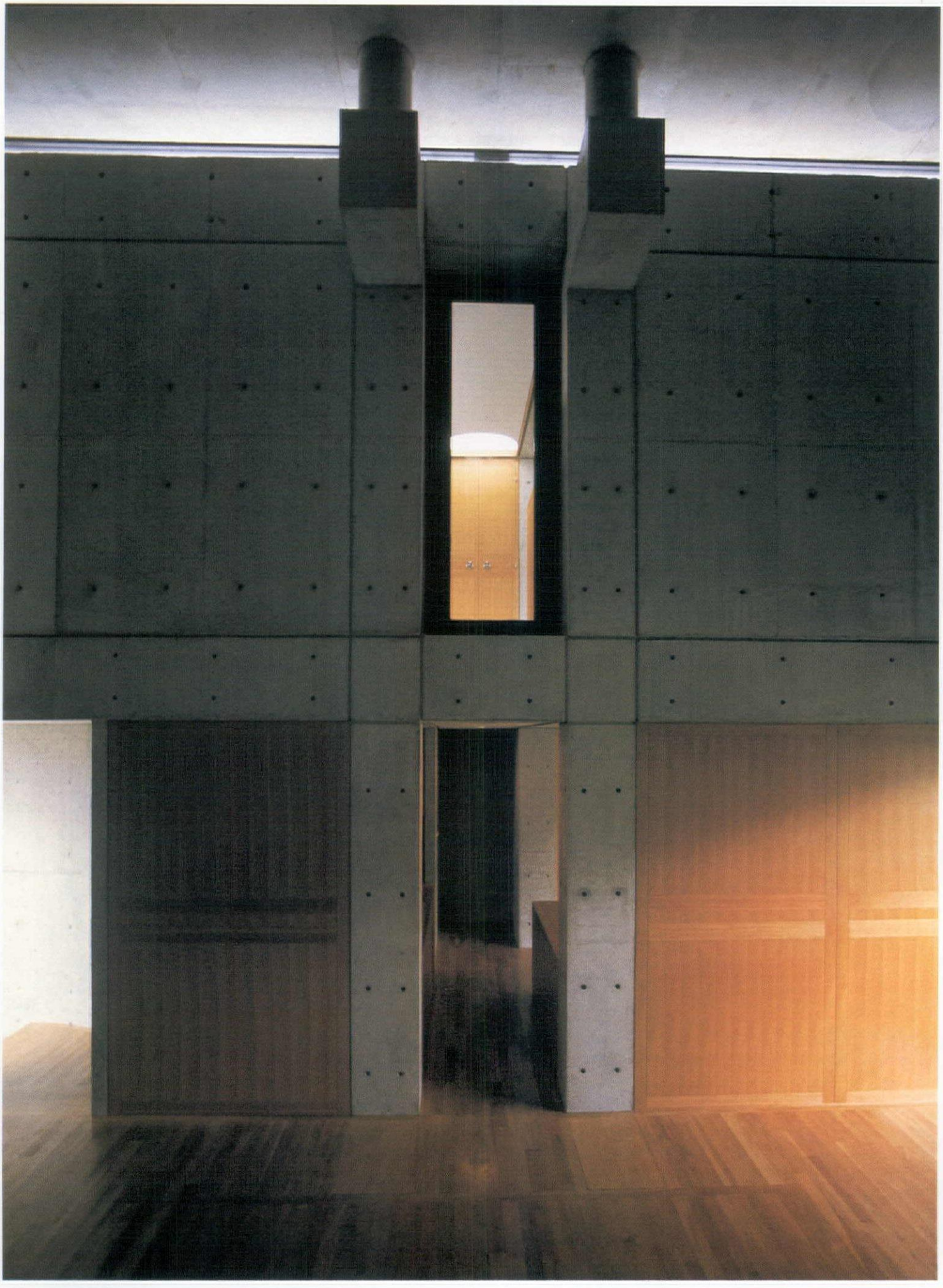
貫入する壁は，後の〈帝塚山の家〉では，直線となってフレームに切り込み，空間を分節するが，ここでは，広がる生活のイメージを囲い取る壁として機能している．

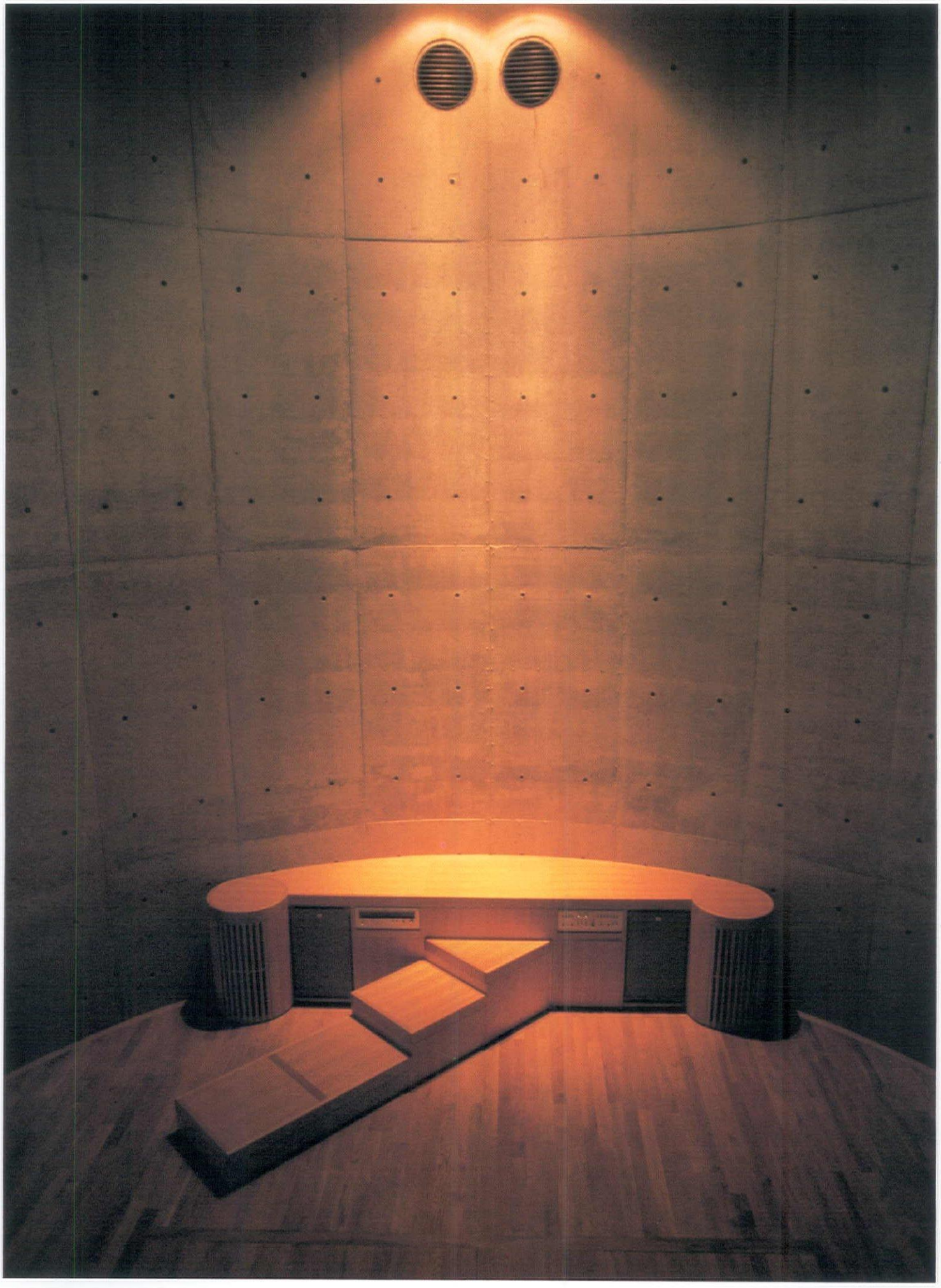
円筒形のホールに置かれた家具は，天井のサイドライトから注ぎ込む光を受けて空間を演出する． 彎曲する壁面に沿い，さらに渦まいて形態を終えるこのオーディオの装置は，円筒状の無機的な室内に，唯一有機的な息づかいを与えている．

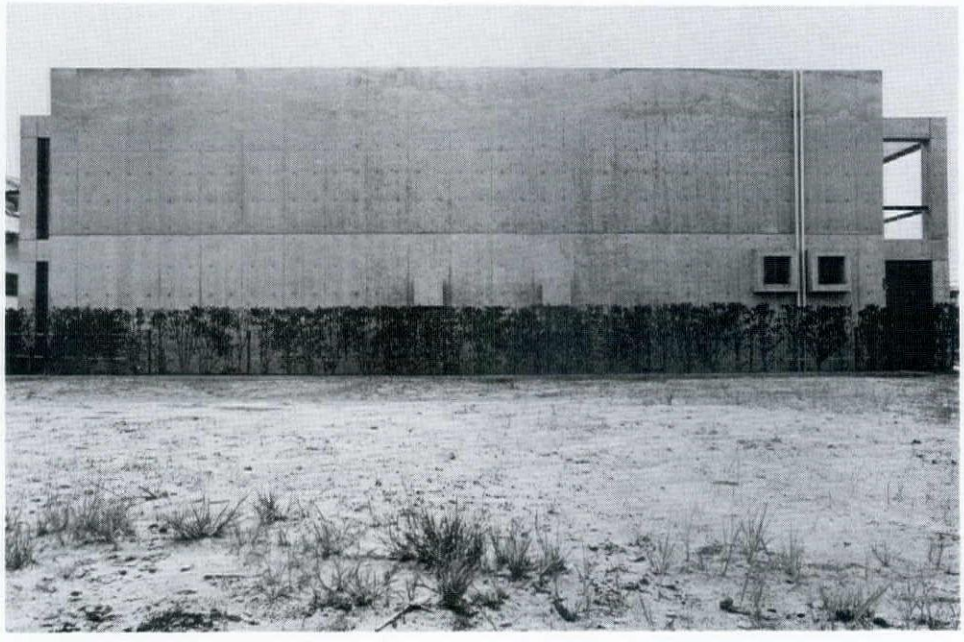
The building is composed of reciprocal interpenetration of thick walls and uniform frames. The walls stand by the edges of the site, attempting to perfect the geometric form. The frames, on the other hand, stand by themselves. These two modes of strucsure are extremely simple and direct. The temi-cylindrical double height hall is activated by the minimal amount of light entering through the slit openings occurring at the intersection of the walls and the frames. The independent wall on the south side provides for spatial integrity of the frames which enclose the guest room and the children's bedroom. The straight wall running along the site generate a narrow space between it and the frames, in which space the service functions such as the corridor and the staircases are furnished.

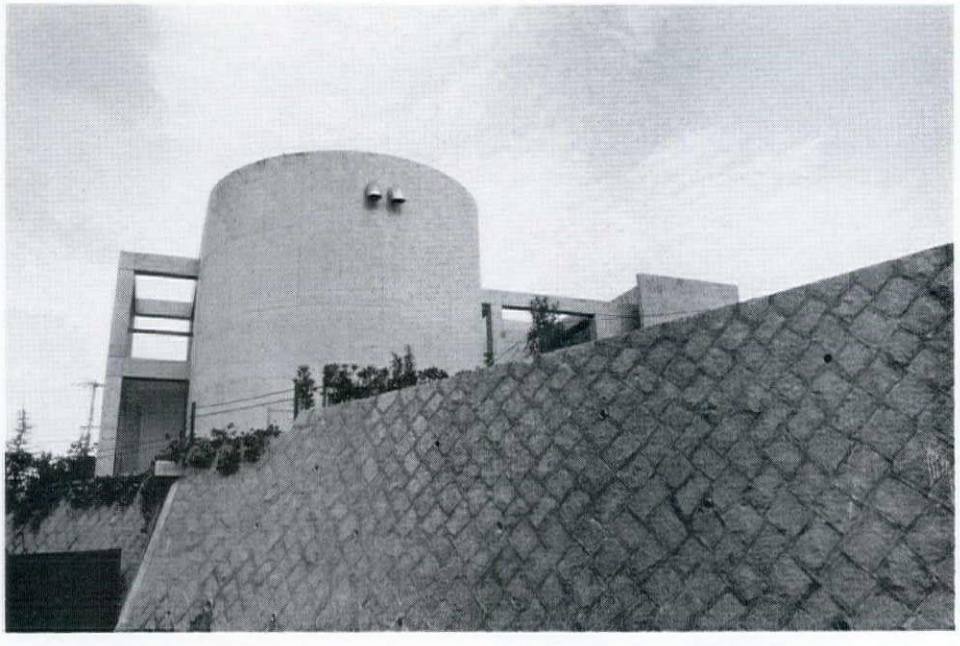
The interpenetrating wall, in the later "Tezukayama House", develops into a straight form and cuts into the frames to achieve the spatial division. But here, it functions as an encloseing wall which isolates the life being unfolded inside.

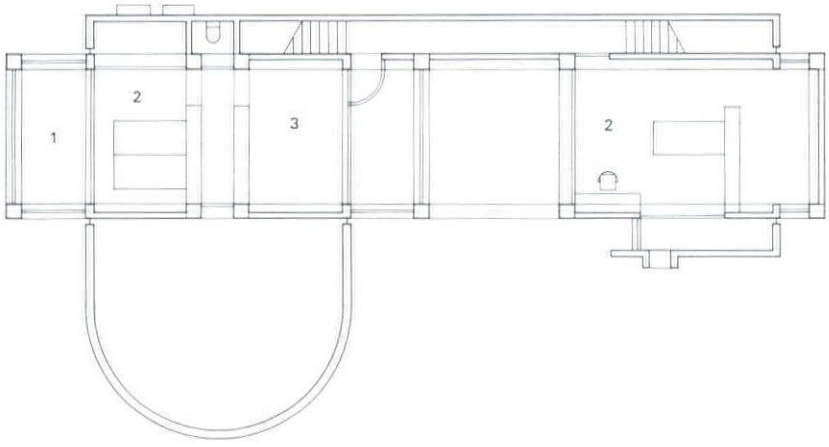
The furniture placed in the semi-cylindrical hall produces a spatial drama by receiving the light filtering in from the clearstory of the ceiling. A piece of furniture housing audio equipments was designed to be placed along the curvilinear wall. The shape of the furniture follows the curve of the wall and completes its form by curling back at the end. This audio furniture is the only hint of organic life in the otherwise inorganic space.





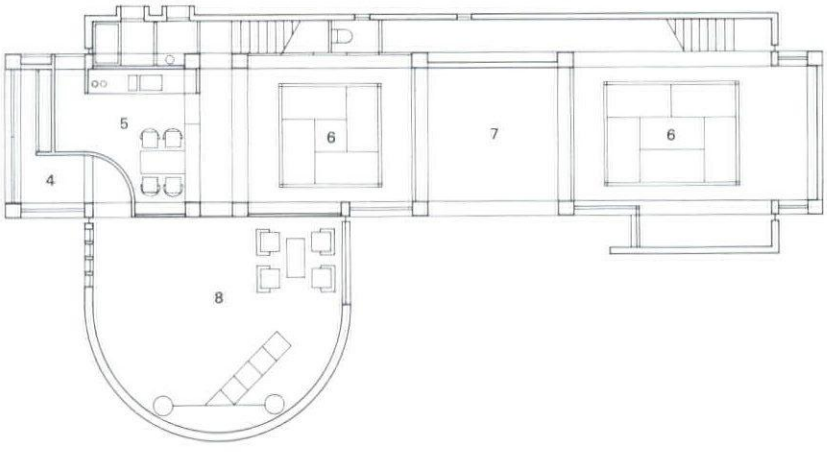




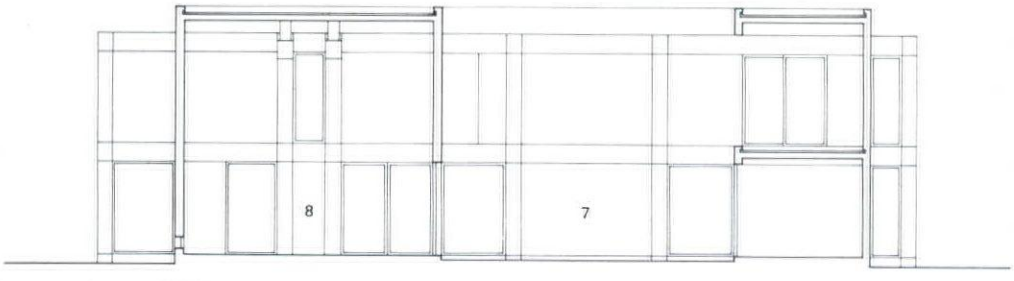


2階平面図　second floor plan

1　テラス　terrace
2　寝室　bedroom
3　書斎　study
4　入口　entrance
5　食堂　dining room
6　和室　tatami room
7　中庭　court
8　居間　living room



1階平面図　first floor plan　1：200



断面図　section

住吉の長屋（東邸）大阪市住吉区上住吉町・大阪

"Row House Sumiyoshi" Azuma Residence 1976

大阪の中心部には，戦災を免れた木造の建築物が随所に残っている．　住吉の長屋もこの種の建物のひとつであり，３軒続きの長屋の真中にある．　私には，何故かこの種の建物を取り扱う仕事が多い．　建築家というのは地域性と切り離せないことを，物語っているのかも知れない．　富島邸にはじまって，立見邸，住吉の長屋，そして現在設計中のものを含めると４軒になる．

住吉の長屋は，３軒長屋の真中を切り取り，コンクリートの箱を挿入することにより，外部の環境を切断している．

都市のスプロール化に伴って人々が都心から離れていく風潮の中で，都市に住まうことの姿勢が問われている．

単純な構成と変化あるスペース，閉ざされた表情，光によって演出される生活空間．　これらを軸として私がつくる建築の，原型としてイメージされた．

空間の構成は求心的なもので，均等に３分割された平面の中央に，光庭としての中庭が置かれている．　１階は居間と，台所・食堂・浴室が，中庭を挟んで対峙する．　各々の上部には，子供室と寝室がある．　中庭は，この住まいで繰りひろげられる生活の焦点であり，都市で失われつつある光・風・雨といった，自然の感覚を住戸に引き込む装置である．　自然を住戸に直接引き込むことは，住み手の生活を厳しくする．

機能相互の連絡が，外部空間によって一度断ち切られるからだ．　しかし，生活の便利さより以上に大切な自然との触れ合いは，ここを，日常の生活とは切り離せない場としている．

住吉の長屋は，街路に対して，その表情を全く閉ざしている．　内部で営まれる生活の様子は外からは伺えない．　壁に凹みをつけて設けられた入口だけが，生活を暗示する．　空からの光がここに射し込み玄関を照らす．　凹みの壁や床に反射しつつ街路に溢れ出た光は，この閉塞的な住宅と街路を結ぶ媒体となっている．

建築が創り手の気質を超え得ないものとするならば，自閉症的な建築は，私の性格の一端であるのだろう．

私のつくる建築はすべて街路に対して表情を閉ざしている．　自己収束性の高い建築ではあるが，内部空間として，開かれたスペースとなっている．　決して身体をやわらかく包み込むという類のものではないが，時間の経過とともに，自らの内部の風景に入り込み，身にまといつき，身体と一体化して行く空間である．

生活とは「厳しい」ものであるという思いが好みに合っているということもあるが，いろいろの思いが集約されていて，私の多くの仕事の中でもとりわけ愛着の深いものである．

In the central part of Osaka, the woodframe buildings that have survived the war could still be spotted. "Row House Sumiyoshi," for example, replaced the middle portion of the three surviving row houses. I seem to have a tendency to encounter this type of jobs. Probably, it explains the fact that architects can not be divorced from their locality. Beginning with Tomishima Residence, followed by Tatsumi Residence, then by Row House Sumiyoshi, and including the present project, add up to four.

The Row House Sumiyoshi isolates itself from the surroundings by carving out the middle segment of a series of three traditional row houses and inserting a concrete box in its place.

In the midst of urban sprawl when people tend to move away from city centers, I question the attitude toward city living.

A simple composition with variable expressions, an introverted nature, and living spaces performed by light—these are the mainstay of my architectural design.

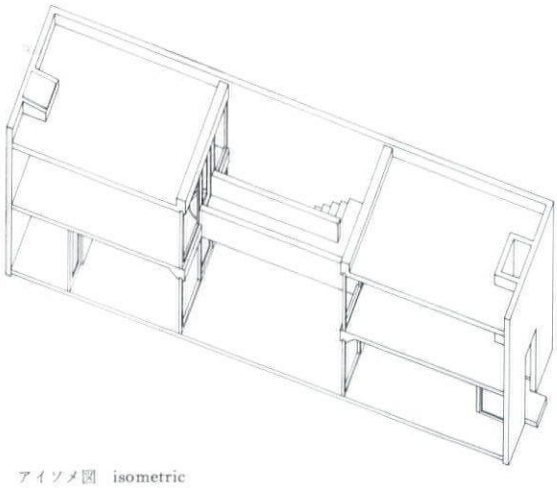
The spatial organization is centripetal with the light court occupying the middle portion of the tripartite plan. On the first floor, the courtyard is flanked by the living room on one side; and the kitchen, the dining room and the bathroom on the other. On the upper level, the open court physically separates the master bedroom from the children's room. The courtyard is the focus of attention for all the activities taking place in this household, but it is also an important device which introduces elements of natural phenomena, such as light, wind, and rain. It attempts to bring back the sense of nature being lost in urban residences. When nature is directly introduced into a residence, the new life-style entails severity. It is because the functional continuity of the residence is interrupted by the exterior space. But the interaction with nature, which in this case was regarded more important than living efficiency, considers the courtyard inseparable from the daily life.

The "Row House Sumiyoshi" completely closes itself from the street. The life inside cannot be sensed from the outside. The indentation on the front wall, acting as the entryway is the only hint of living. The light from the sky enters the opening and lights up the entrance. The light which is reflected onto the street by the vertical and horizontal planes of the recess acts as the mediator in relating the inward-looking house to the street.

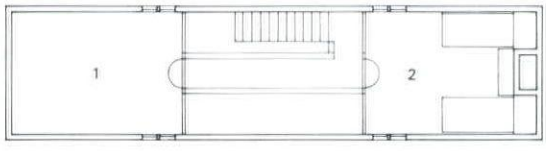
If architecture expresses the character of the designer, the introverted architecture depicts a part of my nature. All of my architecture shuts itself from the streets. But in spite of the introversion, the central space serves as a relief by being a void space or an isolated exterior space. The space created by bare concrete is not the kind of space which gently envelops the body, but instead, it is a space which gradually enclose the body to become an entity.

This job is one of my most proud works. One reason being that "severity" is my view toward life, but also because it sums up my various experiences and memories.

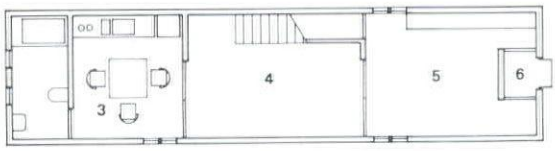
1 予備室 spare room
2 寝室 bedroom
3 食堂 dining room
4 中庭 court
5 居間 living room
6 入口 entrance



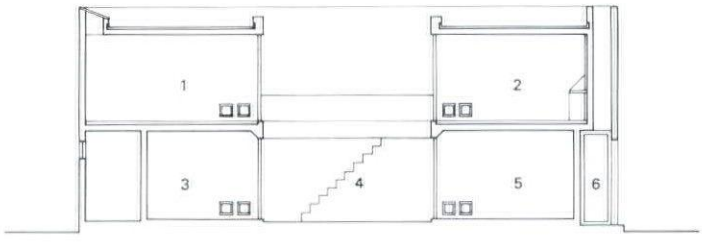
アイソメ図 isometric



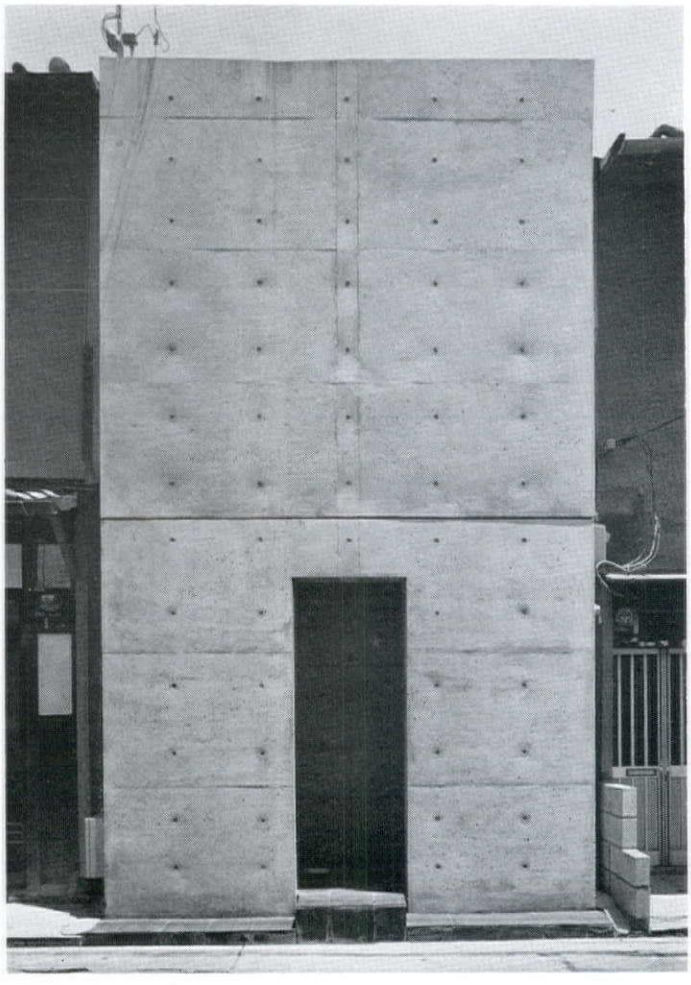
2階平面図 second floor plan



1階平面図 first floor plan 1：200



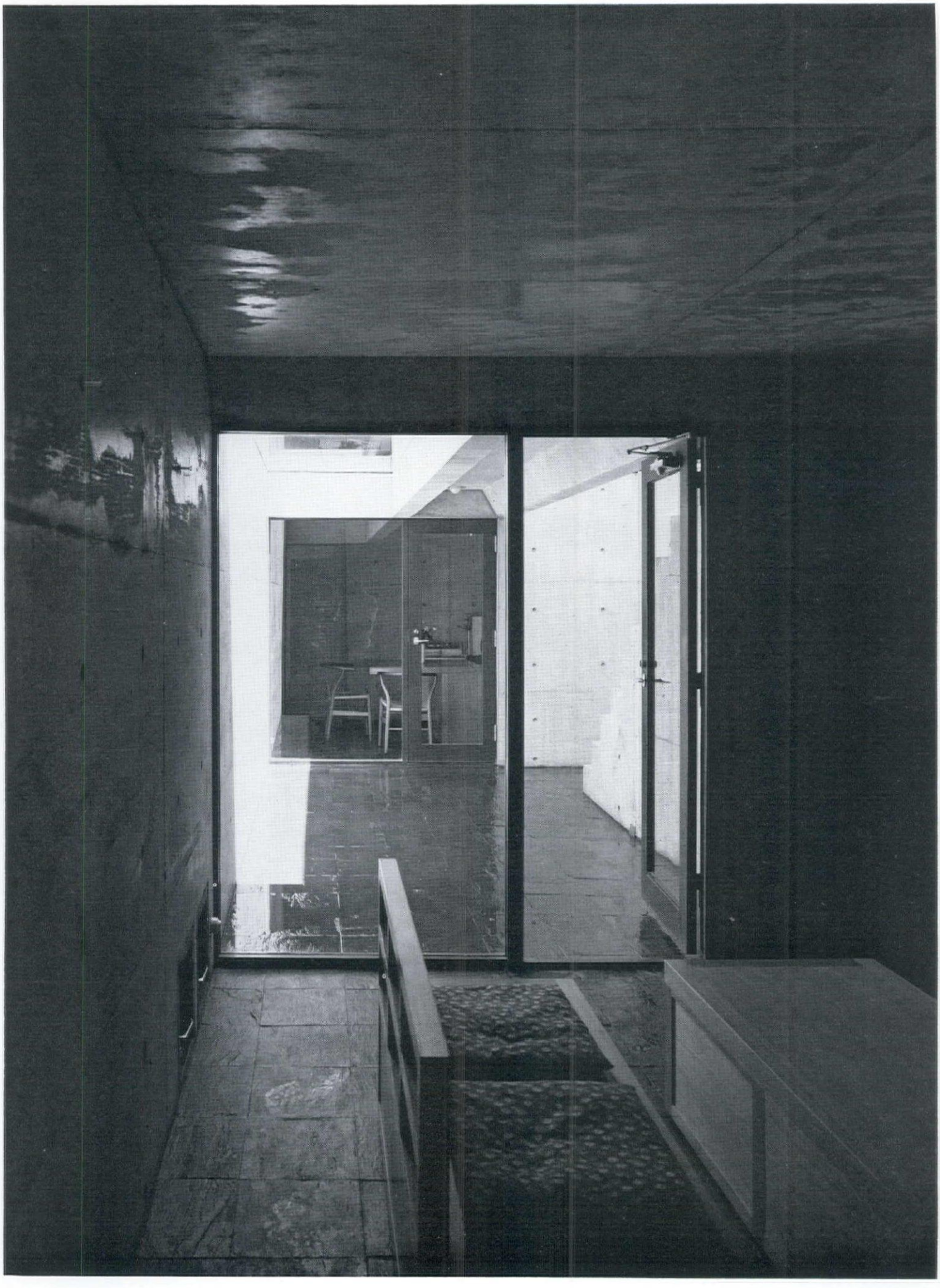
断面図 section





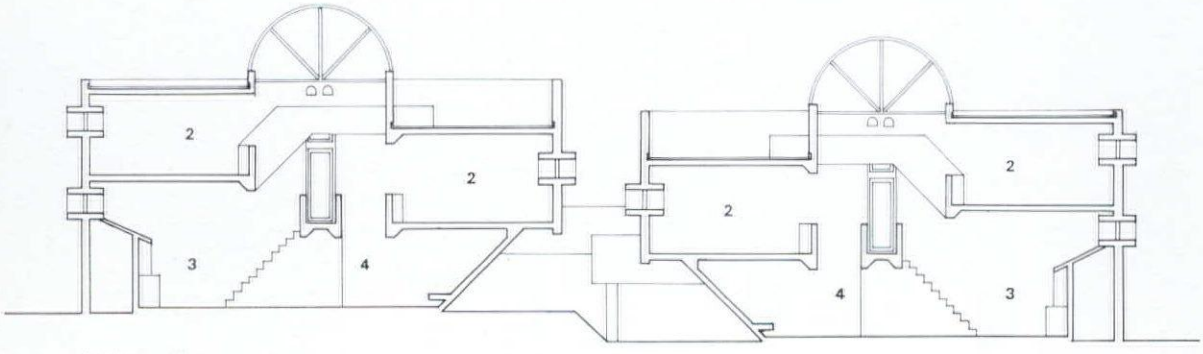






双生観（山口邸）宝塚市仁川・兵庫

"Twin House" Yamaguchi Residence 1975



断面図 section

敷地は，もとは緑深い丘陵地だったところを切り崩してつくられた，造成地の区画である． このふたつの住宅は，兄弟のためにつくられたものである． シンメトリーの建物が，さらに，対称軸に沿ってずれて配置されている．

この時期までに我々が手がけて来た住宅は，その立地する環境がおおむねふたつに分類される． 一方は，過密にあえぐ都市内部にあり，他方は，都市近郊で開発された無性格な分譲地に立地する． 後者では，建築を成立させる強い手がかりをもたない敷地に，如何にして個を主張し，個の位置を確立するかということがテーマとなる．

双生観では，囲い込む壁により，敢えて南面を閉ざし，壁のもつさまざまな効果を生かした内部空間をつくることをめざした．

ガラスのヴォールトより導かれた光は，3層の吹抜けを通して各階の床に流れ込む． 1階に達すると，それは居間に設けられたサイドライトより射し込む下から上への光と結合し，直接的な強さから柔かさへと変化する．

閉ざされた内部空間を持つ2つの建築が，雁行状に配置され，デッキによって結ばれたとき，道路と建築，壁とデッキ，建築の相互間に自立する外部空間が生まれた． 私は，この空間が，画一的につくられた段状の敷地に個の位置を確保する第1歩となることを期待した．

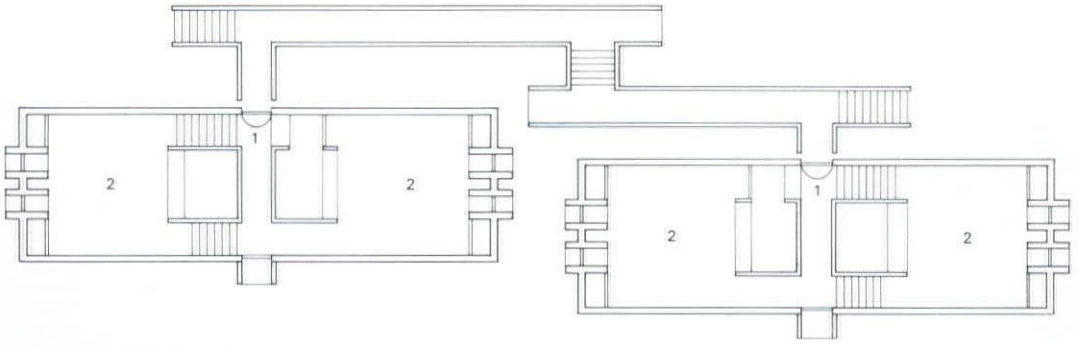
The site used to be a deep green hill. The hill had been razed to yield terraced residential lots. The site occupies two of these terraced lots. Two residential units were built for brothers. The symmetrical buildings are placed with a shift along the axis of symmetry.

The houses which I have designed could be categorized in two major types according to their site conditions. The first type are the ones located in densely populated city centers, and the other being those situated in the recently developed suburbia with little or no site characteristics. In the latter, the objective is how to provide the building with its own identity so that it may insist upon itself on a site lacking strong characters.

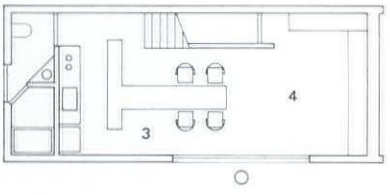
In the "Twin House" the south side is intentionally closed off by the delineating walls, with a hope for creating variety of interior space against the walls.

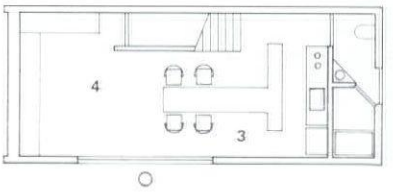
The light led in from the glassed vault penetrates through the threestory open shaft and permeates onto each floor level. Having reached the ground level, the cascading light is joined by the light from below entering through a clearstory of the living room. A potent light transforms into that which is more effeminate.

When the two buildings with independent interior space are staggeredly aligned and connected by a deck, isolated exterior space was generated between the street and the buildings, the walls and the deck, and the two buildings. I expected this architectural space to become the starting point for claiming individual identity on a systemetically parceled site.



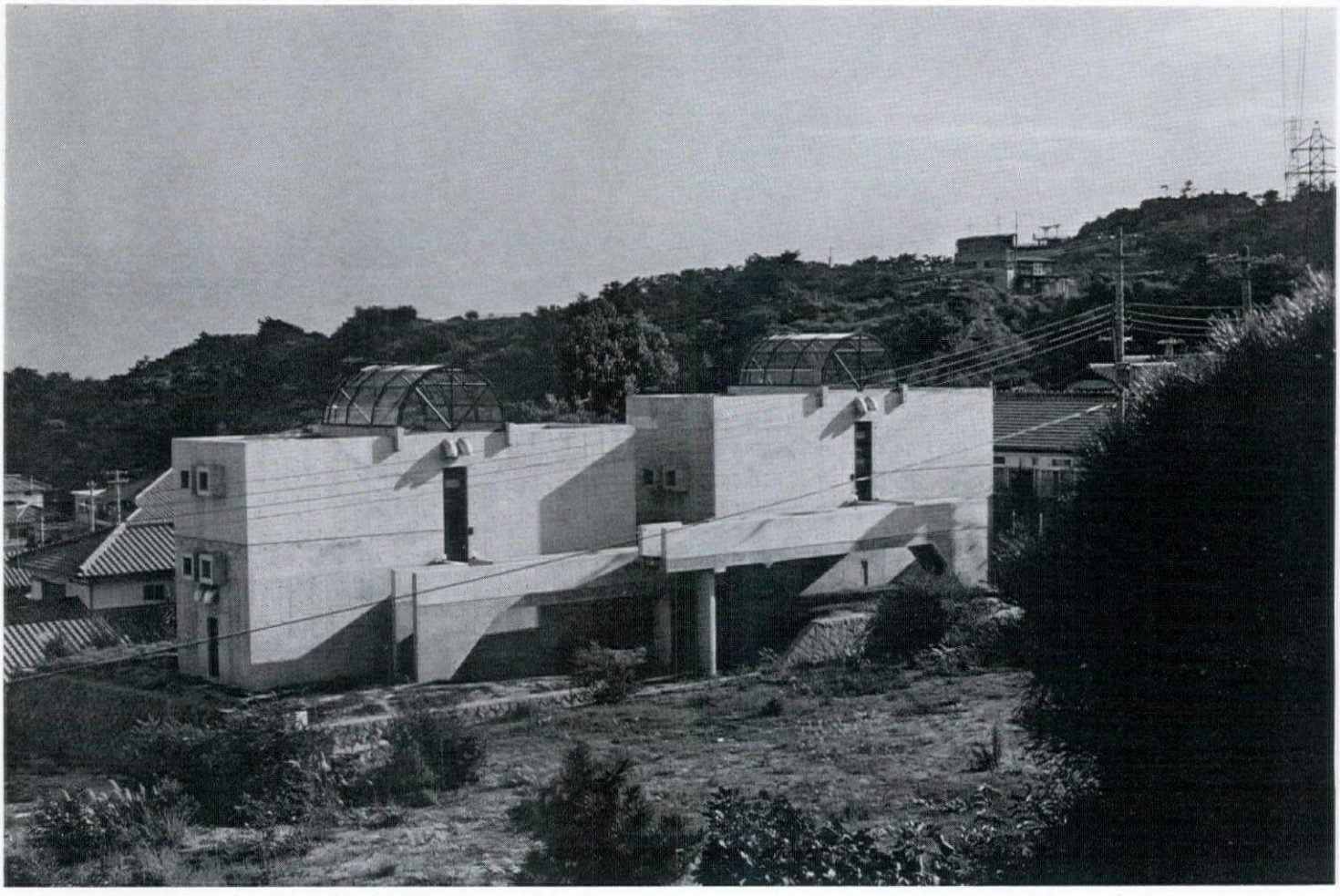
2階平面図　second floor plan

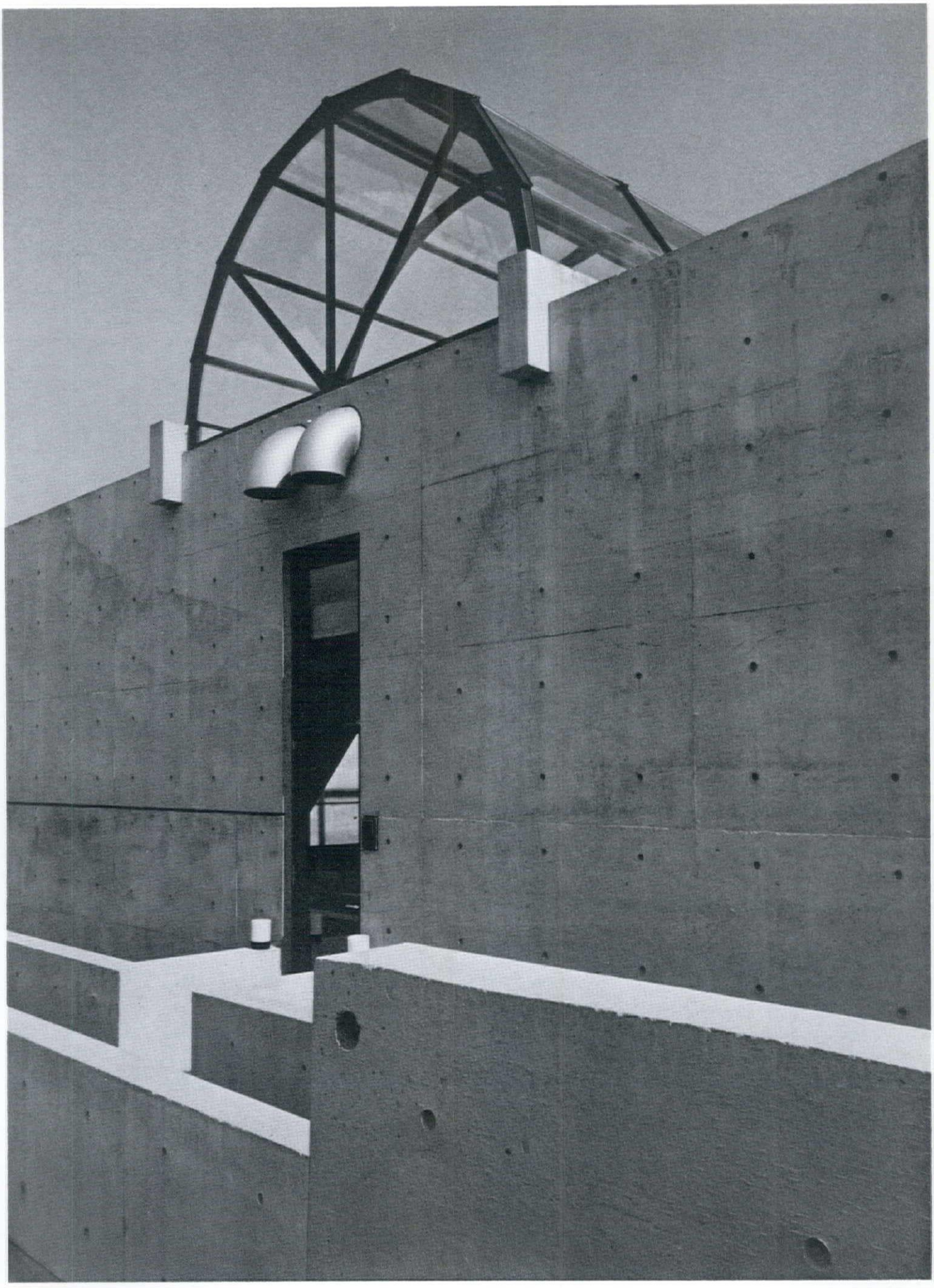


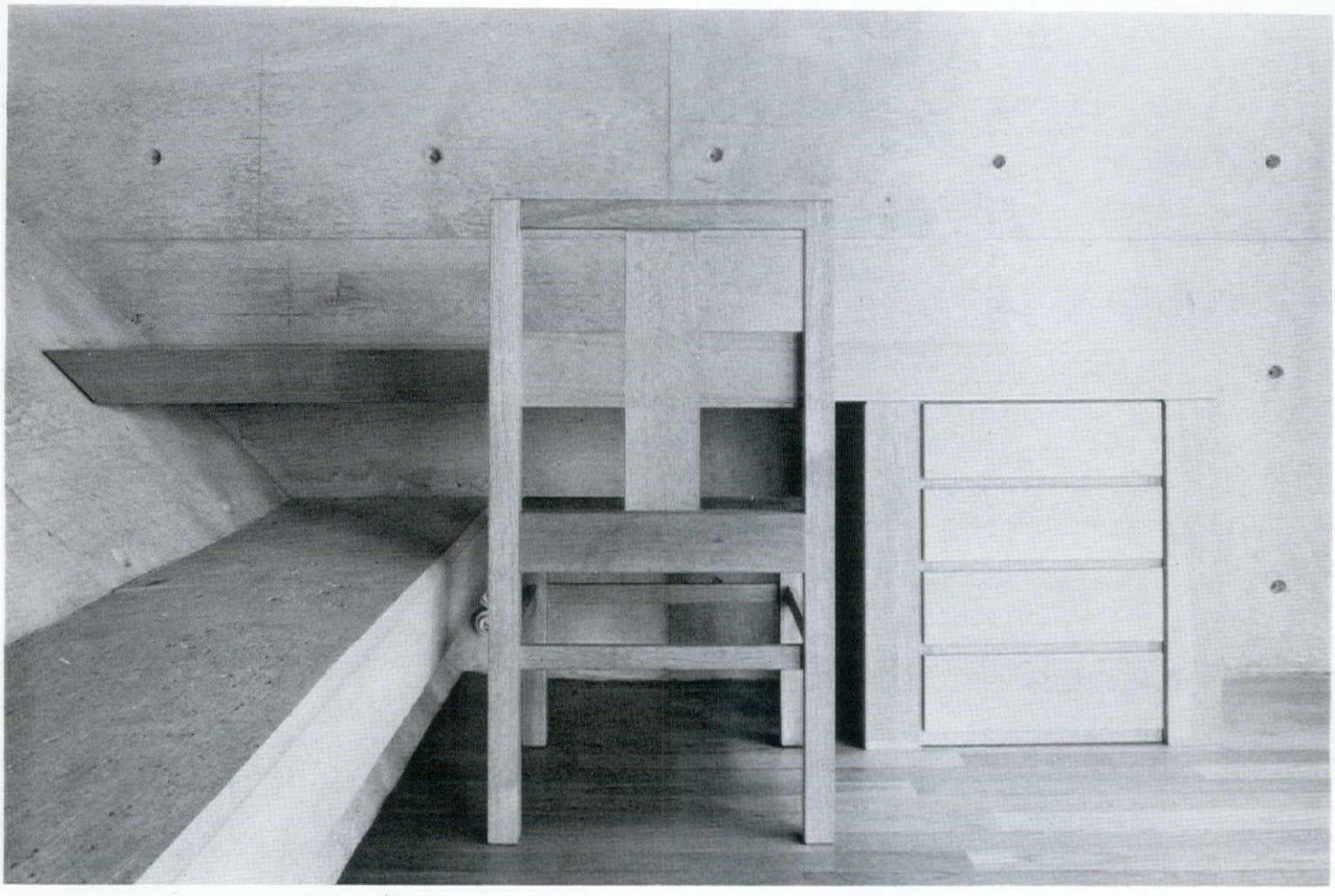


1階平面図　first floor plan　1：200

1　入口　entrance
2　寝室　bedroom
3　食堂　dining room
4　居間　living room





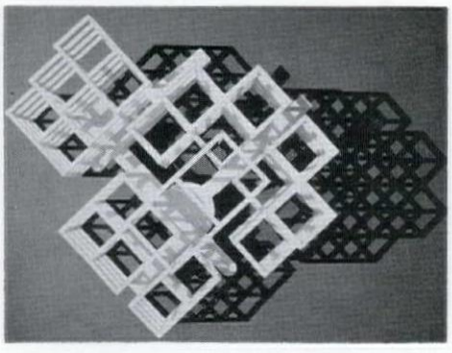


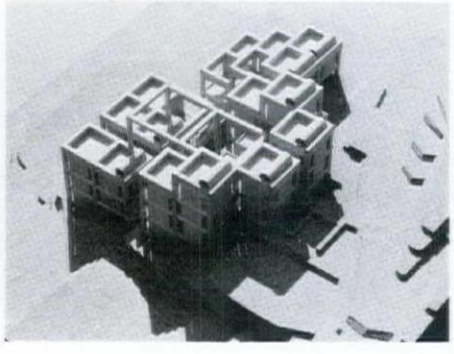


岡本 Housing Project 神戸市東灘区岡本・兵庫

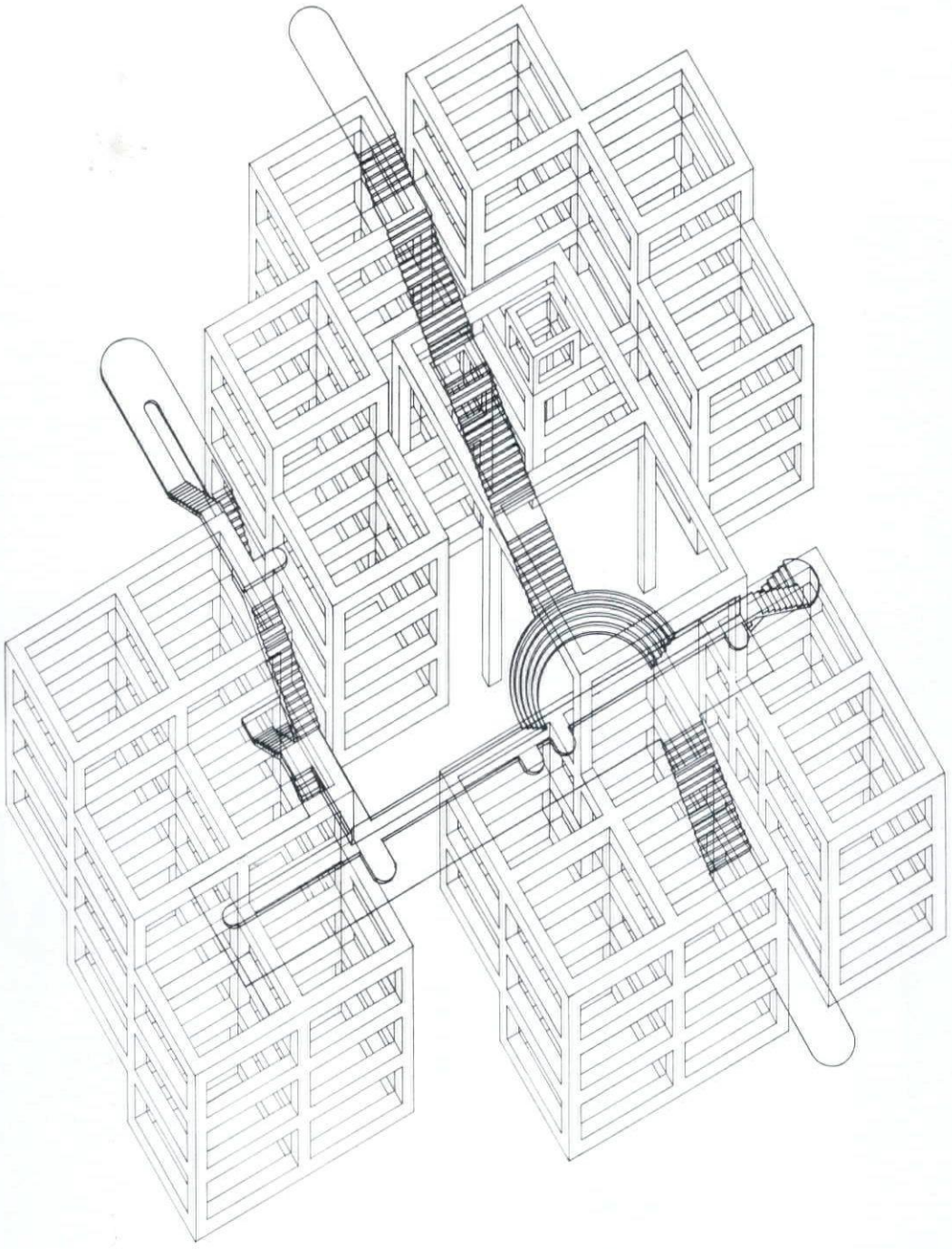
Okamoto Housing Project 1976

この計画と次の Art Gallery Complex の計画には，建築に対する私の基本的な考えが集約されている．
しかし，機能上・経済上の問題や，法的制限によって，実施設計を前に，ともに挫折してしまった．
建物は，ともに，コンクリート打ち放しの等質なフレームを基本として成立している．
立方体の単位が増幅する形態は，敷地の形状に従いつつ配置される過程で〈ずれ〉を生じて変形し，空間の流動する，新たな〈場〉を生み出す． 岡本 Housing では，山の斜面という垂直方向に歪みのある敷地に，Art Gallery Complex では，不整形な平面形状をもつ敷地に，フレームが，挿入されて〈ずれ〉を生じ，それぞれ，段状の広場やテラスを形成している．
日本の住宅地としては珍しい，見晴らしの良い南斜面に 17 戸で構成される集合住宅である． 周辺は，まばらではあるが，野生の樹木が残っている．
建物は，6 mの立方体グリッドのフレームを基本として成立する． 住戸は，プライバシーの確保と海への眺望を必要条件として，グリッド 2—3 個を単位に構成された． メゾネットを基本タイプとして，さまざまなヴァリエーションがとられている． 敷地のひき起こすフレームの「ずれ」は，住戸内部に吹抜けやルーフガーデンを生み出し，集合体には段状の広場をもたらした． 数棟に分散している集合体の建築は，上部に架けられた大きなフレームによって，ひとつに結びつけられている． この広場とフレームは，集合体の領域をさし示し，居住者の帰属意識を強めている．
広場に孤立する柱は，この集合体を象徴しつつ内部風景の原点となっている．
古来日本の建築は，自然と一体化した，開かれたものであった． 岡本 Housing では，フレームを用いることによって自然環境を破壊することなく人工の環境をつくり出すことが目指されたが，現在の宅地造成法が，それを許さなかった． 力で押してくる法律に対して，表現上絶対に譲れないこと，曲げられないことが多かった． 日本では，都市周辺部に多く見られる造成地が示すように，土地を切り崩し，段状に造成する方法をとらない限り，人が集まって住むことはできないようである．
岡本 Housing は，建物と自然との関係をもう一度問い直してみたいと，深く考えさせられる仕事であった．





These two projects summarize my basic feelings toward architecture. However, due to functional and financial reasons, as well as legal restrictions, both of them fell through before execution.
Both buildings are conceptualized by using uniform concrete frames in their bare form. The composition resulted from multiple cubic units producing a "shift" when being placed on the site. At the same time, a dynamic spatial "field" was generated. The site for the Okamoto Housing project is a sloping hill with irregularities in the vertical direction. The Art Gallery, on the other hand, is located on a site with planer distortion. In both cases, the inserted frames produce a "shift" which, in turn, creates a stepping plaza.
Okamoto Housing
On a southward sloping panoramic site, unusually favorable for a residential site in Japan, seventeen units were designed to compose a complex. Natural vegetation, however sparse, are still being found in the surroundings.
The architecture is composed of a modular cubic-grid frame whose sides measuring 6 meters. The living units called for privacy as well as the view toward the ocean. Each unit is constructed of two to three grids. Having the maisonette unit as the basic type, there are many variations. The "shift" produced between the frames and the site accounts for the open shaft within the units and roof gardens. Moreover, the "shift" contributed a stepping plaza for the complex. The several scattered conglomerates are brought together by a large dominating frame. The plaza and the large frame delineate the territory and foster a sense of identity for the residents. The isolated columns in the plaza symbolize the housing complex, while becoming the point of departure for the landscape.
The traditional Japanese architecture used to be open to and united with nature. In Okamoto Housing, an attempt was made to create a man-made environment without interfering with the natural settings. But the present law concerning the parceling of lands did not allow my idea to be executed. The oppressive law denied too many aspects which could not be abandoned nor compromised from the standpoint of design. In Japan, as shown by many parceled lands around cities, it seems impossible for people to gather and to live, unless the land is rendered into a terracing form.
Okamoto Housing was the work which revived the question of the relationship between architecture and the environment.



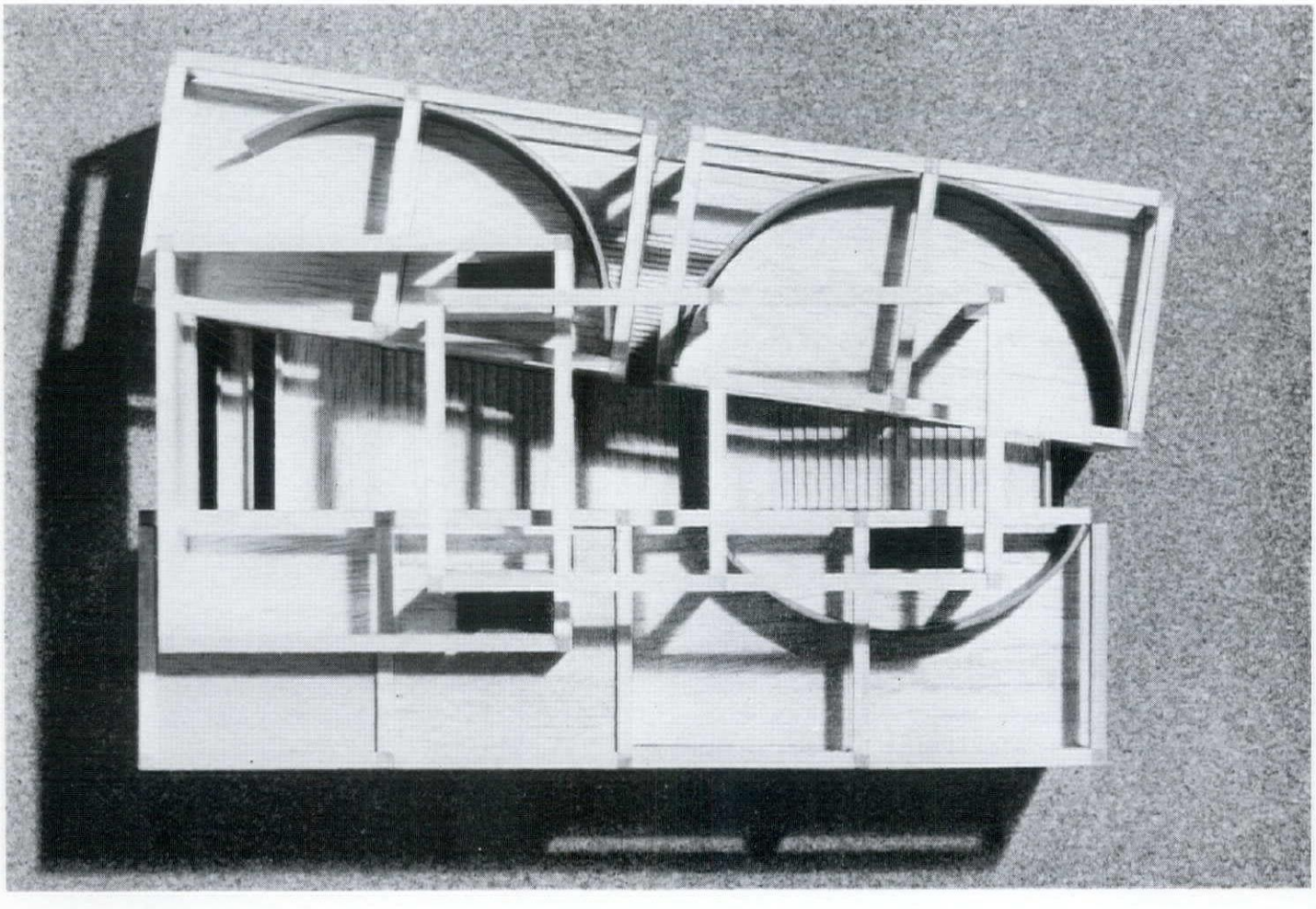
アイソメ図　isometric

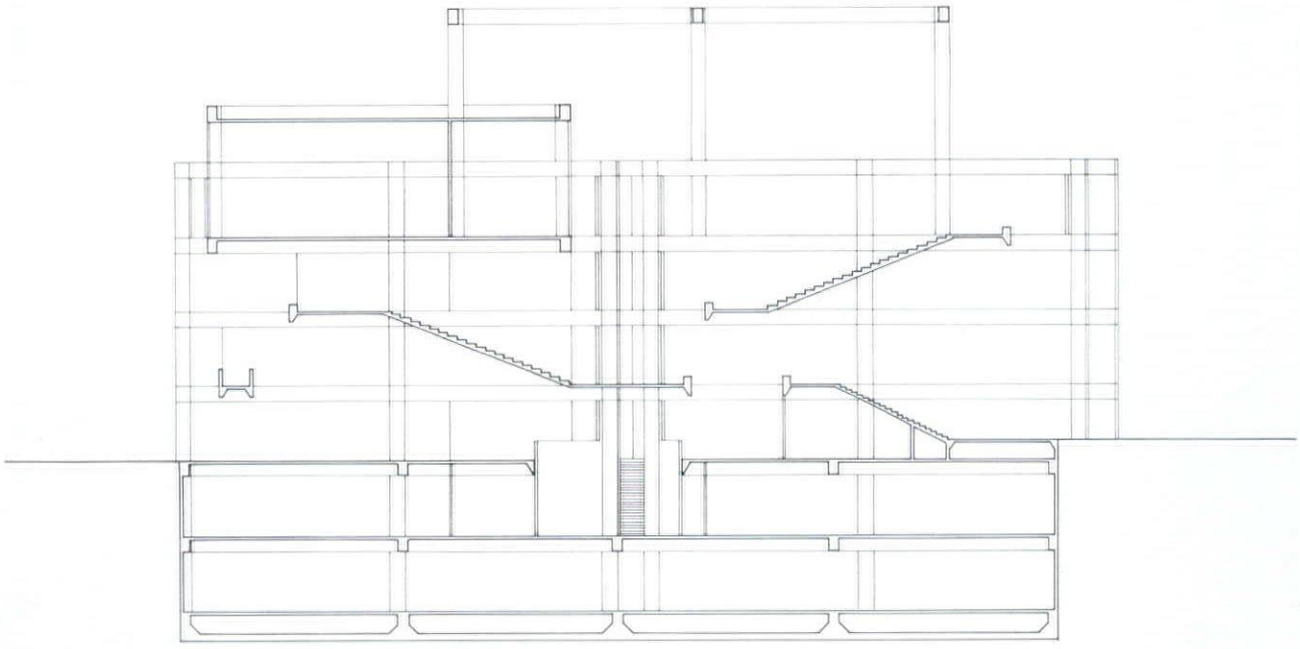
Art Gallery Complex Projects

Art Gallery Complex Projects 1977

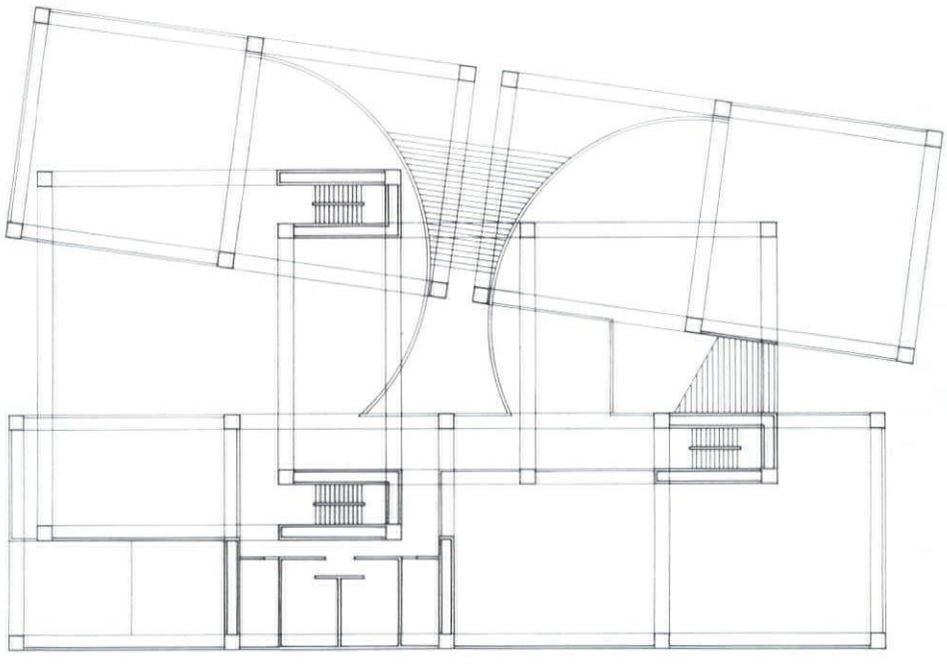
建物は，コンクリート打ち放しのフレームによって構成される３つのブロックと，この３つのブロックを貫通するガラスブロックの壁より成り立っている． ガラスブロックの壁は正円を描き，フレームが生み出した〈ずれ〉には，段状のテラスが形成されている．
建物の機能は，現代美術の画廊と前衛的な試みを行なう小劇場，デザインを軸とするオフィスである． 現代美術を中心としてその派生する領域を含んで生まれる，流動的で多様な空間をつくりたいと考えた．
段状のテラスは，客席・舞台・画廊と，多様な機能を展開する． ここでは，階段は，ふたつの異なるレベルの床をつなぐという機能を超えて，上下する人と人の対話の生まれる場所，さまざまな変化に応じるドラマの主役として捉えられている． 段状のテラスでは，多目的な表現行為が可能となり，情報の送り手と受け手が，同一空間の中で交流する． 円形のガラスブロックの壁を通過する光と裸形の光の交錯によって，ここで生じるさまざまなできごとを，多様に演出できないかと考えた．

The building is composed of three volumes born of exposed concrete frames and a glass block wall that penetrates through the three volumes. The glass block wall draws a circle, and a "shift" produced between it and the frames develop a stepping terrace.
The functions contained in the building are a modern art gallery, a small avant-garde theater, and design related offices. I wanted to create a rich and dynamic space which centers around modern art, but also includes the different streams of the same genre.
The stepping terrace presents seatings, stage, gallery, and various other functions. Here, the stairs exceed the conventional function of linking the different floor levels, and serve as a place in which the interaction between the ascending and decending people take place. In other words, the stairs play the leading role in the drama of responding to various situations. On the stepping terrace, multiple expressions are made possible, and the sender and the receiver of information interact in the same space. By the intermixture of a naked light with the subdued light permeating through the circular glass block wall, I wondered if I could produce a manifold drama on the stepping terrace.





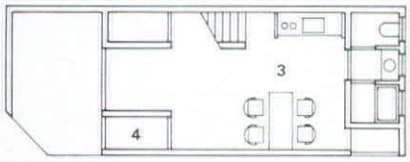
断面図　section



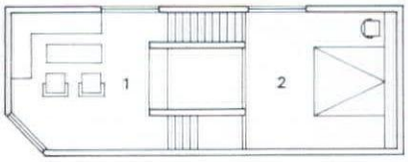
1階平面図　first floor plan　1：400

富島邸 大阪市大淀区豊崎東通・大阪

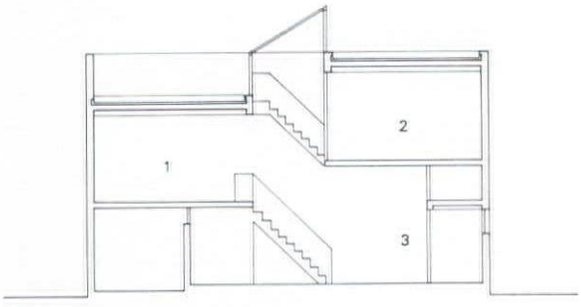
Tomishima Residence 1973, 1981



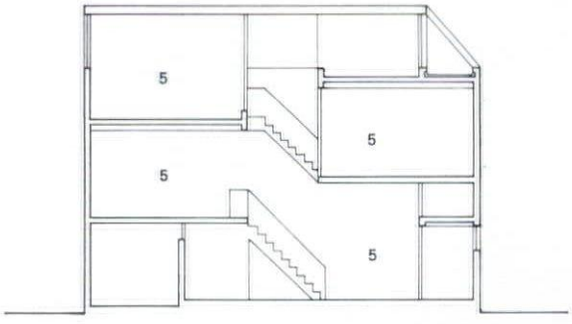
1階平面図 first floor plan 1 : 200



2階平面図 second floor plan



断面図 section



断面図（増築後） section (after extension)

1 居間 living room
2 寝室 bedroom
3 食堂 dining room
4 入口 entrance
5 アトリエ atelier

若い夫婦の生活スペースが，厚いコンクリートの壁によって囲われている．

戦前に建てられた5軒続きの棟割り長屋の一角を切り取って建て替えたもので，私の独立後の最初の仕事であり，私にとっていろいろな意味で思い出深いものである．

最初に関わった仕事は，その後の作品をつくるうえで軸となることが多い． 私の場合も富島邸で萌芽した多岐にわたる問題意識は，現在に至るまでなお，持続している．

囲い込む〈壁〉によって，生活を獲得することができないかと考えた． そこには，通風・採光・日照のための最少限の穴のほかは何も無い． この建築における，外部との唯一の接点であるトップライトからの光が，中央の吹抜けを媒介として各階に拡がる． 無表情なコンクリートの世界に拡がるこの光だけが，閉ざされた世界の中で営まれる生活に，自然のリズムを与えている．

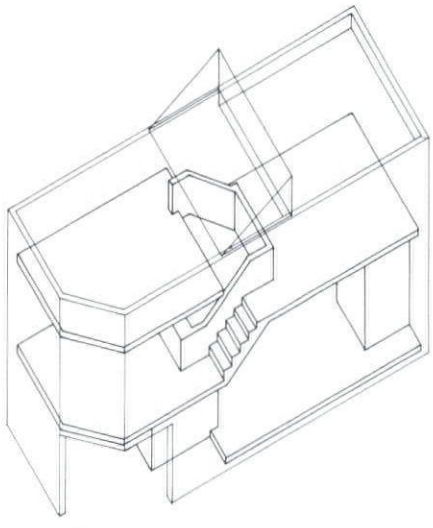
近代建築は，柱・梁構造を採用することによって，それまでの壁構造の建築にはない明るさを獲得した．

空間を満たす光の〈量〉が関心の的となり，その〈質〉は，非合理な問いであるが故に，近代建築の論理からは捨象された． しかし私は，建築空間にとって光の質は，その量よりも重要であると考えている． ものの表情を豊かにし，時を超えて記憶に滞まるスペースの，光の〈質〉を問いたい． トップライトやサイドライトといった，空間に射し込む角度の違いによる光の表情，反射光・散乱光・拡散光・直射光といった，透過する素材によってもたらされる光のさまざまに異なる性質． このような光の性質や表情を読み取りつつ空間に秩序を与え，一見無機的な世界に空間のふくらみを与えたいと考えている．

富島邸では，トップライトから射し込む強い直射光が，コンクリートの壁で構築された空間を分節している．寝室・居間・食堂とスキップするフロアに従って，海の底深く射し込む光にも似て，その光の強さは次第に弱まっていく．

富島邸では，囲い込む壁は防禦としての壁であり，いまだ後の作品に出て来るような，自立した壁というイメージはなかった． しかしすでに，人が都市に住みつく拠点としての意志を持っている． モニュメントとしての壁ではなく，生活のための壁の萌芽である．

完成後数年を経て，富島邸の上部には，鉄骨造の屋根が架けられた． 床は5層となり，新たにアトリエとして生まれ変わる．



アイソメ図 isometric

A home for a young couple, enclosed by thick concrete walls.

It is a reconstruction of one of a series of five row houses built before the war. This was my first commission after I became independent; therefore, it carries a lot of memories.

The first job which one encounters often becomes the mainstay for the following works. In my case, for example, the realization of various problems that sprung from the Tomishima Residence still carry on.

I wondered if my architecture could win living by using a delineating "wall." There are only minimum amount of openings for ventilation, lighting and radiation. The light which enters from the skylight is the only interaction with the outside, and it extends to every level of the house through the medium of central void space. This light which unfolds itself within the inexpressive world of concrete, provides a natural rhythm to the life carried on in an otherwise precluded world.

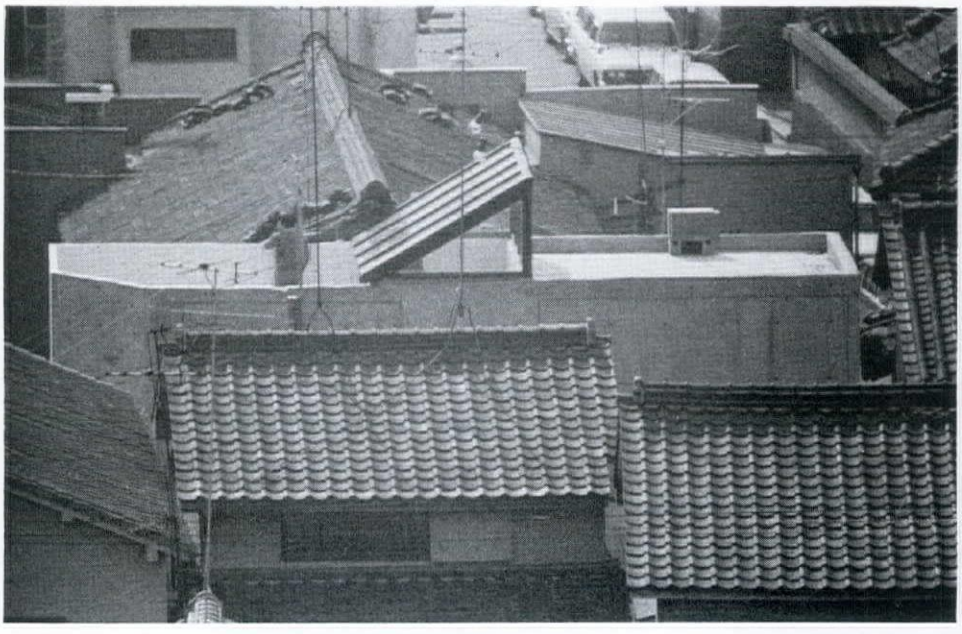
By the use of column and beam structures, Modern Architecture conquered light which had not existed in the architecture of bearing wall structures. The interest was focused on the "quantity" of light that fills a space; and its "quality," being an impractical question, had been eliminated from the theory of Modern Architecture. But I believe that in architectural space, the quality is more important than the quantity. I want to investigate the "quality" of light which enriches the expression of an object and etch a strong image in the viewer's mind. The light entering from skylights and clearstories ——the expressions of light due to the different angles in which it is introduced into space; reflected light, scattered light, direct light, diffused light——the various characteristics of light brought about by the material through which it comes in contact: by providing order to space with the understanding of the characteristics and expressions of these light, I want to achieve the spatial expansion in the seemingly inorganic world of concrete.

In Tomishima Residence, the direct light entering through the skylight bisects the space created by the concrete wall enclosure. As the levels stagger through the bedroom, the living room, and the dining room, the intensity of light gradually diminishes, alluding to the light reaching deep into the ocean bottom.

The surrounding walls of the Tomishima Residence are for protective purpose, and they do not suggest delineation which is apparent in the walls of later works. But in Tomishima Residence, the walls already imply a desire to define a place of inhabitance in a city. This is the starting point for walls built to secure living rather than walls built as a monument.

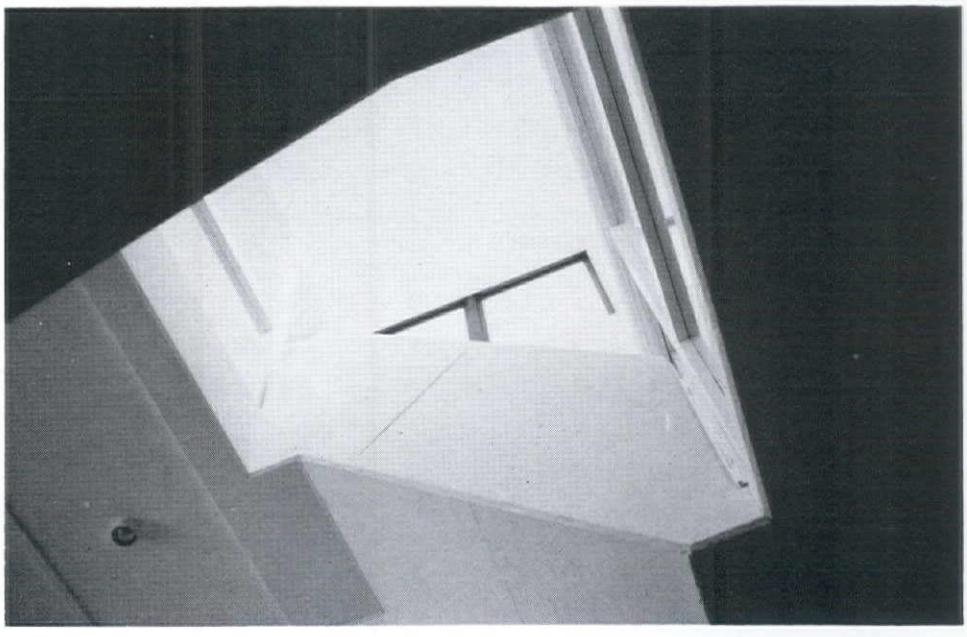
After a few years, a steel frame roof was placed on top of the Tomishima Residence. The floor levels became five, and soon it will be revitalized as a studio.







増築後　after extension



時代の透き間から

二川幸夫

今日ほど，現代建築が目標を失っている時代は珍しいと思う．　もちろん，この原因のひとつは，19世紀より続く現代建築の，その指導的立場にあった，ライト，ル・コルビュジエ，ミース，そしてアアルト，カーンといった人達が，60年代から70年代にかけて次々と世を去っていったことにあると思われる．
同時に，建築教育の虚弱な地盤が，ここに来てその結果を表わしたといっても過言でないと考える．

安藤忠雄が，住吉の長屋で彗星のように日本建築界に姿を表わしたのは，丁度，前述したような時代の透き間から顔を出した状況であった．

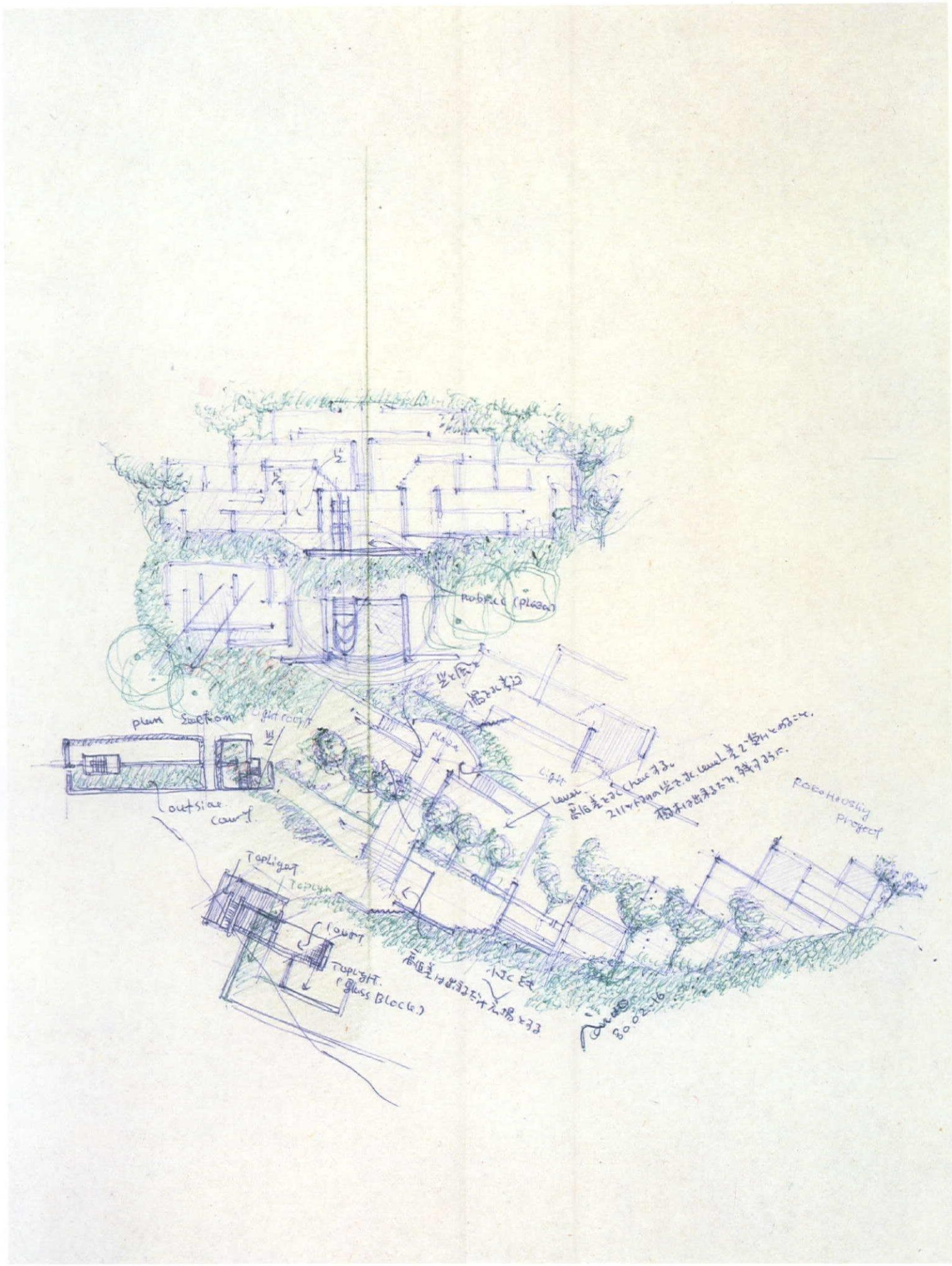
戦後の日本住宅の現状を考えるとき，その生産数はアメリカに次いで二番目と多くを数えることができるが，デザインの質を考えると，これは真に寂しいと思わざるを得ない．その中で特に優れた作品としては，菊竹清訓のスカイハウスを挙げることができるだろう．この住宅は，日本の伝統ある形と空間の中から生れた，ゴージャスな雰囲気を持った作品で，インターナショナルな見地から考えても，この住宅が果たした役割は多大であった．
安藤の住吉の長屋は，恐らくスカイハウス以後の優れた日本住宅として私は評価したい．もちろん，スカイハウスの持っている要素とは正反対に位置する住宅であるが，デザインの密度は，立派にインターナショナルの中で評価に価するに充分なものを持っていると思う．　大阪の古い町並のどこにでもある長屋の現代版として登場したこの作品は，日本の町家のスケールを基本に置いたプランで構成されており，主要な材料がコンクリートの打放しという適切な選択といい，申し分のない空間を創り上げている．　この住宅が，現代建築の系譜の中で大変に重要な作品であることを特筆したい．　安藤が発表するその後の作品のすべてが，かたくなまでにコンクリートで構成されているのを見ても，この作家に，何かひとつの道を窮めたいという求道者の顔を見ることができる．

彼は現代建築の透き間から顔を出したと述べたが，それは彼が，今日，建築家として立つときに誰もがたどる道を歩んでいなかったことから生れたものであると思う．　聞く所によると，彼は今日一般の建築教育，そして建築の師匠というものを持っていなかった．この不幸が逆にその強さを生んだのではないかと考える．　今日の建築家の多くが，恵まれた組織の中で，自分を忘れ，サラリーマン化する中で，いつも自分一人を信頼することの中で，四六時中建築を見詰めている彼の粘りの強さは驚嘆に値いする．

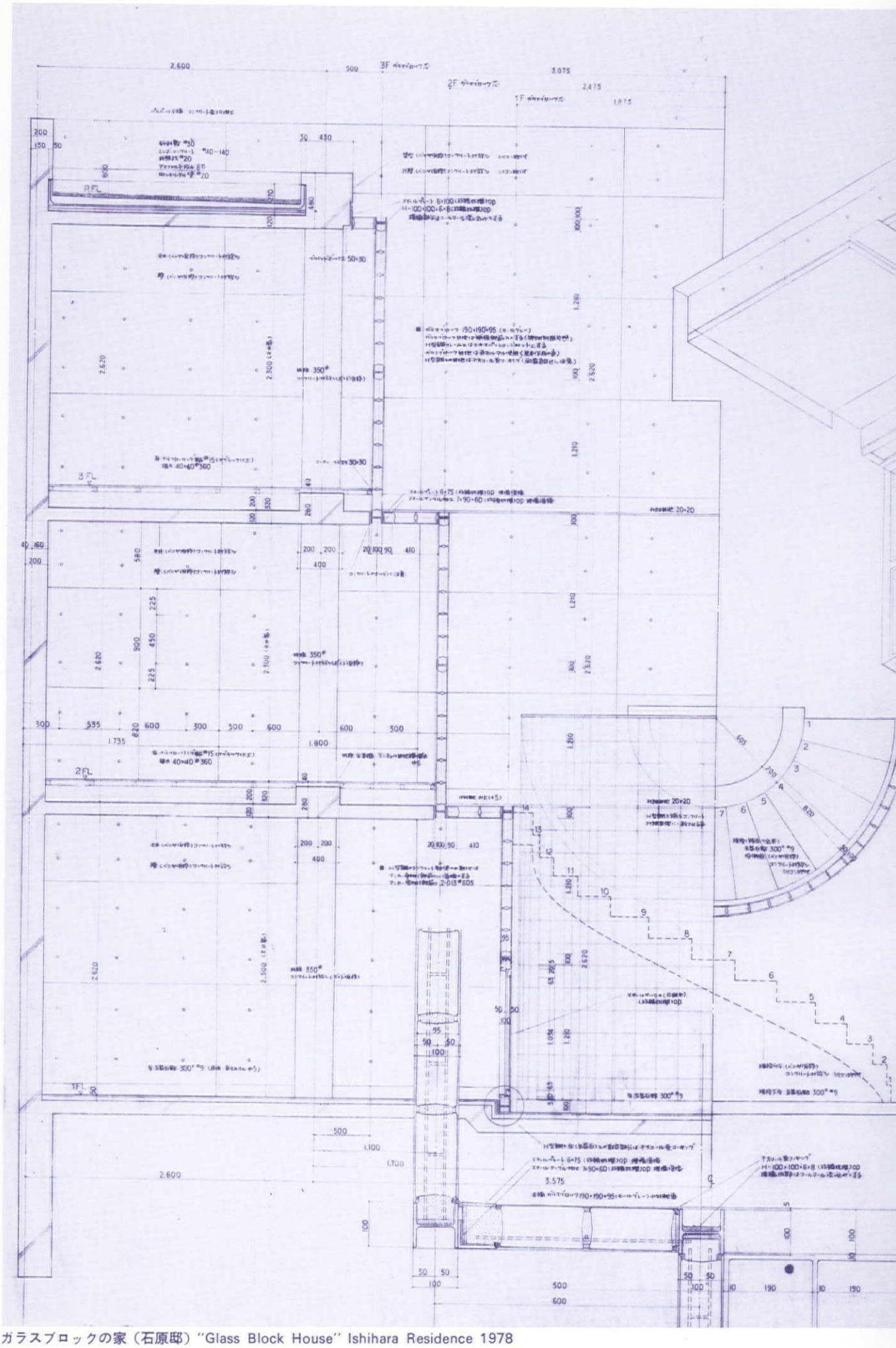
もちろん，彼のすべての作品が成功しているとは思わないが，一歩一歩，現代建築の未知の世界へと登り詰めて行っていることだけは，彼の作品から充分感じることはできる．

ル・コルビュジエに始まって，幾多の優れた建築家が挑んできたコンクリートの美学を，彼がどこまで突き詰めて行くか，私にとっては大変興味のあることである．

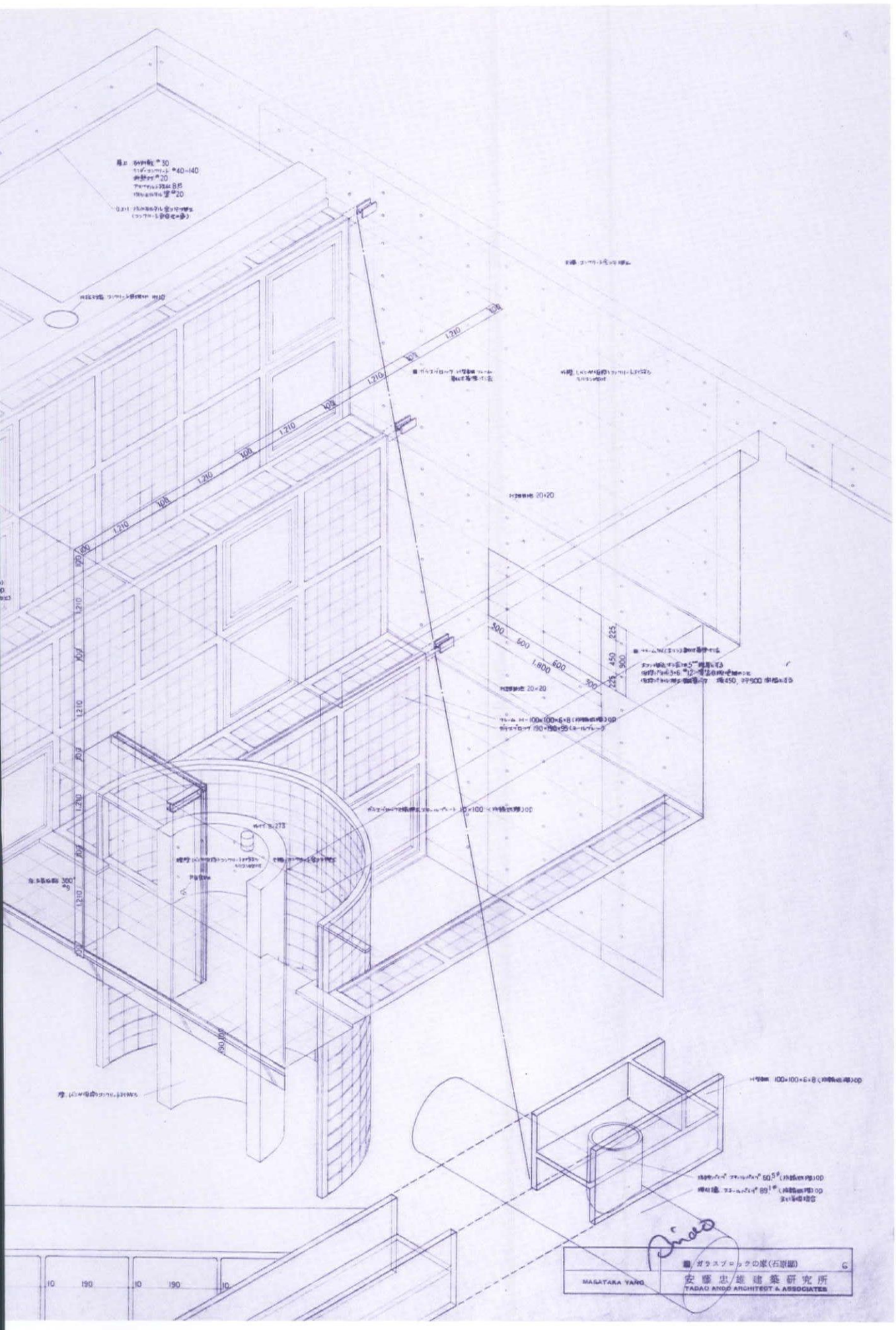
●ふたがわ・ゆきお／写真家

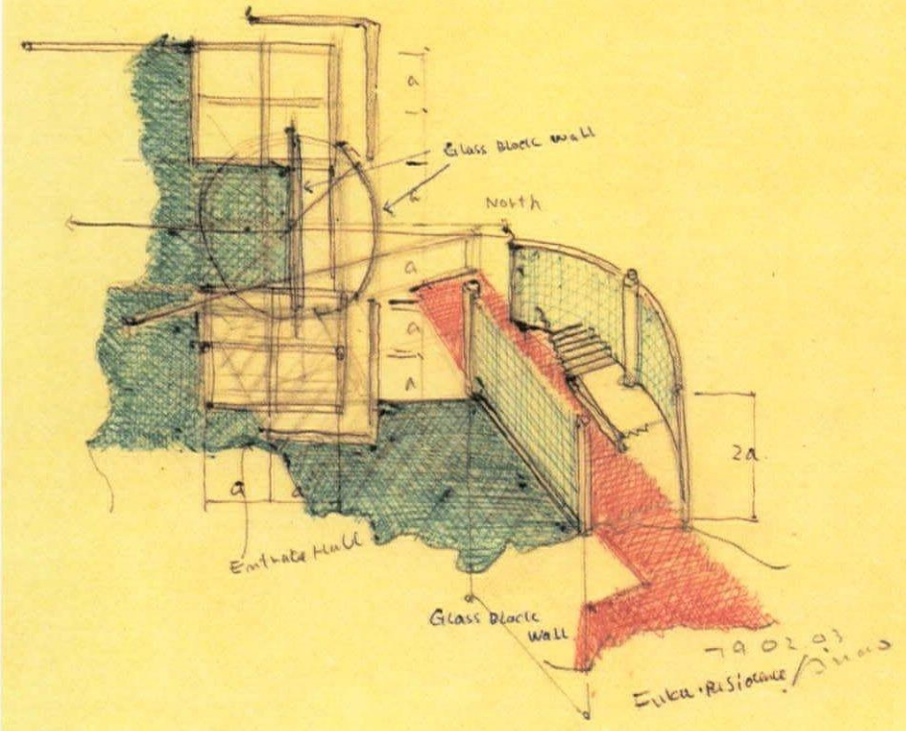


六甲ビュー・コートプロジェクト Rokko View Court Project



ガラスブロックの家（石原邸）"Glass Block House" Ishihara Residence 1978


1,210
1,800
500
600
450
900
225
20×20
MASATAKA YANO
安藤忠雄建築研究所
TADAO ANDO ARCHITECT & ASSOCIATES



福邸 Fuku Residence 1980

■
対談
■

西沢文隆＋槇 文彦



西沢文隆
建築家
東京大学卒
坂倉建築研究所代表取締役



槇文彦
建築家
東京大学卒
東京大学教授，槇総合計画事務所

素材に対する強い執着から生まれた爽やかな形態の抽象性

編集　本日はお忙しい中をお集まりいただきまして大変ありがとうございます．　このたび，安藤忠雄さんの作品を特集することになりまして，普段から安藤さんの作品をよく御覧になっており，また安藤さんの人となりもよく御存じでいらっしゃる西沢先生においでいただいたわけです．　また，先日，槇先生は西沢先生，安藤さんと一緒に，安藤さんの作品を幾つか御覧になったわけですが，その感想などを含めてお話しいただきたいと思います．

関西と関東　住宅設計に文化の及ぼす影響

槇　最初に，西沢先生に，関東と関西の住宅設計の違いについてお聞きしたいのですが．

西沢　本来なら風土の相違こそが建築の形に影を落とすべきだと思うのですが，文化の影響の方が大きいようですね．　関西では雨がシトシト降る上に，夏，台風が来るという気候なので庇が深い必要は少なく，台風の時は却って危ないわけですが，それでも庇を深くして陰影の多い柔かな光にして空間を楽しみます．　関東では台風が来ない上に横なぐりの雨が多いのですから，庇が深い方が自衛上良いように思えるのに庇が浅い．　妙なものですね．　平生の風が強い関東では住む人の気が荒くなり，風土が柔かいところでは人の心もなごむということがあって，生活感覚は当然違ってくる．　文化も関西では陰影に富んだ屈折したものになるということがあり，建築は風土の直接の影響というより，文化という媒体を通して風土の影響を受けるみたいですね．　関東は江戸，明治を通じて日本全国の人々が寄り集まって出来た，言わば植民地文化であるのに対して，関西は地に定着した文化が積み重ねられてきた．　そのおかげで施主層の考えが地についていてしっかりしているということがありそうです．　関西だって，もともとは地方の人が集まって都市をつくったので，都市である以上，元は，多かれ少なかれ植民地みたいなものなんですがね．　関西だけが定着したというのは不思議と言えば不思議ですね．　あるいは，関東の方が地方からの流入が激しかったために，定住者がいても，新たに入ってくる移民の量にかき消されてしまうということでしょうか．

槇　それは，現実性が強いのか，それとも，古くからある家というものに対する考え方が今でも生きていて，そういう重みが建築家の方にも伝わって，プレッシャーとしてかかってきているのですか．

西沢　良い意味でのプレッシャー，建築家を育ててくれる方向のプレッシャーとして働いたと思います．　ただし今は関西でもだんだんとそれが薄れてきて，東京と大阪の差が紙一重になってきつつあります．　昔は，大阪は定住度がある程度高かった．　それに文化が成熟していて，たとえば応接間をつくる時に入口がひとつだと，「お客さんの入るところから私達は出ていくのでしょうか．」と言われます．　そういうのは長い間の積み重ねで出来てきた文化感覚だろうと思います．　このごろはそういう人が少なくなってきて，関東とあまり違いはなくなりつつあるのですが，しっかりしている人はしっかりしていて，建築家の手綱を引き締めているという感じはします．

槇　それは京都を頂点にしているのですか．

西沢　京都と大阪と同じくらいです．　昔の船場のいとはんなどはしっかりしています．

槇　ちょっと感じたことがあるのですが，関西の場合には女性がしっかりしていて，家というものは女性が取り仕切るという感覚が強いのではないでしょうか．　住宅がつくられる時，常に必ずしも設計されたものとは限りませんが，そうした婦人の意見の強さが，長年，蓄積されて文化の一側面を確固としてつくっているのだと思いますが．

西沢　そうだと思います．　表門と裏門との関係も，私どもがつくる時は，表門から来られる方は出て行って挨拶をしなくてはいけないだろうということです．　こちらで遠隔操作をするのではなく，出ていって開けるようにしていたのです．　ところが，このごろは変わってきて，当然裏門から来るべき人が表門から来まして，やはり表門を遠隔操作で開けるようにしていたほうがよかったというようなこともあります．

槇　隣家に対する考え方は，関西では，感覚的に東京とか関東と違うのですか．

西沢　今はかなり似てきていますが，昔は違っていて近隣という意識が強かった．　今でもお隣り同志が顔を合わせると，ご挨拶はします．　これは一例にすぎませんが，関西には長い間につちかわれてきた生活秩序，生活感覚というものがあって，それをきっちり護ることによって関西の文化が出来ていて，ものの判断の基準になっていたと思うのですが，今では大変稀薄に

なってきたことは誠に残念なことです.

槇　隣家に対する考え方は，関西では，感覚的に東京とか関東と違うのですか.

西沢　今はかなり似てきていますが，昔は違っていて近隣という意識が強かった.　今でもお隣り同志が顔を合わせると，ご挨拶はします.

槇　東京はどちらかというと〈よそ者文化〉というか，明治以後，日本全国各地から人が入ってきて，他人意識が確立されたのに対して，関西では長い間同じ場所に定着していた人達がつくってきたマナーというものがまだ残っているのですね.　その場合に，家と家との〈閾(しきい)〉のありかたに，たとえば塀とか垣根とかいろいろな手法にも，ある程度，影響を与えてきたのでしょうか.　あるいは，そうではないのでしょうか.

西沢　各家々でガチッと仕切っていますね.

槇　京都などを見てもそうですね.　仕切っていますね.　隣地との交流というのは，お互いに表へ出て，それからということですね.

西沢　そういうことです.　近所の方が来られる場合は，〈ハレ〉の時を除けば，絶対，裏口から来られます.　このごろは，表から来る人も出て来たという感じです.　表から来られる人は若い人です.

槇　昔は裏からですか.　それは，かつて表門と裏門の両方あった時代に，裏門の方から来るとか，あるいは，勝手口から入るということですね.　今はほとんどないのですが，戦前は，50～60坪ぐらいの延坪をもった住宅になると表玄関と内玄関があって.

西沢　マンションは別として，今でも内玄関はつくります.　用途が全く違うのです.　そのもう少し前に溯ると，玄関は3つです.　中流以下が表と裏のふたつです.　つまり，いわゆる結婚式の時にお嫁に来た時だけ上がるハレの玄関があります.　これがない時は庭を通って座敷の縁先から上がります.　天皇陛下などの偉い人が来られる時に入る玄関と，普段の表玄関と内玄関，さらに勝手口があれば仕分けは完璧になるわけですが.

槇　3つも玄関をつくるという風習はずいぶん前になくなってしまったけれども，それは何から来ているのですか.　やはり武家屋敷とかいうものからですか.

西沢　もともとは武家屋敷の真似に始まったのかもしれませんが，序列や秩序が重んじられる中で，生き方というか文化感覚というものが定着してきたのだと思います.

槇　ということは，昭和の初め頃に出来た中流住宅とか郊外住宅というものには，武家屋敷を矮小化したという面が強く出ているわけですね.

西沢　矮小化して少しずつ省略していった.

槇　省略していったということは表層の考え方，間取りの関係などに強く残っています.

西沢　そこへもうひとつ，西洋から応接間というのが入ってきた.　その応接間をどこにしていいのかわからず，玄関の横へ応接間を付けた，というのがそもそもの……

槇　伝統ということではないけれども，住慣習に関する時代の蓄積みたいなものがあったのが，関西でも，だんだんなくなってくるのですね.　敷地の条件，生活意識とか，いろいろな要因でなくなってくる.　その中である種のプラグマティズムみたいなものは強く残っているということですか.　そうすると，安藤さんの建物はどこかその辺で歯止めがあったわけですね.

西沢　そうであろうという気がします.　安藤さんはかなり自由にやっていると言いますが，お施主さんがギュッと手綱を引っぱっている感じがしないでもないです.　安藤さんを信仰して頼む人が多いですから，割合に自由度は多いと思うのです.　しかし，肝心要のところは見ているのではないかと思います.

信仰者を持つ建築家——住宅設計の特殊性

槇　信仰の対象という点では，篠原一男さんとか白井晟一さんと同じようなタイプに属するということですか.　一般的に住宅を頼まれる時には，以前に建てたものを見て頼まれるということが多いようですね.　住宅以外の一般的な建築の場合は，あれがよかったから建ててくれということは皆無に近い.　私は小学校をいくつか設計していますが，その小学校に，校長さんとか小学校の先生方ですが，参観者だけで日本から数千人ぐらい見に来まして，あんなに見に来たのであれば，学校の設計だけで手が廻らなくなるくらい大変になるのではないかと思うのですが，ひとつも頼まれたことがないです.　感心して帰ってくれるそうだけども，頼みに来ないですから.　住宅というのは必ず見た人，そこを訪ねた人がもう一度頼みに来る.　その中から一種の信仰みたいなものを中心にファンクラブが形成される.　住宅の場合は信仰者が生まれるのですが，他の一般的な建築については建築に対しての信仰者は少ないですね.

西沢　自分の生活を託すべき家と，そうではないビルとでは気の入れ方が違うのでしょうね.

槇　フランク・ロイド・ライトもそうです.　ライトの建築でごく少数の特殊なものを除いては，すべて住宅です.　特に彼のやった住宅については，ライトの信仰者がいるわけです.　10年か20年前に，シカゴ郊外のライトの住宅の多い所を友達と一緒に見に行ったことがあるのです.　その時に何軒かの家を訪ねましたが，突然の訪問者にも彼らは喜んで見せてくれるのです.　アメリカ人は日本人よりも開放的ですから.　そして古い家のライトの事務所のつくった図面を持っていて，それを広げて見せてくれるというところがあるのです.　安藤さんの設計された家，篠原さんの設計された家を見に行った時，クライアントが自分の家に対して持っている感じがどこか似ていると思います.

西沢　割合に喜んで見せてくれます.

槇　今度の場合でもそういう感じは施主の中にありますね.　僕達が見ると住みにくいのではないかというところを施主は感じていませんか.

西沢　それはちょっとよくわかりませんが，感じるのが当然でしょうね.　しかし住み馴れてみると案外前より住み良い場合もある.　いや，そうでなくてはいけないのではないでしょうか.　施主のこれまでの習慣をも考慮しながら，将来どうなっていくかも考えて設計してあげるのが住宅をつくる建築家の義務でしょう.

槇　僕は住宅というのは建築家の考え方次第で違ってくるものだと思います.　どの種類の建物についても，建築家Aが設計したものとBが設計したもの，BのものとCのものでは，ものすごく違うのですが，住宅に関する限り，それだけではなく考え方自体が違うのだと……　おそらく建築家でない方が見られてもそう思うのと同時に，建築家が見ても違うのです.　たとえば，図書館，オフィスを見ますと，もっと類型化されている部分が多い.　たとえばドアひとつにしても，窓ひとつにしても，玄関にしても，ここは透明にしたとか，ここはこういう材料にしたとか，ここは小窓にしたとか，むしろデザインのレベルにおいて建築家AとBの差を感じるだけでなく，住宅の場合は，デザインの差を超えた，生活感覚の差につながっている場合が多いと思います.　そこまで違うのだな

あということを感じるのは住宅なのです。　これだけ生活感覚の違う人がものをつくっているのだなあ，と。　そうではないでしょうか。

西沢　本当はそうなんだけれども，建築家に押しつけられる場合は必ずしもそうではないということがある。　ディテールの問題だけではなくて，安藤さんなら安藤イズムのようなものがあって，それに支配されることがある。

槇　そうですね。　僕の言おうしたことは住んでいる人の生活感覚よりも，つくる建築家が違った生活感覚でアプローチしているために，それぞれの建築家がもっている生活の感覚が違うことを感じるということです。　オフィスを設計する時には，建築家AとBの差というのはオフィスに対する基本的な考え方の差ではなくて，例外もありますが，オフィスとは大体このようなものであろうという共通の感じをもっていて，デザインの差はあくまでもデザインの差だけれど，建築家AとBが住宅を設計する場合は，デザインの差は背後にある，より大きな生活とかに対する考えの基本的な差がより強く存在しているのではないかと思います。

西沢　住宅の場合はスケールの関係もあって，建築家が自分をデザインに没入していける度合が大きいと思います。　安藤さんの場合にしても，住宅建築と商業建築とでは没入度が違う。商業建築の方は住宅に較べてエネルギーが節約されているという意味ではなく，建築の性質によってエネルギー密度が違ってくる。　安藤さんの場合は住宅でも，建築家としてやるところと住まいに任すところをかなり割り切ってやっておられると思いますが，商業建築の方ではテナントが定められる範囲が大きいということはありましょうが，割り切らなければならない面が多くなりますから，住宅のように密度が濃くならないという面があります。　これは建築の性格上やむを得ないことかもしれません。

槇　先ほど言われた安藤さんの作品の場合でも，見るまでは，ああこういうふうに安藤さんが住宅を考えているのかというのがわからない。見てそこで違いがはっきりわかってくる。西沢先生のお宅を見れば，西沢先生は住宅をこういう風に考えられているのだなあという差があるでしょう。　これは，乗り越えられない，あるいはいくら議論してもどちらが良いとか悪いとかという問題とあまり関係のない差みたいなものです。　ただ逆に言うと，僕はそういうふうに感じるし，そういう生活感覚に対する考えが出ている住宅は良いと思うのです。　良いということは，それに共感する方が頼んでつくって住まわれるということなのです。　もうひとつは，生活の感覚がなくて，造形的なことだけを住宅の上で展開しようとする住宅があります。それが問題だと思うのです。　住宅というものを生活感覚を抜きにして造形の対象としてアプローチしようとすると，どこかで破綻がくる。

西沢　住宅という名前の建築ができるのであって，住宅にはならないだろうと思う。

槇　その点，同じ人のを連続的に4つも5つも見ると，何とはなしにわかってくるということがいえるのです。　その上，安藤さんの住宅というのは，同じ考えの上に立っているものが多いからわかるのです。　ひとつは，安藤さんがはっきりと，家というのはこういうふうに住んでほしいというか，住むべきであるというのを主張されているのかどうか知らないですが，そういう感覚をもっておられるという背後には，西沢先生のおっしゃったように，関西の住感覚の伝統とどこかでつながっているというところがあるのでしょう。

西沢　それはそうだろうという気がします。それが全然なかったら，いくらデザインがきれいでも寄りつかないでしょう。

建築家 vs. 施主

槇　僕は以前他の雑誌でいろいろな住宅を見て，この時は安藤さんではなくて，同年令あるいはそれに属する方の住宅を見せていただいて，誰ということは言わないですけれども，デザインとしての面白さとか，住宅を通して違うレベルの建築の問題を語りたがりすぎる傾向が強かったのに対して，安藤さんの場合は，そこが違うという感じをもちました。

西沢　それに安藤さんはディテールの収まりをちゃんと考えています。

槇　執念というのがありますね。

西沢　観念的に建築をつくりたがっている人はディテールも何もなく，また，概念的に空間をつくりたいということになって，空間を単なる幾何学でできるものと考えている――全く肉付けのない空間しか考えていないのです。　その点安藤さんの場合は違います。

　住宅というものは，建築家としてつくるという人の立場もありますが，本当をいうと施主ひとりひとりが違った性格をもっていて，それをつくってあげるのが住宅だろうという気がしています。　もちろん施主の生活オンリーでなく，デザインする建築家が施主とじっくり話し合った結果生まれ出た答でなければなりません。しかし，施主を無視して自分を押し出すだけでは空無な結果しか生まれないのであって，施主の要求や文化感覚をバネとして創造力を飛翔させるのが建築のデザインではないかと思うのです。

槇　施主への対し方で建築家を大きく分けると，施主の住みたい要望を聞いてものをつくっていくタイプと，自分の考えている住感覚に共鳴された人のためにつくるタイプのふたつに分けられますが，安藤さんの場合は後者に属するのだと思います。　もちろん，そこに到達するまでには，彼自身の努力によって切り開かれた長い道程があったと思いますが。　その場合は，必ずしも建築家と施主の間のズレみたいなものは逆に生じないわけで，押しつけるのはかまわないのですが，たまたま，そうではない建築家の場合で，施主もただ誰かの紹介で出会って設計を依頼した時に，いきなり建築家が自分の中で5年も6年も温めていたすべての問題をそこへ押しつけようとするケースがあるのです。　その時はズレというものが破綻になって出てくる場合が多いのではないかと思うのです。

西沢　そうだと思います。　ただし，施主がある建築家の住感覚なり造形感覚なりを信用して頼まれた場合でも，建築家が自分の考えを一方的に押しつければ，必ずしこりが残り，破綻をきたしかねません。　結果的には建築家が押しつけることになるのかもしれませんが，まず対話は必要です。　両者納得づくでなければなりません。　かつて関西の施主はしっかりしていて，表面は任せたような顔をしていても肝腎要のところはちゃんと手綱を引き締めていました。一方，建築家も施主の言いなりになっているような顔をしながら自己を貫き通す術を心得ていました。　大工さんのように，施主の言いなりということはあり得ません。　施主の無理な注文をバネにして発想していくというのが設計の実態のようにも思うのです。

槇　それはありますよ。　僕はあまり住宅を設計したことがないので，住宅の場合ではありませんが，よく施主の意見を最後まで聞いてくれたと思っていたけれども，最後には建築家の思

う通りにつくらせられた，という感慨をもらす施主も多いようです．

西沢　それで満足されるわけでしょう．

槇　満足しなかったら大変ですよ．　今頃は店をたたんで，他のことをやっているのではないかと思うのです．（笑）

〈闕〉

槇　安藤さんの建物を見て印象の深かったことは，〈闕〉という問題が，先ほど言われたことと関連して，少し違ったニュアンスがあって取り扱われているのではないでしょうか．　〈闕〉の問題というのは都市の中の住宅では，最近，難しい問題であって，今の乱雑な都市景観の中で自分の建てるものをいかに主張させるかは建築家にとって重要な問題であるわけです．　周辺になじませるといっても，混乱した状態でなじませすぎても建築の主体性がなくなる．　かといって，全く異質なものを持ち込んだ時には暴力的な場合もある．　それに対して彼がフレームみたいな形で〈闕〉を考えたということは不思議と日本の都市景観の中で暴力的にならないけれども，自分のアイデンティティをはっきりとつくって，フレームがつくり出す多孔性みたいなものが伝統的な日本感覚と重なりあって浮び上っていくる感じが，今度見たいくつかの住宅の中に共通してあったような気がするのです．

西沢　帝塚山の家（真鍋邸）の場合はどうでしたか．

槇　帝塚山の家の場合は，隣地と境界に刈り込みがあり，それがうまくいっているのではないかという感じがしたのです．　後で見に行った前庭を逆斜面にした家（大西邸）は，前庭の取り扱い方はうまかったのですが，ダイニングキッチンの部分が，たまたま南を向いていたので日光を入れるためだと思うのですが，左隣の家に向かって全面がガラスなので，プライバシーという点で大丈夫なのかという感じをもったのです．　南側が完全にガラスなのですぐに隣地が見えているでしょう．　こういうフレームが〈闕〉的なものをつくっていて，それが隣家に対して大胆に開放型でせまっているという形には，私自身はなかなか踏み切れないので，逆にそういう実物をみると面白く感じました．　その前に，建築家がこんなことはしない方が良いのではないかとか，施主側でこれは困りますということがあったら，隣家とのそういう接し方は実現しないだろうと思いますが．

西沢　この場合はお施主さんは困るでしょうね．安藤さんはどのように言いくるめて納得させて住まわせるようにしたかということがありますけれども．

槇　安藤さんの場合には，フレームだけでなく，拒絶の姿勢を示すソリッドなマッスでやるとか，拒絶というよりも〈闕〉のもつ意味をはっきりさせようという形でのプランニングをしているように感じます．　ただ最後に見た帝塚山の堀内邸でしたか，ガラスブロックの壁がありましたが，あれはデザインの遊びだという感じがしたのです．　中を見せてもらわなかったので，ガラスブロックがうまく光を反射するとか，中からの景観というのはわからないのですが．

ともかく，彼の作品全体をみるとき，本質的にはコンクリートの壁とコンクリートのフレームのふたつの組み合せで，今日の〈闕〉の問題とある種の間の感覚を都市の中でつくっているというのは，注目していいのではないかという気がするのです．

西沢　堀内邸の場合にしても，真鍋邸のラーメンでつくった〈闕〉にしても，もう少し突込んだ彫塚が必要なのではないでしょうか．　両方とも発想は良いのですが，発想が独り歩きしているように思います．　デザインには遊びは必要ですが，単なる思いつきに終わっては困るということだと思います．　奥池の家（小篠邸）で屋上の手摺の末端が壁を伝って下りてきて格好よいファサードをつくっているところがありましたね．　あれなどは害が全くなく，思いつきに終わっても問題はありませんし，むしろほほえましくてよいのですが，〈闕〉の役目を果たすガラスブロックの壁となると空間に大きく関わるわけですから，あだやおろそかに処理できないわけです．

槇　ということは，こういうラーメンやマッスで〈闕〉をつくるというアイディアというのが本質的なアイディアの部分であり，一方，堀内邸のガラスブロックの壁は遊びだということになると思います．　単純な素材でありながら，そういうフレームがいろいろな意味を伝達してくれるという，ダイナミックなところが注目すべだと思うのです．

西沢　ラーメンとガラスブロックのとを比べますと，ラーメンの方がガラスブロックよりまだ煮つまっているというところがあります．　ガラスブロックの方は煮つめ方がまだまだ足りないようです．　それひとつでふるいつきたいような魅惑を感じるといところまでいっていない．

槇　ガラスブロックというのはいくら煮つめても結果的にはそれ以上のものにはならないのではないかという気がするのです．　遊びとしては良いかもしれませんが．

西沢　そうかもしれませんね．　いくらエネルギーを使ってデザインしてみても，感覚的に響いてこない．　そういうデクノボウ的な素材なのかもしれません．

槇　〈闕〉の問題で感じたのは，以前，西沢先生のお宅へ伺った時に安藤さんと３人で話したことなのですが，日本人と外人とでは部屋のプライバシーに対する基本的な差があると思うのです．　その差のひとつは〈闕〉のありかた，ドアの強さにも出てくると思います．　ドアというものは重くてガチーンと閉じて，一度そこを蓋をしてしまうことによって外界との断絶を重要視する．　安藤さんの場合はドアを見ますと，コストの問題かもしれないし，あるいは日本人的感覚のドアの処理かもしれませんが，軽いのです．　精緻にデザインされているけれども軽いのです．　蝶番ひとつをとってみても……．

西沢先生のお宅へ行くと，さらに感覚的に，積極的にドアとは本来そういうものでなくともいいという前提でドアがあるという，極めて日本的な闕の感覚をもっておられるのではないでしょうか．

安藤さんの住宅の場合，部屋の中へ入ると修道院的な，修道院というのはあくまでも比喩的に言ったまでで修道院の部屋がそうだというのではないのですが，何も無い，無に近い，装飾性のない，壁がコンクリートで，床は木というように，素材感が強いのです．　しかし，そこにつくられている〈闕〉は割合と日本的に軽やかなのです．　そのふたつの対比はどこから出てきたのかというところに興味があるのです．部屋のプライバシーを徹底的に追求するという感覚から出発するとドアはもっと強いものでなくてはいけなかったし，先ほどの大西邸にあるような，フレームを強調するために，ガラスを他人と極めて接近している隣家の方へ向けるということもないだろうと思うのです．　現在の建築家の感覚というのは，ある部分についてはそうした素材感と極限的な単純化を追求するけ

れど，生活の感覚に関する限り，どこかでそれはそれとして別の文化が支配しているのではないかという気がするのです．

西沢先生のお宅は，その点はっきりしていまして，安藤さんに見られるような内部的な相克がなくて，情緒的といいますか，もっとディレッタント的なのではないでしょうか．

西沢　それははっきりしていますよ．　ひとつ屋根の下で家族が相共に住んでいくためには互いに底の底まで心が通じ合うことが必要で，プライバシーはマイナスになりこそすれ，プラスに働くことは少ないように思うのです．　ウエットになって，日本の悪さが強調されるようでは困りますけれど．　必要な時にある程度のプライバシーが保てれば十分と私は考えているのです．　私の家の扉はいわゆるドアという類のものではなく，精神的な仕切りがあれば十分という考えで，本来ならば一室空間でも構わぬところですから，王朝時代のように舗設で領域をつくっていっても良いのですが，それをやるにはもう少し広い必要がありますし，経済的効率を考えると局部的に暖房をしたいということもありうるのではないかと考えて，仕切るようにだけはしたわけです．

安藤忠雄の空間構成

槇　安藤さんの場合，プランニングに関する限り個室群というのははっきり分かれているし，外観から見た時にそれがまたはっきり出ているけれど，実際に中に入ると，かなり流動しているという感じがあります．

西沢　安藤さんの場合は，そのへんは煮つめておられないのではないでしょうか．並んでいればいい，必要なものは並べましょうという……．

槇　むしろ骨格に対する厳密性及び骨格を形づける要素をどういうふうに厳密につくっていくかということに対する思い入れというか，考え方が強くて，矛盾はそのまま切り捨てるという態度かもしれないですね．

西沢　安藤さんは，階段や廊下といった人の移動に伴った空間の移り行く変化に骨太の筋をしっかりと入れることに，最も興味を感じておられるのでいなでしょうか．　部屋の配置が結構うまくて，部屋と部屋を結びつける動線だけが勝負所になっていて，部屋自身はいい加減で構わないような感じがします．　要するに，個室は箱さえつくり上げればよい．　空間になるかならないかは住まい手の勝手といった割り切りが見られます．　ダイニングキッチンはちゃんとデザインしておられますが，あとはあまりデザインすることに興味を感じられないように思います．

槇　それは奥池の家（小篠邸）のことですか．

西沢　いえ全体についての……．　家具はなかなか上手で，作った家具はちゃんとしている．予算の制限があるのかもしれませんが，全体に部屋をつくってしまう方ではなくて，やりたいものだけをボンボンと置いて，あとは勝手にやりなさいという感じ――それはそれでいいのかもしれません――あとは住む人がやるということがありますので，親切にやるのも考えものかもしれません．

大西邸では，２階の子供室に「入るべからず，ノックしない限り入ってはいかん」と書いてありましたが，帝塚山の家のお子様の部屋はちゃんとできているのですが，安藤さんでなくてもできるという感じがするのです．　そういうところにあまり興味がないのかもしれない．むしろ，軸線のあり方とか段差の奥行きとかに興味があるのでしょう．

外部も内部もビシッと打ち放しになっていてインシュレーションがない．　両面打ち放しにしてインシュレーションをしようと思えば，インシュレーションを壁内に挟み込んで二重コンクリート壁にする必要がある．　それは高くつくということ，要するにインシュレーションなしで住みなさいという家になっている．　その辺は現代の若い建築家と共通している問題の切り捨て方でしょうか．

槇　インシュレーションは二重壁にしなければできないわけですから，単純に一枚の壁で打つとなると，何cmかコンクリートの壁を厚く打って，それで住んで下さいということですね．そのへんは現代の建築家と共通していると思うのです．

西沢　そうです．　そういう意味では，篠原さんの住宅は全部インシュレーションされています．　さすがに学校の先生，その点は一番考えられています．

槇　ということは二重壁にしている．　内側にインシュレーションを貼ってね．　内側の打ち放しがあるのではないですか．

西沢　全部，徹底的にインシュレーションしてあり，ジョイント工法です．　白い平滑な面さえあれば良い，造形に徹しておられるから，それでよいのでしょう．

槇　安藤さんの場合はものとしてのコンクリートとか，スティールとか，木というものに対するマニア的なところが印象深い．　それは確かに家として見る時に矛盾として出てくるかもしれないが，そういうことを感じさせる前に，ものの強さとして印象付けられることもあるでょう．　その辺が，最近の建築家の中でなくなってしまっているのが多いだけに，爽やかだったと思います．

西沢　安藤さんの場合はコンクリートに愛着をもっていて，出来上がりがきれいなものだから，結露しても許せるくらいの美しさがあります．

槇　実際は結露したら困ると思うのですが．

西沢　あまり暖房していないから，それほどには結露せず，もっているようです．

槇　これが本格的に暖房したら北側は完全に結露しますから．

西沢　するのは当然です．　それが，安藤さんの住宅の中で，一番ひっかかります．　家というのは人が住むものだから，そういうところはちゃんとしたうえで勝負すべきではないでしょうか．

槇　それはあくまでも何が優先するかという問題にかかっていきますが．

西沢　その点はちょっと安易ではないかと思うのです．　そこまで追いつめていて，材質感で勝負してもらったら，頭を下げますけれど．

槇　アルミサッシュでは窓枠として緊張感が出せないために鉄を使っていますが，その理由はおそらく，材質感だけでなく，プロポーションの問題だと思います．　僕も鉄は好きでよく使いたいと思うのですが，耐候性の問題でひっかかるのですが，安藤さんは思い切りよくやっておられると思っています．　雨樋のところを鋼を使ってうまく処理していて面白かったです．もうひとつ面白かったのは，骨格に対してはマニアックにアプローチするけれども，開口に関しては，必ずしも，最近流行のラショナリストにあるようなフォルマリズムで追いつめようという感覚がないということです．　というところは，安藤さんの場合は内側から見た開口のあり方については相当配慮されているのではないかという気がするのです．

最初に見に行った奥池の家（小篠邸）で，居間に入ると庭と中庭に面してそれぞれ開口が

あり，ふたつは高さが違う．　片方は細長く中庭に面して2mぐらいの高さの窓があり，一方は北側から流れ落ちてくる崖に面して1.5mの低い，視線を低く感じさせるような窓にしているのが，外から来ている形でなく，内側からの発想です．　僕は，内側からの発想というのは住宅では特に大事だと思うので，それがないと外側から押しつけられたものに住んでいるという感じが強いのですが，その点は非常に良いのではないですか．

西沢　領壁の家では光を色々と面白く入れる工夫をしていました．　室の真中に点屋があって，外壁から光導入の筒を中の部屋まで突込み，外光を導いているのです．　発想は大変面白いのですが，発想に留まっているのが残念でした．その時は，デザイン全般についてかなり痛烈な批判をしましたが，その後，彫琢が見事に進みました．

この奥池の家（小篠邸）は大変良くできていると思いますが，まだ光が直進して部屋へ入ってくる．　距離はいろいろ変化があっても，反射させて，光を砕いて入れるということはやっていない．　大体，現代の建築家は直射光しか頭になかったのですね．　光というより照度．今度の奥池の家では，光が空間演出に使われていて，大変結構だと思いますが，未だ直進する光なんですね．　光を屈折・反射させて，心の内側へ透ってくる光に執念を燃やしてもらうと，より面白いことになると思います．

コンクリートに対する愛情

槇　安藤さんのやってこられたこれらのアプローチとしては，住宅だから徹底してできるのでしょうし，また，その蓄積がさらにどのくらいまで展開できるかどうか，どこかでジャンプがあるのかどうかは次の問題だし，また住宅でない建物に現在もっておられるプロセスがどのように展開されるかに関しては未知数ですが，今までても，北野通りにやったいくつかの商業建築を見せてもらうと，結構ひとつの哲学で，うまくいっているのではないかと思います．　仮りにこれが全く違う性質の建物になっても，今，安藤さんがもっているボキャブラリーを使っていくことで，良い建物はできていくのではないかという気がする．　そういった意味ではしっかりしたヴォキャブラリーを，職人としての道具をもっていられるという感じがするのです．

西沢　コンクリートに対して愛情をもっておられます．　大変良いことです．

槇　コンクリートを，空間をつくるシルエットをつくるための道具にしようという人達もいるのですが，そういうのに比べると建築を見ているなという感じがあるのではないのですか．

西沢　他の若い建築家達とはちょっと違います．あっ，野武士達でしたね．

槇　少し手厳しいですね．　ということは，素材をレスペクトしようという感じが少なくなってきている世の中で，そういうものを見るということの爽やかさがあるのではないでしょうか．何かを思い出させてくれるということです．僕は，昔，短い期間丹下研究室にいたことがあったのですが，あの頃の丹下先生だけではなく，他の建築家はあまり数多くはなかったのですが，素材に対する強い思い入れがあったし，またディメンションに対して執着されていたのです．それは巾木の寸法から全体の柱割に到るまでのいくつかの段階における寸法関係についての厳密性が意識されていたと思います．

それと，安藤さんのもっている素材に対する思い入れ，寸法関係との間にどういう差があるかというのが僕にとって興味があったのです．まだ，はっきり答えとして出てこないのですが，その間に25年の月日が経っていますので，安藤さんの方が丹下先生の世代と比べて，より現代的だということはいえると思います．　その現代性は何で出ているかというと，たとえば彼の場合，対象が住居ということもあって，柱と梁の寸法関係が40cm～45cmで，しかも梁背と柱の幅と奥行きを同じにしていく．　構造の寸法に訴えるのではなく，形態の抽象性を優先させた上での寸法の厳密性に訴えていく．　同じように，素材としてのコンクリートに対しては強い執着をもつ．　その辺の類似性と差との両方を感じるのです．　僕が現代的だというのはどこかで抽象的な形態に対する思い入れが強くて，他の世代のようにコンクリートに木割を感じさせるような歴史的にあったものを思い出させるというものではないのです．

西沢流の住宅作法

槇　西沢先生の住宅はもっと折衷的ですか．

西沢　私の場合は，ひとりひとり住む人が違うように，住宅というのは全部違っていいのではないかという考え方で，その人が拘束されないで住めるような状態になっていれば，その人にとってはそれが一番良い住宅ではなかろうかという考えがひとつあります．　ところが一方では，貧乏するとか，死ぬとかいうことがあった場合に，その後，誰も住んでくれないでいいのかということがあります．　それではいけないので，だれが住んでも住めるように考えておかねばならない，いざとなったら売れる家を設計しなくてはいけないということが，一方にあります．

槇　そういうことも考えていらっしゃるのですか．　頼む方にしてみれば痒い所に手が届くような親切な家をつくろうということですね．お聞きしたいのですが，クライアントの要求はできるだけ入れようというフィロソフィーというのはあるし，住む人がひとりずつ違うのだというところまでは同感なのですが，設計されるのは西沢先生ですから，十人十色の違ったクライアントに対する家を設計されて，さて，でき上ったものを全部並べてみると，どこかで西沢デザインというものがあるわけです．　それはどういうところに出てくるのですか．　たとえば，今，言った差というのは全部消去したとして．

西沢　プランニングもありますが，むしろディテールの方へ出るのではないでしょうか．

槇　なるほど，僕も一度どこかで書いたことがあるのですが，建築家にとって形態的なものは長い時間の中で変化していく場合が多いし，同じ時点でいくつかの全く違ったアプローチをすることもできる．　建築家にとってなかなか変えられないものというのは，ディテールです．コルビュジエとかアアルトを見ても，スタイルは長い生涯の中でどんどん変身していますが，ディテールを見る限り，そんなに変わっていないということを書いたことがあります．　逆に言うと，ディテールが一番その人の身体的なものに近いのではないかということだと思うのです．　そういう観点から見ていくと，安藤さんの建築というのは，実は，建築自体がディテールなのではないか，ディテールが拡大して住宅の2階建の家の大きさまで肥大したというか，ディテールのもっている厳密性が隅々まで出てきたという見方もできるかもしれないです．

西沢　たぶん，そうでしょう．

槇　西沢先生の場合はそうではなくて，ディテールはディテールとして自分の身体の一部とし

て持っておられて，少し大きい部分の設計に関しては，状況とか，条件とか，時代によってバリエーションがある．

西沢　フレキシンブルなほうがよかろうということがありまして．　あまりフレキシンブルなので，少しも西沢らしいものができないじゃないかと言われている．

槇　そうではないですよ．　僕が西沢先生の住宅を見たのは，松下幸之助宅に伺って，それは建物を見にいくのではなくて家へ来てくれという話があった時に見せていただいたのと，西沢自邸と，そのくらいしか知らないけれども，西沢色というのがあります．

西沢　建築家である限りは，それは出ないほうがおかしいです．　それは，いかに施主の抵抗なくしてうまく出すかというのは，説得力の問題です．

槇　プライバシーについては，どういうふうに考えられますか．　内部での個人のプライバシーではなくて，外からのプライバシーについては…….

西沢　敷地が広い場合は開放的でよかろう，敷地が狭い場合は開放的でなく，ある程度，家にこもらなくてはしかたがないだろうということがあります．　私の家の場合は敷地が広いほうなのですが，ここのところは木をそのままの状態で残しておきたいという根本発想がありますので，建築の建てられる範囲が限定されてしまうわけです．　一方，家族数が少ないということがあって，簡単に戸締りして出かけられる家にしたいということがありまして，家を小さくして，外見は一見ヨーロッパ風，中は完全に日本風という家ができたのです．

槇　感覚的に言うと，素材をいくつかアレンジしてこられるというのは，他の建築家でいうとどなたに近いですか．　清家先生ですか．　似ているとおかしいですけれど共通した…….
そういうと西沢先生におこられるかもしれないし，逆に清家先生におこられるかもしれないけれど，僕などはそういう感じがあるのです．
清家先生でも初期の方の作品の中でね．

西沢　初期のはいいですね．　清家先生に憧れているのかもしれないですね．

関西の住宅作家達

槇　大阪では，日本でもといっていいかもしれないけれど，特に関西の中で特異な存在として安藤さんがいますが，他の関西の住宅作家達はどんな状態ですか．

西沢　そういう意味では安藤さんだけが新しい住宅をつくっていて，あとの人は新しい住宅はやっていないみたいです．

槇　本当は新しいものをつくろうと思っていないかもしれないですね．　他の人達は．

西沢　そうかもしれません，風土的に．　建築家には今までなかったものをつくりたいという意欲があるのが当然でしょう．　その点で，今の関西の建築家は問題だと思います．

槇　それは逆にいうと施主のプレッシャーですか．　それとも，関西全体の建築界の問題なのですか．

西沢　問題意識の問題でしょう．

槇　僕も時々関西の講演に頼まれていくのですが，しかし，関西はやはり地方ではないのです．日本の文化のひとつの中心として，東京などよりずっと長い文化をもっている．　ところが，現在，建築家が東京に少し片寄り過ぎて集まってきている．　聞くところによると，日本全体の建築家の⅔が東京にいるそうです．　全国コンペをやると⅔は東京からのエントリーだそうです．　建築雑誌の購読者も⅔は関東という話がある．

　アメリカぐらい広くなると，たとえばシカゴはニューヨークを中心とした東部よりもアメリカの建築の伝統があるといえる．　また，ウエスト・コーストではイースト・コーストと対比的な生活感覚とデザイン感覚をもっていてそれが建築にも出てきている．　もちろん広いから当然だと思いますが，様々なものが同じアメリカという国の中に共存しているのです．　関西は，そこまで強く，東京に対して出てきていないのでつまらないような気がします．

西沢　そうです．　しかし，この前，ある雑誌の現代アメリカ建築特集というのを見ましたら，日本の若い人たちと一緒で，猫も杓子も変わったことをやっているのにはげっそりしました．アメリカも広いけれど日本と同じことをやっているなあという感じしかない．　それは流行という名にしか値しない．　もっとも，編集者がそういうのを集めてきたのでしょうが…….

槇　確かに最近のアメリカの建築を見ると，西も東もわからなくなりかけているところがあります．

西沢　本当言うと，関西は関西の良さが生きていなくてはいけない．　それが今，死滅しかけている感じです．　安藤さんの場合は関西ネガティブだけではないような気がします．

槇　ちょっと違うような気がします．　安藤さんは，東京などでは建てられたことがありますか．

編集　大楠邸だけではないかと思います．　現在，横尾忠則の家をやっているとかです．

西沢　この大楠邸も，階段主体です．

編集　なぜ，安藤さんにだけファンみたいなクライアントが集まるのでしょうか．

西沢　なぜか安藤さんは親切らしいです．　大変親切で，1年目にはアルバイトとか弟子を連れていって，検査をやるとか…….

槇　それが商品だからという思い入れがあるのです．　若い世代で，できたらできっ放しで，あとはどうでも良いというのに比べると，すごく違うのではないでしょうか．　建築に対する愛着が強い．

西沢　それで，しょっちゅう，1年後とか2年後とか点検に行かれるでしょう．　そうすると施主も信頼が出てきますよ．

槇　だから，他人に紹介する時も良いことを言ってくれるのではないのですか．　二度と頼まない方がいいということは言わないでしょう．少々，我慢しているところはあっても…….

西沢　少々，結露が出ても，ほめてくれるとか…….

槇　そういうことはあるかと思いますよ．　完全な建物というのはないわけですから．

西沢　完全な材料はないですから，完全な建物もできるはずがないです．

より豊かな創造に向けて

槇　そうです．　単純な外殻の中から複雑な空間をつくり出していくことに対する長年の考えの蓄積というのが集積されて，豊かな空間をつくるということを安藤さんが証明してくれたということも，言われている通りだと思いましたが．

西沢　私がひとつだけ言いますと，施主の問題に関してですが，施主というのは自分の生活がしやすいようにというので無理な注文を入れようとするわけですがそれはマイナスには絶対働かないもののはずで，それをプラスに働かせなかったら，建築家の能力はないのです．

槇　これは誰かれという話ではなく，建築とい

うのは自分で次数を上げて解く問題だと思うので，施主のややこしい要求というのは条件として当然だし，建築の解に対する次数を高めるのです．　施主の要求というのは直接的な個別な要求もあるし，建築一般に要求されている，たとえば庇の問題とか，いろいろな問題を同時に胎んでいて，建築は，どこかでそういうものを消去してしまえば，やさしく解というものを得られるものだと思いますが，それでは完全に問題に対して挑戦しているとは思えない．

先に述べたように僕は住宅はあまりやったことはなく，あまり差し出がましいことは言えませんが，たとえば住宅をやってみて難しいと思ったことは，日本という雨の多い国では，当然，庇が必要で，その庇をどうやってデザインの中に取り入れるかということがあったと思います．　公共建築をやっていますと，内部が空調されていますから，あまり庇の問題は出てこないのですが，住宅では庇の問題というのは避けて通れない問題だと思うのです．　それも，ただ穴を開ければ良いというのであれば楽ですが，そういうものではないということがあるのです．

西沢　奥池の家（小篠邸）で気になりましたのは，細い窓がみんな嵌め殺しだという点です．あれだけ湿気の多い山の中で風通しのないのは困るだろうと思います．　ガラスだけを細いコンクリートの堅穴に，サッシュも見せずに嵌め込みたいという意図大変良くわかりますが，要するに人の住む家ですから快適に住めなければいくら美しくても困るわけです．　安藤さんもそこは勉強してもらわぬと困るわけです…….

槇　問題は勉強して解けるかどうかわからないけれど…….

西沢　それは解くべき義務がある．　たとえば均整のとれた嵌め殺し窓にしたいということがある．　それでは風通しが悪いから開ける必要がある．　開ける必要のあるところは開ける決心をする．　普通にやれば作者の思いと違ってくる．　違っては困るので，苦心惨憺してディテールを彫琢する．　そこで初めて新しいディテールが生まれ，光のリリシズムが誕生する．それがデザインというものだと思うのです．

槇　アウフヘーベンしていくということが，チャレンジとしてあるのかもしれませんね．

西沢　そういうことがあって，しかし，まだ誰もそれができていないのが実態だろうと思います．

槇　次数を高めてきた結果，解が出ないという場合があるのです．　そうすると，解が出なくてもやる方が良いのか，あるいは，どこかで切ってしまって，建築というのはこういう形でここを捨てればこういうものができるということを見せてくれるということが良いのか，どちらが建築なのだと言われると難しい問題です．
親切だけれども下手な建築ができるのならば，切り捨てた方が良いのですかと言われて，それを擁護しようというつもりはないのですが，才能がある人は問題を単純化しないで難しい問題をどんどんやっていってもらいたいという気がします．

西沢　それはそうだと思います．　ただし建築というのは，本来，人間が使うものですから，そこを避けて通るわけにはいかない．　難しいから，ちょっと省略して良い格好に仕上げて，素知らぬふりをするのは根本的に誤りではないかと思います．　能力不足であれば玉砕もやむを得ない．　たとえ破綻を来たす結果に終わろうとも，切り捨てないで真面目に取り組みたいものと思います．

槇　そこまで簡単にすれば誰にでもできるのではないかという人間と，みんなの言うことを聞いていたからといって良いものはできないよという人間と，ふたつのグループの間の対話のなさというものを現在は強く感じるのではないかと思います．　どちらも，相手をそのぐらいにしか見ていないということ，これは不毛な対決になってしまうということでしょうか．

西沢　簡単にしても，みんなの言うことを聞いても，出来上がったものとは無関係ではないでしょうか．　つくる人間の態度の問題で，それを避けて通っているようではいつまで経っても本物になってこないし，創造能力も，自分自身の芯も出来てこないのではないでしょうか．

槇　そうですね．　今度，安藤さんの住宅をみせてもらったことで，何か色々とこうしたことまでを考えさせられて，私自身，大変によい勉強になったと思っています．

●にしざわ・ふみたか＋まき・ふみひこ

1981年3月18日，鹿島出版会において

厳格な形式の内に宿るやさしきたおやかなものたちの世界

——こころみとしての安藤忠雄論

竹山聖

■

夏の名残りが街をすっぽりと覆っていた．　熱気がアスファルトの路面を焼いてたちのぼる．灰色の大阪の街は路面電車の軋みをすら飲み込んで，喧噪が熱気を突き上げる．　季節がゆっくりと反転をはじめる．　過ぎ去った日々の記憶はすでに色を失って，甦るのはアスファルトの匂いと熱の感覚．　9月の初め，昼下り，住吉の長屋は，そんなひりりただれた記憶の底に沈んでいる．

出会いはいつもさりげない．　あるいは通り過ぎた幾度かの夏が，記憶の中の風景を脱色してしまうのか都市の喧噪をくぐり抜けて，住吉の社を左に見ながら，つと右に折れた先に，そこだけがぽっかりと，まるで喧噪なぞ知らぬとでもいった涼しげな顔をして，住吉の長屋はあった．　じっと佇む風情があった．　さりげなく，あくまでもさりげなく……．

このさりげなさは，ひとつの驚きだった．風景に溶け込みすらしていた．　都市への攻撃的な表情を予想し，期待もしていた訪問者は，さながら肩すかしを食わされたかっこうだ．棟割り長屋を切断し，その真中にコンクリートの箱を挿入する，という方法の過激さに酔いしれた頭に，冷水を浴びせかけられた思いがした．暴力的な表情を期待していたまなざしに，さりげなく，ごくさりげなく佇むコンクリートの箱が映る．　匂いも色も，周囲の空気に同調して，やさしげな表情すらあった．　意外なさりげなさ．　冷水は，熱にただれた頭と身体を，さわやかに沁み透った．　そこだけが，夏の熱気からも，都市の喧噪からも無縁だった．　コンクリートの息遣いさえ聞こえてきた．

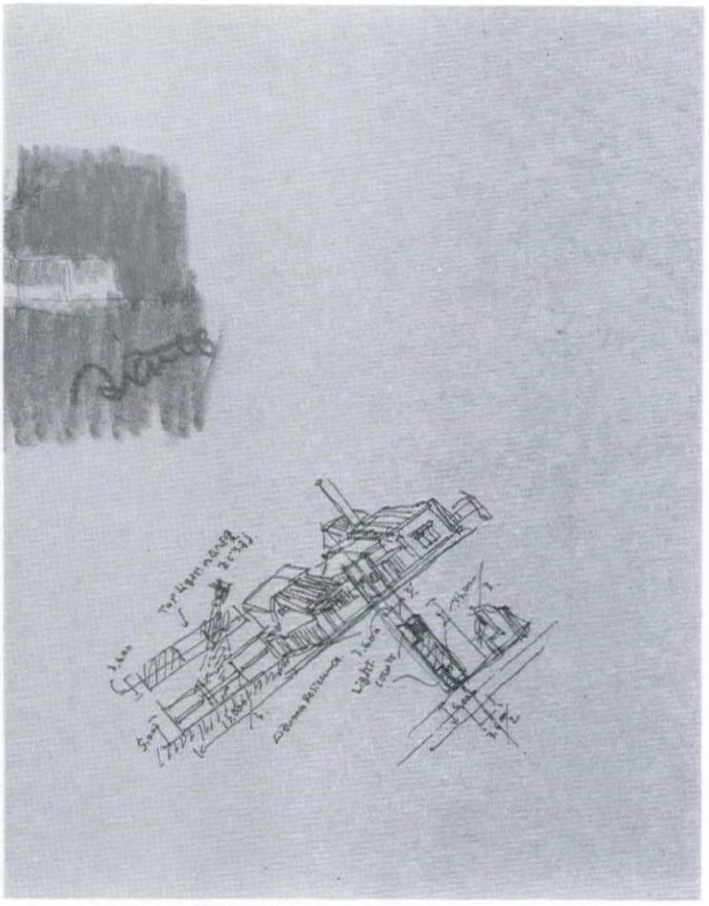
「ここやね」

先に立って歩いていた安藤忠雄がふりかえって笑みを浮かべた．

1．差異

実物そのものに接してみなければわからぬ建築というものが確かに，ある．　安藤忠雄の建築はまさしくそうした類のものだ．　写真からだと空間の微妙な肌合いや色合い，そして匂いが伝わらない．　むしろ写真は一般にものを裏切る性質がある．　部分のみを切り取り，平面に転写することによって，ひとつのパターンと化してしまう．　写真は写真でひとつの世界が成立する所以である．

ただ，多くの建物を，ぼくらは写真のみで見知っている．　最大限の想像力を働かせて実物に迫ろうとはしてみる．　写真の限界を超えてイメージを結ばんと努力はしてみる．　大概の建物ならおおよそそれで事足りる．　実物と接したときのイメージとの差異（ギャップ）が，埋め合わせのきかぬほど決定的である場合は，経験的にいって，少ない．　とはいえ，とても写真からは



エスキスⅠ　住吉の長屋　棟割り長屋を切断し，その真中にコンクリートの箱を挿入する

及びもつかぬ存在感を湛えた建物も現にあるので，この場合，実物との出会いは努力の空しさを増幅するばかり．　写真から読み取りうるイメージと実物との間に本質的な差異（ギャップ）が横たわっているのだ．　なぜならそうした建築は，写真では完全に捉えきれぬところの肌理であるとか，素材感であるとか，それらのものの全体の醸し出す雰囲気であるとかにこそ，設計の主眼が置かれているからだ．　そのとき設計という行為は，視覚でなく，五感を動員して，なされる．

ちょうど住吉の長屋を訪れたひとつ前の夏，その盛りの頃に，ぼくはカナダとアメリカを放浪していた．　いわゆる建築行脚だ．　そのとき，それまで写真でしか知らなかった多くの作品に触れて，自身の抱いていたイメージと実物との差異（ギャップ）を，個々に検証する機会を得た．

たとえば，アーサー・エリクソンやシーザー・ペリ，I.M.ペイといった人々の作品は，写真の素晴らしさと同程度の素晴らしさを見せてくれた．　ただ，それらはほとんど写真から描いたイメージのとおりだったといっていい．　極端に言えば，写真で充分なのだ．　ライトの作品も，実物であるという感慨を別にすれば，写真のとおり．　むろん多少の差異（ギャップ）はあったにせよ，それほど懸け離れた印象はなく，むしろ失望のないだけそれらの作品の確かさを思い知ったのではある．　写真の方が遙かに素晴らしい建物も，決して少なくなかったからだ．

ところがカーンだけは別だった．　それまで図面から，また写真から，思い描いていたイメージを遙かに超えたものがそこにあった．　いったいいままで自分はカーンの何を見ていたのだという思いに襲われた．　形式の力，空間の張り，素材の表情，それらすべてが，まさしくものとして在った．

リチャーズ・メディカルはともかく，イェールのふたつ，アート・ギャラリーとポール・メロン・センター，そしてソーク・インスティテュートにいたっては，建築が，空間が，素材が，これほどまでに緊迫した関係をもって，まさにそのそこに存在していることを謳うということに，眼から鱗の落ちる想いを味わった．　いったいこれらの作品に関して，写真がどれだけのことを語れるというのか．

精緻に，そして優雅に，つぎつぎ展開されるさまざまな空間が，全体を貫く強固な意志に支えられて，意図の漲る空間の力強さを告げ知らせ，体験するすべてが新鮮な驚きを運ぶ．　実物に足を踏み入れて了解される空間というものを知った．　それはまた，一歩足を踏み入れればすべてが了解される空間でもあった．　建築家の意図が，空間のすみずみにまでゆきわたっているのだ．

ちょうどそれと同質の感慨を，安藤忠雄の建築と初めて接したそのときにも覚えたのだった．　一歩足を踏み入れることの，その一歩の重さが爪先から頭の芯まで突きとおる．　そのとき以来，幾度かかれの作品に肌で接する機会をもつことができたのだが，その都度，その感覚は肌を包み，写真と実物との差異（ギャップ）を痛感させられるばかり．　おそらく安藤忠雄の狙いが，決して写真では表現しきれぬところにこめられるが故のことだ．

2. 表現

ただ誰もが初めは写真を通して知るように，ぼ

くも最初に鮮烈な印象をもったのは，雑誌に発表された双生観を見てだった．　カナダ，アメリカをさすらうよりさらにふたつ前のやはり夏，その終わりの頃だった．　建築を学びはじめたばかりの，無知でもあり，無垢でもあった眼に映った双生観を，いったい何と説明すればよいのだろう．　とりわけあわせて発表されたTWIN WALL なるプロジェクトに覚えた戦慄を…….

ちなみに，このときに並んで載っていたのが，原広司の自邸と藤井博巳の等々力邸だったから，建築というものが，単に美しく，端正かつ均斉のとれたプロポーションの形態でもって機能を包む以上の存在であって，何らかの思想を表現することすら可能なのだ，ということを，朧げながらも感じ取るに充分な取り合わせだったといっていい．　表現者が建築の領域で，個としてなしうることの意味と展望とを，それらは語りかけてくれたのだった．

双生観は内外ともコンクリート打放しの住宅だ．　鮮烈な印象はむろんそのことも関わっている．　コンクリートの打放しは，華々しい展開を見た時代からすでに間があって，誤解を怖れず言えば，当時もはやファッションとしては時代遅れの感があった．　もちろん真摯な表現者の辞書に時代遅れの文字はなく，また時代はつねに自らの手で展かるるべきものだとすれば，こうしたもの言いはどうもうまくない．
とはいえ，安藤忠雄自身がかつて自嘲気味に呟いたことがある．

「ぼくの建物は，なんちゅうかその……時代遅れやからね」

これはもちろん額面どおりに受け取れるものでもなく，むしろ時代を展く自負の表明とも解すべき反語表現ではあろう．　いずれにせよ，そうした自嘲も自負も知らぬ当時としては，ただ写真から窺いうる限りのコンクリートのテクスチュアに想いを馳せるほかはない．　だからそれでもなおコンクリート打放しに賭ける執念のひしと伝わるこの住宅に，単なるファッションとしてでないコンクリート打放しの可能性が秘められている思いがした．

コンクリート打放しが新たな表現を得たのは，この頃以来の安藤忠雄の歩みによってである，といったら言い過ぎだろうか．

コンクリートというものが，塗装合板による打放しで，木コンの位置までもが規則正しく配列され，パネルの目違いもなく，平滑に，エッジ鋭く，さながら工芸品のごとき精度と美しさでその肌理をかたちづくることができる，ということを，少なくともぼくは安藤忠雄から学んだ．

ただむろんそのためには確実な技術的裏付けが必要であって，そうした施工技術に関しては表立って述べぬものの，いや述べぬからこそ却って明らかなのだが，安藤忠雄は絶大な自信を持っている．　人間，自分に自信のない部分ほど，くどくどしく述べたてるものだ．

「コンクリート打設の方法に特殊なものがあるわけではない．　必要なのは，どのような志向性をもつ表情をコンクリートに持たせたいかという意志である」（ディテール68）

美しいコンクリートが気合一発で打てるとも思わぬが，少なくとも安藤忠雄のコンクリートには，意志が漲っている．　職人をブットバシて打てるものなら，建築家は誰もがボクシング・ジムに通わなければならない．　秘訣はそんなところにない．　少なくともコンクリートに賭ける執念が，全体に漲る意志となってひとつの思想に昇華されるまでには，底知れぬ努力と研鑽が必要だったはずだ．　技術はおのずと伴ってくる．

新たな表現は，さらにその工芸品のごとき肌理によって構成される全体の造形にも見出せる．　コンクリートという可塑性に満ちた材料，強靱なる意志の力をもって，敢えて厳格な形式に封じ込める．　コルビュジエの自由闊達さに比べて，これまた何と頑なことだろう．　ものを厳格な幾何学形式の支配の下に置かんとする意志．　ただ普遍は形式に宿る．

コルビュジエの作品に見られるしなやかさは，ひとりの天才のもたらした建築表現の勝利だった．　ただ形式としての普遍性に欠ける憾みがある．　トラセ・レギュラトールにせよモデュロールにせよ，例の原則，すなわち，ピロティ，ルーフガーデン，自由なプラン，水平連続窓，自由なファサード，にせよ，それらは実のところ理念であって具体的な建築表現を指示しない．　つまり形態を指示しない．　形態はコルビュジエの芸術的天分にのみ依っている．つまり方法は開かれない．　コルビュジエという偉大な個性の内に閉じている．

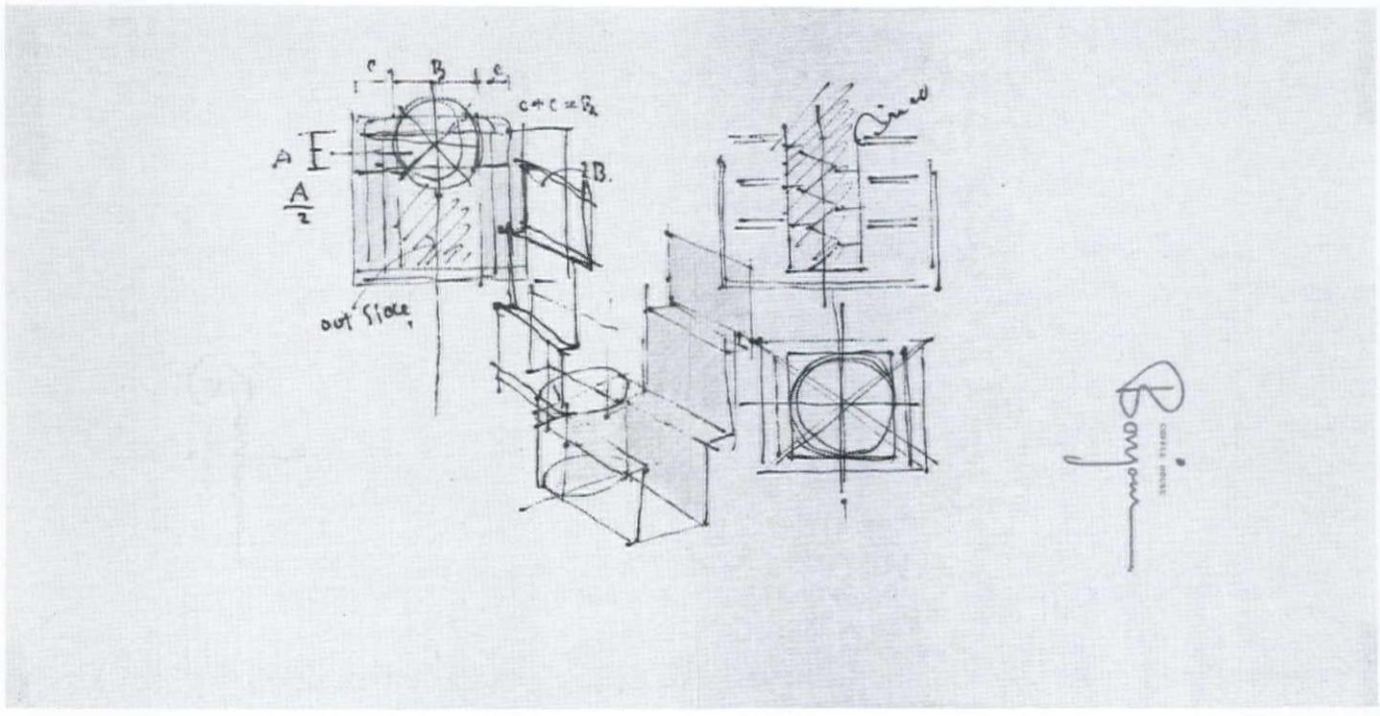
コルビュジエの理念を受け継いだ先に，どのような未来があったろう．　誰もがコルビュジエほどの芸術的天分を持っていたなら，都市は今ごろ輝いていたに相違ない．　このことがコルビュジエ最大の誤算でもあり，偉大さの証明でもある．　コルビュジエの遺産が，理念の展開という面よりむしろ形態の引用という面で豊穣な結果をもたらしているように見えるのもそのためだ．　形態に個性が刻印されて華やかな人間讃歌を謳う．　個性の表現が時代の表現ともなる，幸福な時代だった．

安藤忠雄は造形にあたるに禁欲をもってする．　とりわけ住吉の長屋以降の作品には，ことさらに思わせぶりな個性の発露を控えている節がある．　壁は自立する一枚の壁として在り，柱・梁のフレームは等しく正方形断面をもつ均質なグリッドに漸近させて表現されており，曲線は用いられるにせよ完全なる円の部分に限られる．　恣意性は排除され，ほとんど完全な幾何学の支配の下にある．　幾何学形態に造形を封じ込めることによって，所謂個性の表出から離れて立つことになる．　幾何学は誰にも共有されている．　だから方法は開いている．　志向は厳格なる形式の彼方にほの見える普遍を指している．　個性が相対化され，単なる思いつきとして片付けられるのみの今日，普遍への構えが逆に個性を支えるという倒立した構図が成立する．　高らかに自由な個性を謳うには，時代はひねくれすぎたようだ．

だから安藤忠雄は個性を形式に封じこめる．安易に形態をいじくることを自戒する．　単純な形式．　そこにこめられる豊かな世界．　やはり形式の厳格さを自らに課したブラームスを評したシェーンベルクの言葉を思い出す．
「私はブラームスから経済的な豊かさを学んだ」

厳格な形式を経済的と評したのは揶揄でも何でもない．　贅沢が豊かさに通ずるのは，ある意味で当然であって，ただなまぬるさが伴う．表現のなまぬるさは安藤忠雄の最も嫌うところでもある．　経済的豊かさとはまさしくそのなまぬるさの対極にあるところの，緊迫した厳しさの上に立つ豊かさであって，自らに厳格な形式を課したブラームスが，その迸り出るようなロマン主義的熱情を透徹した世界に結晶させることに成功した，まさにその豊かさを指している．

ブラームスのスコアを見ると，整然と視覚的に美しいのに気づく．　めくるめく多彩な音



エスキスⅡ　石原邸　恣意性は排除され，ほとんど完全な幾何学の下に

楽空間が，かくも単純なスコアから生み出されることは，ちょっとした驚きだ．　安藤忠雄のプランの単純な美しさは，ブラームスのスコアの単純な美しさと同等の意義を持つ．　そうした単純な形式に宿る豊かさこそが，シェーンベルクの言う「経済的な豊かさ」なのであり，とりもなおさず安藤忠雄の求めるものでもある．安藤忠雄の展いた表現の位相がそこにある．

3. 素材

禁欲は素材にも発揮される．　安藤忠雄はきわめて限定された素材のみを用いて建築を造る．基本的にはコンクリートであり，床材として玄晶石，あるいはナラ材等のフローリング，家具も可能な限り造り付けられ，すべて木が用いられる．　それらすべてに共通する性質として，硬くて冷たい，ということがある．　木には暖かみがあるが，それでも硬質で，すべて打てば響く性質のものとして素材は捉えられ，空間は構築される．

ただここでひとつ，安藤忠雄の建築におけるスチールの役割について一言記しておきたい．安藤忠雄の建築は，スチールなしにはほとんど成立し得ないからだ．　スチールは，いわば主旋律ともいえるコンクリートを彩るオブリガートにもたとえられよう．　オブリガートは普通言われるような，あってもなくてもよい助奏では，本来なく，是非必要という意味を持つ．スチールはまさしくオブリガートといえる．

安藤忠雄は，まずもってアルミサッシュを使わない．　コンクリートの塊を彩るほとんどすべてがスチールで作られることは注目していい．　サッシュ，建具はもちろんのこと，換気口，手摺，雨樋，水切りにいたるまで，およそ精度を要求されて能う限りの部分は，スチールがその材料として選択される．

キッと走るH鋼の手摺，スックと立ち上がるスチール・パイプの竪樋，口径の大きいスチール・パイプの換気口，簡潔なスチール・プレートの水切り，ガラスブロックの枠もH鋼だ．それらすべてが決して事醒に自己を主張せず，むしろひっそりと身を引くように，グレー系のオイル・ペイントで塗られて，安藤忠雄の静謐な世界は構成される．

4. 関係

安藤忠雄の建築には，そのすべてを通して脈々と，息衝く一貫したテーマがある．　それは，ものともの，ものとひと，ひととひとの関係の在り方をめぐる問いかけとでもいえようか．ものとものが出会うとき，ものとひとが出会うとき，ひととひとが出会うとき，そうした出会いの厳格なる構図を，建築を造るという作業を通して追求し続けているところに，実はかれの仕事の真髄がある，と秘かにぼくは睨んでいる．そうした視点をもって初めて，かれの作品の有する一貫性の本質が見えてくる．　かれの建物に常に漂う安藤臭とは，だから，単に個人の体臭に解消されうる以上のものなのだ．　全体の構成にせよ，部分の納め方にせよ，また建物と周囲の環境との距離のとり方にせよ，そして仕事の進め方，人づきあい，ひいては安藤忠雄の生きざまにすらいたるまで，その姿勢は一貫して変わらない．　逆に言えば，そうした問いかけへの答えとして，建築があり，建築を造る作業があり，生きざまがある．

そしてかれの追求し続ける関係の構図を解

き明かすのに，〈対〉という言葉が鍵となる，とぼくは踏んでいるのだ．

〈対〉とは何者かと対することであり，ふたつのものの関係であり，向き合うこと，答えることであって，さらに挙げれば，対話であり，対応であり，対称であり，対照であり，対比であり，対峙であり，対決であり，対抗であり，対立であり，対座であり，対面であって，双対にも結びつく．〈対〉とは，だから，たがいに映し合う形式を指す．対幻想の世界でもある．

安藤忠雄の建築が，いつもふたつのものの向かい合う形式を踏襲するのは，決して偶然などではない．〈対〉という形式をア・プリオリに採用しつつ，ものともの，ものとひと，ひととひと，関係を問うことこそが，実は一貫して流れるテーマそのものであって，おそらく安藤忠雄のイメージの原型に〈対〉という関係があることはまちがいない．その意味で住吉の長屋は，ひとつの原型を端的に示すものとして特権的な地位にある．

発想のすべてに，〈対〉という関係が透けて見える．全体の構想から部分のデザインにいたるまで，かれのどの作品でもよい，ひとつ取り上げて仔細に眺めてみれば，そのことがわかるだろう．つまるところ，ふたつのものの向き合う形式に還元されてしまうことが．シンメトリーを好むこともその一証左といえる．

とりわけ部分に眼を向けてみれば，なお一層，かれの〈対〉へのこだわりが明るみに出る．たとえば照明器具や竪樋，換気扇に小窓など，細々した造作そのほとんどが，一対（ペア）としてデザインされている．ときに樋の一本や換気扇の一個は，ダミーであったりもする．わざわざダミーを使ってまで，自らのものとものとの関係に対する信念を貫くわけだ．

これらは，個人的な癖，と呼ぶには意識的にすぎる．あるいはかれ自身，双生児の一方であることも，意識を支える無意識の領野にしっかと根を張っているに違いない．おそらくは自らのアイデンティティーを考える上で，看過しえぬ点ではあろう．ただそうした視点からの分析には，ぼくは適任でない．

ひととひととの関係に眼を移してみれば，たとえば安藤忠雄は対話を好む．決して弁舌さわやかというのではない．が，熱っぽく，いつまでも，語り続ける．建築の術について，建築の見方について，建築の考え方について，建築家の生きざまについて……．建築を語り継ぐ限りにおいて，かれは倦むことを知らない．言葉の流れの滞りがちな分だけ，誠実がこもる．

おそらくかれは，壇上で教訓を垂れることを好まない．講演という形での一方通行を好まない．一対多という形式を好まない．社会を啓蒙する，などという痴（おこ）がましい意識を，したがってかれは毛頭持ち合わせない．

対話を好む，ということは，一対一の形式を好む，ということだ．個人対個人，すなわち汝と我なる関係こそが，安藤忠雄の対人関係の原則であって，施主を説得するも，所員と作業を進めるも，学生に接するも，誰に対するも，一対一，サシの勝負を基本とする．かれがかつてボクシングを好んだことも肯（うなず）ける．

精神医学の知見を借りれば，常に他人との関係における自我の位置づけのない限り，自我は存続，成立し得ぬ，という．ことさら西洋近代を持ち出さずとも，古来東洋の知はこの関係を心得ていて，たとえば《易経》の〈繋辞伝〉には〈太極から両儀が生まれ〉とある．太極とは万物の根源であって，両儀とは数でいえば〈2〉である．すなわち〈2〉が最初に生まれたということで，本来〈1〉なるものは認識発生以前の状態なのであり，いわば混沌に過ぎぬ．そこに認識が生じたとき，AとBが弁別される．これが〈2〉であり，世界の発生であって，そこに〈真〉がある．〈真（ま）〉とは〈間（ま）〉であり，日本語で〈2〉をいう．ちなみに〈1〉は〈片（カタ）〉あるいは〈方（カタ）〉だ．単に〈1〉というと，だから，〈2〉が生じたときの〈一方〉でしかない．〈2〉とはむろん，〈対〉概念を支える数にほかならぬ．

〈2〉という数の重要性を，安藤忠雄は熟知している．他者があって自我がある．安藤忠雄は，とりわけ自我を大切にする．そこで他との関係のとり方にことさら意を払う．かれ自身も，またかれの建築もそうだ．ひと対ひと，ひと対もの，もの対もの．他者の存在が，安藤忠雄という個における自我の確認作業の基底に据えられている．きわめて明確な意識が作業を照らしている．

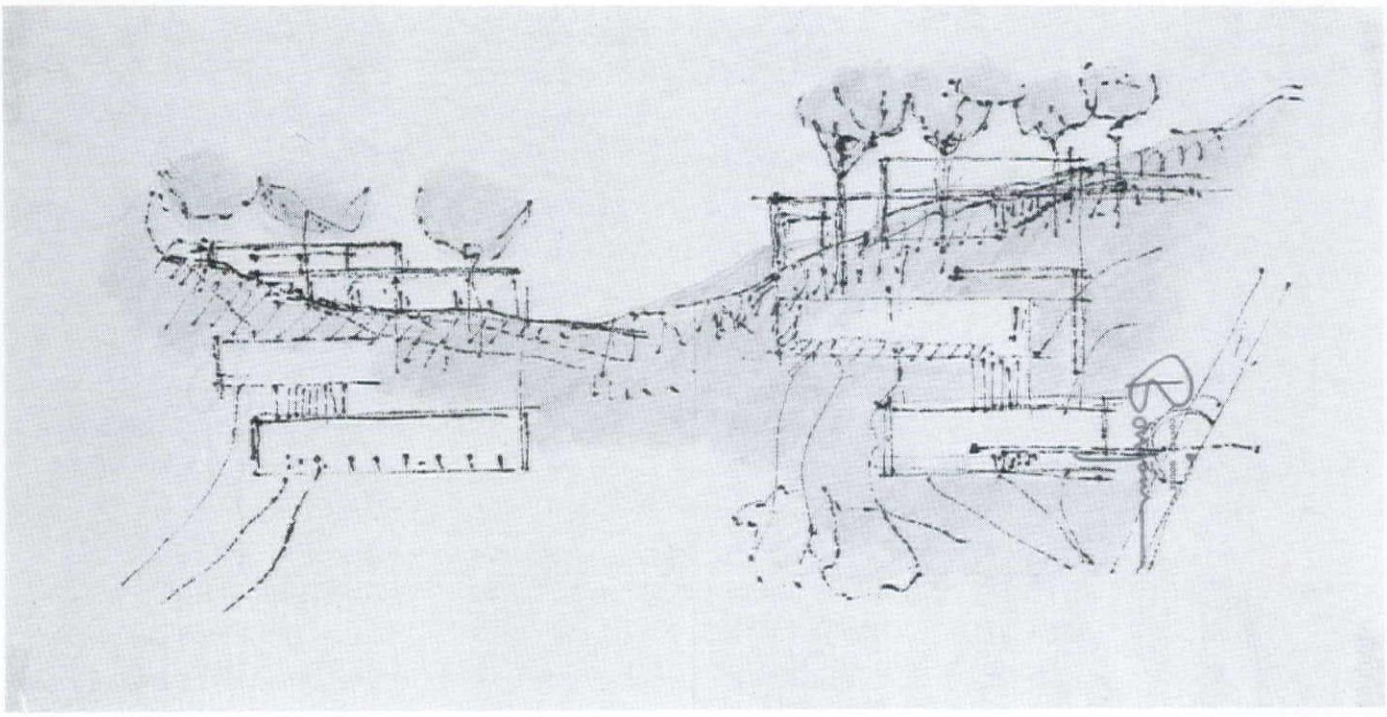
他者との関係に意を払うあまり，かれの建築は，またかれ自身すらも，自閉症の気味を呈する．ただそれは自閉症本来の意味通り，限りなく他者とのコミュニケーションを求めるが故の自閉症なのだ．かれの建築の閉ざされた表情の内に，他者との語り合いを望む熱き心を感じ取れぬなら，鈍感の誹りを免れぬ．限りなく他者との関わりを望むが故に，敢えて表情を閉ざさざるを得ぬ，不器用な，熱き心を．

表情はおそらく，多に対して，不特定多数という暴力的状況に対して，閉じている．だが，心を許す個に対しては，開いているのだ．

安藤忠雄の建築が常に対峙する宿命を負った都市――とりわけ――大阪という環境．そうした他者に対して，それが不特定他数の表情をもつ都市暴力であったときに，その建築は固くその殻を閉ざすだろう．たとえば都市の喧噪，近隣の視線，行き交う自動車，ざわめき，混乱，無秩序……．人類の歴史がいかに秩序を求め続けた歴史であったことかに思いを馳せれば，そしてその崇高な個人の意志が，いかに多数の暴力によってズタズタに引き裂かれてきたかに思いを馳せさえすれば，かれの建築の自閉症的表情もおのずと合点がゆくはずだ．そして現代はとりわけ不特定多数の暴力の時代なのだから．

だからかれは，ささやかな個人の自由な営みを守るために，ささやかな秩序の世界を構築し続ける．そしてすべての個人が，たとえば全体主義といった，特定の個人の自由の名の下に，他のすべての個人の自由が圧殺されるメカニズムに搦め捕られることなく，自由でしかも秩序だった世界を享受するためには，自由な個人が自由に運動する内に秩序を発見してゆくより道はない．そのさしあたりの自由な個人の自由な運動のための空間を造り上げる作業こそが，安藤忠雄の営みなのだ．その先は，残念ながら，いまだ知のどの分野からも展望は開けていない．それは建築の分野にとって，とりもなおさず新たな都市論の課題である．

そうした都市の暴力的状況に，とはいえ決して背を向けるわけでなく，否むしろじっと正面きって向き合い，眼をそらさず，ただひたすらに自閉の殻をかぶる姿勢は，逆に，やさしき訪問者をどこまでも待ち続ける姿勢でもある．心を許す個に対して開いているという所以である．それは自我を支える他者であり，ひとりで立ち向かってくるものであり，さしあたりは都市の自然である．光に，風に，水に，安藤忠雄の建築は限りなく敏感に反応する．そうしたやさしきたおやかなものたちによって，空



エスキスⅢ　小篠邸　いつもふたつのものの向かい合う形式を踏襲する

間は満たされ，むしろそれらがそのまま空間そのものとなる．

5. 形式

安藤忠雄の建築は，ほとんどコンクリートの塊とすら形容できて，その質感を，確かにかれは好んでいる．　コンクリートは言うまでもなく，強い存在感をもった素材だ．　ただそのコンクリートが，さながら工芸品のごとき丹精こめて，ある強靱な意志とでもいったものの透徹した形式に昇華されたとき，空間は伸びやかな広がりを見せはじめる．　当初，なにより鮮烈な印象としてあったコンクリートの質感が，いつしか消え去り，あとに透明な形式のみが残される．そんな体験が迫って来るのだ．

コンクリートの壁が，柱が，いつしか光の分布密度となり，風のささやきとなり，水の透明な皮膜となる．　それらがそのまま空間に響きわたる交響楽（シンフォニー）となって，楽器は自らの存在を消し去るのみ．　空間とは響き．　周到に配列され，訓練されたオーケストラの音が，奥行きと輝きとをもつように，周到に配列され，研ぎ澄まされた建築的要素が，空間の喜びを奏でる．そのとき，音楽は音楽となり，空間は空間となり，己が喜びを高らかに謳い上げて，もはやヴァイオリンひとつひとつの色艶など気にならぬ．すべてが消え去って，音楽そのものが，空間そのものが響きわたる．　心がそのまま音楽となり，心がそのまま空間となる．　響きが心の形象に同調する．

ただし，そうして至上の体験を支えるのは，透徹した意志のもたらす形式であって，意志の漲らぬ，あるいは形式を有せぬところの音楽も，空間も，ただただ空しい．　ロマンは形式に結晶して初めて意味をもつ．

やや唐突だが，P.H.ラングはその著《西洋文化と音楽》の中で，ベートーベンを評して次のように述べている．

「ベートーベンに音楽の世界で――音楽だけでなく文化のすべての歴史の上で――ユニークな地位を与えたものは，形式もまた力として働くという事を示したことであった．　この形式は形成すること，制約を認めた上での能動的創造の過程を意味している．　そして，それは境界を無くすることを要求するのではなく，内容の充実を要求しているのである．　ベートーベンの芸術全体は，素材に対する力の，物質に対する精神の，そして客観に対する主観の勝利である．　彼にあっては形式は本質的に主観的であり，主観は本質的に形式的である．」（酒井他訳）

このベートベンを安藤忠雄に読みかえてもさほど的はずれでない．　かれの建築の示すあるわかりやすさは，ひとえにこうした形式の厳格を貫く姿勢にある．

形式はしたがってものからすみやかに読み取られねばならない．　ものから形式が透けて見えねばならない．　この透明な形式を，かれは〈概念（コンセプト）〉と呼ぶ．　ディテールにまで全体の〈概念（コンセプト）〉が浸透しなければならぬ，とかれらが言うのもこのためだ．

周到に選び採られたものども，その細部に至るまで，厳密に〈概念（コンセプト）〉を貫くことによって最終的にものは透けて形式が浮かぶ．　安藤忠雄にとって，建築とは，いやむしろ空間とは，透徹した意志の漲る透けた形式にほかならぬ．

6. 自由

いまさら言うまでもないが，住まいとは，住まうという生の営みを展開する場である．　そして住まうとは，ただ単に食べる，寝る，憩う，etc. といった個々の行動の総計をのみ指すのではない．　それらが出会い，絡み，混じり合う内に胚胎される想念をも含めて，行為の総体を肉体化しつつ，ひとりの個人として全的に生きることだ．　安藤忠雄はこの意味で，住まうことを真摯に見据え続けている稀有な（あろうことか！）建築家といっていい．　生活，という言葉には，どこかしら上滑りな響きがある．肌触りの良いモダンリビングを連想させる．安藤忠雄の建築の硬質な肌に接すると，単なる生活を超えた，住まうことの意味を問われている感覚に襲われる．

たとえば一枚の壁があるとき，人はいかなる思いをその壁に託すだろう．　都市の喧噪のさなかにあっては，その壁が個の堅固なる領域を保証してくれるかもしれない．　壁の肌理に記憶を刻み込むかもしれない．　あるいは安部公房のように，チョークをもって新たな世界を描くかもしれない．

いずれにせよ壁は，目の前に立ち塞がるものとして，在る．　たとえそれが自身の領域を守ってくれるものだとしても．　このような壁を立てねば個の領域を生み出し得ない状況に，苛立ちを覚えぬわけでもない．　したがって立ち塞がる壁の向こうに絶望的な状況を見る．それも可能だろう．　ただ壁があって初めてそのことに気づく．

たとえば安部公房が壁に向かい合って新たなイメージを産出したように，壁は契機として，在る，とは言えまいか．　すなわち想像力を解き放つための契機として．　大江健三郎の言葉を借りれば，「想像力とは現にある状態の否定，そしてもうひとつ別の状態への跳びこえに向けて，はじめて現実化する人間の能力である」．

（叢書《文化の現在　1. 言葉と世界》岩波書店刊より）

そして想像力なくして自由を，また自由のありかを感得することができようか．　想像力こそが自由を描き出しうるのだ．

壁が自由の意味を教えてくれる．　拘束が自由のありかを指し示してくれる．　個の自由を確認するよすがともなる．　個の自由な世界が壁をめぐらせて初めて成立するのが，今日の都市的状況としても，その自由とは，壁に向き合って個自ら発見してゆくところの自由なのであって，壁の内にささやかな世界を獲得したと喜ぶようでは人間が小さい．　まさしく自由は主体的に闘い獲らるべきものとしてあるのであって，闘い獲る意志なくしては成立しえぬ概念なのだ．

たとえば高みに空がある．　青いな，と思う．　ただし空は高みにあって手が届かず，しかも壁に囲われた底から見上げると，周囲を切り取られて，ある．　軽やかにはばたいてゆきたい，と思ったとき，自由は実感される．　心ははばたき，高みへと駆け登る．　行為の自由でなく，心の自由．　青く澄みわたる風．

いわゆる生活感があると称される住宅には，そうした自由の実感すら用意されない．　逆に自由の存在を隠蔽し，そのような生の充実には眼をつぶって，ひたすら日常の生活を真綿にくるみ，考えることなく送り続けるための容器でしかない．　それを生活感と呼ぶのなら，生活感などいらぬ．　安藤忠雄の住宅は言うまでもなく，そうしたなまぬるい生活感とは無縁の地点に立つ．　むしろ生きること，住まうことの充実に気づかせてくれる異化の契機に満ち満ちている．

自由というものが堅固な意志に支えられて初めて成立しうる概念であるなら，意志を喚起する拘束を語ることは自由を語ることにほかならぬ．　拘束とはひとつの形式であって，壁をひきあいに出して語られた自由の問題は，安藤忠雄が形式を通して見つめ続ける問題でもある．だから，形式を語ることは自由を語ることだ，と言い直してもよい．

安藤忠雄の意志の結晶ともいうべき形式．その支配する空間が，何かの拍子にあなたの想像力を解き放つ力を持ったとしたら，そのとき，安藤忠雄とあなたとの間に，自由という問いをめぐって，コミュニケーションが成立した．あなたはいまややさしく迎えられる個となった．閉ざされていた表情のゆるむ気配はないだろうか．

そのようなコミュニケーションの成立を願って，すなわち自由への意志を形式にこめ，その意志をあなたが読み取ってくれる日を信じて，安藤忠雄は建築を造り続ける．

やはりこれはひとつの対話である．　そして形式が力をもつ場面でもある．

■

頬をつたう汗を，風が撫でてゆく．　さっきまでの暑さがまるで嘘のようだ．　床の玄昌石の割れ肌がなまめかしく光る．　両側に立ち上がるコンクリートの壁に，くっきりと影が落ちる．影とともに，ガラスの反射の鈍い輝きもコンクリートの表面に交錯する．　それらがゆっくりと，時とともに移ろうのがわかる．　フォームタイの痕跡が，静かに影をよぎってゆく．　見上げると，空があった．

安藤忠雄の建築はすべて空を持っているのだ．　それもひとつが他の誰のものでもない，自分だけの空を．

初めて訪れた住吉の長屋は，外の焼けつく日差しをはねのけて，内に静謐を湛えていた．まるで都市の別世界だ．　等しいヴォリュームのふたつのコンクリートのマッスを，等しいヴォリュームのヴォイドを挟んで向き合わせる．と，空間がゆったりとキャッチボールをはじめる．　映し合う対の形式．　ここに安藤忠雄のすべてが凝縮されて，在る．　安藤忠雄の空間の原型がここに在る．

4.7m×3.3m の空が，この住宅のすべてとすら言いうるだろう．　空は雲を浮かべ，光を導き入れ，影を落とし，雨を，そしてときには雪を降らす．　コンクリートの壁の下方のところどころに，周到に穿たれた窓によって，この空をいただく中庭をつねに心地よい風が渡ってゆく．　外の熱気も喧噪も，まったく遮断された別世界がここに在る．　そのようにして導きこまれた〈自然〉が，住まうことと感応する．このささやかな住宅のすべてが，こうして取りこまれた空とともに，在る．

ズボンのポケットに手を突っ込んで，中庭の真中に佇んでいた安藤忠雄が，やや首を傾いで空を仰ぎ，すっと目を細めて，ぽつりと呟いた．

「ええ風やね」

どこまでも青い空があった．　ふっと瞬くほどの間，安藤忠雄のまなざしの行方を捉えた気がした．　風が渡っていった．

●たけやま・きよし／建築家

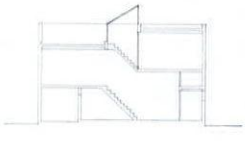
作品データ

凡例

1 建築名称
2 設計担当者
3 構造設計
4 所在地
5 設計期間
6 施工期間
7 施工
8 敷地面積
9 建築面積
10 延床面積
11 作品掲載誌

★——収録作品 ●——実現作品 ○——計画案　本表中の図面は特記以外は同縮尺

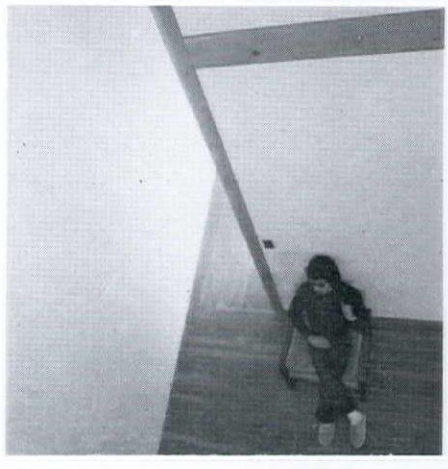
1 **富島邸 ●★**
2 安藤忠雄
3 アスコラル構造研究所
4 大阪市大淀区豊崎東通
5 1971年1月～1972年9月
6 1972年10月～1973年2月
7 三建工務店
8 47 m²
9 44 m²
10 79 m²
11 都市住宅臨時増刊7307，読売新聞770708，
ジャパンインテリア7303，
モダンリビング No. 86, No. 94



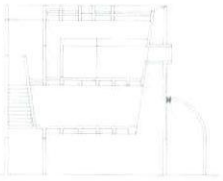


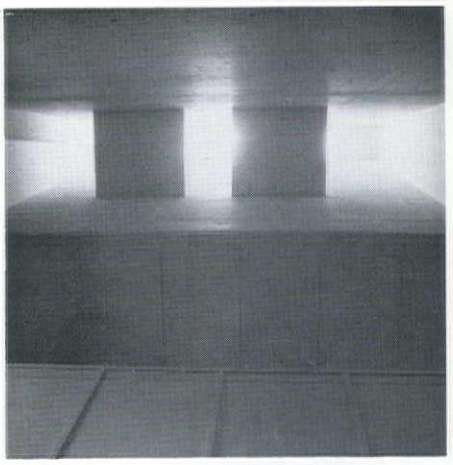
1 **平岡邸 ●**
2 安藤忠雄，三好庸隆
3 アスコラル構造研究所
4 宝塚市花屋敷松ケ丘
5 1972年3月～1973年5月
6 1973年8月～1974年2月
7 増見工務店
8 238 m²
9 58 m²
10 88 m²
11 都市住宅臨時増刊7405，建築文化7404，
モダンリビング No. 92，No. 94



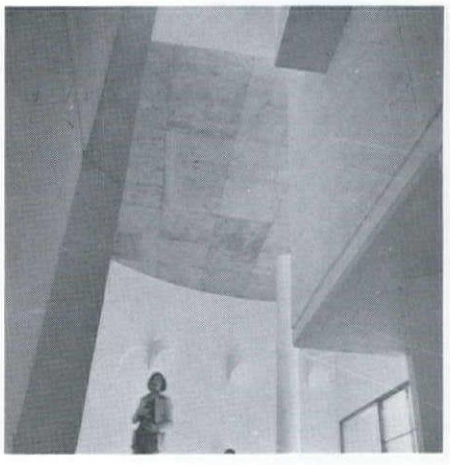


1 **立見邸** ●
2 安藤忠雄，吉田保夫
3 アスコラル構造研究所
4 大阪市大正区泉尾中通
5 1972年9月～1973年3月
6 1973年9月～1974年1月
7 持田工務店
8 62 m²
9 56 m²
10 136 m²
11 都市住宅臨時増刊 7405，読売新聞 770610，
建築文化 7404，商店建築 7404，
ジャパンインテリア 7404，モダンリビング No. 90



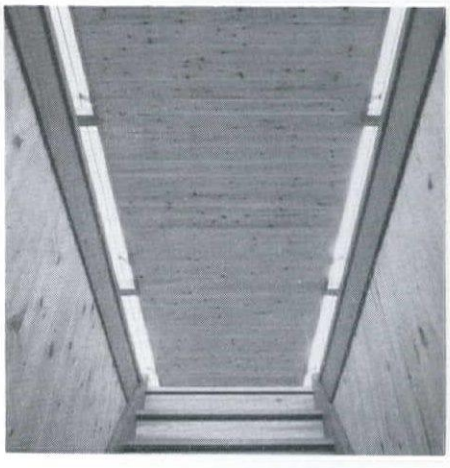


1 **芝田邸** ●
2 安藤忠雄，吉田保夫
3 アスコラル構造研究所
4 芦屋市朝日ケ丘町
5 1972年10月～1973年6月
6 1973年9月～1974年4月
7 増見工務店
8 187 m²
9 74 m²
10 145 m²
11 建築文化 7406，ジャパンインテリア 7407

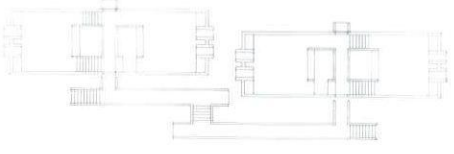


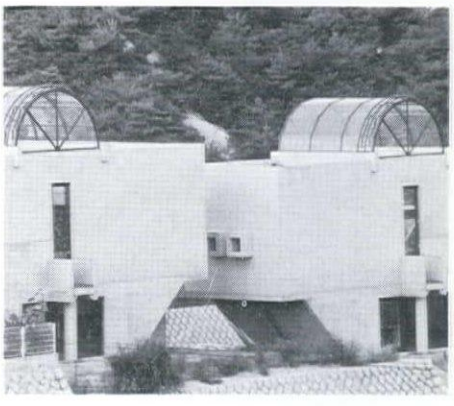
1 **宇野邸** ●
2 安藤忠雄，浅井隆行
3 アスコラル構造研究所
4 京都市右京区樫原
5 1973年10月～1974年5月
6 1974年9月～1974年12月
7 藤田工務
8 85 m²
9 42 m²
10 64 m²
11 ジャパンインテリア 7503，モダンリビング No. 96，
読売新聞 770421



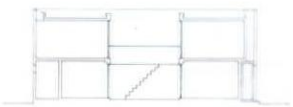


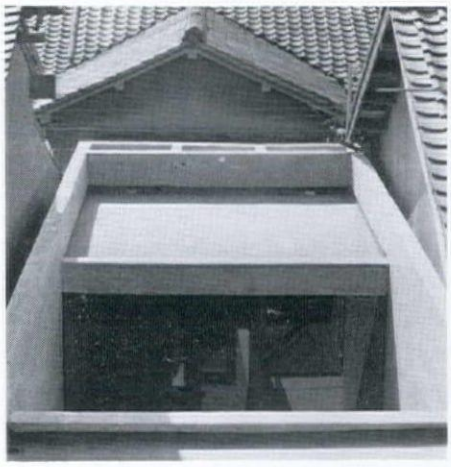
1 **双生観（山口邸）** ●★
2 安藤忠雄，貴志雅樹
3 アスコラル構造研究所
4 宝塚市仁川
5 1974年1月～1975年2月
6 1975年3月～1975年7月
7 まこと建設
8 524 m²
9 98 m²
10 524 m²
11 建築文化 7509，ジャパンインテリア 7509，
別冊都市住宅 75 秋



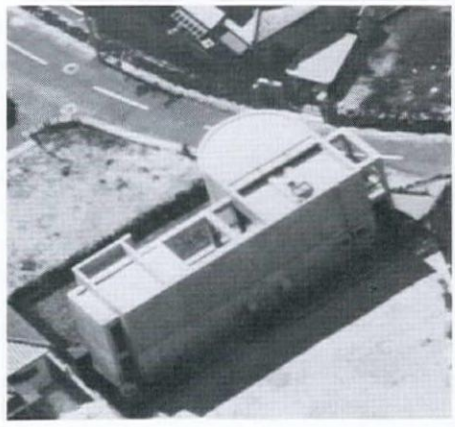


1 **住吉の長屋（東邸）●★**（日本建築学会賞受賞作品）
2 安藤忠雄，貴志雅樹
3 アスコラル構造研究所
4 大阪市住吉区上住吉町
5 1975年1月～1975年8月
6 1975年10月～1976年2月
7 まこと建設
8 57 m²
9 34 m²
10 65 m²
11 新建築 7702，ジャパンインテリア 7702，ディテール 7801，朝日新聞 780322, 810316，読売新聞 770505，建築文化 7702，流行通信 7712，ja. 7706，AIA Journal 7911，都市住宅 7702，ミセス 7809，Decorative Art & Modern Interiors 1979 vol. 68

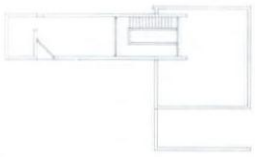


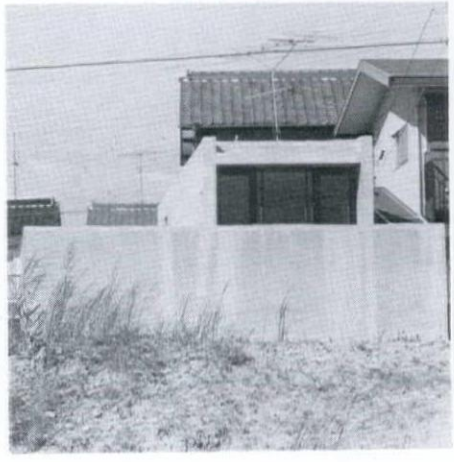


1 **貫入（平林邸）●★**
2 安藤忠雄，森崎輝行
3 アスコラル構造研究所
4 吹田市山田
5 1975年1月～1975年9月
6 1975年10月～1976年7月
7 まこと建設
8 394 m²
9 143 m²
10 212 m²
11 建築文化 7611，ジャパンインテリア 7611

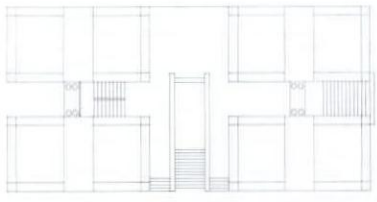


1 **番匠邸 ●★**
2 安藤忠雄，矢野正隆
3 アスコラル構造研究所
4 愛知県西加茂郡三好町
5 1975年2月～1976年1月
6 1976年4月～1976年7月
7 誠和工務店
8 168 m²
9 63 m²
10 86 m²
11 新建築 7702，ja. 7706



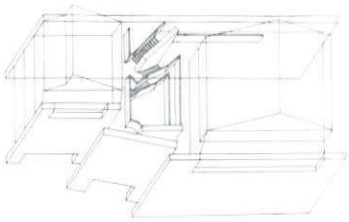


1 **帝塚山タワープラザ（店舗共同住宅）●★**
2 安藤忠雄，貴志雅樹，島隆男
3 アスコラル構造研究所
4 大阪市住吉区帝塚山中1丁目127—3
5 1975年2月～1976年1月
6 1976年2月～1976年9月
7 熊田工務店
8 376 m²
9 161 m²
10 754 m²
11 建築文化 7702，商店建築 7702，A.A. 7804，都市住宅 7702，ジャパンインテリア 7702，店舗と建築 8001



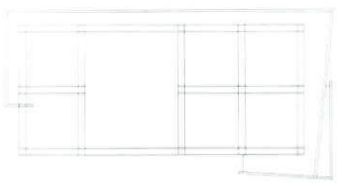


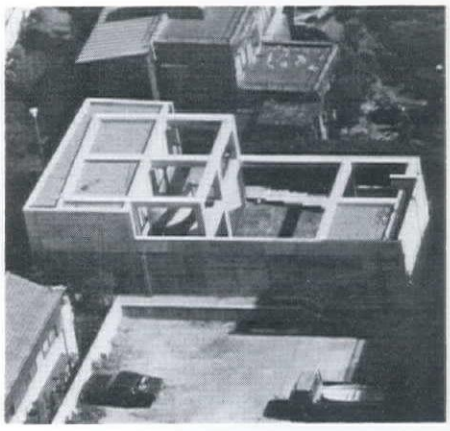
1 **ローズ・ガーデン（複合商業建築）●**
2 安藤忠雄，島隆男
3 アスコラル構造研究所
プロデュース：浜野商品研究所
4 神戸市生田区山本通 2 丁目 106
5 1975年 8 月～1976年 3 月
6 1976年 4 月～1977年 3 月
7 熊田工務店
8 410 m²
9 271 m²
10 933 m²
11 新建築 7705，商店建築 7705，Baumeister 7902，
建築文化 7803，ja. 7708，読売新聞 771107，
ジャパンインテリア 7705，店舗と建築 8001



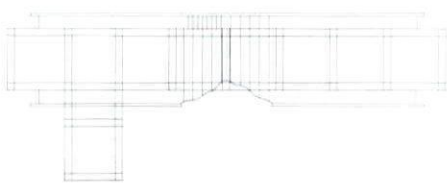


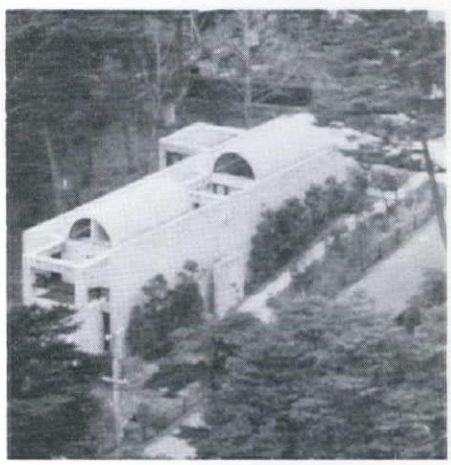
1 **帝塚山の家（真鍋邸）●★**
2 安藤忠雄，島隆男
3 アスコラル構造研究所
4 大阪市阿倍野区北畠
5 1976年 3 月～1977年 3 月
6 1977年 4 月～1977年 9 月
7 熊田工務店
8 237 m²
9 109 m²
10 147 m²
11 新建築 7811，読売新聞 780317，建築文化 7811，
ja. 7910



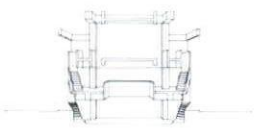


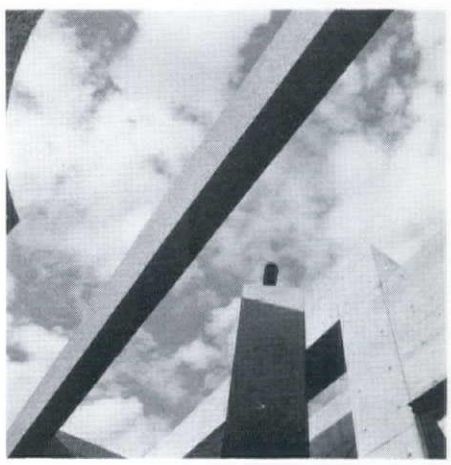
1 **領壁の家（松本邸）●★**
2 安藤忠雄，貴志雅樹，矢野正隆
3 アスコラル構造研究所
4 芦屋市奥池
5 1976年 6 月～1977年 2 月
6 1977年 2 月～1977年 7 月
7 甲南建設
8 1082 m²
9 128 m²
10 238 m²
11 新建築 7802，Baumeister 7812，
ジャパンインテリア 7802，ja. 7806





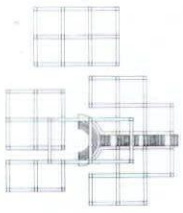
1 **甲東アレイ（複合商業建築）●**
2 安藤忠雄，島隆男，岩間文彦
3 アスコラル構造研究所
4 西宮市甲東園 1 丁目 73
5 1976年 6 月～1977年 9 月
6 1977年10月～1978年 7 月
7 新井組
8 363 m²
9 298 m²
10 804 m²
11 新建築 7811，店舗と建築 8001，建築文化 7811，
読売新聞 781209，商店建築 7811

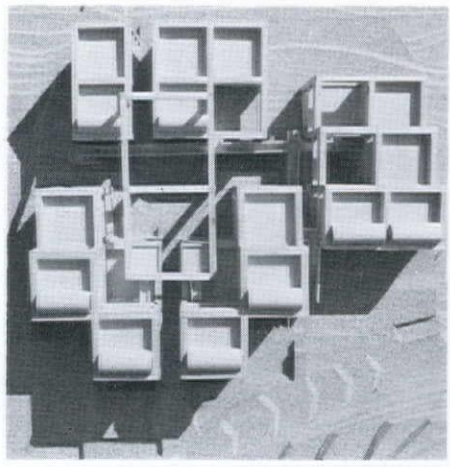




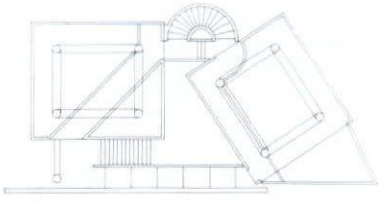
1 岡本 Housing Project（集合住宅）○★
2 安藤忠雄，池上俊郎
3 アスコラル構造研究所
4 神戸市東灘区岡本
5 1976年 6 月～1976年12月
6
7
8 177 m²
9 556 m²
10 1405 m²
11 建築文化 7702，A.A. 7804

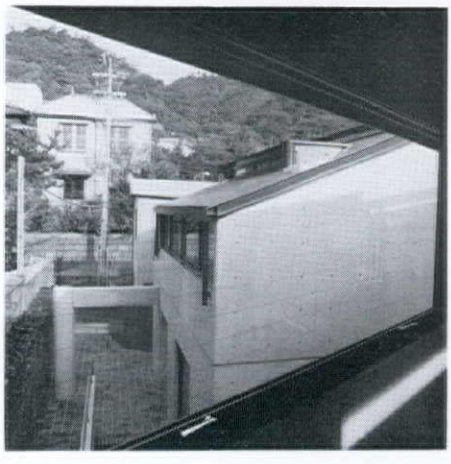
縮尺例外



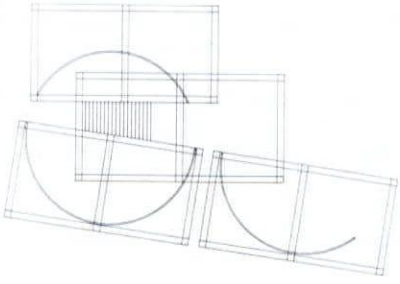


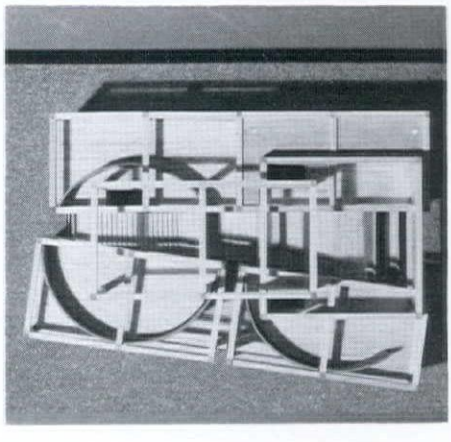
1 北野アレイ（複合商業建築）●
2 安藤忠雄，福田由利
3 アスコラル構造研究所
4 神戸市生田区山本通 2 丁目 67-1
5 1976年12月～1977年 2 月
6 1977年 3 月～1977年10月
7 熊田工務店
8 345 m²
9 190 m²
10 427 m²
11 新建築 7803，店舗と建築 8001，建築文化 7803，ja. 7805，商店建築 7803，Baumeister 7902





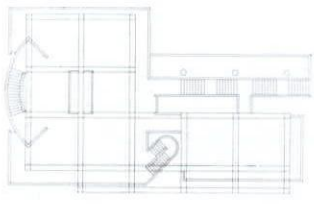
1 Art Gallery Complex（美術・演劇施設）○★
2 安藤忠雄，池上俊郎
3
4
5 1976年12月～1977年12月
6
7
8
9
10
11 建築文化 7404

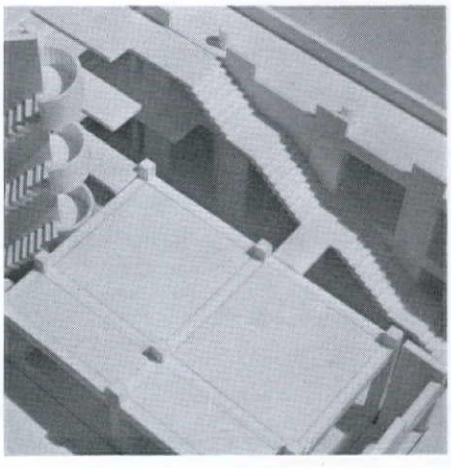




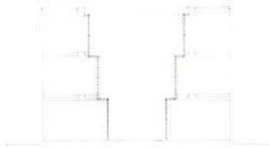
1 STEP（複合商業建築）●★
2 安藤忠雄，島隆男
3 アスコラル構造研究所
プロデュース：浜野商品研究所
4 高松市丸亀町 9-1
5 1977年 4 月～1978年10月
6 1979年 2 月～1980年 3 月
7 清水建設四国支店
8 466 m²
9 365 m²
10 1142 m²
11 新建築 8005，商店建築 8005，ja. 8007，建築文化 8005，店舗と建築 8001，A.A. 8009，ジャパンインテリア 8005，日経アーキテクチュア 8005，朝日新聞 800607，読売新聞 810326

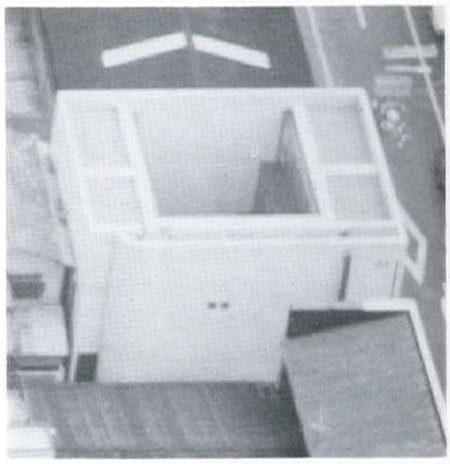
縮尺例外



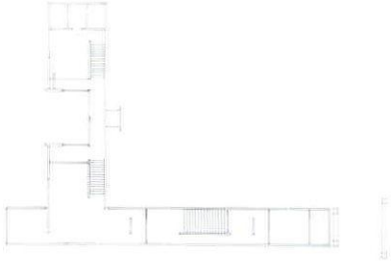


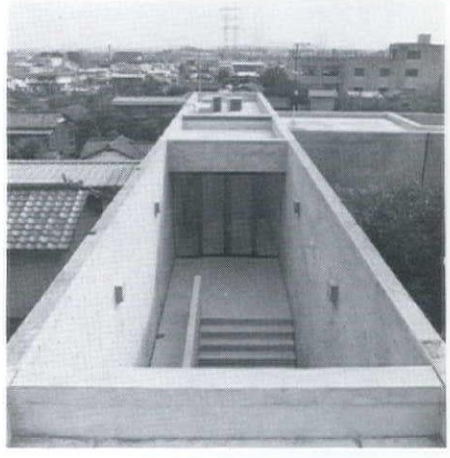
1 **ガラスブロックの家（石原邸）●★**
2 安藤忠雄，島隆男，矢野正隆
3 アスコラル構造研究所
4 大阪市生野区勝山
5 1977年7月～1978年4月
6 1978年6月～1978年12月
7 熊田工務店
8 458 m²
9 92 m²
10 222 m²
11 新建築7905，ja. 7910，P.A. 8005，A.A. 7912，
GA HOUSES No. 6：7911，Domus 603，
THE NEW YORK TIMES 790114，
Decorative Art & Modern Interiors 1980 vol. 69



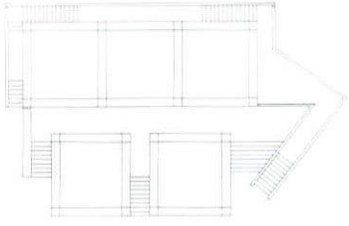


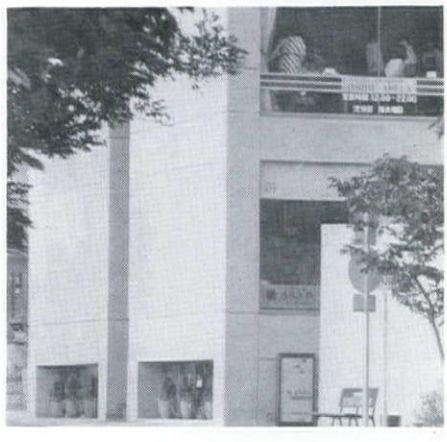
1 **大楠邸 ●★**
2 安藤忠雄，種村俊昭
3 アスコラル構造研究所
4 世田谷区等々力
5 1977年9月～1977年12月
6 1978年1月～1978年8月
7 佐藤秀工務店
8 531 m²
9 194 m²
10 288 m²
11 GA HOUSES No. 6：7911





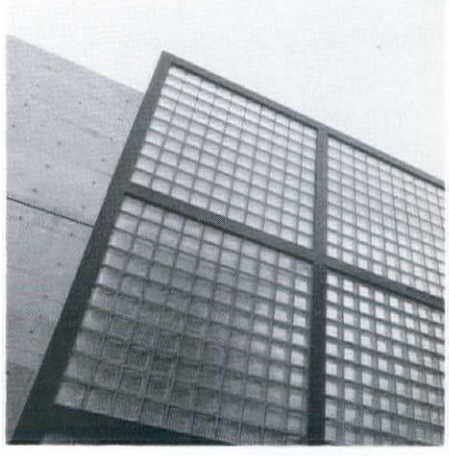
1 **サニーガーデン（複合商業建築）●**
2 安藤忠雄，池上俊郎
3 アスコラル構造研究所
4 西宮市北名次町
5 1977年9月～1977年12月
6 1978年3月～1978年11月
7 吉田工務店
8 286 m²
9 192 m²
10 451 m²
11 店舗と建築 8001



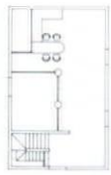


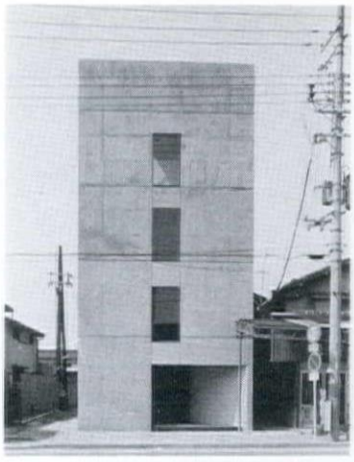
1 **ガラスブロックウォール（堀内邸）●★**
2 安藤忠雄，矢野正隆
3 アスコラル構造研究所
4 大阪市住吉区帝塚山
5 1977年10月～1978年6月
6 1978年7月～1979年2月
7 熊田工務店
8 238 m²
9 95 m²
10 244 m²
11 新建築7905，A.A. 7912，GA HOUSES No. 6：
7911，P.A. 8005，ja. 7910



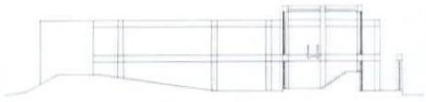


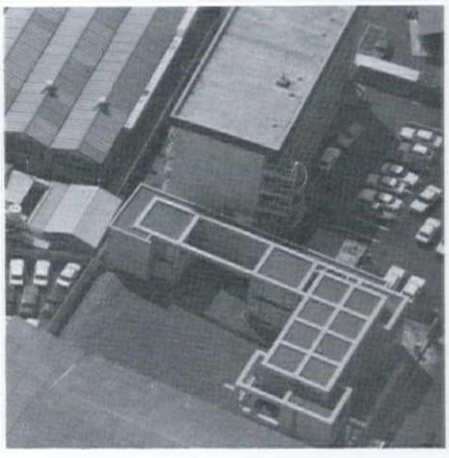
1 **片山ハウス（店舗住宅）●★**
2 安藤忠雄，池上俊郎，藤井稔
3 アスコラル構造研究所
4 西宮市平松町
5 1978年1月～1978年4月
6 1978年10月～1979年4月
7 ヤマネ工務店
8 78 m²
9 63 m²
10 232 m²
11 GA HOUSES No. 6：7911，店舗と建築 8001



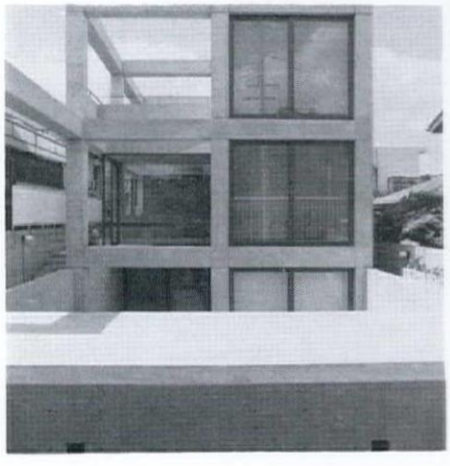


1 **松本邸 ●★**
2 安藤忠雄，種村俊昭
3 アスコラル構造研究所
4 和歌山市中之島
5 1978年2月～1979年2月
6 1979年4月～1980年2月
7 浅川組
8 952 m²
9 317 m²
10 484 m²

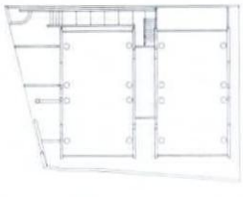


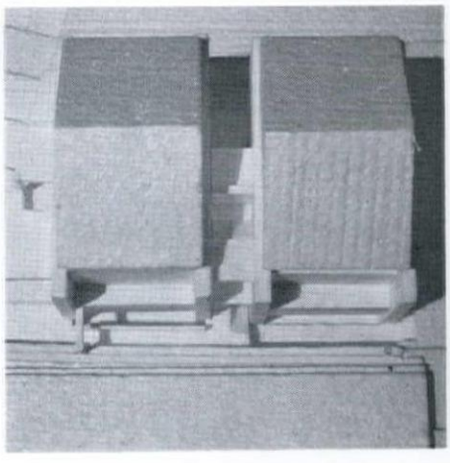


1 **大西邸 ●★**
2 安藤忠雄，矢野正隆
3 アスコラル構造研究所
4 大阪市住吉区帝塚山
5 1978年7月～1979年1月
6 1979年2月～1979年8月
7 三建工務店
8 165 m²
9 60 m²
10 144 m²
11 新建築臨時増刊 8012，
GA HOUSES No. 6：7911



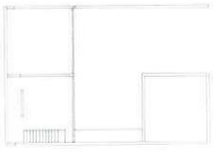
1 **北野アイビーコート（店舗共同住宅）●**
2 安藤忠雄，矢野正隆
3 アスコラル構造研究所
4 神戸市中央区北野町1丁目2-2
5 1978年7月～1979年9月
6 1979年12月～1980年12月
7 大工建設
8 576 m²
9 345 m²
10 1212 m²

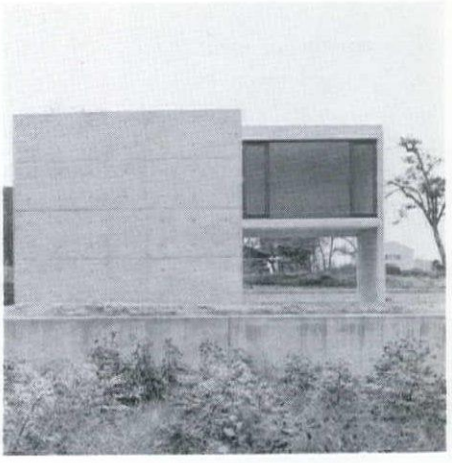




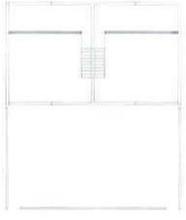
縮尺例外

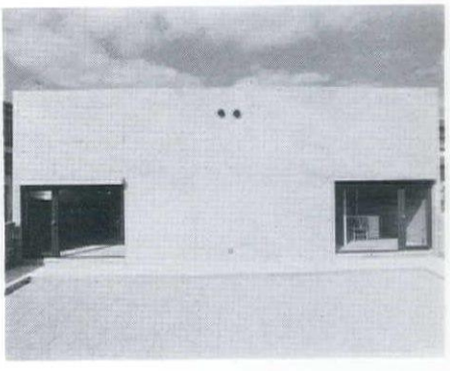
1 **松谷邸 ●★**
2 安藤忠雄，泉谷佳代子
3 アスコラル構造研究所
4 京都市伏見区桃山
5 1978年 8 月～1979年 6 月
6 1979年 7 月～1979年10月
7 根木建設工業
8 143 m²
9 57 m²
10 92 m²
11 新建築 8002，　ja. 8004，
日経アーキテクチュア 8010



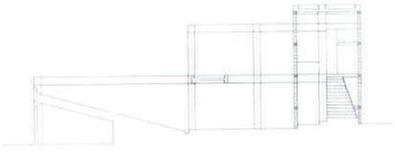


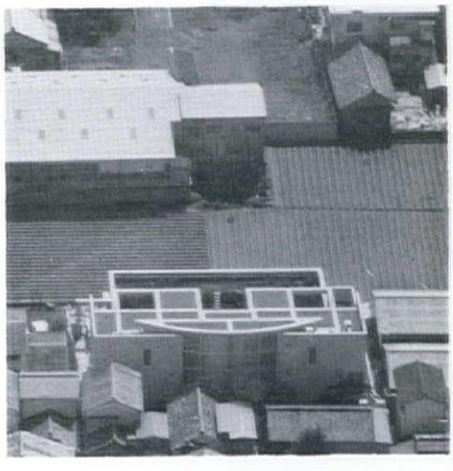
1 **上田邸 ●★**
2 安藤忠雄，種村俊昭
3 アスコラル構造研究所
4 岡山県総社市泉 4-25
5 1978年 8 月～1979年 6 月
6 1979年 7 月～1979年10月
7 松本組
8 180 m²
9 70 m²
10 94 m²
11 新建築 8002，ja. 8004



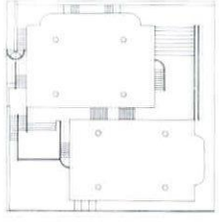


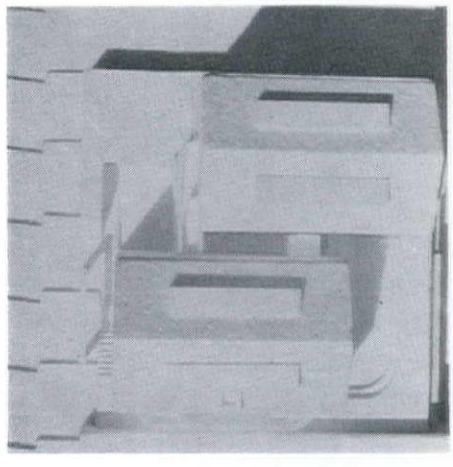
1 **福邸 ●★**
2 安藤忠雄，種村俊昭
3 アスコラル構造研究所
4 和歌山市和歌浦東
5 1978年10月～1979年 4 月
6 1979年 8 月～1980年 6 月
7 浅川組
8 800 m²
9 345 m²
10 484 m²





1 **リンズギャラリー（複合商業建築）●**
2 安藤忠雄，矢野正隆，島隆男
3 アスコラル構造研究所
4 神戸市中央区北野町 2 丁目 7-18
5 1979年 6 月～1979年12月
6 1980年 3 月～1981年 5 月
7 大工建設
8 704 m²
9 352 m²
10 1578 m²

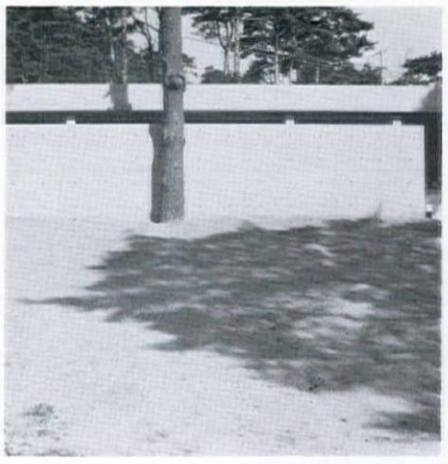




縮尺例外

1 **小篠邸 ●★**
2 安藤忠雄，中北幸，泉谷佳代子
3 アスコラル構造研究所
4 芦屋市奥池
5 1979年9月～1980年4月
6 1980年7月～1981年3月
7 大工建設
8 1141 m²
9 224 m²
10 231 m²



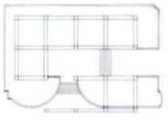


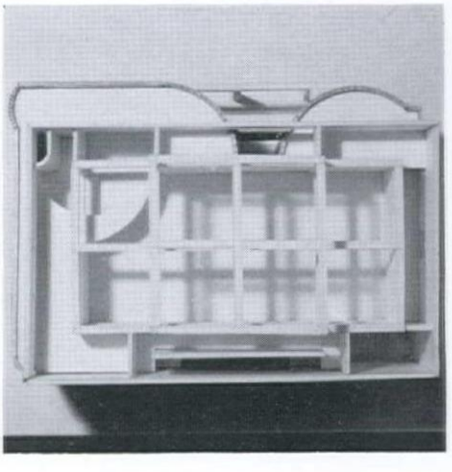
1 **PORTPIA '81 "Fashion Live Theater" ●★**
2 安藤忠雄，池上俊郎
3 アスコラル構造研究所
　プロデュース：浜野商品研究所
4 神戸ポートアイランド
5 1979年10月～1980年5月
6 1980年7月～1981年3月
7 竹中工務店
8 2748 m²
9 1093 m²
10 1732 m²
11 ジャパンインテリア 8012
縮尺例外



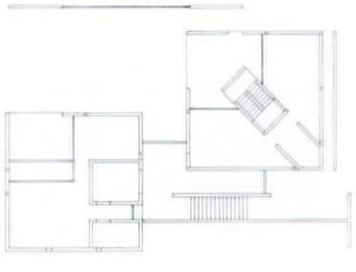


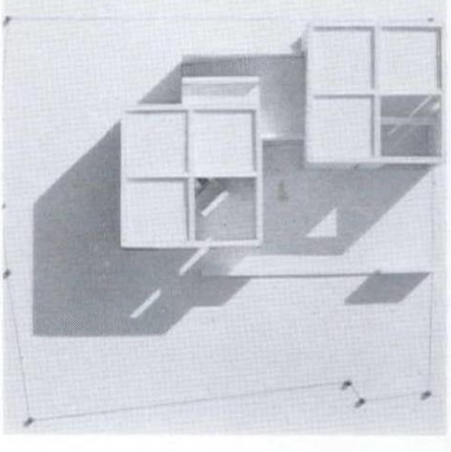
1 **香川興産南新町ビル ●**
2 安藤忠雄，島隆男，岩間文彦
3 アスコラル構造研究所
4 高松市南新町5-6
5 1979年10月～1980年12月
6 1981年3月～1982年3月予定
7 穴吹工務店
8 664 m²
9 551 m²
10 1792 m²
縮尺例外



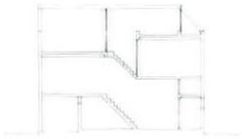


1 **佐藤 Housing ●**
2 安藤忠雄，矢野正隆，岡本洋子
3 アスコラル構造研究所
4 倉敷市児島下の町
5 1980年1月～1980年10月
6 1981年1月～1981年6月
7 松本組
8 655 m²
9 146 m²
10 234 m²



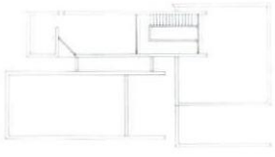


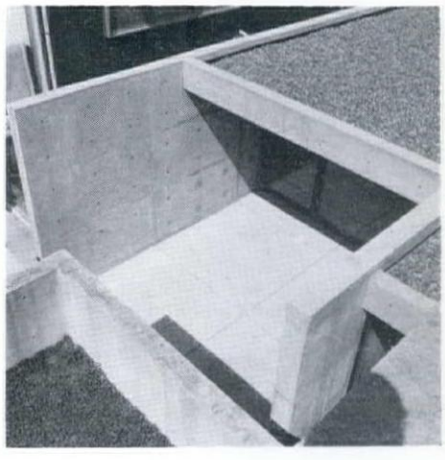
1 **富島邸一増築 ●★**
2 安藤忠雄，中北幸
3 アスコラル構造研究所
4 大阪市大淀区豊崎東通
5 1980年6月～1980年9月
6 1981年2月～1981年3月
7 大工建設
8
9
10 27 m² (79+27=106 m²)





1 **番匠邸一増築 ●★**
2 安藤忠雄，岡本洋子
3 アスコラル構造研究所
4 愛知県西加茂郡三好町
5 1980年7月～1980年10月
6 1980年12月～1981年2月
7 豊工務店
8
9 35 m² (63+35=98 m²)
10 28 m² (86+28=104 m²)





■
写真撮影 Photo credits
■
大橋富夫 Tomio Ohashi
17, 18, 19, 20 20-1, 22, 23, 24-5, 26, 27, 28(下), 29, 137
新写真工房 N.P.A.
8-9, 10-1
田中宏明 Komei Tanaka
134, 135
藤塚光政 Mitsumasa Fujitsuka
54(上)
松岡満男 Mitsuo Matsuoka
61, 62, 66, 76
高瀬良夫(レトリア) Yoshio Takase (Retoria)
7, 56, 58, 59, 70, 75, 77, 82, 87, 90-1, 92, 94, 98, 100, 101, 106, 107, 108, 113(上), 126, 128-9, 131
安藤忠雄建築研究所 Tadao Ando Architect & Associates
上記以外
■
翻訳協力 English Translation
■
加藤文彦 Fumihiko Kato
10—11
木下庸子 Yoko Kinoshita
各作品解説

安藤忠雄建築研究所

安藤忠雄・池上俊郎・島隆男・矢野正隆・種村俊昭・中北幸・岩間文彦・竹内晶洋・岡本洋子・泉谷加代子・加藤由美子

安藤忠雄 1941年9月13日大阪に生まれる

	↓講演会，展覧会，競技設計	↓新聞掲載
1967	大阪城公園競技設計1等入選（日本建築協会主催）	
1971	近鉄学園前総合開発計画競技設計1等入選（大阪府建築士会主催）	
1972	アフリカ　モロッコ　タンジール湾総合開発計画国際競技設計出品 泉北ニュータウン地区センター競技設計2等入選（日本建築学会，日本建築協会主催）	0407　住宅タイムズ「5年だけ住む家」 08—09　日刊建設産業新聞「明日の都市空間」連載10回
1973	泉北ニュータウン集合住宅競技設計出品（日本建築学会，日本建築協会主催）	0629　住宅新聞「都心部に建てた家」
1974		
1975		0904　住宅新聞「アメリカのタウンハウス」
1976	06　早稲田大学タテの会主催講演会（＋石井和紘） 08　高山セミナー（新建築社主催）	0122　住宅新聞「タウンハウスとツーバイフォー工法」 1008　朝日新聞　伊藤ていじ「すそ広がりビルの語るもの」
1977	06　兵庫県建築士会講演会 08　大阪大学夏期セミナー講演会	0113　住宅新聞「人々の触れ合う街」 0211　読売新聞　婦人と生活　インテリアを考える 0303　〃　〃　〃 0421　読売新聞　婦人と生活　住まいのインタビュー 0505　〃　〃　〃 0610　〃　〃　〃 0708　〃　〃　〃 1107　読売新聞　「異人館の伝統守る町並みづくり」
1978	06　キサダコールセミナー安藤忠雄建築展 キサダコールセミナー講演会 09　滋賀県建築士会講演会 09　大阪府建築士会講演会 10　JCD 日本ディスプレイデザイン協会合同シンポジウム 10　「いまドローイングは……展」出展—今橋画廊— 10—11　"A New Wave of Japanese Architecture" 米国諸都市巡回展覧会 10　日経フォーラム千里講演会 11　島根県建築士会講演会 11　住宅の今日展 part 2（松屋銀座ギャラリー） 11　パッケージデザイン協会講演会	0317　読売新聞　婦人と生活「住まいのインタビュー」 0322　朝日新聞　復権への道「新・関西は考える」 1027　読売新聞　婦人と生活「住まいのインタビュー」 1209　読売新聞　「打放しコンクリートの伝統を生かす」
1979	03　日本インテリアデザイナー協会展覧会 06　大阪府設計監理協会主催講演会 06　東京文化学院講演会 08　都市探検セミナー講演会 09　第3回建築設計図展出展大阪府（建築士会主催） 10　朝日カルチャーセンター講演会 10　Tadao Ando Architecture Exhibition in Hungary（ハンガリー建築家協会MEIZ招待）講演会「日本の都市空間と現代建築」（ハンガリー）	0114　The New York Times「The Japanese New Wave」 0307　読売新聞　都市の骨格　建築の骨格「大阪駅前を考える」 0416　読売新聞　「精神形成できる住宅へ」 0524　住宅新聞　「都市を職と住の場に」
1980	02　日本建築学会賞作品賞受賞，日本大学帝塚山周辺見学会，講演会 04　兵庫県建築士会講演会 05　Chicago Tribune Tower Compe 招待出品（U.S.A.） 06　U.C.L.A. 講演会，「日本建築が私に与えた影響」（U.S.A.） 06　東京 Y.M.C.A. デザイン研究所講演会 06　「中之島第三の道」展出展 06　「中之島第三の道」展シンポジウム（大阪市中央公会堂） 07　第一回日本文化デザイン会議（＋相田武文） 07　日本建築学会賞受賞記念講演会（大阪厚生年金会館＋伊東豊雄） 07　朝日カルチャーセンター講演会 07　日刊建設産業新聞主催特別座談会（＋藤田邦昭＋大久保昌一） 08　日本建築学会四国支部夏季講演会（＋宮脇檀） 08　サロン・ラ・カーベ第216回例会講演会 08　島根建築士会講演会 09　国代耐化工業所エリア・コミュニケーション'80講演会（仙台，東京） 09　JCD 講演会 10　第4回建築設計図展出展（大阪市建築士会主催） 10　関西大学建築祭講演会 11—12　没後400年記念パラディオ学会展覧会出展 12　第3回創造共和国シンポジウム「住」	0529　神戸新聞「人——ポートピア81に意欲見せる」 0603　読売新聞　鈴木博之「建築家が求められる方向」 0607　朝日新聞　上田篤「安藤忠雄の最新作複合ビルを見て」 0630　サンケイ新聞「中之島再生を探る」 0703　毎日新聞　上田篤「中之島再生への提言」 0707　サンケイ新聞　人間と都市「ニューヨークの街角で思ったこと」 0811　日経流通新聞「商業ビルに皮膚感覚を」 1219　中国新聞「青空のある複合ビル」 1225　日経流通新聞「店にも街にも顔作ろう」
1981	02　大分建築士会講演会 03　京都芸術短期大学シンポジウム「教育としての建築意匠」	0113　日本経済新聞「中之島回廊—心のオアシスに」 0209　毎日新聞「第1回びわ湖現代彫刻展」 0316　朝日新聞「集合住宅新事情—長屋の再生」 0326　読売新聞　渡辺豊和「安藤忠雄のステップ」

↓作品論，引用紹介記事，インタビュー	↓海外の雑誌掲載	↓旅行
		06 欧州 12 U.S.A.＋メキシコ
06 商店建築　赤根和夫「安藤忠雄の空間＝白への思想」		06 北欧 11 U.S.A.
04 建築文化　東孝光「町人の優しさと土性骨」 10 建築文化　西沢文隆「八瀬の家所感」 10 インテリア　永田裕三「思想を超えるもの」		10 北アフリカ，南欧
09 インテリア　関根伸夫「安藤忠雄の生の砦」 建築と社会　No. 6「若手建築家に聞く」		04 U.S.A. 12 U.S.A.
都市住宅　住宅特集　長谷川堯「二楽荘から双生観へいたる阪神オムニバス」		06 ギリシア＋イタリア
02 インテリア　石井和紘「安藤忠雄・必要こそ十分」 05 新建築　西沢文隆「近頃の安藤さん」 05 インテリア　浜野安宏「人間のマチ　その情熱的保存」 10 建築文化　伊東豊雄「近代以降の戦略を練る建築家たち」 10 J.A.　石井和紘＋鈴木博之「New Relations between the space and the person」 建築美　創刊号　石山修武「怪談義人邂逅・一幕一場」		01 南インド 06 北部 U.S.A.
03 建築文化　古山正雄「壁の論理．壁の心理」 05 都市住宅　本田一勇喜「建築はいま境界領域をめざす」 第4章隙間と風魔の布石　安藤忠雄＋六角鬼丈 05 J.A.　宮脇檀 10 Questions to 8 Architects 05 日経アーテクチュア「私の視点，方向をさぐる」	04 AA (L'Architecture D'Aujour d'hui) ―帝塚山タワープラザ，岡本ハウジングプロジェクト 12 Baumeister―領壁の家 Catalogue 10 (New York Institute of Architecture & Urban Studies) ――領壁の家，住吉の長屋，平林邸，北野アレイ，帝塚山タワープラザ，岡本ハウジングプロジェクト	05 欧州 12 北インド・ネパール
02 日経アーキテクチュア「いんたびゅー．商業空間を実在感のある都市環境に引き戻したい」 05 新建築　押野見邦英「〈住宅貧乏物語〉と〈幻影都市のトポロジー〉の間を」 08 新建築　宮脇檀「人間のための住宅のディティール＝32 "揃える" 納まり」	02 Baumeister―ローズガーデン・北野アレイ 05 ME (Magyar Epitömüvésyet in Hungary) ――富島邸，立見邸，住吉の長屋，帝塚山の家，石原邸，堀内邸，帝塚山タワープラザ，岡本ハウジングプロジェクト 11 A.I.A. Journal――住吉の長屋 12 AA――石原邸，堀内邸 Decorative Art & Modern Interiors――住吉の長屋	11 東欧
01 店舗と建築　東孝光「要素の自立性」 02 新建築　高口恭行「生活空間とコンクリート芸術の融合をめざして」 04 日経アーキテクチュア「琴平宮の階段テーマに個性ある空間作り」 10 芸術新潮　時の人「現代の町家を造る」 10 日経アーキテクチュア「エゴに占領されない論理」	05 PA (Progressive Architecture) ――石原邸，堀内邸 09 AA――STEP domus 603――石原邸 Decorative Art & Modern Interiors――石原邸 Chicago Tribune Tower Competition Late Entries Vol. II (Catalogue)	06 U.S.A. 11 北アフリカ，ヨーロッパ
06 SD特集＝安藤忠雄　二川幸夫「時代の透き間から」 竹山聖「厳格なる形式の内に宿るやさしきたおやかなものたちの世界」	The New Japanese House by Chris Fawcett――芝田邸，双生観，領壁の家，住吉の長屋，帝塚山の家，堀内邸，石原邸．	



安藤忠雄　1981年　小篠邸にて

パリの魅力

堂本尚郎

8101 [1] 生活のリズム　高階秀爾
8102 [2] パリという町　小宮山昭
8103 [3] 私にとってのパリ　遠山一行
8104 [4] パリの朝と夜　大久保喬樹
8105 [5] ル・コルビュジエがポンピドー・センターを見たとしたら……　進来廉
8106 [6] パリの魅力　堂本尚郎

PARIS Serial Essay [6]

先達て，ふとした事から，ツァイト・フォトサロンの石原悦郎氏からブラッサイの《グラフィティ》という本を借りる事が出来た．　これは，ブラッサイが写したパリ市中の落書きの写真の特集であるが，以前から探して居た本であり，これを東京で見る事が出来た事は思い掛けぬ嬉しい事であった．

勿論写真の美しさ，面白さは云うまでもないが，興味深いのはブラッサイとピカソの対談である．　ピカソも，街中にある落書きの面白さを絶讃して居り，その中で，パリの落書きは，スペインやイタリーのそれとは内容が異なり，それ等からにじみ出て来るものの実に多い事を指摘している．　ピカソ自身，壁に削られた落書き（デッサン）から多くのものを学んだと云っている．　そこで，ブラッサイは，いたずら書きをする悪童から大人の芸術家を含めて，彼等を内容豊かに育むのがパリという街であり，此の街故にハッとさせられる様な面白い落書きを，探せば探す程に次々と見付ける事が出来るのだと結んでいる．　ちなみに，現在の東京には，落書きが殆んど見当らなくなった．　街のクリーン化が徹したのか，或いは住民がすっかりスポイルされて訴える事も少なくなって了ったのか．

此の深い魅力を持つパリという都なるものは，過去数世紀に亙り個々の存在が，人間らしい在り方を大切に，或いは抗議し主張して来たパリジャン達によって，それぞれの時代に創り，守られて来た．　その姿勢が，今日もそのまま続いて生きていると思う．　あらゆる職業，或いは貧富を問わず，心あるパリジャン達の自負心と責任感に似た情念無しには，今日のパリは有り得なかったと思われる．　そして自己の存在を主張し表現する行為が，子供の世界では，メニュールモンタンやモンコルトル，更に街中の隅々の壁にグラフィティーと云う形できざみ込まれたのである．　グラフィティーは，コミュニケーションのひとつの手段である事は云うまでもないが，自己意識の特に強いパリジャン達は，あらゆる場所に存在価値を定着させようと努力して居る．　私が，アパートを買って，或る部屋の壁紙をはがしてゆくと，19世紀末に建てられた建物の歴史を物語る如く，何と10枚に近い壁紙が重ねられて居たが，建築された折の，最初の壁地の隅に，塗った職人のものと思われるサインと日付が出て来てびっくりした事がある．

そして，街を歩くと，どんなに小さな通りでも大きな通りでも，先づ，それは，物理的に美学的に，人間が歩く為に出来ているという事をひしひしと感じさせられる．　そこには味があって，遠い道程（みちのり）も知らず知らずつい歩いて了うし，歩く喜びがある．　そして出合う広場も小さく大きく，それぞれ趣を異にして居り，広場としての空間だけではなく，やはり人の為の空間というただずまいを感じさせて美しい．

そして，美しい都市空間の底を流れるヒューマニティは，パリジャン達の為だけに止まらず，あらゆる国の人々を惹きつける．　数世紀来，どれだけの外国人がパリの滋養に癒され，育まれた事か．　あらゆる種類の生き方をする人それぞれが，或る者はパリでその実を結び，又或る者は自国に帰ってその実を結んだ．　今日，ピカソをスペイン人と知り乍ら，彼をスペインの画家と見る人は少ない．　スペインから飛んで来た種が，パリの土壌に育ち，花を咲かせ実を結び，フランスの宝となったのである．　又，そうして，国々から人が集まって来る事によって，そこに居ると，巾広く内容豊かな貴重な出合いを恵まれるのであり，異った素質の出合いは益々パリの文化を豊かにぶ厚くしてゆくといった具合となる．

戦後，永い耐久生活から解放された爆発的自由の渦が渾沌と巻く中で台頭した文学，芸術における前衛活動は，大輪の牡丹の花が咲き匂う様に人々を酔わせ息吹いた．　此の風は全ヨーロッパを吹きまくり，そしてパリは文字通り，その中心であった．　今でもパリの人達は，その頃を懐しがって〈ベル・エポック〉ともじって呼んで居る位だ．　しかし，その後，その盛り上がった波は低く沈み，芸術の中心は，アメリカの大きなエネルギーに引き寄せられ，大西洋を越えて盛り上がった．　パリを訪れる度に，往時を知る私には，淋しさが先づ胸を憑いた．

しかし，今，パリに，ポンピドー文化センターなるものが出現したのである．　厳しい国際情勢，経済危機の中で，10年間の準備期間を突破して此の巨大な大文化センターを建てる事は，重税に苦しむパリ住民にとっては，まさに気違い沙汰の一言に尽きた．　その上，段々と出来てくる建造物といえば，これ迄の都市空間に，どうやってみてもおさまりそうも無い異様なものであったから，激怒したものであるが，4年前に完成して以来此の文化センターの持つ意味と力に，人々は喜ぶのみ，出来てみて解ったのである．

此の出現によって，一旦，大西洋を越えた波は再びパリに戻りつつあり，その上に，これ迄，文化に縁の遠かった人々を，広い範囲に亙って文化に結び付けてゆく道をつけたのである．私には，此の得体の知れぬエネルギーを放つ文化センターが，赤い紙に包まれた頓服の様に見える．　実に天才的である．

過去の遺産を唯々大切にするという古典感覚だけではなく，過去を前衛につなげて生きて居る事が，素晴らしい事なのである．　国でも都市でも，新しく出来る時，そこにある新鮮なエネルギーは可能性を持ち，魅力的であるが，むしろ必然である．しかし，古きに繋いで新鮮なエネルギーを持たんとする事は，並大抵の事ではなく，それでこそ，世界の文化の中心を自負する事が出来るというものである．　今後とも，此の文化センターの持つエネルギーを，存分に伸ばし，前衛の命，冒険の火を燃やし続けて欲しいと祈るのみである．

昨年，ユネスコから「平和」というテーマでポスター製作を依頼され，先づオリジナルとするリトグラフを作るべく，1ヶ月程パリのアルテ工房で仕事をしたが，その折，職人達の働き振りにちょっと驚いた．　一般に，フランス人は，なまけ者というかあまりあくせく働かないといった印象があるが，それは少し違う様に思う．　有給休暇の多いのは別として，朝の8時には全員揃って仕事を始めて居る．　自分の仕事にプライドを持ち，私の仕事に参加する事を，心から喜んでくれ，従って，止むなく毎朝7時半に家を出て通勤するという，私にしては厳しい毎日であった．

最近のパリは，私が暮して居た10年前とは，色々の面で違って来て居る．　年を取って了った親しい友人に会った時の様な物悲しさは歪められない．　何となく労る様な気持ちで歩く道すがら，或る朝ふと，建築中の工事現場の塀の隙間から，盛り上げられた土砂の脇に，古靴が捨てられているのを，何気なく見て過した．　昼時，同じ道を通ると，朝，投げ捨ててあった靴が，砂山の裾に爪先を上にして，あたかも砂の中に人が寝ているかの様に両足共につき差してあるので，面白いいたずらだなと思った．　夕方，再び同じ道を通ると，砂山の中程に今度は枯れた花が置いてある．　誰かが捨てた花に違いない．翌朝，私は意識して塀をのぞいてみると，砂山の頭に木の端切れで十字架を作って立ててあった．　葬送行進曲が聞こえて来る感じだ．　夕方，その砂山は工事に使われたらしく，影も形も無くなって了った．　しかし，此の何でもない小さな遊びに，私は何かホッとして慰められ，パリは生きて居るなと思った．

フランスは，地図で国々の色が違う通りに国内の土壌が肥沃になっている．　車で走っていても国境を越えると木々の繁り方が違って来るのがはっきり解る位だ．　これは，全く羨ましいの一言に尽きるが，又，その為に，それを守る苦労の並大抵ではなかった事は，ヨーロッパの歴史からうかがえる．　しかし，パリという都の持つ魅力は，人間の手で，時間をかけて育み築き上げて行ったものであるから，唯々羨ましいとだけ云うわけにはゆかない．　偉いなと思う．

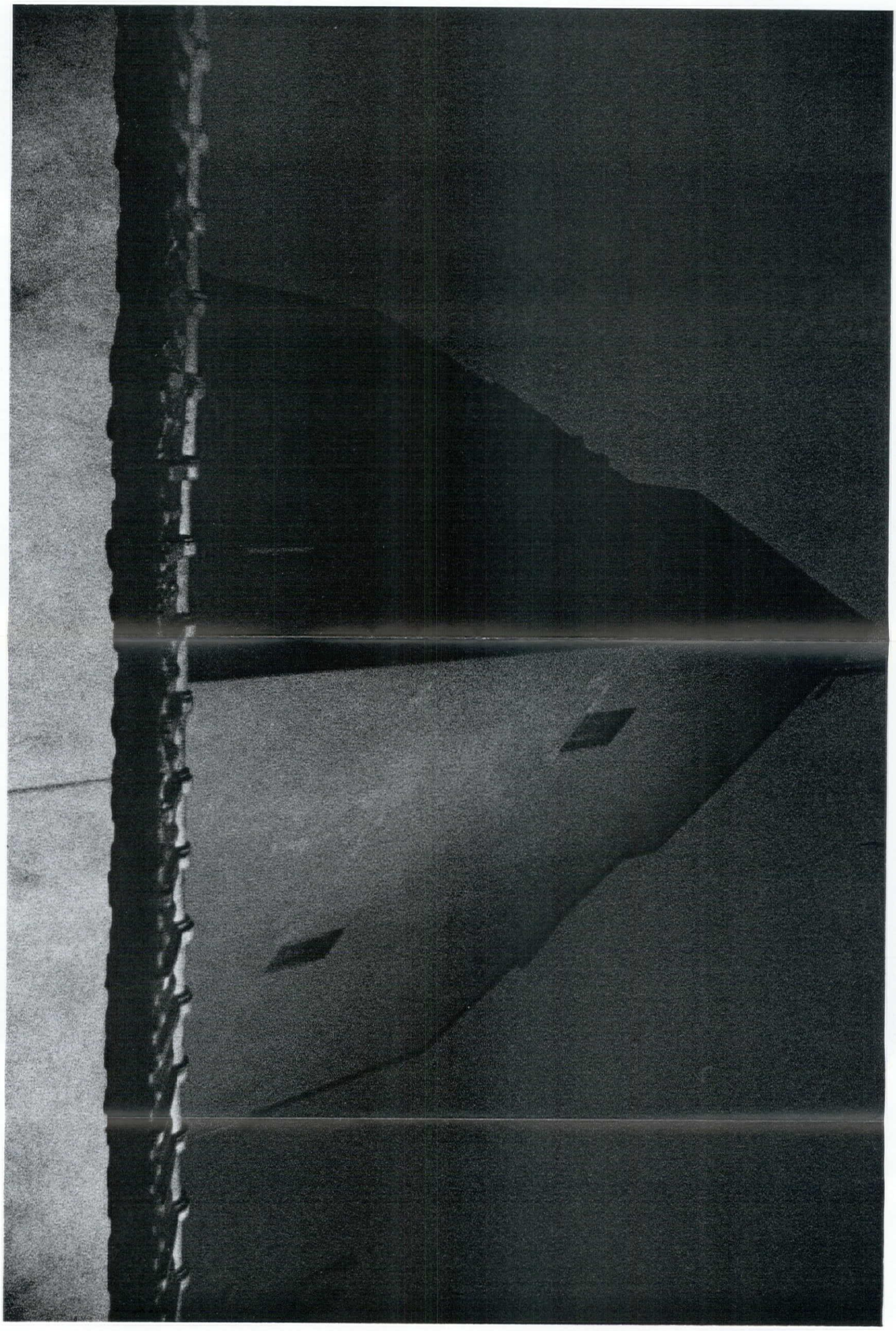
といった様な事を，1955年来約15年間暮して来て，私は思うのである．

一言して「ヒューマニティ」，その人間の中には，理想と現実の相反した二面があるが，それ等を渾然と，しかも可成裸のまま織り込んだ，その生きる姿勢の中で過したパリ生活は，大きな世界を私に開いてくれたと思う．

●どうもと・ひさお／画家

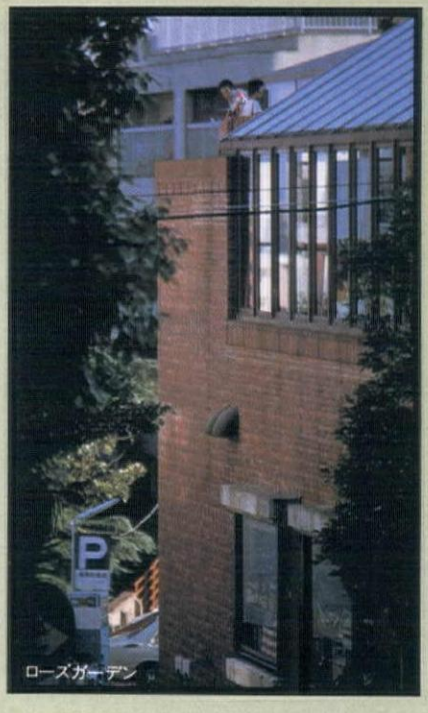
写真=田原桂一

Serial Photo 6 **PARIS**



れんが

ながい歳月
れんがを愛し慈しんだ
ひとびとの心が
建物に
なじみ深い表情を
あたえる。
素材のよさを生かし
隅々にまで
つくる人、つかう人の
思いが込められた
建物は
世代から世代へと
たのしい心象風景を刻み
街の大きなストックと
なるだろう。



ローズガーデン

PS特殊レンガ●PSシャモットタイル

kunishiro PS

国代耐火工業所

本社●〒489瀬戸市上本町305 Tel.[0561]48-1122大代表
東京●Tel.[03]437-2233　大阪●Tel.[06]245-5184
福岡●Tel.[092]471-1201　仙台●Tel.[0222]23-8263



リングもまた、生命ある輝きか。

指先をはなれると、
リングは表情のない美しさに帰る。
同じ香水が人によって香りを変えるように。

●東京＝銀座・4丁目 TEL(03)535-4611 帝国ホテル TEL(03)591-5001 ホテルオークラ TEL(03)584-4664 ●名古屋＝栄・中日ビル2F TEL(052)261-1808 ●京都＝河原町・BALビル4F TEL(075)241-2970
●大阪＝梅田・新阪急ビル1F TEL(06)341-0247 ●神戸＝神戸国際会館 TEL(078)221-0062 ●ニューヨーク＝608 5th Ave., New York N.Y. 10020 TEL(212)586-7153 ●この他全国有名デパート・専門店で取扱っています。●メールオーダーのご用命も承ります。

株式会社ミキモト ©1981-2

■お知らせ

1981年春期 文化学院　土曜公開講義

文化学院建築科では，昨年秋に開催された1980年秋期土曜公開講義〈折衷主義建築〉にひきつづいて，1981年春期土曜公開講義を〈バロック建築の研究〉というテーマで行なうことに決定した．　このたび，そのプログラムが下記の通り発表された．

1981年春期　文化学院建築科主催　土曜公開講義

テーマ：〈バロック建築の研究〉

・6月13日(土)　湯沢正信
〈イタリア盛期バロック〉

・6月20日(土)　川向正人
〈バロックの都市空間〉

・6月27日(土)　伊藤哲夫
〈北方バロック建築とラウム・プラン〉

・7月4日(土)　横山正
〈バロックの建築家像，ボロミーニを中心として〉

・7月11日(土)　藤井博巳
〈変形としてのバロック建築〉

会場：文化学院・320号教室
国電御茶の水駅下車3分　マロニエ通り

時間：午後2：40～4：10

定員：100名（先着順）　**聴講料**：無料

問合せ・連絡先：文化学院建築科（担当：荒井勝祥）
東京都千代田区神田駿河台2―5，Tel. 03-291-2274

デザインギャラリー展

●デザイナーと企業シリーズ21
遠藤享とオーディオテクニカ
会期：5月22日～6月3日

●五十嵐威暢とアルファベットアート
会期：6月5日～6月17日

●日本古典芸能ポスター展
会期：7月17日～8月5日

●吉阪隆正の世界
会期：8月7日～8月19日

●デザイナーと企業シリーズ22
喜多俊之とカッシーナ
会期：8月21日～9月9日

●デザイナーと企業シリーズ23
永井一正と培風館
会期：9月11日～9月30日

●セルジオ・アスティー展
会期：10月2日～10月14日

●黒川哲郎　個展
会期：10月16日～10月28日

●デザイナーと企業シリーズ24
勝井三雄と全音
会期：10月30日～11月18日

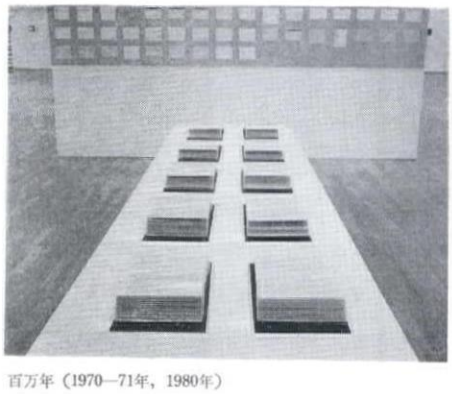
会場：東京　松屋銀座7Fデザインギャラリー
主催：日本デザインコミッティー　Tel. 03-561-2572

「河原温　連続／非連続1963～1979」展

河原温(1933～)は，現在ニューヨークに住むコンセプチュアル・アート（観念芸術）の代表的作家の一人である．　この展覧会は，1963年から1979年までに制作された河原温の作品108点を紹介するものである．　また，会期中に展覧会会場内で座談会「河原温をめぐって」が行なわれる予定である．

●展覧会
会期：1981年5月17日(日)～6月16日(火)
10：00～17：00(入館は16：30まで)
休館日：水曜日
会場：国立国際美術館
〒565　大阪府吹田市山田小川41―1（万博公園内）
Tel. 06-876-2481
観覧料：大人250円，大学・高校生80円，中・小学生50円

●座談会「河原温をめぐって」
日時：5月30日(土)午後2：00～
会場：国立国際美術館
出席者：杉浦康平（グラフィックデザイナー）
奈良原一高（写真家）
峯村敏明（美術評論家）



百万年（1970―71年，1980年）

イメージの世界の建築　黒川紀章木版画展――木版と現代Ⅱ

黒川紀章の作品のスケッチ，図面をモチーフとして制作した木版画21点と，設計活動20年をふりかえって主な作品の写真パネル，模型等が展示される．

会期：6月11日～6月28日
会場：(財)リッカー美術館

立木三朗作品展

会期：6月19日(金)～7月4日(土)
午前11：00～午後6：00　日曜祭日休館
会場：フォト・ギャラリー・インターナショナル
東京都港区虎ノ門2-5-18　Tel. 03-501-9123

ラフトーン
メタル
特許・実用新案出願済



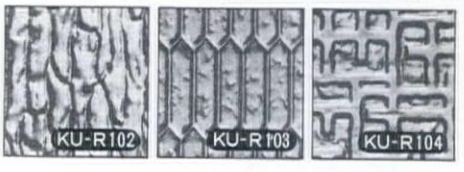


●菊川工業の新製品です●キャストのテクスチャーをパネル成形した高性能な製品です●カーテンウォール　壁パネル　柱型等の新築改修に多く使われております●Rシリーズ　Eシリーズ　Pシリーズがあり　あらゆる用途にお応えできます●低価格(キャスト比½)　軽量化(キャスト比¼)を実現させ高品質　高性能が実績により認められました●取付が容易で作業性に優れています●アルミ　ブロンズ　ステンレスが可能です●仕上は自然発色　塗装　硫化イブシ　HL　鏡面等自由です●板厚は0.8～2.0㎜まで可能です●テクスチャーの特注にも応じられます

ラフトーン メタルP



ラフトーン メタルR



キクカワ
菊川工業株式会社
本　社●東京都墨田区菊川2―18―10　☎03(634)3231(代)　〒130
大阪営業所●大阪市西区靱本町2-7-4 シズカビル　☎06(443)2870　〒550
九州営業所●福岡市中央区舞鶴1-9-15 倉和ビル　☎092(741)8814　〒810

効率管理でビルを支える
日新の"ビルメイト"。



ビル総合管理システム
BUILMATE

重電からエレクトロニクスまで
日新電機
●本社＝京都市右京区梅津高畝町47　〒615
●支社＝東京・名古屋・大阪・九州

書評

西洋家具集成

鍵和田務＝編集・執筆
257ミリ×367ミリ　234頁
講談社　3200円

絢爛にして精緻な
ヨーロッパ家具の展望

西洋家具と住生活のつながり

先進国では唯一といってもいい「床座式」の生活を続けてきた日本人も，いつしか「椅子座式」の生活を主流とするようになった．　明治以降のわが国では，新しい道具や装置の使用はつねに，社会的公的な場において優先されてきた．　家具，とくに椅子の場合には，学校やオフィスや乗り物のなかで，さまざまな生活の型を生み出し，やがてそれが住居に適するように作りかえられたうえで，住生活のなかにはいっていったのである．

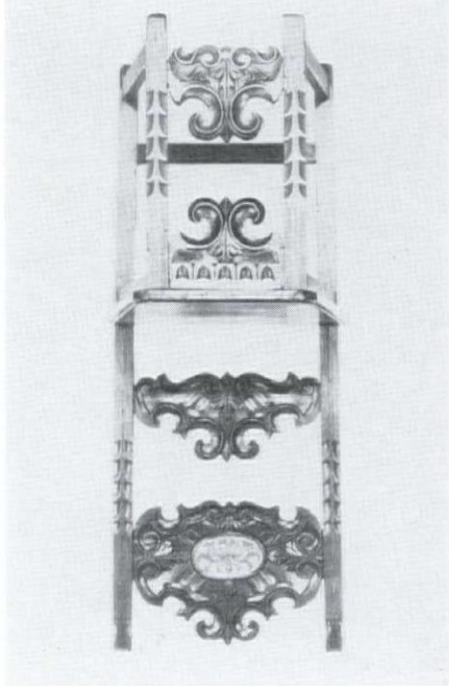
欧米の生活のなかの家具は，住居のなかで発展した．　たとえば，デイベッド型のソファは，その寸法を変えて馬車のなかに押し込まれたし，20世紀のはじめにつくられた豪華客船内では，バロック，ロココ以来のありとあらゆる様式を凝らしたものが置かれていった．　もちろん20世紀も後半になると，チャールズ・イームズのデザインした椅子の数々のように，まずはじめにオフィスで使われ，やがて現代風の住宅のなかにはいってくるということもあるのだが，西洋家具の歴史の主な部分は，それぞれの時代の支配者たちやそれに続く上流階級が，住居の延長としての社交生活の空間で展開させていったものが，やがて劇場やホテルに新たな場所をみつけだしたのだった．

美術史からの家具の展望

家具には，その価値評価をする軸によってさまざまな局面があることはいうまでもない．　たとえば椅子を例にするならば，まず実用的機能の側面すなわち，使い易く掛け心地よく長持ちするものがよいということである．　美的側面には，全体のバランスのよさ，素材の生かし方という形態から細部の工芸的処理，概して装飾的な細工にいたるものが含まれている．　そしてもうひとつ見落していけないのは，椅子のもっている「座」としてのステイタス・シンボル性である．　王（ファラオ）の椅子，神官の椅子，司祭の



イタリア・ルネッサンス時代の聖歌隊用椅子



イタリア17世紀の椅子　ウォールナット材

書評＝

三輪正弘

椅子，新しい時代においては，企業のエクゼクティヴの椅子，というようにである．

この書物は，家具（やはり主流は椅子である）の歴史を，できる限り実感をもって識るのにふさわしく，そのほとんどの写真がカラーで，しかもディテールが拡大されたものが多いので，いままで概念的にしか受けとめていなかった「家具」が，強い印象をもって身近に迫るといった趣きである．

1922年ツタンカーメンの墳墓より出土した古代エジプト家具の数々を中心にした第1章〈古代オリエント〉，ギリシアとローマの第2章〈古代地中海沿岸〉，ビザンチンの資料も含む第3章〈ロマネスク・ゴチック〉，第4章〈ルネッサンス〉，第5章〈バロック〉，フランス宮廷意匠の粋を生んだ第6章〈ロココ〉には，イギリスのクィーン・アンやジョージアンのものから，アメリカのコロニアル様式に受け継がれたものが含まれていて興味深い．　ついで第7章〈ネオ・クラシック〉，第8章〈ビクトリア時代と美術工芸運動〉では，ロンドンの万国博からモリスの工芸運動，そして古きよき時代と新しい産業化の時代をつなぐ大きな役割を果たしたトーネットの仕事が示され，第9章〈アール・ヌーヴォーとアール・デコ〉では，グラスゴー派のマッキントッシュやウィーン派のホフマンのすぐれた作品が中心であり，第10章〈20世紀〉で，現代家具の概観，という流れで全体が構成されている．

著者鍵和田務氏は，京大哲学科の美学美術史を専攻して以来，ヨーロッパ美術史のなかから，しだいに室内の様式，そしてとくに「家具」の歴史にふみ込んでいったひとである．

この本はしたがって，氏の研究のいわば集大成ともいうべきもので，その広範な収集の対象は数多くまた多彩である．　なかでも，エジプトそしてバロックとロココのあたりに熱い視線が注がれて，それに続く圧倒的に豊富なアンピールをはじめとするネオ・クラシックの家具に，脈々とつながっていく．　その近代以前に至るヨーロッパの家具の歴史が，部厚く堂々と目の前に拡げられる．　そうして，アール・ヌーヴォーからアール・デコ，そして今世紀のモダニズムへの転換の，はげしくまた自由な活力にも触れる．　だが，長い家具史をみても，ヨーロッパの歴史において近代はその一部であるに過ぎないことを実感する．

美術史家としての家具の見方は，おそらくまえにあげた，〈有用性〉〈造形性〉〈工芸的技巧〉〈素材性〉〈ステイタス・シンボル性〉などとかかわりながらも，やはり，〈様式〉の流れに注目していかざるを得ない．　しかしながら，その様式がもともとは，建築と室内意匠と不可分につながり，おそらく一体的に展開されてきたことが，ヨーロッパの特質であったのだから，〈家具〉だけの抽出におわらずに，その周辺に光を当ててほしかった，というのが忌憚のない見解である．　しかし，それでなくても膨大な資料を，限られた頁が受け容れはしないだろう．著者のもうひとつの労作として，家具→室内→建築の様式，といった内容のものの公刊をあらためて期待したいのである．

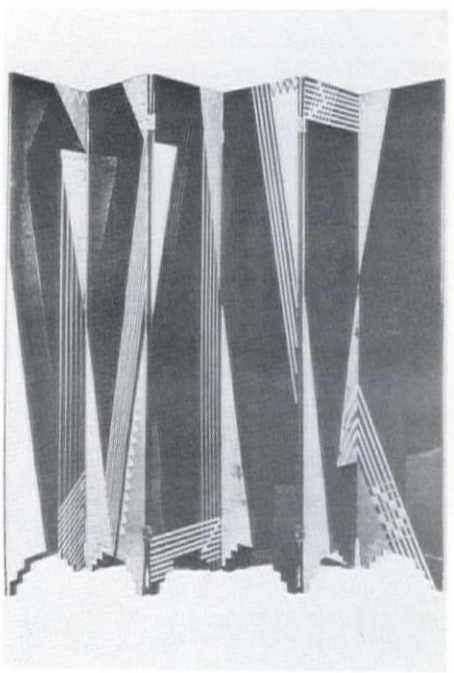
●みわ・まさひろ／建築家，武蔵野美術大学教授



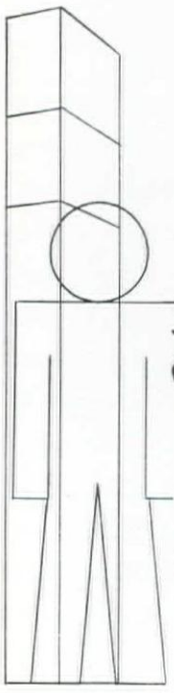
エドワード・ウィリアム・ゴッドウィン作　アングロ・ジャパニーズ様式の飾り棚　1862



エミール・ガレ作　飾り棚



ジャン・デュナン作　アール・デコ様式の塀風



からだのしくみは
「骨格と筋肉」だけでは
ありません。

神経もあれば、血管もあり、あらゆるものが総合的に働いてこそ、一個の生体としての機能が発揮できるのではないでしょうか。
ビルや建造物の場合も、これと全く同じことで、鉄骨やセメント、石材、の組合せだけでは、外見上如何に立派でも、それは単なる物体の集合です。やはり神経や血管と同じく、電気、水道、ガス、空気調和などがその機能を充分発揮できてこそ、素晴しい**居住性**が生れると思います。
しかし……
それだけで終ったのでは、まだ多くの欠かんが残っております。ところがこれ等の機能を更に無駄や損失のないよう活用できたとしたら、もっと素晴しいことではありませんか。
集中管理或は**集中制御**によって……
省力、省エネルギー、省経費をはかることこそ、最も完ぺきな、からだのしくみ、つまりビル全体の機能を**フル**に発揮できるのではないでしょうか。

集中管理装置
NESCA

川崎電気株式会社

本　社　〒999-23 山形県南陽市小岩沢225番地
電話0238(49)2011大代表
営業本部　〒108 東京都港区芝浦3丁目7番4号
電話03(454)5141大代表

書評

パウル・クレー
無限の造形

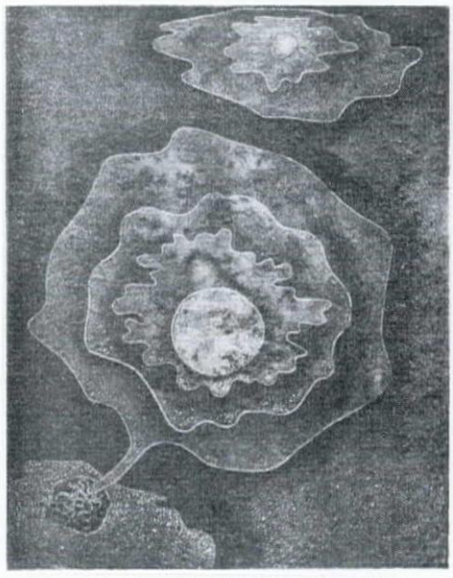
ユルグ・シュピラー＝編
南原実＝訳
210ミリ×165ミリ　540頁（上下2冊）
新潮社　18000円

ヴァイオリンを弾き〈見えないものを見えるようにした〉クレーの創造の秘密

本書はユルグ・シュピラー Jürg Spiller 編による Paul Klee "Unedliche Naturgeschichte" 1970 の翻訳である．　英語版は "The nature of nature" として1973年に出版されている．最初のドイツ語版が出版されてから11年間という長い年月が経過しており，わが国のクレー・ファンにとっては待望の邦訳である．　本書の姉妹篇である《造形思考：Das bildnerische Denken》（ドイツ語オリジナル版：1956年出版，邦訳版：1973年出版　新潮社）と同様に，その翻訳作業の労力は大変なものであったに相違ない．

内容は，まず，クレーがこの《無限の造形》を書いた背景を，残されたクレーのノートブックを整理しながら，クレーの肖像写真やアトリエの写真，スケッチや絵画を引用して編者ユルグ・シュピラーが解説している．　たとえばアトリエの写真などでは，クレーが左手（クレーはギッチョだ!!）に絵筆を持ち首をかしげてキャンバスを睨みながら制作しているところや，同じような図柄の絵が何枚もアトリエの壁に所せましとぶらさげてあるところなど，共通の立場の読者にとっては興味をひかれるところであろう．　その後に，〈原理的な秩序：もしくは造形手段の秩序づけの原理的方法，ならびに構図の構成的な方法〉を主題とした，1923年10月から1924年1月まで（日付のないものもある）のバウハウスでの講義草稿と演習問題が続き，この本の中心となっている．

それは原題が示すようにクレーの才覚の内にある〈無限の自然史〉＝自然の中で観察された生成流転の関係を，無限に，クレーによる感覚とクレーによる科学的思考によって展開している．　それにしても，なぜ，クレーの脳裡は，手は，感覚は，こうもわれわれ尋常の人とは違うのだろう．　常人では想像もできない言葉の配列は，あるいは，発想の展開の仕方は，何かル・コルビュジエの言葉の配列を想起させる．それらは各々の内容は違うけれども，ボンボンと飛んで進んで行くような感覚的な文章構造が，クレーとコルビュジエ，二人の描く造形の新しさ，異形さと共に共通しているのである．　また，この二人の言葉と造形は幾通りにも解釈でき，幾通りにも想像できる．　そして，さらに，幾通りにもそのリースを感じさせ，幾通りにも発展させるのである．　もしこの二人が，あれほど偉大な情熱を持って，あれほど世界中を驚嘆させ，感動させる建築や絵画を，そしてあれほど不思議で美しい芸術を，あれほど沢山作らなかったならば，彼等の文章や言葉はどう理解されるであろうか．　天才は常に凡人を裏切るとしか言いようがないが，これら二人の著したどのような本を読んだり見たりしていても，頁をめくる度ごとではないにしても，いざと言う時にはたいてい，その言葉も形も私の予想を裏切る．　そこには決められた秩序や法則というものがないのだ．　もしそれが存在していると



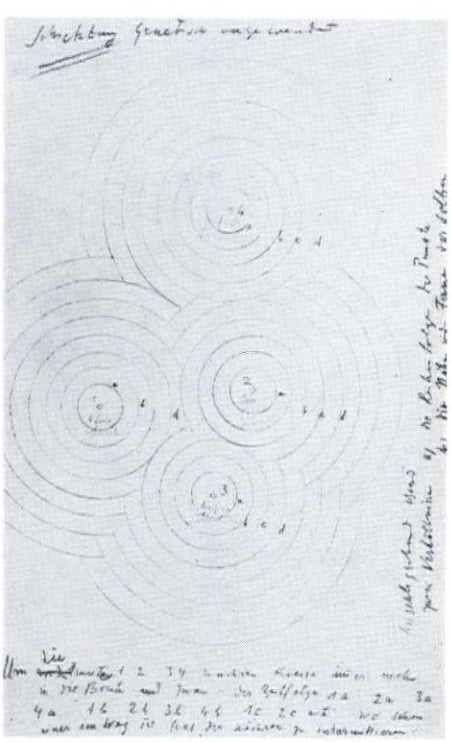
〈植物的―不思議な〉　水彩　33×25.6cm　1929／3H17

評者＝
羽原肅郎

しても，それを破ることで新しい形を，新しい発見を，素晴らしい感動を彼等は求めたに相違ない．

クレーは，確かに，絶えず造形の方法とその可能性を追求し，思索と実験を理論的に展開させようとした．　しかし，今，われわれに感じられることは，論理的な思考というよりも，クレーの魂の美的直観を感じてしまうのである．クレーの観察は，クレーだけの主観に満ちあふれた独自の哲学であり科学ではなかろうか．私はその作品の中に現われるモチーフに常に両義性を感じている一人だ．　自然界の対象物のディフォルメと，対象物から離れてクレー自身の色彩とフォルムという両義を，ひとつの造形物の中に同時に対等に対立させて調和させている．　これがクレーの作品を一層裕福なものにし，万人を魅了しているのだろう．　本書はこのような造形物の生成の過程の一端を見せてくれると言っても良いであろう．　たとえば……

重層の発生的応用例



スケッチ　重層の発生的応用例　16／148

点１２３４を中心として
生長する円
次から次へとひろがっていく，
しかも次の時間的順序で
1a 2a 3a 4a
1b 2b 3b 4b
1c 2c…….
ひろがっていく円は，先に描かれた
円に食い込む
この際決定的な因子は
次の二つ
a 点の順序
b 点相互間の距離
16／148

という叙述と図版によってである．　これだけの抜き書きを読む人々には，幾何学の一過程のようであるが，見方，読み方によれば，この中にいろいろの可能性が含まれているのである．全体を通して共通して感じることは，空間の中の時間と運動の関係であり，造形における発生の原理を自然物の発生のように捉えようとしていることである．

音楽家を両親にもったクレー，詩的な画家クレー，マチスを尊敬していたと伝えられるクレー，幻想画家クレー，抽象画家クレー，ユーモラスな画題をつけるクレー，日記をつけるクレー，そして何よりもあの激動のバウハウスで約10年間を教師として芸術家として過ごしたクレーの魔術的な講義と制作の秘密がここには描かれている．

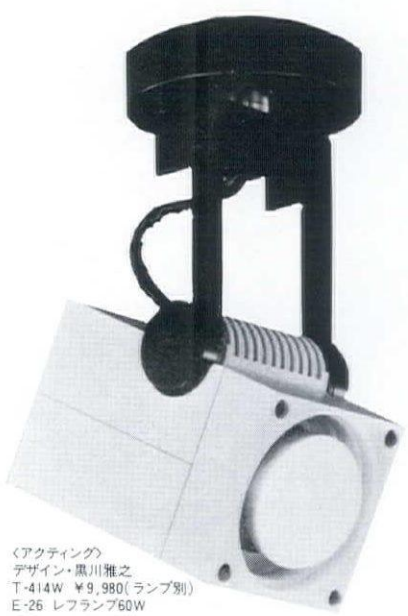
最後に，原書のサイズは22cm×21cm，１冊であるが，訳書は上下２冊になり，サイズも変わりやや小さくなって，装幀・レイアウトも鮮やかである．　しかし，サイズがやや小さくなったために，図版もやや小さくなっており，原書よりも図版の鮮明度がやや劣るところがあるのは，図版がひとつの生命となっている本であるだけに，少し残念である．

●はばら・しゅくろう／デザインエディター

if賞 if 受賞

世界のヤマギワは、
新たな精鋭を加えて歩み続けます。

《西独ハノーバーメッセ》世界各国から厳選された工業製品が出品される国際見本市。ヤマギワは12年連続出展。《IF賞(Die gute Industrie form)》はその中からデザイン、機能性ともにすぐれた製品に与えられる、いわば工業技術のアカデミー賞です。ヤマギワは過去20シリーズの受賞に輝き、今年度もまた一挙に6シリーズ、22点という快挙を成し遂げました。



〈アクティング〉
デザイン・黒川雅之
T-414W　¥9,980(ランプ別)
E-26　レフランプ60W

yamagiwa
ヤマギワ株式会社
本社　〒101 東京都千代田区外神田4丁目1番1号　TEL(03)253-2111(大代)
東京・大阪・名古屋・横浜・世田谷・千葉・札幌・福岡・神戸・高松・仙台
宇都宮・大宮・相模原・水戸・名古屋メルサ・金沢・青山・八王子・広島

空気の安定供給

——省エネ時代の空調を追求——

エネルギーが自由に入手でき、かつ低廉であった時代が過去のものとなった今、環境づくりも新しい局面を迎えています。**新日空**はこうした社会の要請を的確にとらえ、省エネルギー時代にふさわしい空調システムをお届けするために、総力をあげて取組んでおります。ご期待ください、**新日空**の80年代の環境づくりに。

省エネルギー技術に挑戦する
SNK 新日本空調

〒103 東京都中央区日本橋本石町4－2
（三井第二別館）☎03(279)5671(大代表)

■新刊紹介

アメリカの看板

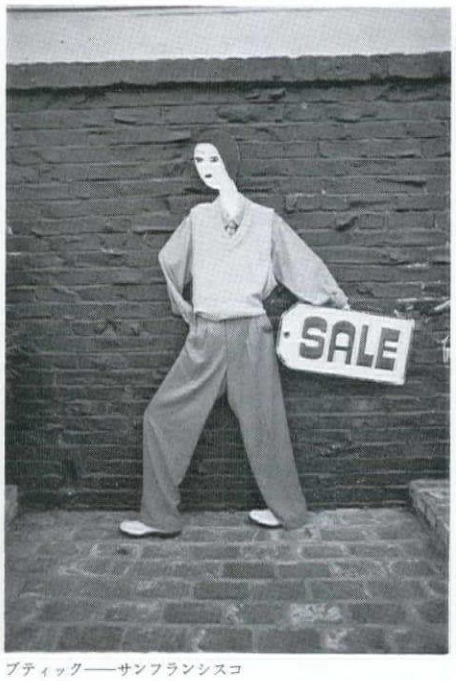
向田直幹＝著
東野芳明＝序文
A4判　168頁
美術出版社　5800円

ヨーロッパの看板

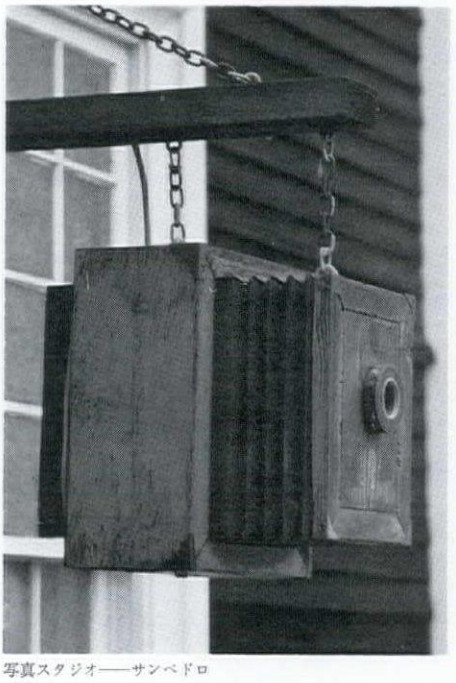
向田直幹＝著
中村誠＝序文
A4判　192頁
美術出版社　5800円

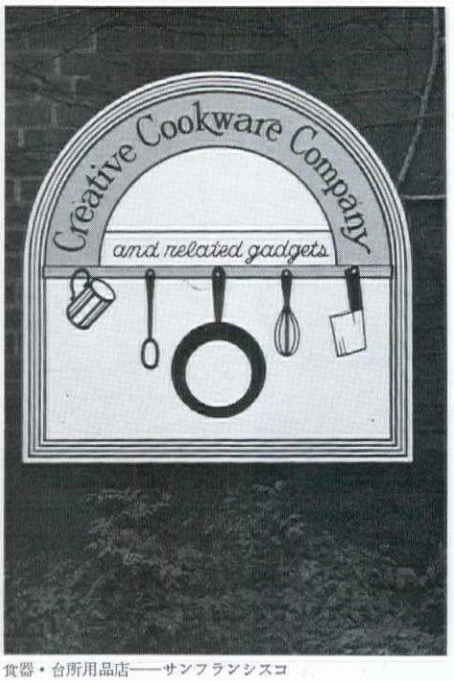
——外国を旅している時，特に古い歴史のある街で，石畳の細い路地など彷徨(さまよ)い歩いていて，ふと見上げた路地裏の居酒屋の軒先にかかげられた時代がかった看板に，なんともいえない旅情をそそられることがある．　……名もない看板屋の職人が，依頼主の要求をみたすべく努力工夫して作った，一枚の看板の背後にかくされた世界を想像し，看板一つ一つのもつ魅力にひかれ，いつの頃からか意識的に撮るようになった．——（《ヨーロッパの看板》より）

ここに紹介する2冊の写真《ヨーロッパの看板》，《アメリカの看板》は，看板をタイムトンネルの道標として17年余を漂泊に暮した著者が撮りためた美しい写真をまとめたものである．《ヨーロッパの看板》にはヨーロッパ主要11ヵ国の看板をカラー口絵80頁に収録しさらに各国

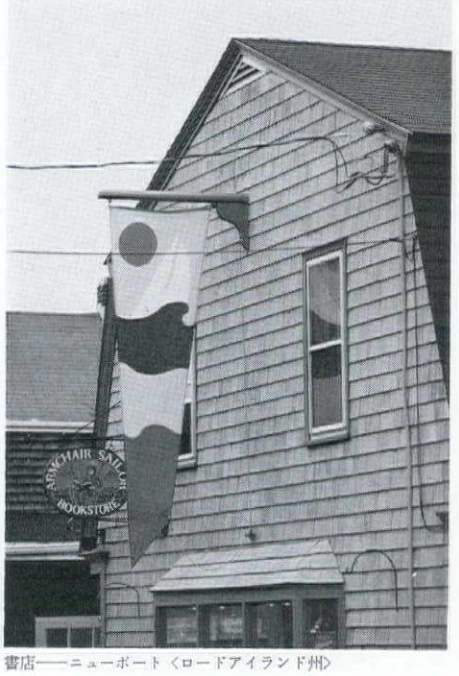


ブティック——サンフランシスコ


写真スタジオ——サンペドロ

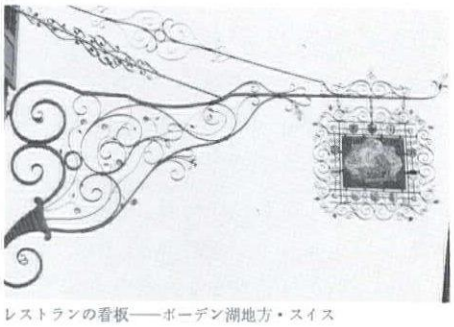


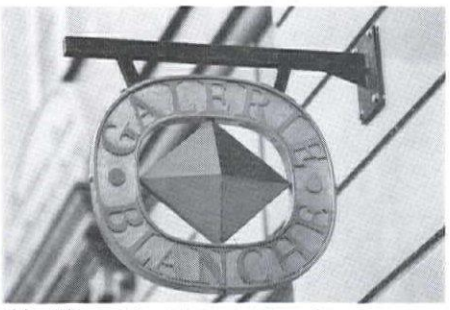
食器・台所用品店——サンフランシスコ


書店——ニューポート〈ロードアイランド州〉

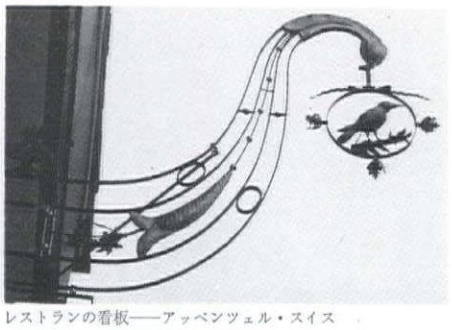
別の詳細な解説等が，また，姉妹編の《アメリカの看板》にはアメリカの特徴的な州，14州の看板をカラー口絵112頁に収録しさらに各地方別に詳細な解説等を加えている．

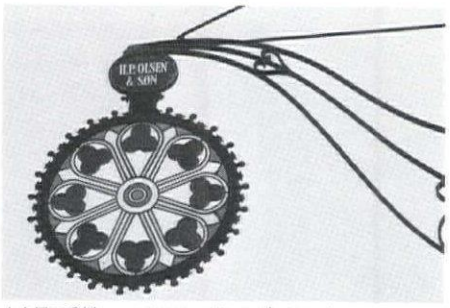
中世から綿々と受け継がれてきた最も古い商業美術の遺産ともいうべき，ヨーロッパの古い街並にとけこんだ詩情あふれる看板の数々，近代デザインの香りを漂わせるシンプルで気品あふれる看板類，ヨーロッパの趣味の良い伝統を受け継いだアメリカ・ニューイングランド地方の看板，素朴で即物的なアメリカ中西部の看板，ポップアート等との相互の影響が強くうかがえるアメリカ大都市の看板など，この2冊の写真集は，看板を通して著者が観察したヨーロッパ，アメリカ各地の風景のコラージュ集ともいうべきものであろう．


レストランの看板——ボーデン湖地方・スイス

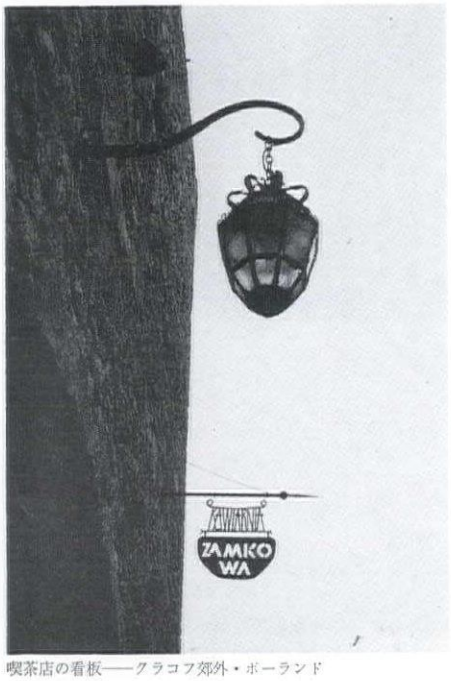


画廊の看板——ストックホルム・スウェーデン

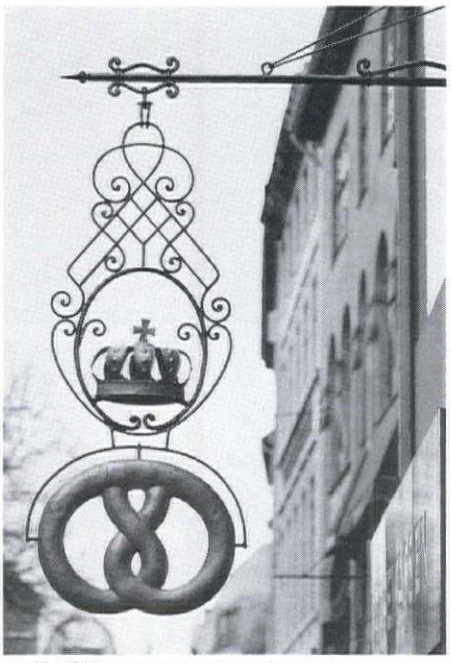

レストランの看板——アッペンツェル・スイス



古本屋の看板——コペンハーゲン・デンマーク



喫茶店の看板——クラコフ郊外・ポーランド


パン屋の看板——コペンハーゲン・デンマーク

商品は空気です。

熱と空気のエンジニア
株式会社
大気社

●営業種目
空気調和設備/給排水衛生設備/塗装設備
/公害防止関連設備の設計・製作・施工

本社・東京支店　東京都新宿区西新宿2-6-1
新宿住友ビル　☎03-344-1851(大代)
大阪支店 ——— ☎06-448-5851(代)
名古屋支店 ——— ☎052-211-1535(代)
九州支店 ——— ☎092-431-2147(代)



大成温調
工業株式会社

本　　社　東京都品川区大井1丁目47番1号
〒140 ☎03(774)1111(大代表)
大阪営業所　☎06(356)1281(代表)
東北営業所　☎0222(66)0245
横浜営業所　☎045(335)3622・2850
埼玉営業所　☎0486(43)1352
新潟営業所　☎0258(24)1157
出　張　所　青森・盛岡・甲府・沖縄

主要業務内容

●冷暖房空調設備工事／冷凍冷蔵設備工事の設計・施工請負
●設備／機器に関するコンサルタント業務
●設備装置の修理/整備/運転調整/保守点検
●日立冷凍空調機器の販売

■お知らせ

《遺稿　小能林宏城》

このたび，故小能林宏城氏の遺稿集《遺稿　小能林宏城》が刊行の運びとなった．　本書の内容は故人の遺稿のうち，執筆活動に専念した約20年間の後半10年分の遺稿から主要なものを選び編集したものである．
また本書には，これら遺稿と併せて，故人の師，大江宏，故人と親交のあった横山正，石山修武の３氏が今日の建築界のテーマから小能林宏城氏の活動の意味を回想した鼎談が収録されている．　本書は，遺された遺児の教育基金と遺稿集の刊行の資金として集められた募金によって作られたため市販はされていないが，なお若干の残部があるため，本書を希望の方は寄金（１口5000円）をそえて下記へ申し込み下さい．

《遺稿　小能林宏城》
小能林宏城＝著
A5判　220頁
小能林宏城遺稿集刊行会＝発行
申し込み先：小能林宏城遺稿集刊行会
〒184　東京都小金井市梶尾町３－７－２
法政大学工学部建築学科　大江宏研究室内

第１回神戸新進彫刻家の道大賞展公募

神戸市では昭和43年からビエンナーレ形式で都市空間のなかに新しい彫刻のあり方を追求する神戸須磨離宮公園現代彫刻展を開催してきた．　このたび近畿圏在住の新進彫刻家に発表の場を提供し，斯道の奨励をはかるために国鉄兵庫駅山側道路を「新進彫刻家の道」として整備し，これを契機として，新しく具象的野外彫刻を対象にした〈神戸新進彫刻家の道大賞展〉を，現代彫刻展と交互にビエンナーレ形式で開催することとなった．

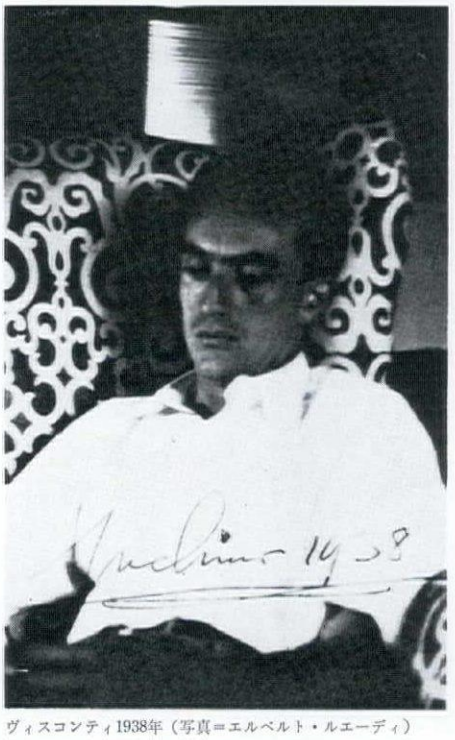
主催：神戸市，読売新聞大阪本社，読売テレビ放送
会期：昭和56年10月１日～11月10日（41日間）
展覧会会場：神戸ポートアイランド（中公園）
応募資格：出品者の国籍，経験は問わないが，神戸市出身者並びに近畿２府４県在住者
出品規定：(1)具象的野外彫刻で，1979年以降の制作による未発表のもの(2)資材は問わないが，耐久性があり危険でないもの(3)規格は，高さ２m以内
選考委員：本間正義（委員長），乾由明，弦田平八郎，増田洋，柳原義達
賞：大賞（神戸市長賞）　１点（副賞100万円）
　　神戸市教育委員会賞　１点（副賞80万円）
　　優秀賞　数点（副賞20万円）
搬入期日：昭和56年９月26日～９月27日(10時～16時)
選考日：昭和56年９月28日
発表：読売新聞紙上にておこなう
出品料：１点につき3000円
事務局：神戸市中央区加納町６－５－１　神戸市教育委員会事務局文化課内「神戸新造彫刻家の道大賞展」係

■新刊紹介

ヴィスコンティ フィルムアルバム

カテリーナ・ダミーコ・デ・カルヴァロ＝編
ミケランジェロ・アントニオーニ，寺山修司＝文
B5判変型 246頁
新書館　2800円

昨年秋より公開されて話題を呼んだ映画〈ルードウィヒ〉の監督，ヴィスコンティのフィルムアルバムが刊行された．
おきまりの映画写真集かと思いつつ，ページを繰ると，予想に反して，ひと味違ったフィルムアルバムであることに気づく．
ヴィスコンティは，壮大な歴史を背景にし，つねに家族の起源と崩壊を描き続け，撮ることで貴族という自らの血を解きあかそうとした人である．　このアルバムは，こうしたヴィスコンティの生涯を，あるいはまた作品を描きあげるべく，彼自身や家族の写真も含め，220枚の写真で構成されている．
本書は，1978年，彼の死の２年後，ミラノのソンゾーニョ社が出版したもので，「幼いころから監督に愛され，彼のすべての写真の保管を委ねられていた女性である．　ヴィスコンティのすべてを描くのに彼女ほどの適任者はいない．」という女性，ヴィスコンティの終生の協力者であったシナリオ・ライター，ズーゾ・チェッキ・ダミーコの娘カテリーナ・ダミーコ・デ・カルヴァロによって編集されたものである．



ヴィスコンティ1938年（写真＝エルベルト・ルエーディ）

語りの建築＝f(歴史，場所)

「発展のみならず，衰弱の弁証法というものもある．　そして，社会の崩壊という最大の危機は，大多数の人々にとって超克不能の挑戦に終わってしまうが，残りの人達からは最良の反応を惹起するかをその内にもっている．　人為的な代替物を当てがって流れを引きとどめることにも我慢のならない人達，しかもこの危機に面と向かう勇気と展望をもつ人達は，最も恵まれた社会的発展の場でよりもこのような状況の中でこそより大きな創造的行為を発揮することができる．」(《歴史の研究》アーノルド・トインビー)

近代建築の解体が叫ばれ，戦国の野武士達が馳け巡り，硬直した曖昧なポストモダニズムが引き廻される．　このような状況の中で，われわれはどのようにして創造の萌芽としてのデザイン行為の源泉を見いだすことができるのであろうか．　歴史がそれを示すものであるとすれば，今日の多様なジャンル，イズムを超えた作品群に横たわる共通項の内に，それを読みとることが可能であるかもしれない．　今月は，まず，多様化と呼ばれる作品群に流れる潮流を探ってみることにしよう．

歴史のもつ弁証性の枠を超えることなく建築の分野でも，今日的作品群は近代建築というテーゼに対するアンチテーゼをその出発点においている．

近代建築のパラダイム――その客観性，テクノロジーの表現といったまさに道具としての実用建築――は，その非人間性，あるいは，エリートのみへのコードに終始したため，われわれ人間にとっての表情を失い，存在を失い，透明な均質空間を幾度となく生産してきたことは，たびたび指摘されるところである．　それ故，単純化を恐れずに言えば，今日的建築のパラダイムの一端は，人間性への回帰，大衆的コードの構築といったヒューマンな眼差しと言えなくもないであろう．　換言すれば，その焦点は，われわれの日常生活における意識下の感受性に訴える建築，人間との対話を喚起するものとして，ある意味を発信する建築の創造と言えるのではないだろうか．　建築からなる環境，つまり都市は，そこに住む人々が単なる背景としてではなく，かれらが運転しつつ意味を生産するものであるというボードレールの言葉は，このような眼差しを通してジンテーゼへと道を開く大きな示唆を含んでいるように思われる．

建築を受け止め反応する源泉はわれわれ個人の感受性であり，それは歴史，場所のなかに培われてきた．　それ故に，今日的建築のパラダイムを実体化するためには，歴史，場所という函数は無視しえないものとして浮かび上がってくる．　このような仮定に立ち今日の作品群を眺める時，建築の諸相を歴史・場所のなかに追跡するいくつかの手法を挙げることができる．

第１に，ひとつのコミュニティーが長年にわたり深層において慣れ親しんできた枠組の範囲内で作品を展開していくもの．　たとえば，ノルウェーの木構造の銀行にみられるバナキュラーな手法，あるいは，ワッビング・スポーツセンターに意図されるように，地域に溶け込み親しまれてきた建築の親和性を建築と地域コミュニティーとの媒介として活用する方法などであり，場の経験から内在化された個人の空間意識にチャンネルが開かれることになる．

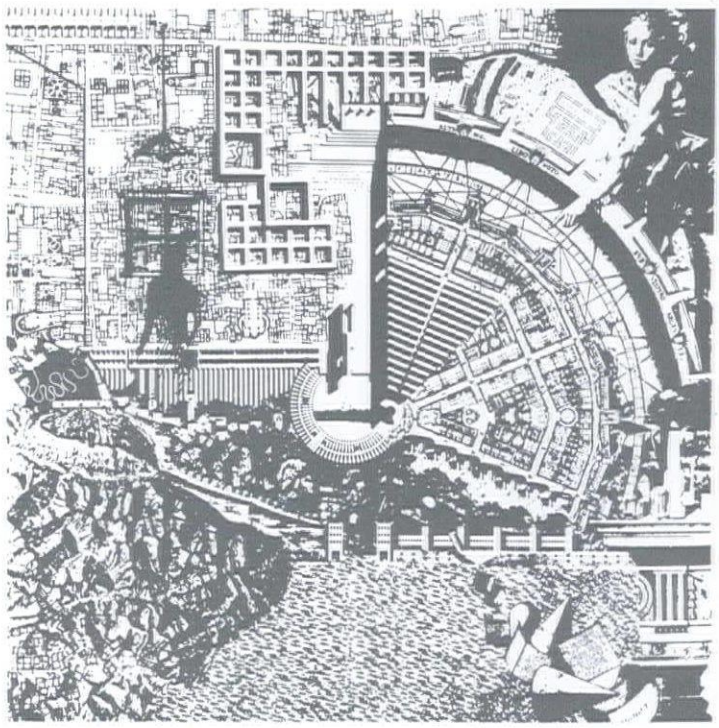
第２に，われわれの文化の広範な連続性をモーメントに歴史的記憶を表示的・暗示的に表現するもの．　これらの建築に連想的メタファーを介してさまざまなメッセージをわれわれに送り続けることができる．

第３に，歴史・場所のなかに自然発生的に生じた空間のもつ象徴性，主観性，調和性を再び実体化すること．　つまり，この方法は，コミュニティーの存在を受容し無限の豊かさを生みだすわれわれの〈場〉を創造する十分条件であり，ヒューマンな教育プログラムを模索するアメリカの学校建築のなかに確実に実現されようとしている．

これらの手法は，歴史，場所を函数としてわれわれの感受性へと働きかけるアクチュアルな建築を構築しようとする試みの糸口ではあるが，さらに交差，複合し，建築の実体をわれわれ人間のもとへと取りもどす出発点となりえるように思われる．　パラディアニズム，コンテクスチュアリズムなどの台頭も，これを裏付けるものかもしれない．　けれども，歴史，場所からの安易な借りものは，危険でしかないことは確かだ．　歴史は衰弱の弁証法をも明らかにしているのだから．

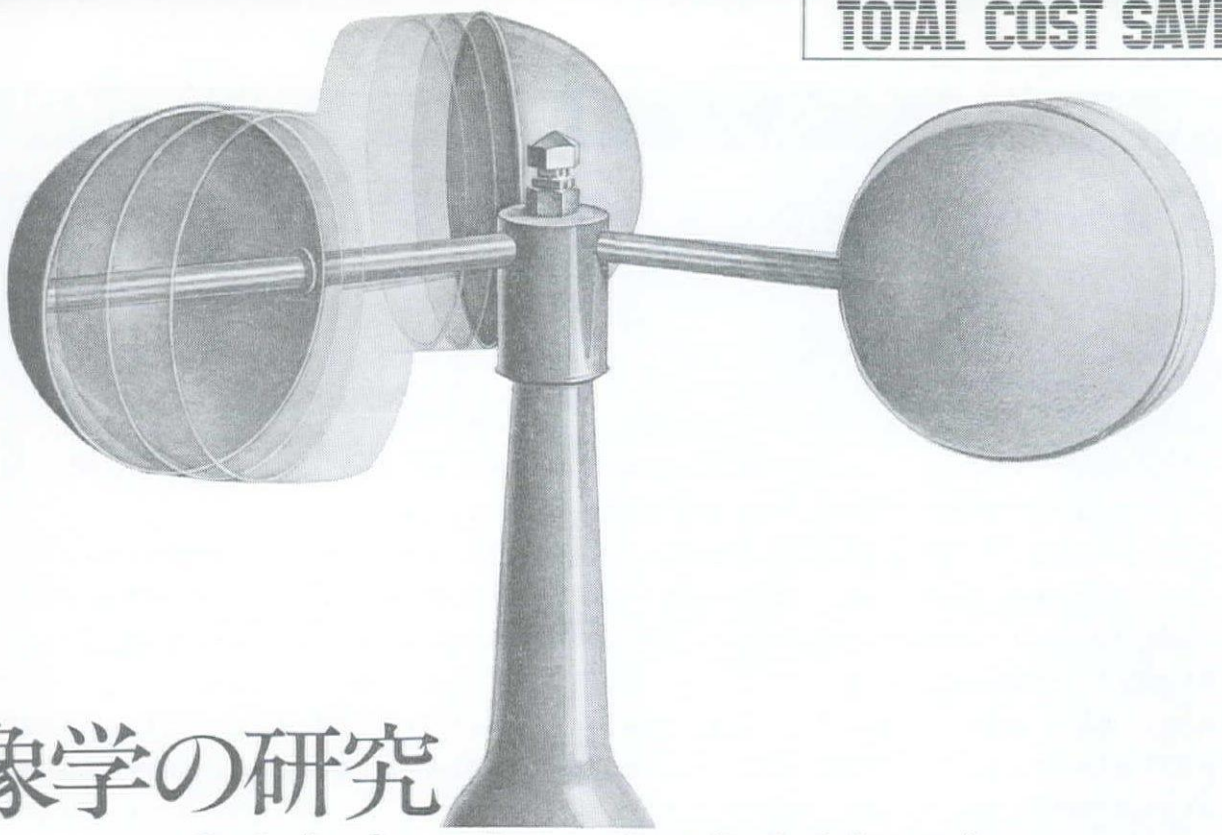
(Group 10　近藤和彦)

ar : The Architectural Review　　db : Deutsche Bauzeitung
AJ : The Architects' Journal　　Pa : Progressive Architecture



〈アナロガスな都市〉アルド・ロッシ

TOTAL COST SAVING



気象学の研究から始まった、空調計画。

新宿三井ビルをはじめ数々の超高層ビル空調も、キヤリアの実績。

地上200m、10,000人もが勤務する超高層ビル。一般のビル空調とは比べものにならない難しい条件が、複雑にからみあっています。四季それぞれの外的環境。高層ビル街特有の微気象。各壁面ごとに異なる日照時間、執務人員の密度、事務機器の発する熱など、外的、内的負荷の変化。そして多様化するテナントの要求…。空調システムは、これに迅速に対処でき、しかも設計家には美観をそこなわず、設備関係の方々には設計、施工が容易であり、かつオーナーにとっては省エネに徹したものでなければなりません。東洋キヤリアは、それぞれの空調条件を細かく検討し最適機種を選定。さらに、エアコン専門メーカー50年の経験から得たノウハウを駆使して、効果的で経済的なシステムを納入しています。「空気調和衛生工学会賞」を受賞した、霞が関ビル、新宿三井ビルをはじめ、皇居新宮殿、帝国ホテルなど、数多くの著名ビルで、東洋キヤリアの空調システムは、きょうも快調に働き続けています。

省エネを求める時代の声に、キヤリアはトータル・コスト・セービングで応えます。

省エネの声がますます高まる今日、日常生活に欠かせない空調の省エネ対策こそ急務です。各パーツの標準化、工法の簡素化による設備費の低減。省エネ型機種の開発や施工技術の改革などによる維持費の抑制…。東洋キヤリアは、大型から住宅用、業務用の中・小型システムまで、均衡のとれたトータル・コスト・セービングに、企業努力の全てを傾けています。



マンション、一般住宅用空調で発揮される、キヤリアの豊富な経験。

東洋キヤリアの住宅・業務用セントラル・エアコンは、他社に先がけたダクト型が中心。天井裏や壁面にダクトを埋め込む方式ですから、大切なスペースを無駄にすることもありません。ユニット間の距離は最高40m、高低差も30mまで伸ばせます。外気温が−20℃から45℃まで安定した稼動。徹底した省スペースと、各部屋ごとのON/OFFをはじめとする省エネ対策が、ユーザーの方々に高く評価されています。



ここに勤める約10,000人の空気を整える。

新宿三井ビル建設の際にまず考慮した点は、限られた工期と予算で、質の高い空調をどう確保するかでした。東洋キヤリアは、超高層ビル空調の経験が豊かであり、工程管理がスムーズで、設備費の面でも大きなスケール・メリットを得ることができました。メイン・システムには37A型VAV(可変風量)方式を採用。熱の負荷変動に素早く対応するこのシステムは、快適さ、省エネ、そしてテナントの要求に的確に対処でき、ビル管理上、非常に有利です。私たちビル管理技術者に課せられた難しい問題も、綿密な計画と最適機種の選択で、その目的がほぼ達成できた、と自負しているしだいです。

松尾恵三氏
三井不動産株式会社・新宿三井ビル技術主任

Carrier

世界で最も経験あるエアコン専門メーカー

キヤリア

東洋キヤリア工業株式会社

本社:〒103 東京都中央区日本橋本石町4-2(三井第二別館)
TEL(03)270-9411代表
仙台・桐生・志木・東京・名古屋・金沢・大阪・岡山・津山・広島・高松
松山・福岡・鹿児島

空調機器&システム

資料請求券
SD

ワッピング・スポーツ・センター

Wapping Sports Centre
London, England, U.K.
設計：Shepherd Epstein & Hunter

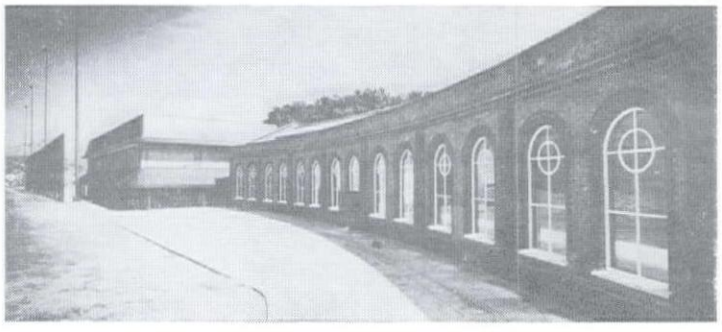
湾曲したワークショップ工場が，19世紀末に，ワッピング・ベンスンの埠頭とドックの境界を画する高さ5mの擁壁の間に建設されていた．　しかし12年前に使われなくなってから破損がひどくなる一方であった．　1976年，この敷地を含む42haの土地がロンドン都下のタワー・ハムレッツ郡当局によって買い取られ，1977年にはシェファード・エプスタイン・アンド・ハンターによってワッピング全体の計画案がまとめられた．　この案によるとワークショップの南に新しく幹線道路を計画すること，ワークショップ自体は外形を保有し再利用されることなどの基本的な計画が促進されていた．

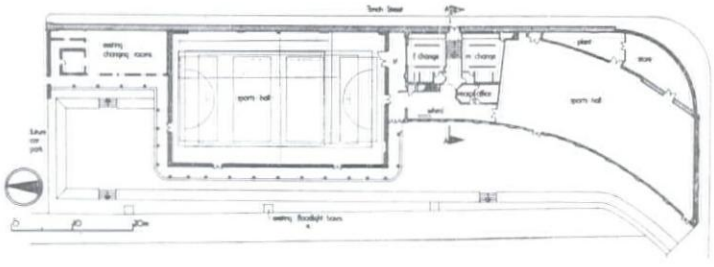
この基本計画をもとにして保存・改築されたワークショップは，黄色い上質レンガと青いエンジニアリングレンガとを用いて建てられており，この組合わせは改造する時にも保たれたのである．　新しく建てられたスポーツホールの周りには，この湾曲したワークショップ――現在アクティビティ・ホールと呼ばれている――とドックを埋めてつくられたフットボールのフィールドの更衣室とをつないでアーケードが建てられている．　このアーケードも保存・再生の精神を受けて古いドックのヴォールト小屋の鋳鉄柱を再利用した柱によって屋根を支えられている．　東側にある斜めのドックの壁には1ヶ所だけ開口部を開ける事が許され，これが歩行者のメインエントランスとなったのであった．

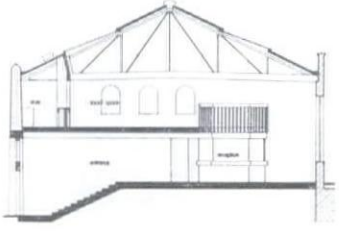
この建物においては〈古いもの〉に対する〈新しいもの〉の取り入れ方が絶妙な配慮をもってなされており，それは単に外観における古い形の維持にとどまらず，土木的要素でもあるドック壁をも室内スポーツホールに取り入れ，ビクトリア調の力強い土木技術の面影を残したコミュニティーセンターに生き返らせた腕前は見事であると言わざるを得ない．

〈古いもの〉の中に〈新しいもの〉を取り入れてゆく時，我々はとかく破壊か保存かといった両極端な方向に走りがちである．　しかし常に流れというものを見つめながら両者のあるいは新旧の調和を計ってゆくことの重要性をこの作品は教えてくれるように思われる．

〈AJ　1980年10月1日号〉







クインシー・コミュニティー・センター

Quincy Community Centre
Boston, Mass., U.S.A.
設計：The Architects Collaborate

学校を社会に対して開いたものにしようという試みが1980年のアメリカの教育問題のポイントとなっている．

クインシーのこの計画は，社会機能と学校施設とのこのような一体化の一例としてみることができよう．

ボストンにあるこの施設は，3才から11才までの700人の小学校及びヘルスセンター，コミュニティーセンター，リトルシティーホールなどから基本的に構成され，それらの要求を容れるために古い建物が徴収されたのである．

建物は高密度地区の中にあり，その敷地を老人のための高層棟と分ち合っている．

クインシー・コミュニティーセンターは古い建物を利用するのみでなく，この空地にも低層建物を建設し，複合した施設を収めているのだが，見どころは何といっても，この低層棟の扱いだろう．

低層棟の屋上には学校や周辺住民が利用できる遊具やベンチのついたピクニック場があり，また遊び場としてコミュニティーの人達の利用できる屋外空間が手ぎわよく配置されている．　そして大きな階段が道路からこの屋上へ人々を導く．

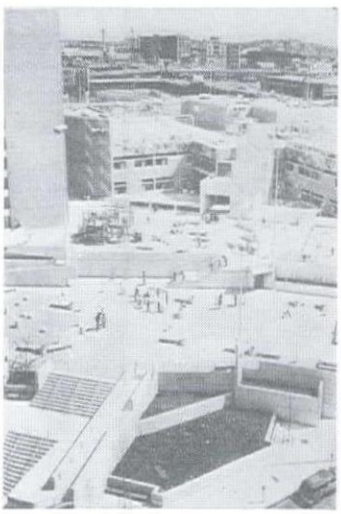
屋上は古い建物を改装した施設やヘルスセンターへのアクセス路にもなっているわけだ．　豊富な絵模様が遊び場の壁にほどこされている．

高速道路に対しては古い建物が障壁の役割をしているので，車の騒音は屋上広場へは届かない．

学校は約80人の子供の小さな遊び場を前庭として4つのクラスターに分かれて構成されている．　各々のクラスターは，各々150人の子供を定員としており，1，2階にいる時は屋上の遊び場にいつでも行けるようになっている．

リトルシティーホールは市の行政を分散させることに役立っているし，また隣接する老人ホームの年寄りたちにとっては身近な市の出張所は嬉しい存在として受け入れられているようだ．　また計画の中心でもある地上レベルは，多様なアクティビティーでにぎわい，趣味やスポーツ，レクリエーションなどのさまざまなプログラムを選べるようになっていて，屋上広場の活用と共に〈開かれた学校〉の役割を果しているといえよう．

〈AJ　1980年8月13日号〉



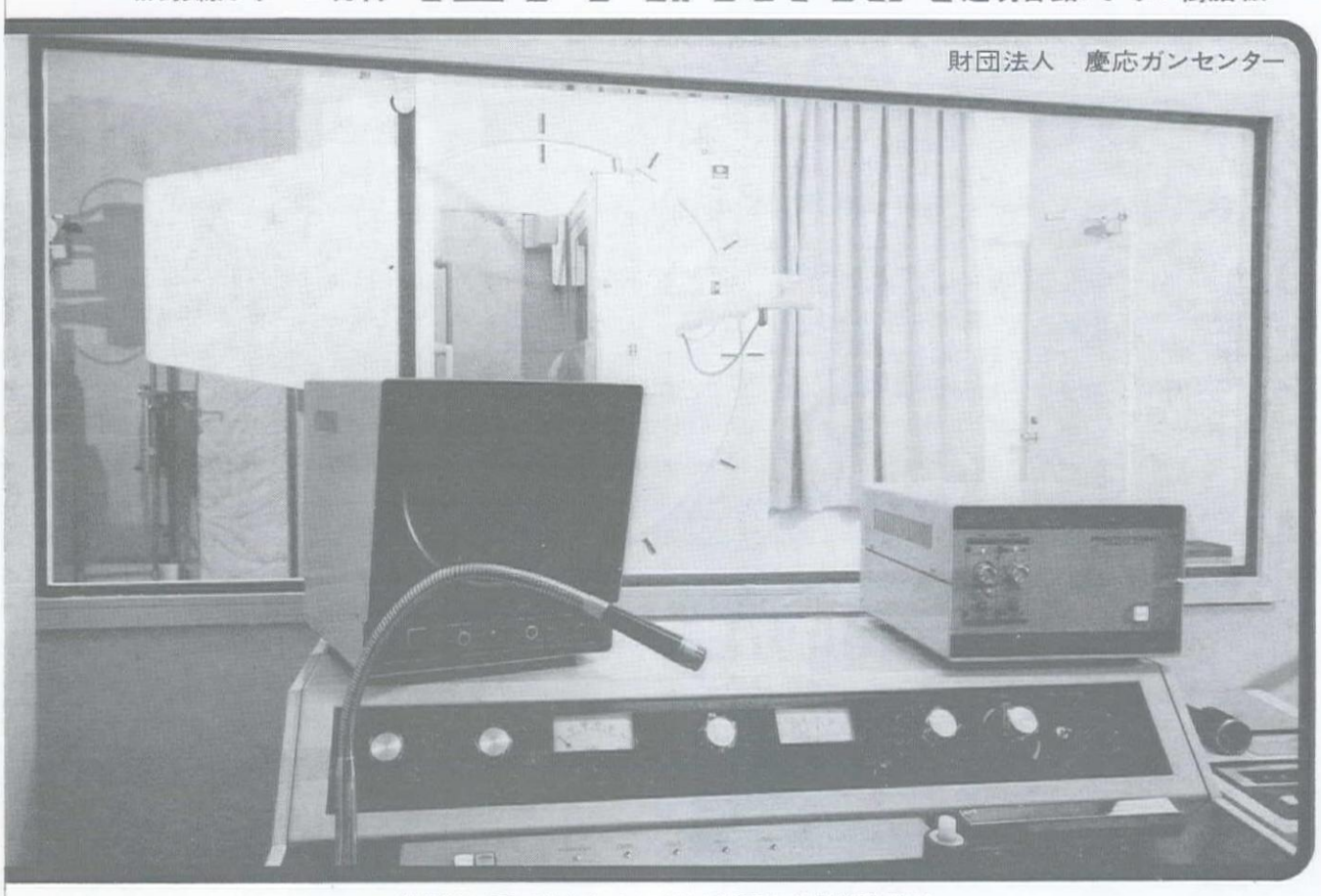






ここでも
使われています。

放射線しゃへい材料 **キヨウワグラス-XA®** 透明含鉛アクリル樹脂板



財団法人　慶応ガンセンター

世界18ヵ国で使われている強く透明な放射線防護材。

アクリル樹脂と有機鉛塩とを一体化させ、世界で初めて量産に成功した放射線しゃへい素材です。世界での特許取得も15ヵ国にのぼります。

用途をひろげる優れた特徴

- 放射線しゃへい能力に優れ、その強い耐衝撃性と高度な透明性によって、広視界の窓が思うように設計できる。
- 接着、穴あけ、研磨、曲げなどの加工が容易にできるので、斬新なレントゲン室などがつくれる。
- 帯電性が小さいので、使用中の清掃は不要。

●ここで使われ好評です。

一般医療分野/X線室、X線TV室、CT室　歯科医療分野/パノラマX線、デンタルX線装置用　原子力産業分野/核燃料グローブボックス　理化学分野/X線回折装置、など

●代理店

一般医療

(北海道地区)㈱常光札幌支店
〒060札幌市北区北7条西2丁目☎(011)731-1311
(北海道地区)北日本レイス工業㈱
〒064札幌市中央区南6条西17丁目☎(011)551-1541
(東北地区)東洋インサル㈱
〒983仙台市卸町5-1-10　☎(0222)96-2655
(関東地区)医建エンジニアリング㈱
〒104東京都中央区八丁堀3-2-1☎(03)552-8606
(関東地区)東和放射線防護設備㈱
〒221横浜市神奈川区神ノ木2-5☎(045)431-1461
(関東地区)明和㈱
〒210川崎市川崎区東田町3-13 エホビル　☎(044)222-5256
(新潟地区)屋美工業㈱
〒950新潟市米山3-9-19　☎(0252)41-5651
(北陸地区)丸文金沢㈱
〒921金沢市泉野町1-19-16　☎(0762)43-4366
(信州地区)信越医療器㈱
〒381-11長野市青木島町大塚976-4☎(0262)85-3417
(中部地区)理研イーエムシー㈱
〒467名古屋市瑞穂区関取町4　☎(052)832-8011
(関西地区)東和放射線防護設備㈱
〒567大阪府茨木市耳原2-3-17☎(0726)43-4571
(中国地区)山口レントゲン商会
〒710倉敷市浜ノ茶屋1-4-23　☎(0864)22-1910
(九州地区)中外レントゲン商会
〒812福岡市南区大橋1-35-19　☎(092)522-1374
(建材関係)サンレイズ工業㈱
〒534大阪市都島区中野町4-9-5☎(06)351-8230

歯科

㈱ヨシダ
〒110東京都台東区上野7-6-9☎(03)845-2911㈹
北海道営業所☎(011)241-7635
仙台営業所☎(0222)72-6353
東京営業所☎(03)845-2911(代表)
名古屋営業所☎(052)762-3701(代表)
大阪営業所☎(06)621-1845(代表)
広島営業所☎(0822)43-2076
福岡営業所☎(092)731-3121～3

㈱ニックス
〒113東京都文京区本郷6-11-9☎(03)815-0703㈹

●お問合わせ・資料請求は

協和ガス化学工業株式会社

開発部XAグループ 〒103東京都中央区日本橋3-8-2新日本橋ビル☎(03)277-3176・3160

ロートン・ハイコミュニティー・スクール

Lowton High Community School
Newton Road, Lowton, Warrington, U.K.
設計：Ellis Williams Partnership

これは11才から12才までの男女学生のためのコンプリヘンシヴ・スクールであるが，一応の工事が終わった現在，なお次期工事が計画されている．　この学校のすべての建物は，赤いレンガの壁とダークグレイのスレート葺の屋根からなっており，勾配屋根が用いられ，木造トラスによってそれが構築されるというこの国の伝統的な方式を踏襲している．　しかし，何といってもこの特徴は1階の配置平面にみられよう．　各棟はすべて異なる平面を持ち，一般の学校にみられるように併列配置されるのではなく，あたかも小さな町の町並みを形成するかのように自由に配置されている．　したがって，中心はストリートに比する外部空間となり，通りに沿ってルーフライン，壁，開口部の景観を変えていく．　さらにこの特徴は，美術工芸的なレンガ壁の中におさまった窓を通りに面して配置することにより，強調されている．　もし，プランドを取り去って気のきいたお菓子屋さんにしたとしてもこの特徴は保たれると思われる．

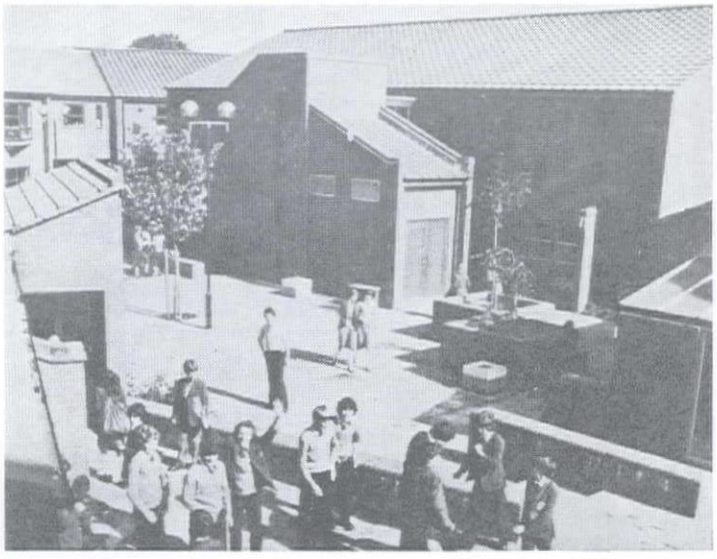
プランにみられるように，9つのユニットがそれぞれ各学科に割り当てられ使われている．　それらのユニットを構成するに際して，学校に田園的な雰囲気を与えるためには垂直に積み上げるよりむしろ水平に構成すべきで，またそれぞれのユニットには，指導教官室と連絡のよい公的な場所を設計すると都合がよいのである．　また，一般教育は伝達と研究のふたつの方法で行われる．　伝達は机を並べた教室で行われるわけで，そのためには完結した教室が用意されている．

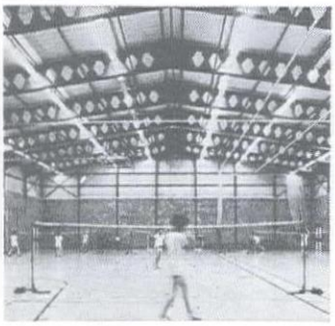
そして，これに附属してセミオープンの研究室が用意される．　そこでは各種の実験や，グループワーク，実技，また発見をともなう実習が行われるわけであるが，このスペースにはガス，水道，電気などの設備がしつらえられ，多様な間仕切りが可能なフレキシビリティが与えられている．

この学校の成功は，この地域の専門家や，父兄の評価によって証明されている．

生徒達はこの建物を楽しんでおり，ごみを散らしたり破壊などがまったくないことは，彼らがこの建物を尊重している証左であろう．

〈AJ　1980年11月12日号〉







点在する学校

SAND Everywhere School
Hartford, Conn., U.S.A.
設計：Milton Lewis Howard Associates

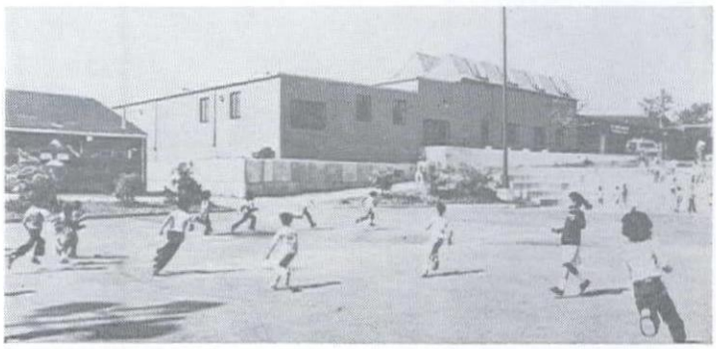
ハートフォード市の下町にあたるさびれたユダヤ人街における SAND と呼ばれるこの計画は，地区の小学校のあり方，ひいてはコミュニティ形成に対していくつかの提言を含んでいる．　それは計画段階で地区の評議員，建築家グループが話し合い，住民の意思を十分反映したものなのである．　1968年，既存の古い学校校舎と17個の倉庫を利用し，それを新しい小学校に再生することが計画の第一段階であった．　点在する17個の倉庫群と校舎はひとつのまとまりとして〈村〉を形成している．　それは周辺市街地にもうまくとけ込んでおり，住民が日常，学校の体育施設，文化施設，集会施設などに利用できるなど周辺住民のコミュニティ形成に一役買っているわけである．

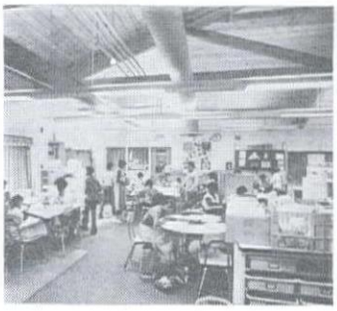
MIA (Multi-instructional area) と呼ばれる教室棟は大きく3つのクラスターに分かれ，他にこれにふたつサービス棟が付属している．　現在，およそ612人の小学生と120人の幼児が収容されており，各々の教室 (MIA) には90人の生徒がいて，これに3〜4人の先生と2人の助手がついている．　MIA リーダーは各自，自分のクラスの活動プログラムをつくり，2週間ごとに，他のリーダーと集まり，全体会を開き，これからの方針を話し合うシステムをもっている．　教室ごとに独自の教育システムを持ち，自主的に活動しながらも計画，運営に対しては，全体としてもひとつのまとまりがある理想的な形であるといえる．

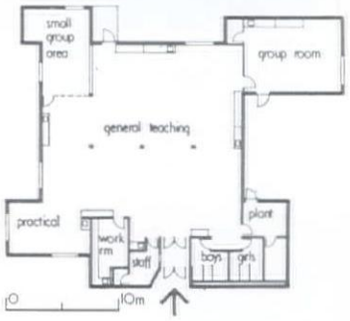
配置図にもみられるように，これは従来の学校配置の概念を破る全く新しいタイプのものである．　それは，都市の環境に適した新しい形の小学校のあり方に対してひとつの提案をしているといえる地域に対して，形態上も，また利用の上でも開放的な状態を用意しているわけであり，単なる教育の場のみならず，周辺住民が積極的に利用できる，文化，コミュニティーの場を提供することである．

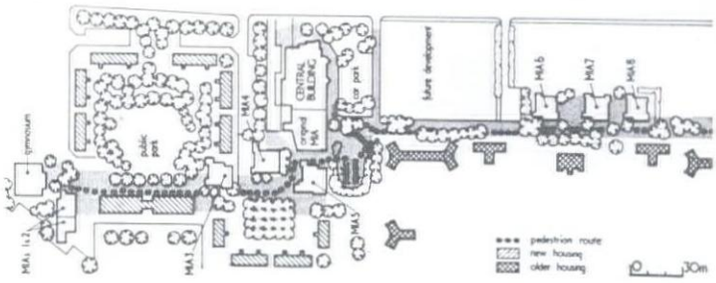
いずれにせよ今後，市街地における学校のあり方にひとつの示唆を与えてくれるであろう．

〈AJ　1980年8月13日号〉









永年の信用ときたえぬかれた
技術を駆使する!



●一般電気設備工事＝設計施工
●防爆電気設備工事＝設計施工
●計　装　工　事＝設計施工
●電気加熱保温工事＝設計施工
●パイプライニング工事＝設計施工
●静電気接地用リール＝＝販売

昭和電機工業株式会社

取締役社長　浦　龍　利

●本社／東京都港区東新橋２丁目７番３号　電話03(437)3851(代表)
●営業所＝大阪・中部・広島・福岡
●出張所＝苫小牧・京浜関北・新潟・鹿島・千葉・四日市・堺・水島・岩国・徳山・坂出・松山・新居浜・大分
●駐在事務所＝ジャカルタ・テヘラン

ブリタニア・コミュニティー・センター

Participatory Planning Britannia
Community Service Centre
Vancouver, Canada
設計：Britannia Design and Downs／
Archambault

バンクーバーでは，19年ほど前からコミュニティー施設について，市民達と教育専門家や建築家との間で共同研究が行なわれてきた．　市民が自由に利用できる施設を作るためには，地元住民が内容を考え設計する．　いわゆる〈手づくりの施設〉をめざしたのである．　この研究はコミュニティー・スクールを中心としている．　それは学校施設との相互補完という考え方に基づいて学校も含めた施設が広範囲の人たちに利用されることを求めたものである．　学校教育に関しては，学校の現有施設を利用することによって，施設を確保する一方で社会プログラムの充実に対してはコミュニティー・スクールの新設によって，社会教育活動の位置づけも行なっている．　これはコミュニティーが人間性の回復と真の自己実現をもたらす場として機能していくべきだと考えたからである．

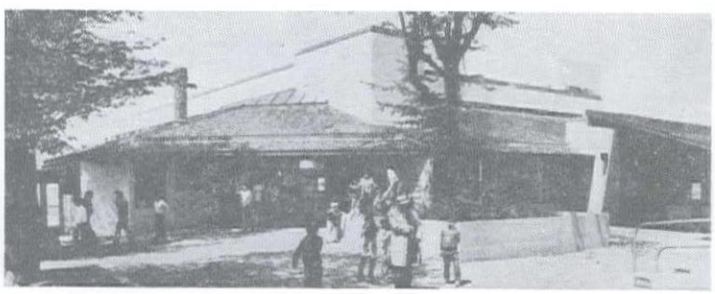
こうした背景のもとに，バンクーバー西海岸に7つの公共施設をもつコミュニティー・スクールが，1970年後期に完成した．　Britannia と呼ばれる中等教育施設，図書館，アクティヴィティールーム，情報センター，スウィミングプール，アイスリンク，体育館といったように，ふだん子供たちが接している社会的空間を集めている．　これによって学校とその周囲をミニチュア社会として構成し，その中心となっている学校施設を学校教育の場にとどめず，生涯教育，学習の観点からしても地域住民の自己実現，欲求充足の場として多様なニーズを満たす恰好な場につくりあげている．

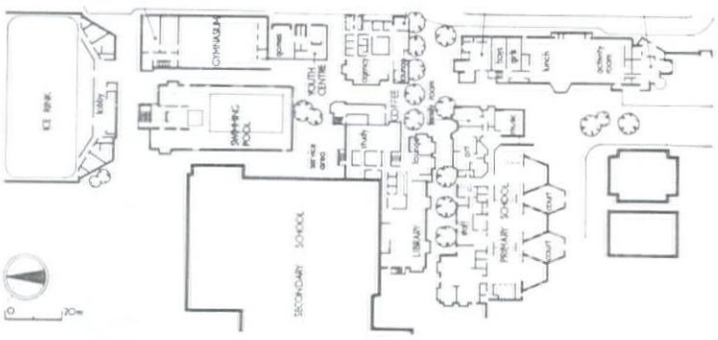
これらの施設は，南北軸に配置させ，つながりある空間を――いわば小さな町の中心地区のような町並を構成している．　このつながりこそが，コミュニティー・サービスセンターとしての重要なポイントである．　つながりを設計することによって，これがコミュニティー・スクールの意義をみたし，さらにコミュニティー・サービスセンターとしての多大な魅力を引きださせることになるのである．

このように従来周辺の地域社会に対して閉鎖的であった学校を，逆に地域社会の中に溶かしこむことによって，地域社会の新しい創設を目ざすことが可能になるのであろう．

さらに，一部に老人のための施設や，小さいながらも，デイケアセンター（医療施設）を組み込んでいることも，見逃すことはできない．　総体としてのコミュニティーにとっては欠くべからざる配慮であるといえよう．

〈AJ　1980年8月13日号〉





クレセット・コミュニティー・センター

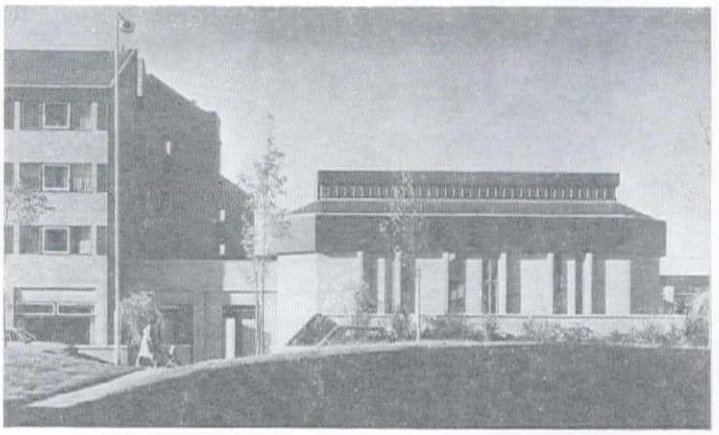
The Cresset
Bretton, Peterborough, England, U.K.
設計：Peterborough Development
Corporation Architects Department

クレセットはニュータウンのコミュニティー・センターとして計画されたものである．　ここでは特定集団のための空間と共用空間を明確に区別し，そのダイアグラム図がそのままクレセットの配置形態に反映されている．　また個々の集団のアイデンティティを排他的に守る一方で，その結合によって各集団が利害関係をもつ共有領域をつくり出している．

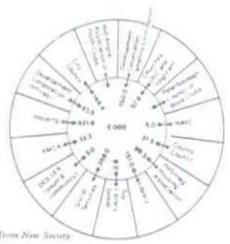
組織上は関係集団がひとつの有限責任会社をつくり，開発公団から999年契約で土地を借り，クレセットの評議会が政策や経営を決定している．　もともと合同計画というものは，個別に建てられる同様の計画よりもコスト高になりがちであるが，受容力や利用度について考えればその価値は大きい．　そしてクレセットは大きなスケールでの興味深い共同体の成功例であり，利用者に多くの利益をもたらしている．　その秀れた表現は統一と多様性の結合によって生まれているが，組織的構成とデザインの両方に注意深くバランスが保たれているところに注目すべきであろう．

一方，利用度については，共用領域にかなりの需要があり，そのため多くの異なる集団に交流が生れ世代を越えた相互作用が生まれている．　そしてこのような組織構成や建物は状況に対応して変化することとなり，数年後には異なる様相を呈しているであろうことは想像に難くない．　外部の仕上げ材料には，淡い黄色のレンガがいたるところに使われている．それは平面構成上はあたかも数人の所有者が存在するが，立面の統一性からはひとりの建築家によって統合されたかのように見える．　ここにもし問題があるとすれば，建築サイドの統一的な操作と，多くの異なる集団が様々な目的で利用するという現実的な解釈との間に生じる矛盾かもしれない．　なぜなら，複合的建築に全体像のイメージを付加する場合，表情の一貫性は，複数集団からなる社会の建築的表現において，必ずしも最良の方法とはならないからである．

〈AJ　1978年11月29日号〉





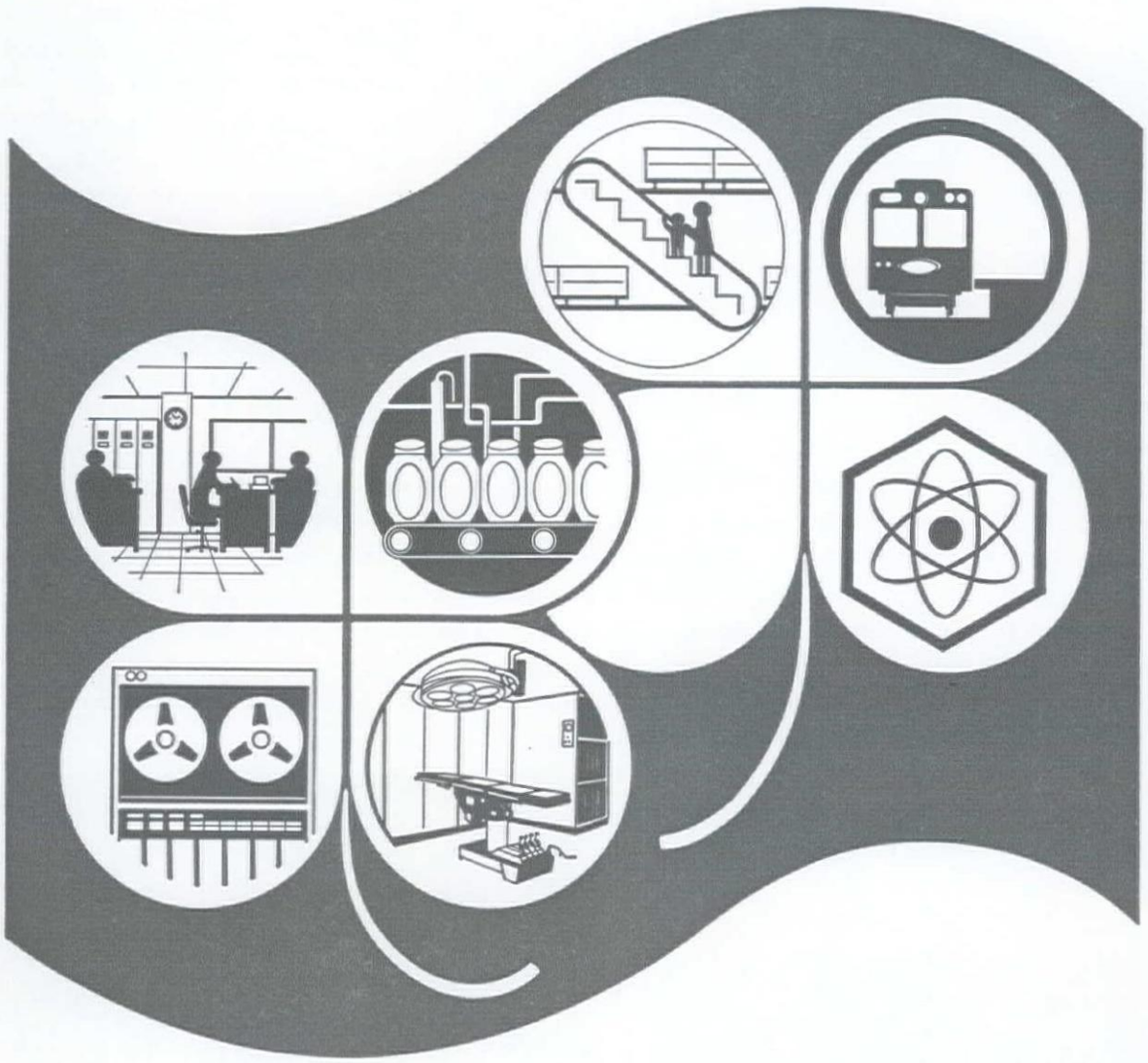


Reproduced from New Society



MODAIR

あすの空気調和をになう



自然より清浄な環境づくり
それが東熱のねがいです

〔東熱〕がめざす「空気調和」とは、温湿度調整だけでなく、有毒ガスの除去、脱臭、除塵等、人間の生活環境、あるいは高度生産環境を作り出す総合技術です。

この開発された個々の技術を更に、総合的に発展させ、都市全体としての環境改善に寄与してゆくことに東熱としての使命感を持っております。

〔東熱〕によって開発された技術は●地域冷暖房●アイソレーター●サンシャイン計画●超高層ビル●病院●地下鉄等、あらゆる分野に生かされ都市環境の整備、浄化に貢献しております。

〔東熱〕は常に社会の要望に対応した、技術の開発をし、より清浄でより快適な生活環境を皆様に提供いたします。

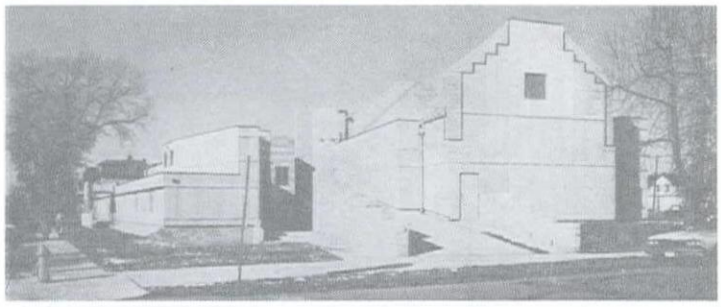
東洋熱工業

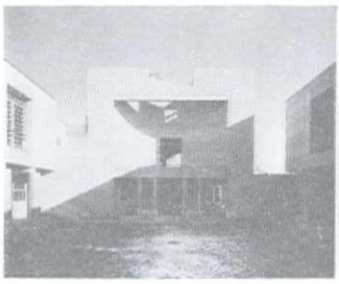
本社／〒104／東京都中央区京橋2丁目5-12
TEL 03(562)1351大代表
支　店／仙台・横浜・名古屋・大阪・広島・九州・札幌・関東／水戸・京都・高松・岡山

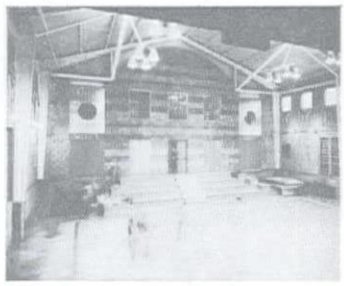
サウスサイド・セットルメント

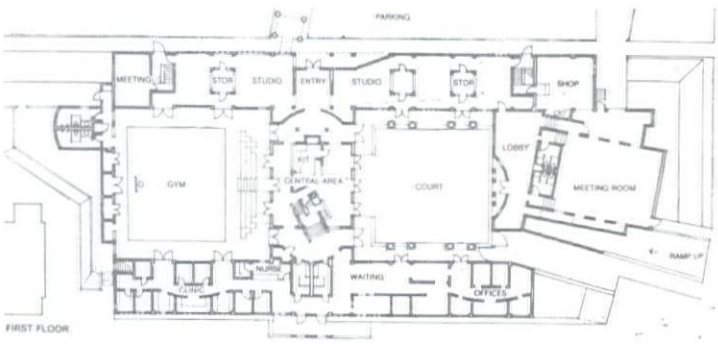
Memory Materialized, South Side Settlement
Colombus, Ohio, U.S.A.
設計：Studio Works

このコロンバスにあるセットルメントは近隣住区の再開発を目的として地区のリヴァイバルを奨励するために計画されたものである。　設計にあたったロスのスチューディオ・ウァークスの当初の案は1976年のPA賞を獲得したものであったが，その後施設の内容のプログラムがスケール・ダウンされることになり，現在及び将来にわたる用途と必要性が丹念に調整されて再設計されるものである．
長軸方向に配列されたジム・センター・ブロック，中庭（コート），劇場の各ブロックとこれらの両サイドに配列された付属施設からなるこのコンプレックスはこれらに直交したエントランスからそれぞれにフリーに導びかれるのと同時に相互のサーキュレーションも可能とするようなレイアウトとなっている．
さらに，ジムの野外コートにあるような観覧席やセンター・ブロックにある歓談を誘う煖炉や斜めに配置された階段などがヴァラエティに富んだアクティヴィティを生み出すように計画されている．
外観は近隣の住居のスケールに調和したクラスター群によって構成されており，このコンプレックスの興味深い構成は内部にとりこまれたコートからのみそれぞれのモニュメンタルな表情とコミュニティとしてのスケールを見ることができるようになっている．
シンメトリーなセンター・ロックのファサードと半円型にカーヴしてくいこんだクラシックな劇場のファサードは，スパイラルにリブのついた列柱によって持ち上げられたウィングを両側にはさんでほとんど戯画的ともいえるそれぞれの顔で対面している．
これは環境的なものへの融合，かかわりあいへの関心をもちながら，秩序だったものから不道徳な気まぐれと異なったくだけた表現による統一を狙ったものとして最近の傾向の問題のひとつとして挙げられることができよう．
〈Pa　1981年2月号〉





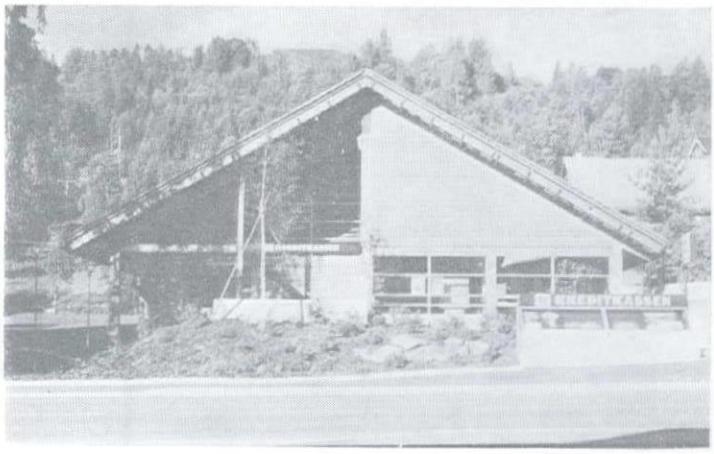




ノルウェーの木造銀行支店

Bagn Bank
Bagn, Norway
設計：Kjell Lund & Nils Slaátto

木造建築の伝統を持つノルウェーにおいてはバナキュラリズムの持つ意味はかなり大きいといってよい。　じっさい政府は，全国の住宅のタイポロジーを調査し，地方ごとのハウジングタイプの開発を進めており，いわば地域主義を実践しようとしている。　また住宅産業は，プレハブ住宅に伝統的デザインを付加することが有効であることに早くから気づいており，ここではキッチュとしてのバナキュラリズムが試みられているといえよう．
さらに，非住宅的な分野においても，オフィスなどの都市的機能をもつ建築が地域の伝統にどう係わっていけるかということが深く問題にされてもいるのである．
このように，コンテクスチュアリズムから伝統論あるいは地域主義そして商業的キッチュまでをも含めた，広い意味でバナキュラリズムと呼ばれるべきこの複雑な文脈の中で，この銀行の支店は，ひとつの方向を明確に示しているように思われる．
作者のコンビは，Al（オール）システムと呼ばれる，積層材を利用した束・梁構造と，断熱材入りパネルから成る木構造システムを開発したことで有名である。　人口の3分の2近くが木造の1戸建住宅に住んでいるノルウェーは，戦後木造技術の刷新・近代化にかなり精力的にとりくんで，現在では枠組壁構造が一般化しつつある．一方，それに対して丸太を用いた古い軸組構造のもつ豊かさが失われてしまったという声，バナキュラリズムに立つ批判も多いのであるが，この中で，Alシステムは，ノベルグシュルツによって，枠組構造の〈箱〉を打破り，壁体を解放し，木造の力強い基本的な骨組を，新しい柔軟なシステムによって再び回復させたものとして評価されている．
この銀行の支店は，まさにこのシステムを投用した（と見られる）ものであり，大きな勾配屋根，はっきりと表現された構造，素材をそのまま表出させた壁，どことなく伝統的住宅を想起させるガラス面など，モダンでビジネス感覚にあふれていながら同時に，伝統，文化を想起させる格調高い雰囲気をつくりだすことに成功している．
民芸調デザインの気まぐれな参照によってでもなく，過剰な装飾の付加によってでもなく，ましてや，形態論的なはなばなしい宣言によってでもなく，バナキュラリズムという文脈に応えることができたこの小さな作品の背後に控えている意味の大きさを，そして，このようなものが商業主義の砦である銀行建築にあらわれたことを，少し考えてみる必要がありそうだ．
〈ar　1980年11月号〉







15年の歳月を経て3月20日にオープンした海の文化都市・ポートアイランド。そこにひときわ美しいホテルが神戸港を見わたしています。この船型をしたポートピアホテルの客室耐火遮音間仕切壁に、ニチアスKVウォールが全面的に採用されました。

耐火2時間間仕切壁です。
建設大臣指定　W 2113

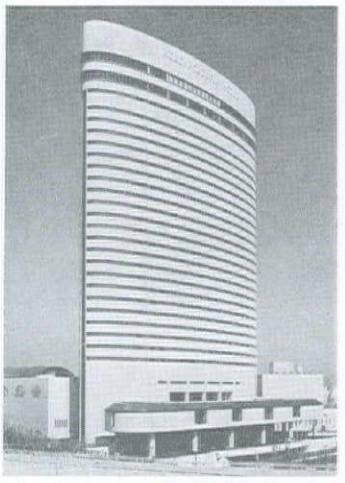
石膏ボードをVカットした箱型パネル(KVパネル)をスタッドとし、両側から、下貼りには石膏ボード、上貼りにはニチアスラックスをたいこ貼りした完全乾式工法です。

遮音性能に優れています。
建設大臣指定　遮音(個)第67号

約50kg/m²と大変軽量ですが、KVパネルと粘着剤の効果により、高い遮音性があります。中空部にロックウールを併用すると、さらに効果的です。

簡便な施工により、工期が短縮されます。

KVパネルと両側ボードの貼付けは、接着剤併用のステープルどめが行えます。またKVパネルは、上下ランナーに建込むため、層間変位の追従性にも優れ、さらに中空部には設備配管が自由に設置できます。



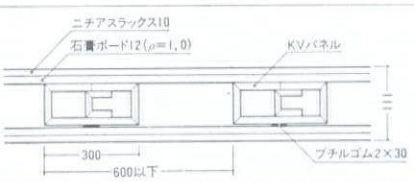
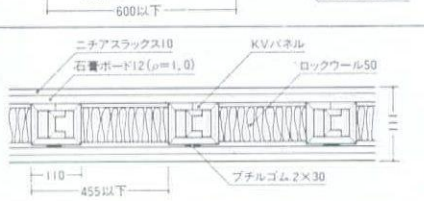
遮音性能のすぐれた耐火2時間間仕切壁
ニチアスKVウォール



耐火２時間遮音間仕切壁

ニチアスKVウォール

建設大臣指定　W 2113
建設大臣指定　遮音(個)第67号

用途・耐火時間	構造	認定番号	重量 (kg/m²)	階高 (mm)
界壁 耐火遮音 2時間		W-2113 遮音(個) 第67号	50	3600
		W-2113 遮音… 申請中	49	3000

N.A.K.
ニチアス
日本アスベスト株式会社
本社／東京都港区芝大門1-1-26 〒105
☎03(433)7241大代表

東京支店☎03(572)0321代
名古屋支店☎052(931)9217代
大阪支店☎06(245)3395代
九州支店☎092(531)3031代

資料請求券 KVウォール SD 6月号

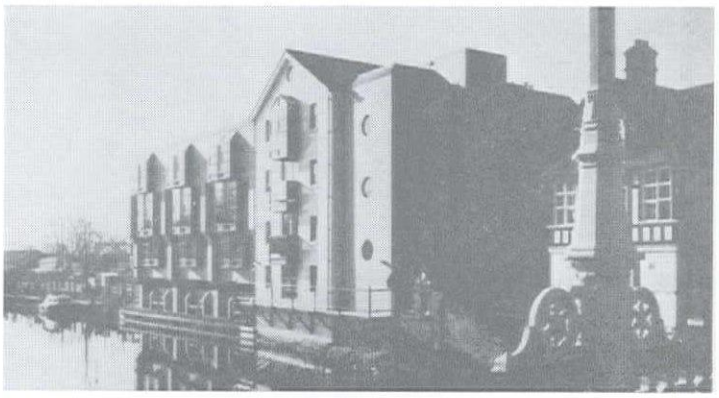
カタログご希望の方は本社広報課まで

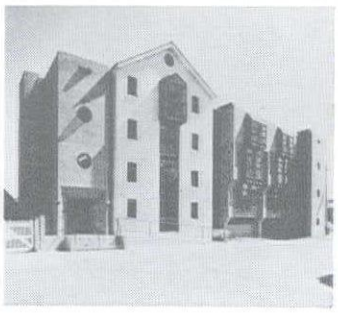
河岸通りのリノベーション

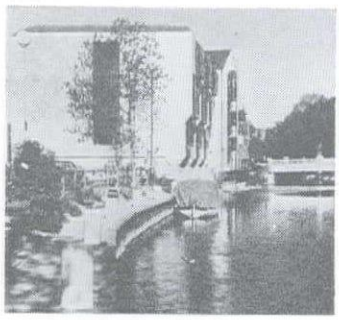
On the Waterfront
Tonbridge, Kent, England, U.K.
設計：APP Brighton

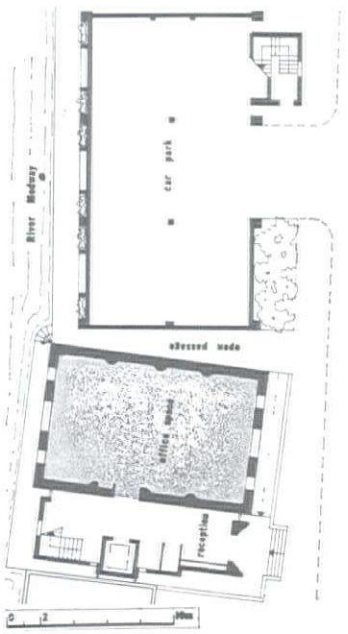
ロンドン中心部から南東約40kmトンブリッジのノーマン域に向い合うメドウェイ川沿いの修復計画である．
19世紀に建てられた穀物倉を修復再生すると共に，両脇に新たにオフィス空間とサーヴィス空間を付け加えてでき上がった．　古い穀物倉は約10年間にわたって放置されてきたが，この計画によって，町の記憶・歴史を描き留めたと同時に，新たな筆を加え，河岸をピクチャレスクな風景にしたてあげたと言える．　古い建物の修復再生を実現するためには，ディベロッパー・建築家の努力と共に，建築に対するその地域の風土，住民の関心の高さが必要である．　さらに法的条件の緩和といった当局サイドの協力も不可欠であろう．

APP ブライトンによるこの計画も，建ぺい率の緩和などによって500m²の敷地に1400m²のオフィスを作り上げることができた．
さらに河岸を公園通り化しようとする地方当局の要望によって，建物の足元にはベンチを設置し，川縁には船を繋ぎ留める柱を置いて〈波止場〉を演出している．
昔は，この〈波止場〉に穀物を満載した船が着き，穀物倉の開口から突き出したホイストによって荷上げしたのだろう．
床レベルまでいっぱいに開かれたその開口は熱線吸収ガラスの入った出窓として再生し，メドウェイ川に向けたファサードのデザインモチーフのひとつとなっている．
内部空間も，住宅的な空間スケール，木の小屋組の露出などによって，居心地のよいオフィス空間が出来あがった．
増築部分に設けられた，似非アールデコ風のエントランスや丸窓の唐突さなど，修復計画としては必ずしもデザイン上の配慮が行き届いたとは言い切れないものの，実現までこぎつけたことに大きな意味があると言える．
〈AJ　1980年10月15日号〉





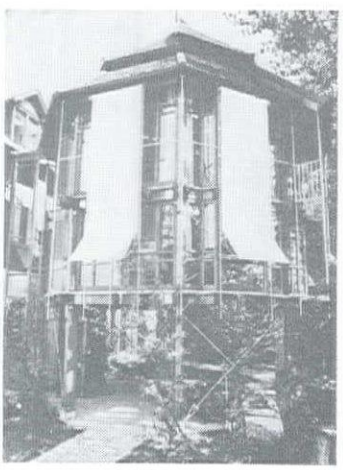


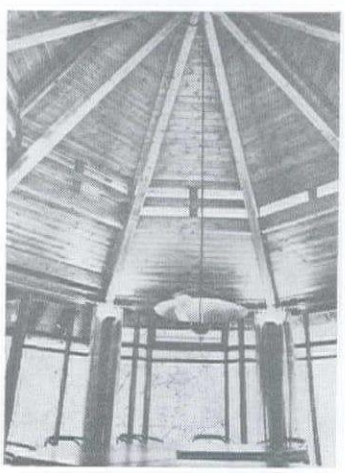


ラールの塔状建築

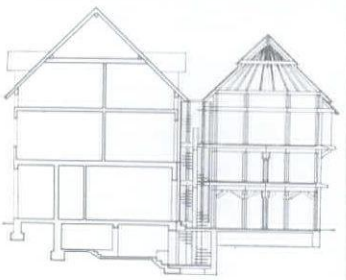
Office and Meeting Room
Lahr, West Germany
設計：Werkgruppe Lahr

この塔は，300年ほど前の住居兼店舗を，設計事務所に改装するにあたって増築されたものである．
設計者グループは，このラールという人口3万人ほどの都市を中心に，自治体の地域計画からコンペ，住宅など地域的に活動しはじめた若い建築家たちである．
設計のためのオフィスのある古い建物と，応接・会議部分からなるこの塔は，らせん階段によってスキップフロア状に接続されている．　塔の下のピロティを通って，2階の応接・秘書室部分に入ると，そこから古い建物へは半階上ったところに設計のオフィス，半階下ったところに資料室にというようにそれぞれつながっている．　塔の3階は柱のない会議スペースとなっている．
直径6.3mの八角形の平面をもつ，高さが13.5mのこの小さな塔は，積層材により柱・梁構造となっていて，中央の1本の柱と，周囲にはられた鉄筋によって支えられている．　窓は，かなりの大面積のガラスが木のサッシで支えられ，鉄筋でつるされたバルコニーと共に古い建物に調和させている屋根とはある種のふしぎな対照をなしている．　らせん階段も，木塊からけずり出したような力強いステップを組み合わせてあり，ディテール的にかなり興味深い造りとなっている．
積層材を用いた束・梁構造が，木構造に，古いゲルマンの民家を想わせる力強さを再びもたらしたといえようか．　周囲には，林と小川，古い工場と学校として休日用のキャンプがあって，まさに牧歌的自然ともいえる中に，森に面してこの塔は立っているのだが，単なる比喩ではなく構造的にいって文字通り1本の樹木になりきっているのである．　とはいっても，単に環境に溶けこんでいるというのでは決してなく，古い建物に対しても，自然に対しても，同一の構造を持ちながら対峙し，緊張感をもって共生しているというべきだろう．
〈ar　1981年1月号〉
〈db　1980年10月号〉







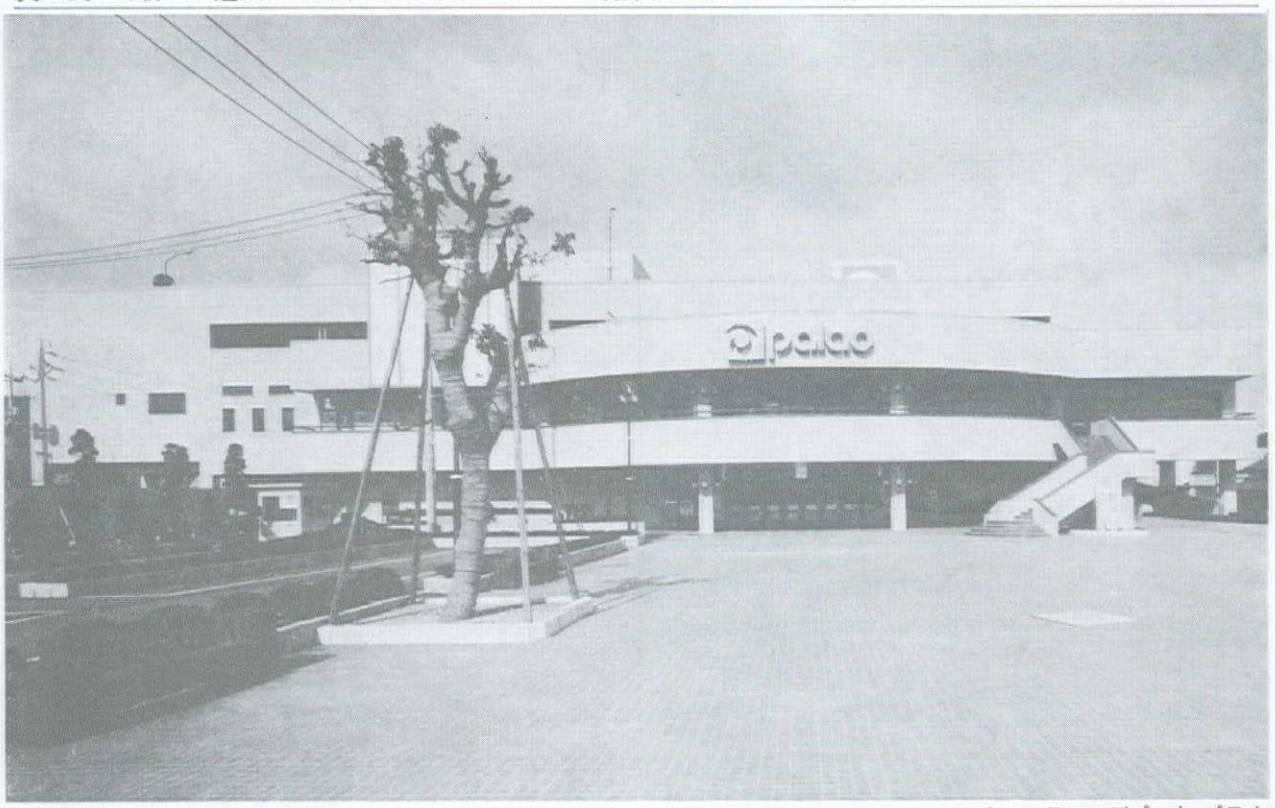


アンボンドPC鋼線を用いた

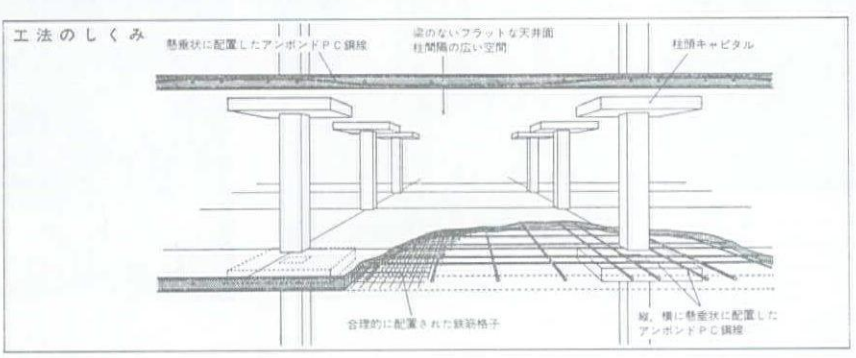
カジマ フラットスラブ工法

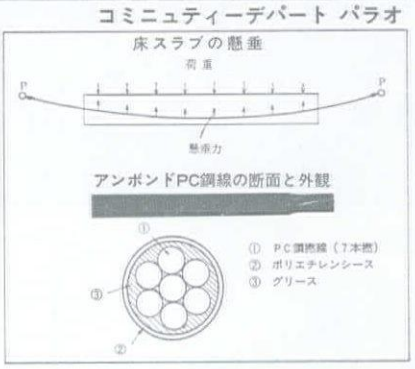
特許出願中

カジマ フラットスラブ工法は、梁がなく、床スラブを柱で直接支える構造で、電算による精密な応力解析により強度設計を行ない、床板にプレストレストを導入して撓みを防止しています。このためスパンの大きな梁型の出ない空間を極めて経済的に建設することが可能です。梁がないため鉄筋工事の省力化や型枠工事のシステム化が計られ工期短縮と品質の向上も併せて達成しており、ショッピングセンターや倉庫、工場などの中低層RC造建築に最適な工法です。



コミニュティーデパート パラオ





カジマ フラットスラブ工法のメリット〈構造・工法の特徴〉

- ■型枠，鉄筋工事の大幅な省力化による工期短縮とコストダウン
- ■床スラブの性能が向上するので柱間隔を広くできる。
- ■梁がないので配管、ダクト計画が容易で、施工性が向上する。
- ■階高を低くできるので日影上有利で、また階段面積を減らせる。
- ■型枠、鉄筋の施工精度が高く躯体の品質が高い。

実績

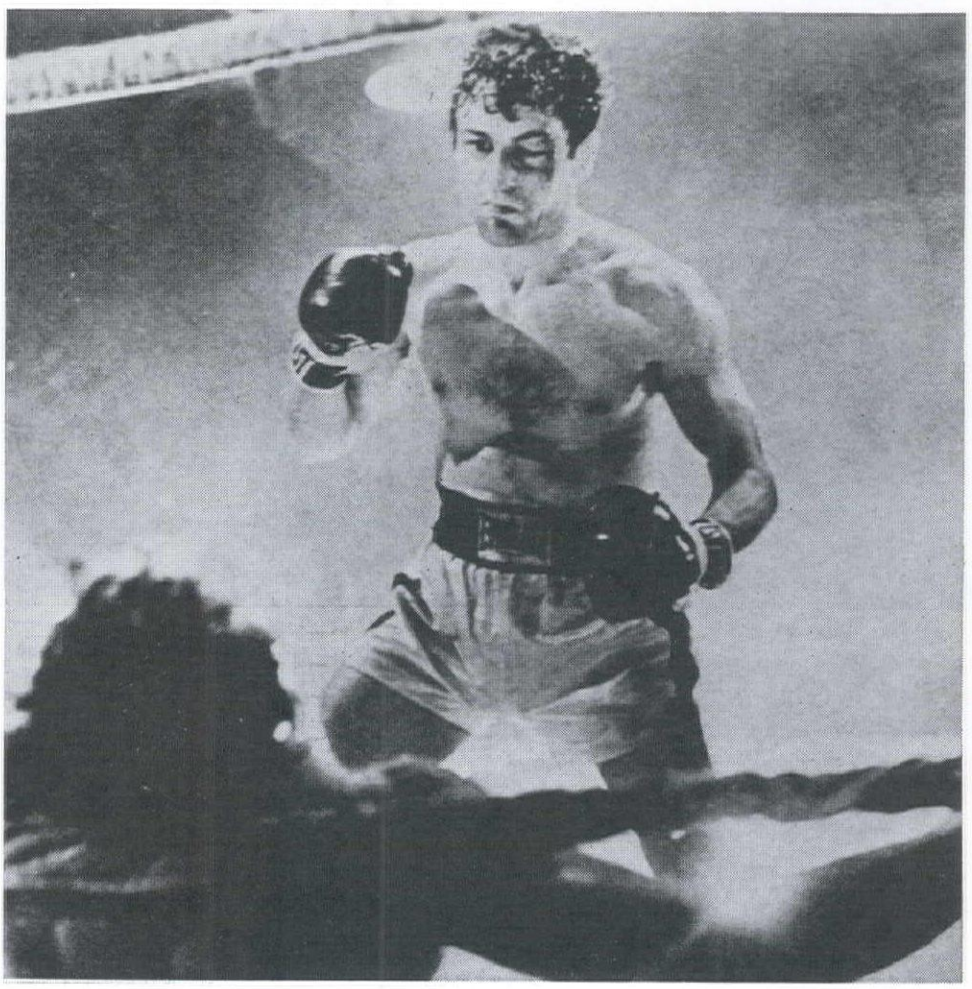
- ■店舗
  - ●東綿紡績レインボービル（1979・浜松）ニチイ宮竹店
  - ●コミュニティーデパート パラオ（1980・出雲）
  - ●第２矢野新興産ビル（1981・東京）ニチイ西新井店
  - ●埼玉工業第2ビル（1980・浦和）
- ■オフィス
  - ●中国電力㈱可部営業所（1980・広島県可部市）
- ■研修所
  - ●ヤマハピアノ技術研修所（1980・浜松）
- ■病院
  - ●愛誠病院（1981・東京・板橋）

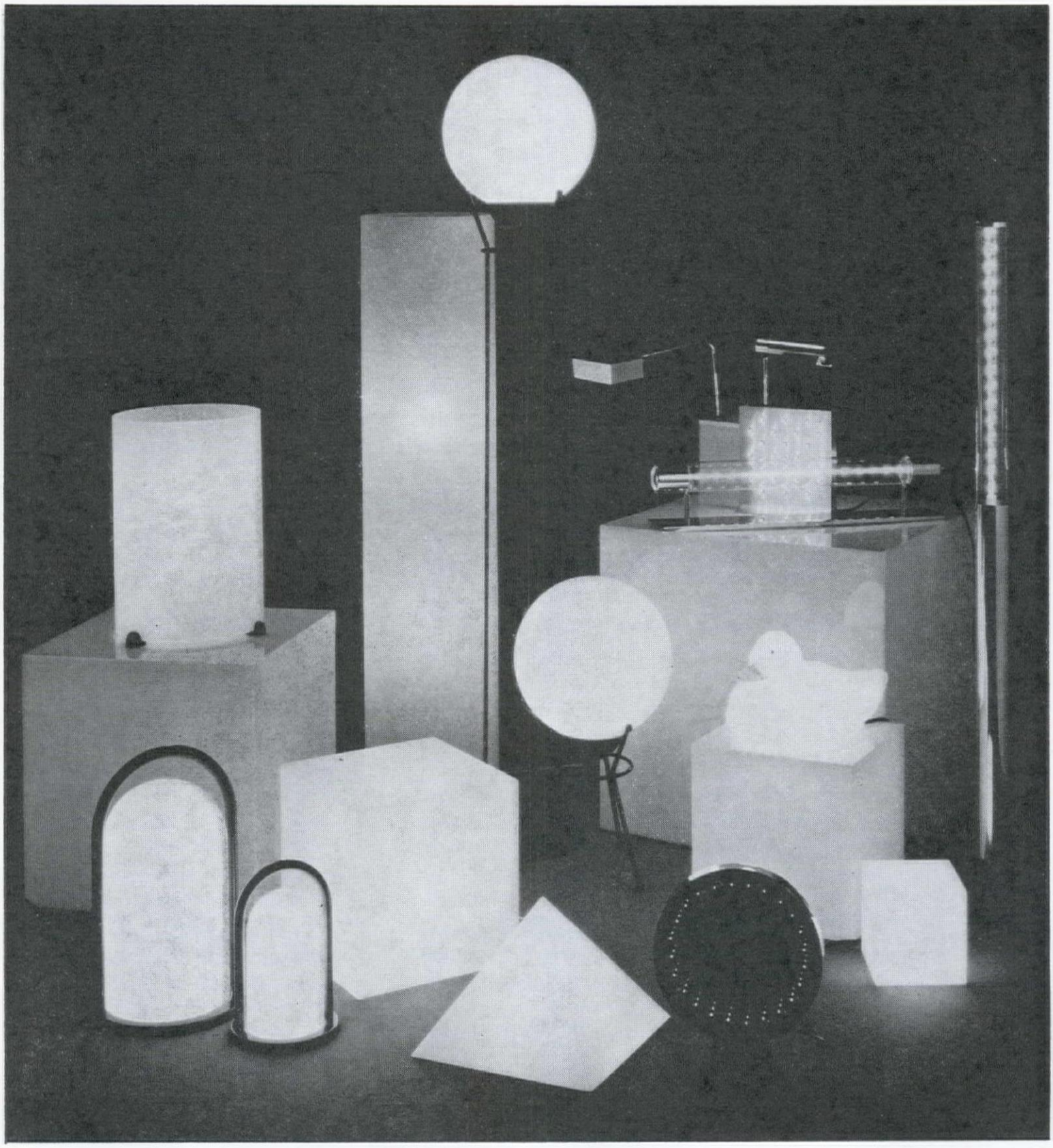
鹿島建設
KAJIMA CORPORATION

本社：〒107東京都港区元赤坂1-2-7
お問い合せ先 建築技術部(03)404-3311

レイジング・ブル《安藤忠雄》

「いやあ，たいへんやねェ」
開口一番，これが出るとき，安藤忠雄は絶好調である．
「つくる，いうことはいのち縮めてるんと同じやからね」
快調にジャブが操り出される．
「一作一作に全力投球やからね」
ワンツーがヒットする．
「もうしんどいねェ」
誘いのパンチが伸びる．
「ほなら安藤さん，もう手ェ抜いてやりはったらええんちゃいますか」
的はずれのカウンターが空を切る．　思う壺とばかりに，
「ものをつくる，いうことは，そんな甘いもんやない，思うけどねェ」
逆にアッパーをくらう．
「怒りをもってな，ものなんかつくられへんで」
伝家の宝刀，必殺のストレート！
かくして安藤忠雄に真向から挑みかかろうとすると，幾重のヘッドギアもプロテクターも役に立たない．　何故なら，ものとしての建築づくりのリングに上っては，かれに優るハードパンチの持ち主はまずいないから．
ロバート・デ・ニーロが今年のアカデミー主演男優賞を獲得した《レイジング・ブル》は，安藤忠雄お気に入りの映画である．
それは闘う男の物語である．　人生は闘いであり，どん底に落ちてもなおファイティング・ポーズをとり続ける男，それが主人公だ．　場末のクラブの薄汚れた楽屋，その鏡の前で，レイジング・ブル（怒れる牡牛）はその名のとおり，負けねえぞ，と呻くように，全身をこれ闘志にして奮い立つ．
安藤忠雄はもちろんどん底どころか，いま絶頂にいる．　仕事に油が乗りきった時期だ．　ただあらゆる芸術がなんらかの意味で逆境の所産であるように，安藤忠雄自身，自らをつねに精神的飢餓状態に追いつめようとする．　なまなかの人間にはとても真似できぬほどのヴァイタリティは，現実への，状況への怒りをてこに迸り出る種類のものだ．
「いつまで怒り続けられるか」　これが安藤忠雄の行動指針であり，その飢餓感がものづくりの技を磨くバネとなる．
建築という，まともにやれば本当に身を削るしかない行為を，身に引き受けて突き進む，ボクサーというよりファイター．　ものをつくる人間としての安藤忠雄を支えているのは，ひとえにこの怒りである．
一言で怒りといっても，これを10年間持続することは並大抵の人間には及びもつかぬ．　そこに安藤忠雄の仕事の迫力があり，鬼気迫る凄まじさもあるのであって，レイジング・ブルとオーバーラップする所似である．
こうした怒りを失って，いやあ，うまくなりましたネ，と煽てられ，ついその気になってずるずると，毒にも薬にもならないニコニコ建築を造り続けるようになると，老いは近いし，一個の建築家として生きている意味も，言うたらなんやけど，ないんちゃうかァ……．（聖）





照明の新しいかたち。

照明のありかたに新しい視点を求めつづけるマックス電機が、照明の新しいかたちを提案します。省エネルギー時代に対応した蛍光灯の店舗照明への導入、照明器具をディスプレイに生かすフット&フロアー、シンプルで完全度の高いペンダント・スポットライトなど、照明とトータルインテリアの関係を深く掘りさげました。

照明器具の専門メーカー
マックス電機
PROFESSIONAL LIGHTING FIXTURES

弊社の製品は下記営業所および全国代理店にてお求めください。

大阪市城東区鴫野西2-18-9 〒536 TEL (06) 967-0123(代)
東京都目黒区中目黒1-4-20 〒153 TEL (03) 793-0641(代)
福岡市博多区博多駅前4-5-1 〒812 TEL(092)431-7824(代)

個と世界——建築以前

子供というものは，日がな一日遊んでいて飽きることがない．　およそ退屈ということを知らずに，力一杯一日を過ごすと疲れて，眠りに落ちていく．　翌朝めざめればまた同じことを続けていく．　子供のこうした生活は実におもしろいものだが，それは子供が直接世界と語り合いながら生きているからなのだと僕は考えている．　幼少の頃は誰でもすばらしいアイディアの2～3はもっているものなのだが，大人たちを見まわすと発想が乏しい．　学校という社会化の訓練を強制される場に追いやられるようになるにつれて，当世のせちがらい気分が殺到としていた子供に侵入して，去勢され平均化された大人のできあがりとなる．　さもなければ落ちこぼれという具合である．

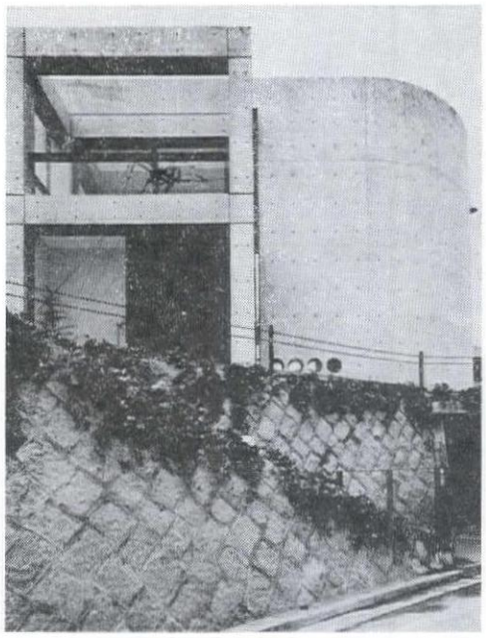
もっとも人間齢を重ねてくると何かしら既成のものにすがって生きていく，それが処世術，俗な世間で暮していくすべである．　子供の頃世界と語り合った記憶は忘れ去られ，流れの中で，社会化された私にさしたる根拠をもたないままに，俗な世間を泳いでいくのである．　これが，いわゆる普通の人のあり様である．

ところが，やっぱり人さまざまで中には不器用な人間がいて，どうしても子供の頃の記憶を忘れることができない．　小学生の頃，木工所の前で職人が木を細工するのをずうっと見ていたとか，自分も木くずをナイフで削って色々な形を作って遊んでいたとか，ゴチャゴチャした町の中で育ってきた，随分学校をサボったケンカもしたなどとあれこれいつまでも覚えている．

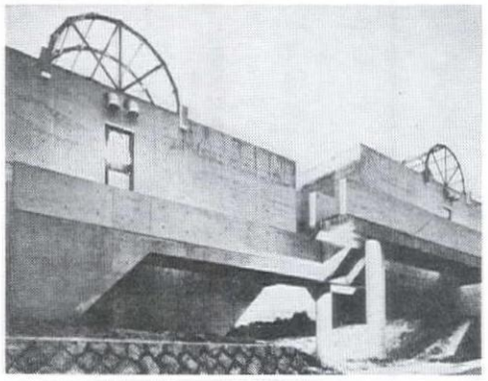
ややもすると流されて生きてしまうという時代的な条件は別にしても，一般に人間というものは今ある自分にそれ程深い疑念を持つことはない．　それはいかなる事情があるにせよ，個としてこの世界に生を受けた私という存在が我であって彼でないという暗黙の了解があって，その点に関してだけは安心しているからである．　しかし，もしも全く自分と同じ身体を持った同じ資質の人間がいて，しかも全く自分と違う考え方，感じ方を別の環境でしていたとすれば，彼の安心は簡単に吹き飛んでしまうだろう．　心理学でいうアイデンティティクライシスに彼は陥る．　感受性が豊かで鋭ければ世界と直接向きあっていた子供の時代から，風俗と付き合わざるを得ない大人の時代になる過程で，誰でも自らの想像力をもってして，この病を煩うものである．　彼は何とかして世界に我をあらしめようとする．　都市に，町に，人に，ものに，彼は自らの存在を深く刻み込んでゆく．

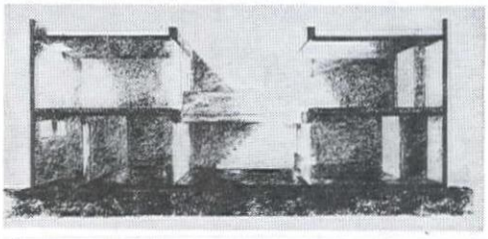
安藤忠雄の建築活動は，分析を拒む，ある種の強固な全体性をもっている．　それは個が世界と分割不可能であることの証しのように思えるのである．　（MU）

❶建築文化7611，JI 7611
❷建築文化7509，JI 7509，都市住宅・住宅第11集
❸都市住宅7702，新建築7702，建築文化7702，JI 7702
❹新建築7803，建築文化7803

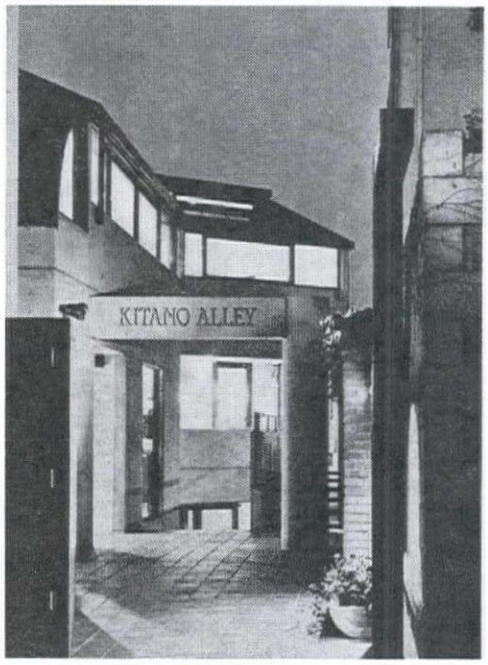


❶貫入（平林邸）／安藤忠雄建築研究所
❷双生観／安藤忠雄建築研究所
安藤が個というときそれは西欧近代の個人ではなくて，かつての日本の都市内共同体の中の個，具体的には大阪商人としての個である．　祖母から受けたという教育は浮世にあって人としていかにふるまうべきかを指示しており，その成果である安藤の個性は〈インテレクチャル〉な建築家たちの存在をかすませてしまう．緊張は快適と同様であるという信念も大阪商人の教育によるものだろう．



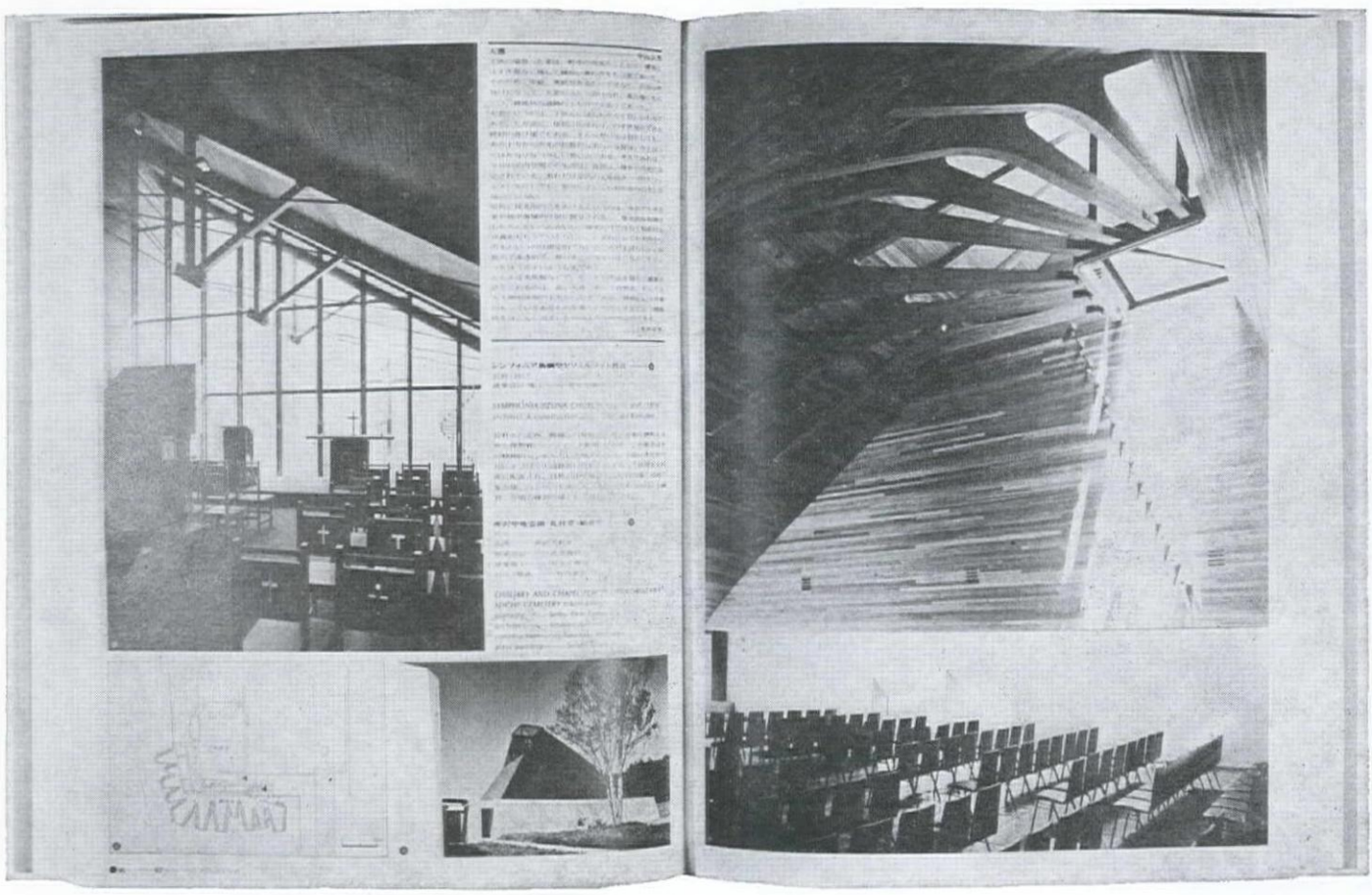


❸住吉の長屋（東邸）／安藤忠雄建築研究所
極めて個的であるが故，社会性をもって我々の前に現われてくる安藤の作品．　我のための行為が彼のためにもなるという方法がとられる．



❹北野アレイ／安藤忠雄建築研究所
天下太平な風情をみせる現代日本に，居ごこちの悪さを身体的に感じとりながらも，かつ現代的に行動する．　存在感としてはあくまで重く，しかしスマートで爽やかに．

今、それを、“光とのかかわり„において探る。



[日本のインテリアデザイン]
光とのかかわり

To Live with Lights
Interior Designs in Japan

掲載作品の分類

●プライベート・スペース

独立住宅、集合住宅、アパート、マンション、セカンドハウス、寮など

●パブリックエリア

学校、保育所、文化会館、美術館、博物館、教会、社寺、ホテル、交通機関など

●コマーシャルゾーン

喫茶店、レストラン、スナック、貴金属店、呉服店、百貨店、ショールームなど

380作品掲載

体裁　B4判変型　360頁　美麗函入上製本
装幀・レイアウト　勝井三雄
定価　14,800円

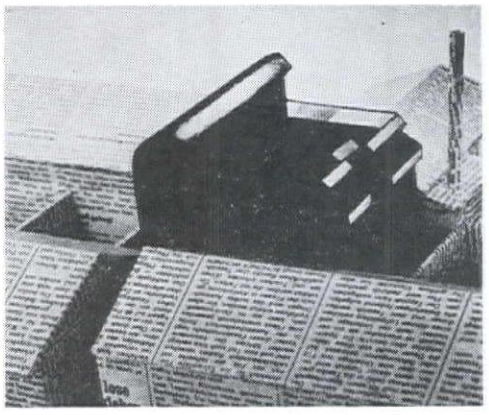
編集＝社団法人日本インテリアデザイナー協会
発行＝株式会社 六耀社
〒160 東京都新宿区新宿2-19-12静岡銀行ビルTEL.03-354-4020(代)

肉体化された嫌悪——都市ゲリラ

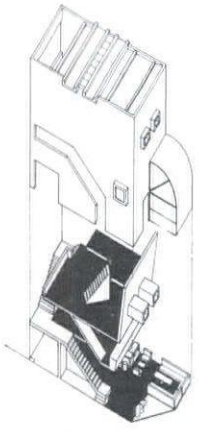
一見すればすぐに解ることではあるが，安藤忠雄の住宅作品にはふたつの系列がある．　それは丁度コルビュジエのドミノ系列とモノル系列にもなぞらえることが出来よう．　すなわちひとつは，貫入（平林邸）や領壁の家，真鍋邸などに代表されるような，住居としての場を規定するRCのフレームに装置的な独立壁がまとわりついて空間が形成される，という構成のドミノ系列である．　二種の構成要素間の対比，それのからみ合いによる多様な空間群，あくまでもシャープな美しさ，コンセプチュアルな雰囲気……そしてそれらの結果生れる豊かな表情は，このタイプを非常に魅力あるものとしていて，僕らの心を強く捉えて離さない．けれど真に安藤忠雄の問題意識を反映し，安藤忠雄を安藤忠雄たらしめているのは，もうひとつのいわばモノル系列の作品群である．　富島邸を出発点とし，住吉の長屋，ガラスブロックの家等々に代表されるこれらの住居は，過密な都市環境にあって，外部を拒絶する硬い殻の中に，中庭や光井戸を中心としたパラダイスをつくっている．　こう言ってしまえば至極単純な，何の変哲もない都市住宅の論理にすぎないだろう．けれどいったいどうしてこの簡単な論理と，それのくもの〉への直截的な翻訳が，これほどまでに強烈な訴えかけとして僕らに迫ってくるのだろうか．

総てを押し流す潮流のない今日，個々の建築家は，独自の論理やイメージ・原風景をもって，創作の拠り所としている．　さまざまな制約があるとはいえ，何をやっても自由で，それ故デザインの可能性も無数にある地平に立たされた時，建築家は気の遠くなるような思いの中で，何を〈拠り所〉として何を信じて設計を進めてゆけばよいのかという事を最も切実な問題として受止める．　そして多くは，ありそうもない幻想や無意味な論理にすがって，結果的に寡黙な建物を作る．しかし安藤忠雄の場合には，この〈拠り所〉はあくまでも都市の中に住まうことへの深い考慮から，否，大阪での長い実生活そのものから自然に生れてきたものなのである．　劣悪化・過密化と都市を批判することはたやすい．　またそれを拒絶するのも容易なことだろう．　しかし都市への嫌悪が，多くの人々のように，実は流行にのった取って付けたような表面的なマニフェストであるのならば，勢いその建築も偽善的なコミュニティ論に陥り，安藤忠雄ほどには強烈な〈煮えたぎる無関心〉の表情を持ち得ないのではなかろうか．彼ほど徹底的に一貫してその姿勢を保ち，さらには純化させてゆくことは不可能ではないか．　〈都市ゲリラ〉——それは思考に頼る観念的なアカデミズムを向こうにまわし，安藤忠雄自身の肉体から湧きいでる嫌悪を武器とした〈個〉からの逆襲なのである．　(E)

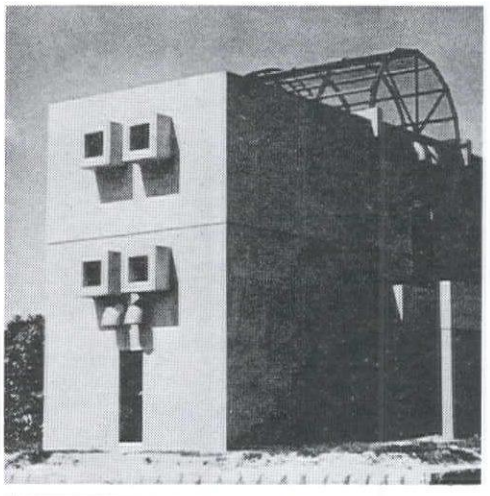
❶都市住宅・住宅第4集
❷建築文化7404，JI7404，都市住宅・住宅第6集
❸都市住宅・住宅第11集，建築文化7509，JI7509
❹新建築7905

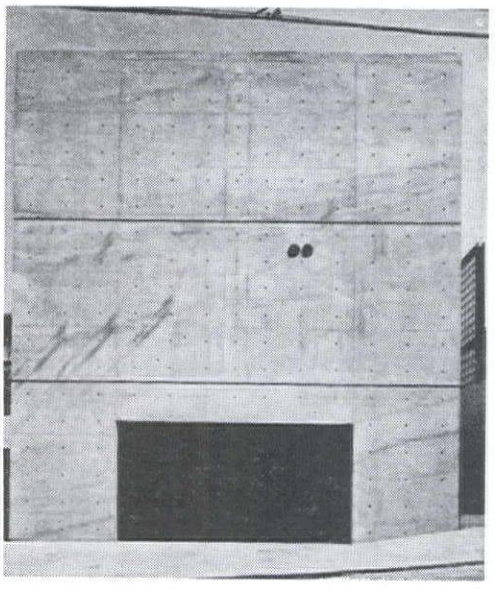


❶ゲリラII（小林邸）／安藤忠雄建築研究所
〈都市ゲリラ住居〉——「この子供じみた諧謔性をおびた名称と形態を所有した住居が，実は単に〈諧謔性〉としてすましてしまうことができぬ所に，過密化し，疲弊しきった大都市が，その体内に根深く所有した，深い悲しみがあるのではないか．」＊　そしてその〈悲しみ〉が激しい怒りとなって安藤忠雄の〈体内に根深く所有〉されているからこそ，彼はこのテーマを一貫して追求し，深く掘りさげて，力あるものとすることができたのではないだろうか．　＊都市ゲリラ住居《都市住宅・住宅第4集》



❷立見邸／安藤忠雄建築研究所
❸双生観／安藤忠雄建築研究所
❹ガラスブロックウォール（堀内邸）／安藤忠雄建築研究所
安藤忠雄の硬い外殻は，初期の立見邸においては，内外をつなげようとする〈ガラスBox〉という〈開かれた部分〉が付加されていたが，時と共にそれは消え去って，双生観にみられるように，筒形の窓だけをもつ有孔体へと変わってゆき，ついには住吉の長屋やガラスブロックウォールの如く，入口しかもたない壁体になってしまう．　外部との関係への姿勢が，このように時を経るにしたがって純化されてゆくということからもまた，安藤忠雄の劣悪化した都市への嫌悪が，すなわち心の底から湧きいでるものが，いかに強く肉体化されたものであるかを知ることができよう．





アルミ

スチール

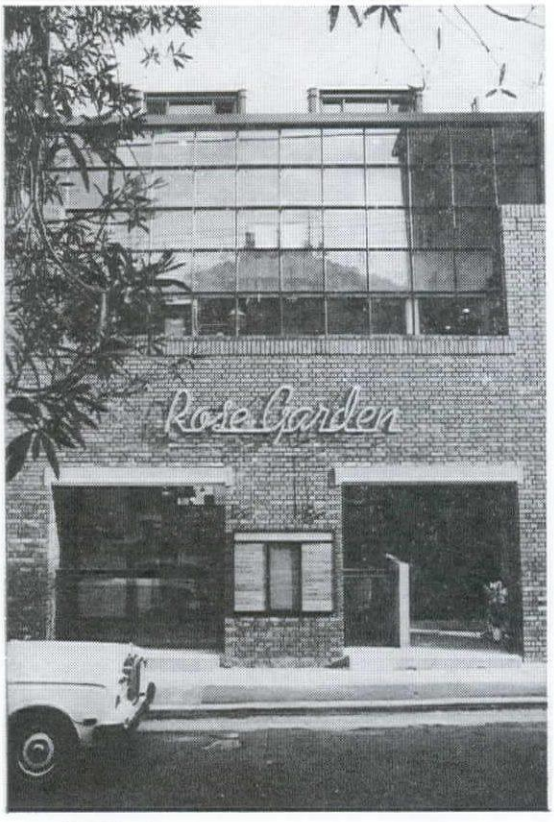
ステンレス

サッシ

ドア

カーテンウォール

設計・製造・施工



ローズ・ガーデン

浪速建材工業株式会社

大阪市西区新町1丁目4番26号

Tel. 06 (533) 6601

ハードボイルド・アーキテクト

鈴木博之が若手の一群の建築家についておもしろい指摘をしている．「彼らは誰ひとりとして『住宅作家』の道を歩もうとしていない——個性は，それぞれ別のものとして保持している．しかしながら彼らが共通してもっているのが，現実に対するアクチュアリティとでも称すべきものである．」*

すなわち繊細な感受性とタフな行動力——即私は某映画のコピーの文句が口をついた——「男はタフでなければ生きていけない．やさしくなければ生きている資格がない．」

このコピーにあたる台詞は当の《野性の証明》の中にはない．原典はチャンドラーの《プレイバック》の中の台詞である．しかしこの台詞のテーマ〈優しさと行動力の両立〉はハードボイルド小説に必須の主題として多くの作家のペンによって展開され，チャンドラーと何のかかわりもないハードボイルド小説《野性の証明》のキャッチフレーズともなったのである．

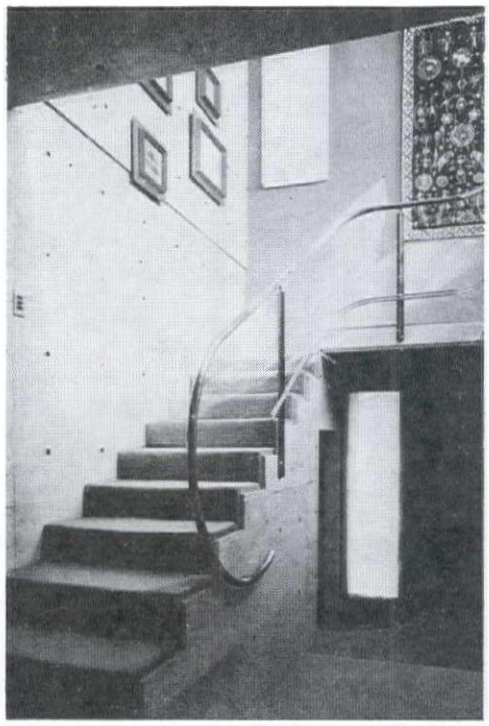
しかし，鈴木博之の方にたち返ってよく考えてみると，彼が先の引用で指摘した，毛綱，六角，象，伊東は，はたしてハードボイルドだろうか．彼らの印象はいいところスクランブルド・エッグである．ハードボイルドというならば，やはり安藤忠雄を挙げるべきではないだろうか．ボクシングで鍛えたといわれる引きしまった肉体．阪神間の大工を震え上がらせていると噂される必殺のパンチ．そして寡黙な男を彷彿とさせるその作風と，そこに漂う男のリリシズム．

これがハードボイルドでなくて何だろうか．安藤忠雄こそは，ハードボイルドであり，かつ，自らをハードボイルドに見せる，最高の演出家である．例えば石井和紘などは，いくら愛車の BMW2002 が高速で crush しても（車がさかだちしても）ハードボイルドにはなれないわけである．

チャンドラーの台詞については実はオチがあり，「男はタフでなければ生きていけない．やさしくなければ生きている資格がない．」は誤訳に近いそうである．原文は〈If I wasn't hard, I wouldn't be alive, If I couldn't ever be gentle, I wouldn't deserve to alive〉，〈やさしくなければ〉と角川流に訳すと〈hard〉から〈gentle〉への時に応じての変化という一番大事なものが落ちてしまう．タフでなおかつ優しい人間という曖昧な状態でいい気持ちになっているようでは，スクランブルド・エッグから脱出できない．〈hard〉と，〈gentle〉をいかに巧妙に使い分ければいいかは安藤忠雄にでも聞いてみなければわからない．（吾）

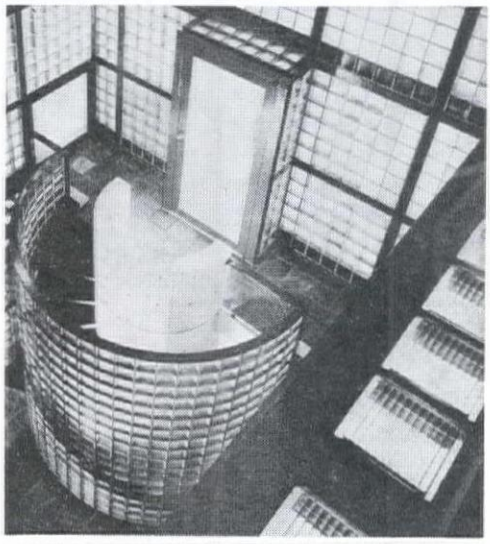
＊フロッタージュ現代建築の構図 8《新建築7909》

❶新建築8102
❷新建築7905
❸SD7811，新建築7811

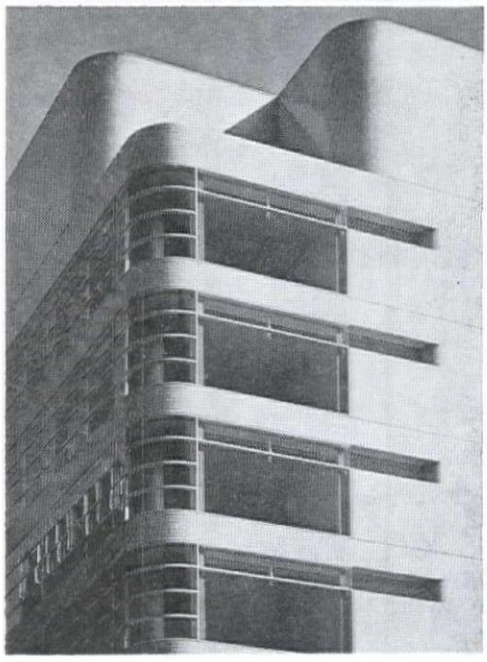




❶西沢邸／西沢文隆
安藤ファンの一人である西沢文隆の，やはりコンクリート打放しの住宅．gentle の大家がやると，やはり一味違います．



❷ガラスブロックの家（石原邸）／安藤忠雄建築研究所
押野見邦英は，安藤の特質をコンセプチュアルであり，かつコンテクスチュアルであることに見出している．すなわち多くの建築家がコンセプチュアルな領域につかって失敗しているが，安藤はコンテクスチュアルな考えにもとづく技術の力で，コンセプチュアルな領域から自らをひきあげることに成功しているというのである．これも〈gentle〉であり，かつ〈hard〉であるというハードボイルド的特質の一端の説明になっている．

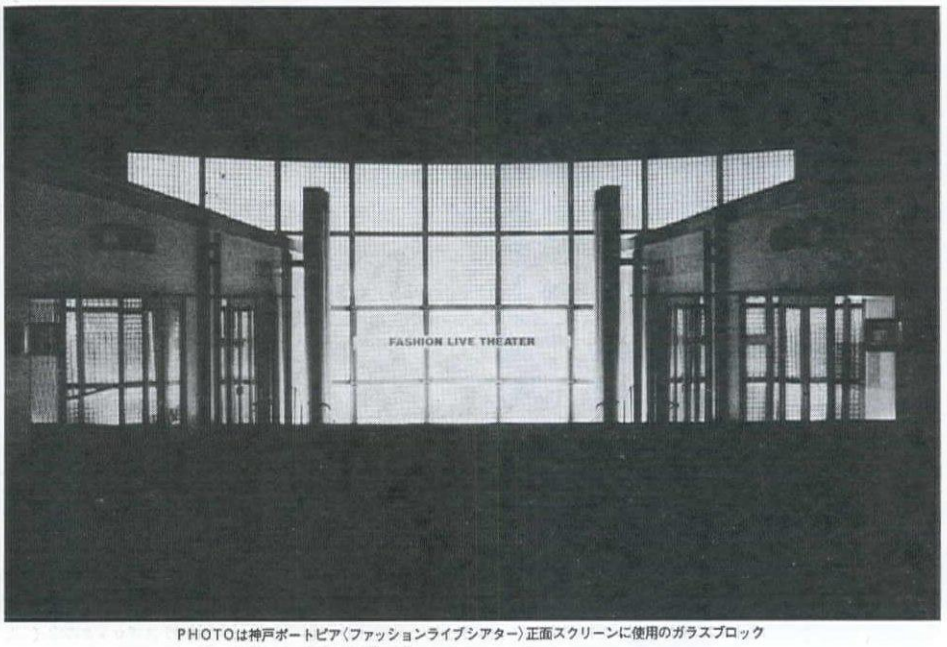


❸八重州ブックセンター／鹿島建設建築設計本部
コンセプチュアルな構想と技術力の両力を提唱する押野見チームの作品．ハードボイルドというよりは，ポーチド・エッグ風優雅さ．

光と影の叙情

グローバル・モニュメント〈ガラスブロック〉

重厚な立体図を描きだすガラスブロック
そこに存在するものは うまくコントロールされた自然の叙情
そして光と影がクロスオーバーするムービーな小宇宙——



PHOTOは神戸ポートピア〈ファッションライブシアター〉正面スクリーンに使用のガラスブロック

GB
光のアーキテクチュア Glass Block

日本電気硝子株式会社

大阪営業部／大阪市北区角田町1-1 〒530 ☎(06)312-2971　東京営業部／東京都品川区東大井1丁目6-1 〒140 ☎(03)474-0151

反逆児の自信

安藤忠雄という建築家は，たいそうな自信家である．ちなみに彼との会話の中から自信のほどを思わせる部分を思い起こしてみよう．

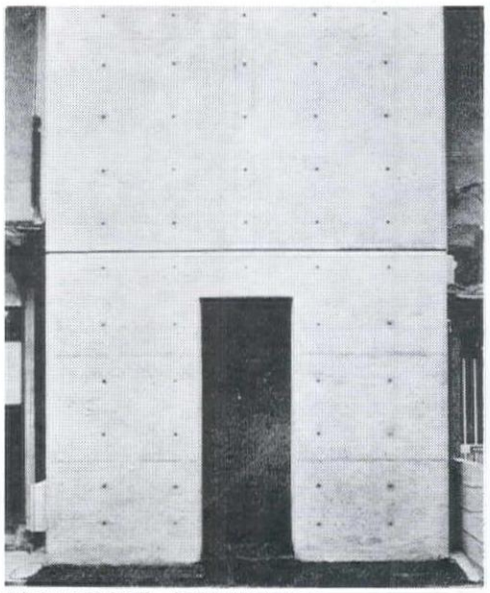
「何故コンクリート打放しなのですか．」「僕は本当は木も好きなんですよ．　でも今は本当に木らしい木はなかなか手に入らないし，べらぼうに高いでしょう．だから質感のある材料ということで言えば，やはりコンクリートしかないと思うんですよ．　もしいくら金をかけてもいいという仕事があれば立派に木の建築をやってみせますよ．」——自分の眼にかなわない材料は使う気がしないといわんばかりの自信．

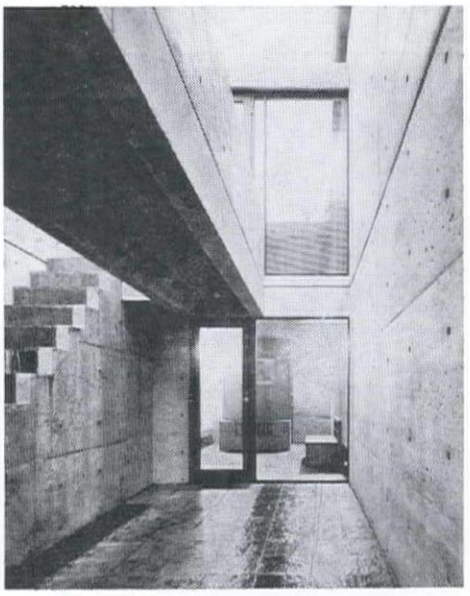
「安藤さんは，世界各地を旅行して，かなりいろいろな建築を見ていらっしゃるようですが，その中で強く影響を受けた建築や建築家はありますか」「実際僕ほど一生懸命建築を見てまわった人間はそう多くないでしょうね．　でも僕は建築を，模倣するために見るのではないのです．　既存の建築と同じような建築を作らないために見るのです．　若い頃はアアルトなんか好きだったんですけどね．」——創るためにはまず見なければならないという今日の風潮とは全く逆で，この世の中に既にあるようなものは創らない，つまり創らないために見るという確固たる独創に対する自信．

「安藤さんの住宅に対する住み手の評判はいかがですか」「今の世の中はすべてが甘ったるいでしょう．でも生活というものは，もっとカチッとしてなければならないと思うんですよ．　柔かいソファーに寝そべってテレビをダラダラと見るといったことなぞは甘ったるい生活の最たるものだと思うんです．　本当はテレビなんかいらないんですよ．　カチッとした椅子にカチッと座わる．　そして自分の本当にやりたいことをやる．　これこそが生活でしょう．　クライアントも最初は打放しだけはやめてくれと言いますよ．　でも次第に生活のイメージについて僕の主張に共鳴してくれて，それであのような住宅ができるわけです．僕の住宅は写真で見るのとはまた違って実際住めますよ．」——安藤先生，恐れ入りますという感じである．

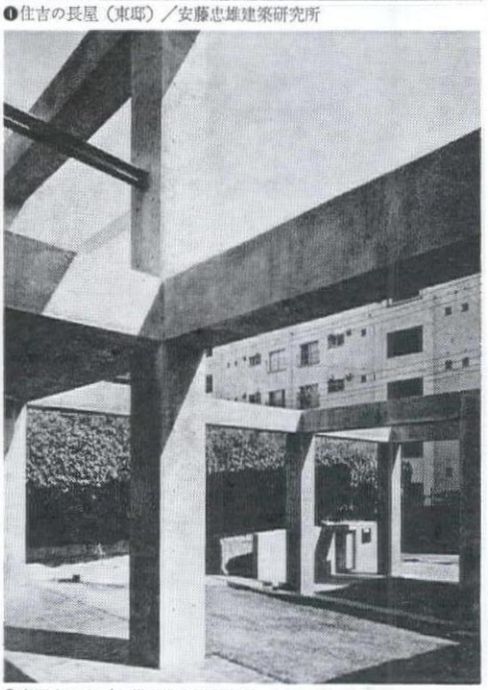
思うに今日の建築界にあって安藤忠雄ほど反逆児というレッテルの似合う建築家はそう多くはないだろう．エリートになるための道は開かれており社会も彼らを信頼するが，反逆児になるためには自ら道を探さねばならないし，社会は必ずしも彼を保護しない．　従って，逆説的だが，反逆は大変な勇気と努力を必要とする．　今の安藤忠雄の自信は，勇気と努力の末に自らを確立した者の自信である．　しかし反逆はこれからが難しい．　社会には認められた，そして多くのエピゴーネンが誕生する．　その中でいかにして反逆児たることを維持し続けるか．　反逆児たり続けるかそれとも成熟した大人になるか，これからが問題だ．（K）

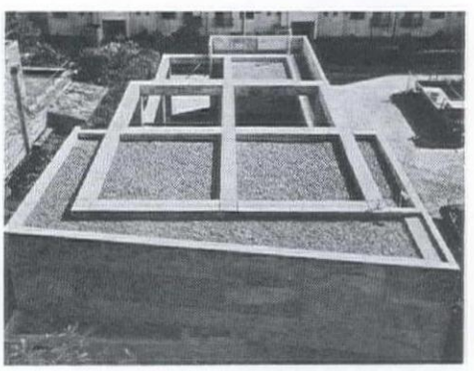
❶都市住宅7702，新建築7702，建築文化7702，JI7702
❷新建築7811，建築文化7811
❸新建築8002



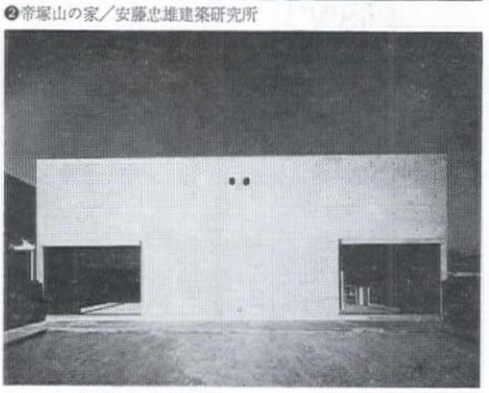


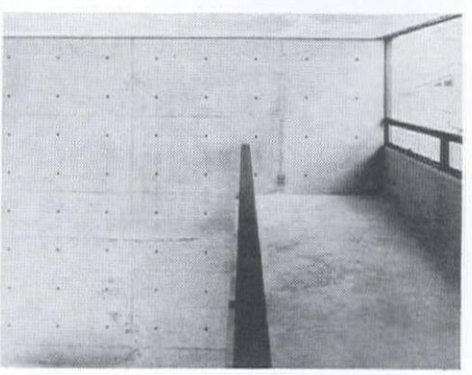
❶住吉の長屋（東邸）／安藤忠雄建築研究所





❷帝塚山の家／安藤忠雄建築研究所





❸上田邸／安藤忠雄建築研究所

安藤忠雄がコンクリート打放し住宅において追求した主題は時間と共に変化しつつある．　例えば〈住吉の長屋〉では人間の個の生活の充実，情念の宿る住宅が主題であり，帝塚山の住宅ではグリッドと壁の関係性が，そして最近の上田邸では床・壁・天井を総コンクリート打放しとし，それらの作り出すヴォリューム・採光の有様等が主題となっている．　この推移は，彼がコンクリートによる表現そのものに自信をつけてきたことを意味する．　が，反逆を志す者は常にその出発点を省みなければなるまい．　手段が先行して目的が見失われて失敗した例も多いのだから．　それは個人の情念を呼び起こす閉じた住居ではなかったか．　いや，それとも彼は既に別の目的へと新たな反逆を企てつつあるのだろうか．

光と影は刻々とドラマを生む。

物言う素材か——スクラッチ・タイル

スクラッチとは、《SCRATCH》と書いて《ひっかく》という意味。
スクラッチ・タイルとは、まさにこの言葉の通り、タイル表面がそうなっていて、大正、昭和初期を通じてよく普及したいわばタイルのクラシック派です。このタイルの特徴は、「しめ焼きの緻密で素朴な肌理(きめ)の味」と「そうした肌理が表わす影の変化」にあり、春夏秋冬、間断なく投射される光に対応していきます。
今、現代の建築が冷たい無機的なものから、ヒューマンで温かい有機的なものに移ろうとする時、『物言う素材——スクラッチ・タイル』は、再び見直されようとしているのです。



■カタログ・資料等ご希望の方はお申込下さい。

明日をになう建築用セラミック

名陶石

- 建築の要求に応える本格的外装用「拓器質タイル」
- 「日本のやきもの」の伝統を継承した「工芸クラフト・タイル」
- 「イタリアとドイツ」で焼かれた「装飾用タイル」
- ドイツ・ガイル社製「水泳プール用セラミック・タイル」
- 「住まいのやきもの」陶製ファニチャー

本社：〒604 京都市中京区御池御幸町西・北側 ☎(075)222-2311㈹

- 東京営業所 ☎(03) 502-3261㈹
- 大阪営業所 ☎(06) 943-1536㈹
- 福岡営業所 ☎(092)271-3213㈹
- 京都営業所 ☎(075)222-2311㈹
- 仙台営業所 ☎(0222)63-2818㈹
- 高松出張所 ☎(0878)35-0311㈹
- 名古屋営業所 ☎(052)971-2315㈹
- 札幌駐在員事務所 ☎(011)642-8769㈹
- 盛岡駐在員事務所 ☎(0196)38-1305㈹
- 広島駐在員事務所 ☎(0822)49-7310㈹
- 鹿児島駐在員事務所 ☎(0992)26-6599㈹
- 中央物流管理センター ☎(05725)5-5105㈹

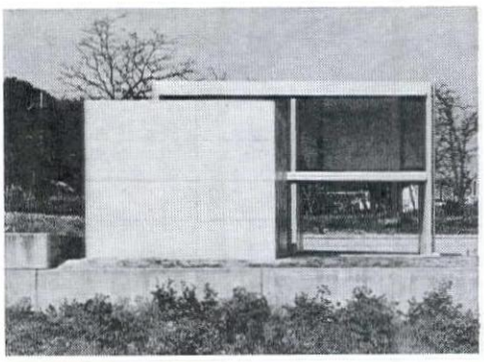
右を向いても左を見ても

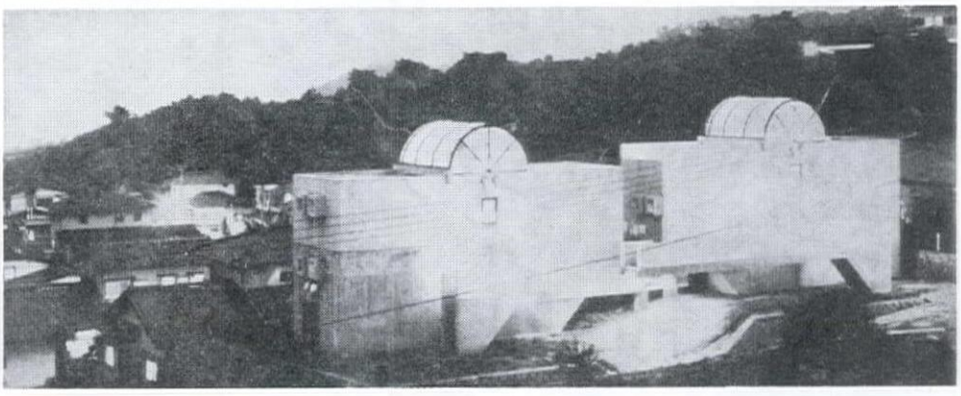
建築界には古くから〈部分〉と〈全体〉という二項問答があるようだ．　相対的にどちらに重きをおくか(あるいは感じられるか)によって時代区分を試みることもできる．　この両者は時の流れの中で互いに繰り返し現われる．　そして今はどうやら〈部分〉が主流の時代であるらしい．　それは例えば次のふたつの現象からも把えることができる．　ひとつは〈modernism＝全体〉，〈post-modernism＝部分〉という図式からである．　部分を解放し，そこにさまざまな意味を集約する．　しかしそれが束の間の自由の後，知的ゲームに堕して行くのに多くの時は用しなかった．　所詮建築は暗号解読のゲームではない．　それぞれの部分がゲームの進行上必要なものであることは納得できてもそれ以上のものではない．　もうひとつの現象は住宅雑誌に月々掲載される New Family 建築ほのぼの家族といったスタイルのエスカレートぶりに見られる．　建築ボキャブラリーの寄せ集め，一点豪華主義など．　つまりは部分の雑多な集合．　ふたつの現象に見られることをひと言に集約すれば，全体像の欠落である．　建築の目的はさまざまである．　しかし建築が建築であることの証(あかし)として人間の感動を要求する限り，人間の感性に訴えかける〈全体〉が失われてはならないはずである．　右を向いても左を見ても，今は唯々騒がしい．

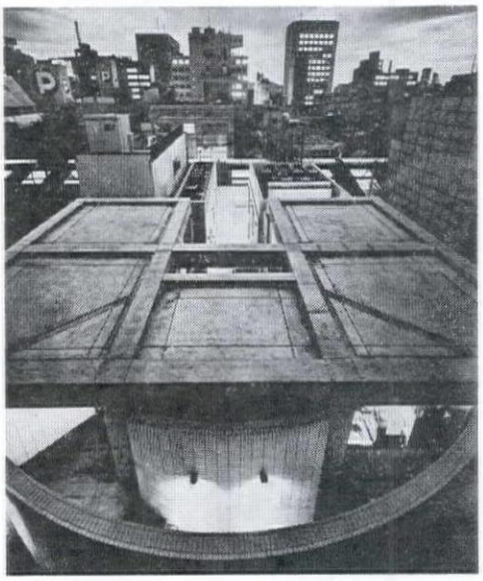
このような状況にあって安藤忠雄の建築はむしろ心地良い．　たとえクッションのないリビングであろうと，ひやりとする廊下であろうと，確かにその空間は住み手を限定するであろうが，そこにはしっかりとした建築としての全体像がある．　そしてそこから想起される生活がある．　それは人々に安心感を与え，やすらぎさえ覚える．　加うるに安藤忠雄の建築は都市のコンテクストを読み取っている．　それは〈住吉の長屋〉等に連想されるアナロジーとしての形態ではなく，その土地固有の気候風土，それに基づき育くまれてきた建築ボキャブラリーあるいは形に対する人々の好み，そういうものが大阪商人さながら，したたかに読み込まれている．　それがひとサイクル前の〈全体〉の時代の建築とは明らかに異ったものにしている．

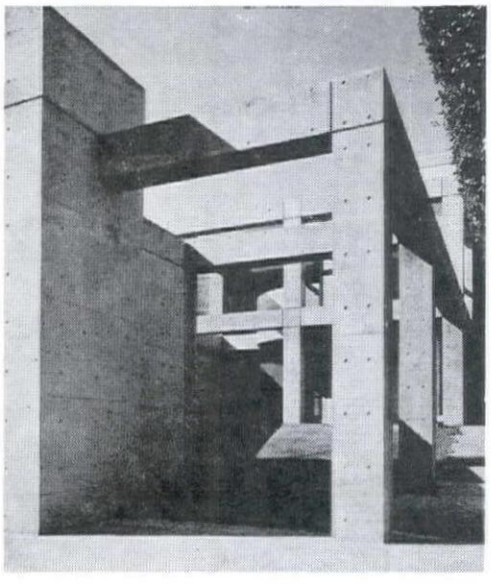
シベリア鉄道をヨーロッパに向い，建築をむさぼり見つめ，その一方，自ら歩いた街並みを今でも心に刻み付けていると語る安藤忠雄．　空間の有する素朴な感動性を現在の日本の都市の中で具現化している数少ない建築家である．　(KI)

❶新建築8002
❷都市住宅・住宅第11集，建築文化7509，JI7509
❸新建築8005，建築文化8005，JI8005
❹新建築7811，建築文化7811









❶松谷邸／安藤忠雄建築研究所
❷双生観／安藤忠雄建築研究所
❸STEP／安藤忠雄建築研究所
❹帝塚山の家／安藤忠雄建築研究所

建築の全体像を呈示する必要性と，それによりもたらされる都市空間への参加．　我々が今求めている建築像のひとつの可能性をこれらの作品に感じる．

レイアウト：田中多恵子



パイプが結ぶ大きな信頼。

時代の要請に応えたステンレスパイプ配管システム〈フローメイト〉

ステンレスパイプ配管に作業性と経済性をとり入れた月星印ステンレス配管システム〈フローメイト〉。発売以来、多くの分野で確かな評価をいただき、着実に実績を上げています。その最大の特長は素材から製品まで一貫生産されていることで、高品質でムラがなく、大量生産によって安定した価格でお届けできます。さらに、ステンレスパイプ配管の総合システムとして、パイプ、継手、部材加工から工具類、施工技術までを一括提供。配管計画にあわせた部材加工を事前に行なうので現場作業も簡単でスピーディ。フローメイトは、時代の要請に応えたステンレスパイプ配管の主流として、今後も皆様のご信頼に、お応えしてまいります。

日新製鋼

給水・給湯・冷暖房用

月星印ステンレスパイプ配管システム　フローメイト

■お問合せは　●本社〒100 東京都千代田区丸の内3丁目4番1号（新国際ビル）☎03(216)5511(大代)　●大阪支社〒541 大阪市東区大川町1番地（日土地淀屋橋ビル）☎06(202)1331(大代)　●名古屋支社〒450 名古屋市中村区名駅3丁目25番9号（堀内ビル）☎052(582)6061(代)　●札幌営業所☎011(241)7524(代)　●広島営業所☎0822(48)4611(代)　●福岡営業所☎092(781)1251(代)　●仙台営業所☎0222(22)5835　●新潟営業所☎0252(43)3491　●富山営業所☎0764(33)8011　●岡山営業所☎0862(31)4355　●高松営業所☎0878(51)9756

SD (SPACE DESIGN)
Back Issues and Price Lists
1977—1981
Price include seamail postage fee.
*** = hardcover edition**

SD

7701 + 7702 **$17.00***
Alvar Aalto : Writings by Juhani Pallasmaa, Michele Merckling

7801 **$12.00**
Richard Meier 1961–1977 : Bronx D.C. The Atheneum, etc.

7804 **$15.00***
Kisho Kurokawa : Extensive Works of Kisho Kurokawa

7901 **$14.00**
Kazuo Shinohara : All Works of Kazuo Shinohara

7902 **$6.50**
New Wave of the Ecole des Beaux-Arts : F. Montes, J. Buffi, etc.

7903 **$6.50**
Charles R. Mackintosh : Transparent superimposition of Images, etc.

7904 **$6.50**
Gerkan, Marg and Partner 1966–78 : Tegel Airport, Pahlavi Library, etc.

7905 **$7.50**
Recent Works of SOM : Weyerhaeuser Technology Center, etc.

7906 **$17.00***
Fumihiko Maki : Urban Design & Collective Form, etc.

7907 **$6.50**
Anthony Lumsden (DMJM), Deer & Company Administrative Center

7908 **$17.00***
Kim Swoo Geun—Korean Architect : Masan Cathedral, etc.

7909 **$6.50**
Recent Works of HOK, Another Form of Wooden Space

7910 **$6.50**
Giovanni Michelucci : Writings by Fabio Naldi, Shigetake Nagao,

7911 **$7.50**
Lloyd Wright : Writing by Bruce Goff and Erick Wright, etc.

7912 **$6.50**
Ettore Sottsass Jr. : Latest Projects, Five Lamps by P.A. King

8001 **$17.00***
Kenzo Tange : Hanae Mori Building, University of Oran, etc.

8002 **$7.50**
Architectural History of Amsterdam : Amsterdam Stock Exchange, etc.

8003 **$8.50**
Architecture by Team—A case of CRS : Paul Kennon and CRS, etc.

8004 **$6.50**
Recent Works of Isao Hosoe, Foster Associates : Sainsbury Center

Please enter my subscription to
Space Design (SD)
Starting in _____, 1981

☐new subscription
☐12 issues $80.00 (seamail postage included)
☐24 issues $150.00 (seamail postage included)

The amount is being sent in advance by :
☐international money order
☐enclosed check

Name
Profession
Address
Signature

Please register my order for the following back issues of **SD.**

The amount is being sent in advance by :
☐international money order
☐enclosed check

Name
Profession
Adress
Signature

POST CARD

stamp

Subscription Department

SD

Space Design

Kajima Institute Publishing, Co., Ltd.

5–13 Akasaka 6–chome, Minato-ku,

Tokyo, 107 JAPAN

POST CARD

stamp

Subscription Department

SD

Space Design

Kajima Institute Publishing, Co., Ltd.

5–13 Akasaka 6–chome, Minato-ku,

Tokyo, 107 JAPAN

8005 **$6.50**
Classical Viennese School in Architecture

8006 **$15.00**
Masako Hayashi : All Works of Masako Hayashi

8007 **$6.50**
Frank O. Gehry : Gehry Residence, etc.

8008 **$6.50**
Angelo Mangiarotti : Recent Works, SOM : Miami University Art Museum

8009 **$6.50**
A New Phase of Cesar Pelli : MOMA Tower, etc.

8010 **$14.00**
Metabolist Kiyonori Kikutake : On the Nation of Replaceability, etc.

8011 **$6.50**
Bird's-eye View of Ital Design, Inspired Flairs G. Giugiaro

8012 **$6.50**
American Mural Painting Today : R. Haas, etc.

8101 **$15.00**
Andrea Palladio : Contemporary Significance of Palladio, etc.

8102 **$8.00**
Harry Seidler 1948–1980 : Ethic and Form, etc.

8103 **$6.50**
Neo-Classicism : Post-Modernism and Neo Classicism, etc.

8104 **$6.50**
Recent Works of Gunnar Birkerts, Jean-Jacques Lequeu

8105 **$10.00**
In Memory of Gio Ponti

8106

都市住宅

特集｜低層集合住宅を考える—⓫

いま再び<媒介領域>について＝北原理雄

<媒介領域>を手掛かりとして＝清田育男

ガーデン南山手　設計＝TRIAD 建築設計事務所

ハイツ千隈　設計＝三浦紀之建築工房

ネオハイツ・ベルヴュ　設計＝藏設計

茨城県営双葉台団地　設計＝現代計画研究所＋山下和正建築研究所

ビラ・サピエンザ　設計＝坂倉建築研究所

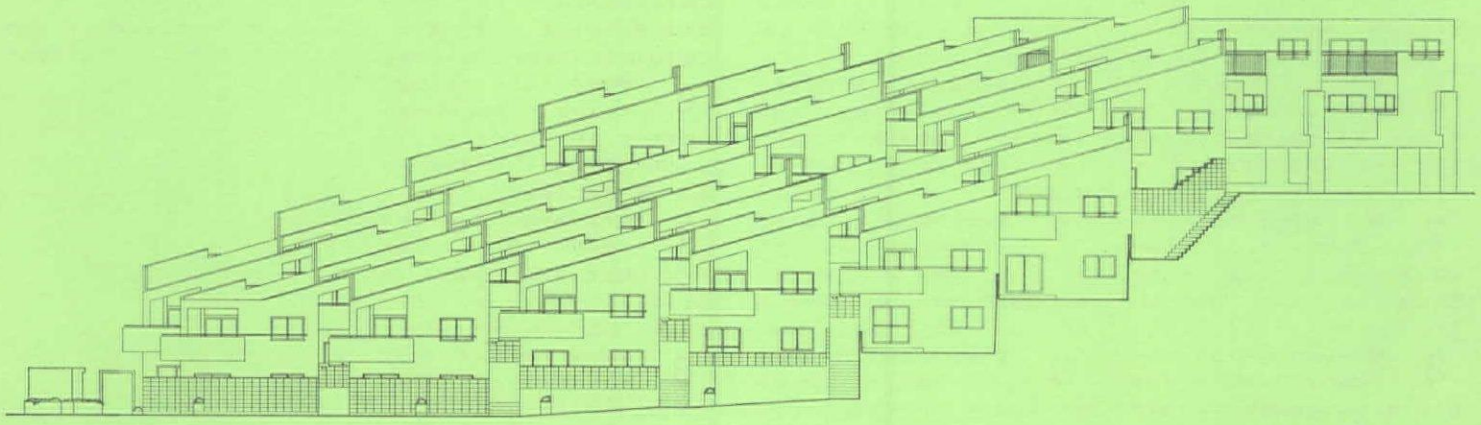
コート諏訪山　設計＝圓堂建築設計事務所

ハイツ上目黒　設計＝ワークショップ

ガーデン羽根木　設計＝黒木実建築研究室

鷺沼　テラス37　設計＝SUM 建築研究所

パセオ三光坂　設計＝TRIAD 建築設計事務所



低層集合住宅を考える

本書は好評を博した<都市住宅>誌の特集<低層集合住宅を考える①～⑩>の合本保存版です.

低層集合住宅を考える①

座談会：低層集合住宅は居住環境改善の梃子となるか？——柴田徳衛＋山東良文＋前田尚美＋黒沢隆

インタヴュー：10人の建築家に<低層・集合>を問う——大谷幸夫，菊竹清訓，杉浦進，恩賀宗一郎，戎良男　ほか

論：ハウジングの選択—アメリカに見る集合住宅の動向／英国のハウジング私見＝小川守之／英国の都市づくりの理論的変遷＝新居千秋／低層高密度集合住宅実現への課程＝伊藤哲夫／集合住宅設計と住宅地計画の動向＝鈴木成文／居住空間の構成システム＝西原清之／住居形態からの考察＝藤本昌也／都市と住宅の狭間で＝中尾明

ケーススタディ：ハーロー・ニュータウン／カンバーノールド・ニュータウン／ランコーン・ニュータウン　ほか

A4変型　154頁　定価2,900円

低層集合住宅を考える②

都市性と低層集合住宅＝黒沢隆／住戸型と密度＝黒沢隆，杉山隆子／集合方法と団地の質＝板井宝一郎，鄭勲／集合の単位と方法について＝恩賀宗一郎

ライブタウン浜田山

全体構想＝エコーブランニングオフィス，設計＝現代都市建築設計事務所

準接地型住宅の理論と実践＝藤本昌也

茨城県営六番池団地

設計＝現代計画研究所

六番池団地調査＝鈴木成文，杉山茂一

茨城県営会神原団地

設計＝現代計画研究所・三上設計共同企業体

茨城・風土・住宅＝鎌田宜夫／低層集合住宅の工業化工法＝山下和正／今日の低層集合住宅の課題＝内井昭蔵

A4変型　122頁　定価2,900円

低層集合住宅を考える③

論：住宅VS.ハウジング＝サム・デーヴィス／アメリカの低層集合住宅＝六鹿正治／カリフォルニアの風土と文化とデザイン＝内藤徹男／仮設的な空間＝大竹玉郎／住意識の変化と商品企画＝中野厚仁／タウンハウス居よいか住みよいか＝白井順二／実践的方法の展開＝加藤大樹

ケーススタディ：ザ・ガーデンズ／ザ・カリフォルニアン／ランチョ・サン・ホアキン／セント・フランシス・スクエア／ヒラリタ・ハウジング／ローレン・ミラー・ホームズ／ビンガムトン・ハウジング／パーチェス・ハウジング／グレン・ブルック／カヴァナーズ・スクエア／ジ・アイランズ／ブロモントリー・ポイント／マリナー・スクエア／タイズフォール／チャーチ・ストリート・サウス他全42例

A4変型　178頁　定価3,200円

低層集合住宅を考える④

座談会：居住環境形成における民間の力・公共の役割——恩賀宗一郎＋清田育男＋村尾晃＋田巻博道

ベルエール芦屋　設計＝竹中工務店大阪本店設計部／ライブタウン沼袋　設計＝エコーブランニングオフィス／ガーデン目黒，ガーデン国立，ガーデン下落合　設計＝TRIAD 建築設計事務所／ユーロハイツ駒沢　設計＝小出建築設計事務所／ビラ・ノーバ　設計＝坂倉建築研究所／ハイツ飯倉，ハイツ千隈　設計＝三浦紀之建築工房／グリーンメゾンいずみ野　設計＝建築プラス環境設計事務所／藤ケ丘タウンハウス　設計＝SUM 建築研究所

住宅生産・自由競争の旗手たち＝田巻博道

A4変型　136頁　定価3,200円

SD 1978→81

●：特集　ONS：Nice Space　OIA：イマジナリー・アーキテクチュア　ORMH：近代住宅の再発見　OMO：モニュメント　ON：ニッポン　OP：PARIS

1978

1
●リチャード・マイヤー／スミス邸，ダグラス邸，ブロンクスほか主要全作品　対談＝R. マイヤー＋槇文彦　文＝R. マイヤー，二川幸夫，藤井博巳，富永譲　○かたち＝菊竹清訓　○NS ストックホルム市庁舎

2
●ニューヨーク州立大学分校／G. バーカーツ　●集落は何を語るか／六番池団地＋会神原団地，集落調査ノート○かたち＝高橋正人　○NS ヴィラ・デステ　○IA ⑧ B.チュミ　○ORMH ストムメールカーデの住宅

3
●現代建築の新思潮：フォルマリズム・リアリズム・コンテクスチュアリズム② R. ボニカルツィ，G. グラッシほか　文＝多木浩二，A. ロッシ，八束はじめ　ほか　○かたち＝戸村浩　○NS 佛國寺

4
●黒川紀章／国立民族学博物館，石川厚生年金会館，ソニータワー大阪，アブダビ国会議事堂　対談＝山崎正和＋黒川紀章，芦原義信＋黒川紀章　文＝高橋たか子，C. レヴィ＝ストロースほか　○かたち＝仙田満

5
●トスカナ・リージョナル・センター／J. スターリング　●アフラ＋トビア・スカルパ／T. スカルパ自邸，C&B 社家具工場ほか　○かたち＝岡秀行　○NS サント・シャペル　○ORMH（最終回）コルの住宅

6
●PMT ビル／伊東豊雄＋URBOT　●ヨーロッパの新都市 ルーヴァン・ラ・ヌーヴ　●美術作品と建築　○かたち＝松井源吾　○NS 中城城址　○驚異の工匠たち（新連載）B・ルドフスキー著　渡辺武信訳

7
●J.S. ボルシェクの作品／ニューヨーク州法曹センター，帝人中央研究所棟，文＝ボルシェク，芦原信孝　○かたち＝福田繁雄　○NS クノッソスの王宮跡　○IA ⑨ピョートル・コワルスキー

8
●アーレンズ・バートン＆コラレックの近作／ボーツマス工科大学図書館ほか　●ヘルシンキの建築家グループ G4 のヴィジュアルデザイン　●P. グラックの作品11題　○かたち＝秋岡芳夫　○NS メルクの修道院

9
●イギリス最後の常緑の楽園　ミルトン・ケインズ／座談会＝浅田孝＋早川和男ほか　●コンスタンチーノ・ダルディの作品6題　○かたち＝篠田桃紅　○IA ⑩ガエターノ・ペーシェ　○NS ガスタウン

10
●スタンリー・タイガーマンの作品　文＝ノリー・ミラー　●21 のフランシスカン・ミッション／文・写真＝内藤徹男　●R. クリエの作品 6 題／文＝A. グランバック　○かたち＝向井周太郎　○NS ウルムの聖堂

11
●八重州ブックセンター／設計＝鹿島建設設計本部，撮影＝村井修，文＝穂積信夫　●エコール・デ・ボザール——その栄光と歴史／オペラ座ほか　文＝高階秀爾　三宅理一，横山正　○かたち＝嶋田厚

12
●ブルーノ・タウト再考／熱海の家（旧日向別邸），アルプス建築，ベルリンのジードルンク，年表・年譜・文献目録ほか　文＝白井晟一，水原徳言，山口廣ほか　○かたち＝多田美波　○NS 土の広場

●定価¥1100
●1月号-特別定価¥2000
●4月号-特別定価¥2200　品切れ
ハードカバー装-¥2800
●11月号-特別定価¥1500

1979

1
●篠原一男／上原曲り道の住宅，花山第3の住宅，糸島の住宅，谷川さんの住宅，久我山の家，成城の住宅ほか，今，そして機能＝篠原一男　永遠の〈現在〉＝黒坂章雄　論文抄録　活動年譜　○MO＝飯田善国

2
●Dissing＋Weitling の作品／在英デンマーク大使館ほか　●スーパー・ローラーコースター　●ポザールの新しい波／三宅理一＋古林繁編　文＝A. グランバック，F. モンテス　○MO＝泉真也　○NS アッシジ

3
●芸術家としてのマッキントッシュ——水彩＋家具＋建築　文＝香山寿夫ほか　●イタリア建築1926—1943　八束はじめ編　●論文 V. グレゴッティ　○MO＝吉阪隆正　○NS カサ・デル・ファッショ

4
●ゲルカン＋マルク事務所：西ドイツの建築／ベルリン・テーゲル空港，バーラビ国立図書館，ディーキルヒ体育施設ほか　●建築と不安定な言語：F. ラッジの作品　○MO＝永井一正　○NS グルントヴィ教会

5
●SOM の近作：組織と建築家／ジェッダ国立商業銀行，シカゴ・アート・インスティテュート新館ほか　文＝椎名政夫　対談＝岡田新一＋三沢浩＋三栖邦博　○MO＝木村徳国　○NS カルカソンヌ

6
●槇文彦／岩崎美術館，代官山集合住居，立正大学熊谷校舎，大阪臨海スポーツセンター，加藤学園初等学校，在日オーストリア大使館，自邸ほか　対談＝原広司＋槇文彦　文＝P. ドリュウ　○MO＝相田武文

7
●組織と建築家——A. ラムズデンと DMJM／フロリダ・ジュニア・カレッジほか　文＝M.F. ロス，高瀬隼彦ほか　●香川県直島町文教地区　●D. カンパニー社新館　○MO＝岡田新一　○NS グワリオル

8
●金寿根／馬山聖堂，韓国海外開発公社屋，徳成女子大学家政館・薬学館，空間社屋，ソウル綜合競技場，水標小公園，倉岩荘，洗耳荘ほか　文＝吉村順三，S.Chang　対談＝西沢文隆＋金寿根　○MO＝神代雄一郎

9
●HOK：ギョー・オバタの近作／コミュニティ・フェデラル・センター，マーリンクロウト・コーポレイト・センターほか　●もうひとつの木の空間／文＋写真＝須山義幸　○MO＝新宮晋　○NS 天壇，北京

10
●フィレンツェの建築家：ジョヴァンニ・ミケルッチ／ロンガローネの教会，ヴィラ・ストロッツィ温室再建計画，赤ガニの居酒屋ほか　●川崎市民プラザ　○MO＝黒川紀章　○NS セビリアのアルカサール

11
●建築家ロイド・ライト——F. L. ライトⅡ世の生涯と作品／ウェイファーラーズ・チャペル，ジョン・ボウラー邸ほか　文＝B.ガフ，E.ライトほか　○MO＝宮脇愛子　○NS パトモス島の聖ヨハネ修道院

12
●最近のエットレ・ソットサス Jr.　解説＝バルバラ・ラディーチュほか　●M. D. ルッキによる二つの住居計画　●ベリー・キングの照明器具新作5点　○MO＝槌田実　○NS サダン・トラジャ族の葬儀広場

●定価¥1100
●1月号 特別定価¥2500
●5月号-特別定価¥1300
●6月号-特別定価¥2200　品切れ
ハードカバー装-¥3000
●8月号-特別定価¥2300
ハードカバー装-¥3000
●11月号-特別定価¥1300

1980

1
●丹下健三／広島計画，代々木国立屋内総合競技場，赤坂プリンスホテル，アルジェリア国際空港，ナイジェリア新首都都心計画ほか　いくつかの経験＝丹下健三　作品年表・作品データ・経歴　○N＝亀倉雄策

2
●アムステルダム建築史——山口廣　アムステルダム株式取引所，文：第1章-4章＝山口廣　●葉祥栄——そのフォルムとエスプリ／木下クリニック，インゴット，マルタ号，ジーエータップほか　○N＝清家清

3
●組織と建築：チームによる建築・CRS／CRS 本社ビル，デヴリー工業学校，アブダビ・ルウェイス集合住宅，ウェイク・フォレスト大学美術センターほか　○N＝山田脩二　○NS ヴィーゲラン彫刻公園

4
●関江敏夫の近作：イタリアのカロッツェリアより／スパッツィオ，カーサ・モービレほか　インタビュー＝黒川雅之　●セインズベリー・アート・センター　○N＝川添登　○NS オシオス・ルーカス修道院

5
●ウィーン古典派建築——18世紀からオットー・ヴァグナー盛期まで＝川向正人／革命的古典主義，立体派，浪漫的歴史主義，厳格な歴史主義，後期歴史主義ほか　○驚異の工匠たち（最終回）　○N＝石井幹子

6
●林雅子／ルーフテラスをもつ家，インドアガーデンのある家，内部に外部をもつ家，自邸，門構えのオフィスビル，三つの床，年表・経歴ほか　私の建築作法＝林雅子　対談＝林昌二＋林雅子　○N＝田中一光

7
●アメリカの新しい波——フランク・ゲーリー／自邸，ディメニル邸ほか　文＝伊藤公文　●遅ればせのシカゴ・トリビューン・コンペ　文＝S. コーエン　○N＝小池岩太郎　○NS マリア・ラーハ修道院教会

8
●Studio PER／カーサ・トーマス，カーサ・ロニョーニほか　文＝松風正幸　●A. マンジャロッティの近作　●マイアミ大学アート・ミュージアム　文＝三栖邦博　○N＝原広司　○NS メキシコ国立自治大学

9
●シーザー・ペリの新局面／ニューヨーク近代美術館増改築計画ほか　文＝高瀬隼彦ほか　●松風正幸のプロダクト・デザイン　文＝A. メンディーニ　○N＝吉田光邦　○NS ル・ランシーのノートル・ダム

10
●菊竹清訓／スカイハウス＋増築，出雲大社庁の舎・神結殿，京都信用金庫，福岡市庁舎ほか　第三世代の建築＝菊竹清訓　文＝J. ベルモン，内井昭蔵ほか　作品データ・分布図・年表・略歴　○N＝奈良原一高

11
●イタル・デザインの全貌／メデューサ，フィアット・バンダほか　文＝G. ジュージャロほか　●ネパールの王宮建築　日本工業大学ネパール古王宮調査団　○ヴィジョン・イン・モーション❶　○N＝伊藤ていじ

12
●膜構造による大空間／ジェッダ新国際空港ターミナルほか　文＝石井一夫　●アメリカの壁画の現在　文＝一ノ渡勝彦　R. ハースの作品／ソーホーの壁画ほか　○N＝横尾忠則　○NS オルヴィエート

●定価¥1100
●1月号-特別定価¥2800　品切れ
ハードカバー装-¥3000
●2月号-特別定価¥1300
●3月号-特別定価¥1500
●6月号-特別定価¥2800
●10月号-特別定価¥2600

1981

1
●アンドレア・パラディオ／ラ・ロトンダ，サン・ジョルジオ・マッジョーレ教会，バシリカほか　対談＝磯崎新＋高階秀爾＋長尾重武　パラディオへのオマージュ，論文・資料多数　○P＝高階秀爾＋田原桂一

2
●ハリー・サイドラー／パリのオーストラリア大使館，MLCセンター，H. サイドラー自邸，文＝H. サイドラー，F. ドリュー　○ヴィジョン・イン・モーション❸　○P＝小宮山昭＋田原桂一　○NS 蘇州の庭園

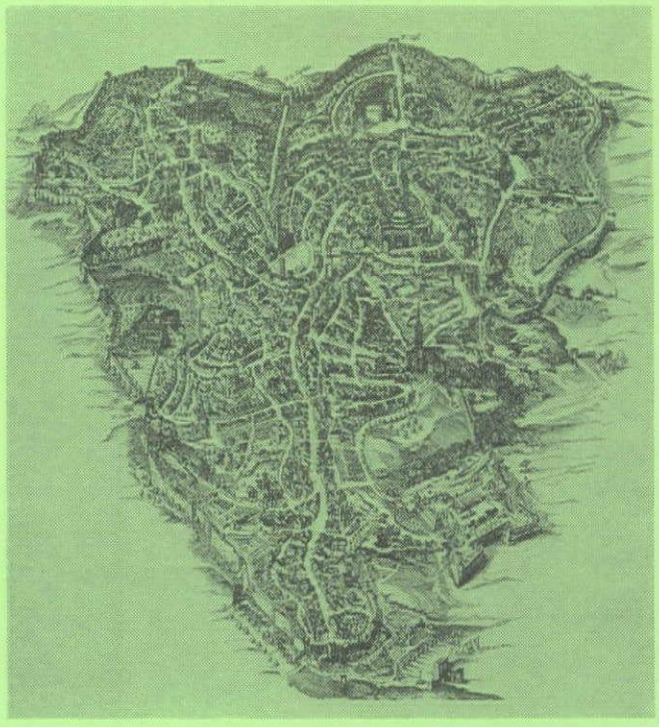
3
●新古典主義／ポスト・モダニズムと新古典主義，〔Ⅰ〕考古学とイマジネーション，〔Ⅱ〕自然と形態〜〔Ⅲ〕　文＝八束・川向・菊池・彦坂・小林・青木　●W. ブラットナーの近作2題　○P＝遠山一行＋田原桂一

4
●グナー・バーカーツの近作／コーニング・ガラス美術館ほか　●ジャン＝J. ルクーの幻想画集　●ディッシング＋ヴァイトリングの作品　○P＝大久保雅樹＋田原桂一　○NS ホーフブルクの旧宮庭図書館

5
●ジオ・ポンティ1891-1979／夢，グラント大聖堂，ビレッリ・ビルほか　文＝G. ポンティ，L. ポンティ，A. メンディーニ，三輪正弘，上松正直ほか　○P＝進来廉＋田原桂一　○NS グルムシュタット芸術家村

●定価¥1100
●1月号-特別定価¥2800
●2月号-特別定価¥1300

SD Space Design 7月号予告



特集＝

シエナ——イタリアの中世都市の形成過程

1 都市の形成過程——発祥，成熟，衰退

2 都市と立地——海辺，平野，屋根

3 都市の形態

4 広場——形成過程，平面，景観，利用，法規

5 街路——都市の形態と街路パターン，構成，利用

6 都市と建築——住宅，公共建築，肋骨型と中庭型

7 都市の景観

8 都市憲章

文・写真＝田島学

予価＝1100円

商業空間のスペース・デザイン

'80年代ショッピング・モールへの展望

■ 座談会：明日の商業空間を考える

菊竹清訓＋倉俣史朗＋泉真也

1 商業空間のスペース・デザイン

欧米で今話題のショッピング・モール，都心部再開発型のショッピング・センター等の商業施設を豊富なカラーと図面で紹介する．

トロント・イートンセンター，グレンデール・ガレリア，ミルトン・ケインズ，フォラム・デ・アール　他全34作品紹介．

2 商業空間のナイス・スペース

日本で商業建築に携わる諸氏が紹介する商業空間の原点．

文＝浜野安宏，中村光男，山下和正

安藤忠雄，神谷宏治，池沢寛

泉真也，関口敏美，三沢浩

3 商業空間のファイルブック

編＝中村光男＋浦一也

過去5年間にわたって内外に建てられた商業建築の秀作62点を，データと写真でコンパクトに紹介する．

総ページ＝238ページ　カラーページ＝56ページ　定価＝3800円



SD別冊No.13絶賛発売中！

明日を築く知性と技術 ●鹿島出版会 ●東京都港区赤坂6-5-13 ●電話(03) 582-2251 ●振替東京6-180883 (SS) シルバーシリーズ

〈シルバーシリーズ〉 SS

■幅広い視野から建築，デザイン，都市，さらに文化全般にわたる諸問題を解明する新しいシリーズ．
■学生諸君におくるSD選書の姉妹シリーズ．

盛り場—人間欲望の原点—

服部銓二郎著　四六判　196頁　¥1,500

著者は都市を“人間による地上最大の創作物”と考え，都市の中で最も人間臭い欲望が赤裸々に表出される《盛り場》を都市のコア（原点）と考えるとともに，人間社会の根源が地上に描き上げた欲望のシンボルと認識している．　また，都市化が限界に近づきつつ，地方の時代という環境下にあっても，人間の欲望は高次化に進み，人と人との出会い，触れ合いを大切にしようとする思想がますます広がってくる．……

〈主要目次〉

1　都市のコア〈盛り場〉考……現代盛り場のシンボル〈新宿〉…他
2　盛り場変遷史……史実が語る盛り場／文明開化後の盛り場…他
3　盛り場現代図……盛り場分類学／盛り場とレジャー／盛り場と情報他
4　盛り場風土記……銀座—シンボルタウン／浅草／大阪／名古屋…他
5　盛り場——人集めの原点……人間ドラマの舞台装置…他

口紅から機関車まで

＝インダストリアル・デザイナーの個人的記録

レイモンド・ローウイ著／藤山愛一郎訳　四六判　432頁　¥2,800

著者は，たばこの外箱，自動車・機関車，家具，書棚から石けん，歯みがきチューブなどの斬新なデザインによってID界の第一人者として活躍，とくにピースの外箱デザインでも有名．　ローウイの興味ある成功物語り

■わが青春のローウイ■　ローウイのデザインしたラッキーストライクの明快なパッケージは私たちデザイン学生のお手本であったが，彼が来日してのこしていったピースのパッケージに，あらためてデザインの力量をみて感嘆した．（中略）いまその貴重な「教書」の復刊の快挙をみて，じつに嬉しい．　日本の生きかたがあらためて厳しく問われている．　商工業の「文化」化という原点にかえって産業の役割を見つめなおすために，デザイン界にとどまらず広く政財界にも本書が愛読され，本書にきらめくフレーズが語りあわれることを願ってやまない．　**栄久庵憲司・推薦**

創造するこころ

《山本学治建築論集・全3巻》第3巻　四六判250頁　¥1,800

作家，作品，技術者，またそれをとりまく状況を鋭く洞察し，率直に物を言う本巻の諸論文は，著者の幅広い活動範囲と豊かな文章力を示している．そして，これらは著者の建築への情熱と自らの実践の結晶であった．……

新しい街路のデザイン
デザイン委員会＋イギリス都市計画協会共編／中津原努・他訳　224頁　¥1,800

建物はどうして建っているか〈構造—重力とのたたかい〉
M.サルバドリー著／望月重訳　180頁　¥1,600

建築を教えるものと学ぶもの
大江宏・近江栄・太田邦夫・他著　224頁　¥1,600

建築の心理学
クリフォード・モーラー著／扇谷弘一訳　180頁　¥2,100

造型と構造と

《山本学治建築論集・全3巻》第2巻　四六判220頁　¥1,600

近代建築の技術論であるこの巻の諸論文には，「構造理論」と「建築史」の二つの専攻をもつ著者の強みが遺憾なく発揮されている．
第Ⅰ部・技術の流れを追って　第Ⅱ部・デザインと構造との総合　第Ⅲ部・現代の構造家たちの創造

個性ある都市＝横浜の都市デザイン
岩崎駿介著　216頁　¥1,600

建築は兵士ではない
鈴木博之著　256頁　¥1,600

タウンハウス＝町家の再生
上田　篤編　220頁　¥1,800

実現されたユートピア
月尾嘉男・北原理雄共著　252頁　¥1,800

歴史と風土の中で

《山本学治建築論集・全3巻》第1巻　四六判　230頁　¥1,600

戦後の近代建築の進行を目撃しながら，精力的に続けた研究・評論活動のうち，この巻には近代化の歴史に関する論文3編，ディテールの変遷に関する考察4編，素材と風土に関する論稿3編を収録．　現代への生々しい証言．

フランス建築事情　付・パリ建築案内図
三宅理一著　220頁　¥1,800

絵で見る建築様式史
O.ランカスター著／白石和也訳　216頁　¥1,600

日本のすまい・内と外
E.S.モース著／上田篤・加藤晃規・柳美代子共訳　350頁　¥2,900

オフィス空間＝サラリーマンの場所と生理
草森紳一著　224頁　¥1,600

明日を築く知性と技術 ●鹿島出版会 ●東京都港区赤坂6-5-13 ●電話（03）582-2251 ●振替東京6-180883 図書目録

新訂都市問題事典

磯村英一編修　A5判　830頁　¥3,800

学者・実務家・評論家ら最高の都市研究家160余名の執筆になる，都市問題書の決定版．　旧版の大中小項目528に36項目を追加，さらに海外主要都市事情（50都市）を加え，都市統計を一新し，現在必要な内容を十分に満載した新訂版．

ファニシングデザイン資料集

内堀繁生著　B5判　260頁（カラー12頁）　¥6,500

建築の内部環境をより快適にするため，JIS，JASSの設計基準に加えて，インテリアデザインの立場からみた家具やカーペット，各種素材の扱いを，品質基準，品質評価を中心に，建築設計，インテリア・デザイナー向きに解説している．

環境としての建築

＝建築デザインと環境技術＝

レイナー・バンハム著／堀江悟郎訳　A5判　304頁　¥2,900

既成の近代建築史・近代建築論に挑戦し，環境的技術の発展と建築デザインとの関係を初めて明らかにした名著．　建物の環境的性能とその技術に対する認識をさらに深める必要のある現在，建築家必読の本である．

〈主要目次〉　不当な弁明，環境管理，暗い悪魔的一世紀，部品のひとそろい——熱と光，大建築の環境，調整された住宅，機械美学の環境，住むための機械，完全な制御をめざして，隠された力，露わされた力，方法の範囲，環境技術についての書籍

知覚環境の計画

ケヴィン・リンチ著／北原理雄訳

A5判　246頁　¥2,800

環境の知覚的な質，すなわち視覚・触覚・臭覚・聴覚……などが，毎日の生活に及ぼす影響の重要性を説き，それを地域の計画にどのように反映すべきかについて，具体例を多くあげて解説している．

＜人間的な環境＞の真髄に迫るリンチの最新作。

都市のセンター計画

ビクター・グルーエン著／中津原努・他訳　B5判　270頁　¥6,400

著者はショッピング・タウン計画の生みの親として有名．　本書はその広い視野から複合的な機能センターまで扱ったもので，都市環境の中でのセンター計画の質的発展を辿っている．　〈主要目次〉　領域と制約，地域ショッピング・センター，世界のショッピング・センター：その20年，単一機能センター，複合機能センター，都市コア，新しい都市形態の出現

驚異の工匠たち＝知られざる建築の博物誌

B. ルドフスキー著／渡辺武信訳　A5判　436頁　¥3,800



従来の建築史の視野の外にあった地方的，土着的建築物を再評価することにより，人類文明の多様性を積極的に肯定しようとする，ユニークな建築論．　なお同著者の既刊書は…

◎建築家なしの建築（渡辺武信訳　¥,1600）
◎人間のための街路（平良・岡野訳 ¥3,200）
◎みっともない人体（加藤・多田訳 ¥2,900）
◎キモノ・マインド（新庄哲夫訳　¥780）

図面でみるアメリカの建築家

—ジェファソンからヴェンチューリまで—

D. ゲバード，D. ネヴィンズ共著

谷川正己・増山博文共訳　A5判　346頁　¥4,800

建築家の設計意図や作品として実現するプロセスは，建築家自身が描いた図面に最も鮮烈に現われているはずである．

本書は，図面で見るアメリカの建築家事典であると同時に，好個のアメリカ合衆国建築史の解説書でもある．

近代建築の歴史（上・下）

レオナルド・ベネヴォロ著

武藤　章訳

A5判　（上）400頁　¥5,800・（下）470頁　¥6,800

近代建築の歴史的位置を定めた大作．　近代建築発生の基盤，技術的・社会的・文化的な背景，また近代運動そのものの諸様相を明らかにした，近代建築通史の文字どおりの定本である．

上巻は産業革命から第一次大戦まで．　下巻は第一次大戦後今日に至るまでの近代運動の諸様相を詳述している．　数多い個性的建築家の活動を歴史的脈絡の中に位置付け，近代建築の思考法を探り出した名著といえよう．

図集世界の建築（上・下）

H. ステアリン著

鈴木博之訳

A5判　260頁　各¥2,200

①本書は建築物をきわめて幅広く網羅している．

②それらの建築の，平面図・立面図等，千点を越える図面を収録している．収録されている建築の範囲は，古代中近東，エジプトから現代に至り，地域的にも西欧諸国のみならず，日本，中国，メキシコ，ペルーにまで及んでいる．

明日を築く知性と技術 ●鹿島出版会 ●東京都港区赤坂6-5-13 ●電話(03) 582-2251 ●振替東京6-180883 ●SD選書新刊

SD選書

⑮エスプリ・ヌーヴォー［近代建築名鑑］

ル・コルビュジエ著／山口知之訳　四六判　240頁　¥1,200

著者は1925年，パリでの装飾芸術国際博覧会に参画し，一つの展示館を出品した．　本書はそれを記念して，後に出版されたものである．
往時の建築と芸術における〈新精神〉を掲げた示威運動を目的としてまとめられた古典である．

⑱環境計画論

田村　明著　四六判　220頁　¥1,200

より総合的な観点から，人間のための環境を創り上げてゆくための計画――都市建設の生態論，プロムナード計画など，基本的な都市論から横浜の具体例までを挿入して解説．
永年の実践に裏づけられた，示唆に富む書である．

⑭⑰建築について（上）（下）

フランク・ロイド・ライト著／谷川睦子・谷川正己共訳
四六判　各¥1,200

アメリカが生んだ現代建築の巨匠ライトは，沈黙の創造者ではなかった．
膨大な資料の中から厳選して年代順に収録された各論文は，フランク・ロイド・ライトが創造した建築哲学の全体像を示している．

⑮アドルフ・ロース

伊藤哲夫著　四六判　256頁　¥1,200

「装飾は罪なり」の言葉を掲げ，虚飾に反抗した建築家アドルフ・ロースの人と作品を，往時の華かな都市ウィーンの文化と伝統と関わりをもたせながら紹介した力作．
ロースの近代建築運動に果たした役割を見直した実証的書下し．

⑯⑱建築形態のダイナミクス（上）（下）

R.アルンハイム著／乾　正雄訳　四六判　各¥1,200

現代の芸術心理学の第一人者アルンハイムの最新の著作である．
本書では，建築の視覚的側面に彼の理論を応用して，従来不当に看過されていた建築の見かけと人間の関係を興味深く解明している．

⑯空間と情緒

箱崎総一著　四六判　190頁　¥1,200

人間にとって空間とは何か．　本書は，白い壁の恐怖，認識の地図…といった人間の意識野の世界を，精神医学の立場から例証した，ユニークな空間論の試みである．
室内から都市まで，空間のデザインを志す人々に贈る好著．

⑫見えがくれする都市

槇　文彦・他著　四六判　234頁　¥1,200

複雑な地形をもつ江戸の町が，その自然条件の上にどう都市を形づくってきたか，またそれが，現在の東京の中にどう潜在しているかについて，様ざまな視点から解析したもの．
「奥の思想」を軸とした一線建築家による都市論．

⑩水空間の演出

鈴木信宏著　四六判　224頁　¥1,200

都市や建築にみる広場，街路，モール，屋内化された広場の大空間にとり入れた，多例の水の演出について分析した空間論．
今日の都市空間の設計で不可欠とさえいえる，水の素材について書き下した本書は，大変ユニークで興味深い書である．

⑬街の景観

ジェラルド・バーク著／長　素連・長もも子共訳
四六判　224頁　¥1,200

歴史的・建築的に重要な建物，あるいは建物群を保護しながら都市の再開発をどのように行なうべきかの問題について，イギリスを中心にヨーロッパ，アメリカの多くの教訓を引き出し，多面的に追求した労作．

⑱モラリティと建築

デヴィット・ワトキン著／榎本弘之訳　四六判　250頁　¥1,200

ピュージン，デュク，ギーディオン，ペヴスナー，さらにコルやミース等等，近代建築理念の主導者たちの議論の基盤，その流れを浮彫りにして，〈それらはみな建築以外の価値理念に基づいていた〉ことを批判した，衝撃の書．

明日を築く 知性と技術 ●鹿島出版会 ●東京都港区赤坂6-5-13 ●電話（03）582-2251 ●振替 東京6-180883 ●図書目録呈

日影チャート

確認申請用添付図書には——
「日影チャートによる」と書いて下さい

【建築基準法·日影規制と日影チャート】

▷ 建築基準法改正で日影規制が追加されました.

▷ 従来のように

1. 日影図（建物の各時刻の影の作図）の作図

ばかりでなく

2. 敷地から5mまたは10m離れた線（チェックライン）上の，主要な点（チェックポイント）での日影時間計算

さらにできれば

3. 周辺領域全体の日影時間分布を示す図（日影時間計算）

も必要になります. この他にも事前の各種の検討も従来以上に厳密に行わなければなりません.

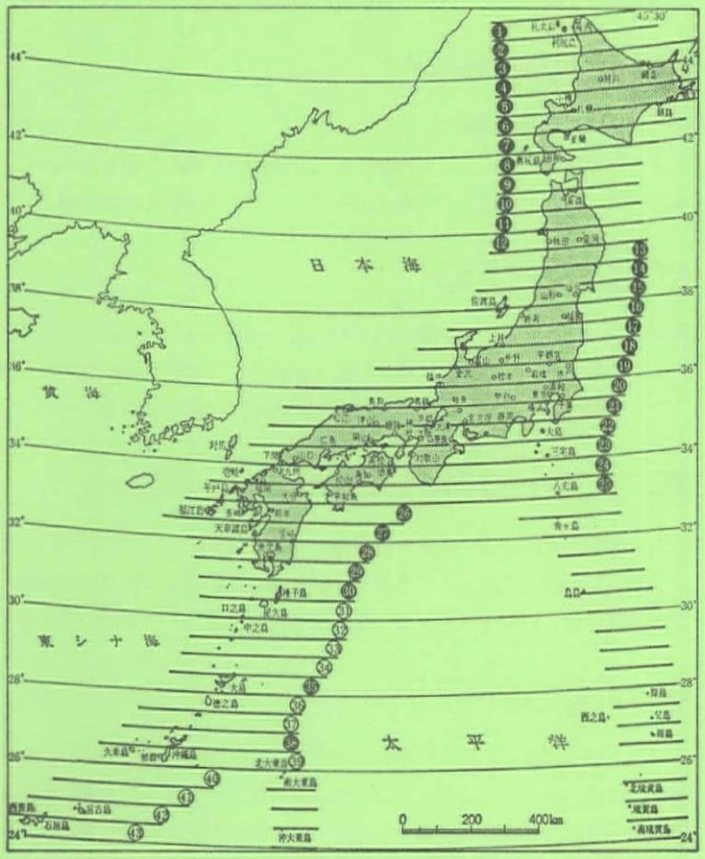
▷ 特定行政庁では建築確認申請で提出された 1.～3. のチェックが必要になります.

▷ 日影チャートは，これらの検討，作図をすべて1枚のチャートで，簡単にできるようにしたものです.

☆日影チャートは「日影規制の手引」（日本建築センター発行）に定めた基準に合わせて作ってあります.

▷ 建物の高さの目盛は25cm 間隔（縮尺 1/100）と細かくしました.

▷ 日本全国を緯度 30′ のバンドに分けて，豊富な種類を揃えました.

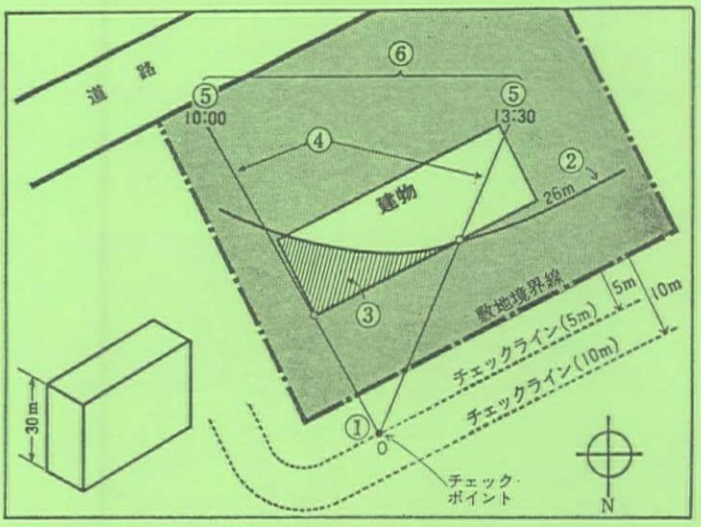


制作＝鹿島建設／発行＝鹿島出版会

定価＝各1枚¥5,000

詳細内容案内送呈

☆日影チャートによるチェックポイントの日影時間の求め方は，こんなに簡単です!!



▷ 必要な手順はこれだけです（上図の番号と手順左端の番号を参照）.

① 建物の配置を示す図面にチャートを重ね，チェックポイントに0点を合わせ，方位を合わせる（このためにチャートは透明なフイルムです.）

② 建物の高さ（30 m）とチェックポイントの高さ（4 mであるとする）の相対的な高さ（30−4＝26m）に相当する限界線を見いだす.

③ その限界線より北側にある建物部分（チェックポイントへの影響部分——図の斜線部分）を見いだす.

④ その影響部分を両側から挟む時刻線を作る.

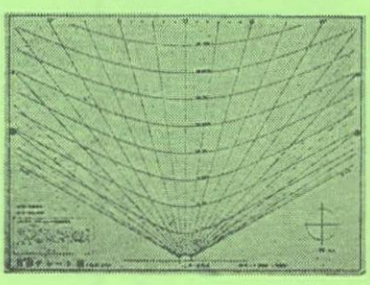
⑤ その時刻を読む（日影開始：10時00分，日影終了：13時30分.）

⑥ 建物による日影時間（13時30分−10時＝3時間30分）が分かる

▷ コンピュータも難解な計算もいっさいいりません.

☆日影チャートで日影図も簡単に作図できます!!

▷ 日影図を作るのに必要な太陽方位角，高度，影の倍率などのデータ表や，特殊な定規はいりません.



●42×59.4cm

特殊フィルムに裏から印刷——
表から書いたり消したり自由

●使用説明書付き ●円筒入り

日影チャートの例

20 35°30′～36°00′用

明日を築く知性と技術 ●鹿島出版会 ●東京都港区赤坂6-5-13 ●電話(03) 582-2251 ●振替東京6-180883 ●図書目録呈

片山利弘 作品集

好評発売中！ ●内容見本送呈

24.5×24.5cm・204頁（内カラー90頁，作品150余点） ¥9,800

現在，ハーバード大学カーペンター・センターで活躍中のグラフィック・デザイナー，片山利弘の作品の，はじめての集大成．

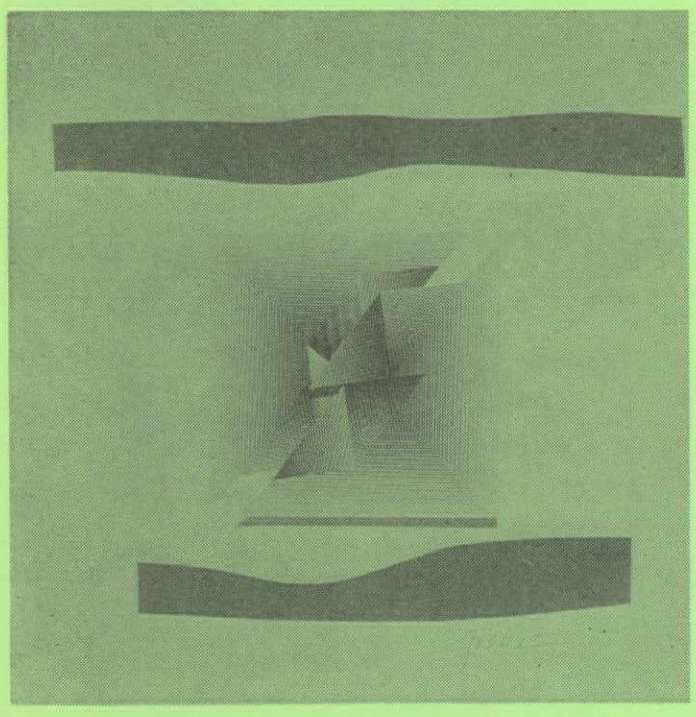
本書は3部構成から成っているが，このことは，著者自身の芸術家としての方法論を反映しているといえよう．

第1部 Visual Construction

第2部 Square+Movement

第3部 Topology : Homage to the Cube

〈執筆者〉 丹下健三，亀倉雄策，多木浩二，木村恒久，田中一光，向井周太郎，片山利弘，J.ルイ・セルト，J.アルバース，I.チャマイエフ，R.アルンハイム，G.ケペッシュ，E.ウイリアムス，E.ゴムリンガー

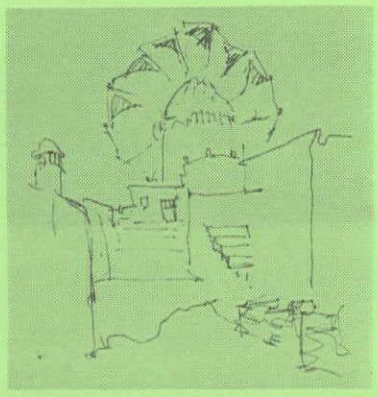


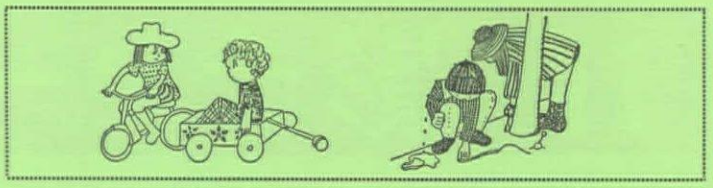
アルヴァ・アアルト——エッセイとスケッチ

ヨラン・シルツ編
武藤章・坂井玲子監訳
吉崎恵子訳
B5変・216頁 ¥3,800

エッエイ37編とスケッチ82葉を収録．

アアルトは寡黙な創造者として建築そのものに自己を具現してきた．しかし，数少ないエッセイもまた彼の思想と人間味をよく語り，流麗なスケッチにも芸術的才能があふれている．





青少年のための都市環境

ケヴィン・リンチ／北原理雄訳 A5判・220頁 ¥2,400

ユネスコの後援を受けて1972年から1975年にかけて，アルゼンチン，オーストラリア，メキシコ，ポーランドの4ヵ国6都市で行なわれた，成長期の子供に対する都市環境の影響を調べる国際比較研究の成果をまとめた書．

子どものための生活空間—168の設計指針

アンネ=マリー・ボロウイ／湯川利和・長沢由喜子共訳 A5判・250頁 ¥3,300

都市と幼ない子どもとは相容れないもの——という通説に異議を申立て，神経のゆき届いた生活空間のあり方を設計指針にまとめている．

子どものための野外活動施設—少年自然の家・計画と設計

山本学治・藤木忠善共著 B5変・170頁 ¥3,400

百数十ヵ所にのぼる公立・民間の各種施設のうち，主だったものの現状を，多数の写真・図版を掲げて紹介し，問題点を分析して，将来への指針を提供． 永年の調査研究をまとめた，企画者・設計者・運営者の必読書．

新しい遊び場—冒険遊び場の実際例

A.ベンソン／大村虔一・大村璋子共訳 B5変・176頁 ¥3,500

冒険遊び場の問題点と解決法について，関係者からえた情報と，新しい住宅地の設計と造園に冒険遊び場を組み入れる方法を，写真と図版で紹介．

遊び場のデザイン

A.ベンソン／北原理雄訳 B5変・230頁 ¥3,900

スウェーデンを中心に，世界の遊び場の計画例50を集めて論じたもの．本書はフィジカルな設計例の集成であり，デザインに役立つ応用編．

都市の遊び場

アレン・オブ・ハートウッド卿夫人／大村虔一・璋子共訳 B5変・¥2,600

世界中の意欲的な新しい遊び場を写真・図版180点で紹介し，子供の立場にたった都市の遊び場とは何かを，真正面から問い直している．

手づくりの遊び場—廃品利用による遊び場の作り方

P.ホーガン／古谷誠治・奥貫 隆共訳 B5変・230頁 ¥3,800

アメリカでの第一人者が，世界各地の例と豊富な体験で，素材の獲得法から遊具製作法，遊び場建設・維持管理まで，遊び場づくりを手引きする．

遊び場の計画 (SD選書119)

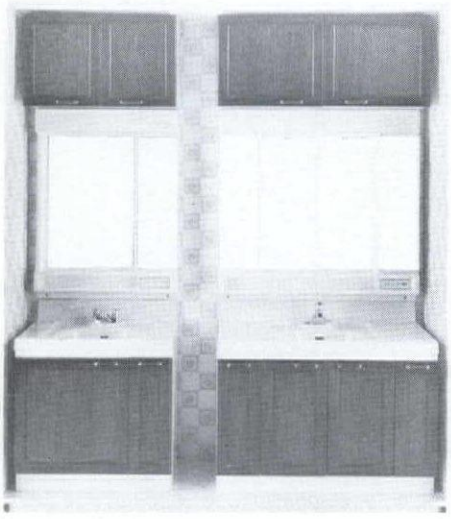
R.ダットナー／神谷五男・松代真理共訳 四六判・240頁 ¥980

遊びの哲学，遊びの心理学，遊びの社会的機能，デザインの基準，冒険遊び場，不自由児の遊び場…など，遊び場の計画に必要な理論と実際．

《洗面化粧台》

洗面化粧台SC型

三協アルミニウム工業株式会社



三協アルミニウム工業㈱では，今度人造大理石による天板シンク一体成型で作られた洗面化粧台SC-750，SC-1050を新発売した．

特長

①天然石粉とポリエステル樹脂による人造大理石でできているので，熱や衝撃に強く，汚れにくい．

②水洗金具は，高級感のある湯水混合水栓が取り付けられている．

③化粧ミラーは，くもり止めヒーターが組み込まれており，また消し忘れ防止のホタルスイッチも付いている．

④600，750，1050mmの各タイプとも，それぞれの間口に合わせて天袋が揃えてある．

セット価格

SC-750　170,000円

SC-1050　250,000円

三協アルミニウム工業株式会社

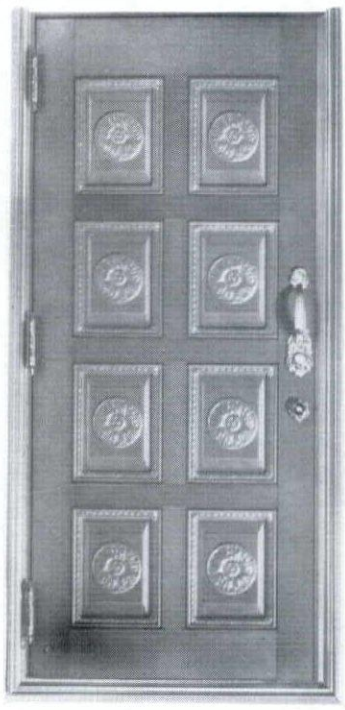
富山県高岡市早川70番地

〒933　Tel 0766-22-5030（代）

《スチールドア》

スチール製防火ドアー

トーヨーサッシ株式会社



トーヨーサッシ㈱では，今度防火地域，準防火地域の住宅用ドアとしてスチール製防火ドアー3種（グランドタイプ，プレカラータイプ，プリンスタイプ）を新発売した．

グランド（1型ローズウッド）乙種防火戸認定

表面材　プリント鋼板

出来寸法　高さ2,004×幅846mm

付属品　ドアスコープ，ノッター，ロックセット，ドアクローザ，ドアチェーン，丁番，下枠用アンカー

枠付完成品価格　180,000円（取付費別）

プレカラー（1,2型ウッディローズ）乙種防火戸認定

表面材　プリント鋼板

出来寸法　高さ1,843×幅802mm

付属品　ロックセット，飾り付きドアスコープ，丁番，下枠用アンカー

枠付き完成品価格　87,000円（取付費別）

プリンス（アイボリー，こげ茶）乙種防火戸認定

表面材　プリント鋼板

付属品　ロックセット，ドアスコープ，丁番，下枠用アンカー

枠付き完成品価格　54,000円（取付費別）

トーヨーサッシ株式会社

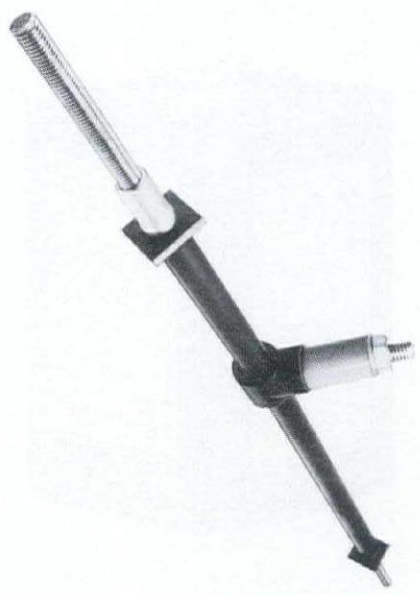
東京都千代田区内幸町2丁目2番2号

〒100　Tel 03-591-3151（代）

《鉄筋》

びびわれ防止具 プレトール

岡部株式会社



岡部㈱では，今度コンクリート造の建物外壁開口部に発生するひびわれを防止する，ひびわれ防止具プレトールを新発売した．　これは主要部品として両ネジボルト，反力パイプ，U型スペーサーおよび定着板でできており，U型スペーサーを挟んだ左右の反力パイプに両ネジボルトを貫通し，両ネジボルトにプレストレスを導入して，その緊張力を反力パイプに保持させたものである．　プレトールは，コンクリート造の建物外壁の開口隅角部に埋設し，コンクリートが適当な強度になった時，U型スペーサーを抜取ることにより，両端の定着部を介してコンクリートに圧縮応力を発生させてひびわれを防止するものである．

特長

①コンクリート構造体の所要の個所に埋め，型枠脱型後，プレトールのU型スペーサーを抜取ることにより，特別な技能を必要とせず，簡単にプレトール埋設個所のコンクリートに圧縮力を導入することができる．

価格

プレトール　1,900円/本

PTブラーケ　1,200円/コ

岡部株式会社

東京都墨田区向島4丁目21番15号

〒131　Tel 03-624-5111（代）

《左官用混和材》

YKテックスモルタル

山出興産株式会社



山出興産㈱では，今度 SBR 系合成ゴムラテックスでセメントモルタルと配合して使う，下地調整用セメントモルタル混和材，YK テックスモルタルを新発売した．　これは特殊な技術によりゴムのセメントや砂に対して，からみつきが大きく施工時のラテックス分の浮き上りが極く少い為に高い物理強度と耐摩耗性，防水性に優れた材質に仕上り，鉄への防錆力も大きいので，多用途の床材，塗布材の利用が可能である．

特長

①作業性がよく，下地と強力に接着する．
②柔軟性に富み，優れた物理的強度がある．
③薄層の施工が可能である．
④凍結，融解に強く寒冷地での使用に耐える．

物性

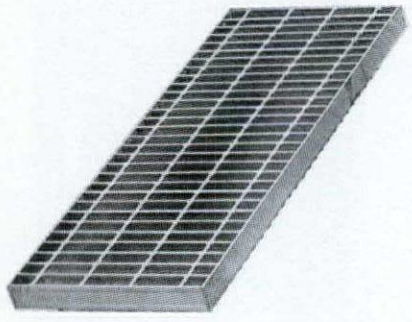
固型分　30%
PH　8.5
比重　1.0
粘度　35cps

山出興産株式会社
大阪府吹田市江の木町24番10号
〒564　Tel 06-385-1268（代）

《マンホールカバー・みぞぶた》

カネソウ 圧接式グレーチング

カネソウ株式会社



カネソウ㈱では，今度圧接式グレーチングとして，横断溝・側溝用，固定式横断用，集水桝蓋，U字溝用，かさ上げ型，歩道用，U字溝歩道用を，またくみこ式グレーチングとして，IB グレード・オープン型，正方形，横断溝・側溝用を新発売した．

圧接式横断溝・側溝用グレーチング

道路横断溝，道路側溝およびその他の集排水溝など帯状に連続して敷設する場合に適した製品である．　溝幅，荷重条件に合せて多数のタイプが揃っている．

圧接式固定式横断溝用グレーチング

とくに交通量の激しい場所に設置される横断溝用として作られ，騒音衝撃を緩和できるようにボルトナットで固定する構造になっており，用途により受枠はL型とZ型の2種類のタイプがある．

圧接式かさ上げ型グレーチング

グレーチングの両側にアングルを溶接した構造で，既設のコンクリート製溝蓋と同レベルで施工できる．

圧接式集水桝蓋

集水桝蓋は雨水，下水，廃水などの集排水に適するように作られ，グレーチング本体と受枠はピンヒンジにより凍結されており，掃除が簡単で盗難防止にも役立つ構造になっている．

カネソウ株式会社
三重県三重郡川越町北福崎 115 番 1 号
〒512　Tel 0593-63-0111（代）

《サンドイッチ板》

AKコーナーパネル

旭化工板製造株式会社



旭化工板製造㈱では，従来はコーナー部分に亜鉛鉄板，アルミ板などで被覆するジョイナー工法であったが，それに代る，壁パネルと一体化したコーナー仕上げができるAKコーナーパネルを新発売した．

特長

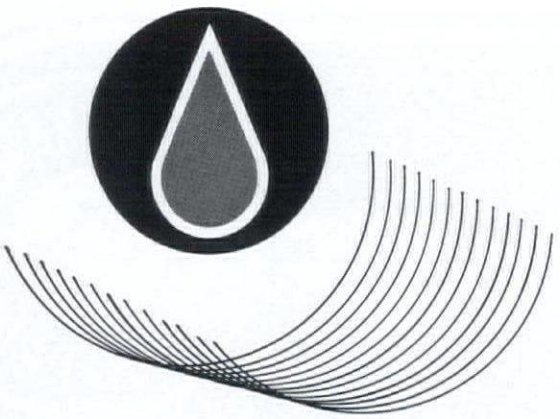
①白色セメントでできているのでそのまま仕上げ面として使え，また表面材が不燃材のFRCなので，耐火性に優れている．
②表面材が一体成型でできているので剝離の心配がない．
③衝撃強度が大きく木毛芯材では落錘時表面窪み面積でも従来品に比べ1/10～1/15となり，裏面の横断亀裂もできない．
④FRCの性質から，穴あけや釘を打っても亀裂や破損がなく，万一亀裂ができても拡がらない．
⑤座掘り工法により，従来のパネルではできにくい表面仕上げが可能となった．

仕様

寸法　幅300～450×長さ1,800，2,400mm
コーナー角度　90°

旭化工板製造株式会社
兵庫県尼崎市下坂部久々知前 235 番地
〒661　Tel 06-491-6781（代）

誠意と情熱の30年



■ビル設備
（空調・給排水衛生）
■工場施設
（各種配管・公害防除）
■ガス施設
■土木・水道
■住宅設備

東横工業株式会社

本　　社	横浜市西区平沼２－11－11	☎045(323)2531
東京支店	東京都港区芝５－29	☎ 03(454)8591
仙台支店	仙台市本町２－16－３	☎0222(62)6271
川崎営業所	川崎市高津区末長仲町1288	☎044(866)9416
札幌営業所	札幌市中央区北三条西３－１－４	☎011(221)4063

新工法！プレノテクト吹付工法

陸屋根防水には
奥山式 特許 絶縁工法

カッパー防水帯

コーパータイト

OKUYAMA KAKOGYO・WATER・PROOF・OAM

✣オクロン防水帯

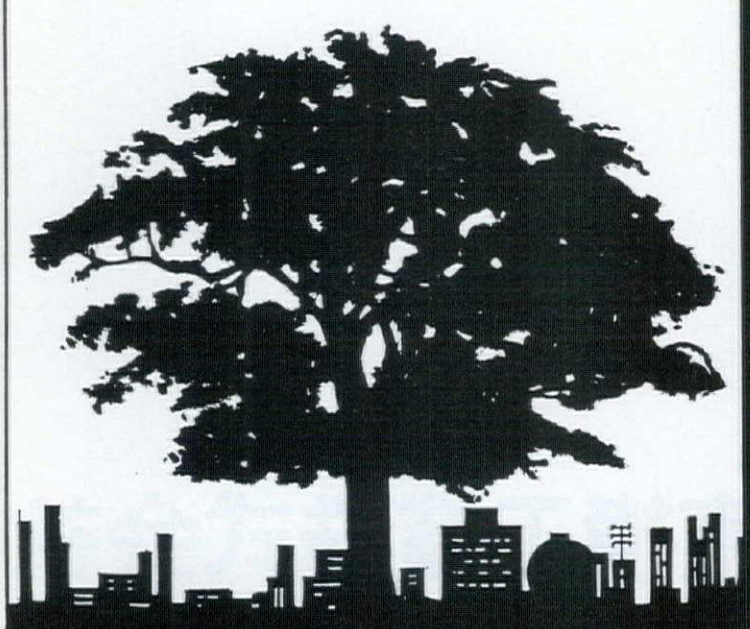
特許 奥山式熱工法・冷工法綜合防水層

奥山化工業株式會社

本　　社	東京都中央区銀座8－4－ 9	電話 03（571）2703
厚木出張所	厚木市金田字宮畑2 5 9	電話 0462（21）6092
大阪出張所	大阪市都島区都島中通り2－3－1	電話 06（921）2497
名古屋出張所	名古屋市南区若草町3-3	電話 052（811）3660
九州出張所	佐賀県諸富町	電話 0952（47）2945

●お申込次第カタログ進呈

快適な生活環境を創造する—東海電工。



●屋内電気設備　●冷暖房・空調
●計装・防爆・プラント　●給排水・衛生
●発変電・送配電・地中線　●設計・施工・監理

東海電気工事株式会社

取締役社長　水越 貫一

本社／名古屋市中区栄1-20-31 〒460 ☎〈052〉221-1111 支社／名古屋・岡崎・静岡・津・岐阜・長野・飯田・東京・大阪・北海道

構造が変っても ビニロイド防水 の信頼は変らない



すべてビニロイド防水が採用された新宿の超高層ビル群

営業品目

- ●ビニロイド防水工事
- ●アコシート止水・防水工事
- ●三星プラスタイル貼工事
- ●保温・保冷・防熱工事
- ●アコロード販売
- ●三星プラスオール製造・販売
- ●三星シーリング材製造・販売
- ●ＤＮ防水工事

アスファルト防水に取り組んで60年

三星産業株式会社

〒101　東京都千代田区神田小川町３－28（三東ビル）　TEL〈292〉1961(代)
事業所：東京〈292〉1961(代)・大阪〈443〉9721(代)・仙台〈62〉5201(代)
出張所：福岡〈781〉3361(代)・札幌〈551〉3781(代)・名古屋〈931〉3390(代)・長崎〈25〉3266(代)

防水材がそのままで屋根材になる。

カラフルなハイパロンルーフィングを用いたワンプライ常温工法

半世紀にわたって防水研究を重ねてきた日新工業。
またひとつ、数多くの性能をもつパロン防水工法が、アメリカ最大の化学メーカー「デュポン社」のハイパロンを使用して完成いたしました。
パロン防水の主役パロンは、このハイパロンゴムシートを基材として、これにゴムラテックスを合浸したポリエステル・ビニロンの不織布をラミネートした積層ルーフィング材です。

パロン防水工法の概要と特長

概要

1)パロン防水工法は、耐候性・下地亀裂対応性に卓越したパロンを一般部に用い、ゴムラテックス接着剤での常温工法をとります。
2)防水上の要所になるジョイントは融着工法により一体化します。
3)立上がり、ドレーンおよびパイプ廻りなどの防水仕舞は水密性・接着性・耐候性に秀いでた《ネオプレン・ハイパロン》による塗膜工法を採用し、防水を確実にします。

特長

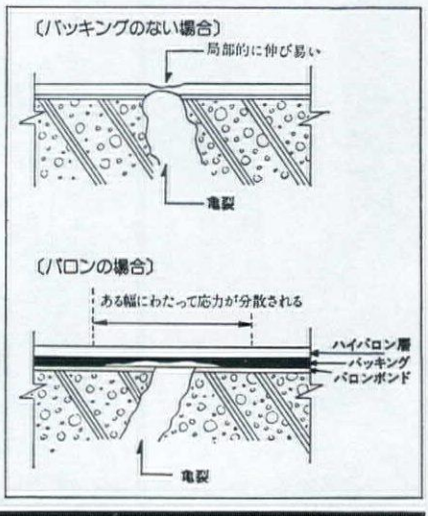
パロンの主原料《ハイパロン》ゴム
1)耐候性・耐酸化性・耐オゾン性はネオプレンゴム、ブチルゴムより数段優れており、耐熱性もブチルゴムをしのぎます。

（暴露による減耗率はデュポン社のフロリダ戸外暴露試験場で年間わずか0.25mil(0.00635㎜)と発表されております。0.5㎜のハイパロン層を有するパロンにおいては優に80年にも相当します。）

2)着色安定性が良く、長く美観を保ちます。

パロン防水の材質と工法からみた特性

1)表層シート主体は、高い耐候性と優れた物性を広く認められているハイパロン(未加硫型)と、数種類の配合材からなるコンパウンドです。このコンパウンドとバッキングの強化不織布との複合により画期的な性能とユニークな材料特性を持ったルーフィング材となります。
2)表層ハイパロンが未加硫型であることは、施工に当って熱風融着という素晴しい工法を可能にしました。パロンのジョイントの融着によって防水層は文字通り水密一体な連続被膜を構成します。
3)バッキング効果の最も大きな利点は、防水下地に亀裂がはいった場合、下地とバッキングの間に“ずれ”および“はくり”が起り、応力を分散させるため、防水層に破断や老化の促進がありません。ハイパロン層のみではゼロスパンの引張りが生じ、破断が起り易く、また局部的な伸び部分の老化が促進されます。



ハイパロンルーフィングを用いた露出用・ワンプライ・常温工法

パロン防水工法

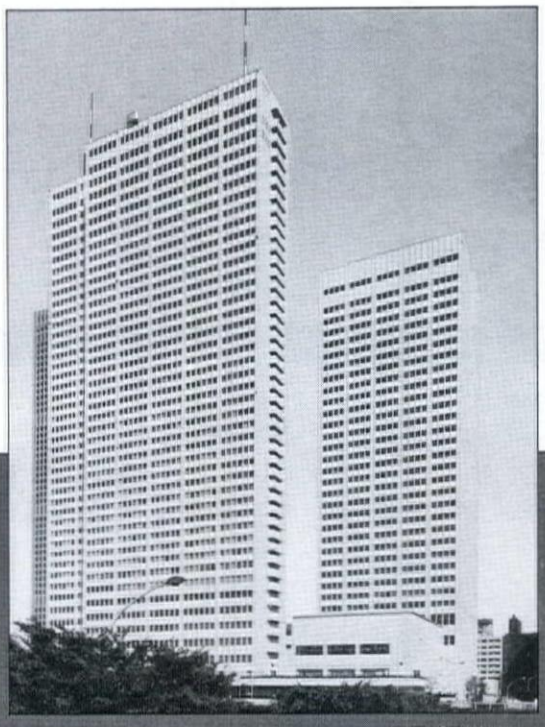
マルエス S 日新

日新工業株式会社

本社・東京営業所■〒120 東京都足立区千住東2-23-4　TEL 東京882-2424(代表)
大阪支店■〒533大阪市東淀川区瑞光通り4-30-2 大阪329-773～7740／九州出張所■〒812 福岡市博多区博多駅前1-24-10 TEL福岡451-1095代表／広島出張所■〒730広島市八丁堀12-16(SYビル) TEL中21-1019代表／ 名古屋出張所■〒464 名古屋市千種区千種通り2-19 (岐阜正ビル) TEL千種741-6257～8／仙台出張所■〒980仙台市国分町3-8-2 TEL仙台63-0315／札幌出張所■〒060札幌市中央区南三条西13-319(柴田ビル) TEL札幌281-6328代表 工場■東京・埼玉・山形・北海道

建築と設備の調和

給排水衛生設備　消火設備　冷暖房設備



京王プラザホテル

NEO 株式会社 西原衛生工業所

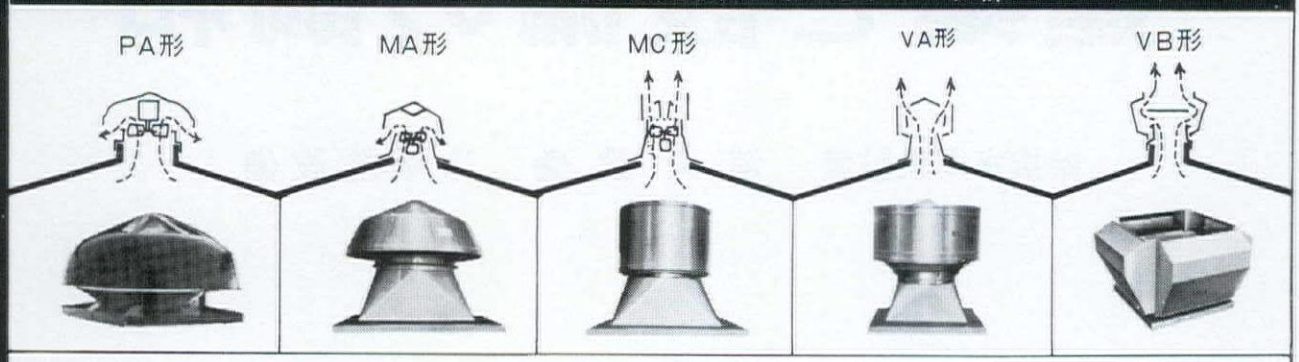
東京都港区芝浦3-6-18　TEL 03-452-7441代表

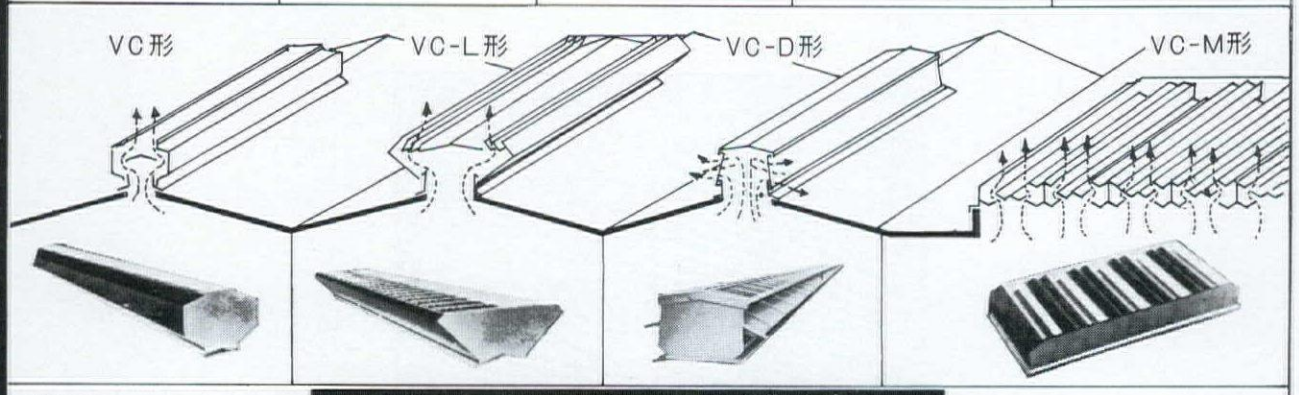
名古屋・横浜・千葉・新潟・仙台
札幌・静岡・藤沢・盛岡・青森
函館・旭川・帯広

坂本商会は創業70余年換気・排煙・採光の専門メーカーです

強制換気・自然換気装置　排煙・ルーバー装置　採光装置

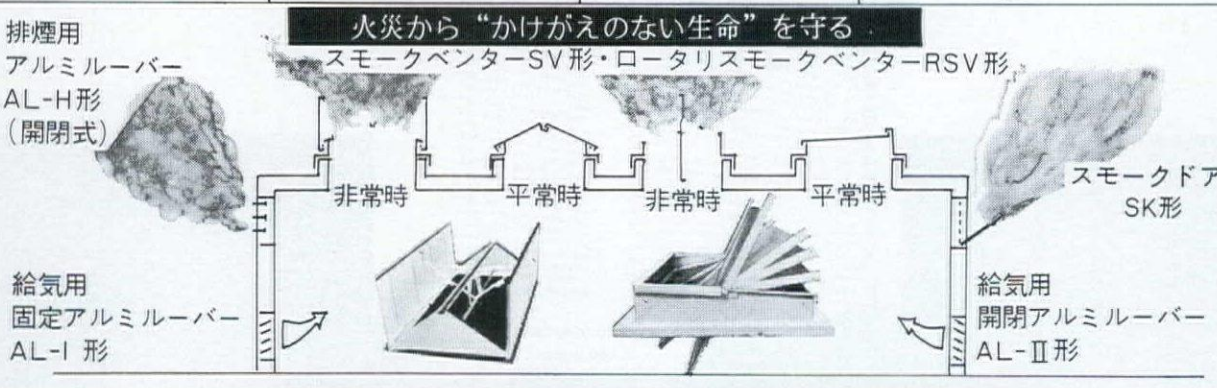
“自然の風”を効率よく招く坂本式ルーフベンチレータ群



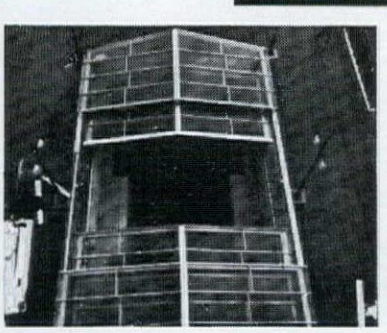


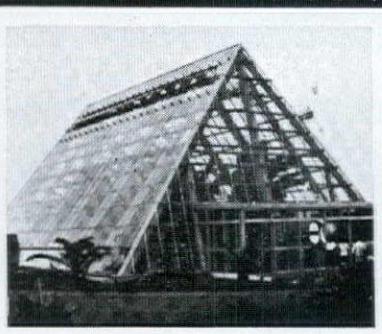
火災から“かけがえのない生命”を守る

スモークベンターSV形・ロータリスモークベンターRSV形



“太陽の恩恵”を全身でウケとめる坂本式スカイライト







株式会社 坂本商会

本　社　東京都中央区日本橋2－16－12（江戸二ビル）
〒103　電話 東京(03) 271－5591(代)
松戸工場　千葉県松戸市松飛台420番地
〒270　電話 松戸(0473) 87－6595(代)
技術研究所　千葉県松戸市松飛台字御囲217番地
〒270　電話 松戸(0473) 87－3148
施工部　東京都墨田区東向島2丁目15番11号
〒131　電話 東京(03) 619－2221(代)

カタログをご請求下さい

広告目次

SD誌に広告をお申し込みの際は

下記広告代理店にご用命下さい（五十音順）

●共栄通信社

東京——東京都中央区銀座8-2-1

新田ビル（572）3381

大阪——大阪市北区西天満3-6-8

笹屋ビル（362）6515

●建報社

東京——東京都中央区銀座1-16-3

篠原ビル（563）2576

大阪——大阪市東区淡路町1-12

昭栄ビル（231）4548

●新建社

東京都中央区日本橋3-5-12

守尾ビル（271）3271

●創研社

東京都千代田区二番町1

番町ハイム（262）9921

●中外広業社

大阪——大阪市大淀区天神橋7-1-10

天六阪急ビル（351）7156

東京——東京都千代田区内神田1-11-1

酒井ビル（293）0621

名古屋——名古屋市北区柳原町1-11-2

キリンビル（914）7061

ア　旭硝子㈱ 表4
イ　岩城造園㈱ 005
オ　奥山化工業㈱ 020
　　大阪電気暖房㈱ 010
カ　軽井沢ホテル鹿島ノ森 014
　　川崎電気㈱ 188
　　鹿島建設㈱ 204
キ　協和ガス化学工業㈱ 196
　　菊川工業㈱ 185
ク　㈱国代耐火工業所 183
サ　㈱坂本商会 024
シ　シーアイ化成㈱ 011
　　志野陶石㈱ 214
　　新日本空調㈱ 190
　　昭和電機工業㈱ 198
ス　住友金属工業㈱ 002
タ　高砂熱学工業㈱ 表3
　　ギャルリーためなが 表2
　　大興物産㈱ 015
　　大工建設㈱ 013
　　㈱大気社 191
　　中国電気工事㈱ 012
　　大成温調工業㈱ 192
ト　東京芝浦電気㈱ 026
　　東邦アート㈱ 表2
　　東陶機器㈱ 001
　　東光電気工事㈱ 006
　　東横工業㈱ 019
　　東海電気工事㈱ 020
　　東洋キャリア工業㈱ 194
　　東洋熱工業㈱ 200
ナ　中立電気㈱ 012
　　浪速建材工業㈱ 210
ニ　㈱西原衛生工業所 023
　　日新製鋼㈱ 216
　　日本アスベスト㈱ 202
　　日本電気㈱ 008
　　日新工業㈱ 022
　　日本電気硝子㈱ 212
　　日新電機㈱ 186
ヒ　㈱日立製作所 004
フ　古河電気工業㈱ 009
マ　マックス電機㈱ 206
　　松下空調工業㈱ 007
ミ　㈱ミキモト 184
　　三星産業㈱ 021
ヤ　矢崎総業㈱ 016
　　ヤマギワ㈱ 190
ロ　ロンシール工業㈱ 003
　　六興電気㈱ 010
リ　㈱六耀社 208

TOSHIBA



イメージアップ

変貌した実感

操作盤に発光ダイオードを採用
センシティブなエレベーター
New Cerebellum（ニューセレブラム）が、さらに
デザインと操作性を高め新登場

操作性を高めたセンサータッチボタン

従来、押ボタンの配列は、一定の階床数を越えると2列配置にせざるをえませんでしたが、ニューセレブラムでは、この構造的制約を、発光ダイオードの採用により、美しいストレートな配列にし、軽くふれるだけで点灯するセンサータッチボタンを使用して、操作性を高めました。

省エネルギーにも一役かっています。

表示方式を発光ダイオードにかえた操作盤は、電力消費を最少限に止め、時代の要請に応える省電力にも一役かっています。

球切れをなくした長寿命タイプ

フィラメントレスの発光ダイオードは、長寿命を有する発光体であるため、従来発生した表示ランプの球切れによる不都合を解消しています。

高い運転効率と確かな安全対策

●マイクロコンピューターが、エネルギーとロスタイムの節約を実行します。

利用客がひとりでも、定員いっぱいでも戸開閉時間が同じ…これでは効率の良い運転はできません。

東芝エレメイト〈ニューセレブラム〉は、利用状況に応じて戸開閉時間を自動的に調整。いたずら押しによるムダな運転もチェックして、ロスタイムをなくしました。しかも、呼びがないときは照明・換気扇を休止します。

●マイクロコンピューターが素早く判断し安全を守ります。

万一、開閉中のドアのわずかなすき間に指などをはさまれた場合、〈ニューセレブラム〉ではそれを素早く検知し、開閉中のドアをくり返し反転させます。人体への被害を、極力防止する設計です。

また、万一、かごが故障して階と階の間で停止した場合は、自動的に再駆動させ、最寄階に停止してドアを開きます。

マイコン頭脳を備えた規格形エレベーター

東芝エレメイト New Cerebellum（ニューセレブラム）

お問い合わせ先：〒105 東京都港区虎ノ門1-26-5（第17森ビル） 東京芝浦電気㈱ 昇降機事業部 TEL（03）507-6905～16

Toshiba 東芝